

一般国道17号六日町バイパス関係発掘調査報告書Ⅲ  
余川中道遺跡Ⅱ

一般国道253号八箇峠道路関係発掘調査報告書Ⅱ  
金屋遺跡Ⅲ

2015

新潟県教育委員会  
公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道17号六日町バイパス関係発掘調査報告書Ⅲ

よ かわ なか みち  
余 川 中 道 遺 跡 Ⅱ

一般国道253号八箇峠道路関係発掘調査報告書Ⅱ

かな や  
金 屋 遺 跡 Ⅲ

2 0 1 5

新潟県教育委員会

公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

## 序

一般国道17号は、東京都中央区を起点とし、本州を横断して新潟市に至る431kmの主要幹線国道です。この国道が通過する南魚沼市六日町周辺においては、慢性的に交通混雑が発生しています。特に、冬季においては、日本有数の豪雪地帯であるものの十分な堆雪幅が確保されていないことから交通障害が発生し、日常生活に影響を及ぼしています。このような問題を受け、市街地部の交通混雑の緩和、沿道環境の改善、市街地部における死傷事故の低減、救急医療体制の支援を目的として、六日町バイパス事業が計画されました。

また、一般国道253号は、上越市を起点とし、南魚沼市を終点とする67.8kmの国道です。現在、上越市と南魚沼市を結ぶ上越魚沼地域振興快速道路の整備が進められていますが、このうち十日町市八箇を起点とし、南魚沼市余川を終点とする区間を八箇峠道路と呼んでいます。この区間は、急勾配であるうえ、連続降雨による通行止め、豪雪による交通障害の発生が問題となっています。このような問題を受け、走行時間の短縮及び走行経費の削減、災害等による迂回等の解消、交通事故件数の減少、交通の信頼性確保、主要な観光地へのアクセス向上、救命救急施設へのアクセス向上、バス路線の利便性・信頼性向上、六日町バイパスとの一体的な整備を目的として、八箇峠道路事業が計画されました。

本書は、六日町バイパス事業に先立ち2009・2013年度に実施した余川中道遺跡、八箇峠道路建設に先立ち2009年に実施した金屋遺跡の発掘調査報告書です。

余川中道遺跡では、県史跡・飯綱山古墳群及び蟻子山古墳群を築造した集団が残したものと考えられる水田やマツリの跡が見つかりました。マツリの跡から出土したおびただしい数の土器は、この地に暮らした人々の生活を知る上で重要な資料となりました。また、古墳時代には地震災害・土石流災害が発生したことも明らかになりました。このことは、今後の防災計画に資すると期待されます。また、金屋遺跡では、平安時代の畠のあとが見つかり、当時の暮らしの一端を垣間見ることができました。

発掘調査で得られた資料や本報告書が、埋蔵文化財の理解や認識を深める契機となり、地域の歴史資料として広く活用されるものと期待しています。

最後に、この発掘調査で多大な御協力と御理解をいただいた南魚沼市教育委員会、南魚沼市都市計画課、並びに地域の方々、また、発掘調査から本書の作成まで、格別なご配慮をいただいた国土交通省北陸地方整備局長岡国道事務所に対して厚くお礼申し上げます。

2015年3月

新潟県教育委員会

教育長 高井 盛雄

## 例　　言

- 1 本書は、新潟県南魚沼市余川字江端 1330-1 ほかに所在する余川中道遺跡、同市余川字金屋道上 372-1 ほかに所在する金屋遺跡の発掘調査記録である。なお、余川中道遺跡については 2003 年度に調査し、「余川中道遺跡Ⅰ」として報告書を刊行している。したがって、本書を『余川中道遺跡Ⅱ』として区別する。また、金屋遺跡についても、1982・1983 年度、2004・2005 年度に調査し、「金屋遺跡」、「金屋遺跡Ⅱ」として報告書を刊行している。したがって、本書を『金屋遺跡Ⅲ』として区別する。
- 2 余川中道遺跡の発掘調査は、一般国道 17 号六日町バイパスの建設に伴い国土交通省北陸地方整備局長岡国道事務所（以下、国交省）から新潟県教育委員会（以下、県教委）が受託したもので、調査主体である県教委は公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、理文事業団）に調査を依頼した。
- 3 金屋遺跡の発掘調査は、一般国道 253 号八箇崎道路の建設に伴い国交省から県教委が受託したもので、調査主体である県教委は理文事業団に調査を依頼した。
- 4 埋文事業団は掘削作業等を、2009 年度は株式会社みくに考古学研究所に、2013 年度は株式会社ノガミに委託して、発掘調査を実施した。
- 5 出土遺物及び調査に係る各種資料（含観察データ）は、一括して県教委が保管している。データの有無や閲覧希望は、県教委に問い合わせ願いたい。
- 6 遺物の注記は、余川中道遺跡の略記号を調査年度ごとに「09 ヨカワ」（2009 年度調査）、「13 ヨカワ」（2013 年度調査）とし、出土地点や層位などを統けて記した。また、金屋遺跡の略記号は「09 カナヤ」とし、出土地点や層位などを統けて記した。
- 7 本文の図中で示す方位は、すべて真北である。
- 8 本書に掲載した遺物番号は、種別に限りなく通し番号とし、本文及び観察表・図面図版・写真図版の番号はすべて一致している。
- 9 引用文献は、著者及び発行年（西暦）を文中に〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。また、作成した図版のうち、既成の地図を使用した場合は、それぞれにその出典を記した。
- 10 調査成果の一部は、現地説明会（2009 年 8 月 22 日、2009 年 10 月 17 日、2013 年 10 月 5 日開催）、広報誌「理文にいがた」No.68（余川中道遺跡Ⅱ・金屋遺跡Ⅲ、2009 年 9 月 30 日発行）・No.86（余川中道遺跡Ⅲ、2014 年 3 月 7 日発行）、「新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成 21 年度」（2010 年 9 月 30 日発行）、「新潟県考古学会第 22 回大会研究発表会要旨」（2010 年 6 月 12 日発行）、「越後国城確定 1300 年記念企画展遺跡が語る弥生・古墳時代の越後」（2013 年 9 月 11 日発行）、「新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成 25 年度」（2014 年 9 月 30 日発行）で公開しているが、本書をもって正式な報告とする。
- 11 自然科学分析は、2009 年度は株式会社古環境研究所、2013 年度はパリノ・サーヴェイ株式会社、2014 年度はパリノ・サーヴェイ株式会社・株式会社加速器分析研究所に委託し、その結果を第 IV・VII 章に記載した。
- 12 遺構図のトレース及び各種図版作成・編集は株式会社ノガミに委託した。
- 13 本書の執筆は、加藤 学（理文事業団 班長）、尾崎高宏（新潟県教育庁文化行政課）、石垣義則、長谷川一郎（株式会社ノガミ 調査員）が当たり、編集は加藤・石垣が担当した。執筆分担は、以下のとおりである。  
第 I 章、第 III 章 6B、第 V 章 2～4：加藤  
第 II 章：石垣・長谷川  
第 III 章 1・2・4～6A・7A～C・E・F、  
第 V 章 1、第 VI 章、第 VII 章：石垣  
第 III 章 3：加藤・石垣  
第 III 章 7D：尾崎
- 14 図版中のトーンは、各図版に凡例を示した。また、断面スミ塗りの土器実測図は須恵器を表す。
- 15 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多くのご教示・ご協力をいただいた。ここに記して厚く感謝申し上げる。（敬称略、五十音順）

相羽重徳　ト部厚志　北野博司　酒井英男　橋本博文　南魚沼市教育委員会

## 目 次

### 第Ⅰ章 序 説

1	調査に至る経緯	1
A	余川中道遺跡	1
B	金屋遺跡	2
2	試掘・確認調査の結果	3
A	余川中道遺跡	3
B	金屋遺跡	5
3	本発掘調査と整理作業の経過	6
A	調査・整理の体制	6
B	調査の経過	7
C	整理作業の経過	8

### 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1	地理的環境	10
2	歴史的環境	12

### 第Ⅲ章 余川中道遺跡Ⅱ

1	グリッドと調査区の設定	17
2	基本層序	17
3	調査の概要	21
4	調査の基本方針	23
5	上層（古代・中世）の遺構	24
A	概要	24
B	E区	25
C	G区	29
D	H区	33
6	下層（古墳時代）の遺構	35
A	D2区・E区の調査	35
B	D1・D3区の調査	43
7	上層（中世）の遺物	46
A	概要	46
B	土器・陶磁器	46
C	金属製品	49
D	鍛冶関連遺物	49
E	石製品	51
F	木製品	51
8	上層（古代）の遺物	52

A	概要	52
B	各説	53
9	下層（古墳時代）の遺物	53
A	概要	53
B	土器の器種分類	54
C	土器の調整・胎土	55
D	各説	58

## 第IV章 余川中道遺跡II 自然科学分析

1	2009年度	68
A	プラント・オパール分析	68
B	花粉分析	71
C	珪藻分析	76
D	樹種同定	78
E	放射性炭素年代測定	85
2	2013年度	88
A	放射性炭素年代測定	88
B	古植生（花粉分析・植物珪酸体・樹種同定）	90
3	2014年度	97
A	木製品の樹種同定	97
B	放射性炭素年代測定	99

## 第V章 余川中道遺跡IIまとめ

1	古墳時代の土器について	104
A	古墳時代中期の土器編年	104
B	使用痕観察による土器の使用法について	108
2	余川中道遺跡と飯綱山古墳群・蟻子山古墳群	113
3	古代の水田	115
4	中世集落の展開	115

## 第VI章 金屋遺跡III

1	調査の概要	116
A	グリッドと調査区の設定	116
B	基本層序	116
C	調査の概要	118
2	遺構	118
A	概要	118
B	古代I期の遺構	118
C	古代II期の遺構	121
D	古代III期の遺構	121

3 遺 物 .....	122
A 概 要 .....	122
B 古代の土器 .....	122

## 第VII章 金屋遺跡III 自然科学分析

1 花 粉 分 析 .....	124
2 放射性炭素年代測定 .....	127

## 第VIII章 金屋遺跡III まとめ ..... 130

《引用・参考文献》 .....	132
《観 察 表》 .....	

### 余川中道遺跡II

中世 挖立柱建物観察表 .....	136
中世 柱穴観察表 .....	141
中世 土坑観察表 .....	142
中世 溝観察表 .....	143
中世 性格不明遺構観察表 .....	143
古代 水田 畦観察表 .....	144
古墳時代 土坑観察表 .....	144
古墳時代 溝観察表 .....	144
古墳時代 性格不明遺構観察表 .....	145
古墳時代 ピット観察表 .....	145
古墳時代 VI b 層水田 畦観察表 .....	146
古墳時代 VI b 層水田 区画観察表 .....	146
古墳時代 VII 層水田 畦観察表 .....	147
古墳時代 VII 層水田 区画観察表 .....	147
中世 土器・陶磁器観察表 .....	148
中世 転用具観察表 .....	149
中世 金属製品観察表 .....	149
中世 銭貨観察表 .....	149
中世 鍛冶関連遺物観察表 .....	149
中世 石製品観察表 .....	149
中世 挽物観察表 .....	149
中世 柱根観察表 .....	150
中世 木製品観察表 .....	150
古代 土器観察表 .....	150
古墳時代 土器観察表 .....	151
古墳時代 木製品観察表 .....	159
古墳時代 石製品観察表 .....	159
<b>金屋遺跡III</b>	
溝観察表 .....	160
ピット観察表 .....	160
古代 土器観察表 .....	160

## 挿図目次

第 1 図 一般国道 1 号六日町バイパス・一般国道 253 号八箇峠道路と調査遺跡の位置	1	第 35 図 珪藻ダイアグラム	77
第 2 図 確認調査トレンド位置と本発掘調査対象範囲（余川中道遺跡）	4	第 36 図 珪藻の顕微鏡写真	77
第 3 図 確認調査トレンド位置と本発掘調査対象範囲（金屋遺跡）	5	第 37 図 木材の顕微鏡写真（1）（2009 年度）	80
第 4 図 南魚沼地域の地形分布図	11	第 38 図 木材の顕微鏡写真（2）（2009 年度）	81
第 5 図 遺跡周辺の地形区分図	11	第 39 図 余川中道遺跡の層年較正年代グラフ（2009 年度）	86
第 6 図 余川中道遺跡・金屋遺跡周辺の主な遺跡	13	第 40 図 余川中道遺跡の層年較正年代グラフ（2013 年度）	89
第 7 図 余川中道遺跡のグリッド設定図	18	第 41 図 花粉化石群集の層位分布	93
第 8 図 基本層序柱状図	18	第 42 図 余川中道遺跡の花粉の顕微鏡写真（2013 年度）	94
第 9 図 余川中道遺跡の基本層序模式図	19	第 43 図 植物珪酸体の顕微鏡写真（2013 年度）	94
第 10 図 遺構の平面・断面形状の分類	24	第 44 図 植物珪酸体含量（2013 年度）	94
第 11 図 覆土の堆積形状の分類	24	第 45 図 木材の顕微鏡写真（2013 年度）	95
第 12 図 E 区の掘立柱建物と主軸方向	26	第 46 図 木製品の顕微鏡写真（2014 年度）	98
第 13 図 E 区の掘立柱建物の重複関係	26	第 47 図 余川中道遺跡の層年較正年代グラフ（2014 年度）（1）	102
第 14 図 IVa 層・IVb 層の鉄錆・羽口出土分布図	29	第 48 図 余川中道遺跡の層年較正年代グラフ（2014 年度）（2）	103
第 15 図 G・H 区の掘立柱建物と主軸方向	30	第 49 図 古墳時代中期の土器編年（1）	106
第 16 図 G・H 区の掘立柱建物の重複関係	30	第 50 図 古墳時代中期の土器編年（2）	107
第 17 図 SD3603 土器集中③	37	第 51 図 括れ度と相対的深さによる作り分け	110
第 18 図 SD3650 土器集中	38	第 52 図 瓷の容量分布図	110
第 19 図 SD3650 土器集中の出土土器群	39	第 53 国 括れ度と容量による作り分け	110
第 20 国 眼形断面の分類模式図	44	第 54 国 相対的深さと容量による作り分け	110
第 21 国 桶形断面の法量分布図	50	第 55 国 古墳時代中期の土器の使用痕実測図（1）	
第 22 国 换物の計測部位	52	第 56 国 古墳時代中期の土器の使用痕実測図（2）	110
第 23 国 土師器（古墳時代中期）の器種分類（1）	56	第 57 国 液状化現象の層位関係	114
第 24 国 土師器（古墳時代中期）の器種分類（2）	57	第 58 国 飯綱山 65 号墳の出土土器	115
第 25 国 土器の部位名称	57	第 59 国 金屋遺跡のグリッド設定図	116
第 26 国 土器実測図の表現方法	58	第 60 国 金屋遺跡の基本層序模式図	117
第 27 国 D 2 区におけるプラント・オバール分析結果	69	第 61 国 遺構変遷図	119
第 28 国 E 区におけるプラント・オバール分析結果	69	第 62 国 各時期における溝の主軸方向	120
第 29 国 D 1 区東壁におけるプラント・オバール分析結果	69	第 63 国 新潟県内の黒色土器片口鉢の類型	123
第 30 国 D 1 区西壁におけるプラント・オバール分析結果	69	第 64 国 金屋遺跡の南区南北ベルト西壁 A - A' における花粉ダイアグラム	125
第 31 国 プラント・オバールの顕微鏡写真	70	第 65 国 金屋遺跡の下層確認トレンドにおける花粉ダイアグラム	125
第 32 国 SE4113 における花粉ダイアグラム	74	第 66 国 金屋遺跡の花粉の顕微鏡写真	127
第 33 国 E 区における花粉ダイアグラム	74	第 67 国 金屋遺跡の層年較正年代グラフ	129
第 34 国 花粉・胞子の顕微鏡写真	75	第 68 国 金屋遺跡の位置と調査区	131

## 挿表目次

第1表 余川中道遺跡・金屋遺跡周辺の主な遺跡	13	第14表 余川中道遺跡の花粉分析結果(2013年度)	93
第2表 各地区における中世・古代の遺構数	25	第15表 植物珪酸体含量(2013年度)	94
第3表 各地区における古墳時代の遺構数	35	第16表 木製品の樹種同定結果(2013年度)	95
第4表 穀糧の樹種集計表	52	第17表 木製品の樹種同定結果(2014年度)	98
第5表 土師器(古墳時代中期)の器種分類	55	第18表 余川中道遺跡の放射性炭素年代測定結果( $\delta^{13}\text{C}$ 補正値)	101
第6表 プラント・オーバル分析結果	69	第19表 余川中道遺跡の放射性炭素年代測定結果( $\delta^{13}\text{C}$ 補正値、曆年較正用 $^{14}\text{C}$ 年代)	101
第7表 余川中道遺跡の花粉分析結果(2009年度)	73	第20表 幼生時代後期から古墳時代の編年と実年代	
第8表 珪藻分析結果	77		104
第9表 炭化材の樹種同定結果(2009年度)	78	第21表 金屋遺跡の花粉分析結果	125
第10表 木製品の樹種同定結果(2009年度)	79	第22表 金屋遺跡の放射性炭素年代測定試料一覧	
第11表 放射性炭素年代測定試料及び処理	85		
第12表 余川中道遺跡の放射性炭素年代測定結果(2009 年度)	86	第23表 金屋遺跡の放射性炭素年代測定結果	128
第13表 余川中道遺跡の放射性炭素年代測定及び曆年較正結果(2013年度)	89	第24表 金屋遺跡の変遷と画期	131

## 図版目次

### 【図面図版】

図版1 余川中道遺跡II 上層全体図	図版25 余川中道遺跡II G区 遺構個別図(2)
図版2 余川中道遺跡II D2-E区(上層) 全体図	図版26 余川中道遺跡II G区 遺構個別図(3)
図版3 余川中道遺跡II E区(上層) 遺構分割図(1)	図版27 余川中道遺跡II G区 遺構分割図(2)
図版4 余川中道遺跡II E区(上層) 遺構分割図(2)	図版28 余川中道遺跡II G区 遺構分割図(4)
図版5 余川中道遺跡II E区(上層) 遺構分割図(3)	図版29 余川中道遺跡II G区 遺構個別図(5)
図版6 余川中道遺跡II E区(上層) 遺構個別図(1)	図版30 余川中道遺跡II G区 遺構分割図(3)
図版7 余川中道遺跡II E区(上層) 遺構個別図(2)	図版31 余川中道遺跡II G区 遺構個別図(6)
図版8 余川中道遺跡II E区(上層) 遺構個別図(3)	図版32 余川中道遺跡II G区 遺構個別図(7)
図版9 余川中道遺跡II E区(上層) 遺構分割図(4)	図版33 余川中道遺跡II H区 全体図(1)
図版10 余川中道遺跡II E区(上層) 遺構個別図(4)	図版34 余川中道遺跡II H区 全体図(2)
図版11 余川中道遺跡II E区(上層) 遺構個別図(5)	図版35 余川中道遺跡II H区 遺構分割図(1)
図版12 余川中道遺跡II E区(上層) 遺構個別図(6)	図版36 余川中道遺跡II H区 遺構個別図(1)
図版13 余川中道遺跡II E区(上層) 遺構分割図 (5)・(6)	図版37 余川中道遺跡II H区 遺構個別図(2)
図版14 余川中道遺跡II E区(上層) 遺構個別図(7)	図版38 余川中道遺跡II H区 遺構分割図(2)
図版15 余川中道遺跡II E区(上層) 遺構個別図(8)	図版39 余川中道遺跡II H区 遺構個別図(3)
図版16 余川中道遺跡II E区(上層) 遺構個別図(9)	図版40 余川中道遺跡II H区 遺構個別図(4)
図版17 余川中道遺跡II E区(上層) 遺構個別図 (10)	図版41 余川中道遺跡II H区 遺構分割図(3)
図版18 余川中道遺跡II E区(上層) 遺構個別図 (11)	図版42 余川中道遺跡II H区 遺構個別図(5)
図版19 余川中道遺跡II E区(上層) 遺構分割図 (7)・遺構個別図(12)	図版43 余川中道遺跡II H区 遺構個別図(6)
図版20 余川中道遺跡II E区(上層) 遺構分割図 (8)・遺構個別図(13)	図版44 余川中道遺跡II H区 遺構分割図(4)
図版21 余川中道遺跡II E区(上層) 遺構個別図 (14)	図版45 余川中道遺跡II H区 遺構個別図(7)
図版22 余川中道遺跡II G区 全体図	図版46 余川中道遺跡II 下層全体図
図版23 余川中道遺跡II G区 遺構分割図(1)	図版47 余川中道遺跡II E区(下層) 全体図
図版24 余川中道遺跡II G区 遺構個別図(1)	図版48 余川中道遺跡II E区(下層) 遺構分割図(1)

- 図版56 余川中道遺跡 II E区(下層) 遺構個別図(7)  
 図版57 余川中道遺跡 II E区(下層) 遺構個別図(8)  
 図版58 余川中道遺跡 II E区(下層) 遺構個別図(9)  
 図版59 余川中道遺跡 II E区(下層) 遺構個別図(10)  
 図版60 余川中道遺跡 II E区(下層) 遺構個別図(11)  
 図版61 余川中道遺跡 II E区(下層) 遺構個別図(12)  
 図版62 余川中道遺跡 II E区(下層) 遺構個別図(13)  
 図版63 余川中道遺跡 II E区(下層) 遺構個別図(14)  
 図版64 余川中道遺跡 II E区(下層) 遺構分割図(3)  
 図版65 余川中道遺跡 II E区(下層) 遺構個別図(15)  
 図版66 余川中道遺跡 II E区(下層) 遺構個別図(16)  
 図版67 余川中道遺跡 II E区(下層) 遺構個別図(17)  
 図版68 余川中道遺跡 II E区(下層) 遺構個別図(18)  
 図版69 余川中道遺跡 II E区(下層) 遺構個別図(19)  
 図版70 余川中道遺跡 II E区(下層) 遺構個別図(20)  
 図版71 余川中道遺跡 II E区(下層) 遺構個別図(21)  
 図版72 余川中道遺跡 II E区(下層) 遺構個別図(22)  
 図版73 余川中道遺跡 II D2区(下層) 全体図  
 図版74 余川中道遺跡 II D2区(下層) 遺構分割図(1)  
 図版75 余川中道遺跡 II D2区(下層) 遺構個別図(1)  
 図版76 余川中道遺跡 II D2区(下層) 遺構分割図(2)  
 図版77 余川中道遺跡 II D2区(下層) 遺構個別図(2)  
 図版78 余川中道遺跡 II D2区(下層) 遺構個別図(3)  
 図版79 余川中道遺跡 II D2区(下層) 遺構個別図(4)  
 図版80 余川中道遺跡 II D2区(下層) 遺構個別図(5)  
 図版81 余川中道遺跡 II D2区(下層) 遺構個別図(6)  
 図版82 余川中道遺跡 II D1-D3区 Vlb層遺構全体図(水田)  
 国版83 余川中道遺跡 II D3区 Vlb層遺構分割図(1)-Vlb層遺構個別図(1)  
 国版84 余川中道遺跡 II D3区 Vlb層遺構分割図(2)-Vlb層遺構個別図(2)  
 国版85 余川中道遺跡 II D1区 Vlb層遺構分割図(3)  
 国版86 余川中道遺跡 II D1区 Vlb層遺構分割図(4)  
 国版87 余川中道遺跡 II D1区 Vlb層遺構個別図(3)  
 国版88 余川中道遺跡 II D1-D3区 Vlc層遺構全体図  
 国版89 余川中道遺跡 II D3区 Vlc層遺構分割図(1)-Vlc層遺構個別図(1)  
 国版90 余川中道遺跡 II D1-D3区 Vlc層遺構分割図(2)-Vlc層遺構個別図(2)  
 国版91 余川中道遺跡 II D1-D3区 VII層遺構全体図(水田)  
 国版92 余川中道遺跡 II D3区 VII層遺構分割図(1)-VII層遺構個別図(1)  
 国版93 余川中道遺跡 II D3区 VII層遺構分割図(2)-VII層遺構個別図(2)
- [写真図版]**
- 国版133 余川中道遺跡 II 遺跡近景  
 国版134 余川中道遺跡 II E区(上層)全景-G区全景  
 国版135 余川中道遺跡 II H区全景-E区(下層)全景  
 国版136 余川中道遺跡 II 基本順序(D1区)-D1-D3区 Vlb層水田  
 国版137 余川中道遺跡 II D1-D3区VII層水田-SD3603  
 国版138 余川中道遺跡 II SD3650-基本順序(E区-G区-H区)-SE4113  
 国版139 余川中道遺跡 II SD3603-SX3661-SD3650-SX3658  
 国版140 余川中道遺跡 II 主要出土遺物(古墳時代中期の土器)-土器の使用痕  
 国版141 余川中道遺跡 II E区(上層) 全景・完掘・基
- 国版94 余川中道遺跡 II D1区 VII層遺構分割図(3)  
 国版95 余川中道遺跡 II D1区 VII層遺構分割図(4)  
 国版96 余川中道遺跡 II D1区 VII層遺構個別図(3)  
 国版97 余川中道遺跡 II D1-D3区 IX層遺構全体図  
 国版98 余川中道遺跡 II D1-D3区 IX層遺構分割図(1)-IX層遺構個別図(1)  
 国版99 余川中道遺跡 II 中世の土器・陶磁器(1)  
 国版100 余川中道遺跡 II 中世の土器・陶磁器(2)-金属製品・鉄貨  
 国版101 余川中道遺跡 II 中世の鐵冶関連遺物(1)  
 国版102 余川中道遺跡 II 中世の鐵冶関連遺物(2)-石製品  
 国版103 余川中道遺跡 II 中世の木製品(1)  
 国版104 余川中道遺跡 II 中世の木製品(2)  
 国版105 余川中道遺跡 II 中世の木製品(3)  
 国版106 余川中道遺跡 II 中世の木製品(4)  
 国版107 余川中道遺跡 II 古代の土器・古墳時代の土器(1)  
 国版108 余川中道遺跡 II 古墳時代の土器(2)  
 国版109 余川中道遺跡 II 古墳時代の土器(3)  
 国版110 余川中道遺跡 II 古墳時代の土器(4)  
 国版111 余川中道遺跡 II 古墳時代の土器(5)  
 国版112 余川中道遺跡 II 古墳時代の土器(6)  
 国版113 余川中道遺跡 II 古墳時代の土器(7)  
 国版114 余川中道遺跡 II 古墳時代の土器(8)  
 国版115 余川中道遺跡 II 古墳時代の土器(9)  
 国版116 余川中道遺跡 II 古墳時代の土器(10)  
 国版117 余川中道遺跡 II 古墳時代の土器(11)  
 国版118 余川中道遺跡 II 古墳時代の土器(12)  
 国版119 余川中道遺跡 II 古墳時代の土器(13)  
 国版120 余川中道遺跡 II 古墳時代の土器(14)  
 国版121 余川中道遺跡 II 古墳時代の土器(15)  
 国版122 余川中道遺跡 II 古墳時代の土器(16)  
 国版123 余川中道遺跡 II 古墳時代の土器(17)-石製品  
 国版124 余川中道遺跡 II 古墳時代の土器(18)  
 国版125 余川中道遺跡 II 古墳時代の土器(19)-石製品  
 国版126 余川中道遺跡 II 古墳時代の土器(20)-木製品・石製品・古代の土器  
 国版127 金屋遺跡III 全体図  
 国版128 金屋遺跡III 遺構分割図(1)  
 国版129 金屋遺跡III 遺構分割図(2)  
 国版130 金屋遺跡III 遺構個別図(1)  
 国版131 金屋遺跡III 遺構個別図(2)  
 国版132 金屋遺跡III 古代の土器・金属製品

- 本序号-SK3020-SK3021  
 国版142 余川中道遺跡 II E区(上層) SK3050-SK3051-SK3193-SK3090-SK3102  
 国版143 余川中道遺跡 II E区(上層) SK3203-SK3275-P3310-SK3311-SK3329-P3449-SK3350  
 国版144 余川中道遺跡 II E区(上層) SK3516-SD3004-SD3199-SD3257  
 国版145 余川中道遺跡 II E区(上層) SD3257-SD3362-SD3434-P3502-SX3100-SX3445-SF3446  
 国版146 余川中道遺跡 II E区(上層) SF3446-P3025-P3031-P3041-P3042-P3043-P3046-P3065

- 図版147 余川中道遺跡II E区(上層) P3077-P3078-P3079-P3083-P3082-P3087-P3098-P3105-P3110-P3112-P3113
- 図版148 余川中道遺跡II E区(上層) P3128-P3129-P3155-P3154-P3195-P3196-P3403-P3198-P3404-P3208-P3231
- 図版149 余川中道遺跡II E区(上層) P3232-P3419-P3462-P3249-P3278-SD3209-P3253-P3266-P3267-P3271-P3396-P3278-P3290-P3289-P3294-P3412-SK3292
- 図版150 余川中道遺跡II E区(上層) P3306-P3316-P3321-P3344-P3356-P3345-P3353-P3363
- 図版151 余川中道遺跡II E区(上層) P3370-SD3362-P3372-P3378-P3389-P3390-P3407-P3484-P3438-P3450-P3474-P3479
- 図版152 余川中道遺跡II E区(上層) P3481・完掘・遺物出土状況・基本層序(F区)
- 図版153 余川中道遺跡II E区(上層) 水田・畦3015-畦3017-畦3023
- 図版154 余川中道遺跡II G区 全景・完掘・P4153-SE4113
- 図版155 余川中道遺跡II G区 SK4026-SK4027-SK4065-SK4071-SK4074-SK4073
- 図版156 余川中道遺跡II G区 SK4097-SK4100-SK4108-SK4132-SD4114-P4134-SK4135-SK4150
- 図版157 余川中道遺跡II G区 SD4059-SD4112-SD4114-SX4107-P4039-P4038-P4041
- 図版158 余川中道遺跡II G区 P4056-SD4059-P4175-SF4136-SX4091-試掘トレンチ
- 図版159 余川中道遺跡II H区 完掘・SK4528-SK4565-SK4576
- 図版160 余川中道遺跡II H区 SK4646-SK4671-SK4717-SD4592
- 図版161 余川中道遺跡II H区 SD4613-SD4641-P4519a-P4520-P4538b-SK4569-P4681-P4680
- 図版162 余川中道遺跡II H区 P4682-P4683-P4695a-P4695b-P4724-P4749-SX4603
- 図版163 余川中道遺跡II H区 SX4603-SX4648-SX4653-SX4723-遺物出土状況
- 図版164 余川中道遺跡II E区(下層) 完掘・SK3608-P3625-SK3621-SK3623-SD3602-SD3603
- 図版165 余川中道遺跡II E区(下層) SD3602-SD3603
- 図版166 余川中道遺跡II E区(下層) SD3603-SD3604-SD3606-SD3614
- 図版167 余川中道遺跡II E区(下層) SD3614-SD3650
- 図版168 余川中道遺跡II E区(下層) SD3650-P3600-P3601-P3607-P3617-P3618-P3620
- 図版169 余川中道遺跡II E区(下層) P3624-SX3609-SX3610-SX3611-SX3613-SX3651-SX3652
- 図版170 余川中道遺跡II E区(下層) SX3654-SX3655-SX3658-SX3659-SX3660-SX3661-SX3662-SX3664-SX3666-SX3667-遺物出土状況
- 図版172 余川中道遺跡II D2区(下層) 完掘・SK2104-SD2100
- 図版173 余川中道遺跡II D2区(下層) SD2100-SD2101-SD2103-SD2124
- 図版174 余川中道遺跡II D2区(下層) SD2124-SD2131-SD2132-SD2129-SD2159-SD2160-SD2161-SD2163
- 図版175 余川中道遺跡II D2区(下層) P2157-SD2162-SD2164-P2113-P2119-P2135-P2136
- 図版176 余川中道遺跡II D2区(下層) P2141-P2140-P2143-P2144-P2146-P2150-遺物出土状況
- 図版177 余川中道遺跡II D2区(下層) P2151-P2156-P2175-SX2102-SX2105
- 図版178 余川中道遺跡II D2区(下層) SX2123-SX2125-SX2126-SX2171-机2178-杭2180-勾玉
- 図版179 余川中道遺跡II D1-D3区 水田・基本層序・遺物出土状況-SD2025
- 図版180 余川中道遺跡II D1-D3区 畦2003-畦2017-畦2019-畦2021-SD2026-畦2023-遺物出土状況
- 図版181 余川中道遺跡II D1-D3区 全景・SD2200-SD2201
- 図版182 余川中道遺跡II D1-D3区 SD2538-噴砂-埋層水田・基本層序
- 図版183 余川中道遺跡II D1-D3区 基本層序-畦2500-畦2509-噴砂-遺物出土状況
- 図版184 余川中道遺跡II D1-D3区 IX層上面・基本層序-噴砂-足跡・自然木
- 図版185 余川中道遺跡II 中世の土器・陶磁器(1)
- 図版186 余川中道遺跡II 中世の土器・陶磁器(2)・金属製品・錢貨・鍛冶関連遺物(1)
- 図版187 余川中道遺跡II 中世の鍛冶関連遺物(2)・石製品
- 図版188 余川中道遺跡II 中世の木製品(1)
- 図版189 余川中道遺跡II 中世の木製品(2)
- 図版190 余川中道遺跡II 中世の木製品(3)
- 図版191 余川中道遺跡II 古代の土器・古墳時代の土器(1)
- 図版192 余川中道遺跡II 古墳時代の土器(2)
- 図版193 余川中道遺跡II 古墳時代の土器(3)
- 図版194 余川中道遺跡II 古墳時代の土器(4)
- 図版195 余川中道遺跡II 古墳時代の土器(5)
- 図版196 余川中道遺跡II 古墳時代の土器(6)
- 図版197 余川中道遺跡II 古墳時代の土器(7)
- 図版198 余川中道遺跡II 古墳時代の土器(8)
- 図版199 余川中道遺跡II 古墳時代の土器(9)
- 図版200 余川中道遺跡II 古墳時代の土器(10)
- 図版201 余川中道遺跡II 古墳時代の土器(11)
- 図版202 余川中道遺跡II 古墳時代の土器(12)
- 図版203 余川中道遺跡II 古墳時代の土器(13)
- 図版204 余川中道遺跡II 古墳時代の土器(14)
- 図版205 余川中道遺跡II 古墳時代の土器(15)
- 図版206 余川中道遺跡II 古墳時代の土器(16)
- 図版207 余川中道遺跡II 古墳時代の土器(17)・石製品

- 品
- 図版208 余川中道遺跡Ⅱ 古墳時代の土器(18)
- 図版209 余川中道遺跡Ⅱ 古墳時代の土器(19)・石製品
- 図版210 余川中道遺跡Ⅱ 古墳時代の土器(20)・木製品・石製品・古代の土器
- 図版211 金屋遺跡Ⅲ 全景
- 図版212 金屋遺跡Ⅲ 全景・基本層序・遺物出土状況
- 図版213 金屋遺跡Ⅲ 煙作溝・SD2・SD3・SD8・SD7・SD12・SD13・SD14
- 図版214 金屋遺跡Ⅲ SD13・SD16・SD18・SD19・SD24・SD25・SD29
- 図版215 金屋遺跡Ⅲ SD27・SX34・SK30・P21
- 図版216 金屋遺跡Ⅲ P33・下層試掘・トレンチ・噴砂作業風景
- 図版217 金屋遺跡Ⅲ 古代の土器・金属製品

# 第Ⅰ章 序 説

## 1 調査に至る経緯

### A 余川中道遺跡

一般国道 17 号は、東京都中央区を起点とし、本州を横断して新潟市に至る 431km の主要幹線国道であり、産業や経済等の発展に大きな役割を果たしている。この国道が通過する南魚沼市六日町周辺においては、上越新幹線や関越自動車道などの高速交通体系の整備に伴い交通量が増大し、市街部を中心に慢性的に交通混雑が発生している。また、日本有数の豪雪地帯であるが十分な堆雪幅が確保されておらず冬期の交通障害が発生し、幹線道路の機能が低下することから、日常生活に影響を及ぼしている。そこで、市街地部の交通混雑の緩和、沿道環境の改善、市街地部における死傷事故の低減、救急医療体制の支援を目的として、六日町バイパス事業が計画された。

当事業は、南魚沼市竹俣（たけのまた）から庄之又（しょうのまた）の延長 5.1km についてバイパス整備を行うものである（第1図）。1994 年度に事業化が決定され、1998 年から用地買収に着手、2000 年度から工事に着手した。これと併行して、埋蔵文化財の取扱いに関する協議が進められた。2000 年 11 月、国交省は県教委に計画予定地内における埋蔵文化財の分布調査を依頼した。これを受けて、埋文事業団は同年 12 月に予定法線内を中心に現地踏査を行い、埋蔵文化財の分布調査を行った。その結果、周知の欠之上遺跡周辺で平安時代の遺物を数点採集したことから、用地を横断する近尾川の流路部分を除いたすべての範囲で試掘調査が必要であることを報告した。



第1図 一般国道 17 号六日町バイパス・一般国道 253 号八箇峠道路と調査遺跡の位置

これを受け、用地買収が進んだ範囲から埋蔵文化財の有無を確認する試掘調査を実施した。当遺跡周辺は、2001年11月、2002年8月、2003年11月に実施し、一部の範囲では明瞭な遺構を検出した。明瞭な遺構を検出できなかった範囲についても占墳時代中期の遺物がまとまって出土した。この結果を受け、30,510m<sup>2</sup>（2001年度：4,590m<sup>2</sup>、2002年度：14,000m<sup>2</sup>、2003年度：11,920m<sup>2</sup>）について本発掘調査が必要であると報告した。このうち塩沢側の4,100m<sup>2</sup>については、2003年度に調査・報告済みである。また、コスト縮減を図るために、暫定2車線で供用することとなつたため、当面の本発掘調査必要範囲はここから大幅に縮小されることとなつた。このような条件も踏まえ、国交省・県教委・埋文事業団の三者で協議し、2009年5月～11月及び2013年5月～10月に本発掘調査を実施することを決定した。なお、2回の発掘調査の間には、2010年度予算配分方針道路事業で凍結候補となつたこともあり、一時、調査が中断したが、その後、継続事業として採択されたため2013年度から事業を再開することとなつた。

## B 金屋遺跡

一般国道253号は、上越市を起点とし、南魚沼市を終点とする67.8kmの一般国道である。現在、上越市と南魚沼市を結ぶ上越魚沼地域振興快速道路の整備が進められているが、当遺跡が該当する八箇峠道路は、その整備区間の一部を構成する。八箇峠道路は、十日町市八箇を起点とし、南魚沼市余川を終点とする延長9.7kmの区間を指す。この区間は、連続雨量60mmで通行止めとなり、さらに縱断勾配8%以上の急勾配区間が2.4kmあるうえ、豪雪地域でもあることから、交通障害の発生が問題となっている。このような問題を解消するため、1997年に八箇峠道路の整備区間が指定され、2000年に事業化・工事着手し、現在、工事中である。開通することで、走行時間の短縮及び走行経費の削減（新幹線駅へのアクセス向上・冬期におけるスムーズな交通の確保）、災害等による迂回等の解消、交通事故件数の減少、交通の信頼性確保、主要な観光地へのアクセス向上、救命救急施設へのアクセス向上、バス路線の利便性・信頼性向上、六日町バイパスとの一体的な整備ができるものと期待されている（第1図）。

国交省は、八箇峠道路の着工に向けて、県教委に計画用地内における埋蔵文化財の分布調査を依頼した。県教委の委託を受けた埋文事業団は、2000年12月に分布調査を実施したところ、遺物は採集されなかつた。しかし、丘陵部では大小の河岸段丘が発達していること、水田部は堆積速度の速い扇状地に当たり表層の遺物採取だけでは遺跡の有無を判断できないこと、周辺に蟻子山古墳群・飯綱山古墳群が存在することなどから、現道・河川部分を除いたほぼ全域にわたり、試掘調査が必要であると報告した。

この結果を受けて国交省は、県教委に試掘調査の実施を依頼し、埋文事業団で2003年10月に114,870m<sup>2</sup>を対象に試掘調査を実施した。調査により金屋遺跡が八箇峠道路の法線内にまで広がることが確認され、600mについて本発掘調査が必要であると報告した。その後、国交省・県教委・埋文事業団の三者で協議し、2009年4～6月に金屋遺跡の本発掘調査を実施することを決定した。

## 2 試掘・確認調査の結果

### A 余川中道遺跡

#### 1) 調査の体制

##### 【2001年度】

調査期間	2001年11月8日～11月27日		
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 板屋越輔一）		
調査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団	事務局長	
総括	須田益輝（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 事務局長）		
管理	長谷川司郎（同 同 総務課長）		
庶務	椎谷久雄（同 同 班長）		
調査総括	岡本郁栄（同 同 調査課長）		
調査担当	澤田 敦（新潟県教育庁文化行政課 主任調査員）		
調査職員	後藤 孝（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 主任調査員）		
	渡辺 弘（同 主任調査員）		
	田中一穂（同 嘴託員）		

##### 【2002年度】

調査期間	2002年8月19日～8月26日		
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 板屋越輔一）		
調査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団	事務局長	
総括	黒井幸一（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 事務局長）		
管理	長谷川司郎（同 同 総務課長）		
庶務	高野正司（同 同 班長）		
調査総括	岡本郁栄（同 同 調査課長）		
調査担当	尾崎高宏（同 同 班長）		
調査職員	田中一穂（同 嘴託員）		

##### 【2003年度】

調査期間	2003年11月4日～11月26日		
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 板屋越輔一）		
調査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団	事務局長	
総括	黒井幸一（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 事務局長）		
管理	長谷川二三夫（同 同 総務課長）		
庶務	高野正司（同 同 班長）		
調査総括	藤巻正信（同 同 調査課長）		
調査担当	尾崎高宏（同 同 班長）		
調査職員	田中一穂（同 嘴託員）		

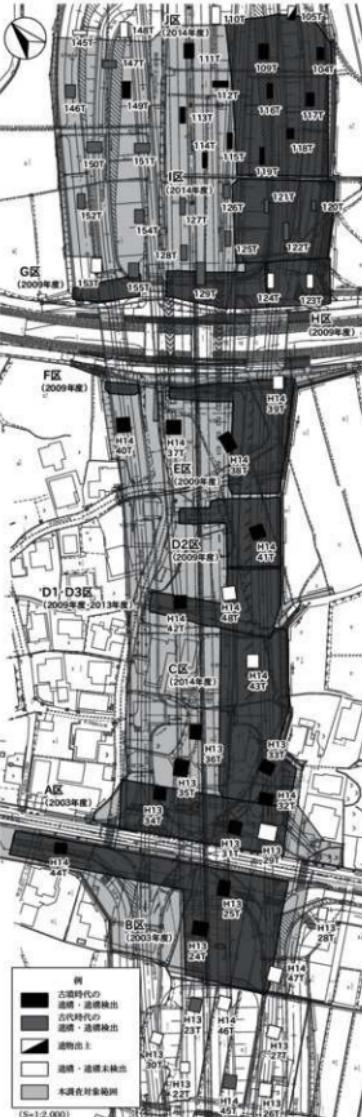
## 2) 調査の結果と取扱い

当遺跡は、周知の埋蔵文化財包蔵地ではなかつたため、試掘調査から開始した（第2図）。2001年度に現地表下約3mから古墳時代の土器が石製模造品を伴って多量に出土し、祭祀遺構の可能性が指摘された。出土遺物の時期・量・状況から、飯綱山古墳群との関係が想定される遺跡と評価し、4,590m<sup>2</sup>について本発掘調査が必要と報告した。そして、「余川中道遺跡」として「新潟県埋蔵文化財包蔵地カード」に登載し、周知化した。

2002年度は、余川中道遺跡の北東側隣接地について確認調査を実施した。近尾川右岸付近では、現地表下1mほどから古墳時代中期を主体とする遺物が多量に出土した。また、それより浅い深度からは、柱根を伴う柱穴を検出した。古代の遺物包含層の深さが近接することから、これに近い年代の遺構であると判断した。これらの結果から、周知の余川中道遺跡の北東側14,000m<sup>2</sup>について遺跡の広がりを把握し、本発掘調査が必要と報告した。

2003年度は、近尾川左岸について、余川中道遺跡の広がりを把握するための確認調査を実施した。古墳時代の遺物包含層が存在する範囲と、古代の遺物包含層が存在する範囲を確認した。両者では、若干のレベル差があることを報告しており、遺跡は2面存在する可能性を指摘した。遺構はピットを検出したが、覆土の観察から古代の可能性が高いと考えた。遺物は、古墳時代中期～後期の土器が多数、古代の土器が少数出土した。調査の結果、104・109・111・147トレント付近まで余川中道遺跡の広がりが確認され、新たに11,920m<sup>2</sup>について本発掘調査が必要と報告した。

これにより、3か年の試掘確認調査によって明らかになった余川中道遺跡の本発掘調査必要範囲は、30,510m<sup>2</sup>となった。



第2図 確認調査トレント位置と本発掘調査対象範囲  
(余川中道遺跡)

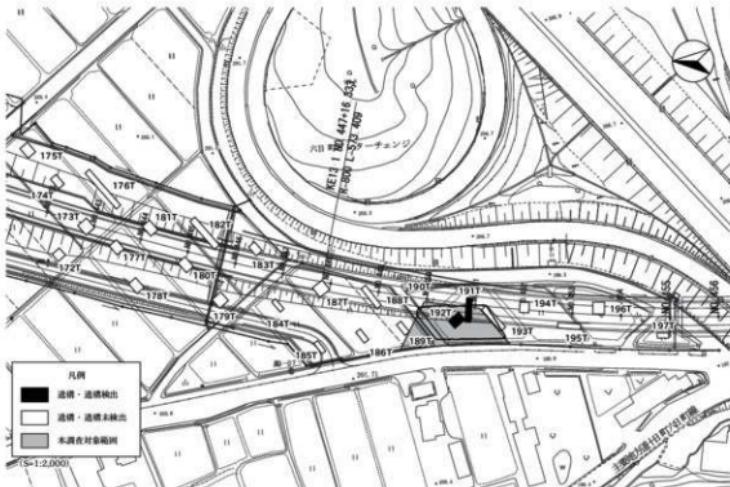
## B 金屋遺跡

### 1) 調査の体制

調査期間	2003年10月6日～10月9日、10月16日～30日		
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 板屋越輔一）		
調査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団		
総括	黒井幸一	（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 事務局長）	
管理	長谷川二三夫	（同 同 総務課長）	
庶務	高野正司	（同 同 班長）	
調査総括	藤巻正信	（同 同 調査課長）	
調査担当	尾崎高宏	（同 同 班長）	
調査職員	田中一穂	（同 同 嘴証員）	

### 2) 調査の結果と取扱い

八箇峠道路の建設予定地は周知の遺跡は存在しないが、立地条件や周辺環境を鑑み、遺跡が存在する可能性があることから114,870m<sup>2</sup>を対象に試掘調査を実施した。調査により192トレンチ付近で遺構・遺物を検出し、600m<sup>2</sup>について本発掘調査が必要であると判断した（第3図）。近接して周知の金屋遺跡が存在し、遺跡の内容・立地から同一遺跡と考え、同遺跡の範囲拡大として「新潟県埋蔵文化財包蔵地カード」に登載し、周知化した。



第3図 確認調査トレンチ位置と本発掘調査対象範囲（金屋遺跡）

### 3 本発掘調査と整理作業の経過

#### A 調査・整理の体制

##### 【2009年度】余川中道遺跡Ⅱ・金屋遺跡Ⅲ 発掘調査・整理作業

調査期間	金屋遺跡 2009年4月13日～5月29日		
余川中道遺跡	2009年5月1日～11月20日		
整理期間	2009年5月2日～2010年3月31日		
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 武藤克己）		
調査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団		
総括	木村正昭（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 事務局長）		
管理	斎藤 荘（	同	総務課長）
庶務	松原健二（	同	班長）
調査総括	藤巻正信（	同	調査課長）
指導	高橋保雄（	同	担当課長代理）
調査担当	尾崎高宏（	同	班長）
支援	株式会社みくに考古学研究所 現場代理人 貝瀬悦夫		
	調査員 實川順一 武部喜充	長沢展生	
	作業員 今成京子 印牧洋子	岡村奈月 小野川直文	貝瀬あゆみ
	片桐由美子 川内京子	久保美由紀	桑原淳子

##### 【2013年度】余川中道遺跡Ⅲ 発掘調査・整理作業 余川中道遺跡Ⅱ 整理作業

調査期間	2013年5月7日～10月25日		
整理期間	2013年4月1日～2014年3月31日		
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 高井盛雄）		
調査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団		
総括	木村正昭（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 事務局長）（2013年12月31日まで）		
管理	土肥 茂（	同	事務局長）（2014年1月1日から）
庶務	熊倉宏二（	同	総務課長）
調査総括	仲川国博（	同	班長）
指導	高橋 保（	同	調査課長）
調査担当	田海義正（	同	担当課長代理）
支援	加藤 學（	同	班長）
	株式会社ノガミ 現場代理人 伊藤正紀		
	調査員 石垣義則（整理作業）	長谷川一郎（発掘調査・整理作業）	
	作業員 秋山やよい 永木美佳子	熊野敦子	武田裕紀子
	中野恵美子	福田志穂	

## 【2014年度】余川中道遺跡II・III 整理作業 金屋遺跡III 整理作業

整理期間 2014年4月1日～2015年3月31日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 高井盛雄）

調査 公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

総括 土肥 茂（公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 事務局長）

管理 熊倉宏二（同 総務課長）

庶務 仲川国博（同 班長）

調査総括 高橋 保（同 調査課長）

指導 田海義正（同 担当課長代理）

監理 加藤 学（同 班長）

支援 株式会社ノガミ

整理担当 石垣義則

作業員 秋山やよい 武田裕紀子 中野恵美子

## B 調査の経過

## 【2009年度】

金屋遺跡IIIの発掘調査は、4月13日から開始した。同年度に調査を行う余川中道遺跡IIの発掘調査に先行して開始し、5月からは2遺跡の調査を同時並行で進めた。調査対象地の大半が土石流によって損壊していることが明らかになったため、予定より早く調査が進行した。5月11日に県教委が終了確認し、15日に全体写真を撮影、その後、測量作業、補足調査を行い、5月29日で現場作業を完了した。

余川中道遺跡IIの発掘調査は、4月27日から事前準備作業を開始し、作付前の5月上旬に用排水路の切り回し作業を行った。5月8・12日には、表土掘削開始前に部分的な確認調査を行い、遺跡の内容を把握した。5月18日から重機によって表土掘削を開始し、6月1日から作業員を投入し、人力掘削を開始した。掘削と測量業務を併行させながら、調査区ごとに調査を行っていった。8月6日には、古代・中世面の完掘写真を撮影した。8月19日に、平安時代の水田、室町時代の集落・鍛冶関連遺構について報道公開を行い、8月22日に第1回現地説明会を開催、186名の来場者があった。

古代・中世面の下位には古墳時代面が存在することが明らかであったため、調査終了後に必要に応じて深掘りを行い、下層の確認調査を実施した。また、下層に遺跡が存在する場合、厚い間層が存在したため、必要に応じて機械を使用しながら効率的に作業を進めた。特に、D1・D3区においては、地下深部に古墳時代面が存在することから、機械掘削を活用した。9月11日は、D1・D3区で検出した古墳時代の水田の写真を高所作業車から撮影した。また、E区・D2区では、膨大な数の遺物が祭祀遺構から出土し、記録作業等に時間を要した。

古墳時代の遺構の重要性が高いことから10月14日に報道公開を行い、同日、新潟大学人文学部橋本博文教授より現地指導いただいた。10月17日に第2回現地説明会を開催、173名の来場者があった。また、10月21日に八海高校（12名）、23日に国交省OB会（43名）、30日に北辰小学校（62名）が現地見学を行った。第2回現地説明会においては、地元から保存に関する要望があった。これを受け、11月1日に地元・国交省・市・県で取扱いについて協議した。地元の要望が恒久的な保存ではないことが明らかとなつたため、調査を継続することになった。このような方針を決定したことを受け調査を再

### 3 本発掘調査と整理作業の経過

開し、11月12日にD区・E区の完掘写真をラジコンヘリコプター・高所作業車を用いて撮影し、11月20日で当年度の発掘調査を終了した。

12月1日からは、埋め戻し作業を行った。時間の制約により、当年度に調査を終了することができなかつた、D1・D3区については、シート及び山砂で保護養生しながら埋め戻しを行い、次年度以降の調査再間に備えた。12月16日からは現場の撤去作業を行い、28日に撤去完了した。

#### 【2013年度】

当年度の調査は、一般国道7号新発田拡幅事業に伴う小船渡遺跡の調査を終了させてから開始することとなつた。6月10日から現場に入り、準備作業を開始した。6月17日から表土掘削を開始し、26日から作業員を投入した。前回調査で養生した山砂の撤去を行い、7月1日に水田造構を復旧した。

7月から、前回調査で検出した水田造構の調査を開始した。畦を断ち割り、図面作成・写真撮影を順次行った。なお、開闢を掘削している過程で、D1・D3区においては、3面の造構検出面が存在することを確認し、上位からVIb層・VIc層・VII層と呼ぶこととした。2009年度調査で検出した水田がVIb層となる。VIb層の調査終了後、VIc層の遺物包含層掘削を行うとD3区に溝や柱穴を検出したので、調査区の大半は土石流堆積物によって損壊していた。8月9日にVIc層の完掘写真を撮影し、平面測量を行つた。その後、間層の掘削を進めると、VII層から良好な状態の水田を検出した。掘削の過程で、地震痕跡を多数検出したため、これについても記録作業を行つた。9月17日、新潟大学災害復興科学研究所・卜部厚志准教授から地震灾害、土石流災害に関する現地指導をいただいた。9月24日、富山大学大学院理工学研究部・酒井英男教授が地震発生年代を特定するために考古地磁気分析用のサンプルを採取した。その後、10月4日にVII層の完掘写真・航空写真を撮影、10月5日にはVII層で検出した水田を公開するために現地説明会を開催し、125名の来場者があった。VII層造構の平面測量を行つた後、畦の断ち割り記録作業を順次進め、水田耕作土(遺物包含層)を掘削した。10月15日に県教委による終了確認を行つた。また、開闢掘削時に、VII層の下位に土壤化した層位が存在することを確認したため確認調査を実施したが、造構・遺物は検出されず、10月25日で現地調査を完了した。その後、埋め戻し作業、現場撤去作業を行い、11月27日で現場の撤収を完了した。

### C 整理作業の経過

#### 【2009年度】

金屋遺跡Ⅲ・余川中道遺跡Ⅱの整理作業は、現場作業と並行して遺物の水洗・注記を行つた。また、中世の鍛冶溝が多数出土したため、土壌サンプルの水洗・選別作業を7月1日から開始した。調査終了後、1月4日からは整理作業を本格化させ、遺物実測・トレース・計測・計量、図面整理、観察表作成・写真整理などの基礎整理を中心に行い、中途で作業が終了した。なお、余川中道遺跡から出土した膨大な量の土器の注記は、大半が未了のまま次年度以降に引き継いだ。

#### 【2013年度】

当年度は、余川中道遺跡Ⅱの整理作業を中心に行つた。4月2日に新潟県埋蔵文化財センターから株式会社ノガミ亀田営業所に遺物を搬入し、注記作業を開始した。5月末には注記作業が完了し、29日から接合・復元作業を開始した。これと併行して10月から実測、1月からトレースを開始し3月までに終了した。現場撤収後、12月からは台帳類の整備とともに、造構図面・写真図版の作成、3月には遺物の写真撮影を行つた。なお、2009年度調査分のうち中世の造構図版は、すでに仮版が組まれていた。整理

の過程で、統一性が図られていない部分が存在することが判明したが、調査者の所見が反映されていることからこれを採用し、対応関係を明示するように編集した。なお、余川中道遺跡の発掘調査報告書のうち、図版部分の編集を株式会社ノガミに委託して実施した。

#### 【2014年度】

当年度は、金屋遺跡Ⅲの整理作業から着手した。2009年度の基礎整理を基に、遺構図版・遺物図版、写真図版の仮版を行った。その後、挿図作成、原稿執筆、自然科学分析の編集を行い、これらの作業は4月末に終了した。

5月から余川中道遺跡Ⅱの整理作業に移った。前年度から引き続きの、中世の遺構図版・遺物図版の編集を行い、その作業と並行して古墳時代の遺構図版・遺物図版の仮版を行った。その後、中世・古墳時代の写真図版の仮版もを行い、7月末には図版関係の作業を概ね終了した。その間、5月16日には、東北芸術工科大学・北野博司教授から土器の使用痕（スス・コゲ）分析の指導を受けた。8月からは、本文に関する挿図の作成や自然科学分析の編集を行い、合わせて本文の執筆も開始した。

また、7月1日～10月31日に開催された「特別展 県指定余川中道出土品展」（南魚沼市民会館展示室）に、玉類と共に整理作業で復元した土器を展示し、364名の観覧者があった。

9月19日に、土器に付着したスス・漆の放射性炭素年代測定を行うため、加速器分析研究所がサンプルを採取した。11月には、金屋遺跡Ⅲ・余川中道遺跡Ⅱを合わせたレイアウトの大枠が定まった。その後、編集業務を株式会社ノガミにて行い、2015年3月13日に印刷、16日に刊行した。3月末に、出土遺物の納品、台帳類の完成をもって、業務はすべて終了した。

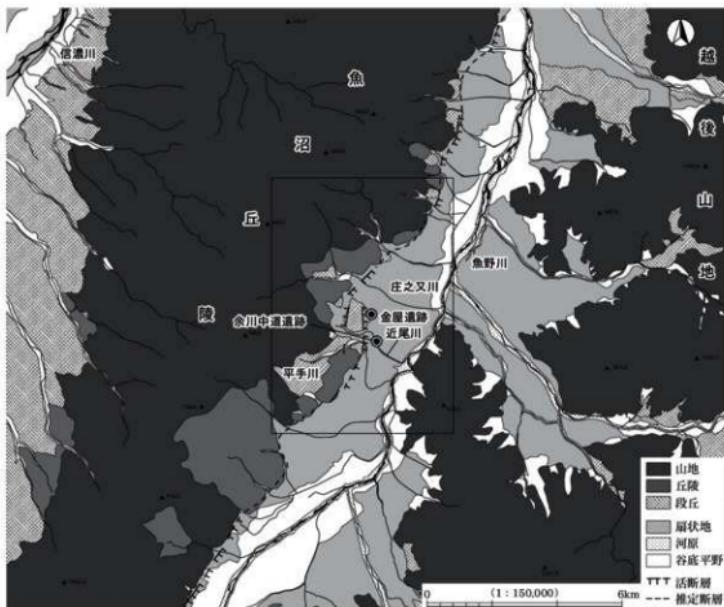
## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 1 地理的環境

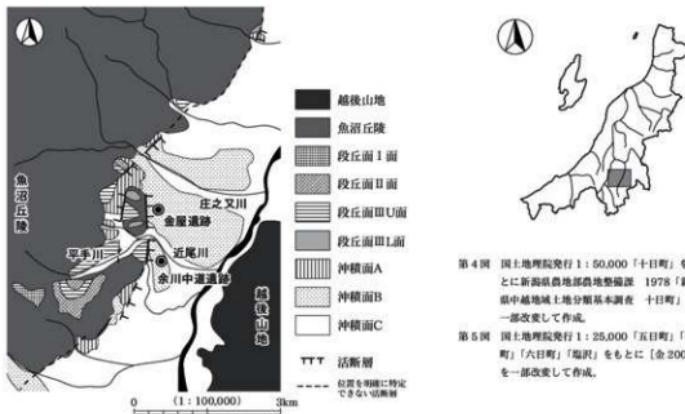
余川中道遺跡が所在する旧六日町は南魚沼郡に属し、新潟県の南東部にある。2004年に六日町と大和町が合併して南魚沼市となり、2005年には塩沢町を編入合併し現在の市域が確定した。北は魚沼市、西は十日町市、南は南魚沼郡湯沢町、群馬県利根郡みなかみ町と接する。当遺跡は魚野川に沿って延びる六日町盆地の北部、JR六日町駅から北へ約800mの地点に位置する。

魚沼地域を南北に貫く魚野川流域は中世以来、越後と関東を結ぶ重要な交通路である。六日町はその途中にあって、市名が地名の由来になっている〔植木1997〕。六日町盆地は、越後平野と舟運でつながると同時に、関東方面へ向かう三国越えと清水峠越えの二つの街道の結節点にある。また、高田平野から信濃川を経由して魚野川に至る陸路が何本も横断しており、関東地方はもちろん信州・北陸地方にも通ずる要衝の地でもあった〔桑原1966〕。この地は鈴木牧之の『北越雪譜』にもあるように古くから豪雪地帯として知られ、住民はしばしば雪害に見舞われてきた。この地域の降雪について、旧塩沢町に設置された観測所の観測値〔新潟県1999〕を参考に、降雪・積雪の状況を概観する。計測値は、1983～1993年(11年間)の11～4月(約181日間)に観測されたものである。降雪日数の平均は55.9日、年降雪量の平均は1181cmである。年降雪量を月別平均で見ると、11月が13cm、12月が213cm、1月が490cm、2月が371cm、3月が90cm、4月が3cmである。特に1月の降雪が多く、1985年1月には1ヶ月で1010cmの降雪を記録している。次に積雪を見ると、気温が低い地域では積雪日数も多く、積雪日数の平均は115.6日である。最大積雪深の平均は203cmであり、11年間で最大積雪深を記録した月は、1月が3回、2月が6回、3月が2回であった。1984年2月11日には、積雪深355cmが記録されている。この地域の観測値から、1月に降雪量が多く、2月に積雪量が多いと言える。この雪は山腹に雪崩地形を形成するだけでなく、融雪水が洪水や地滑りを引き起こし、地形にも少なからず影響を及ぼしている〔小林1977〕。

六日町盆地周辺の地形を概観すると、魚野川右岸と左岸では明らかな相違が見られる。右岸は、越後山地と呼ばれる1,500～2,000m級の急峻な県境稜線が利根川水系との分水嶺をなしている。南北に連なる越後山地は5～10km間隔で直交する支陵を持ち、大きなV字谷を刻んでいる。それに対して左岸地域は、平行する信濃川との間に標高700m以下の魚沼丘陵が横たわる〔茅原1977〕。魚沼丘陵の東縁は地下では基盤岩の不整合境界である新発田一小出構造線が北北西に延び、それに沿って層面地すべり断層である六日町盆地西縁断層が分布し、丘陵は魚野川寄りを稜線として西側に緩やかに傾動している。そのため、緩やかな西側の斜面では、上面にケスタ地形、下部に河岸段丘が発達しているのに対して、東側の急斜面では、段丘の発達が悪く、地滑り地形や崩落地形がより多く見られる〔鈴木1978〕。六日町盆地からこれらを見た場合、魚野川右岸は急峻な山地と深い谷間から、水量豊富な河川により形成された広大な扇状地が広がり、左岸は丘陵に浅く切れ込む谷に小規模で傾斜の大きな扇状地が点在することになる。この違いは遺跡の分布にも影響していると考えられ、古墳時代の遺跡のほとんどは左岸地域に分布し、中世の山城は右岸の谷口の稜線に多くが立地している。これは灌漑の容易さや見通しのよさといった地形的要



第4図 南魚沼地域の地形分布図



第5図 道路周辺の地形区分図

第4図 國土地理院発行 1:50,000 「十日町」をもとに新潟県島地部農地整備課 1978「新潟県中越地域土地分類基本調査 十日町」を一部改変して作成。

第5図 國土地理院発行 1:25,000 「五日町」「十日町」「六日町」「福沢」とともに【全2001】を一部改変して作成。

## 2 歴史的環境

因が大きいと推測できる。

余川中道遺跡は、魚野川左岸の扇状地の一つ、庄之又川の小規模扇状地の扇端南部、飯綱山麓の余川地区にある。この付近は魚野川左岸では数少ない河成段丘の明瞭な場所で、上ノ原から蟻子山に至る低位段丘上には多数の縄文遺跡が分布する。また、飯綱山と蟻子山の段丘面には県内有数の古墳群が分布する。これらの段丘面（段丘面II面・III面）の離水時期は13,000年より前とされている。一方、その下に広がる庄之又川の扇状地は、その形成過程から大きく3つに分けられる。まず、蟻子山西麓から君帰地区付近にかけての沖積面（沖積面A）が最初に離水した。離水時期は5,000年前と推定されている。次に庄之又川流域の扇状地中央（沖積面B）が離水し、その後に平手川・近尾川の沖積面を含む、残りの沖積面（沖積面C）が離水したとされる〔金2001〕。

この離水時期と堆積状況の違いは水利環境の違いとなって表れているようである。1931年当時の5万分の1地形図〔大日本帝国陸地測量部1931〕では、欠之上地区の庄之又川と近尾川の分水嶺付近が桑畠、その直下の君帰地区に乾田が分布する。この地区は周縁が崩落地形であることもあって、浅い盆地を思わせる緩傾斜地である。一方、庄之又川の扇状地の扇央から扇端にかけては桑畠が広がる。現在水田化されているこの地域も、淘汰の悪い疊層がそこかしこで地表に顔を出しており、典型的な扇央の特徴を有する。ところが、余川地区周辺は1931年当時から湿田である。平手川（余川沢川）と近尾川は庄之又川に比べて集水域が狭いために堆積が進まない上に、飯綱山と蟻子山の間を通って庄之又川の扇状地とぶつかる辺りで、より低い南側へと屈曲していた。両河川のつくる扇状地も小さく不明瞭で、庄之又川の扇状地扇端と区別したい。このため扇央でありながら扇端の特徴を有し、しかも小規模河川が網流するために灌漑は容易であったと思われる。現在の近尾川と平手川は、1973年に洪水対策で河川改修されて以来、途中から合流している〔野上1990〕。地形を概観するかぎり、両河川を含めた小河川が自然に合流・分離を繰り返してきたとしてもおかしくはないが、河道の変化については、河川改修時のもの以外は明瞭な資料は見いだすことはできなかった。

金屋遺跡は、余川中道遺跡の北西約800mに位置する。当遺跡は魚沼丘陵東面の独立丘陵（蟻子山）東側裾部と、庄之又川によって形成された扇状地の扇央に立地する。また、遺跡の南側には蟻子山西側の山腹緩斜面に湧水源をもつ近尾川が流れている。遺跡が周知されている範囲は、南北約500mと広範囲である。これまで2度の調査（1982・1983年度、2004・2005年度）が行われており、2009年度調査区は最も北西寄りに位置し（第66図）、庄ノ又川の洪水の影響を受けやすい場所であったと考えられる。本遺跡から近尾川まで約500m、庄ノ又川まで900mであり、それぞれ約1.5kmを下ると魚野川に合流することから、当遺跡は比較的河川に近いところに位置していると言える。

## 2 歴史的環境

南魚沼市は、魚野川に注ぐ登川・三国川・錦倉沢川・庄之又川等の河川によって造りだされた大小の扇状地が発達した六日町盆地と左岸の丘陵上を中心に、多くの遺跡が立地する。魚沼地域で最初に入々の生活の痕跡がみられるのは後期旧石器時代で、以来、縄文時代・弥生時代と連続と人々の生活痕跡が発見されている。余川中道遺跡では、これまでの2度の調査で、古墳時代から中世までの遺構・遺物が検出されている。以下では古墳時代から中世の遺跡について概観する。



第6図 余川中道遺跡・金屋遺跡周辺の主な遺跡

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	余川中道遺跡	古墳～中世	15	北沖東遺跡	古墳・平安	29	瀬戸尾跡	奈良	43	西沢寺跡	中世
2	余屋遺跡	羽石器・平安	16	長兵東遺跡	弥生～古墳	30	寺尾七塚空跡	奈良	44	御前道路	中世
3	船岡山古墳群	古墳	17	前原遺跡	奈良・平安	31	新ノ木室跡	奈良	45	大崎城跡	中世
4	橘子山古墳群	古墳	18	北原遺跡	奈良・平安	32	天池穴跡	平安	46	大崎前路	中世
5	大渕水遺跡	古墳	19	木ノ平加道跡	奈良・平安	33	天神山穴跡	平安	47	御前城跡	中世
6	万葉大塚	古墳	20	長兵鹿跡	奈生・奈良～中世	34	船ノ口跡	中世	48	苗場山城跡	中世
7	藤原大塚群	古墳	21	船舟塚子山遺跡	羲文・平安	35	柳穴跡	中世	49	六引城跡	中世
8	南山山古墳群	古墳	22	江ノ尾遺跡	奈良・平安	36	上山跡	中世	50	大引城跡	中世
9	米浦内道跡	奈生・古墳	23	蟹田遺跡	奈良・平安	37	野川城跡	中世	51	野形城跡	中世
10	米浦外道跡	奈生・古墳	24	柴ノ木平遺跡	古墳・奈良・平安	38	若狭城跡	中世	52	足利城跡	中世
11	下田遺跡	古墳	25	分見堂遺跡	平安	39	コツワオシの野跡	中世	53	木八郎跡	中世
12	名木沢古墳	古墳	26	猪ノ尻城跡	平安	40	船井大崩跡	中世	54	君代跡	中世
13	上山大塚	古墳	27	勝毎日遺跡	奈良・平安	41	鶴山城跡	中世	55	君治前路	中世
14	大久保遺跡	古墳	28	早木遺跡	平安	42	寺尾城跡	中世			

第1表 余川中道遺跡・金屋遺跡周辺の主な遺跡

### 古墳時代

5・6世紀になると大和朝廷は各地の豪族を「国造」に任命し、地方支配の体制を整えた。諸国の国造の名を列挙した『先代旧事本紀』の「第十卷 国造本紀」によると、新潟県域では「久比岐国造」「高志国造」「佐渡国造」の名が見られる〔笠原 1966〕。このころの北陸地方は「越」と呼ばれ、新潟県域は越の北限に位置し、これより北は大和朝廷の支配が及ばない蝦夷の地であった。

魚野川流域の古墳時代の遺跡は、古墳、集落、水田などが確認されているが、特に中期以降から魚野川左岸の丘陵や段丘を中心として数多くの古墳が構築されるようになる。魚沼市から南魚沼市にかけて広く分布し、確認された古墳はすべて円墳である〔金子ほか1977〕。5世紀後半から6世紀前半に比定されるものは、南魚沼市飯綱山古墳群（消滅したものを含めて65基）、蟻子山古墳群（91基）、下山古墳群（6基）の初期群集墳と名木沢古墳がある。6世紀～7世紀の後期に比定されるものは、南魚沼市吉里古墳群（糠塚古墳群4基と万貝古墳1基の計5基）、南山古墳群（6基）で、これらは横穴式石室を持つ群集墳と考えられている。また、同じく後期のものとして、1999年に一般国道17号浦佐バイパス建設に伴って調査が行われた大久保遺跡（14）では、墳丘はすでに削平され周溝のみの調査ではあったが、5基の古墳が調査され、魚野川右岸の古墳の存在が明らかとなった〔尾崎ほか2001〕。さらに下流の魚沼地域まで目を向ければ、旧堀之内町の魚野川右岸段丘上に立地する古林古墳群（6基）がある。初期群集墳から横穴式石室を持つ群集墳の2時期が想定されている〔梅川2004〕。

余川中道遺跡では、これまでの調査で古墳時代の集落や水田が検出されているが、ほぼ時期を同じくする県史跡・飯綱山古墳群が西へ約500m、県史跡・蟻子山古墳が北西へ約1kmの地点にそれぞれ存在する。

飯綱山古墳群（3）は、これまでに65基の古墳が確認されていたが、農地の開墾等により消滅した古墳もあり、現存数は26基となっている。このうち7基において発掘調査が行われており、特に10・27号墳は古墳群のなかでも最大級で、魚沼地域の有力な首長を被葬した盟主墳と考えられている。10号墳は、墳丘径約36m、墳丘高約6mの円墳で、墳丘は2段に築造され、上段部には葺石が確認されている。鉄鏃・短甲・馬具の破片や鉄斧等多くの遺物が出土している。1996年に新潟大学考古学教室によって行われた調査では、墳頂縁部から壺形埴輪が出土している。地理的に近い北関東、特に群馬県での出土例が多いことから、上野との関係が指摘されている。出土遺物から5世紀後半に築造されたものと考察されている〔橋本ほか1998〕。27号墳は、古墳群の中で最も標高の高い位置に存在する。墳丘径約40mの円墳で、葺石はないものの、墳丘は2段に築成されていたことが判明している。東西2つの埋葬施設のうち、西側の主体部からは銅鏡、ガラス玉、多数の滑石製白玉が出土している。また、東側の主体部上からは、底部を穿孔し赤く塗彩した土師器が大量に出土している。これらの遺物から古墳群の中では最も古く、5世紀前葉に築造されたと考えられている〔橋本ほか2001〕。

蟻子山古墳群（4）は、庄之又川の扇状地にある独立丘陵の東斜面に位置する。大半の古墳は明治時代に盗掘され、1970年前後には農地の開墾が行われ消滅したものが多い。最大規模の古墳は5号墳で直径29.5mを測る。古墳群の中でも2番目の規模をもつ84号墳の内部主体は、扁平礎で二重に構築した竪穴式石室とされ、87号墳は粘土層であることが確認されている。古墳群の遺物では鏡・直刀・勾玉・管玉・ガラス小玉・5世紀後半の陶邑古窯産の須恵器などが出土している〔新潟県1983〕。

古墳以外で調査・報告された遺跡は、余川中道遺跡、金屋遺跡、北沖東遺跡、長表東遺跡、来清東遺跡、来清西遺跡などがある。

余川中道遺跡（1）の2003年度調査区では、中期後半の竪穴建物1軒、土坑19基、ビット305基、

溝 11 条、土器集中造構 12 か所などを検出した。土器集中造構は、居住域で祭祀が行われたことが想定されている。出土した土器が飯綱山古墳群の年代と重なることから、飯綱山古墳群の造営に関係した集団の居住域である可能性が指摘されている〔飯坂ほか 2005〕。

金屋遺跡（2）は、蟻子山古墳群が立地する丘陵に隣接し、丘陵下方の傾斜地と庄之川によって形成された扇状地上に立地する。これまでに 1982・1983 年度、2004・2005 年度に調査が行われている。1982・1983 年度調査では、前期末葉の竪穴建物 2 軒と中期～後期の遺物が出土している〔山本ほか 1985〕。2004・2005 年度調査では、前期後半の竪穴建物 2 軒のほか、掘立柱建物・溝・土坑・河川等が検出されている〔飯坂ほか 2006a〕。

来清東遺跡（10）、来清西遺跡（9）は、南山古墳群（8）近くの扇状地扇端に立地する。来清東遺跡では、中期の土器と石製模造品を集積した造構が検出され〔安立 2001〕、来清西遺跡では、後期の手握土器や土玉などが出土し、両遺跡共に祭祀が行われたことが想定されている〔安立 2002〕。北沖東遺跡（15）では古墳時代の用水路跡と杭列が検出され、耕作地であったことが想定されている。出土した木製品のなかで注目されるものとして、新潟県内では初めての発見となるナスピ形農耕具（3 個体）がある〔飯坂ほか 2006b〕。

#### 古代・中世

新潟県域は「大化の改新」以降、越は越国となり、690 年頃に行われた諸国国境画定や戸籍作業の中で、越前国・越中国・越後国・佐渡国に分割される。当時の越後国は阿賀野川以北から山形県庄内平野までを範囲としていた。702 年に国力強化のため、越中国の一部であった頸城郡・古志郡・魚沼郡・蒲原郡の 4 郡が越後国に編入される。708 年には庄内平野に出羽柵を置き、さらに 712 年には出羽郡を越後から分離して出羽国とした。後に出羽国には陸奥国最上・置賜両郡が編入されることとなる。これをもって、8 世紀前葉には越後国の領域がほぼ確定し、現在の新潟県の原形ができあがる。佐渡国は、越國から分離した後、743 年に越後国にいったんは併合されたが、752 年に再び国となり、以後、明治時代まで越後国と佐渡国が並立することになる〔米沢 1980〕。

『和名類聚抄』によると越後国は頸城・古志・三島・魚沼・蒲原・沼垂・磐船の 7 つの郡とその下に 32 郷が置かれている。魚沼郡は四郷とあり、賀祢、那珂、刺上、千谷の郷名が見られる。このうちの「賀祢郷」が現在の南魚沼市周辺を指すといわれている〔笠原 1966〕。

古代の遺跡は、魚野川左岸の扇状地上を中心に分布し、旧六日町の堅木遺跡、北沖東遺跡、長表遺跡、金屋遺跡、旧塙沢町の下田遺跡、蟹田遺跡、梨ノ木平遺跡、旧大和町の寺見堂遺跡、前原遺跡、天池遺跡、七久保遺跡などが確認されている。

周辺で調査・報告された北沖東遺跡（15）では、平安時代の溝が検出され、木製漆塗り皿などが出土している〔飯坂ほか 2006b〕。堅木遺跡（28）は平安時代の集落と考えられ、炉 4 基のほか、畑作溝や土坑が検出されている〔藤巻ほか 2008〕。金屋遺跡 1982・1983 年度の調査では、竪穴建物 9 軒、掘立柱建物 6 棟のほか、柵、溝、土坑、性格不明遺構、ピットが検出されている。竪穴建物は時期を判別できるものは 2 軒で、それぞれ 9 世紀中葉と 9 世紀後半が想定されている。遺跡の存続時期は、出土遺物から 9 世紀前葉～11 世紀前葉と考えられている。また、長野・群馬に出土例が多い 10 世紀後半の羽釜が出土しており、東山道を通しての交流が想定されている〔山本ほか 1985〕。金屋遺跡 2004・2005 年度の調査では、竪穴建物 2 軒、掘立柱建物 2 棟のほか、溝、ピット、河川跡が検出されている。2 軒の竪穴建物は、それぞれ 9 世紀前葉と 10 世紀前葉が想定されている。遺跡の存続時期は、出土遺物から 9 世紀前葉～10 世紀前

葉と考えられている〔飯坂ほか2006a〕。長表遺跡(20)では、3条の溝が検出され、土師器や須恵器などの土器、農具や日常用具などの木製品が多く出土していて、「厨」や「稻人」などと記された墨書き土器など、官衙的様相が見られる遺物が出土している〔中村・金子ほか1975〕。梨ノ木平遺跡(24)は、他の古代遺跡が扇状地上に立地するのとは異なり、魚野川左岸の丘陵上に立地する。11世紀代の堅穴建物1軒と、これに近接して時期を同じくする畠跡とみられる溝が検出されており、山間地域の生活のあり方を示す良好な資料となっている〔金子・佐藤ほか1987〕。

須恵器の生産は、新潟県内では7世紀後半に始まり、8世紀前半には急速に生産量が増加する。魚沼地域においても7世紀末以降、魚野川左岸の丘陵部に須恵器窯が造られるようになる。寺尾七塚窯(30)・朴ノ木窯(31)は、7世紀末の須恵器窯で、朴ノ木窯からは群馬系の特徴である「かえり」をもつ杯蓋が出土している。天池窯(32)・天神南窯(33)は、9世紀前半の須恵器窯跡と考えられている〔田村2002〕。

中世に入ると、これまでの政治や経済活動に大きな変化がみられる。その一つは土地支配の在り方で古代の律令制とは異なり、荘園と国衙領からなる荘園公領制となる。『兵範記』の保元二年(1157)三月二十九日の条には平正弘の所領であった「越後国魚野郡殖田郷」を没官して「後院」の所領にしたことが記されている。ここに見られる「魚野郡殖田郷」が古代の「魚沼郡貢称郷」にあたると考えられている。殖田郷は、後に上田荘・於田荘などと呼ばれるようになり、荘園は郷に分かれ上田荘には美佐鳥郷、番場郷、留実郷、早川郷、木六郷、関郷、石臼郷などがあった〔穴沢1977〕。当遺跡が所在する旧六日町余川付近は、このうち美佐鳥郷にあたると推測される。1333(元弘3)年に鎌倉幕府が滅亡し、建武新政権が発足する。このとき大きな功績をあげた新田義貞が上野国とともに越後国を治めることになった。足利尊氏は後醍醐側に反逆し、後醍醐天皇の南朝側は、新田義貞を總大將として出陣するが、尊氏側に敗れる。1338(延元3)年に尊氏は征夷大將軍となり、室町幕府が成立する。1341(應永4)年には上杉憲頼が越後国守護となり、上田荘は上田長尾氏が治めるようになる〔笠原1966〕。

魚野川両岸の丘陵上には山城が数多く確認されており、関東からの三国街道・清水峠越と、越後府中から西山越の峠道を押さええる位置に所在する。魚野川右岸の坂戸山には1979(昭和54)年に国史跡となつた坂戸城跡(34)が所在する。新田氏敗退以後、上田長尾氏が居城し、慶長3(1598)年に上杉氏が会津に国替えとなってからは堀氏が居城する。慶長15年(1610)年、堀氏が信濃飯山へ国替えになり、坂戸城は廃城となった。南西麓は関東へ通じる三国峠越、清水峠越の分かれる地点であり、また魚野川による舟運の終点にあたり交通の要衝である〔細矢1972〕。丘陵頂部に本丸を構え、丘陵全体を要塞化し、西麓には城主の居館と武家屋敷が置かれている。魚野川左岸の丘陵上には1968(昭和43)年に県史跡となつた樺沢城(35)が所在する。山城以外で調査された遺跡として、旧大和町の九日町御館遺跡〔池田1992〕がある。南北80m、東西60m以上の不整形方の水路に囲まれた中に、8×13.5m(4間×約7間)の掘立柱建物をはじめ、井戸、土坑などが検出されている。このほか、金屋遺跡1982-1983年度調査で、少量ではあるが中世の遺物が出土している。

## 第III章 余川中道遺跡II

### 1 グリッドと調査区の設定

グリッドの設定は、2003年度調査に引き続き、六日町バイパスの法線と一致するようにセンター杭を基準とした。STA No.155 (11 D杭) ( $X = 119174.8619$ ,  $Y = 33505.628$ ) を基点にして、STA No.160 (11 N杭) ( $X = 119250.2850$ ,  $Y = 33289.7034$ ) を結ぶ線を横軸、それと直交する線を縦軸とした。横軸は真北から約41.05度、東に傾いている。この主軸を基に1辺10mの方眼を組み、これを大グリッドとした。大グリッドは北西から南東へアラビア数字で6・7・8…、南西から北東へアルファベットの大文字でO・P・Qとした記号の組み合わせで、6 P・7 P…、6 Q・7 Q…、のように表示した。また、Zラインより北東へのアルファベット表記は、AA、AB、AC…とした。さらに、大グリッド内を25分割し、北西隅を1、北東隅を5、南西隅を21、南東隅を25となるように番号を付し、大グリッド番号との組み合わせで、「6 P 21」や「6 AA 21」等と表した(第7図)。調査範囲のほぼ中央に位置する13 X 1グリッド西隅の杭の座標は、 $X = 119312.562$ ,  $Y = 33370.459$ である。地区的名称については、南西からD1・D3区、D2区、E区、F区、G区、H区と呼ぶこととした。

### 2 基本層序

基本層序には、中世の遺物包含層、古代の水田耕作土、古墳時代の遺物包含層及び水田耕作土が堆積する。基本的に、遺物包含層の直下層上面が遺構検出面である。調査区が7か所に分かれており、地区ごとに堆積状況が著しく異なっていた。基本層序の整合に努めたが、度重なる土石流によって遺跡が壊されている部分も多く、基本層序を整合することはできなかった。以下では「D1・D3区」・「D2・E区」・「G・H区」に分けて記載する。第8図は基本層序柱状図、第9図は基本層序模式図である。なお、F区は遺物包含層が認められず、また遺物や遺構がなかったことから、下記の記載からは省略した。

#### 【D1・D3区】(第8図①・②)

I層～V層は2009年度調査、VI層～XIV層は2013年度調査の所見に基づく。また、下記で記載した放射性炭素年代測定の詳細については、第IV章2Aを参照されたい。

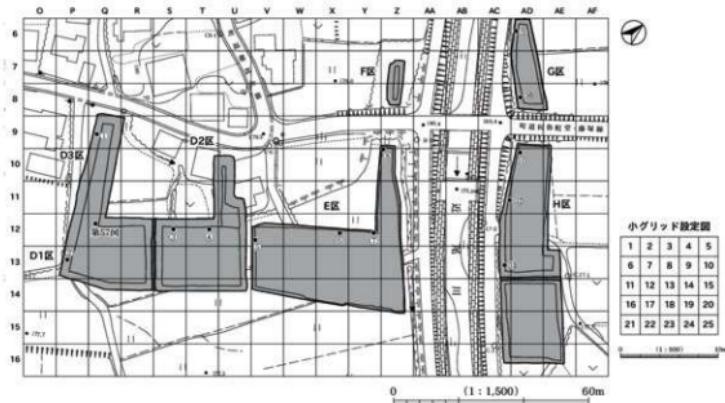
I層 灰褐色土 (7.5YR5/ 2 ~褐色土 (7.5YR4/ 3 表土。

II層 黒色砂質シルト (7.5YR7/ 3 水田耕作土。粘性・しまりが強い。直径1~3mmの炭化物をごくわずか含む。放射性炭素年代測定により、11世紀前半~12世紀前半ころの年代(以下、すべて較正値)値を得られた。

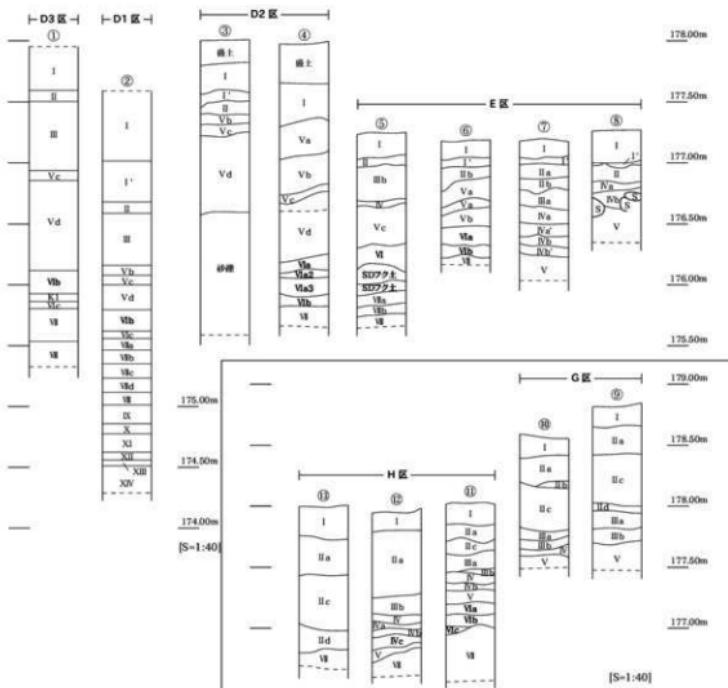
III層 黄褐色砂質シルト・褐色粗砂の互層 洪水堆積層。少なくとも7層に細分ができる。

Vb層 黄褐色土 (2.5Y5/ 3 洪水堆積層。直径5mm程の炭化物を含む。

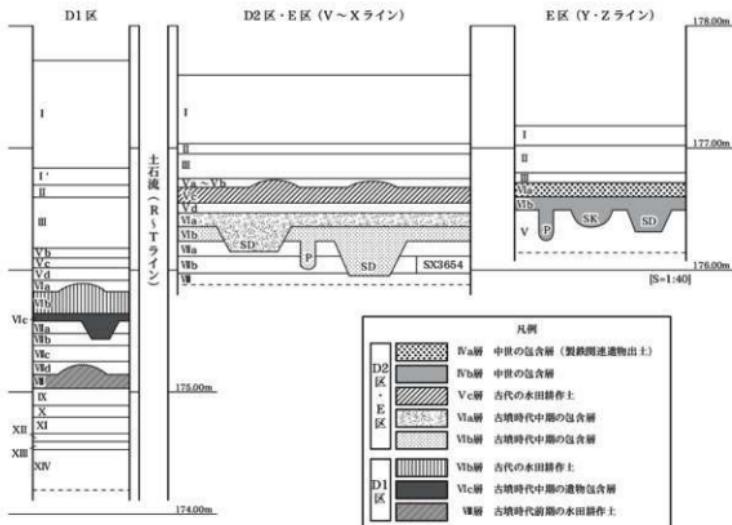
Vc層 暗オリーブ褐色砂質シルト (2.5YR3/ 3 粘性・しまりが強い。直径1~3mmの炭化物をごくわずか含む。10世紀代の土師器(486)が出土した。放射性炭素年代測定により、9世紀末~10世紀後半



第7図 余川中道遺跡のグリッド設定図



第8図 基本層序柱状図



第9図 余川中道遺跡の基本層序模式図

ころの年代値が得られた。

V d層 褐灰色シルト・灰色砂の互層 洪水堆積層。少なくとも 10 層に細分ができる。

VI a層 黒褐色砂質シルト・褐灰色粗砂の互層 洪水堆積層。

VI b層 黒褐色シルト (10YR3/ 2) 古代の水田耕作土。泥炭を基調とする。炭化物はごくわずか含む。古墳時代中期から後期の土器が少量出土した。VI b層を基調とする珪から出土した木材の放射性炭素年代測定を行い、7世紀末～9世紀中ころの年代値が得られた。

K 1層 灰色シルト (10Y5/ 1) 洪水堆積層。

VI c層 黒褐色シルト (10YR3/ 1) 古墳時代中期の遺物包含層。土器が少量出土した。

VI d層 にぶい黄褐色 (10YR5/ 4) 土石流堆積物。調査区の一部で、堆積が認められる。

VII a層 灰黄色砂質シルト (2.5Y6/ 2) 造構検出面。均質な洪水堆積物からなる。

VII b層 にぶい黄褐色砂礫 (10YR5/ 4) 洪水堆積物。直径 10cm 程度の礫、粗砂からなる。

VII c層 灰色砂質シルト (10Y6/ 1) 洪水堆積物。細砂の互層が認められる。

VII d層 にぶい黄褐色砂礫 (10YR5/ 4) 土石流堆積物。粗砂を基調とし、直径 1～3 cm の礫を含む。

VIII層 暗灰黄色粘質シルト (2.5Y4/ 2) 古墳時代前期の水田耕作土。粘性が強い。炭化物ごくわずか含み、部分的に炭化物が集中する範囲がある。VIII層上面で、古墳時代前期の土器 (475) が出土した。VIII層上面より採取した種子の放射性炭素年代測定を行い、3世紀中ころ～4世紀中ころの年代値が得られた。

IX層 緑灰色細砂 (10GY5/ 1) 洪水堆積層。混入物がなく、均質な細砂からなる。

X層 オリーブ灰色砂礫 (5Y5/ 2) 土石流堆積物。直径 3 cm 程度の礫、粗砂からなる。

XI層 緑灰色砂質シルト (10GY5/ 1) 洪水堆積層。混入物がなく、均質。IX層より粒子が細かい。粘

性が強い。

XⅡ層 黒褐色シルト (10YR3/ 2) 洪水堆積層。泥炭と互層をなす。湿地性の堆積物と考えられる。

XⅢ層 灰色細砂 (10Y5/ 1) 土石流堆積物。XIV層と一連の堆積。直径1mm以下の細砂からなる。

XIV層 褐色砂礫 (10YR4/ 6) 土石流堆積物。直径10cm程度の礫、粗砂からなる。

#### 【D2区・E区】(第8図③～⑧)

I層 灰黄褐色シルト (10YR6/ 2) 水田耕作土。

II a層 灰色土 (5Y6/ 1) 洪水堆積層。シルト質土が主体。上面2～3cmは粗砂層。

II b層 にぶい黄褐色土 (10YR5/ 4) 洪水堆積層。粗砂とシルトが互層をなす。

III層 黄色シルトと粗砂層の互層 洪水堆積層。

IV a層 褐灰色シルト (10YR5/ 1) 中世の遺物包含層。主に15世紀～16世紀の遺物が出土した。E区北西部(廣津場)から、鉄洋や羽口などの鍛冶関連遺物が多量に出土した(第14図参照)。

IV b層 暗褐色シルト (10YR3/ 3) 中世の遺物包含層。主に13世紀～15世紀の遺物が出土した。IV a層よりしまりが弱い。直径5～15cmの礫を含む。

V層 砂礫層 中世の遺構検出面。直径5cm程度の礫を含む。D2区・E区(V～Xライン)では、さらに4層に分層できる。

V a層 にぶい黄褐色細砂 (10YR5/ 4) 洪水堆積層。しまりが弱い。

V b層 灰色土 (7.5Y6/ 1) 洪水堆積層。細かい砂質土からなる。

V c層 褐灰色砂質シルト (10YR5/ 1) 古代の水田耕作土。腐植を少量含む。9世紀代の土師器(133)が出土した。

V d層 暗オーリーブ灰色土 (2.5GY4/ 1) 洪水堆積層。粘性が強い。

VI a層 暗灰黄褐色土 (2.5Y4/ 2)～黒色土 (10YR2/ 1) 古墳時代中期の遺物包含層。VI b層より土器の出土は少ない。しまりが強い。VI b層より粘性が強い。直径2～3mmの炭化物・直径5mm程度の灰黄色粘土ブロックを少量含む。

VI b層 黒褐色シルト (2.5Y3/ 1) 古墳時代中期の遺物包含層。また、上面がVI a層に伴う遺構検出面である。土器を多量に出土した。

VII a層 黄褐色砂礫 (2.5Y5/ 3) VI b層に伴う遺構検出面。土石流堆積物。粗砂と直径5～20cmの円礫からなる。

VII b層 黄灰砂礫 (2.5Y5/ 1) 土石流堆積物。VII層より礫の混入が少ない。下位から古墳時代中期の土器が出土した(SX3654)。

VIII層 青灰色土 (10BG6/ 1) 砂質シルトが主体。

#### 【G区・H区】(第8図⑨～⑩)

I層 黑褐色粘質土 (2.5Y3/ 2) 旧耕作土。粘性・しまりが強い。直径5mm以下の礫を少量含む。

II a層 單灰黄色シルト質土 (2.5Y5/ 2) 粘性・しまりが強い。I層との層境には、鉄分が沈着している。上位には直径2mm以下の砂礫が認められる。

II b層 暗灰黄色シルト質土 (2.5Y4/ 2) しまりが強い。上下層と比べて、粘性が強い。近世の遺物が出土した。

II c 層 にぶい黄色シルト質土 (2.5Y6/ 4) III a 層より、粘性・しまりが弱い。下位には鉄分の沈着が認められる。

II d 層 にぶい黄色砂礫 (2.5Y6/ 4) 自然堆積層。直径 3 ~ 5 mm の礫が主体。しまりが強い。

III a 層 灰黄色シルト質土 (2.5Y6/ 2) 粘性・しまりが強い。直径 2 mm 以下の炭化物をわずかに含む。近世の遺物が出土した。

III b 層 暗灰黄色シルト質土 (2.5Y5/ 2) しまり強い。III a 層より粘性が強い。直径 2 ~ 3 mm の炭化物をわずかに含める。近世の遺物が出土した。

IV 層 黒褐色土シルト質土 (2.5Y3/ 2) 中世の遺物包含層。主に 14 世紀 ~ 15 世紀の遺物が出土した。古代の土器も含む。粘性・しまり強い。直径 2.5 mm 以下の炭化物、直径 2 ~ 3 mm の地山ブロックが少量含まれる。古代の土器も混入する。さらに IV b 層・IV c 層に細分できる場所もある。

IV b 層 黄灰色シルト質土 (2.5Y4/ 1) 粒径の細かな細砂や直径 2 cm 以下の小礫をごくわずか含む。直径 2 mm 以下の炭化物も少量含む。

IV c 層 黄灰色シルト質土 (2.5Y5/ 1) 直径 2 ~ 3 mm の炭化物・小礫を少量含む。

V 層 黄褐色シルト質土 (2.5Y5/ 4) 上面が遺構検出面。粘性・しまり強い。

VI a 層 黄灰色シルト質土 (2.5Y5/ 1) 直径 5 mm 前後の炭化物少量、直径 1.5 cm 以下の小礫をごくわずか含む。

VI b 層 黄灰色シルト土 (2.5Y4/ 1) VI a 層よりシルト質が強い。直径 3 ~ 4 mm の炭化物や小礫をわずかに含む。

VII 層 黒褐色土 (2.5Y3/ 2) シルト質土が主体であるが、直径 5 ~ 10 cm の礫を多量に含む。

### 3 調査の概要

調査の概要については、地区ごとに記載する。

D 1・D 3 区 2009 年度は、D 1・D 3 区は古墳時代の水田が検出されることを念頭に置き、調査を開始した。V c 層からは古代の土師器 (486) が出土した。E 区南西部で古代の水田を検出したことから、V c 層も水田耕作土の可能性が高いと考え、慎重な精査を行ったが水田は認められなかった。その後、V d 層・VI a 層 (洪水堆積層) の掘削時に、VI b 層の上面で畦の高まりを検出した。これにより、VI b 層上面を水田面と捉え、精査を行い、調査区全域に水田が広がることを確認した。一部、土石流で水田が壊されていた部分もある。水田が洪水堆積層で覆われていたことから、畦や水口の遺存状況も非常に良好であった。水田耕作土には古墳時代中期から後期の土器が少量出土したこともあり、古墳時代後期以降の水田と推定した。遺構の残存状況が良好であることなどから、地元から保存要望があがったため、水田を検出した段階で調査を一度中断した。その後、地元との協議を重ねたところ、恒久的な保存要望でないことが確認されたため、調査を継続することとなった。しかし、冬季にさしかかっていたため、検出された遺構をシートと山砂で養生し、次年度以降に続きを調査することとなった。

調査は、2013 年度から再開した。2013 年度調査では、遺跡が 3 面重複することが明らかとなった。VI b 層は 2009 年度に検出した水田であるが、放射性炭素年代測定の結果、古墳時代の水田ではなく、古代の水田である可能性が極めて高くなかった。その下位には VI c 層と VII 層の 2 面の遺跡が存在した。VI c 層は、土石流によって大半が失われていたが、山側に居住域の一部と思われる古墳時代中期のピットを検

### 3 調査の概要

出した。VII層からは畦の高さが数cmしかない極小区画水田を検出した。出土した土器の年代観、年代測定の結果から前期の水田と考えられた。わずかな痕跡の水田は、土石流堆積物に覆われていたため、その堆積物を丁寧に撤去することで検出できた。また、古墳時代に3度の地震災害が発生していることが明らかとなった。六日町盆地西縁断層帯の活動履歴を示すものと推定され、地域の災害史を知る上で重要な情報となつた。

D2区 E区で、中世の集落、古代の水田、古墳時代の集落が見つかったことから、当区においても当該期の遺構が検出されることを想定した。IV b層（中世の遺物包含層）は堆積しておらず、中世の遺構もなかつた。V c層（古代の水田耕作土）は堆積していたが、畦は確認できなかつた。VI a層・VI b層（古墳時代中期の包含層）は北東側に堆積し、その直下のVII層上面で遺構を検出した。地山土と遺構の覆土は比較的明瞭なため、遺構の検出作業は容易であった。多量の土器が出土したこと、集石遺構を検出したことから、一般的な集落とは言い難く、祭祀に関連する遺跡と推定した。また、石製模造品等の微細遺物についても、配慮し、調査を進めた。結果的に石製模造品はなかつたが、VI b層から勾玉1点が出土した。北西側は土石流により遺物包含層および遺構は壊されていた。この土石流がD1区との基本層序の整合をより難しくする原因となつた（第9図）。

E区 E区は、場所によって遺構の様相が異なる。10・11 Zグリッドでは、IV a層（中世の遺物包含層）が堆積していた。この層からは鉄滓や羽口などの鍛治関連遺物が多数出土した。この場所は、調査区が細長いこともあり、遺構の検出できる範囲が限られていた。そのため、IV a層の直下では鍛治に関連する遺構はなかつた。鍛治関連遺物の出土範囲を鑑みると、その周辺には鍛治に関連する遺構があつた可能性が高いと考えられる。

X・Yラインでは、IV a層・IV b層（中世の遺物包含層）が堆積していたが、この範囲のIV a層には、鍛治関連遺物がほとんど含まれていなかつた。IV b層直下のV層上面で、中世の遺構を多数検出した。主な遺構は柱穴で、複数時期にわたって掘立柱建物が建てられていたことがうかがえる。遺構の配置から、集落は北東側に向かって広がっていることが想定される。しかし、その部分は土石流によって壊されていいた。なお、13・14 Yグリッドラインには20cm程の段差が認められるが、この段差は表土掘削時に誤つて掘削したことで生じたものであり、当時の地形を反映したものではない。

V・WラインではIV b層が堆積しておらず、中世の遺構もなかつた。この場所では、V c層（水田耕作土）が堆積し、畦の高まりを検出したことから水田として調査した。V c層から古代の土師器が出土したことから、古代の水田と想定した。畦は調査区外へと延びていることから、この周囲にも古代の水田が広がっていたと考えられる。さらに、その一部は中世集落が検出された北東側にも延びていた。しかし、中世集落の下位では水田耕作土の堆積は認められなかつた。中世集落の標高は、古代の水田面より低いこともあり、中世の集落を形成する際に古代の水田が壊された可能性が考えられる。

古代の水田の20cm下からは、古墳時代中期の土器を多量に含む遺物包含層（VI a層・VI b層）を確認した。遺物包含層を掘削し、その直下で溝・土坑・ピットを検出した。明確な建物は認められなかつた。注目すべきは、流路から多量の土器が出土したことである。その出土状況は、祭祀をうかがわせるものであり、遺物出土状況の図化や取り上げには細心の注意を払つた。また流路の周辺からも土器が出土しており、掘り込みは認められないが遺構検出面で土器群が出土した場合は、その範囲を遺構（SX）と認識し、微細図を作成して遺物を取り上げた。さらに、石製模造品の出土は祭祀を立証する観点からも、遺物包含層や遺構覆土を丁寧に掘削したが、砥石以外の石製品は出土しなかつた。VI b層の調査終了間近に、下層

の状況を確認するための幅広のトレンチ調査を行った。その結果、13Y10 グリッドのⅣ層上面で古墳時代中期の高杯 7 点、小型壺 5 点がまとまって出土した (SX3654)。この範囲については、期間の許す限り幅を広げ、遺物や遺構の確認調査を行ったが、SX3654 以外は見つからなかった。

F 区 E 区北西部で、鍛冶関連遺物が多数出土したことから、F 区にもその出土範囲が広がることを想定した。調査区の幅が狭いことから、トレンチ調査を行い、遺物や遺構の有無を確認した。その結果、遺物包含層の堆積は認められず、また遺物や遺構もなかった (図版 152)。南東部には、土石流が認められた。

G 区 表土掘削後、Ⅱ層・Ⅲ層で近世の陶磁器が出土した。当該期の遺構の検出も想定したが、遺構はなかった。IV b 層 (中世の遺物包含層) 掘削後、V 層上面で遺構を検出した。遺構確認面の標高は、北西から南西に向かって低くなる。また、南西側のほうが遺構の密度が高いと言える。遺構は柱穴、石組井戸、土坑、溝、その他に鍛冶関連遺構をうかがわせる炉や石敷も検出した。

H 区 G 区同様に、表土掘削後、Ⅱ層・Ⅲ層から近世陶磁器が出土したが、当該期の遺構はなかった。IV b 層 (中世の遺物包含層) 掘削後、V 層上面で遺構を検出した。IV b 層には、古代の遺物が定量含まれていた。中世の集落以前に、古代の集落が存在していたことがうかがえる。しかし、調査では古代と断定できる遺構はなかった。遺構確認面は北西から北東に向かって緩やかに低くなる。特に、12 AD グリッドでは土石流によって中世の遺構が壊され、大きな段差が生じている。それより北東側には遺物包含層も認められず、遺構もなかった。

## 4 調査の基本方針

### A 遺構名の付し方

遺構名は、遺構種別の略語と通し番号を組み合わせて表記した。遺構番号の略語は、柱穴・ピット = P、掘立柱建物 = S B、井戸 = S E、土坑 = S K、溝 = S D、炉・焼土 = S F、性格不明遺構 = S Xとした。通し番号は、遺構種別・検出層位に関わりなく通して付した。調査後に欠番が生じた場合でも、その後の混乱を避けるため、番号の付け直しは行っていない。したがって、遺構番号の数が遺構の数を示しているわけではない。なお、S B に限り、改めて 1 から付け直している。

### B 遺構の記載方法

遺構の説明には、本文・観察表・図面図版・写真図版を用いる。

本文は遺構の種別ごとに提示することとする。ここでは、全ての遺構の個別記載は行わず、観察表のみでは示しきれない遺構に限り、個別記載を行うこととする。

観察表は遺構種別ごとに提示した。遺構の内容を等質的かつ的確に示すべく工夫した。平面形態及び断面形の分類は [加藤 1999] (第 10 図)、覆土の埋没状況の分類は [荒川 2004] (第 11 図) にしたがった。遺構の重複関係については、不等記号を用いて「新>旧」のように示した。また、観察表には検索という側面からの情報も付加することとし、各種観察項目のほかに、報告遺物番号を加える。

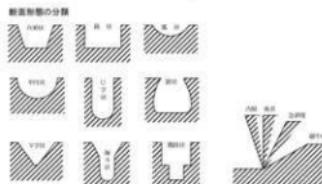
図面図版は、1 / 800・1 / 300・1 / 200 の全体図、1 / 100・1 / 60 の分割図、1 / 40 のセクション図・エレベーション図を基本とした (掘立柱建物など、状況に応じて 1 / 60 を採用したものもある)。図版中に添付してあるスケールを確認されたい。遺構の個別平面図は、分割平面図をもって提示することとしたため、分割図とセクション図とを対照する構成となっている。ただし、分割平面図で示すことは難しい図

## 5 上層（古代・中世）の遺構

円形	長径が短径の1.2倍未満のもの。
横円形	長径が短径の1.2倍以上のもの。
方形	長軸が短軸の1.2倍未満のもの。
長方形	長軸が短軸の1.2倍以上のもの。
不整形	凸凹で一定の平面形を持たないものの。



台形状	底面に平坦面を持ち、縦やかへ急斜度に立ち上がるものの、
踏状	底面に平坦面を持ち、ほぼ垂直に立ち上がるものの、
弧状	底面に平坦面を持たない弧状で、縦やかに立ち上がるものの、
半円状	底面に平坦面を持たない半圓状で、急斜度に立ち上がるものの、
襖状	襖詰めの柱より最も深さの筋が大きく、ほぼ垂直に立ち上がるものの、
袋状	確認できる筋よりも深さの筋が大きく、内側した後に直角ないし外傾して立ち上がるものの、
V字状	点的な底部を持ち、急斜度に立ち上がるものの、
輪斗状	下部がV字状、上部がV字状の二段構造からなるものの、
階段状	階段状の立ち上がりを持つものの、



第10回 遺構の平面・断面形状の分類 ([加藤 1999] から転載・一部改変)

レンズ状	複数層がレンズ形に堆積する。
水平	複数層が水平に堆積する。
ブロック状	ブロック状に堆積する。
單層	覆土が單一層のもの。
柱頭	柱頭と思われる上層が堆積するもの。
斜位	斜位に堆積するもの。
水平レンズ	覆土下位は水平に、上位はレンズ状に堆積するもの。



第11回 覆土の堆積形状の分類 ([荒川 2004] から転載・一部改変)

面については、1／20の個別平面図・セクション図を示した。

写真図版は、特に重要な遺構、遺存状況の良好な遺構、特徴をよく捉えられるカットを選択して掲載したため、すべての遺構を網羅していない。また、図面図版に反映できなかった情報を補完する観点からも選択した。

## 5 上層（古代・中世）の遺構

### A 概 要

上層の遺構は、中世と古代に大別できる。

中世の遺構は、IV-a層・IV-b層の直下で検出したもので、掘立柱建物、柱穴・ビット、炉、井戸、土坑、溝、鍛冶関連遺構、性格不明遺構がある。各地区における遺構数は、第2表で示した。遺構の検出状況については、地山が黄褐色を基調とするのに対し、覆土が黒褐色土を基調とすることから容易に確認することができた。しかし、重複する遺構が非常に多く、これらの新旧を把握することに時間を要した。また、遺構検出面が礫層の場所もあり、遺構精査が思うように進まなかったときもある。これらの遺構の時期は、出土遺物の年代から13世紀から16世紀前半のものと考えられる。

古代の遺構は、V-c層を水田耕作土とする水田である。水田はE区の南西部のみで検出した。水田の時期は、V-c層からは古代の土器（133）が出土したことから、9世紀後半から10世紀代と考えられる。

遺構の各説は、E区、G区、H区の順に記載する。個別遺構の記載については、遺構の構造や覆土の堆積状況、遺物の出土状況を中心に報告する。報告にあたり、掘立柱建物の構造やその新旧関係、鉄滓や礫に関する基礎データについては、2009年度整理作業で作成したものに基づいています。各遺構の位置や規模については、観察表を参照されたい。記載にあたり、掘立柱建物については〔宮本2002〕、井戸については〔宇野1982〕を参考にした。出土した遺物については、瀬戸焼・美濃焼を「瀬戸美濃」、珠洲焼

調査年度	地区	掘立柱建物 (棟)	ビント (基)	鉢 (基)	舟型 (基)	土坑 (基)	溝 (条)	設治開造溝 (基)	性格不明溝 (基)	畦 (古代) (条)	備考
2009	E	13	485	1	0	18	9	0	7	12	遺構番号は3000～SB1～14, SB4欠番。
2009	F	0	0	0	0	0	0	0	0	0	遺構、未検出。
2009	G	8	140	0	1	30	5	3	2	0	遺構番号は4500～SB15～22, SB23～24欠番。
2009	H	8	270	0	0	22	5	0	10	0	遺構番号は4000～SB25～32。
合計		29	895	1	1	70	19	3	19	12	

第2表 各地区における中世・古代の遺構数

を「珠洲」と表記する。

## B E 区

### 1) 掘立柱建物

掘立柱建物は13棟検出した。掘立柱建物の柱間及び主軸方向は第12図に示した。

#### 掘立柱建物の構造

掘立柱建物は、すべて側柱建物である。側柱建物は、多柱梁間型が3棟(SB2・SB3・SB8)と梁間2間型(または壁芯棟持柱式)9棟(SB1・SB5～7・SB9～13)に分けられる。SB14は検出が一部分であることから、全形は不明である。多柱梁間型から見ていくと、SB2は梁間3間で両平側に扉を持ち、桁行は少なくとも4間が認められる。SB3は梁間3間で、桁行は少なくとも3間認められる。この建物は、南の平側と東の妻側に扉が付く構造である。北の平側は、土石流で壊されていることから、扉の有無を確認することはできなかった。SB8は4間×4間の掘立柱建物である。

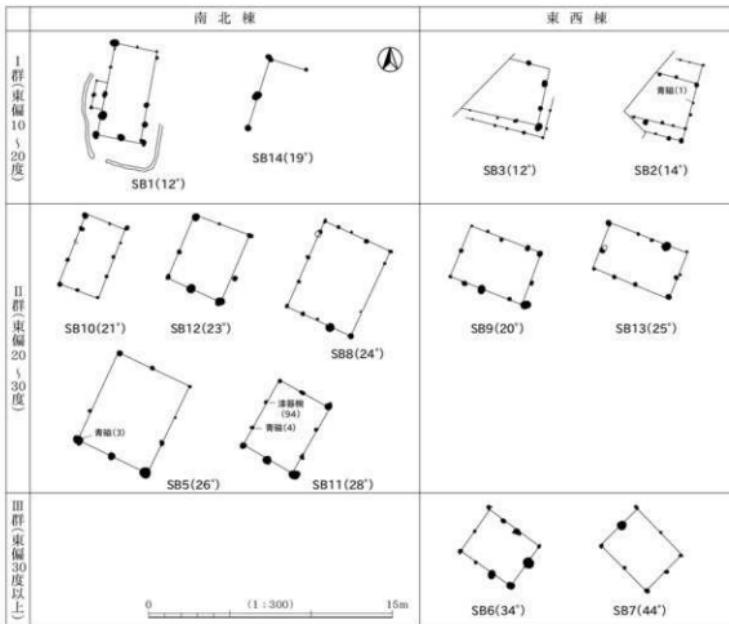
次に、梁間2間型を見ていくが、この構造の建物は壁芯棟持柱式と類似することから、その識別が難しい場合が多い。ここでは、梁間2間型として報告する。桁行2間が2棟(SB7・SB12)、桁行3間が3棟(SB5・SB6・SB11)、桁行4間が3棟(SB1・SB9・SB10・SB13)である。SB1は北の妻側に扉が付く。西の平側には、2間×1間(1.7×0.7m)の張り出し部が付属する。この部分の柱穴(P3251・P3248・3466)は、建物本体の柱穴よりも規模がひと回り小さく、柱の深さも20cm前後と浅い。また、建物周囲には幅が15～20cm、深さ5cmほどの溝(SD3209・SD3362)が巡る。南の平側に位置するSD3209は、張り出し部のところでも膨らむことから、建物の構造を意識して掘られたことが想定される。これらの溝は、雨落ち溝の可能性が高い。

#### 掘立柱建物の規模

規模(床面積)を計測できる建物は10棟ある。小型に属する11.7～12.8m<sup>2</sup>の建物が3棟(SB6・SB7・SB10)、中型に属する15.0～16.6m<sup>2</sup>の建物が5棟(SB1・SB9・SB11～13)、大型に属する24.9m<sup>2</sup>(SB8)・29.4m<sup>2</sup>(SB5)に分けられる。

#### 掘立柱建物の主軸方向と時期

建物の主軸方向は、建物群やその時期を考える上で不可欠な要素である。しかし、建物群が必ずしも整然と規格性を持つものばかりではない。E区の建物群の特徴は、南北棟・東西棟とともに主軸が東へ傾く傾向がある(第12図)。その傾き角度によっておおむね3群(I群～III群)に分けることができる。次に、この群の時期を考えるために、柱穴の重複関係について見ていく。この重複関係を整理したものが、第13図である。SB1(I群)がSB6(III群)より古く、SB6がSB11・12(II群)より古いことがわかる。



第12図 E区の掘立柱建物と主軸方向

る。また、SB 2（I群）がSB 8（II群）より古いことも言える。このような関係から、I群がII群よりも古い傾向にあることが想定される。II群に属する建物同士の重複関係も認められることから、さらにII群を時期別にわけることが可能となる。時期が特定できる遺物が少ないが、SB11のP3462から15世紀代の青磁碗（4）、P3087から14世紀中頃から後半の漆器碗（94）が出土

した。よって、II群の上限が15世紀代と言えよう。しかしながら、II群のSB 5（P3262）から13世紀後半から14世紀前半頃の青磁碗（3）も出土しており、時期を明確に提示することは難しい。なお、漆器碗（94）については、P3087の底面から出土したことから、柱を抜いた後に漆器碗を置いた可能性が考えられる（図版12・147）。

#### そのほかの柱穴・ピット

柱根が遺存した柱穴のうち、P3054（図版16）・P3081（図版17）・P3259（図版17）・P3287（図版15）・P3303（図版18）・P3316（図版18・150）・P3321（図版18・150）・P3343（図版18）・P3479（図版17・151）・P3498（図版5）・P3510（図版9）から出土した柱根（95・96・100・103・105・106・108・112・114～116）を図化した。また、P3191・P3192（図版13）からは杭（118～120）が出土した。

SB1(P3248)	< SB6(P3249)	< SB11(P3462)
	SB6(P3391)	< SB12(P3263)
SB1(P3080)		< SB12(P3065)
	SB9(P3440)	< SB5(P3439)
SB10(P3273)	< SB9(P3274)	
SB7(P3261)	< SB9(P3265)	
SB2(P3396)	< SB8(P3468)	

第13図 E区の掘立柱建物の重複関係

P3046（図版 13・146）柱根の下から大型の礎が出土した。この柱穴は、大型の礎よりもひと回り大きい規模の掘形が掘られている。大型の礎は、礎石と考えられる。

P3195（図版 13・17・148）P3195 には、礎が充填されていた。遺構検出面まで礎が充填していることから、柱穴に伴う根石ではなく、柱を抜いた後に、礎を廃棄したことが想定される。

P3450（図版 9・10・151）P3450 の底面近くから、平坦な面がある大型の礎が 1 点出土した。出土位置から、礎石の可能性が考えられる。

## 2) 炉 (S F)

SF3446（図版 9・12・145）SF は 1 基検出した。SF3446 は 12X20・25、12Y16・21 グリッドに位置する。SK3500 が埋没した後に、SF3446 が形成された。平面形は梢円形を呈し、規模は長径 39cm、短径 26cm である。断面形は弧状を呈し、深さは 10cm 程度と浅い。検出時に遺構の外縁が赤化していたことから、SF と判断した。底面は被熱により硬化し、その部分は赤橙色を呈する。覆土はレンズ状に堆積し、2 層に分層した。底面直上には暗赤灰色の焼土（覆土 2 層）が、その上位には焼土ブロックが混入する暗赤灰色土（覆土 1 層）が堆積する。遺物は出土しなかった。周囲には柱穴が多数見つかっていることから、SF3446 が獨立柱建物に伴うものと考えられる。

## 3) 土 坑

土坑は 18 基検出した。そのうち 1 基は規模が小さく、柱筋に並ぶことから柱穴とした。

SK3020（図版 13・18・141）E 区の土坑のなかで、最も規模が大きなものである。平面形は梢円形を呈し、規模は長径 333cm、短径 227cm である。断面形は弧状を呈し、深さは 47cm である。覆土は 4 層に分層した。覆土には地山ブロックの混入が認められることから、人為的に埋め戻された可能性が高いと考えられる。底面からは、板状木製品（123・124）・曲物側板（125）のほかに、礎 30 点が出土した。これらの遺物は、底面の北東側にまとまっていた（図版 141）。

SK3050（図版 5・7・142）平面形が長方形を呈し、規模は長径 231cm、短径 175cm である。検出した土坑のなかでは、比較的大型の類である。断面形は弧状を呈し、深さは 29cm である。覆土は 4 層に分層した。覆土 2 層の黄灰色シルトで、土坑の大半が埋め戻されている。地山ブロックを多量に含むことから、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。遺物は出土しなかった。

SK3329（図版 5・8・143）平面形が円形を呈し、規模は長径 119cm、短径 114cm である。断面形は弧状を呈し、深さは 21cm である。覆土はレンズ状に堆積し、4 層に分層した。レンズ状に堆積することから、自然埋没した可能性が考えられる。遺物の出土はなかった。

## 4) 溝

溝は 9 条検出したが、断片的に検出されたものが多い。SD3209・SD3362 は SB1 に伴う雨落ち溝と考えられる。SD3010 は、基本層序 II 層上面から掘り込まれた溝である。この溝は中世の廃滓場より新しく、時期は近世以降と考えられる。

SD3257（図版 13・17・144・145）SD3257 は南北方向に延びる溝で、検出長は 8.34m である。南から北へ向かって、幅が少しづつ狭くなる。幅の広い部分は 136cm、狭い部分は 60cm である。断面形は弧状を呈し、深さは 22cm である。底面標高は南へ向かってわずかに低くなる。14 X 3 グリッドでは杭

## 5 上層の遺構

3540(121)を検出した。この杭は溝の縁に打たれていたことから、SD3257と関係すると考えられる。土器は出土しなかつたが、13X25グリッドで礫がまとまって出土した(図版145)。SD3257より東側では柱穴・ビットが多数検出されるが、溝と柱穴群の間3mほどの範囲からは、遺構は検出されていない。この溝は、区画の溝として機能していた可能性が考えられる。

### 5) 性格不明 遺構

性格不明遺構は7基検出した。いずれの遺構も浅いことから、自然の落ち込みの可能性が考えられる。

SX3003(図版5) 遺構底面から板状木製品(128)が出土した。

SX3100(図版5・8) 平面形が不整形を呈し、規模は長径194cm、短径163cmである。断面形が弧状を呈し、深さが10cmと非常に浅い。覆土は単層で、地山ブロックが主体の黄灰色土である。遺物は出土しなかつた。

SX3490(図版13) 覆土2層から棒状木製品(129)が出土した。

### 6) 廃 淚 場(図版19・152)

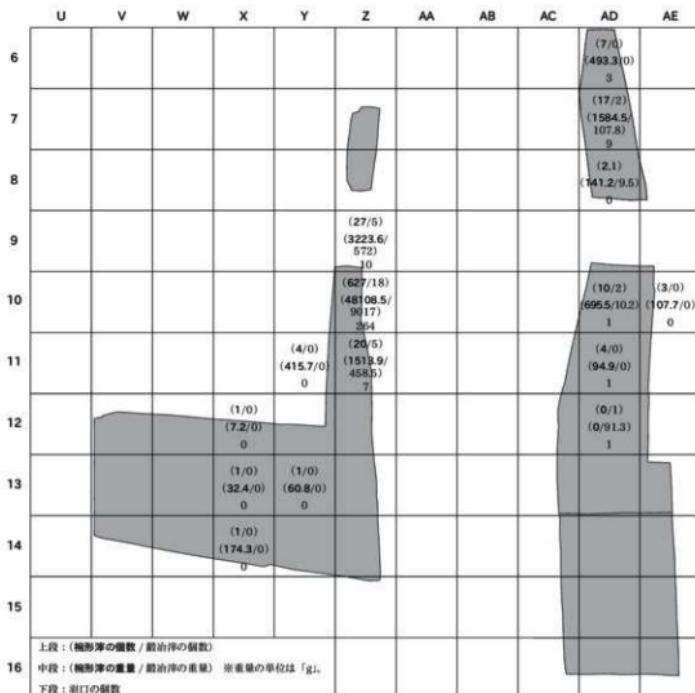
E区の北西部では、広範囲に鉄滓や羽口などの鍛治関連遺物が出土した(第14図)。この範囲(10・11Zグリッド)を廃滓場として調査を行った。当遺跡ではこの廃滓場のみならず、G区やH区からも鍛治関連遺物が出土しているが、その量は非常に少ない。廃滓場では鍛治に関連する遺構は検出されなかつたが、わずかに地山が窪地状になる部分があつた。その範囲をSX3011と付した。SX3011は調査区外へと延びていることから、全形は不明である。一部がSD3010と重複し、SD3010の方が新しい。断面を観察すると、IVa層直下にはIVb層が堆積する。この堆積状況から、廃滓場を形成するために掘られた遺構ではなく、窪地にIVa層が堆積したものと考えられる。鍛治関連遺物の出土範囲から、調査区外に鍛治関連遺構は隣接することが想定される。廃滓場からは鍛治関連遺物のほかに、青磁(31)が出土した。31は15世紀代に比定されることから、廃滓場は15世紀以降に形成されたと考えられる。

### 7) 水 田(図版20・21・153)

E区の南東部で、水田を検出した。この水田は、Vc層を水田耕作土とする。その直上にはVb層(自然堆積層)が被覆していたが、畦の遺存状況は良好ではなかつた。Vc層直下は耕作の影響により、上下に乱れている。畦の高まりは1~9cm程度と低く、検出できなかつた範囲もある。水田面の標高は176.4~176.7mであり、北から南に向かって緩やかに低くなる。隣接する中世集落の中心部の標高は約176.8mであり、集落部のほうが10cm程度高い。中世集落を調査した後に、水田の有無を確認するためにトレンチ掘削を行つたが、Vc層を確認することはできなかつた。

畦は12条検出した。直線的に延びるものが大半だが、緩やかな曲線を描く畦(畦3017・3024、畦3027・3028)もある。畦3017には水口が認められた。なお、畦3018と重複するSX3019は、V層上面から掘り込まれる新しい遺構であり、水田とは直接関係しない遺構である。水田区画は9面検出したが、四方が畦で囲まれているものはなかつた。水田耕作土にはほとんど遺物を含まないが、畦3015からは古代の土器師(133)が出土した。底部外面には回転糸切り痕が認められる無調整無台挽であり、9世紀後半以降の所産と考えられる。

Vc層については、プラントオパール分析を行つた。その結果、Vc層に含まれるイネ科のプラント



第14図 IV a層・IV b層の鉄滓・羽口出土分布図

オパールの密度は700個/gと低い値であった（第Ⅳ章1Aを参照）。直上のVb層には、イネ科のプラントオパールが未検出であることから、後代のものが混入した可能性は低い。Vc層のイネ科プラントオパールの密度が低い原因として、水田稲作が行なわれた期間が短かったことが考えられる。

隣接するD2区では、Vc層が堆積するものの、珪を確認することはできなかった。Vc層上面の標高を測ると、176.6～176.9mであり、水田と同様に北から南に向かって低くなる地形であった。

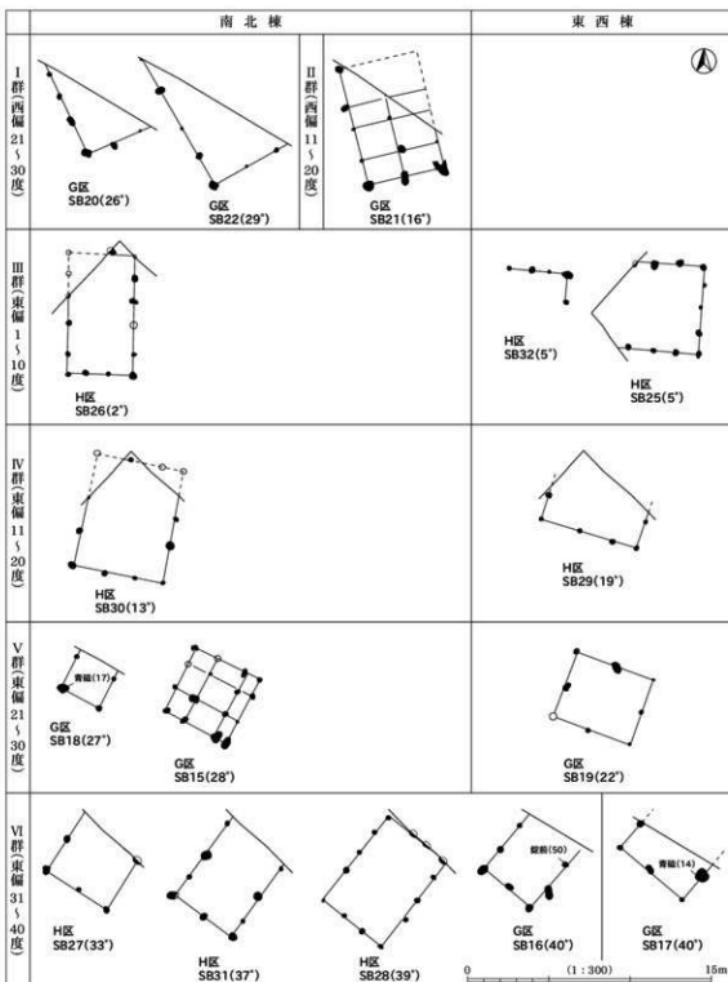
## C G 区

### 1) 掘立柱建物

掘立柱建物は8棟検出した。掘立柱建物の柱間及び主軸方向は第15図に示した。G区は、H区と近接することから、両地区は同一の集落である可能性が高いと判断し、第15図ではH区の建物も配置した。

#### 掘立柱建物の構造

総柱建物2棟(SB15・SB21)と側柱建物6棟(SB16～20・SB22)に分けられる。総柱建物から見ていくと、SB15は3間×2間の総柱建物で、東の平側に廟が付く。SB21は一部が調査区外へ延びているため全形は不明であるが、4間×2間の総柱建物の可能性が高いと考えられる。側柱建物は、梁間2間型（ま



第15図 G・H区の掘立柱建物と主軸方向

G区	SB19(SK4074) < SB15(SK4076)	H区	SB27(P4524) < SB28(P4525)
	SB21(SK4015a) < SB15(SK4015c)		< SB26(P4561) < SB28(P4560)
	SB16(P4078) < SB15(SK4076b)		SB30(P4695a) < SB26(P4695b)
SB22(P4039) < SB16(P4038)		SB25(P4687a) < SB30(P4688b)	
		SB31(P4519a) < SB25(P4687a)	
		SB31(P4648b) < SB25(P4520)	

第16図 G・H区の掘立柱建物の重複関係

たは壁芯棟持柱式) 5棟 (SB16・SB17・SB19・SB20・SB22) と梁間1間型1棟 (SB18) に分けられる。梁間2間型建物のうちSB19以外は、調査区外に延びていることから全形が不明である。SB20とSB22については、梁間が延びる可能性もある。SB19は桁行2間、SB16は桁行2間以上の建物である。梁間1間型としたSB18は、桁行が調査区外へと延びていることから桁行1間しか確認ができなかつた。

#### 掘立柱建物の規模

規模(床面積)を測れる建物はSB15とSB19のみで、それぞれ18.1m<sup>2</sup>、21.9m<sup>2</sup>である。E区で示した中型(15.0~16.6m<sup>2</sup>)と大型(24.9~29.4m<sup>2</sup>)の中間的な大きさと言える。また、建物構造は不明な部分もあるが、SB21が35.3m<sup>2</sup>、SB22が43.7m<sup>2</sup>のように30m<sup>2</sup>を超えるものと見られる。

#### 掘立柱建物の時期と主軸方向

主軸方向はH区の建物も含め、6群に大別した。G区では東へ傾く建物のみならず、西へ傾く建物も存在する。6群に分けた建物群のなかには、重複関係が認められるものもあり、その関係を整理したものが、第16図である。SB22(I群)は、SB16(VI群)より古く、またSB16はSB15(V群)より古いことがわかる。さらに、SB15はSB21(II群)より新しい。柱穴の重複関係からは、I群に属する建物は時期が古い傾向がうかがえる。柱穴の遺物をみると、I群のSB20(P4101)・V群のSB18(SK4150)からは15世紀代の青磁(6・17)が出土している。時期が古ないと想定されるI群で15世紀代の遺物が出土し、また新しいみられるV群からも同時期の遺物が出土していることを鑑みれば、G区で検出した建物群は15世紀代に何度も建て替えが行われた可能性が考えられる。

#### そのほかの柱穴・ピット

P4081(岡版23) 覆土1層から板状鉄製品(48)・釘(49)が出土した。

P4124(岡版27・28) SB16を構成する柱穴のひとつである。覆土2層から、鏡前(50)が出土した。

P4139(岡版30) 覆土1層から、白磁(7)が出土した。

P4153(岡版27・29) 遺構検出時に、覆土上面で石鉢(93)が出土した。約1/4ほどが残存していた。この石鉢は、SE4113の遺構構築材として転用された石鉢と接合した。

## 2) 井 戸

SE4113(岡版23・26・154) SE4113は石組井戸である。SD4112・SD4114・SD4160と重複する。平面形は不整形を呈し、堀形の規模は長径232cm、短径171cmである。石組部分の外径は120cm、内径は65cmである。断面形がU字状を呈し、深さ160cmである。また、水溜からは一辺が60cmほどの横桟を検出した。横桟の遺存状況が不良のため、仕口の構造を理解することはできなかつた。横桟については、5点中、3点(130~132)を図示した(岡版26)。横桟を設置後に、石組が行われた。石組には、石鉢(93)の破片も使われていた。この井戸の型式は、北陸中世考古学研究会分類【北陸中世考古学研究会2001】のC1I(b)類(井戸側有り、石側、縄組、円形筒形、縄+横桟)に該当する。

覆土は9層に分層した。覆土8層・9層は掘形土である。下位の覆土5~7層は、水平に堆積することから、井戸が使用されなくなった後に自然堆積したものと考えられる。井戸の大半が覆土4層で埋め戻されており、その覆土には礫が多量に含まれていた。この礫群は、意図的に廃棄されたものなのか、土石流によって流れ込んだものなのかを断定することはできなかつた。覆土1~3層は、覆土堆積後の窪んだ部分に自然堆積したものであろう。覆土5層からは珠洲の片口鉢(10)、瀬戸美濃の袴腰形香炉(12)が出土した。10は吉岡VI期(15世紀後半)、12は1420~1440年頃に比定される。新潟県における石組井

## 5 上層の遺構

戸の出現は、14世紀前半まで遡るが、定着するのは15世紀代と考えられている〔水澤2009〕。底面近くから15世紀前半と15世紀後半の遺物が出土したことから、この井戸の時期は15世紀後半以降に位置づけられる。

### 3) 土 坑

土坑は30基検出した。このうち10基については、掘立柱建物の柱筋に並ぶことから柱穴とした。

SK4073(図版23・24・155) SK4074(SB19)と重複し、SK4074よりも新しい遺構である。平面形が円形を呈し、規模は直径53cmである。断面形はU字状を呈し、深さは35cmである。覆土は2層に分層した。覆土1層からは白磁の小皿(15)・青磁の鏡蓮弁紋椀(16)が出土した。15は12世紀後半、16は13世紀後半から14世紀前半に位置づけられる。

SK4097(図版27・29・156) 平面形が円形を呈し、規模は長径58cm、短径が50cmである。断面形はU字状を呈し、深さは51cmである。規模や深さから、柱穴・ビットの可能性も考えられる。覆土は単層で、礫が少量含まれる。楕円形溝(69~72)が出土した。

SK4100(図版30・31・156) 遺構の一部が調査区外へ延びているため、全形は不明である。SX4107と重複し、SK4100のほうが新しい。規模は比較的大きく、検出値で長径140cm、短径130cmである。深さは50cmと、しっかりと掘り込まれた土坑である。覆土は3層に分層した。遺物は出土しなかった。

### 4) 溝

溝は5条検出した。調査区の幅が狭いため、断片的に検出したものがほとんどである。

SD4114(図版23・26・157) 調査区東際で検出した溝である。溝は調査区外へと延びており、検出長は3.9mである。幅は79cmで、東側が一段深くなる。東側の深さは39cmである。西側のテラス部分の深さは12cmほどである。SE4113と重複する。SE4113へ向かって、溝の底面標高がわずかに低くなる。この溝に雨水が流れ、SE4113に溜まるようになっていたことも考えられる。

### 5) 鎔治関連遺構

SF4136とSX4091aを鎔治関連遺構として調査した。

SF4136(図版30・32・158) 7AD8・9グリッドに位置する。SK4092・P4146(SB22)と重複し、SF4136のほうが新しい。被熱した範囲は円形を呈し、その規模は直径45cmほどである。中央部はわずかに窪み、その部分に覆土が堆積する。覆土は2層に分層した。覆土1層は焼土粒子が混入する黒褐色シルトで、覆土2層は炭化物が微量に混入するにぶい赤褐色シルトである。遺物は出土しなかった。

SX4091a(図版30・32・158) 7AD13・14グリッドに位置する。北西側にはSF4136が隣接する。SD4083・P4143・P4168・P4173(SB19)・P4174・P4175(SB22)と重複し、SX4091aのほうが新しい遺構である。不整形な範囲とそれに伴うとみられる石組を検出したことから、SX4091aと付して調査した。規模は長径190cm、短径140cmである。底面には凹凸が認められ、最も深い部分は深さ16cm程度である。覆土は3層に分層した。覆土2層から青磁の盤(23)が出土した。石組は28点の礫からなる。その内2点には被熱した痕跡が認められた。

## 6) 性格不明遺構

性格不明遺構は2基検出した。SX4060は自然地形の落ち込み部分である。

**SX4107**（図版30・31・157） 遺構の南西部が調査区外へと延びており、全形は不明である。規模は検出値で、長径265cm、短径120cmである。断面は台形状を呈し、深さは28cmである。覆土は単層で、直径10～15cmの礫が混入する。遺物は出土しなかった。SX4107より西側には遺構が検出されなかつた。区画溝の一部である可能性も否定できない。

## D H 区

### 1) 挖立柱建物

掘立柱建物を8棟検出した。掘立柱建物の柱間及び主軸方向は第15図に示した

#### 掘立柱建物の構造

全て側柱建物である。梁間3間の建物には、桁行3間(SB30)、桁行4間(SB28)、桁行5間(SB26)がある。梁間2間型建物には、桁行3間以上(SB31)のものがある。SB27も梁間2間型とみられるが、梁間中間の柱(P4585)がやや内側に位置することから、この柱は棟持柱の可能性があり、壁芯棟持柱式と考えられる。

#### 掘立柱建物の規模

規模(床面積)を測れる建物は、SB28のみで規模は30.4m<sup>2</sup>である。当遺跡では30m<sup>2</sup>を超える建物は大型に属する。構造は不明な部分もあるが、SB26は30.3m<sup>2</sup>、SB30は39.3m<sup>2</sup>と想定される。H区は比較的大型の建物が存在する傾向がうかがえる。

#### 掘立柱建物の時期と主軸方向

主軸方向はⅢ群(東偏1°～10°)・Ⅳ群(東偏11°～20°)・Ⅵ群(東偏31°～40°)に大別できる。各建物の柱穴における重複関係は第16図で示した。SB31(Ⅵ群)→SB25(Ⅲ群)→SB30(Ⅳ群)→SB26(Ⅲ群)→SB28(Ⅵ群)のように、複雑な重複関係が認められる。H区の状況からは、建物群と時期差の関係を見出すことは難しい。

#### そのほかの柱穴・ピット

P4516a(図版38・39) 珠洲(8)が出土した。

P4776(図版44・45) 柱痕の下位に、柱根(117)がわずかに残存していた。

## 2) 土 坑

土坑は22基検出した。このうち3基については、掘立柱建物の柱筋に並ぶことから柱穴とした。

**SK4576**(図版35・37・159) 遺構検出時に、礫がまとめて出土した土坑である。礫群の周囲には不整形の範囲を検出した。規模は長径94cm、短径63cmである。礫を一部取り上げた後に、断ち割り調査を行った。断面を観察したところ、落ち込みを確認した。断面形は漏斗状に近く、中央部が最も深くなる構造である。最も深い部分で、深さは25cmである。覆土は3層に分層した。いずれの覆土に地山ブロックが混入することから、人為的な埋戻し土の可能性が考えられる。遺物は出土しなかった。土坑が埋め戻された後に、礫が廃棄されたものと想定される。

**SK4646**(図版41・42・160) 平面形は不整形を呈し、規模は長径120cm、短径94cmである。断面形

は弧状を呈し、深さは23cmである。覆土はレンズ状に堆積し、2層に分層した。覆土2層には地山ブロックが多量に含まれ、礫も混入する。覆土1層には黄灰色土ブロックや炭化物がわずかに含まれる。遺構底面はわずかに凹凸が認められる。覆土2層から楕円形溝(78)が出土した。

**SK4671** (図版41・42・160) IV層上面から掘り込まれる遺構である。平面形はやや歪みのある楕円形を呈し、規模は長径251cm、短径124cmである。断面形は縦断面が台形状、横断面が箱状を呈し、しっかりと掘り込まれた印象を持つ。遺構底面は平坦であり、深さは54cmである。覆土は水平に堆積し、4層に分層した。いずれも覆土に自然礫の混入が認められる。これらの礫は地山を形成する土石流に由来するものと見られる。覆土3層からは珠洲の片口鉢(18)、楕円形溝(75・77)が出土した。珠洲(18)は吉岡V期(14世紀末~15世紀前半)に位置付けられる。

### 3) 溝

溝は5条検出した。長さ2m以下の小溝(SD4570・SD4592・SD4636)と長さ6.8m以上の溝(SD4613・SD4641)に大別した。小溝の用途は、不明である。

**SD4613** (図版44・161) SD4613は西から東へ延びる溝である。検出した長さは6.8mである。溝の西側は調査区外へと延びており、また東側は土石流によって壊されていた。溝の幅は広いところで116cm、狭いところで107cmである。断面形は弧状を呈し、深さは11cmである。遺構底面はほぼ平坦で、覆土は単層である。遺物は出土しなかった。SD4613を境にして、遺構の検出状況は北側より南側のほうが希薄である。SD4613は区画溝の可能性が考えられる。

**SD4641**(図版44・161) SD4641は北北西から南南東に延びる溝である。検出した長さは8.8mである。溝の南東部分は土石流で壊されている。溝の幅は広いところで90cm、狭いところで52cmである。断面形は弧状を呈するが、底面に凹凸が認められる部分もある。深さは18cmである。遺構底面の標高は地形に沿うように、北北西から南南東に向かって緩やかに低くなる。覆土は2層に分層した。覆土1層には自然礫が混入する。遺物は出土しなかった。SD4641を境にして、南西側では柱穴・ビットが多数検出されたのに対して、北東側ではほとんど検出されなかった。SD4641は区画溝の機能を果たした可能性が考えられる。

### 4) 性格不明遺構

性格不明遺構は10基検出した。

**SX4603a~e** (図版41・43・162・163) SX4603は調査の過程において、5基の遺構が重複することが明らかとなったことから、末尾にアルファベットを付して、SX4603a・SX4603b・SX4603c・SX4603d・SX4603eとした。重複関係を整理すると、SX4603a→SX4603b・SX4603c・SX4603d→SX4603eとなる。SX4603aは不整形を呈する浅い遺構である。北西側は調査区外へと延びている。覆土は3層に分層した。覆土2層からは白磁(24)・青磁(25)・珠洲(26)が出土した。SX4603bは西側に位置する浅い土坑を指す。覆土には焼土や炭化物が含まれていた。SX4603cの底面には礫がまとまって出土した。これらの礫群は北側にまとまりをもつ。SX4603dは、北東部に位置する浅いビットを指す。SX4603eは、SX4603bとSX4603cをつなぐような短い溝を指す。

## 6 下層（古墳時代）の遺構

### A D2区・E区の調査

#### 1) 概 要

D2区・E区の古墳時代の遺構が該当する。各地区で検出した遺構数は、第3表に示した。VIa層・VIb層は古墳時代中期の遺物包含層であり、遺構の大半はVII層上面で検出した。遺構には土坑や溝、ピットがあるが、建物はなかった。また、土器がまとまって出土した範囲もあり、この範囲を土器集中とし、SXを付して調査した。なお、2003年度調査では土器集中遺構をDOとした〔飯坂ほか2005〕。E区の遺構検出状況は、SD3650を境に東へ向かって希薄となる。E区東側は、西側よりも標高が低いことから、比較的標高の高いところで遺構が多く検出されたと言える。D2区の遺構検出状況は、東側よりも西側のほうが希薄となる。西側は土石流の影響により遺構が壊されていることから、本来はさらに南西側にも遺構が広がっていたと見られる。両区の状況から、遺跡の主体となる部分はより標高の高い北西部に広がると考えられる。注目すべき点は、E区の流路から一括性の高い土器群が出土したことである。詳細は各説で述べるが、このような資料は土器の編年や土器の使用実態を検討する上でも重要な資料と言える。

以下、E区、D2区の順で遺構の各説を記載する。遺構の個別記載については、特徴的なものについてのみ記載する。上層の遺構各説と同様に、遺構の位置や計測値等は遺構観察表を参照されたい。

調査年度	地区	獨立柱建物 (棟)	ピット (基)	井戸 (基)	土坑 (基)	溝 (条)	杭	土器集中遺構 (か所)	性質不明遺構 (基)	蛙 (条)	水田区画 (枚)	備考
2009・ 2013	D1 (VIb層)	0	0	0	0	2	0	0	0	26	25	遺構番号は2000～。
2013	D1 (VIc層)	0	4	0	0	2	0	0	0	0	0	遺構番号は2200～。
2013	D1 (VII層)	0	0	0	0	0	0	1	0	36	42	遺構番号は2500～。
2009	D2	0	54	0	1	15	6	4	3	0	0	遺構番号は2100～。
2009	E	0	17	0	4	6	0	20	3	0	0	遺構番号は3600～。
合計		0	75	0	5	25	6	25	6	62	67	

第3表 各地区における古墳時代の遺構数

#### 2) E 区

**土坑** 土坑は4基検出した。これらは、SD3603の北西側に位置する。いずれも深さが25cm以下と、平面規模の割に浅い遺構である。

**SK3605** (図版48・51) 遺構の北西側が調査区外へと延びている。平面形は不整形を呈し、規模は長径166cm、短径108cmである。断面形は弧状を呈し、深さは17cmである。覆土は単層で、上位から甕(149)と罐が出土した。SK3605が埋め戻された後に、土器や罐を廃棄したと考えられる。

**SK3608** (図版48・51・164) SK3608はSD3606・SD3614と重複し、いずれの溝よりも新しい。平面形は橢円形を呈し、規模は長径114cm、短径68cmである。深さは8cmほどで、非常に浅い。覆土は単層で、上位から土器が出土した。この土器の大半は細片であり、高杯(150・151)・壺(152)・甕(153)がある。なお、遺構の底面からはP3625を検出したが、SK3608との関係については不明である。

溝 溝は6条検出した。そのなかでSD3603・SD3650は他の溝とは異なり、規模が大きいことから流路と判断した。また、いずれの流路からも一括性の高い土器群が出土したことから、この場で祭祀が行われた可能性が高い。

**SD3603**（図版48・49・51・53～56・68・137・165・166） SD3603は長さ28m、幅1～4mの流路である。溝の幅は、北側よりも南側のほうが幅広になる。この溝は隣接するD2区へ延びているが、D2区では検出することはできなかった。深さは32～60cmほどで、断面形態は台形状に近い。SD3603は、SD3602・SD3650と重複する。SD3603とSD3602は重複関係から、SD3602のほうが新しい。また、SD3650とは重複関係から判断することはできなかったが、調査区北西壁の土層断面（図版68）を観察すると、SD3650が埋没した後にSD3603が掘り込まれている。よって、SD3603が新しいと言える。

覆土はレンズ状に堆積し、5層に分層した。覆土3～5層は洪水により堆積したと考えられ、この覆土により溝の3分の2ほどが埋没した。その後、溝の中央の窪んだ部分から土器の出土が認められ、その範囲は少なくとも3か所ある。これらの土器は覆土2層として取り上げた。覆土1層は、VIa層と色調や土質が類似することから、溝の落ち込み部分にVIa層が堆積したと考えられる。

次に、土器の出土状況について述べる。土器は概ね3か所からまとめて出土した（図版47）。南から北へ向かって、13V8・13グリッド周辺の土器集中①、13W3・4・8・9グリッド周辺の土器集中②、12W24・25、12X21・22グリッド周辺の土器集中③である。このなかで最も多くの土器が出土したのは、土器集中③である。

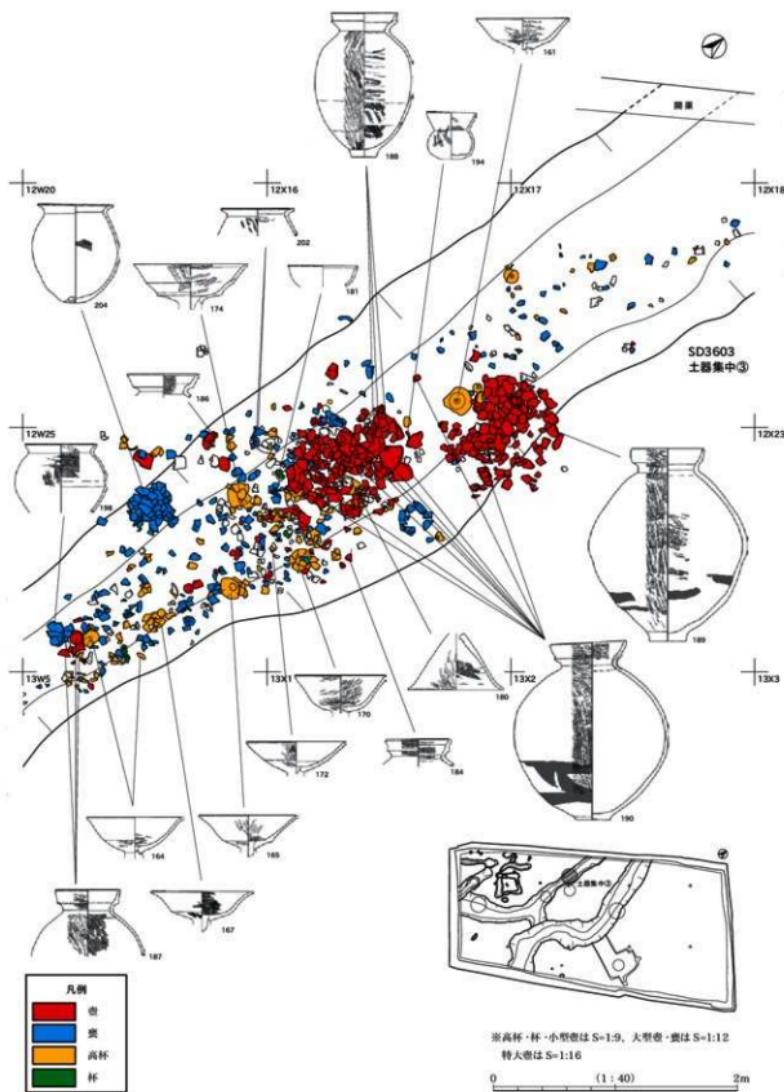
土器集中①（図版48・49）は、溝の西縁に寄る傾向が認められる。遺構が多く検出された西側から土器を廃棄した可能性がある。ここからは、高杯（158・163・166）・壺（191）・小型壺（193）・甕（199～201・203・205・206）などが出土した。甕にはススやコゲが残ることから、煮炊きに使用したものであろう。

土器集中②（図版53・54）は、ほかの2か所と比較すると、土器の細片が目立つ。ここからは、高杯（159・160・168・175・179）などが出土した。甕の細片も出土したが、復元できるものはなかった。

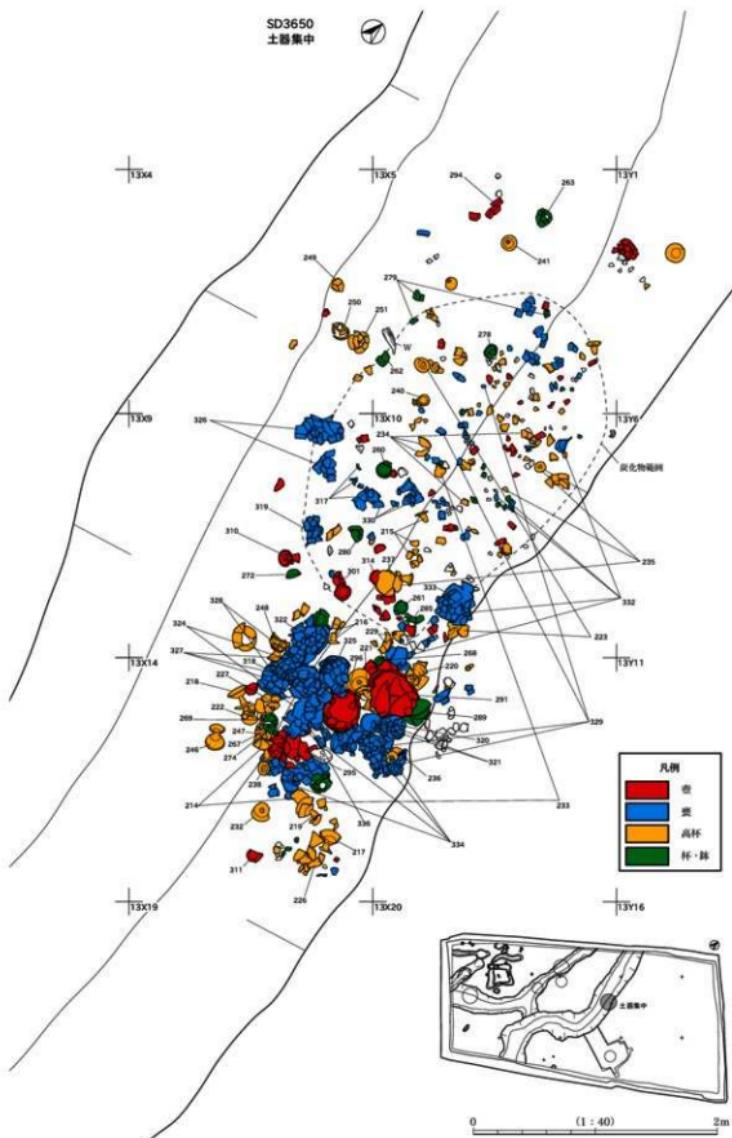
土器集中③（図版53・55・56）はSD3603の範囲のなかで、土器が最も多く出土した範囲である。土器集中③の出土状況は、第17図に示した。これらの土器は、溝中央の窪んでいる部分から出土した。その部分と地山との高低差は小さい。また、ほかの2か所と異なり、土器の周囲には炭化物が目立ち、焼土粒も認められた。土器集中③の東側には、SX3661（図版47・53・62）があるが、この範囲にも炭化物や焼土粒が認められた。なお、この付近から炉は認められなかった。出土した土器は復元率が高く、特に大型壺（188）・特大壺（190）は完形に近い状況まで復元することができた。甕の破片はまばらに散っているが、甕（204）のように原位置をうかがわせる出土状況もある。204にはスス・コゲが認められたことから、煮炊きに使用したものであろう。高杯（161・164・165・167・170・172・174・180）も出土するが、杯部と脚部が接合できないものが多く、特に杯部の出土が目立つ。また、杯部（165・172・174）には被熱した痕跡が認められた。杯部が多く出土したことについては、煮炊きの時に甕の蓋として使用したことや祭祀として杯部と脚部を分解したことが想定される。土器集中③に分布する炭化物や焼土粒は、この場で火を焚いたものではなく、隣接した場所で祭祀を行い、その後これらの土器をこの場所に廃棄したと考えられる。その場合、祭祀を行った場所の候補のひとつが、先ほど触れたSX3661が挙げられよう。

上記のほかに、13W11・12グリッド周辺でも土器の細片が出土したが、その量は土器集中①～③と比べると少ない。

**SD3650**（図版53・57～60・64～68・138・139・167・168） SD3650は長さ30m、幅3～4.7mの

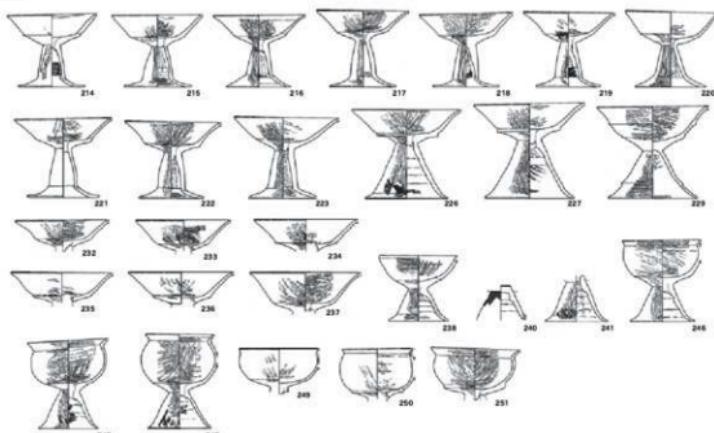


第 17 図 SD3603 土器集中③



第 18 圖 SD3650 土器集中

## 高杯



## 杯・鉢

## 大型鉢



## 大型壺

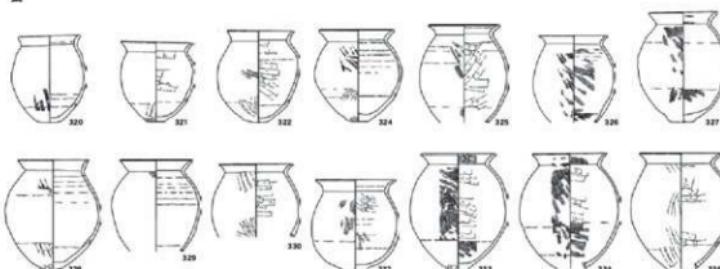
## 小型壺



## 壺(特小型)



## 壺



※高杯・杯・鉢・大型鉢・小型壺は S=1:9,

大型壺・壺(特小型)・壺は S=1:12

第19回 SD3650 土器集中の出土土器群

流路である。底面標高から、北から南に向かって水が流れていると考えられる。深さは48～95cmであり、断面形は台形状を呈する。覆土は7層に分層した。堆積状況は覆土5～7層が斜位で、覆土1～4層がレンズ状に堆積する。覆土6層は東側から、覆土5層は西側からの土によって埋め戻されたことがうかがえる。覆土7層は、底面のやや西側に浅く堆積することから、溝が機能していた時に自然に堆積したものであろう。

注目すべきは、覆土3層が堆積後、溝の2/3ほどが埋没したのちに祭祀が行われたことである。その範囲は13X4・5・9・10・14・15グリッド周辺で、特に13X14・15グリッドが土器が最も多く出土した。この範囲を土器集中と呼ぶことにとる。この土器群の出土状況を第18図、出土した土器を第19図に示した。溝の半埋没状態で土器が集中する状況は、SD3603と酷似する。覆土2層で覆われた土器片も多数あることから、土器集中の遺物は、覆土2層・3層で取り上げた。この範囲の北側、13X5・9・10グリッドに炭化物の範囲が認められる（図版138）。その規模は長径3m、短径2mで、おおむね楕円形を呈する。炭化物のほかに、焼土粒も認められる。しかしながら、この炭化物範囲を炉と断定することはできなかった。炭化物範囲には土器の細片が出土する一方、その南側（13X14グリッド）には、復元率の高い土器がまとまっており、高杯・杯・大型壺・甕などが認められた。高杯は、杯部と底部がともに出土するものが多く、SD3603土器集中③とは様相が異なる。また、土器集中③で出土数が非常に少なかつた杯類も定量認められる。大型壺や甕は、原位置をうかがわせる出土状況であった。祭祀後に、土器集中は洪水堆積層と見られる覆土1層・2層によって埋没した。

土器集中のほかには、下流に向かって遺物がまばらに出土した。そのなかには、完形品に近いものもある。これらの遺物の取り上げ層位は覆土3層であるが、特に13X4・9・14・19・24グリッドより南側では底面に近いところから土器が出土した。これらの土器の出土位置はドットで示した（図版57～60・65）。この土器群は、摩耗が少ないとや上流に位置する土器集中と接合するものが少ないとから、上流から流れてきたものというよりは各場所で廃棄されたと考えられる。

上記のSD3603・SD3650のほかに、甕がまとまって出土した溝（SD3602）、方形状に四辺を巡る溝（SD3614）、長さが3mほどの小溝（SD3604・SD3606）がある。

**SD3602**（図版48-50-164-165） SD3602は、長さ7m、幅142～209cmの溝である。溝は南へ向かって調査区外へと延びている。D2区のSD2100は溝の規模や深さから、SD3602と同一の遺構の可能性が高い。SD3602の北側は非常に浅く、北端から2mほど南に向かったところで、急に傾斜がつき、深さ40cmほどとなる。遺構が半埋没した段階で、12V22・23、13V2グリッド周辺で甕がまとまって出土した。甕のほかに、溝の西側から深鉢（156）が出土した。

**SD3614**（図版48・51・166・167） SD3614は方形状に巡る溝である。幅は34～114cmと、幅は均一ではない。深さは12cmと浅く、断面形は弧状を呈する。底面標高は南へ向かってわずかに低くなる。覆土は単層である。出土遺物は少なく、高杯（213）がある。溝の周辺には土坑やピットを検出したが、それらとの関係は不明である。

**ピット** ピットは17基検出した。これらの大半は、SD3603の西側で検出した。ピットは単層のものが多く、柱根及び柱痕部が認められるものはなかった。柱筋が認められなかったことから、柱穴以外のピットが含まれている可能性がある。

**性格不明遺構** 性格不明遺構として調査したものは23基ある。これらは浅い土坑状の遺構と、まとまって出土した土器群（以下、土器集中）に分けることができる。土器集中はE区で21か所見つかった。土器

集中は、①1個体のみのもの、②複数個体がまとまっているもの、③土器細片からなるものに分かれる。以下では、主な土器集中について述べる。

**SX3609**(図版 53・61・169) SD3603 土器集中③の西側に位置する。土器集中③と 1m ほど離れている。両者の関係性を明確に示すことは難しい。細片が多く出土しており、復元率は低い。大型壺(339)・甕(340・341)などが出土した。

**SX3651**(図版 64・70・169) SD3650 土器集中の北東側に隣接する。2 個体分の大型壺(346・347)の破片が出土した。口縁部から体部上半の破片はなかった。大型壺(347)の内外面には漆が付着している。

**SX3654**(図版 64・69・170) 14 X 9・10 グリッドにおいて、VII 層以下の遺構を確認するためにトレンチを掘削した。その際に見つかったのが、SX3654 である。SX3654 から出土した土師器は高杯 7 点、小型壺 5 点である。これらは VII 層上面から出土した。これらの土器が出土した範囲は、1.5 × 2m ほどと比較的まとまっている。いずれの土器も完形品に近い状態に復元できる。これらの土器は洪水堆積層である VII a 層・VII b 層に埋没しているが、高杯のなかには直立した状態で出土したものもあった。VII b 層の流れが比較的緩やかであったことから、倒れずに済んだのかもしれない。掘り込みを確認するためにトレンチを掘削したが、土器を埋めたような痕跡は認められなかった。SX3654 の周辺に土器が広がっていないかを確認するために、SX3654 の周辺を VII 層上面まで下げて遺構・遺物の確認を行ったが、その他遺構は検出されなかった。よって、VII 層上面から出土した土器は SX3654 のみであり、E 区において層位的に最も古い土器群に位置付けられる。

**SX3661**(図版 53・62・139・170・171) SD3603 土器集中③の東側に隣接する。2 × 4m の範囲に土器片が広がる。この範囲には炭化物や焼土粒が分布しており、SD3603 土器集中③よりも目立つ。高杯(377～383)・杯(384)・鉢(385・386)・小型壺(387)・甕(388～390)を同化した。高杯のなかには被熱したもの(377・378・382)も認められた。甕にもススやコゲが付着していた。

**SX3662**(図版 53・63・171) SD3603 と SD3650 が交わる 13 W 9・14・15 グリッドに位置する。SX3662 は土器の小ブロック 4 か所からなる。そのうち一つは、SD3650 の東縁にまで広がる。この範囲からは大型壺(393)・甕(394)が出土した。ほかには甕(395・396)が 2 個体が潰れた状態で出土した。いずれの甕にもスス・コゲが付着する。さらに高杯(391)が潰れた状態であった。

### 3) D 2 区

**土坑** 土坑は 1 基検出した。

**SK2104**(図版 76・79・172) SK2104 は平面形が椭円形を呈する土坑である。規模は長径 129cm、短径 84cm である。深さが 8cm と非常に浅い。覆土は单層で、土師器の細片が少量出土した。底面にはわずかに凹凸が認められる。

**溝** 溝は 15 条検出した。このうち、溝 4 条(SD2100・SD2101・SD2103・SD2109)は流路や区画溝の可能性が考えられる。また、幅広かつ浅い溝(SD2124)は性格不明遺構に類似する。小溝は 10 条検出した。これらは長さが 1～2m 前後、幅が 40～50cm 程のものが多い。主軸方向や配列が不規則なものも多く、これらの性格は不明である。

**SD2100**(図版 74～78・172・173) SD2100 は、北から南に延びる長さが約 19m の溝である。溝の両端は調査区外へと延びている。北へ延びた先には、E 区の SD3602 がある。溝の幅や深さなどから、SD2100 と SD3603 は同一の遺構の可能性が高い。幅は約 120cm であるが、13T21・22 グリッドでは

幅が270cmほどに広がり、その部分はテラス状となる。その範囲から土器がまとめて出土した。この部分については微細図を作成した（図版77）。断面形は弧状を呈し、深さは25cmとほかの溝よりやや深い。覆土はレンズ状に堆積し、4層に分層した。土器は覆土1層上位から出土したものが大半で、遺物の標高は遺構検出面よりもやや高いものが目立つ。遺物には、高杯（427～437）・杯（438・439）・鉢（440・441）・小型壺（442・443）・甕（444）がある。また、13T15・13U11グリッド周辺には土器のほかに、礫がまとめて出土した（図版78）。これらを集石遺構として捉えて調査した。この範囲から出土した礫は82点である。また、礫のなかには敲き石2点（472・473）が認められた。

**SD2101**（図版76～78・173） SD2101は、SD2100の東側に平行する。長さは6.1m、深さは14cmである。13U16グリッドで、SD2100と重複し、SD2101のほうが新しい。覆土は2層に分層した。いずれも黄灰色土であるが、覆土1層と比べ、覆土2層のほうが砂礫を多く含む。覆土1層上位から土器がまとめて出土した。その土器集中をSX2123とした（図版81）。SD2101からは甕（445）が出土した。

**SD2103**（図版76・79・173） SD2103はSD2100から東に向かって、垂直方向に延びる溝である。SD2100と重複し、SD2103の方が古い。また、SD2109とも重複し、SD2103のほうが新しい。溝の東端は調査区外へと延びており、長さは4.95mである。深さは11cmと非常に浅い。覆土は単層である。

**SD2109**（図版76・79） SD2109はSD2103と直交する。両者には重複関係が認められ、SD2109のほうが古い。また、SX2102とも重複し、SD2109のほうが古い。溝の北端は調査区外へと延びており、長さは5.96mである。溝の幅は南から北へ向かって、幅が少しづつ広くなる。深さは9cmと、SD2103と同様に浅い。覆土は単層である。

**SD2124**（図版74・75・173・174） SD2124はほかの溝と比べ、幅広でかつ浅い遺構である。性格不明遺構に含めた浅い土坑状の遺構と形態が似る。遺構範囲を検出したときに、土器片が散在している状況がうかがえた。これらの土器片は覆土の上面から出土したことから、便宜的に層位0層として取り上げた。特に南側では同一個体と思われる土器片が出土したため、微細図を作成した（図版75）。それらは甕の口縁部から体部上半にかけてのものであった（446）。土器を取り上げ後、覆土の掘削を行った。断面形は弧状を呈し、深さは10cmほどと浅い。覆土はブロック状に堆積し、2層に分層した。遺構底面にはわずかに凹凸が認められた。覆土からの遺物はなかった。

**ピット** ピットは54基検出した。P2146・P2150には柱根が遺存していた。P2136・P2176などには柱痕跡が認められた。これらのピットは柱穴と考えられるが、建物は把握できなかった。

**性格不明遺構** 性格不明遺構として調査した遺構は7基である。E区同様に、浅い土坑状の遺構（3基）と土器集中（4基）に分けられる。

**SX2102**（図版76・80・177） 平面形が楕円形を呈し、規模は長径398cm、短径248cmである。深さは8cmである。覆土は単層で、VIb層（遺物包含層）と似る。SX2102は人為による遺構ではなく、自然の落ち込みの可能性が考えられる。

**SX2105**（図版76・80・177） 遺構の北側は、調査区外へと延びている。平面形は楕円形を呈し、長径は残存値で367cm、短径は311cmである。底面には凹凸が認められ、深いところで21cm、浅いところで5cmと、全体的に浅い遺構と言える。覆土は3層に分層した。一部レンズ状に堆積している状況が認められる。覆土1層・2層がVIb層（遺物包含層）と似る。SX2102と同様に、自然の落ち込みの可能性が考えられる。

### 土器集中

土器集中にはSX2123・SX2125・SX2126・SX2139がある。SX2123は複数個体の土器が出土した。SX2125は甕(459)が出土した(図版81)。接合しなかった細片も459と同一個体であろう。遺物取り上げ後、その直下でSD2162を検出した。SX2126は複数個体の遺物の細片が出土した(図版81)。遺物はVI b層で取り上げた。遺物取り上げ後、その直下でSD2159を検出した。

**SX2123**(図版76・77・178) SX2123は13U11・16グリッドに位置し、SD2100の土器集中に隣接する。SX2123はVI b層中から出土しており、前述したSD2100の遺物出土状況(図版178)と出土レベルがほぼ同じ高さであることから、これらと一連のものである可能性が高い。出土遺物には高杯(450・451)・小型壺(453・455)があり、甕の細片も認められた。SX2123の遺物を取り上げた後に、その直下からSD2101を検出した。SD2101が埋没した後に、SX2123の土器が廃棄されたと理解できる。

**杭(図版74・75・178)** 杭にはSX2177～2182の6基がある。SX2177・SX2178・SX2181・SX2182はSD2100の西側に沿って打ち込まれている。SX2177とSX2178との間隔は5.90m、SX2178とSX2182との間隔は3.70m、SX2182とSX2181との間隔は3.06mである。これらは杭列として考えられる。またSX2179とSX2180はSD2100の底面に打たれていた。これらの杭はSD2100の南側から検出した。杭は打ち込みによるもので、土層断面には掘形は認められない。いずれの杭も直径6cm程とやや細めである。

## B D1・D3区の調査

### 1) 概 要

D1・D3区においては、3面の遺構検出面が存在した。上位からVI b層・VI c層・VII層に区分した。このうち、VI b層とVII層では水田、VI c層では大部分が土石流によって損壊していたものの柱穴や溝を検出した。各層の年代は、VI b層が古代、VI c層が古墳時代中期、VII層が古墳時代前期中ごろとなる。各層とも、洪水性の堆積物に覆われていたため、遺構の遺存状況は良好であった。VI b層の水田の畦は、畦の高さが10～20cmほどと極めて良好であった。VI b層とVI c層は接するが、明らかに土質が異なり、年代差もある。VI b層は草本質泥炭、すなわち湿地帯における堆積物であるのに対し、VI c層は土壤化した遺物包含層であった。このようにVI b層とVI c層では堆積環境が全く異なり、この相違は検出した遺構の種別にも反映されている。VI c層とVII層の間には、土石流堆積物を挟む。この堆積物に覆われていたため、VII層の水田が良好な状態で検出することができた。

### 2) VI b層の調査(図版82～87・179・180)

#### 遺構の検出と年代

VI b層では、水田を検出した。2009年度調査で検出したもので、洪水堆積物であるVI a層に覆われていたことから、検出は比較的容易であった。その年代は、水田面を覆っていたVI a層から出土した土器が古墳時代のものであったこと、隣接地域で古墳時代中期の祭祀遺構が検出されていたことから、調査時に古墳時代中期の水田と評価し、一般に公開してきた。

しかし、これらの根拠は年代を特定するためには十分ではなかった。また、祭祀遺構と水田の間が大規模な土石流堆積物によって破壊されていたため、地点間の層位の対応が十分でなかった。2013年度調査においては、VI b層中から古墳時代にはあまり認められない曲物底板(493～495)が上位から出土した。

これらの問題があつたため、2013年度調査において畦2023に含まれていた小枝について、放射性炭素年代測定を行つたところ、7世紀末～9世紀中ごろという結果が得られた。上下の層位の年代値との間に不自然な状況もなく、この年代値を信頼すれば、古代の水田といえる。また、2014年度調査では、VI b層水田を覆うVI a層及び水田土壤から明らかに古代に下る須恵器が出土した。このことから、VI b層の水田を古墳時代に遡つて考えることはできなくなり、古代に築かれたものと評価すべきという結論に至つた。これまでに公表してきた内容を、大幅に修正することになったことを、ここに明記しておく。

#### 水田区画と畦の構造

水田区画は、12・13P・Q・Rグリッド付近では、水田区画の形態的齊一性が認められる。南北方向に長軸、東西方向に短軸をもつ長方形の区画が認められる。東西南北を意識したというよりは、地形に沿うように構築された可能性が考えられる。しかしながら、水田区画が規則的な12・13列付近では傾斜が著しいわけではない。平坦地ほど、水回りを考慮して、水田区画の形成に配慮した可能性がある。

区画の形状は、長方形を基調とするものの、バラエティーに富む。長方形の長軸は、南北軸に設定されており、かつそれが複数の区画を超えて直線状に設定される。すなわち、まずは平行する複数の畦が直線状に設けられ、それが一定の長さで区切られている。このような構築過程を経たため、東西方向の畦はランク状に配置される部分もある。

畦の高さは、10～20cmほどで、畦は盛土によって構築されている。断面形態（第20図）は、A類・B類・C類がほとんどである。畦の構築に当たっては、シルトと砂質シルトを互層に盛る傾向にあるが、すべてに該当するわけではない。また、畦2023においては、盛土中に小枝をまばらに盛り込む様子も見られた。これらの技術は、盛土を強化する目的があった可能性が考えられる。

畦が途切れている部分を7か所で検出したが、これは水口と考えられる。ひとつの区画の中間点付近で途切れているものもあるが、どちらかといえば畦同士の交点付近に設けられる傾向にある。また、畦の高さの割に水口が少ない点も特徴的である。すなわち、水が入っても出る場所がないのである。水を上の水田から下の水田へと、ゆっくり掛け流すような構造であったのであろう。山間部の水は水温が低く、少しでも緩やかに水を流すことで、水温を上昇させたのかもしれない。

また、畦2条を並列させて、溝状の施設が設けられる範囲もあった。SD2025・SD2026は、それぞれに水口と思われる取水部がある。すなわち、この溝状の施設の中には滞水する状態にあったといえる。しかし、滞水した水が排水される部分が今回調査では検出されておらず、性格は明らかでない。また、全体像は明らかでないが、これらは蛇行していると見られる。取水部のみが存在する場合は排水施設、この施設から水を取水する部分が存在すれば、用排水兼用の施設と考えることができよう。



第20図 畦断面の分類模式図

#### 3) VI c層の調査（図版88～90・181・182）

##### 遺構の年代

VI c層は、VI b層と、VII層に挟まれるように検出した。土壤化が進んだ黒色帶であり、草本質泥炭からなるVI b層、シルトからなるVI c層の遺物包含層とは明らかに異質である。このことから、土地利用の在り方の違いを想定することができる。VI c層は、D1区でも標高が高い西側のみに分布した。基本的

には、VI b 層の直下で検出したが、シルトの間層・K1 層が認められる範囲もある。

SD2200 から潰れた状態で出土した甕（476）の年代、放射性炭素年代測定の結果を踏まえれば、古墳時代中期初頭ころを考えておくのが適当かもしれない。この土器の付着物について、放射性炭素年代測定を行ったところ 4 世紀～5 世紀初頭ころという年代値が得られた。やや古めの年代値であるが、一定の目安となろう。また、2014 年度調査により、VI c 層が 2003 年度調査の遺物包含層と対応すると考えられた。2003 年度調査では、中期後半の土器などがまとまって出土している。したがって、中期の間は洪水堆植物や土石流堆植物に覆われていない可能性が高く、VI c 層は比較的長い時間を経た堆積と考えられる。土壤化した背景には、堆積時間の長さと関連する可能性を想定することができる。

#### 検出した遺構

VI c 層では、VI b 層・VII 層とは異なり、水田は認められない。また、調査区の大半が土石流堆植物によって損壊されているため、遺存状況は良くない。VI c 層の遺物包含層は、D1・D3 区とともに存在するが、遺構を検出したのは標高が高い D3 区のみであり、溝 2 条、ピット 4 基を検出した。基本的に遺構の覆土は、遺物包含層である VI c 層が落ち込むように検出した。ピットは偶然にできた窪地ではなく、ほぼ直立に立ち上がり、深さ 17 ～ 40cm ほどと深く掘り込まれており、柱穴と見るのが妥当と考えられる。断面に竪穴状の落ち込みが認められないことから掘立柱建物の一部と考えられるが、調査範囲が狭小であったため、組合せを見出すことはできなかった。また、VI c 層と一緒に取り扱ったが、溝の検出面は厳密には 2 面ある。K1 層に覆われ、VI c 層が落ち込むように検出した SD2201、P2202 ～ P2204 と、VI c 層を切るように K1 層で覆われた SD2200 がある。厳密に見れば時間差があることは間違いないが、時期の異なる遺構同士は近接しており、K1 層を覆土とすることでは共通する。これらの状況から、両者を比較的近接した時期に位置付けておきたい。

#### 4) VII 層の調査（図版 91 ～ 96・182 ～ 184）

##### 遺構の検出と年代

VII 層は、粘性の強い VII 層を削り出して作られた水田である。盛土は確認できなかったが、遺存状況が良好な 2014 年度調査においては、盛土が明瞭に認められる範囲が存在することから、本来的には盛土も併用して畦が構築された可能性が高い。畦は、数 cm ～ 最大でも 10cm 程度の高さでしか検出できなかった。しかしながら、土石流堆植物 VII d 層に覆われていたため、容易に検出することができた。水田面と土石流堆植物との層界が明瞭であり、礫・粗砂を丁寧に除去すると、水田の区画が現れた。土石流の本流部付近では損壊が著しく、畦の高さが削られたと想定されるが、田面が規則的に配列されており、わずかな痕跡でも区画を把握することができた。

田面から出土した種子を用いて行った放射性炭素年代は、2 世紀中ころ～4 世紀前半ころであった。また、VII 層出土土器（475）に付着したススの放射性炭素年代も、2 世紀前半～3 世紀前半ころであった。校正曲線が不安定な時期であることから年代値に幅があるものの、想定よりも古い年代値が得られた。土器は甕 1 点しか出土していないが、放射性炭素年代測定の結果、中期の遺物群より明らかに下位から出土した遺物の形態的特徴などを総合的に考慮すると、VII 層で検出した遺構は新しく見積もっても、前期中ころ（4 世紀代）と考えておくのが妥当であろう。なお、この年代は、飯綱山古墳群が築造される以前の年代となる。古墳群を築造した集団の前身の人々が残した遺跡を考えることができる。

### 水田区画と畦の構造

上述のとおり水田の畦は、高さが数cm～最大でも10cm程度しかないが、その配列は規則的である。南北方向の畦を軸としているようで、一直線に延びる。すなわち、南北方向の畦を構築した後に、東西方向の畦で分割していくようである。このような過程で構築された水田区画は、1辺2～3mの正方形～長方形であり、とても狭い。サイズ的には、群馬県でいわれている「極小区画水田」〔齋藤2001〕に共通する。畦の高さは、土石流によって削られたことが想定されるものの、もともと低いものと考えられる。扇状地形を活かして、オーバーフローした水を上の田から下の田へと掛け流していたと考えられる。水口は、部分的に認められる。東西方向の畦を途切るもの（4か所）と、南北方向の畦を途切るもの（2か所）とが存在する。なお、畦2504を途切った水口2584は、地山の抉られ方を見ると土石流によって破損したように見える。なお、直線的に配置される水口2581・2582・2583は、用水の導線を明確に表している。

田面には、腐植物などはほとんど認められず、部分的に炭化物が認められたのみである。株痕跡などは認められなかつた一方、断片的ながら足跡が認められた。ヒトの足跡と見られ、サイズはいずれも25cmほどであった（岡版184）。足跡は、土石流堆積物であるⅦd層に覆われていてことから検出することができた。すなわち、土石流が到達した時点で、足跡が残っていたということになる。言い換えば、耕作直後に土石流に見舞われたということである。水田面からは、イネの植物珪酸体がほとんど検出されていないことを考慮すると、稲作の頻度は少なかったと見られる。水田構築後、時間を置かない段階で被災している可能性が考えられよう。

## 7 上層（中世）の遺物

### A 概 要

中世の遺物には土器・陶磁器、金属製品、鍛冶関連遺物、石製品、木製品がある。

土器・陶磁器はコンテナ4箱（箱の内寸：54cm×34cm×10cm）出土した。土器・陶磁器には青磁、白磁、瀬戸・美濃、珠洲、土師質土器がある。土器・陶磁器の年代は12世紀後半～16世紀代と時期幅があるが、主体となる時期は15世紀代と考えられる。また、珠洲の転用研削具、瀬戸・美濃の加工円盤も認められた。金属製品は少なく、錠前・釘などの鉄製品や鉄貨がある。鍛冶関連遺物はコンテナ18箱出土した。鍛冶関連遺物には、楕円津や鍛治津、羽口などがある。石製品はコンテナ1箱出土した。石製品には砥石や硯、石鉢がある。砥石は5点が出土し、すべて圓化した。砥石は仕上砥と中砥に大別した。仕上砥は刀子や道具類の研ぎに使用され、中砥は銛物師が中磨で使用するほか、農耕具や漁労具、日常の刃物研ぎに利用するもの〔汐見2001〕と理解する。硯と石鉢は各1点出土した。

木製品の種別は、機能や用途により大別した。種別には挽物、柱根、杭、井戸の構築材などがある。転用や二次的な加工、破損等によって大別できないものは、板状・棒状木製品とした。

### B 土器・陶磁器

#### （1）記載の方針

中世の土器・陶磁器の記述にあたっては、青磁は〔上田1982〕、白磁は〔森田1982〕、15世紀代の青磁・白磁は〔水澤2004〕、瀬戸・美濃は〔藤澤2008〕、土師質土器は〔水澤2005〕、珠洲は〔吉岡1994〕

の分類・年代観を参考にした。実年代について、瀬戸・美濃は古瀬戸後期様式Ⅰ期＝1360～80年頃、Ⅱ期＝1380～1420年頃、Ⅲ期＝1420～1440年頃、Ⅳ期古段階＝1440～60年頃、Ⅳ期新段階＝1460～1480年頃である。珠洲は吉岡Ⅰ期＝12世紀第2四半期～第4四半期、吉岡Ⅱ期＝13世紀第1四半期～第2四半期、吉岡Ⅲ期＝13世紀後半、吉岡Ⅳ期＝13世紀末頃～14世紀第3四半期、吉岡Ⅴ期＝14世紀第4四半期～15世紀前半、吉岡Ⅵ期＝15世紀後半である。それ以外の年代は文中で示した。

## (2) 遺構出土遺物

P3204 (図版 99・185 - 1) 1は口縁部と底部が欠損しているが、釉調や釉薬の厚みから青磁の厚釉端反椀と考えられる。青磁軸の明度はやや低い。

P3211 (図版 99・185 - 2) 2は青磁の鍋蓮弁紋椀である。外面には、幅が広い片刃彫りの鍋蓮弁紋が施文される。青磁軸はやや厚めに施釉される。上田B - I類で、13世紀後半から14世紀前半に比定される。

P3262 (図版 99・185 - 3) 3は青磁の鍋蓮弁紋椀である。外面には幅が広い片刃彫りの鍋蓮弁紋が施文される。上田B - I類で、13世紀後半から14世紀前半に比定される。

P3462 (図版 99・185 - 4) 4は青磁の厚釉端反椀である。青磁軸の釉調は緑味が強く、釉薬は厚めに施釉される。上田D - II類で、15世紀代に比定される。

P4033 (図版 99・185 - 5) 5は瀬戸・美濃の腰折皿と見られる。内外面には、色調の薄い緑味の灰釉が施されている。古瀬戸後期様式のⅣ期新段階で、1460～1480年頃に比定される。

P4101 (図版 99・185 - 6) 6は細片であるが、明度の高い緑色の青磁軸が厚く施されていることから、青磁の厚釉端反椀と考えられる。上田D - II類で、15世紀代に比定される。

P4139 (図版 99・185 - 7) 7は白磁の内湾皿である。作りは薄手である。内外面には、やや黄色味を帯びた灰白色の釉薬が施される。釉薬には非常に細かな貫入が入る。森田D群で、15世紀代に比定される。

P4516a (図版 99・185 - 8) 8は珠洲の片口鉢である。色調は、やや褐色味を帯びた灰色を呈する。焼成がやや不良のせいか、胎土は多孔気味である。口縁部の形態から、吉岡Ⅳ期末～V期に比定される。

P4674 (図版 99・185 - 9) 9は珠洲の片口鉢である。8の破片よりも胎土のしまりが強く、重量感もある。口縁部の形態及び口縁端部に波状文が施されることから、吉岡V期に比定される。

SE4113 (図版 99・185 - 10～12) 10・11は珠洲の片口鉢である。10には一単位7条以上の粗い卸目が深く施される。11には一単位9条以上のやや細かい卸目が施される。内面及び底部外面は使用により、摩耗している。10は吉岡VI期、11は吉岡III～IV期に比定される。12は瀬戸の袴腰形香炉である。底部外面には回転糸切り痕が残り、体部と底部の境には足が付く。胎土には長石や小礫が含まれるもの、比較的精良な胎土である。体部の上位に鉄軸が施釉され、外面及び内面には鉄軸が垂れた様子がうかがえる。古瀬戸後期様式Ⅲ期で、1420～1440年頃に比定される。

SK3102 (図版 99・185 - 13) 13は土師質土器の皿である。細片であるが、器面にナデや指頭痕が認められることから、手づくね成形と考えられる。胎土は混入物が少なく、精良な胎土である。

SK4065 (図版 99・185 - 14) 14は青磁の椀である。透明度が高く、色調の明るい青磁軸が施釉されている。

**SX4073** (図版 99・185・15・16) 15 は白磁の皿である。体部から口縁部に向かい、やや内湾気味に立ち上がる。釉調は薄く青味を帯びた灰白色を呈する。12世紀後半に比定される。16 は青磁の鍋蓮弁紋椀である。上田B - I群で、13世紀後半から14世紀前半に比定される。

**SX4150** (図版 99・185・17) 17 は青磁の厚釉端反椀である。上田D - II群で、15世紀代に比定される。

**SX4671** (図版 99・185・18) 18 は珠洲の片口鉢である。口縁端部は丸みを持ち、やや内側に傾く。口縁部の形態から、吉岡V期に比定される。

**SD3010** (図版 99・185・19) 19 は土師質土器の小皿である。胎土には混入物がなく、精良な胎土である。口縁部には指頭圧痕と見られる凹凸が認められることから、手づくね成形と考えられる。

**SD4083** (図版 99・185・20) 20 は土師質土器の皿である。手づくね成形で、外面には指頭圧痕が残る。胎土は非常に精良である。器形と法量から、15世紀後半に比定される。

**SX3003** (図版 99・185・21・22) 21・22 は瀬戸美濃である。21 は小皿よりも身がやや深いことから、小鉢と考えられる。口縁端部は短く外反する。内外面に灰釉が施釉されるが、外面の一部が露胎する。古瀬戸後期様式 I ~ II 期に比定される。22 は端反皿である。外面のロクロ目が明瞭である。釉調は明度が高く、淡いオリーブ色を呈する。大窯第1段階で、15世紀末～16世紀前半に比定される。

**SX4091** (図版 99・185・23) 23 は青磁の盤である。細片であるため、全形は不明である。内面には削ぎにより、幅 5mm 程度の運弁が表現されている。緑味の強い青磁釉が厚めに施釉されている。

**SX4603** (図版 99・185・24～28) 24 は白磁の内湾皿である。釉調は透明度が高い灰白色で、細かな貫入が多数認められる。森田D群で、15世紀代に比定される。25 は青磁の碗である。高台外面及び高台疊付の一部まで施釉される。内面にも施釉されるが、見込は露胎している。上田D - I群に比定される。26・27 は珠洲で、26 が T種の壺、27 が片口鉢である。27 には 8 条一単位の卸目が施される。卸目の幅は 2mm 程度と、幅広である。吉岡V期に比定される。28 は信楽の壺と考えられる。胎土の色調は、やや明るいにぶい黄橙色を呈する。胎土には小礫のほか、長石の混入が目立つ。

**SX4723** (図版 99・185・29・30) 29・30 は珠洲のT種の壺で、同一個体の可能性が高い。

**庵澤場** (図版 100・185・31) 31 は青磁の酒海壺の蓋と考えられる。器壁が 17mm ほどと厚く、しっかりした作りである。胎土は灰白色を呈し、混入物が少なく非常に精良な胎土である。外面には削ぎで、文様が施されているが、モチーフは不明である。

### (3) 遺構外出土遺物 (図版 100・185・186・32～44)

32～34 は青磁である。32 は細片であるが、外面には鍋蓮弁紋が認められる。33 は直線雷紋帶椀で、上田C - II 類で、15世紀中頃～後半に比定される。34 は薄釉端反椀である。断面には、漆で継いだ痕跡が残る。上田D - I 類で、15世紀前半に比定される。35・36 は白磁である。35 は内湾皿である。胎土は混入物が少なく精良な胎土であるが、陶質に近い。釉調はやや黄色味を帯びた灰白色で、細かな貫入が目立つ。体部下半には釉ではなく、露胎している。森田D群で、15世紀代に比定される。36 は端反杯である。口縁端部が外反する。釉薬は高台疊付け以外、やや厚めに施される。釉調は透明度が低く、白色に近い。胎土も白色を呈し、緻密である。森田E群で、15世紀後半から16世紀代に比定される。

37・38 は瀬戸美濃である。37 は天目茶碗である。口縁端部が短く外反する。釉調は黒味を帯びた褐色を呈する。古瀬戸後期様式IV期で、1440～1480年頃に比定される。38 は皿と考えられる。釉調は明度が高く、明るい黄緑色を呈する。外面は高台疊付け以外施釉されている。内面にも施釉されるが、見

込みはふき取られている。時期は、大窯期と考えられる。

39・40は土師質土器の小皿で、いずれも手づくね成形である。

41～44は珠洲である。41は片口鉢である。口縁部の形態から、吉岡Ⅲ期に比定される。43・44は甕である。43は口縁部の形態から、吉岡V期に比定される。

#### (4) 転用研削具(図版100・186～45・46)

45・46は珠洲の転用研削具である。45は焼成が不良で、胎土が軟質気味である。内外面の摩耗は顕著であり、一部断面にも摩耗が認められる。46は内面と外面が摩耗しているが、摩耗の度合いは弱い。持ちやすいように、打ち欠いている可能性がある。

#### (5) 加工円盤(図版100・186～47)

47は瀬戸美濃の底部片を加工したもので、加工円盤と呼ばれるものである。底部外面は無釉であり、高台がすり減るほどの摩耗が認められる。加工円盤の用途については諸説あるが、47は転用研削具として使用した可能性が高い。

### C 金属製品(図版100・186～48～55)

48～51は鉄製品である。いずれも錯で厚く覆われていることから、レントゲン写真を用いて形状を確認した。48は板状の鉄製品である。上端及び下端が欠損している。計測値は長さ4.7cm、幅1.8cm、厚さ5mmである。用途は不明である。49は釘である。端部が欠損し、全体がやや歪んでいる。50は錐前である。計測値は長さ8.6cm、幅4cm、厚さ2cmである。鍵は閉じた状態であった。錐前が出土するということは、土蔵の存在が想定されるが、当遺跡では見つかっていない。51の形状はU字状を呈する。断面形状は一辺5mmほどの方形を呈する。一部が欠損しており、本来の形状は不明である。52は棒状の鉄製品である。断面形状は、一辺が1.6cmほどの方形を呈する。上端及び下端が欠損しており、長さは6.3cmである。53～55は銭貨である。中世の銭貨は「永井2002」を参考にした。遺跡全体で11枚出土したが、大半は表土からの出土である。遺構から出土した銭貨は、53のみである。53は「元□通寶」(篆書)と判読できることから、元祐通寶(初鋳年1086年)の可能性が考えられる。最古銭は、55の開元通寶(初鋳年621年)である。

### D 鍛冶関連遺物

鍛冶関連遺物には含鉄滓、鍛治滓、羽口、炉壁がある。他にガラス質滓や砂鉄焼結もあるが、1点ずつとその量は極めて少ない。含鉄滓は磁石に反応するものとした。楕形滓については、第14図で提示した722点を対象に法量分図を作成した(第21図)。

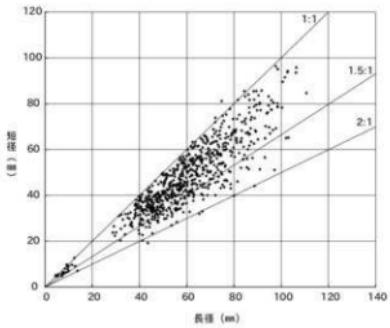
鉄滓(図版101・186・187・56～78) 56～78は楕形滓である。56～67はE区の廃滓場から出土したものである。56は側面がすべて破面である。上面は中央付近が凹む。中央部分に白色の発泡部分をもち、赤紫色の酸化が認められた。下半は炉床土が全面に付着する。57は形状が円形で、厚さ5.1cmの大形である。表面は中央部が凹み、黒紫色の酸化が認められる。下半は炉床土由来の灰色粘土が全面に付着する。58は上面が二段滓となり、その間には1cm程度の炭が堆積している。下半には炉床の土砂がほぼ全面に付着する。59は表面が赤紫色の酸化色を呈する。下面には、炉床土と思われる滓と白色粘土が

結合した部分が認められる。5～20mmの炭化物痕が多く見られる。60は上面の外周は炉床土由来の粘土質が強く、灰色味を帯びているのに対して、中央部付近は赤紫色の酸化色を帯びる。下面は炉床土が付着し、灰色となる。61の上面は赤黒色の酸化色が認められる。下面には炉床の土砂が付着し灰色となる。62の上面は中凹みで、下部は皿状である。下半には5～10mmの炭化物痕が多く密集する。一部、炉床土の白色系粘土が認められる。63の上面中央部は凹んでおり、全体的に黒紫色の酸化色を呈する。下面は1cm程度の炭化物痕が多量に認められ、直径1～2mmほどの鍛造剥片が多量に付着する。64の側面2面は破面である。上部は中央が凹む。表面は赤紫色の酸化面である。破面の発泡は緻密である。下半は炉床土が付着する。65の上面はほぼ平坦である。ヒダ状に発泡し、赤紫色の酸化が認められる。下面は浅い皿状となり、炭化物痕が多く認められる。66の表面は黒紫色の酸化色を呈する。一部、直径2cm程度の礫とガラス質の滓が付着する。下面は1cm程度の炭化物痕が多量認められる。67の表面には1cm程度の炭化物痕が認められる。下面には直径1～2cm程度の鍛造剥片が多量に付着する。また、炉床土と思われる白色系粘土も付着する。68はG区の包含層から出土した。上面はほぼ平坦で、砂粒が多く付着する。鍛造剥片も少量認められる。下半には1～2mmの細かな発泡が認められる。粘土や砂粒が多く付着する。

69～72はSK4097から出土した。69の上面の中央部は凹み、その周辺に黒紫色の酸化面とガラス質化した部分が認められる。下半は黒紫色の流動及び発泡があり、縁辺部には炉床土と思われる白色粘土塊が付着する。70の上面中央部は砂質の強い粘土の塊が付着し、1～2cmの円礫も認められる。その外縁は赤紫色の酸化が見られ、直径5～10mm程の炭化物痕が多くある。鍛造剥片が隨所に付着する。下半は楕形となり、細かな発泡が見られる。一部に白色粘土が付着する。71は上面の中央部が凹み、鍛造剥片が付着する。下半には発泡による凹凸が見られ、直径5mmの炭化物痕が認められる。72は上面の側縁部がわずかに盛り上がり、中央部に向かってわずかに凹む。左側面は破面である。破面の観察では2mmほどの発泡がわずかに見られ、緻密で光沢を帯びる。破面の色調は上方から、黒紫から赤紫へと変わる。最下面是炉床の土と思われる。砂を含む粘性土が全面にわたって付着している。2～3mm程度の炭化物痕や鍛造剥片が付着する。73はP4163から出土した。73の左側面には破面で、白色の発泡が認められる。表面は黒紫色の酸化面である。下半には発泡による凹凸が見られる。

76はP4151から出土した。上面は褐色に酸化し、中央部がわずかに凹む。下半は全体として楕形となるが、発泡や炭化物痕により凹凸が見られる。下半の一部に炉床土と思われる白色系粘土が付着する。

74はP4540から出土した。74の表面は流動が顕著で、1mm程の気孔が多数認められる。また、1cm程度の炭化物痕もわずかに残る。下面には炉床土がわずかに付着する。75・77はSK4671から出土した。75は左右側面及び下面是破面である。本来は直径5cm弱の円形と考えられるが、直径約3cmの別の滓が付着し、不整形となる。上面は平坦、平滑で発泡は少ない。下面是流動状の凹凸が見られ、1～2mmの発泡が見られる。表面及び底面には1～3mmの鍛造剥片が多く付着し、底面にはわずかに炭化物痕が認められる。77の上面は



第21図 楕形滓の法量分布図

ほぼ平坦で、微細な鍛造剥片が付着する。さらに、2~3mmの発泡が多数見られる。下半は緩やかに湾曲し、約5mmの発泡が多い。直径5~10mmの炭化物痕も見られる。78はSK4646から出土した。78は右側面及び下面是破面である。面は流動状の凹凸や2~3mmの発泡が多く見られる。色調は全体的に赤味を帯びる。底面は5mm前後の大きな発泡と、1~2mmの細かな発泡が全体的に見られる。白色の粘土塊が点々と付着する。5mm前後の炭化物痕がわずかに確認できる。

**羽口**（図版102・187 - 79 ~ 86） 79 ~ 86は羽口で、E区の鹿津場から出土した。79は先端が黒色ガラス質に溶解している。先端上位は赤紫色が強く、下位は白色を帯びる。接合部分は幅2cm程度が紫黒色に変色している。また、スサの混入が認められる。80は先端部が溶解してガラス質となり、外面は荒れている。溶解部分の下位には、接着痕と思われる幅6~7mmの灰色の変色部分が見られる。胎土が砂質で、モミやスサの痕跡が見られる。81は先端が溶解していると思われる黒色の変化が見られる。胎土は砂質で、スサの痕跡が認められる。82は先端部分が黒色及び白色に津化している。側部は欠損しており、通風孔部もわずかに残存するのみである。83の側部は破損している。通風孔部は、内径約2.4cmである。胎土はスサ混じりの砂質土。側部先端付近は、接着痕と思われる表面の剥落が2~3cmの幅で認められた。84は先端部分が黒色ガラス質化している。側部と基部は破面となる。側部には、接着痕と見られる変色が認められる。85は先端部に津が付着し、境界付近は黒色にガラス質化している。外面の接着部分は黒化と、表面の剥落が見られる。胎土は細砂質でスサの混入が見られる。86は羽口先端部と楕円津が結合したものである。

## E 石 製 品

**砾石**（図版102・187 - 87 ~ 91） 87・88は仕上砥である。87の石材は粘板岩である。石質が極めて緻密であり、色調はやや黄色味を帯びた灰色を呈する。石材の特徴から、鳴滝産の可能性がある。両側面には成形時の巻き戻しによる切断痕が見られる。88の石材は凝灰岩である。89~91は中砥で、いずれも凝灰岩である。89は砥面が1面で、他面には自然面が残る。

**硯**（図版102・187 - 92） 92は硯である。石材は粘板岩で、色調は黒褐色を呈する。縁の一部が残っており、海（墨液を溜める部分）も認められた。調整を見ると、内側よりも外側の方が丁寧に磨かれている。

**石鉢**（図版102・187 - 93） 93は石鉢である。石材は砂岩である。計測値は、直径24.5cmで、器高10cmである。内面が摩耗していることから、捏鉢であったと考えられる。また、内面は被熱し、黒色の付着物が認められることから、ひで鉢としても使用された可能性もある。

## F 木 製 品

### (1) 記述の方針

各種別の記載にあたり、挽物は「春日2012」（第22回）及び「水澤2007」の名称や分類を参考にした。時期を検討することができる木製品は挽物に限られる。用途が不明なものや欠損したこと、本来の形状が不明なものも多い。木製品の記述については、種別の判断基準や加工を中心に述べる。計測値や樹種は、観察表を参照されたい。木製品の観察表は、挽物・柱根・木製品に分けて作成した。

### (2) 各 説

**挽物**（図版103・188 - 94） 94は楕である。計測値は口径14.9cm、器高5.4cm、底径が8cmである。

高台はしっかりと挽きだされている。内外面には黒漆が施される。内面には、赤漆で円と植物が描かれているが、その植物の種類は不明である。外面にも赤漆による図柄が描かれているが断片的であるため、そのモチーフは不明である。時期は、14世紀中葉～後半に比定できる。

**柱根**（図版 103～105・188・189・95～97・99～117）柱根は 22 点調査した。柱根の樹種については、第 4 表に示した。コナラ属コナラ節が 12 点と最も多かった。柱根は木取り・断面形・底面形態などで分類した。底面形態は平坦・斜め・凸状・尖底の 4 種がある。100・102 の下部には、枘穴が認められた。

**杭**（図版 105・190～118～122）杭の先端を見ると、118 は 2 方向から、119・120・122 は 4 方向からの加工で鋭くなる。121 の先端は幾方向から何度も加工することで、鋭利な先端を作り出している。120 の上部には直徑 4 cm ほどの凹みがあるが、貫通はしていない。122 は杭の中間部分が括れている。樹種は、118・120 がヒノキ科、119・122 がスギ、121 がサクラ属である。

#### その他の木製品

**P3108**（図版 103・188・98）98 は棒状木製品である。樹種はクルミ属である。

**SK3020**（図版 106・190～123～125）123・124 は板状木製品である。123 は上部が欠損している。下端は加工され、丸みを帯びる。樹種はネズコである。124 は上端が丸みを帯び、下端は平坦である。上部がやや厚く、直徑 2 cm 程の凹みがある。樹種はヒノキ科である。125 は曲物側板である。残存が一部であることから、直徑は不明である。樹種はネズコである。

**SX3003**（図版 106・190～126～128）126～128 は板状木製品である。126 の上部が欠損している。下部の方が厚く、上部に向かって徐々に薄くなる。樹種はスギである。127 の右側が欠損している。上端と下端に丸みを帯びることから、本来は楕円形に近い形状であった可能性が考えられる。127・128 の樹種はネズコである。

**SX3490**（図版 106・190～129）129 は棒状木製品である。上部には 2 cm × 5 cm の長方形と、直徑約 3 cm の円形の孔が認められる。下部には、側面から加工した痕跡が残る。樹種はスギである。

**SE4113**（図版 106・190～130～132）130～132 は横桟である。これらは遺存状況が不良で、各横桟の両端の仕口部は欠損していた。木取りは、138 が芯持ミカン削、139・140 が芯持丸木材である。樹種は 138・139 がクリ、140 がコナラ属コナラ節である。

## 8 上層（古代）の遺物

### A 概 説

古代の遺物は、須恵器、土師器、黒色土器が出土した。古代の遺物は、コンテナ 1 箱（箱の内寸：54 cm × 34 cm × 10 cm）出土した。須恵器には杯蓋、有台杯、無台杯がある。食膳具が目立ち、甌や瓶類などの貯藏具が非常に少ない。土師器には無台碗、長甌がある。黒色土器は、わずかに細片が出土したのみである。土器の編年観については〔春日 1999・2005〕を、土師器の煮炊具については〔春日 2007〕を参考にした。



第 22 図 挽物の計測部位

樹種	点数
コナラ属コナラ節	12
ナシホ科	2
カヌデ属	2
カキノキ属	1
ヤナギ属	1
モクレン属	1
ヌルデ	1
マツサク	1
スギ	1
合計	22

第 4 表 柱根の樹種集計表

## B 各 説

### (1) 遺 構 出 土

畦 3015 (図版 107・191・133) 133は土師器の無台椀である。胎土は石英や長石、海綿骨針が少量混入するが、比較的精良な胎土である。底部内面には、ススがやや厚めに付着する。

### (2) 遺 構 外 出 土 (図版 107・191・134～147)

134～145は須恵器である。134～137は杯蓋である。134の端部には短い返りが付く。胎土には、長石、角閃石、1～2mmの小礫が混入する。焼成の影響か、全体的にやや軟質である。外面には重ね焼きの痕跡が残る。II～III期(7世紀末～8世紀前葉)に比定される。135の頂部には、直径4.6cmの環状の摘みが付く。内面は摩耗により、ロクロ目が平坦となる。墨痕が認められないことから、硯ではなく砥石に転用した可能性が考えられる。また、形状から持ちやすいように打ち欠いている可能性もある。136の胎土は混入物が少なく、精良である。端部の屈曲は、非常に短い。137は、136の胎土と似る。138～140は有台杯である。139の底部には、わずかに内傾接地の高台が付く。砂粒の動きより、ロクロの回転方向は右回転である。III～IV期(8世紀初頭～9世紀初頭)に比定される。141～145は無台杯である。いずれも底部外間に、ヘラ切り痕が残る。

146・147は土師器の長甕である。146・147ともに、体部外面は縱方向のケズリで整えられる。口縁部はヨコナデのほか、工具による調整も認められる。口縁部は外反するが、やや弱い。146の体部外面には、薄いススが付着するが、コゲはない。このタイプの長甕は、[春日 2007] の湯沸し長釜 C 2類に属し、II～IV期(7世紀後葉～9世紀初頭)に比定される。

## 9 下層(古墳時代)の遺物

### A 概 要

2009年度調査(E区・D2区)では、土器がコンテナ81箱(箱の内寸: 54cm×34cm×10cm)出土した。土器のほとんどが土師器である。黒色土器や須恵器は、包含層と土石流に極少量含まれていた。遺構から出土した土器は、流路(SD3603・SD3650)から出土したもののが最も多く、土坑やピットから出土したものは少ない。また、遺構検出面でまとめて出土した土器も多く認められ、その部分については土器集中(SX)として土器を取り上げた。土師器には、高杯形土器(以下、高杯)、杯形土器(以下、杯)、鉢形土器(以下、鉢)、壺形土器(以下、壺)、壺形土器(以下、壺)、ミニチュア土器がある。土器の年代については、古墳時代中期前半(5世紀第1・2四半期)に比定できるものが多く、当該期の編年を考察する上でも貴重な資料と言える。なお、須恵器出土の有無は当該期の編年を検討する上で重要な指標となるが、包含層から出土した須恵器には、古墳時代中期に比定できるものはなかった。

流路や土器集中から出土した土器は、復元率が非常に高く、使用痕(スス・コゲ)が明瞭に残るものが多い傾向がうかがえる。特に流路から出土した土器にはその傾向が強く、使用痕が良好なことから、当時の土器の使用を復元できるものがあった。この点については、第VI章1Bで述べる。また、土器には漆が付着するものが認められた。その付着状況は、①小型壺や鉢の内面に付着するもの、②高杯杯部と脚部の接合部に付着するもの、③特大壺の体部下半に付着するもの、に大別できる。付着の状況から、①は漆の保

管、②は土器の接合・補強・修復、③は土器の補強または内容物の漏れ防止が想定される。

石器はコンテナ1箱出土した。石器には勾玉1点、砥石1点、叩き石7点がある。2003年度調査で出土した石製模造品は、確認できなかった。木製品には柱根があるが、遺存状況は不良であった。

2013年度調査（D1・D3区）では、土器がコンテナ3箱（箱の内寸：54cm×34cm×10cm）出土した。土師器が大半を占め、須恵器は土石流に混入していた。土師器の出土量は決して多くないが、層位的に出土していることから、当遺跡の変遷を考察する上で重要である。石製品には白玉が1点ある。木製品には、弓1点、板状木製品3点がある。

遺物の各説については、E区・D2区（2009年度）、D1・D3区（2013年度）の順で、遺構ごとに報告する。土器の出土位置や計測値、色調等は、遺物観察表を参照されたい。土器の内外面には褐色味を帯びた筋状の付着物が認められるが、これらは埋没後に付着した植物が由来の鉄分であることから、この点については各説、観察表では触れていない。また、土器に付着する漆・スヌ・コゲの一部については、土器の年代を考察する目的で放射性炭素年代測定を行った（第IV章3B）。

## B 土器の器種分類

古墳時代中期の土器の分類は、〔滝沢2014〕に基づくこととした。定点観察の蓄積が重要と判断し、その分類名称に倣うこととした。ただし、一部の器種については名称の変更や追加、分類の細分を行った。その細分に当たっては、〔坂井1989〕等を参考にした。第5表は器種分類表、第23・24図が器種分類図、第25図が土器の部位名称である。甌・壺・鉢の器種分類や記載にあたっては、括れ度（頸部径／胴部最大径×100）や相対的な深さ（器高／胴部最大径×100）、容量なども加味した。土器の容量は器種分類を考察する上で重要な属性となることから、完形及び準完形については容量を計測した。土器の容量計測については、〔田中2006〕を参考にした。以下では、器種分類の概略に触れる。詳細は第5表を参照されたい。

**高杯** 口縁部で大別し（A～F類）、脚部で細分（I～III類）した。A類については、さらに細分した。両者の組み合わせで、「A I I類」・「F II類」などと表記する。

**杯** 〔滝沢2014〕の椀・鉢A類・B類・C I類を、本稿では杯に置き換える。

**鉢** 〔滝沢2014〕の椀・鉢C 2類を、本稿では鉢とした。

**有孔鉢** 〔滝沢2014〕の椀・鉢D類を、本稿では有孔鉢とした。底部に孔がある鉢である。

**ミニチュア土器** (425) 〔滝沢2014〕の椀・鉢H類である。手づくね成形の小型土器である。

**大型鉢** (289) 底部から口縁部に向かってほぼ真っ直ぐに立ち上がる、平底の鉢である。

**深鉢** (156) 括れが弱く、深身の鉢を深鉢と呼ぶこととした。

**壺** 器形や容量から特大壺、大型壺、小型壺に大別した。甌よりも括れ度が強く、括れ度が60未満のものを壺とした。小型壺は大型壺に比して小型で、丸底のものが大半である。ただし、平底の小型壺も認められたので、それを新たにK類とした。

**甌** 口縁部の形態と胴部の形態で細分した。両者の組み合わせで、「A II類」・「B I類」などと表記する。甌の底部には、丸底・平底があるが、平底のものが大半を占める。平底の底径は2.5～4cmと5.5cm前後に大別され、前者のほうが多い。これは成形技法によるもので、底径が小さいものはケズリによって底部が整えられる場合が多い。また、容量を参考に2段以下を特小型、2～3段を小型、容量4～7段を中型、8段前後を大型とした。

古墳時代前期及び中期以降の土師器や須恵器については、それらの出土量は少ないことから、分類・細

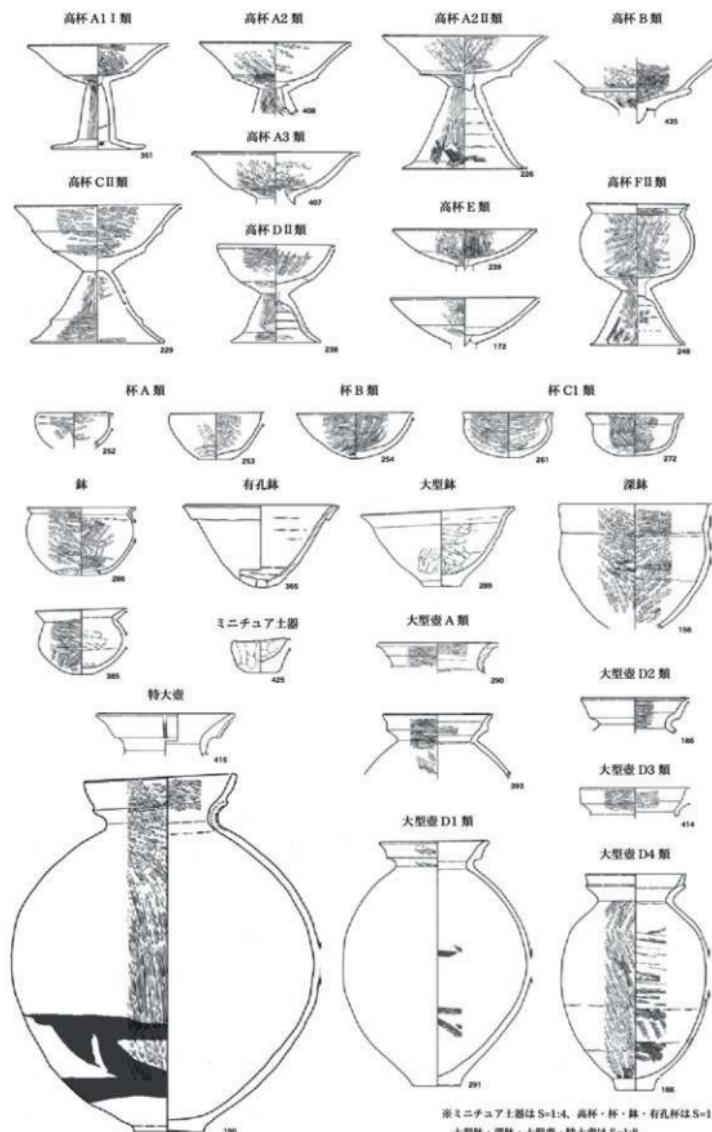
器種	[発沢 2014]の分類	本稿の分類	その特徴	備考
高杯 口縁部	A類	-	口縁部が有様のもの。	[発沢 2014]の高杯Aを細分した。
		A 1 類	口縁部と底底部が丁寧に整えられ、その境に段にならないもの。	
		A 2 類	口縁部と底底部が丁寧に整えられ、その境に明瞭な段を持つもの。	山三賀 II 遺跡の高杯B類。
		A 3 類	縁の調整がやや粗く、底底部に粘り縁（接着痕）があるもの。	
	B類	B 類	口縁部有様が下部に突出するもの、突帶を有するものを一括した。	
		C 類	口縁部が二重の縁をもつものである。	
		D 類	口縁部が成形のものを一括した。	
		E 類	口縁部が成形のもの、D類に比して身が深いもの。	
	F類	F 類	口縁部が成形のものの、脚部に施し縁をもつものもある。	山三賀 II 遺跡の高杯C類。
		G 類	-	A類と同様に口縁部が有様のものうち、口径に比して特に身が深いもの、当遺跡では出土していない。
高杯 脚部	I 類	I 類	脚部の脚部と筋部で開く裾部をもつ、いわゆる前曲脚である。脚部中位の脚み方、筋部で縫合が可能である。	大型と小型がある。I類の中に脚をもつものがあるが、脚部Ⅲは区別した。
	II 類	II 類	「八」の字に聞くもの、底部の処理で縫合が可能である。	
	III 類	III 類	裾部が有様のもの。	
	A類	杯 A 類	口縁部が大きく内削して立ち上がるものの、口縁部が丸いものの脚、面をもつものがある。	
	B類	杯 B 類	A類に比して内削が低いもの。口縁部は面をもつものが多い。口縁底部の処理、直彌形では縫合が可能である。	丸底のものと、平底のものがある。
	C 1 類	杯 C 1 類	口縁部に施すかに施しして外へ聞くものの、身が深いもの。更に口縁部の深さで縫合が可能である。	口縁部が長いものと、短いものがある。
	C 2 類	躰	C 1 類より身が深いもの。	杯 C 1 類とは作り分けをしている。直彌形の脚部が認められるのが多い。
	D類	有孔躰	有孔跡である。	
	F類	-	底部埋根棒跡を一括した。	当遺跡では出土していない。
	H類	ミニチャウ 上部	ミニチャウ上部を一括した。	
複・躰	-	大型躰	底部から口縁部に向かってほぼ直ぐに立ち上がる、平底の躰。	
	-	深躰	括れが深く、深身の躰。	
	-	特人巣	-	容量 60 汁前後のものを特人巣とし、大型巣を区別した。
	A類	A	山陰系語の二重口縁部。頭部、口縁部共に外反して立ち上がる。	
	B類	-	縫部が内削して立ち上げる「直口巣」、伊勢型「二重口縁部」の系譜を引くものと考える。	当遺跡では出土していない。
	C類	-	縫部が直立気味で立ち上がり、口縁部が内削する「二重口縫巣」。	特人巣の口縫部に近い。
	-	-	A～C類に当たらない「直口巣」を一括した。	[発沢 2014]の D類を細分した。
	D類	D 1 類	A類に比して、縫部が短く、口縫部が長いもの。	
	D類	D 2 類	口縫が外反せず、まっすぐに伸びるもの、受け口のようになる。受け口はやや聞く。	
	D類	D 3 類	D 2 類と同様に縫部が受け口をなさず、直立する。	
(人型) 甕	D 4 類	-	縫部と口縫部の接合が明瞭で、その部分が復（縫）を有するもの。	
	E類	E 1 類	直口巣である。口縫部が直立するものと外反するものがある。	[発沢 2014]の E類を細分した。
	E類	E 2 類	口縫部が内削するものの、	
	E類	E 3 類	E 1 類よりも口縫部が深い、短縫のもの、胴部が喉側である。	
	F類	-	長縫・素口巣である。	当遺跡では出土していない。
	G類	G類	小型丸底型の直縫をひくもの。ないしはその範疇で理解したいものである。口径と胴部底径がほぼ一致する。	
	H類	H類	G類に比してわずかに大きく、口縫部が長いものである。脚部底径が口径を上回るものがある。	
	I類	I 類	脚部最大径が口径を大きく上回る直口巣である。	
	J類	J 類	G～I類に比して脚部の張り出しは強い長縫直口巣。	
	K類	-	平底の小型巣を一括した。	
(L) 縫部	A類	A類	口縫部外縫・垂直な縫をもつものの、口縫部の立ち上がりで更に縫合が可能である。	
	B類	B類	口縫部が丸いものの、A類と同様に口縫部の立ち上がりで更に縫合が可能である。	
	C類	-	口縫部端に直縫をもつもの。いわゆる布糸式系譜である。	当遺跡では出土していない。
	I類	I 類	縫部のもの。	相対的な深さが 105 未満のもの。
	II類	II 類	長縫のもの。	

第 5 表 土師器（古墳時代中期）の器種分類

分は行っていない。

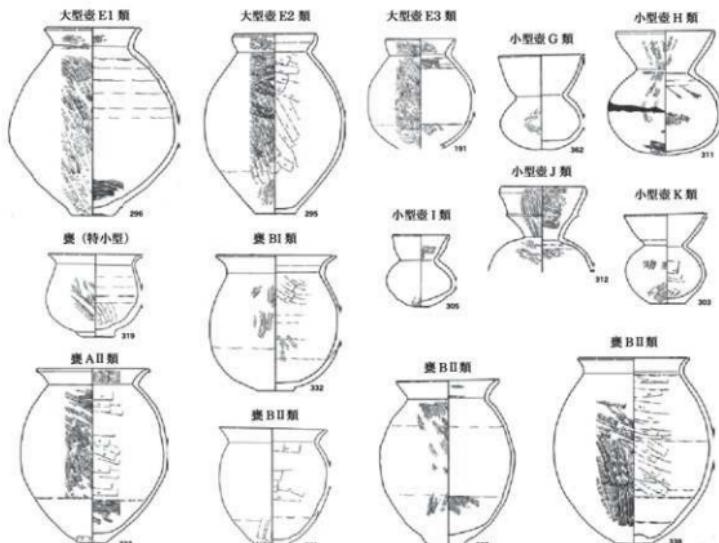
## C 土器の調整・胎土

土器の実測図に示した調整痕・成形痕は、第 26 図に示した。調整痕にはミガキやハケメのほかに、砂粒の動きが著しいものをケズリとした。ハケメが明瞭でなく、粒子の動きが捉えにくいものを工具ナデとした。調整の動きや方向、重複関係は、土器の製作技法や土器の地域性を考察する上で重要であることが

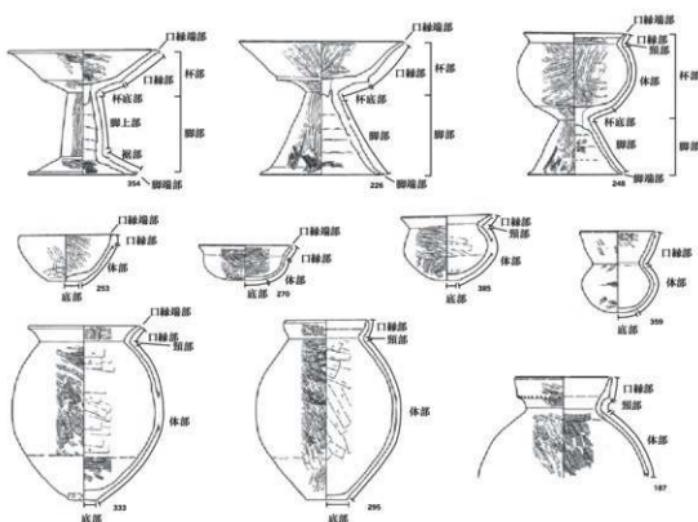


※ミニチュア土器はS=1:4、高杯・杯・牀・有孔杯はS=1:6、大型牀・深牀・大型壺・特大壺はS=1:8

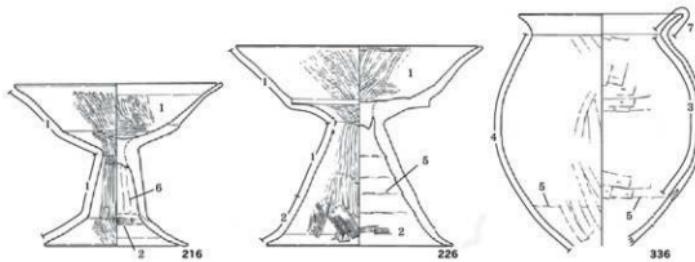
第23図 土師器（古墳時代中期）の器種分類（1）



第24図 土器器（古墳時代中期）の器種分類（2）



第25図 土器の部位名称



第 26 図 土器実測図の表現方法

ら、これらを意識して作図することに努めた。壺や壺の体部や高杯脚部の内面には、輪積み痕が残るものが多い。また、高杯脚部の内面には、粘土を筒状に寄せた時に生じる絞り痕、それを整えるためのナデや指頭痕が認められるものもある。なお、ナデは表現していない。

土師器の胎土には、基本的に石英・長石・角閃石・雲母が混入する。色調は、にぶい黄橙（10YR7/2～7/4）や灰黄褐（10YR6/2～4/2）を基調とするものが多いが、橙（7.5YR7/6）を呈するものも少量認められた。

## D 各 説

### (1) E 区

**SK3605** (図版 107・191・148・149) 148 は高杯 A 類である。口縁部と杯底部の稜がやや不明瞭で、身の浅い高杯 E 類に近い。149 は壺 B II 類である。容量が約 5.35 ℥ の中型である。内面はハケメであるが、輪積み痕が残り、丁寧な調整とは言えない。外面はハケメである。体部上半及び口縁部にはススが残るが、頸部にススは付着していない。体部下半の外面はスス酸化し、内面にはそれに対応するコゲが認められる。また、体部上半の外面にはスス酸化が、内面にはコゲが認められる。

**SK3608** (図版 107・191・150～153) 150 は高杯 A 類である。器壁がやや厚い。151 は高杯の脚部である。裾に向かってやや開くことから、脚部 II 類と考えられる。杯部と脚部の接合部の幅が 5.8 cm と、ほかの脚部よりも太い。152 は壺 D 3 類である。頸部は短く、口縁部の外反は弱い。内外面ともに丁寧なミガキである。153 は壺 B 類である。口縁端部が強く摘み出され、外反する。

**SD3602** (図版 107・191・154～156) 154 は壺 B 類である。口縁部が大きく外反する。155 は高杯 I 類である。外面は丁寧なミガキである。内面には、らせん状の輪積み痕が残る。粘土紐は反時計回りに巻き上げられたものと見られる。脚上部と裾部の接合部分には、輪積み痕が明瞭に残る。156 は頸部の括れが弱く、相対的に深い器種であることから深鉢とした。容量は約 6.31 ℥ である。口径が 24.4 cm で、器高は残存値 20.6 cm である。器壁は 1 cm 程度と厚い。内面には輪積み痕が残るもの、ハケメ後には丁寧なミガキで整えられる。外面は、内面と同様にハケメ後のミガキである。154 の使用痕実測図は、第 V 章 1 B の第 55 図で示した。

**SD3603** (図版 108～111・192～195・157～208)

**高杯** (図版 108・109・192・193・157～180) 157・158 は高杯 A I 類である。ともに調整はミガキが主体であるが、158 の杯部内外面にはハケメが残る。また、158 の脚上部内面にはらせん状の輪積

み痕が残り、粘土紐は反時計周りに巻き上げたと見られる。159は高杯A 3 I類である。口縁部と杯底部の接合部分には、輪積み痕が残る。杯部と脚部ともに、被熱によりススが付着する。160～169は高杯A 1類である。杯部の調整には、ハケメ後にミガキを加えるもの（160・161・163・168）、ミガキ主体のもの（162・164～166）、ハケメ主体のもの（167）がある。160の杯部内面のミガキは放射状に広がり、その痕跡が明瞭である。164は棱が不明瞭であり、身の深さが5.3cmと、ほかの高杯よりも深身の器形である。165は被熱により赤化している。168は被熱により内面の剥落が顕著で、さらにススが付着する。170は高杯A類としたが、身の深さが5.7cmと、ほかの高杯よりも身が深い。口縁部の外反が弱く、ほぼ真っ直ぐに立ち上がる。171・172は高杯E類である。171の器壁はやや厚い。被熱により外面がやや赤化し、内面には薄くススが付着する。172は被熱により赤化し、内外面ともに摩耗している。173は高杯A 1 II類である。口径が12.2cmと小型に属する。174・175は高杯C類で、ともに口径が20cmを超える大型品である。174の稜部には、明瞭な段差がある。174・175は被熱により、赤化している。176は高杯III類である。被熱により、一部赤化している。177・178は高杯I類である。177の脚部内面には、らせん状の輪積み痕が明瞭に残る。粘土紐は反時計周りに巻き上げたものと見られる。178の脚部中位には、直径3mmほどの穿孔がある。179・180は高杯II類である。179は底径10.4cm、脚部の高さ6.8cmの小型品に対し、180は底径17.4cm、脚部の高さ9.5cmの大型品である。

**杯・鉢**（図版109・193・181～183） 181は杯C 1類である。口縁端部がわずかに外反する。182は鉢である。内面はハケメ後に、ミガキが加えられる。外面は丁寧なミガキである。被熱により底部が赤化し、さらに器面が荒れている。183は鉢としたが、器形は鉢と特小型壺（容量2升以下）の中間的なものと言える。内外面は丁寧なミガキである。被熱により、体部上半にススが付着するが、内面にはコゲがない。

**壺**（図版109・110・193・194・184～197） 184・185は壺A類である。184は頸部よりも口縁部の方がわずかに長い。口縁端部は平坦で、面をもち、内外面ともにミガキが施される。185は口縁部と頸部の長さは、ほぼ同じである。口縁端部に向かって、器壁が薄くなる。被熱により、やや赤化している。186は壺D 2類である。頸部より口縁部の方が長い。口縁端部はつまみ出され、わずかに外反する。187は壺D 3類である。頸部と口縁部の接合部分には、ヘラ状工具による刺突が等間隔に刻まれる。体部内面はハケメ、外面はハケメ後にミガキが加えられる。口縁部及び頸部外面はミガキである。187のように刺突が巡る壺の類例として、千種遺跡の壺がある〔新潟県教育委員会1953〕。188は壺D 4類である。容量は約8.70Lである。体部は長胴で、胴部最大径は胴部中位よりやや高い位置にある。底部は器壁が厚い平底である。体部下半には、一次成形及び二次成形の輪積み痕が明瞭に残る。内面はハケメで、外面はハケメ後にミガキが加えられる。二重口縁で、頸部と口縁部の接合部に明瞭な段が生じる。口縁部はヨコナデで、しっかりと整えられる。

189・190は特大壺である。189は、上部片と下部片から復元実測した。胴部最大径は体部中位に位置し、体部は卵胴形に近い。体部の内面はハケメ、外面はミガキである。頸部は短く、まっすぐに立ち上がるのに対し、口縁部は内湾気味に立ち上がる。体部下半の内外面には、漆が帶状に付着する。190は189と比較して、体部が球胴形に近い。底部外面には木葉痕が残る。体部の内面は工具ナデまたはナデで、外面はミガキである。頸部と口縁部の接合は明瞭で、段を有する。頸部の接合面を観察すると、一定間隔でヘラ状工具による刻みが加えられる。頸部と口縁部をより密着させるためであろう。口縁端部は面を持ち、丁寧なミガキで整えられる。体部下半の外面には、帯状に漆が付着する（図版140）。その部分に一次成形の痕跡が認められることから、漆を塗ることで体部下半の強化や水漏れを防いだものと考えられる。

191は壺E 3類である。体部下半には一次成形時の輪積み痕が残り、ハケメで整えられる。二次成形時は、ケズリまたは工具ナデとなる。さらに、頭部近くになるとハケメである。内面の観察から、成形時による工具の使い分けをした様子がうかがえる。外面はハケメ後にミガキが加えられる。口縁部はわずかに内湾し、内外面ともにハケメ後にミガキが加えられる。192は壺E 2類である。内外面ともに摩耗している。193～195は壺G類である。195は口径9.8cm、器高10.9cmと、194より一回り大きい器形である。196は壺I類である。胴部の割に頭部が短く、また口縁部の外反が弱い。197は壺K類である。体部が胴長気味で、頭部には段を有する。

**甕**（図版110・111・194・195・198～208） 198は甕B I類である。口縁部は短く、外反が弱い。201～203は甕B類、199・200・204～208は甕B II類である。外面の調整はハケメが主体である。また、一次成形痕の輪積み痕が残るもの（198・199・205～208）も多い。口縁端部が丸みを持つことからB類としたが、口縁部の長さや外反度合いなどは一樣ではない。199は口縁部がまっすぐに延び、外反が弱い。200・201・203・208は口縁部が比較的長く、大きく外反する。202・205～207は頭部の屈曲が強い。204の底部はケズリにより、丸底となる。容量は約5.17lである。体部下半から底面にかけて、被熱により赤化し、器面の荒れが著しい。体部上半及び口縁部にはススが付着する。体部下半の内面にはコゲが認められる。207は体部中位でやや屈曲する器形である。内面には成形時の輪積み痕が明瞭に残る。体部中位で一度成形が止まり、そのから粘土紐を積んだ様子がうかがえる。ここで成形を止めたことが、体部の器形に影響を与えたものと考えられる。内外面ともにハケメが主体であるが、体部中位の外面にはミガキが加えられている。粘土を密着させるためであろう。当遺跡では、ミガキが加えられる甕は非常に少ない。

**SD3606**（図版111・195・209～212） 209は壺K類である。ほかの小型壺より器壁が厚く、底部もしつかりしている。被熱により、わずかに赤化する。210は高杯A I類である。211は高杯A 2類またはC類とみられる。口縁部と杯底部の境には段が付き、その部分はわずかに張り出す。212は甕B類である。

**SD3614**（図版111・195・213） 213は高杯A I I類である。口径が20cmで、大型の高杯と言える。杯部の高さが6cmに対し、脚部が6.9cmと杯部の割に脚部が短い高杯である。脚部の中位は膨らみがある。

**SD3650**（図版111～118・195～203・214～338）

**高杯**（図版111～113・195～198・214～251） 214～224は高杯A I I類である。口径が16.4～17.5cmの杯部が伴う。調整の主体はミガキであるが、脚部にハケメが残るもの（214・216・218・219）もある。215・221には被熱した痕跡が認められる。224の脚上部下位に、直径3mmほどの穿孔がある。225は高杯I類で、脚上部の中位に、直径2mmほどの穿孔がある。226・227は高杯A 2 II類である。口径20cm前後の杯部が伴う。これらを参考にすると、高杯A 2類には、ハの字に聞く脚（II類）が付く傾向がうかがえる。228は高杯A I II類である。口径23.2cm、器高17.5cm、底径17.5cmと、当遺跡で最も大きな高杯である。229は高杯C II類である。脚部II類としたが、種が認められることから、II類とIII類の中間的な脚部と言える。口径20.3cm、器高17cmの大型に属する。胎土には砂粒がやや目立つ。内外面ともにミガキで整えられるが、より外面のほうが丁寧な印象を持つ。脚上部の内面にはケズリも認められる。230～234・237は高杯A 1類である。237は身が深めである。口径20.1cm、身の深さが5.6cmと大型に属する。235・236は高杯A 2類である。それぞれの口径は18.5cm、19.2cmである。236の杯部の見込み中央部と脚上部との接合部、それぞれに漆が付着する（図版197）。236と接合する脚部は見つからなかつたが、おそらくは杯部と脚部との補強に、漆が使用されたと考えられる。また、脚部（240）

にも漆が付着する例がある(図版197)。238は高杯D II類である。計測値は口径14cm、器高12cm、底径10.7cmである。内面のミガキは、幅3mm程で放射状に広がる。外面も丁寧なミガキである。全体的に色調が橙色を呈する。239は高杯E類である。口径が17.2cmに対し、身の深さが3.5cmと相対的に浅い。内外面及び断面にも、ススが付着する。240~245は高杯II類である。II類は脚底径の大きさから、小型(11.4~13.3cm)と大型(14.8~16.6cm)に大別され、前者には杯部D類・F類が、後者には口径が20cmを超える杯部A 1類・A 2類の組み合わせが想定される。245の脚部には幅2mm程の縱方向のミガキが明瞭に残り、装飾をうかがわせる。246~248は高杯F II類、249~251は高杯F類である。口縁部が短いもの(246・249・250)と、長いもの(247・248・251)に大別される。また、250・251は杯部と杯底部に段をもつタイプである。資料の増加により、F類は杯部A類同様に稜部における段の有無や、口縁端部の形態により細分されると見られる。

**杯(図版113・114・198・199・252~282)** 252・253は杯A類である。252は口径が8.7cmと小型である。ミガキが主体であるが、ハケメも残る。253は口径11.2cmで、口縁部の内湾が弱い。内外面がミガキである。底部がケズリで整えられ、底径3.8cmの平底となる。254・255は杯B類である。ともに口径は14cm程である。255の底部はケズリで整えられ、底径3.5cmの平底となる。256は口径15.4cmで、ほかの杯と比して大型である。器形は杯A類に近い。内面はハケメ後にミガキが加えられ、外面はミガキである。口縁部のヨコナデは弱い。内外面には輪積み痕が残り、全体的に調整は丁寧とは言えない。257・258は杯C 1類としたが、口径の割に身が深い器形である。259~267・280は杯C 1類で、口縁端部の外反が短いものである。口径は10.9~13.1cmにおさまるものが多いが、280のように口径が13.8cmと大きいものもある。260は口縁部の外反が弱く、杯B類に近い。268~279・281は杯C 1類で、口縁端部がやや長いタイプである。口径が11.2~13.8cmにおさまるものが多い。281は口径15.6cmと大型である。270の底部には、ヘラ記号「×」が線刻される。282は、杯A類と鉢の中間的な器形である。口径11.2cmで、口縁部はわずかに外反する。内面には輪積み痕が残る。外面はナデ、内面はケズリである。

**鉢(図版114・115・199~283~289)** 283は杯C 1類と鉢の中間的な器形である。内外面は丁寧なミガキである。使用痕や付着物もなく、未使用の可能性が考えられる。284・285は被熱し、ススが付着する。286は器壁が非常に薄い。ほかの鉢よりも、口縁部が短く外反する。内外面は、ハケメ後にミガキが加えられる。底部はケズリで丸底となる。287の容量は約0.90ℓである。被熱により、外面にはススが付着し、内面には噴水線上のコゲが巡る(図版199)。器面の荒れは著しい。使用痕から鍋物・汁物調理に使用されたことが想定される。289は大型鉢である。口径24.8cm、器高12.5cm、底径6cm、容量は約2.18ℓである。内外面ともにケズリで、口縁部はヨコナデで整えられる。被熱により外面にススが付着するが、内面にコゲは認められない。

**壺(図版115・116・199~201~290~314)** 290は壺A類である。口径は19.1cmである。291は壺D 1類である。計測値は口径17cm、器高40.1cm、底径7.3cmで、容量は約14.76ℓである。体部は卵胴形に近い。内外面の剥落が著しく、調整は不明瞭であるが、内面にはハケメがわずかに残る。口縁部はミガキで整えられる。292・293は壺D 3類である。292の頸部には、粘土塊が貼り付けられる。粘土塊には指頭痕が付き、親指と人差し指で押さえつけた様子がうかがえる。さらに、頸部には先端が丸まった工具による浅い刺突が一列巡る。ほかの土器より色調が明るく、橙色を呈している。内外面は丁寧なミガキである。293の口縁部内面には、わずかに稜が認められる。294は壺D 4類である。295は壺E 2類である。容量は約6.60ℓである。内面はケズリで、外面はハケメ後にミガキが加えられる。体部下半の

外面には、ケズリも認められる。296・297はEⅠ類である。296は体部の張りが強い器形である。容量は約8.96㎤である。内面をみると、体部下半にハケメが残り、体部上半がナデで輪積み痕が明瞭に残っている。外面はハケメ後に、ミガキが加えられる。口縁端部は平坦な面を持ち、口縁部はミガキで整えられる。297は歪みが非常に大きい。容量は約7.80㎤である。内外面は丁寧なミガキである。体部下半は薄くとススが付着する。298～300・302は壺G類である。302は、298～300より一回り大きい。301・304・305は壺I類である。303は壺K類である。壺G類より一回り大きく、口縁部と体部最大径がほぼ同じである。306・307は壺G類の体部と見られる。308は小型壺の類で、二重口縁を持つ。口径は7.4cmで、体部最大径より口径が小さいことから、器形は壺I類に近いと見られる。309は頭部に段を有する小型壺である。口径は9.9cmと、壺G類に近い器形と考えられる。310・311は壺H類である。ともに体部中位には漆が付着する。補修した痕跡と見られる。312は二重口縁の小型壺である。口径は10.2cm、体部最大径が12.9cmと、胴部が張り出す器形が想定される。色調は赤みが強く、橙色を呈する。調整はミガキが主体で、非常に丁寧である。313は小型壺の体部である。外面は丁寧なミガキである。314は平底の小型壺である。内面全体に漆が厚く付着することから、漆を保管した容器であった可能性が考えられる。

**壺**（図版116～118・201～203・315～338）315～319は、容量2㎤以下の特小型の壺である。胴部は球胴を呈する。成形を見ると、底部にケズリを加えるもの（316）と、底部にケズリを加えずに平底を残すもの（318・319）に大別できる。315は鉢よりも口縁部が長く、かつ括れ度が強いことから、壺とした。体部上半には、外面のスス酸化消失に対応するように、内面にはバッチ状のコゲが認められる（図版201）。316は使用痕が認められないことから、未使用の可能性が考えられる。317の体部下半はスス酸化消失により赤化し、それに対応するようにバッチ状のコゲが認められる。318は内外面ともにミガキである。319の内面をみると、一次成形ではケズリにより粘土紐を密着させるが、その後ナデでは粘土紐の接合が弱くなり、輪積み痕が明瞭に残る。外面はハケメである。318・319の使用痕については、第VI章1.Bで述べる。

320～322・324～331は壺BⅡ類、323は壺B類である。320・321は小型（容量2～3㎤）である。小型の壺に分類されるものは少ない。口径が14.6～17.2cm、器高が19.6～21.3cmの間におさまるものと見られる。320は歪みが著しく、器面には凹凸が目立ち、調整が粗雑な印象を受ける。322～330は中型（容量4～7㎤）である。口径が16～18.1cm、器高が22.5～28.6cmの間におさまると見られる。体部下半に一次成形の輪積み痕が残るもの（322・324～329）が多い。

332は壺BⅠ類である。体部は体部下半に膨らみを持つ球胴形を呈する。また、厚底の平底を持つ点については壺（319）と類似する。容量は約4.95㎤である。333は、口縁端部にはつきりとした平坦面が認められることから、壺AⅡ類とした。当遺跡で壺A類に分類されるものは、非常に少ない。容量が約7.29㎤と大型に近い。

334・336～338は壺BⅡ類で、大型（容量8㎤前後）に属する。大型とした壺の計測値は、口径17.9～19.7cm、器高28.3～30.2cmである。壺B類とした335は体部が欠損しているが、口径が19.4cmと大きく大型の壺と見られる。334・337には使用痕（スス・コゲ）が認められないことから、未使用の可能性が考えられる。337の底部外面には、ドーナツ状の底部痕が残る。

小型から大型の壺には、炊飯調理をうかがわせる体部下半のスス酸化消失及びそれに対応するコゲ、側面加熱蒸らしの痕跡である体部上半のコゲなどが認められるものが多かった。これらのなかで、明瞭な使

用痕が認められる小型甕（321）・中型甕（322・324・345）・大型甕（336）については、使用痕実測図を提示し、観察したことを第VI章 1 Bで述べる。

**SX3609**（図版 118・203・339～341） 339は壺D 3類である。口縁部の外反は弱い。内面はハケメで、外面は丁寧なミガキである。340・341は甕B類である。

**SX3610**（図版 118・203・342） 342は甕B類である。外面はハケメである。内面は体部下半がケズリ、体部上半がハケメである。口縁部はヨコナデであるが、わずかにハケメが残る。

**SX3611**（図版 118・203・343） 343は甕B類である。口縁は「コ」字状に近い。

**SX3613**（図版 118・203・344） 344は壺G類である。口縁部が内湾気味である。

**SX3629**（図版 119・203・345） 345は甕B II類である。容量約 6.17ℓ で、中型の甕である。外面はハケメで、内面の調整は不明瞭だが、ナデが主体と見られる。

**SX3651**（図版 119・203・346・347） 346・347は大型壺である。347は底部には漆が付着する（図版 203）。内面はヘラ状工具によって塗られたように見える。外面には剥落または人為の剥離によって生じたくぼみがあり、その部分に漆が厚く付着する。347は漆パレットであった可能性が考えられる。

**SX3652**（図版 119・203・348） 348は甕B II類である。内面には一次成形のハケメが明瞭に残る。二次成形はケズリ・工具ナデで整えられる。外面には一次成形時のハケメよりも細かなハケメが用いられている。口縁端部はわずかに外反する。

**SX3653**（図版 119・203・349・350） 349は甕B類、350は高杯I類である。

**SX3654**（図版 119・120・203・204・351～362） E区の最下層から出土した土器群であり、当遺跡の編年を検討する上で重要な資料である。351・352・354～356は高杯A I I類で、353は高杯A 3 I類である。351～354は脚部が長めである。355は脚上部がやや膨らみ、351～354と比べ脚部がやや短くなる。356は脚上部に膨らみをもち、なおかつ裾部の屈曲が非常に強い。356は杯部が大きいこともあり、脚部が短い印象をもつ。357は高杯II類である。底径 10cm と II類のなかでは、小型に属する。358～362は壺G類である。359は2片から復元実測した。これらは口径 8.9～10.5cm、器高 9.3～11.6cm におさまる。360の底部は厚く、平底に近い器形を呈する。

**SX3655**（図版 120・204・363～365） 363は高杯A 2類である。364は杯C 1類である。口径 11.6cm で、口縁端部が短く外反する。365は有孔鉢である。口縁部は複合口縁である。計測値は口径 18.4cm、器高 10.2cm である。底部には直径 1.5cm の孔がある。内外面の調整はナデが主体で、内面にはわずかに輪積み痕が残る。口縁部のヨコナデも弱い。内外面ともに被熱による痕跡はなく、付着物もない。

**SX3656**（図版 120・205・366） 366は甕II類である。外面は工具ナデ、内面はケズリである。底部はケズリで整えられ、底径はかなり小さくなり、丸底に近い器形である。

**SX3657**（図版 120・205・367） 367は甕B II類である。容量は約 4.36ℓ で、中型に属する。内面の調整は不明瞭であるが、工具ナデとみられる。外面はハケメで、底部はケズリで整えられる。

**SX3658**（図版 120・205・368～373） 368は高杯I類、369は高杯II類である。370は杯C 1類である。371は括れが弱く、身が深いことから鉢としたが、鉢と小甕の中間的な器形と言える。内面はケズリ、外面はハケメである。372は壺G類である。373は甕である。体部上半が欠損しているが、おそらく体部は球制を呈すると見られる。

**SX3659**（図版 120・205・374） 374は壺D 3類である。頸部は短く外反し、口縁部は直立する。口縁端部が欠損しているが、本来は外反していたと見られる。

**SX3660**（図版 120・205・375・376）375 は高杯 A I 類である。被熱により、赤化する。376 は高杯 I 類である。

**SX3661**（図版 121・205・377～390）377 は口縁部と杯底部の屈曲が弱く、身が浅いことから高杯 E 類とした。378・379 は高杯 A I 類である。378 は被熱により外面がわずかに赤化し、内面は剥落している。380 は高杯 III 類である。381～383 は高杯 I 類である。383 は脚上部の中位が膨らみ、その部分に直径 3mm ほどの穿孔が認められる。384 は杯に分類したが、その器形はコップ形のミニチュア土器に似る。内面には指頭痕がわずかに残り、外面ともにミガキで整えられる。385 は鉢である。容量は 0.38ml である。体部上半はミガキ、体部下半はハケメである。底部は平底で、底径は 2.1cm である。被熱によりスリスが付着するが、コゲはない。386 は口縁部が欠損している為、器種の判断が難しいが、小型壺と比べ括れが弱いことから鉢とみられる。外面ともに丁寧なミガキである。387 は小型壺の体部である。388～390 は壺 B 類である。388 は底部が欠損しているが、胴部は球胴体を呈するとみられる。390 の口縁部は、「コ」字口縁に近い形状である。

**SX3662**（図版 121・206・391～396）391 は高杯 A II 類、392 は高杯 I 類である。ともに脚上部の中位や膨らむ。393 は壺 A 類である。口縁部はミガキであるが、わずかにハケメが残る。394 は壺 B 類である。体部の器壁が薄いのに対して、口縁部の器壁は厚めである。395 は壺 B II 類である。容量が約 2.64ml と、小型に属する。体部下半には、一次成形の痕跡が明瞭に残る。底部はケズリで整えられる平底で、底径が 3.6cm である。396 は壺 B II 類である。容量は約 7.05ml である。平底で、底径は 6.2cm である。体部下半には一次成形の痕跡が残る。外面ともにハケメである。口縁部の屈曲はやや弱い。体部下半の外面にはススと赤化、内面にはバツチ状のコゲが認められる。

**SX3664**（図版 121・206・397・398）397 は杯 C I 類である。口径が 11.2cm である。398 は小型壺で、口径が 10.6cm、頭部の長さが 5.1cm と、壺 G 類より一回り大きいことから、壺 H 類と考えられる。

**SX3666**（図版 121・122・206・399・400）399 は高杯 I 類である。被熱により、赤化している。400 は杯 C I 類である。口径は 13.5cm である。被熱により赤化し、ススが付着する。

**SX3667**（図版 122・206・401）401 は大型壺である。底径は 8.2cm である。外面ともに丁寧なミガキである。

**SX3668**（図版 122・206・402）402 は大型壺である。底径が 5.2cm に対し体部最大径が 30cm であることから、胴の張りが強い器形が想定される。

#### 遺構外出土（図版 122・123・206・207・403～425）

**高杯**（図版 122・206・403～411）403～406 は高杯 A I 類である。403 は杯部がまっすぐに立ち上がり、口縁部の外反が弱い。全体的に器壁が厚い。407 は高杯 A III 類である。口径が 20cm と大型である。408 は高杯 A II 類である。脚部は欠損しているが、裾部に向かって開いていることから、脚部は II 類と考えられる。409 は高杯 I 類である。高杯 I 類のなかでは、脚上部が短い。410 は、高杯 I 類としたが脚上部と裾の屈曲が弱く、ハの字状に近い。411 は高杯 II 類である。脚底径が 11.2cm と、II 類のなかでも小型である。

**壺**（図版 122・206・207・412～417）412 は壺 A 類である。頭部と口縁部の外反がともに弱い。413 は壺 D 2 類である。頭部が短く、口縁部は外側に向かって立ち上がり、さらに口縁端部が短く外反する。414 は壺 D 3 類である。頭部が短く、口縁部が直立する。415 の口径は 21.9cm と、大型壺より大きい。全体に器壁が厚いことから、特大壺の可能性も考えられる。頭部が直立し、口縁部が大きく外反す

る。口縁部には突帯が付くが、その単位は不明である。突帯にはヘラ状工具による刻みが施される。416は壺E 2類とした。口縁部がやや内湾し、体部が卵胴形を呈する。外面は丁寧なミガキである。被熱により、外面にススが付着するが、内面にはコゲはない。底部が赤化していることから、浮き置きの状態で火にかけられたことが想定される。417は壺H類である。口径が12.9cm、器高が17.6cmで、壺G類より一回り大きい。

**甕(図版122・123・207・418～422)** 418は甕B I類である。2片より復元実測した。底部はやや厚く、底径6.1cmの平底である。口縁部の器壁も厚めで、端部はわずかに外反する。内外面の調整は、工具ナデである。体部下半には、外面にスス、内面にはバッチ状のコゲが認められる。419～423は甕B類であるが、口縁部の形態は一様でない。419の口縁部は短く、まっすぐに立ち上がる。420は体部の器壁が薄いのに対し、口縁部は厚くしっかりした作りである。422は頸部の屈曲が強い「く」の字口縁である。421・423は端部が短く外反する。

**ミニチュア土器(図版123・207・424・425)** 424は甕形を呈する。計測値は口径3.2cm、器高3.7cmである。器壁が非常に薄く、輪積み痕が残る。425は口径4.5cmのコップ状を呈する。内外面には指痕痕が明瞭に残る。425に類似したものが、2003年度調査のDO(土器集中遺構)10・66等から出土している。

**石製品(図版123・207・426)** SD3602から砾石(426)が出土した。石材は凝灰岩である。形状は角柱状を呈し、計測値は長さ156mm、幅68mm、厚さ65mmである。礎面は4面であり、いずれも平坦である。上部には自然面が残り、下部は破損している。

## (2) D 2 区

**SD2100(図版123・124・207・208・427～444)** 427は高杯A 3 I類である。調整はミガキが主体であるが、口縁部と杯底部の接合が弱いため、輪積み痕が残る。428は高杯A 1 I類で、429～433は高杯A 1類である。429はハケメが主体で、430～434はミガキが主体である。430・431・433は口径20cmを超える大型品である。434は高杯A 2類である。435は高杯B類である。434・435は口縁部が欠損しているものの、杯底部の大きさから、口径が20cmを超えるものと見られる。435以外、高杯B類は認められなかった。436・437は高杯1類である。438は杯B類である。底部がわずかしか残っていないが、平底と見られる。内外面が剥落しており、調整は不明瞭である。439は杯C 1類である。口縁端部は短く外反する。440は鉢である。被熱によりススが付着し、また体部下半のスス酸化消失に対応するバッチ状のコゲが認められる。441は括げが弱いことから、壺ではなく、鉢とした。外面は丁寧なミガキである。内面には漆が付着しており、調整は不明である。外面にはススが付着する。漆を入れた状態で、火にかけたのであろうか。漆液を加熱することで水分量を低下させ、漆の質を高める、クロメと呼ばれる作業が行われた可能性が考えられる。クロメには搅拌作業が伴うことから、口が広い鉢が用いらされたことが想定される。付着した漆は厚く残っていたことから、良好な分析試料と考え、放射性炭素年代測定を行った。その結果、AD345～403年という年代値が得られた(第Ⅳ章3 B参照)。442は小型壺で、口径が12cmと壺G類より大きいことから、壺H類とした。443は壺G類の体部である。444は壺B類である。

**SD2101(図版124・208・445)** 445は壺B II類である。SX2123出土の土器片と多く接合した。容量が約3.56mlで、小型壺である。

**SD2124(図版124・208・446)** 446は壺A類である。体部内面の調整はナデが主体で、ハケメはわ

すかである。輪積み痕が明瞭に残り、作りが粗雑な印象を受ける。体部に比べ、頭部の器壁が厚く、ほかの壺A類よりも外反が弱い。口縁部はミガキである。

P2151（図版 124・208・447） 447 は高杯II類である。脚底径が 19cm を超える大型である。

P2152（図版 124・208・448） 448 は壺B類である。口縁部の屈曲が弱く、体部の張りも弱い器形である。

P2170（図版 124・208・449） 449 は高杯A 3類である。杯底部と口縁部の接合部分が丁寧に整えられておらず、内外面に輪積み痕が残る。

SX2123（図版 124・125・208・450・458） 450・451 は高杯A 1類である。450 は身の深さが 4.4cm と、高杯A類のなかでは身が深い。口縁部が大きく外反する特徴もある。452 は高杯II類である。脚底径が 21cm を超える大型である。453～456 は壺G類である。453～455 の体部は球胴に近いのに対し、456 の体部は扁平である。底部の器壁が厚く、底部の中央部分が直徑 2cm 程度凹んでいる。457・458 は壺B類である。

SX2125（図版 125・208・459） 459 は壺B類である。頸部よりも口縁部の方が、器壁が厚い。

遺構出土（図版 125・208・209・460～467） 460 は高杯II類である。脚部の高さが 3.8cm と低い。杯底部の立ち上がりから、高杯D類が付くことが想定される。461 は高杯A 1類である。462 は高杯I類である。463 は壺G類、464 は壺K類の体部である。465 は壺B類である。466 は杯C 1類である。467 はVI a 層から出土した須恵器の杯蓋である。467 は古代に比定されることから、VI a 層に混ざり込んだものと考えられる。

土石流（図版 125・209・468～470） 468 は黒色土器の杯である。相田泰臣氏の分類【相田 2004】を参考にすると、杯A 2類となり、古墳時代後期の 6 世紀代に比定できる。469 は壺A類である。470 は弥生土器の壺である。口縁は複合口縁で、波状の櫛書き文が施されている。弥生時代後期から終末期に比定され、信州地方の箱清水式に類似する。

石製品（図版 125・209・471～474） 471 は緑色凝灰岩製の勾玉である。濃緑色の極めて良質な石材が、丁寧な研磨によって仕上げられている。頸部境の内側には、わずかな溝が刻まれ、頭部と背部を区画している。孔は表裏両側から穿たれている。シリエットは「コ」字状をなしていることが特徴的である。今後、科学分析等による裏付けが必要となるが、出雲地方で製作された勾玉と石質・形態が似る。472～474 は、敲石である。表裏の平坦面に敲打痕があるものは台石と似た機能、端部に敲打痕があるものは敲打具としての機能を果たしたのであろう。

### （3）D 1 ・ D 3 区

SX2536（図版 126・209・475） VII 層水田から出土した土器で、当区で最も古い時期に位置付けられる。体部はハケメが主体であり、口縁部内面もハケメで丁寧に整えられる。体部下半がケズリで整えられ、直徑 6.2cm の底部を残す。底部の器壁は非常に薄い。使用痕は明瞭に残っていた。この点については、第 VI 章 1 B で述べる。

SD2200（図版 126・209・476・477） VII 層から出土した壺（475）よりも、層位的に一段階新しい土器である。476 は壺B II類である。体部中位よりもやや下位が、最大径となる。477 は複合口縁の壺である。口縁部のヨコナデが弱く、調整はやや粗雑な印象を受ける。

遺構出土（図版 126・209・210・478～486） 層位の古い順から報告する。VII b 層からは、高杯A 1類（478）・壺（479）が出土した。479 の口縁部が短く、頸部の屈曲が弱い。胸部が不明であるが、短

頸壺と想定される。VII a 層からは、高杯 I 類 (480) が出土した。VI c 層からは黒色土器の鉢 (481)・高杯 A 1 類 (482) が出土した。482 の脚上部外面は、縱方向のミガキである。K 層 (VI c 層と VI b 層の間層) からは、壺 B 類 (483) が出土した。頸部から口縁部に向かってまっすぐ延び、端部でやや強く外反する。VI b 層 (水田耕作土) からは、高杯 I 類 (484)・小型壺の口縁部 (485) が出土した。484 の脚上部中位に直径 3mm ほどの穿孔がある。裾部にはハケメが残るが、脚上部は縱方向のミガキである。V c 層 (古代の水田を検出した VI b 層より上位の土壤化した層位) からは、土師器の有台椀 (486) が出土した。高台が高い特徴がある。遺物の時期は、[春日 1999] の VI 期 (9 世紀後半～10 世紀初頭) に比定される。

**土石流 (図版 126・210・487～489)** 土石流からは須恵器 (487～489) が出土した。487 は高杯の杯部である。胎土は混入物が少なく、精良である。外面には幅 5mm の沈線が巡り、その下位に幅 6mm の波状文が施文される。5 世紀後半に比定される。488 は有台杯である。胎土は精良であるが、長石と角閃石の混入が目立つ。焼成はやや不良である。[春日 1999] の V 期 (9 世紀前葉～9 世紀中葉) に比定される。489 は壺である。489 は口縁部には突帯が付き、突帯の下位に波状文が巡る。口縁端部は短くつまみ出され、わずかに内湾する。古墳時代後期に比定される。

**V d 層出土 (図版 126・210・490・491)** V d 層は洪水堆積層である。490 は須恵器の壺である。口縁部に突帯が 2 条巡り、その間に波状文が施文される。古墳時代後期に比定される。491 は円筒型土製品である。古代越後では 7 世紀代に多く出土する遺物である [春日 2003a]。

**木製品 (図版 126・210・492～495)** 木製品 (492～495) は VI b 層上面から出土した。492 は弓である。弭の一方が欠損している。残存している部分は、長さ 57.4cm で、太さは 2cm 程度である。芯持材を用いており、樹種はイヌガヤである。493～495 は欠損し全形は不明であるが、円形の一部が残っていることから、曲物の底板と考えられる。樹種はヒノキである。

**石製品 (図版 126・210・496)** 496 は滑石製の白玉である。直径は約 5mm で、中央には 1.5mm の孔がある。厚みは 2.5mm である。片面には平坦面であるが、もう一方は破損している（または未研磨か）。側面は平坦である。篠原祐一氏の分類 [篠原 2011] を参考にすると、C 類に分類でき、5 世紀中葉から末葉に比定できる。K 1 層（洪水堆積層）からの出土した遺物であることから、周囲から流されてきたものと考えられる。

## 第IV章 余川中道遺跡II 自然科学分析

### 1 2009年度

#### A プラント・オパール分析

株式会社古環境研究所 杉山真二

##### 1) はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 ( $\text{SiO}_3$ ) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとでも微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネの消長を検討することで水田跡（稲作跡）の検証や探査が可能である〔藤原・杉山 1984、杉山 2000〕。

##### 2) 試 料

分析試料は、D 2 区サンプルNo 1 地点、E 区サンプルNo 2 地点、D 1 区東壁基本層序、D 1 区西壁基本層序の4 地点から採取された計21 点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図(第27～30図)に示す。

##### 3) 分 析 法

プラント・オパール分析は、ガラスピーブ法〔藤原 1976〕を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を 105°C で 24 時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約 1 g に対し直径約 40  $\mu\text{m}$  のガラスピーブを約 0.02 g 添加（電子分析天秤で 0.1 mg の精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550°C・6 時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10 分間）による分散
- 5) 沈底法による 20  $\mu\text{m}$  以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 檢鏡・計数

同定は、400 倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールを対象として行った。計数は、ガラスピーブ個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。試料 1 gあたりのガラスピーブ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピーブ個数の比率をかけて、試料 1 g 中のプラント・オパール個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重、単位:  $10^{-5}\text{g}$ ）をかけて、単位面積で層厚 1 cm あたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる〔杉山 2000〕。

##### 4) 分 析 結 果

プラント・オパール分析では、イネ、ムギ類（穎の表皮細胞）、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケア科の主要な 6 分類群について同定・定量を行っている。分析結果を第 6 表および第 27～30 図に示し、

地名-SDR	D1区サンプルNo.1						E区サンプルNo.2						D1区東壁基本層序						D1区西壁基本層序					
	Va	Vd	Vla	Mb	M	I	Rb	Va	Vb	Vc	Vd	1	2	3	1	2	3	4	5	6				
イネ	Oryza sativa	7	15	45	7	15	53	23	7	15	36	7	15	22	51	15	15							
ヨシ属	Polygonum	7	15	45	15	7	15	7	16	7	36	15	7	2	44	30							22	
ススキ属	Achnatherus	8																						
タケモ目	Bromeliaceae	15	33	15	7			8	7	7	15	21	7	7	30	15	36	8		45				

規定生産量(実測値)/規定期間(年)×耕地面積(ha)×耕作面積(%)=耕作面積を1.0と設定して算出

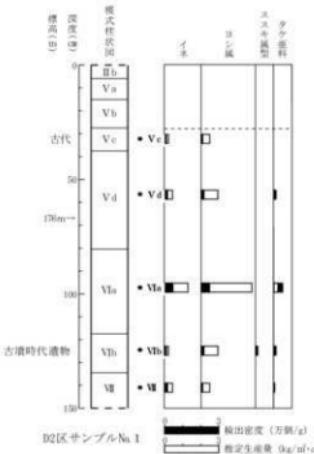
(イネ) Oryza sativa 0.20 0.44 1.34 0.20 0.44 1.55 0.66 0.22 0.44 1.05 0.22 0.44 0.66 1.49 0.44 0.44

(ヨシ属) Polygonum 0.43 0.34 2.87 0.95 0.43 0.95 0.43 0.94 0.43 3.25 0.94 0.47 0.47 2.75 1.66 1.42

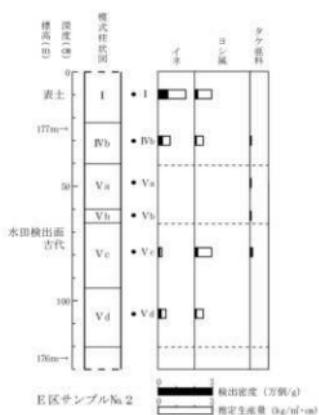
(ススキ属) Achnatherus 8

タケモ目 Bromeliaceae 0.07 0.25 0.07 0.04 0.04 0.04 0.04 0.07 0.10 0.04 0.04 0.14 0.07 0.17 0.04 0.22

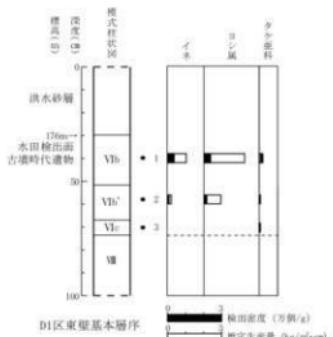
第6表 プラント・オバール分析結果



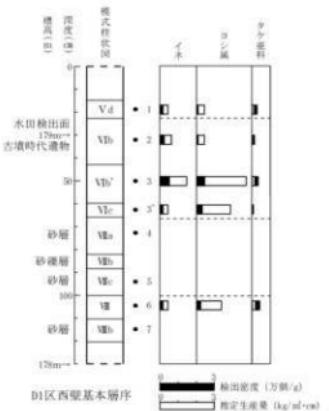
第27図 D2区におけるプラント・オバール分析結果



第28図 E区におけるプラント・オバール分析結果



第29図 D1区東壁におけるプラント・オバール分析結果



第30図 D1区西壁におけるプラント・オバール分析結果

主要な分類群の顕微鏡写真を第31図に示す。

## 5) 考 察

### a 水田跡（稻作跡）の検討

水田跡（稻作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプランツ・オパールが試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稻作が行われていた可能性が高いと判断している[杉山2000]。ただし、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

#### D 2区サンプルNo.1 地点（第27図）

V c層（古代）からVII層までの層準について分析を行った。その結果、これらのすべてからイネが検出された。このうち、VI b層（古墳時代遺物包含層）では密度が4,500個/gと比較的高い値である。したがって、同層では稻作が行われていた可能性が高いと考えられる。その他の層では、密度が700～1,500個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、稻作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

#### E 区サンプルNo.2 地点（第28図）

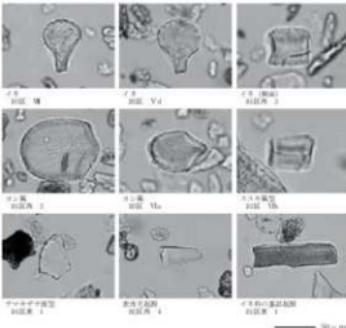
I層（表土）からV d層までの層準について分析を行った。その結果、I層、IV b層、V c層、V d層でイネが検出された。このうち、I層では密度が5,300個/gと高い値である。したがって、同層では稻作が行われていた可能性が高いと考えられる。古代の水田跡が検出されたV c層では、密度が700個/gと低い値であるが、直上のV a層とV b層ではイネがまったく検出されないことから、上層から後代のものが混入した可能性は考えにくい。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稻作が行われていた可能性が考えられる。その他の層では、密度が1,500～2,300個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、前述のようなことが考えられる。

#### D 1区東壁基本層序（第29図）

VI b層（試料1）からVI c層までの層準について分析を行った。その結果、VI b層（試料1）とVI b'層（試料2）からイネが検出された。このうち、古墳時代の水田跡が検出されたVI b層（試料1）では密度が3,600個/gと比較的高い値である。したがって、同層では稻作が行われていた可能性が高いと考えられる。VI b'層（試料2）では、密度が700個/gと低い値である。イネの密度が低い原因としては、前述のようなことが考えられる。

#### D 1区西壁基本層序（第30図）

V d層（試料1）からVII b層（試料7）までの層準について分析を行った。その結果、V d層（試料1）からVI c層（試料3')までの各層およびVII層（試料6）からイネが検出された。このうち、VI b'層（試料3')では密度が5,100個/gと高い値である。したがって、同層では稻作が行われていた可能性が高いと考える。



第31図 プラント・オパールの顕微鏡写真

えられる。古墳時代の水田跡が検出されたVI b層(試料2)では密度が2,200個/gと比較的低い値であるが、直上のV d層(試料1)の1,500個/gよりも高い値であることから、上層から後代のものが混入した可能性は考えにくい。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。VII層(試料6)では密度が1,500個/gと比較的低い値であるが、直上のVII c層ではイネがまったく検出されないことから、上層から後代のものが混入した可能性は考えにくい。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。イネの密度が低い原因としては、前述のようなことが考えられる。

#### b イネ科栽培植物の検討

プラント・オパール分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類やヒエ属(ヒエが含まれる)などがあるが、これらの分類群はいずれの試料からも検出されなかつた。

#### c 堆積環境の推定

ヨシ属は湿地的なところに生育し、ススキ属やタケア科は比較的乾いたところに生育している。このことから、これらの植物の出現状況を検討することによって、堆積当時の環境(乾燥・湿潤)を推定することができる。おもな分類群の推定生産量によると、イネ以外の分類群ではおむねヨシ属が優勢であり、その他の分類群は少量である。

以上のことから、砂層などを除く各層準の堆積当時は、おむねヨシ属が生育するような湿地的な環境であったと考えられ、そこを利用して水田稲作が行われていたと推定される。

### 6) まとめ

プラント・オパール分析の結果、古墳時代の水田跡が検出されたVI b層ではイネが比較的多量に検出され、同層で稲作が行われていたことが分析的に検証された。また、古代の水田跡が検出されたV c層についても、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。

その他の層準については、D 2区サンプルNo.1地点のVI a層、E区サンプルNo.2地点のI層、D 1区西壁基本層序のVI b'層からイネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、D 1区西壁基本層序のVII層などでも稲作が行われていた可能性が認められた。

砂層などを除く各層準の堆積当時は、おむねヨシ属が生育するような湿地的な環境であったと考えられ、そこを利用して水田稲作が行われていたと推定される。

## B 花粉分析

株式会社古環境研究所 金原正子

### 1) はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復元に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。ここでは、余川中道遺跡における稲作の検討と周辺植生を推定する目的で花粉分析を行った。

## 2) 試 料

分析試料は、G 区石組井戸 SE4113 底部（中世）より採取された試料 1 点、E 区サンプル No.2（古墳時代中期～後期初頭）より採取された I 層、IV b 層、V a 層、V b 層、V c 層、V d 層の試料 6 点の計 7 点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図（第 27～30 図）に示す。これらは、植物珪酸体分析に用いられたものと同一試料である。

## 3) 方 法

花粉の分離抽出は、[中村 1967] の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から 1 cm<sup>3</sup> を採量
- 2) 0.5% リン酸三ナトリウム (12 水) 溶液を加え 15 分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.5mm の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 4) 25% フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置
- 5) 水洗処理の後、冰酼酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酼酸 9 : 濃硫酸 1 のエルドマン氏液を加え 1 分間湯煎）を施す
- 6) 再び冰酼酸を加えて水洗処理
- 7) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって 300～1000 倍で行った。花粉の同定は、[島倉 1973] および [中村 1980] をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亞科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン (-) で結んで示す。イネ属については、[中村 1974・1977] を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。また、この処理を施すとクスノキ科の花粉は検出されない。

## 4) 結 果

### a 分類群

出現した分類群は、樹木花粉 21、樹木花粉と草本花粉を含むもの 2、草本花粉 20、シダ植物胞子 2 形態の計 45 である。これらの学名と和名および粒数を第 7 表に示し、花粉数が 200 個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを第 32・33 図に示す。主要な分類群は顕微鏡写真に示した（第 34 図）。また、寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。以下に出現した分類群を記載する。

#### 〔樹木花粉〕

モミ属、ツガ属、マツ属複雜管束亜属、スギ、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、ヤナギ属、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属—アサダ、クリ、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属—ケヤキ、ウルシ属、モチノキ属、カエデ属、トチノキ、ブドウ属、トネリコ属

#### 〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

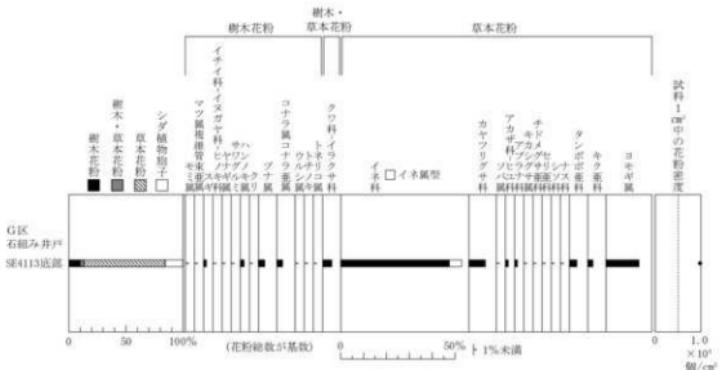
クワ科—イラクサ科、ウコギ科

学名	和名	G区右組み 月日	E区サンプル% 2				
			I樹	Nb樹	Va樹	Vb樹	Vc樹
Athorac pollen	樹木花粉		SE4113前部				
Acer	モミ属	1					
Tsuga	ツガ属						1
Pinus subgen.Diplostachys	マツ属複被管束系属	1	1	1			
Cryptomeria japonica	スギ	5	2	1			
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科・イヌガヤ科・ヒノキ科	3	2		3	1	
Si is	ヤマゴケ	3					
Juglans	クルミ属					1	
Pterocarya rhoifolia	サワグルミ	2				2	3
Alnus	ハンノキ属	7	46	1	8	11	15
Betula	カバノキ属			1			
Carpinus-Ostrya japonica	カシノデ属・アサガ			1			
Castanea crenata	クリ	1	2		2	9	
Fagus	ブナ属	11	6		2	18	16
Quercus subg. Lepidobalana	コナラ属・ナラ属	10	16		2	15	14
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属・ケヤキ		5			1	4
Rhus	ウラジロ属	1					
Bux	モチノキ属					1	
Acer	カエデ属						1
Aesculus turbinata	トチノキ	1	12		2	9	18
Vitis	ブドウ属					1	
Fragmus	トネリコ属	1					
Athorac - Nonboreal pollen	樹木・草本花粉						
Moraceae-Urticaceae	クワ科・イラクサ科	16	15			10	10
Araliaceae	ウコギ科				1		
Nonboreal pollen	草本花粉						
Allom	サジオモダカ属					2	
Rei mario	オモダカ属					3	2
Grimmiaceae	イネ科	191	74	6	14	93	88
Oxypet type	イネ属型	22	2	1		8	13
Cyperaceae	カヤツリグサ科	29	47			35	37
Allium	ネギ属		1				
Polygonum sect. Persicaria	タデ属サナエタデ節					1	2
Fagopyrum	ソバ属	1					
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アザサ科・ヒユ科	5	1	11	1	2	3
Caryophyllaceae	ナデシコ科					2	
Cruciferae	アブラナ科	5	1	1	1	16	13
Impatiens	ツリフネソウ属			1		1	1
Rosidae	カシグサ属	1				2	4
Hydrocotylidae	チドメグサ亞科	1					
Apoideae	セリ亞科	2		1		4	1
Labiatae	シソ科	2					
Solanaceae	ナス科	1					
Lachnoidae	タンボポ亜科	13			1		
Asteridae	キク亜科	9	1		1	4	4
Artemisia	ヨモギ属	58	45		3	30	57
Fern spore	シダ植物孢子						
Monolete type spore	单条溝孢子	47	1	32	1	23	47
Trilete type spore	三条溝孢子	29		3		2	2
Athorac pollen	樹木花粉	47	0	94	3	14	72
Athorac - Nonboreal pollen	樹木・草本花粉	16	0	15	0	1	10
Nonboreal pollen	草本花粉	340	2	184	7	21	203
Total pollen	花粉總數	403	2	293	10	36	285
Pollen freq. nics of 1cm <sup>3</sup>	試料 1cm <sup>3</sup> 中の花粉密度	9.8	2.1	1.8	6.0	2.6	1.8
		$\times 10^3$	$\times 10 \times 10^3$	$\times 10 \times 10^3$	$\times 10^3$	$\times 10^3$	$\times 10^3$
Unknown pollen	未同定花粉	7	1	15	0	1	11
Fern spore	シダ植物孢子	76	1	35	1	25	49
Hederae eg	海生苔類	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Dig strob. remains	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal frag. ents	黒鉛灰化物	(++)	(+)				

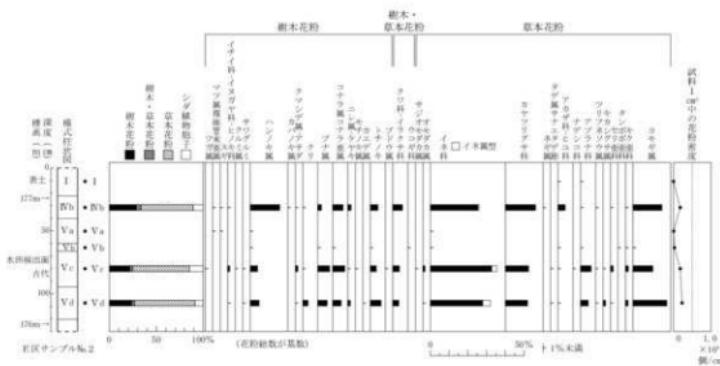
第7表 余川中道遺跡の花粉分析結果(2009年度)

## 〔草本花粉〕

サジオモダカ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ネギ属、タデ属サナエタデ節、ソバ属、アザサ科・ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、ツリフネソウ属、キカシグサ属、チドメグサ亞科、セリ亞科、シソ科、ナス科、タンボポ亜科、キク亜科、ヨモギ属



### 第32回 SE4113における花粉ダイアグラム



第33図 E区における花粉ダイアグラム

### 〔シダ植物胞子〕

单条满胞子、三条满胞子

## b 花粉群集の特徴

G区石組井戸 SE4113 底部（第32図）

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高く、約 70%を占める。草本花粉ではイネ科(イネ属型を含む)が卓越し、ヨモギ属、カヤツリグサ科が伴われ、タンボボアザ科、キクアザ科、樹木・草本花粉のクワ科—イラクサ科が低率に出現する。わずかにソバ属が検出される。樹木花粉ではブナ属、コナラ属コナラアザ属、ハンノキ属、スギなどが低率に出現する。

### E区サンプルNo.2 (第33図)

下位より層ごとに花粉構成と花粉組成の変化の特徴を記載する。V層（Vd層、Vc層、Vb層、Va層）において、花粉密度は比較的低いが、Vd層、Vc層では統計処理可能な計数が得られ、樹木花粉より

草本花粉の占める割合が高く、約 65 から 60% を占める。草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む）が優占し、ヨモギ属、カヤツリグサ科、アブラナ科が伴われ、オモダカ属が出現する。樹木花粉ではブナ属、コナラ属コナラ亜属、トチノキ、ハンノキ属、クリなどが低率に出現する。V b 層、V a 層では花粉密度が低くなり、ほとんど検出されない。IV b 層では、下部の V d 層、V c 層と類似した花粉構成、組成を呈する。草本花粉が約 55% を占め、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属が優占し、下部よりアザ科ヒユ科が増加し、アブラナ科が減少する。樹木花粉ではハンノキ属が増加する。I 層では花粉密度が極めて低くなり、ほとんど検出されなくなる。

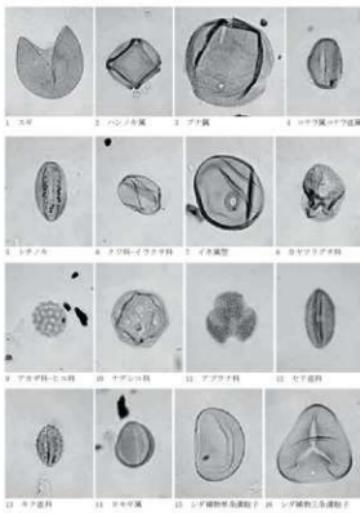
### 5) 花粉分析から推定される植生と環境

#### G 区石組み井戸 SE4113 底部

堆積地周辺は、多様な環境に生育する種類の多いイネ科が優勢で、水生植物の多いカヤツリグサ科、やや乾燥した場所に生育するヨモギ属、タンボポ亜科、キク亜科などの草本が繁茂し、湿地からやや乾燥した環境であったとみなされる。樹木・草本花粉のクワ科・イラクサ科は、ここでは路傍や荒れ地に生育するカラムシやカナムグラなどの草本が考えられ、草地に混在していたとみなされる。またイネ科にはイネ属型が伴われ、栽培植物を含むソバ属が出現し、水田やソバの畑が分布していた可能性も考えられる。近隣にはブナ属、コナラ属コナラ亜属、ハンノキ属などの落葉広葉樹や、スギなどが生育していた。

#### E 区サンプル No. 2

花粉群集の特徴から植生の復元を行う。V d 層、V c 層では、イネ属型が水田雜草のオモダカ属を伴い出現することから堆積地ないし周囲に水田が分布していたと考えられる。水田の周囲には、乾燥を好むヨモギ属、アブラナ科や、水生植物のカヤツリグサ科などの草本が繁茂していたとみなされる。近隣の森林はブナ属、コナラ属コナラ亜属、トチノキ、ハンノキなど構成される落葉広葉樹が分布していたと考えられる。V b 層、V a 層では花粉などの有機質遺体が分解されるような乾燥ないし乾湿を繰り返す堆積環境であったと考えられる。IV b 層では、下部の V d 層、V c 層と同様に水田の分布が示唆される。ハンノキ属のハンノキは湿地林を形成したり、河辺林、端境林に利用される種でトチノキなどとともに湿地林が拡大したか、堆積地に近接して生育していたと考えられる。I 層では花粉密度が極めて低く、花粉などの有機質遺体が分解されるような乾燥ないし乾湿を繰り返す堆積環境であったか、堆積時間が速かったことなどが考えられる。



第34図 花粉・胞子の顕微鏡写真

## C 珪藻 分析

株式会社古環境研究所 金原正子

### 1) はじめに

珪藻は、珪酸質の被殻を有する单細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映しており、水域を主とする古環境復元の指標として利用されている。

### 2) 試 料

分析試料は、E区サンプルNo.2より採取されたI層、IVb層、Va層、Vb層、Vc層、Vd層の試料6点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図(第27~30図)に示す。これらは、植物珪酸体分析、花粉分析に用いられたものと同一試料である。

### 3) 方 法

以下の手順で、珪藻の抽出と同定を行った。

- 1) 試料から1cm<sup>3</sup>を採量
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温反応させながら1晩放置
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドを水洗(5~6回)
- 4) 残渣をマイクロビペットでカバーグラスに滴下して乾燥
- 5) マウントメディアによって封入し、プレバラート作成
- 6) 検鏡、計数

検鏡は、生物顕微鏡によって600~1500倍で行った。計数は珪藻被殻が200個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレバラート全面について精査を行った。

### 4) 結 果

#### a 分類群

試料から出現した珪藻は、中一貧塩性種(汽一淡水生種)1分類群、貧塩性種(淡水生種)15分類群である。破片の計数は基本的に中心域を有するものと、中心域がない種については両端2個につき1個と数えた。第8表に分析結果を示し、出現した珪藻を第35図に示す。珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性は【Lowe1974】や【渡辺2005】等の記載により、陸生珪藻は【小杉1986】により、環境指標種群で汽水生種は【小杉1988】により、淡水生種は【安藤1990】による。また、主要な分類群について顕微鏡写真を示した(第36図)。以下にダイアグラムで表記した分類群を記載する。

##### 〔中一貧塩性種〕

*Achnanthes brevipes*

##### 〔貧塩性種〕

*Coccconeis placentula*, *Cymbella silesiaca*, *Diatoma mesodon*, *Diploneis yatukaensis*, *Fragilaria capucina*, *Gomphonema clevei*, *Gomphonema parvulum*, *Gomphonema truncatum*, *Hantzschia amphioxys*, *Navicula*

*cuspidata*, *Navicula mutica*, *Navicula* spp., *Neidium ampliatum*, *Nitzschia palea*, *Pinnularia schroederii*

### b 珪藻群集の特徴

E区サンプル№2 (V d層, V c層, V b層, V a層, IV b層, I層)において、下位より珪藻構成と珪藻組成の変化の特徴を記載する。いずれの試料においても珪藻密度が極めて低く、統計処理に有効な計数は得られなかった。わずかながらV d層では好止水性種の *Diploneis yatkaensis*, 流水不定性種の *Fragilaria capucina*, *Navicula cuspidata*, 陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys*, *Navicula mutica* が出現し、V c層では好塩性種の *Achnanthes brevipes*, 陸生珪藻の *Pinnularia schroederii* がわずかに出現する。V b層では好流水性種の *Neidium ampliatum*, IV b層では好流水性種の *Gomphonema clevei* がわずかに出現する。V a層では好止水性種の *Neidium ampliatum*, IV b層では好流水性種の *Gomphonema clevei* がわずかに出現する。I層では好流水性種で沼沢湿地付着生環境指標種群の *Cocconeis placenta*, 好流水性種の *Gomphonema parvulum*, 好止水性種の *Gomphonema truncatum*, *Neidium ampliatum*, 流水不定性種の *Cymbella silesiaca*, *Navicula* spp., *Nitzschia palea* がわずかに出現する。

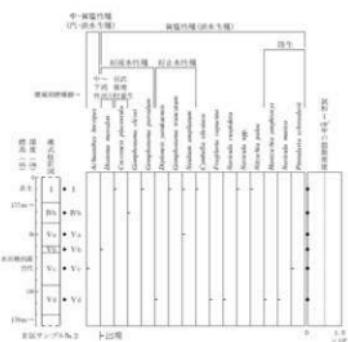
### 5) 珪藻分析から推定される堆積

#### 環境

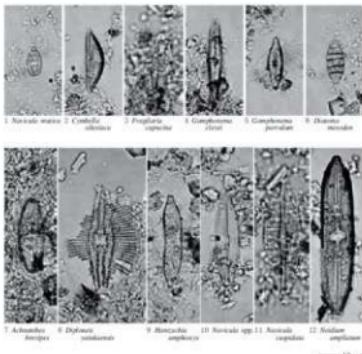
いずれの層準においても珪藻密度が極めて低く、珪藻の生育できない乾燥した環境か小刻みに乾湿を繰り返す不安定な環境が推定される。V d層では好止水性種、流水不定性種、陸生珪藻、V c層では好塩性種、陸生珪藻、V b層では好流水性種で中～下流性河川環境指標種群、V a層では好止水性種、IV b層では好流水性種、I層では好流水性種で沼沢湿地付着生環境指標種群、好流水性種、好止水性

分類群	E区サンプル№2				
	I層	V c層	V a層	IV b層	V d層
固形物					
<i>Ceratium pellucens</i>	1				
<i>Cyclotella striata</i>	3				
<i>Diatome medusa</i>					1
<i>Diploneis yatkaensis</i>					2
<i>Fragilaria capucina</i>					1
<i>Gomphonema clevei</i>				1	
<i>Gomphonema parvulum</i>	1				
<i>Gomphonema truncatum</i>	1				
<i>Hantzschia amphioxys</i>					1
<i>Navicula amphioxys</i>					1
<i>Navicula mutica</i>					1
<i>Navicula</i> spp.	2				
<i>Neidium ampliatum</i>	1		1		
<i>Nitzschia palea</i>	1				
<i>Pinnularia schroederii</i>					1
中-底氷性種群 (V d層付生)					
<i>Achnanthes brevipes</i>	10	1	1	1	6
固形物	0	0	0	0	1
総計	21	8	1	1	12
SDP (1cm <sup>-2</sup> )中の個数密度	2.0	2.0	2.0	2.0	1.4
	$\times 10^3$				
生存確率率 (%)	-	-	-	-	-

第8表 珪藻分析結果



第35図 珪藻ダイアグラム



第36図 珪藻の顕微鏡写真

種、流水不定性種とやや多様に出現し、農耕による灌水等による水の供給によりもたらされた可能性が考えられる。

## D 樹種同定

株式会社古環境研究所 金原 明

### 1) はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないとから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

### 2) 試料

試料は、余川中道遺跡より出土した柱根、杭、板、曲物、漆器椀などの木材 52 点と、鍛冶炉の燃焼材である炭化材 5 点である。

### 3) 方 法

試料のうち、木材は、カミソリを用いて試料の新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって 40 ~ 1000 倍で観察した。また、炭化材については、試料を割折して新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって 50 ~ 1000 倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

### 4) 結 果

木材の同定結果を第 10 表に、炭化材の同定結果を第 9 表に示す。主要な分類群については顕微鏡写真を第 37・38 図に示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

#### (1) スギ *Cryptomeria japonica* D.Don スギ科 第 37 図 1

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。樹脂細胞が見られる。放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1 分野に 2 個存在するものがほとんどである。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、10 細胞高以下のものが多い。樹脂細胞が存在する。以上の形質よりスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ 40 m、径 2 m に達する。材は軽軟であるが強靭で、広く用いられる。

#### (2) ネズコ *Thuja standishii* Carr. ヒノキ科 第 37 図 2

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。横断面：早材から晩材への移行はやや急である。樹脂細胞がみられる。放射断面：放射柔細胞の分野壁孔はスギ型で、1 分野に 2 ~ 4 個存在する。放射柔細胞の水平壁と接線壁が接する部分において、水平壁が山形に厚くなり、接線壁との間に溝のような構造ができる。いわゆるインデン

試料	結果 (学名/和名)
SK3102 炭化材 1	<i>Lindera</i> クロモジ属
SK3102 炭化材 2	<i>Diospyros</i> ハキノキ属
SK3102 炭化材 5	<i>Diospyros</i> ハキノキ属
SK4100	<i>Syrat</i> エゴノキ属
SK4097	<i>Prunus</i> サクラ属

第 9 表 炭化材の樹種同定結果 (2009 年度)

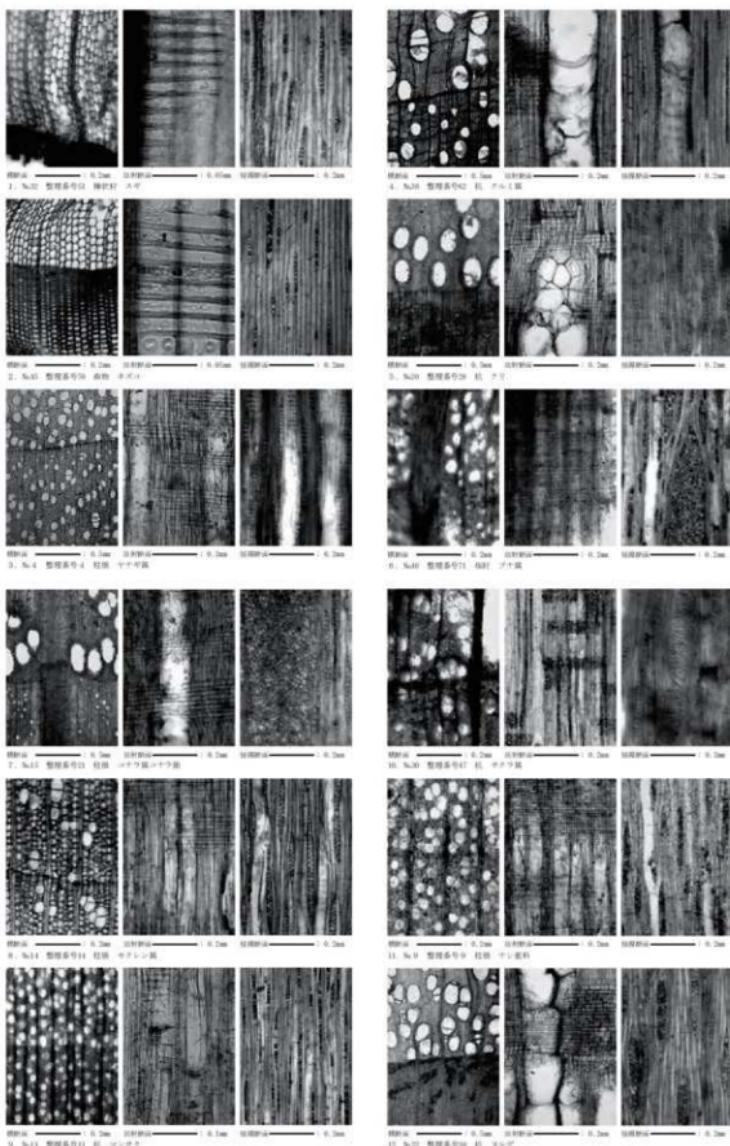
整理番号	時期	グリッド	遺構	部位	種別・形態	備考	結果(学名/和名)
1	上層	12Y22	P3081	1層	柱根		<i>Quercus sect. Primis</i> コナラ属コナラ節
2	上層	13X8	P3259	1層	柱根		<i>Quercus sect. Primis</i> コナラ属コナラ節
3	上層	14X11	P3316		柱根		<i>Subfam. Maloideae</i> シナノキ科
4	上層		P3263		柱根		<i>Al. ix</i> ガナギ属
5	上層	12Y23	P3479		柱根		<i>Quercus sect. Primis</i> コナラ属コナラ節
6	上層	12X19	P3449		柱根		<i>Acer</i> カエデ属
7	上層	14X16	P3321		柱根	転用材(ホゾ穴)	<i>Quercus sect. Primis</i> コナラ属コナラ節
8	上層	12Y23	P3287		柱根		<i>Quercus sect. Primis</i> コナラ属コナラ節
9	上層	13X5	P3208		柱根	底面部分なし	<i>Subfam. Maloideae</i> シナノキ科
10	上層		P3422		柱根	底面部分なし	<i>Acer</i> カエデ属
11	上層	12X4	P3408		柱根		<i>Hamamelis japonica Sieb. et Zucc.</i> ハンサク
12	上層	14X17	P3303		柱根		<i>Quercus sect. Primis</i> コナラ属コナラ節
13	上層	14X10	P3343		柱根	外輪部分のみ	<i>Quercus sect. Primis</i> コナラ属コナラ節
14	上層	14X12	P3320		柱根		<i>Magnolia</i> モクレン属
21	上層		P3344		柱根	底面尖る	<i>Quercus sect. Primis</i> コナラ属コナラ節
22	上層	14X16	P3363	1層	柱根	底部半円	<i>Rhus javanica</i> L. ルルデ
25	上層		P3278		柱根	ほぞ穴あり	<i>Quercus sect. Primis</i> コナラ属コナラ節
26	上層	13X9	P3291		柱根		<i>Quercus sect. Primis</i> コナラ属コナラ節
27	上層		SE4113	6層	杭	④: G区	<i>Quercus sect. Primis</i> コナラ属コナラ節
28	上層		SE4113	6層	杭	⑤: G区	<i>Castanea crenata Sieb. et Zucc.</i> タリ
29	上層		SE4113	6層	杭	①~1: 自然木に近いが面取りあり	<i>Rhus javanica</i> L. ルルデ
30	上層		SE4113	6層	杭	①~5	<i>Rhus javanica</i> L. ルルデ
31	上層		SE4113	6層	杭	②~1	<i>Castanea crenata Sieb. et Zucc.</i> タリ
33	上層		SE4113	6層	板材	①~2	<i>Rhus javanica</i> L. ルルデ
36	上層	11AD11	P4776	1層	柱根		<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
39	上層		SE4113	6層	杭?	④~4: G区	<i>Rhus javanica</i> L. ルルデ
40	上層		SE4113	6層	杭?	④~6: G区	<i>Rhus javanica</i> L. ルルデ
41	上層		SE4113	6層	木片	④~3: G区	<i>Rhus javanica</i> L. ルルデ
43	上層	11AD2	P4620	1層	杭		<i>Quercus sect. Primis</i> コナラ属コナラ節
47	上層	14X3	航3540	杭	SD3257 内部の遺構		<i>Prunus</i> サワラ属
49	上層	12Y17	P3054	1層	柱根		<i>Quercus sect. Primis</i> コナラ属コナラ節
51	上層	12Y18	SK3490	2層	棒状材	No1 刻字と思われる穴あり	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
53	上層	12Y18	SX3003		板	No3	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
58	上層	13X8	P3254		柱根		<i>Quercus sect. Primis</i> コナラ属コナラ節
59	上層	13Y21	P3192		杭	机 1 新しい可能性?	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
60	上層	14W10	SK3020	3層	板		<i>Thuya mandshurii</i> Carr. ネズコ
61	上層	13Y2	P3108	1層	柱根		<i>Diospyros</i> カキノキ属
62	上層	13Y2	P3108	1層	杭		<i>Juglans</i> タルミ属
63	上層	13Y21	P3192		杭	机 2	<i>Cupressaceae</i> ヒノキ科
64	上層	13Y21	P3191		杭	机	<i>Cupressaceae</i> ヒノキ科
65	上層	14X6	SK3020	3層	板	板 No1	<i>Cupressaceae</i> ヒノキ科
67	上層	14W10	SK3020	3層	板	板 No3	<i>Fagus</i> ブナ属
68	上層	12Y18	P3510	1層	柱根		<i>Quercus sect. Primis</i> コナラ属コナラ節
69	上層	12Y19	SX3003	1層	板	No7	<i>Thuya mandshurii</i> Carr. ネズコ
70	上層	14W10	SK3020	3層	曲面	板 No7	<i>Thuya mandshurii</i> Carr. ネズコ
71	上層	14W10	SK3020	3層	板材	板 No4	<i>Fagus</i> ブナ属
77	上層	13Y2	P3123		杭	上層のみ	<i>Quercus sect. Primis</i> コナラ属コナラ節
85	上層	12W19	V C 層		杭		<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
86	上層	12Y13	SK3003	1層	板	No2	<i>Thuya mandshurii</i> Carr. ネズコ
88	上層	13X15	P3197	1層	柱根		<i>Quercus sect. Primis</i> コナラ属コナラ節
93	上層	13X10	P3274		柱根		<i>Quercus sect. Primis</i> コナラ属コナラ節
94	上層	13Y1	P3087		漆塗		<i>Fagus</i> ブナ属

第10表 本製品の樹種同定結果(2009年度)

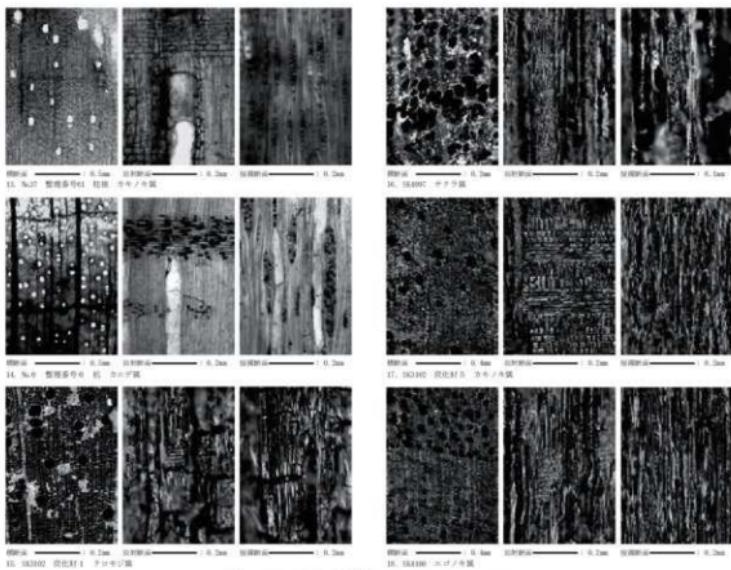
チャーがよく発達している。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、樹脂細胞が存在する。以上の形質よりネズコに同定される。ネズコは本州、四国に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ30m、径60cmに達する。材は耐朽性が強く、建築、器具、下駄などに用いられる。

### (3) ヒノキ科 Cupressaceae

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。横断面：早材から晩材への移行はやや急である。樹脂細胞がみられる。放射断面：放射柔細胞の分野壁孔はやや小型であるが、1分野に存在する個数ないし型は不明瞭である。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、樹脂細胞が存在する。以上の形質よりヒノキ科に同定される。ヒノキ科には、ヒノキ、サワラ、アスナロ、ネズコなどがある。



第 37 図 木材の顕微鏡写真 (1) (2009 年度)



第38図 木材の顕微鏡写真(2)(2009年度)

(4) ヤナギ属 *Alnus* ヤナギ科 第37図3

横断面：小型で丸い、放射方向にややのびた道管が、単独あるいは2～3個放射方向に複合し、散在する散孔材である。放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、道管相互の壁孔は交互状で密に分布する。放射組織は異性である。接線断面：放射組織は、単列の異性放射組織型である。以上の形質よりヤナギ属に同定される。ヤナギ属は落葉の高木または低木で、北海道、本州、四国、九州に分布する。

(5) クルミ属 *Juglans* クルミ科 第37図4

横断面：大型で丸い道管が、単独あるいは2～数個放射方向に複合してまばらに散在する散孔材である。早材から晚材にかけて、道管の径は徐々に減少する。軸方向柔細胞が多少波打ちながら、短接線状に1列に並び、網状柔組織をつくる傾向がある。放射断面：道管の穿孔は單穿孔である。放射組織はほとんどすべて平伏細胞からなるが、ときおり上下の縁辺にいくぶん大きい方形細胞が見られる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、1～3細胞幅である。以上の形質よりクルミ属に同定される。クルミ属にはオニグルミ、ヒメグルミがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15～30m、径70～90cmである。材は耐朽性、保存性は低いが、狂いが少なく韌性に富んでいて、建築、器具、彫刻など広く用いられる。

(6) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 第37図5

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、數列配列する環孔材である。晩材部では小道管が、火炎状に配列する。早材から晚材にかけて、道管の径は急激に減少する。放射断面：道管の穿孔は單穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。以上の形質よりクリに

同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ 20m、径 40cm ぐらいであるが、大きいものは高さ 30m、径 2m に達する。耐朽性が強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸樹木など広く用いられる。

(7) ブナ属 *Fagus* ブナ科 第 37 図 6

横断面：小型でやや角張った道管が、単独あるいは 2～3 個複合して密に散在する散孔材である。早材から晚材にかけて、道管の径は緩やかに減少する。放射断面：道管の穿孔は單穿孔および階段穿孔である。放射組織はほとんど平伏細胞からなるが、ときに上下端のみ方形細胞が見られる。接線断面：放射組織はまれに上下端のみ方形細胞が見られるがほとんどが同性放射組織型で、単列のもの、2～数列のもの、大型の広放射組織のものがある。以上の形質よりブナ属に同定される。ブナ属には、ブナ、イヌブナがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ 20～25m、径 60～70cm ぐらいであるが、大きいものは高さ 35m、径 1.5m 以上に達する。材は堅硬で緻密、韌性があるが保存性は低い。容器などに用いられる。

(8) コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科 第 37 図 7

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～数列配列する環孔材である。晚材部では薄壁で角張った小道管が、火炎状に配列する。早材から晚材にかけて道管の径は急激に減少する。放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ 15m、径 60cm ぐらいに達する。材は強韌で弾力に富み、建築材などに用いられる。

(9) モクレン属 *Magnolia* モクレン科 第 37 図 8

横断面：小型の道管が、単独あるいは放射方向に 2～3 個複合して多数散在する散孔材である。早材から晚材にかけて、導管の径は緩やかに減少する。放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、道管相互の壁孔は階段状である。繊維状板道管がしばしば薄い横隔壁で仕切られている。放射組織は上下端のみときに直立細胞からなる異性である。接線断面：放射組織は異性放射組織型で、1～3 細胞幅であるが 2 細胞幅のものが多い。以上の形質よりモクレン属に同定される。モクレン属にはホオノキ、コブシなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。常緑または落葉の高木ないし低木である。

(10) クロモジ属 *Lindera* クスノキ科 第 38 図 15

横断面：小型の道管が、単独あるいは 2～3 個放射方向に複合してまばらに散在する散孔材である。放射断面：道管の穿孔は單穿孔が多いが、階段穿孔も存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で、上下の縁辺部の 1～2 細胞が方形細胞からなる。接線断面：放射組織は 1～2 細胞幅で、上下の縁辺部が方形細胞からなる異性放射組織型である。以上の形質よりクロモジ属に同定される。クロモジ属には、カナクギノキ、クロモジ、アブラチャヤン、シロモジ、ヤマコウバシ、ダンコウバイなどがあり、北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。落葉または常緑の高木または低木である。

(11) マンサク *Hamamelis japonica* Sieb. et Zucc. マンサク科 第 37 図 9

横断面：小型でやや角張った道管が、ほぼ単独で密に散在する散孔材である。道管の径は、早材部から晩材部にかけてゆるやかに減少する。放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は 10～20 本程度である。放射組織は異性である。接線断面：放射組織は、単列の異性放射組織型で、

10数個の平伏細胞と、1～数個の直立細胞からなる。以上の形質よりマンサクに同定される。マンサクは、本州、四国、九州の山地に分布する。落葉の小高木である。

(12) サクラ属 *Prunus* バラ科 第37図10・第38図16

横断面：小型で丸い道管が、単独あるいは2～3個放射方向および斜め方向に複合して散在する散孔材である。道管の径は、早材部から晩材部にかけてゆるやかに減少する。放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は、同性に近い異性である。接線断面：放射組織は、異性放射組織型で1～4細胞幅である。以上の形質よりサクラ属に同定される。サクラ属には、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、シウリザクラ、ウメ、モモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または低木である。

(13) ナシ亜科 Subfam. Maloideae バラ科 第37図11

横断面：小型の道管が、単独あるいは数個不規則に複合して、散在する散孔材である。放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は、同性放射組織型で、1～3細胞幅である。道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。以上の形質によりナシ亜科に同定される。ナシ亜科には、サンザシ属、ザイフリボク属、ナナカマド属、ビワ属、カナメモチ属などがあり、落葉または常緑の高木から低木である。

(14) ヌルデ *Rhus javanica* L. ウルシ科 第37図12

横断面：年輪のはじめにやや小型から中型の道管が単独あるいは2～3個複合して配列する環孔材である。晩材部で小道管が多数集合して、接線方向あるいは斜線方向に配列する。早材から晩材にむけて道管の径は徐々に減少していく。放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は異性である。小道管の内壁にらせん肥厚が存在する。接線断面：放射組織は異性放射組織型で、1～3細胞幅である。以上の形質によりヌルデに同定される。ヌルデは、北海道（渡島半島）、本州、四国、九州、沖縄に分布する。落葉高木で、通常高さ5～10m、径20～30cmであるが、大きいものは高さ13m、径45cmに達する。耐朽性、保存性はさほど高くない材で、器具、ろくろ細工、薪炭に用いられる。

(15) カエデ属 *Acer* カエデ科 第38図14

横断面：小型で丸い道管が、単独あるいは2～4個放射方向に複合して散在する散孔材である。放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、内壁には微細な螺旋肥厚が存在する。放射組織は、平伏細胞からなる同性である。接線断面：放射組織は同性放射組織型で1～6細胞幅である。道管の内壁には微細な螺旋肥厚が存在する。以上の形質よりカエデ属に同定される。カエデ属には、イタヤカエデ、ウリハダカエデ、ハウチワカエデ、テツカエデ、ウリカエデ、チドリノキなどがあるが、放射組織の形質からウリカエデ、チドリノキ以外のいずれかである。北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または小高木で、大きいものは高さ20m、径1mに達する。材は耐朽性および保存性は中庸で、建築、家具、器具、楽器、合板、彫刻、薪炭など広く用いられる。

(16) カキノキ属 *Diospyros* カキノキ科 第38図13・17

横断面：中型から大型の道管が、単独および2～4個放射方向に複合して、散在する散孔材である。道管の壁は厚い。軸方向柔細胞は周囲状および接線状に配列する。放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は異性である。接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～2細胞幅である。いずれの放射組織も高さがほぼ同じで、層階状に配列する傾向を示す。以上の形質よりカキノキ属に同定される。カキノキ属には、トキワガキ、ヤマガキ、マメガキなどがあり、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高

さ 20m、径 1 m ぐらいに達する。材は、建築、器具などに用いられる。

(17) エゴノキ属 *Syrax* エゴノキ科 第 38 図 18

横断面：年輪のはじめに、やや小型で丸い道管が、おもに 2～4 個放射方向に複合して散在し、晩材部ではごく小型で角張った道管が単独あるいは数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の径は、早材部から晩材部にかけてゆるやかに減少する。軸方向柔細胞が、晩材部において接線状に配列する。放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は 10 本前後である。放射組織は異性である。接線断面：放射組織は、異性放射組織型で 1～3 細胞幅である。以上の形質よりエゴノキ属に同定される。エゴノキ属には、エゴノキ、ハクウンボクなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の小高木で、高さ 10 m、径 30cm である。材は器具、旋作、薪炭などに用いられる。

## 5) 所 見

### a 木製品

同定の結果、余川中道跡の木材は、スギ 5 点、ネズコ 4 点、ヒノキ科 3 点、ヤナギ属 1 点、クルミ属 1 点、クリ 2 点、ブナ属 3 点、コナラ属コナラ節 18 点、モクレン属 1 点、マンサク 1 点、サクラ属 1 点、ナシ亞科 2 点、ヌルデ 7 点、カエデ属 2 点、カキノキ属 1 点であった。スギは杭、棒状材、板に使用されており、材は加工工作が容易な上、大きな材がとれる良材である。ネズコは板、曲物に、ヒノキ科は杭、板に使用されており、ネズコを含むヒノキ科の木材は大きな材がとれ良材である。ネズコはヒノキの生育域外では、ヒノキに代わって使われる樹種である。ヤナギ属は柱根に使用されており、材は耐朽性、保存性は低く、切削、加工の容易な材である。クルミ属は杭に使用されており、強さ中庸で、耐朽性、保存性は低く、韌性に富み、切削、加工の容易な材である。クリは杭に使用されており、材は重厚で保存性が良い。ブナ属は板、漆器椀に使用されており、材は強さ中庸、切削、加工も中庸であるが、弹性と従曲性に富む。繩文時代以降現在まで伝統的に本地に用いられる材である。コナラ属コナラ節は柱根、杭に使用されており、材は強靭で弾力に富み、建築材としても用いられる木材である。モクレン属は柱根に使用されており、材は軽軟で緻密な材で、耐朽性、保存性は低いが、切削、加工が極めて容易である。マンサクは杭に使用されており、やや堅硬で強靭な材と言える。サクラ属は杭に使用されており、材は概して堅硬で、耐朽性、保存性の高い材で、切削、加工の難度は中庸である。ナシ亞科は柱根に使用されており、材は概してやや重硬と言える。ヌルデは柱根、板材などに使用されており、材は強さ中庸の材で、耐朽性、保存性はさほど高くない。カエデ属は柱根、杭に使用されており、材は概してやや重硬な材と言え、耐朽性、保存性は中庸である。カキノキ属は柱根に使用されており、概して堅硬な材と言える。なお柱根に使用されているヤナギ属、コナラ属コナラ節、モクレン属、ナシ亞科、ヌルデ、カエデ属、カキノキ属は広葉樹であるが、いずれも高木となる樹種である。

スギ、ネズコ、ヒノキ科は温帯に広く分布する常緑の針葉高木であり、スギは特に積雪地帯や多雨地帯で純林を形成し、ネズコは中部山岳地帯に多く生育する。ヤナギ属は湿地や河辺などの水辺に生育する落葉高木から低木である。クルミ属は、谷沿いなどやや湿潤なところに生育する落葉高木である。クリは、乾燥した台地や丘陵地を好む落葉高木で、二次林要素でもある。ブナ属にはブナとイヌブナがあり、山地に生育する落葉高木である。コナラ属コナラ節は、日当たりの良い山野に生育する落葉高木である。モクレン属は谷合またはこれに続く斜面等に生育する落葉高木である。マンサクは山地の林内に生育する落葉の小高木である。サクラ属はやや乾燥した斜面等に生育する落葉の高木または低木である。ナシ亞科に

はアズキナシ、ナナカマドなどの落葉高木が含まれ山地等に生育する。ヌルデは日当たりの良い山野に生育する落葉高木である。カエデ属は谷間やこれに接する斜面に生育する落葉高木または小高木である。カキノキ属は落葉高木であり、古くから日本各地に栽培され、山中に野生化している。

クリは、温帯に広く分布する落葉広葉樹であり、暖温帯と冷温帯の中間域では純林を形成することもある。ブナは冷温帯落葉広葉樹林の代表的なブナ林を形成する。コナラ属コナラ節には、ミズナラなどの冷温帯落葉広葉樹林の主要構成要素や暖温帶性のナラガシワ、二次林要素でもあるコナラなどが含まれる。その他のヤナギ属、クルミ属、モクレン属、マンサク、サクラ属、ナシ亞科、ヌルデ、カエデ属、カキノキ属も、温帯域を中心に広く分布する広葉樹である。以上から余川中道遺跡の木材は、遺跡周辺か近隣地域より流通によってもたらされたと推定される。

#### b 燃焼材

鍛冶炉の燃焼材である炭化材は、クロモジ属1点、サクラ属1点、カキノキ属2点、エゴノキ属1点であった。クロモジ属は落葉または常緑の高木または低木で、主に山地に生育する。エゴノキ属は落葉の小高木で、山野に生育する。いずれの樹種も温帯域に広く分布する樹種であり、当遺跡周辺からもたらされたと推定される。

### E 放射性炭素年代測定

株式会社古環境研究所 松田隆二

#### 1) はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 ( $^{14}\text{C}$ ) の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用して年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壤、土器付着炭化物などが測定対象となり、約6万年前までの年代測定が可能である。

#### 2) 試料と方法

測定試料の情報、調製データは第11表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（バレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製1.5SDH）を用いて測定した。得られた  $^{14}\text{C}$  濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 $^{14}\text{C}$  年代、曆年代を算出した。

#### 3) 測定結果

第12表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ( $\delta^{13}\text{C}$ )、同位体分別効果の補正を行って曆年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した  $^{14}\text{C}$  年代、 $^{14}\text{C}$  年代を曆年代に較正した年代範囲を、第39図に曆年較正結果をそれぞれ示す。曆年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後曆年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて曆年較正を行うために記載した。

$^{14}\text{C}$  年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 $^{14}\text{C}$  年代 (y BP) の算出には、 $^{14}\text{C}$  の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した  $^{14}\text{C}$  年代誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) は、測定の

試料名	対象物	種類	前処理・調整	測定法
No.1	G区 SX4097 1層	炭化物	超音波洗浄、酸-アラカリ-酸処理	AMS

\* AMS (Accelerator Mass Sp ectrometry) は加速器質量分析法

第11表 放射性炭素年代測定試料及び処理

試料名	測定No. (PED)	$\delta^{14}\text{C}$ (‰)	曆年較正用年代 (年 BP)	$^{14}\text{C}$ 年代 (年 BP)	曆年代 (西暦)
No.1	15277	-22.96 ± 0.12	275 ± 18	275 ± 20	AD1520-1550 (16.2%) AD1630-1660 (52.0%)

BP : Before Ph years (Present), AD : 紀元後

第 12 表 余川中道遺跡の放射性炭素年代測定結果（2009 年度）

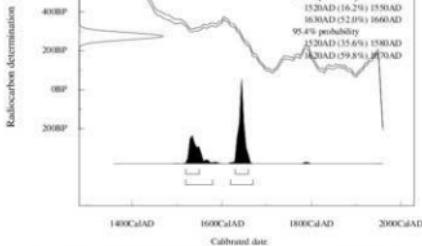
統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の  $^{14}\text{C}$  年代がその  $^{14}\text{C}$  年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示すものである。なお、曆年較正の詳細は以下の通りである。

曆年較正とは、大気中の  $^{14}\text{C}$  濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された  $^{14}\text{C}$  年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の  $^{14}\text{C}$  濃度の変動、及び半減期の違い ( $^{14}\text{C}$  の半減期 5730 ± 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

$^{14}\text{C}$  年代の曆年較正には OxCal3.1 (較正曲線データ : IntCal09) を使用した。なお、1  $\sigma$  曆年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された  $^{14}\text{C}$  年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の曆年代範囲であり、同様に 2  $\sigma$  曆年代範囲は 95.4% 信頼限界の曆年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に曆年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は  $^{14}\text{C}$  年代の確率分布を示し、二重曲線は曆年較正曲線を示す。

#### 4) 所 見

加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定の結果、G 区 SX4097 の 1 層より出土した炭化材は、275 ± 20 年 BP (2  $\sigma$  の曆年代で AD1520 ~ 1580 年、AD1620 ~ 1670 年) の年代値が得られた。



第 39 図 余川中道遺跡の曆年較正年代グラフ（2009 年度）

#### 引用文献（第 IV 章 1）

安藤一男 1990 「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用」『東北地理』42 p. 78-88.

伊藤良永・堀内誠 1991 「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」『珪藻学会誌』6 p. 39-45.

金原正明 1993 「花粉分析法による古環境復原」『新版古代の日本第 10 卷 古代資料研究の方法』角川書店 p. 28-262.

小杉正人 1986 「陸生珪藻による古環境解析とその意義—わが国への導入とその展望—」『植生史研究』第 1 号 植生史研究会 p. 39-44.

小杉正人 1988 「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用」『第四紀研究』27 p. 1-20.

佐伯 浩・原田 浩 1985 「針葉樹材の細胞」『木材の構造』文永堂出版 p. 20-48.

佐伯 浩・原田 浩 1985 「広葉樹材の細胞」『木材の構造』文永堂出版 p. 49-100.

島倉巳三郎 1973 「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学博物館収蔵目録』第 5 集 p. 40

島地 謙・伊東隆夫 1988 「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣 p. 296

- 杉山真二 2000 「植物珪酸体（プラント・オパール）」『考古学と植物学』 同成社 p.89-213.
- 中村 純 1967 『花粉分析』 古今書院 p.82-102.
- 中村 純 1974 「イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa* L.)を中心として」『第四紀研究』13 p.87-193.
- 中村 純 1977 「稲作とイネ花粉」『考古学と自然科学』第10号 p.23-30.
- 中村 純 1980 「日本産花粉の標微」『大阪自然史博物館収蔵目録』第13集 p.9.
- 中村俊夫 2000 「放射性炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の<sup>14</sup>C年代』 p.320.
- 藤原宏志 1976 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) -数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-」『考古学と自然科学』9 p.5-29.
- 藤原宏志・杉山真二 1984 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(5) -プラント・オパール分析による水田址の探査-」『考古学と自然科学』17 p.73-85.
- 山田昌久 1993 「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成」『植生史研究』特別第1号 植生史研究会 p.22.
- 渡辺仁治 2005 『淡水珪藻生態図鑑 群集解析に基づく汚濁指標 DAIP および pH耐性』 内田老舗圖 p.66.
- Hustedt,F.(1937 - 1938) Systematisch eund ologisch eUntersuchungen über die DiatomaceenFlora von Java und Sumatra nach dem Material der Deutsch enLimnologisch enSunda-Expedition  
Arch. für die Biol. Sup. p.15,p.B1 - 506.
- Lowrance,R.L.(1974) Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. 333p., National Environmental Research Center.
- K. Krammer & H. Lange-Bertalot(1986-1991) Bacillariophyceae 1 - 4.
- Asai,K.& Watanabe,T.(1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution( 2 ) Saprophytic and saprotrophic taxa  
Diatom,10,p.35-47.
- Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphic <sup>14</sup>CH/CO<sub>2</sub> Gif Program, Radiocarbon, 37(2), p.425-430.
- Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program Oxalic Acid, Radiocarbon, 43 (2A), 355-363.
- Paula J Reimer et al., (2004) IntCal 04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26.0 ka BP. Radiocarbon 46,p.D29-1058.
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmyer, C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111-1150.

## 2 2013 年度

### A 放射性炭素年代測定

バリノ・サーヴェイ株式会社 高橋 敦・千葉博俊

#### 1) 試 料

試料は、調査区壁西（10Q12）、基本層序 C（12Q11-12）、水田面上面等から採取された植物遺体や炭化物等が混じる土壌、構造や堆積層中より出土した木材等の計 8 点（試料番号 7～14）である。以下に、試料の概要を記す。

##### a 調査区壁西（10Q12）

試料は、II 層より採取された炭化物が混じる黒～黒灰色のやや砂分が混じるシルト（試料番号 7）、V c 層より採取された炭化および未炭化の植物遺体が混じる黒灰～暗灰色シルト（試料番号 8）、VI c 層より採取された炭化物が混じる黒～黒灰色シルト（試料番号 9）の 3 点である。

これらの試料に認められた植物遺体は、いずれも草本類の程と推定された。このうち、保存状態が比較的良好であった II 層の炭化物は、実体顕微鏡観察の結果、イネ科の程であることが確認されている。測定には、II 層と VI c 層が炭化したイネ科の程およびその可能性がある植物遺体、V c 層が未炭化の草本類の程とみられる植物遺体を供した。

##### b 基本層序 C（12Q11-12）

試料は、XII 層より出土した木材（試料番号 10）である。木材は、横断面の一部を欠損する径約 1.2cm の芯持丸木である。測定には、観察範囲内に認められる最外年輪を含む数年輪分を供した。

##### c 自然木（根）

試料は、11Q21 の VII 層より出土した自然木（試料番号 11）とされる木材である。自然木はブロックとして採取されており、放射断面が約 4.0cm、接線断面が約 4.5cm、高さ約 6.5cm を測り、一部に樹皮が認められる。測定には、観察範囲内に認められる最外年輪を含む数年輪分を供した。

##### d 水田面上面

試料は、11Q16・12Q1 の VII 層に相当する水田面上面より採取された灰～褐灰色砂混じりシルト（試料番号 12）である。測定には、試料中より抽出されたホタルイ属およびタデ属の種実遺体を供した。

##### e SX2537 (13P14)

試料は、13P14 の VII 層より検出された SX2537 から出土した木材（試料番号 13）である。木材は、樹皮？が残る輪切りの丸太状を呈し、横断面約 4.5cm × 約 8cm、高さ約 6cm を測る。測定には、観察範囲内に認められる最外年輪を含む数年輪分を供した。

##### f 畦 2023 (10Q8)

試料は、10Q8 の VI b 層より検出された畦 2023 から出土した木材（試料番号 14）である。木材は、径約 1.2cm 前後の芯持丸木である。測定には、観察範囲内に認められる最外年輪を含む数年輪分を供した。

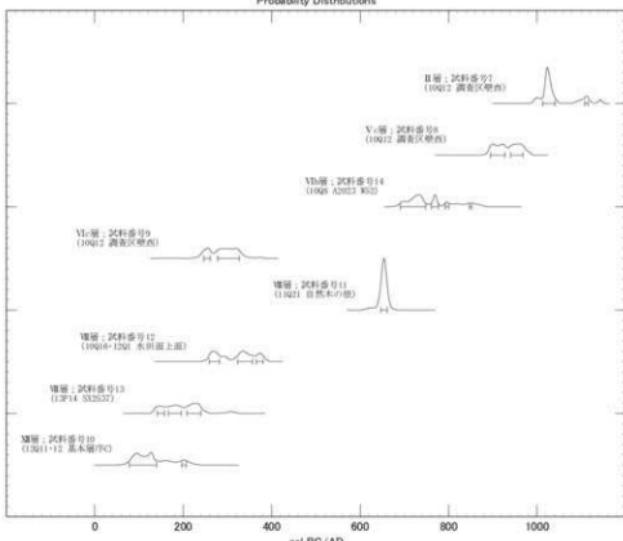
#### 2) 分析方法

試料は、超音波煮沸洗浄と酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸 1.2N、水酸化ナトリウム 1N、塩酸 1.2N）により、不純物を取り除いたあと、グラファイトを合成し、測定用試料とする。測定機器は、NEC 製コンパクト

試料	測定年代 (y BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年年代 (暦年較正結果) (y BP)	暦年較正結果				相対比	測定番号 CodeNo.
試料番号 7 (10612-V-9 (調査区壁面))	990 ± 20	-13.11 ± 0.39	994 ± 22	σ	cal AD 1,913 - cal AD 1,041	cal BP	937 - 909	0.920	PLD- 25951
				cal	AD 1,108 - cal AD 1,116	cal BP	842 - 834	0.680	
				2 σ	cal AD 991 - cal AD 1,047	cal BP	959 - 903	0.799	
				cal	AD 1,069 - cal AD 1,122	cal BP	861 - 829	0.168	
試料番号 8 (10612-V-10 (調査区壁面))	1,115 ± 20	-27.61 ± 0.17	1,117 ± 21	σ	cal AD 895 - cal AD 928	cal BP	1,055 - 1,022	0.500	PLD- 25952
				cal	AD 941 - cal AD 969	cal BP	1,009 - 981	0.500	
試料番号 9 (10612-V-11 (調査区壁面))	1,755 ± 20	-19.79 ± 0.15	1,754 ± 22	2 σ	cal AD 889 - cal AD 982	cal BP	1,061 - 968	1.000	PLD- 25953
				cal	AD 247 - cal AD 261	cal BP	1,703 - 1,689	0.230	
試料番号 10 (10612-V-12 (基本剖面 C))	1,875 ± 25	-28.06 ± 0.21	1,876 ± 23	2 σ	cal AD 231 - cal AD 348	cal BP	1,719 - 1,602	0.995	PLD- 25954
				cal	AD 372 - cal AD 376	cal BP	1,578 - 1,574	0.005	
試料番号 11 (11621-V-9 自然木(板))	1,380 ± 20	-28.13 ± 0.15	1,378 ± 20	σ	cal AD 78 - cal AD 140	cal BP	1,872 - 1,810	0.918	PLD- 25955
				cal	AD 197 - cal AD 207	cal BP	1,753 - 1,743	0.682	
試料番号 12 (11621-V-9 (S-906上面上))	1,720 ± 20	-25.94 ± 0.18	1,719 ± 21	2 σ	cal AD 75 - cal AD 214	cal BP	1,875 - 1,736	1.000	PLD- 25956
				cal	AD 647 - cal AD 661	cal BP	1,303 - 1,289	1.000	
試料番号 13 (12P14-V-9 (S-906上面上))	1,810 ± 20	-28.94 ± 0.15	1,812 ± 22	2 σ	cal AD 630 - cal AD 672	cal BP	1,320 - 1,278	1.000	PLD- 25957
				cal	AD 259 - cal AD 282	cal BP	1,891 - 1,668	0.350	
試料番号 14 (10612-V-10 (AD292))	1,240 ± 25	-29.16 ± 0.36	1,240 ± 23	σ	cal AD 323 - cal AD 357	cal BP	1,627 - 1,593	0.457	PLD- 25958
				cal	AD 365 - cal AD 380	cal BP	1,665 - 1,570	0.193	
試料番号 15 (10612-V-11 (AD292))	1,240 ± 25	-29.16 ± 0.36	1,240 ± 23	2 σ	cal AD 323 - cal AD 394	cal BP	1,667 - 1,646	0.395	PLD- 25959
				cal	AD 312 - cal AD 388	cal BP	1,638 - 1,582	0.605	

第13表 余川中道遺跡の放射性炭素年代測定及び暦年較正結果 (2013年度)

Probability Distributions



第40図 余川中道遺跡の暦年較正年代グラフ (2013年度)

AMS・1.5SDH を用いる。放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1,950 年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma; 68%) に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.0.1 [Copyright 1986-2014 M Stuiver and PJ Reimer] を用い、誤差として標準偏差 (One Sigma) を用いる。

暦年較正とは、大気中の  $^{14}\text{C}$  濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の  $^{14}\text{C}$  濃度の変動、及び半減期の違い ( $^{14}\text{C}$  の半減期  $5,730 \pm 40$  年) を較正することである。暦年較正に関しては、本来 10 年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1 年単位で表している。暦年較正については、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。

暦年較正結果は、測定誤差  $\sigma$ 、 $2\sigma$  ( $\sigma$  は統計的に真の値が 68% の確率で存在する範囲、 $2\sigma$  は真の値が 95% の確率で存在する範囲) 双方の値を示す。また、表中の相対比とは、 $\sigma$ 、 $2\sigma$  の範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

### 3) 結果および考察

各試料の同位体効果による補正を行った測定結果 (補正年代) および暦年較正結果 ( $1\sigma$ ,  $2\sigma$ ) を第 13 表に示す。II 層から XIII 層までの層位から出土した炭化植物遺体等を含む大型植物化石の較正暦年代 ( $1\sigma$ ) についてみると、1 世紀後半～12 世紀前半までの範囲を示した。各試料の層位情報を参考するとと、XII 層が最も古い暦年代を示しており、これより上位の層位に向かって新しい年代を示す傾向にある (第 40 図)。層位別の暦年代は、XII 層が 1 世紀後半～3 世紀初頭頃、VIII 層が 2 世紀中頃～4 世紀後半および 7 世紀中頃、VI c 層が 3 世紀中頃～4 世紀前半頃、VI b 層が 7 世紀末頃～9 世紀中頃、V c 層が 9 世紀末頃～10 世紀後半頃、II 層が 11 世紀前半～12 世紀前半頃に相当する。このうち、VII 層に相当する 3 試料は、試料番号 12,13 と試料番号 11 との間に有意な年代差が見出されるほか、VII 層の試料番号 11 と VI c 層の試料番号 9 との間では新旧が逆転する。

また、調査所見および資料等によれば、VI c 層が中層の遺物包含層、VII 層が下層遺物包含層および水田跡に相当し、その年代観については古墳時代中期頃に比定されている。一方、今回の測定結果では、上述したように年代観のばらつきや逆転が認められ、およそ古墳時代中期以前および以後に相当する年代観を示した。そのため、これらの堆積層の年代観の検討にあたっては、さらに資料の蓄積による評価が必要と考える。

## B 古 植 生(花粉分析・植物珪酸体・樹種同定)

バリノ・サーヴェイ株式会社 齋藤崇人・馬場健司・高橋 敦・千葉博俊

### 1) 試 料

試料は、花粉および植物珪酸体分析用として供された土壤試料 (試料番号 1～6) と、A 放射性炭素年代測定に供された木材試料 (試料番号 10,11,13,14) からなる。以下に、試料の概要を記す。

#### a 土壤試料 (試料番号 1～6)

試料は、調査区壁面 (10Q12) の基本土層より採取された土壤 5 点 (試料番号 1～5) と、基本層序 C (12Q11, 12) より採取された土壤 1 点 (試料番号 6) の計 6 点である。これらの試料の観察では、II 層 (試料番号

1) が黒色シルト質砂、VI c 層（試料番号2）が黒～黒灰色シルトおよび植物遺体が混じる灰色砂質シルト、VI b 層（試料番号3）が灰色シルト、VI c 層（試料番号4）が青灰色シルトの偽縛や微細な炭化物が混じる黒灰～暗灰色シルト、VII 層（試料番号5）が青灰色シルト、XII 層（試料番号6）が植物遺体が混じる暗灰色砂質シルトからなる。

#### b 木材試料（試料番号10,11,13,14）

試料の詳細は、A 放射性炭素年代測定（1）試料を参照されたい。

### 2) 分析方法

#### a 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛、比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有的現生標本や【島倉1973、中村1980b】等を参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表、及び花粉化石群集の層位分布図として表示する。図表の中で複数の種類を-(ハイフォン)で結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。なお、木本花粉総数が100個未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるため、出現した種類を+で表示するに留めている。

#### b 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタンクステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体）を、【近藤2010】の分類を参考に同定し、計数する。分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量を正確に計量し、乾土1gあたりの植物珪酸体含量（同定した数を乾土1gあたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。各分類群の含量は100単位として表示し、100個/g未満は「<100」で表示する。また、各分類群の植物珪酸体含量を図示する。

#### c 樹種同定

剥刀を用いて木口（横断面）・杁目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を直接採取する。切片をガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、【島地・伊東1982、Wheelerほか1998】を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、【林1991、伊東1995・1996・1997・1998・1999】を参考にする。

### 3) 結 果

#### a 花粉分析

結果を第 14 表、第 41・42 図に示す。以下に、グリッド別に産状を述べる。

##### 1) 調査区壁西 (10Q12)

基本土層の II, VI c, VII 層(試料番号 1,4,5)は花粉の産状が悪く、定量解析に耐えうる個体数は検出されず、検出された花粉も概して保存状態が悪い。木本花粉ではツガ属、トウヒ属、マツ属、ハンノキ属、ブナ属、ニレ属ーケヤキ属等、草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、サナエタデ節ーウナギツカミ節、ヨモギ属、キク亜科等が認められた程度である。一方、V c, VI b 層(試料番号 2,3)は花粉が豊富に産出する。ただし、保存状態は異なっており、V c 層(試料番号 2)はやや悪いものが多く、VI b 層(試料番号 3)は比較的良好である。花粉群集は、木本花粉は同程度の出現率を示す一方、草本花粉は VI b 層において高率となり、V c 層では減少し、シダ類胞子の割合が高くなる。木本花粉は、いずれもブナ属が多産する。このほか、V c 層ではツガ属、マツ属、サワグルミ属、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属ーケヤキ属、トチノキ属等が、VI b 層ではスギ属、サワグルミ属、クルミ属、ハンノキ属、コナラ亜属、ニレ属ーケヤキ属等が多く認められる。草本花粉は、いずれもイネ科、カヤツリグサ科が多産し、サナエタデ節ーウナギツカミ節、ヨモギ属等を伴う。この他、VI b 層からは、サジオモダカ属、オモダカ属、イボクサ属、ミズアオイ属等の水湿地生植物に由来する花粉も検出される。また、同試料に多産したイネ科花粉中には栽培種のイネ属が多く認められ、イネ科全体に占める割合は約 36.0% を示す。

##### 2) 基本層序 C (12Q11・12)

XII 層(試料番号 6)からは、花粉が豊富に産出し、保存状態も比較的良好である。木本花粉の出現率が高く、マツ属、スギ属、ヤナギ属、サワグルミ属、クルミ属、ハンノキ属、ブナ属、コナラ亜属等が多く認められる。草本花粉は、サナエタデ節ーウナギツカミ節が最も多く産出し、イネ科、カヤツリグサ科、クワ科、キク亜科等を伴う。

#### b 植物珪酸体分析

結果を第 15 表、第 43・44 図に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められるなど保存状態が悪い。以下に、グリッド別に産状を述べる。

##### 1) 調査区壁西 (10Q12)

基本土層の II ~ VII 層(試料番号 1 ~ 5)における植物珪酸体含量は 1,100 ~ 7,300 個/g であり、V c 層(試料番号 2,5)が 700 ~ 1,100 個/g と含量が低い。II, VI b, VI c 層(試料番号 1,3,4)は 3,800 ~ 7,300 個/g である。

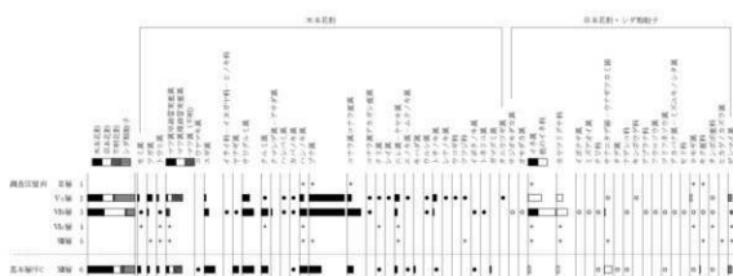
確認された分類群のうち、ヨシ属が各試料を通じて産出し、とくに II 層と VI c 層で含量が高い。このほか、VI b, VI c 層よりタケ亜科が、II 層よりスキ属が産出するが、含量は低い。また、VI b 層からは栽培植物のイネ属の葉部に形成される短細胞、機動細胞珪酸体が検出される。その含量は、短細胞珪酸体が 200 個/g、機動細胞珪酸体が 800 個/g である。

##### 2) 基本層序 C (12Q11・12)

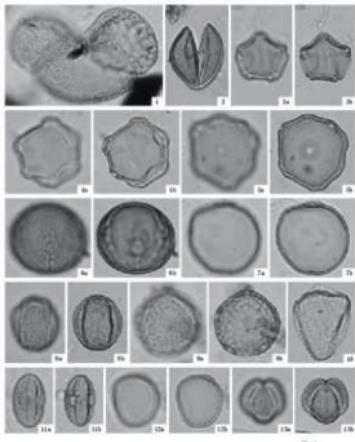
XII 層(試料番号 6)は、植物珪酸体含量が 100 個/g と極めて低い。検出される分類群は、ヨシ属等がわずかに認められる程度である。

花被目	調査区画内 (150x120)						基本範囲 C (320x11-120)					
	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6
木本植物												
キク科	-	4	2	1	-	-	3	1	1	-	3	8
ガマ科	-	12	4	2	2	1	3	1	1	1	6	6
トウヒ科	-	5	2	2	1	-	-	-	-	-	-	6
ツリガネ津根子科	-	3	2	-	-	-	-	-	-	-	-	6
ツツジ科	-	11	1	-	-	-	-	-	-	-	-	12
ツバメソウ科	-	24	9	3	2	1	-	-	-	-	-	20
コウヤマキ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
スイカ科	-	4	11	1	-	-	-	-	-	-	-	26
イヌイモ科・イヌササギ科・ヒノキ科	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サツキ科	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	14
ワラグサ科	-	17	27	-	-	-	-	-	-	-	-	28
カルミウス科	-	2	16	1	-	-	-	-	-	-	-	16
タブノキ科・アザダ科	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ベニバナ科	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カバノキ科	-	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ハンノキ科	2	10	18	10	2	1	-	-	-	-	-	20
ブナ科	2	82	86	-	-	-	-	-	-	-	-	29
コラマツ科・ナラ科	1	10	33	-	-	-	-	-	-	-	-	15
タリ科	-	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
シイ科	-	2	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1
ニレ科・ケヤキ科	-	11	6	3	1	-	-	-	-	-	-	6
エノキ科・ムクノキ科	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ヨウラントウ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4
ウラジロ科	-	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
トトノウ科	-	9	3	-	-	-	-	-	-	-	-	2
シナノキ科	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ワサビ科	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ツツジ科	-	45	75	2	1	1	-	-	-	-	-	21
ミズタマ科	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タツノ科	-	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サユリ科・タケザキカズラ科	-	2	9	-	1	-	-	-	-	-	-	32
タケ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アシコ科	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	1
キンポウゲ科	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アブクマ科	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
フジ科	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
リンドウ科	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アカハナ科・ヒズニコノシタ科	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
セリ科	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヨリモチ科	1	15	5	1	1	-	-	-	-	-	-	4
キモチ科	-	-	1	1	1	-	-	-	-	-	-	1
エリカ科	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
木本植物	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
シダ植物	-	15	14	1	-	-	-	-	-	-	-	27
セカクシ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
セカクシ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ビャクダン科	-	25	3	11	6	1	-	-	-	-	-	15
セカクシ科	27	284	120	79	82	62	-	-	-	-	-	60
合計	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
木本植物	-	5	220	226	23	12	-	-	-	-	-	-
草本植物	4	161	301	6	4	45	-	-	-	-	-	-
不動植物	0	15	14	1	0	27	-	-	-	-	-	-
シダ植物	27	309	120	90	89	164	-	-	-	-	-	-
合計	36	610	602	117	105	393	-	-	-	-	-	-

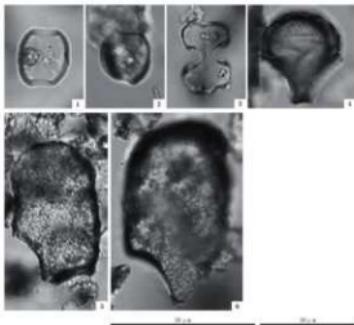
第14表 余川中道遺跡の花粉分析結果(2013年度)



第41図 花粉化石群集の層位分布



第 42 図 余川中道遺跡の花粉の顕微鏡写真 (2013 年度)  
 1. ヤツガ属(調査位置: Vc 場所) 5. ヤツガ属(調査位置: Vd 場所)  
 2. ミシマキ属(調査位置: Vb 場所) 6. ヤツガ属(調査位置: Vd 場所)  
 3. ヤツガ属(調査位置: Vc 場所) 7. ヤツガ属(調査位置: Vd 場所)  
 4. ヤツガ属(調査位置: Vc 場所) 8. ヤツガ属(調査位置: Vd 場所)  
 9. ヤツガ属(調査位置: Vc 場所) 10. ヤツガ属(調査位置: Vd 場所)  
 11. ヤツガ属(調査位置: Vc 場所) 12. ヤツガ属(調査位置: Vd 場所)  
 13. ヨモギ属(調査位置: Vd 場所) 14. ヨモギ属(調査位置: Vd 場所)

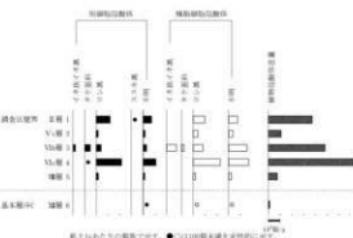


1. ヤツガ属(調査位置: 調査位置: Vc 場所) 2. ヤツガ属(調査位置: 調査位置: Vd 場所)  
 3. ミシマキ属(調査位置: 調査位置: Vb 場所) 4. ヤツガ属(調査位置: 調査位置: Vd 場所)  
 5. ヤツガ属(調査位置: 調査位置: Vc 場所) 6. ヤツガ属(調査位置: 調査位置: Vd 場所)

第 43 図 植物珪酸体の顕微鏡写真 (2013 年度)

分類群	1 W/32					
	調査位置西 10G12			調査位置東 12G11-12		
	Vc 場所	Vb 場所	Vd 場所	Vc 場所	Vb 場所	Vd 場所
イネ科植物の根茎部						
イネ科の主葉	200					
イネ科	300	-100				
ヨシ科	1,200	200	400	2,200	200	
スズキ科	-100					
♀花	700	200	300	1,100	100	-100
イネ科植物の根茎部						
イネ科の主葉	300					
イネ科	200					
ヨシ科	1,000	400	800	2,300	200	-100
♀花	600	400	1,000	1,700	300	-100
合計	2,000	800	1,400	3,300	300	-100
イネ科植物の根茎部						
イネ科の主葉	1,800	600	300	4,000	400	-100
イネ科植物の根茎部						
イネ科の主葉	3,800	1,200	4,900	7,200	700	100
総計	5,800	2,000	6,600	11,500	1,100	100

第 15 表 植物珪酸体含量 (2013 年度)



第 44 図 植物珪酸体含量 (2013 年度)

### c. 樹種同定

同定結果を第 16 表に示す。A 放射性炭素年代測定に供された木材は、広葉樹 4 分類群（ヤナギ属、ハノキ属ハノキ亞属、トネリコ属、タニウツギ属）に同定された。このうち、試料番号 13 のトネリコ属は根材であった。以下に、各分類群の解剖学的特徴等を記す。

#### ・ヤナギ属 (S. lxx) ヤナギ科 第 45 図 1

散孔材で、道管は単独または 2-3 個が複合して散在し、年輪界付近で径を減少させる。道管は、單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、單列、1-15 細胞高。

#### ・ハノキ属ハノキ亞属 (Alnus subg. n. Alnus) カバノキ科 第 45 図 2

散孔材で、道管は単独または 2-4 個が放射方向に複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は

対列状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと集合放射組織がある。

- ・トネリコ属<根材> (*Fraxinus <root wood>*) モクセイ科 第45図3

環孔性を帯びた散孔材で、道管壁は中庸～厚く、横断面では単独または2-4個が放射方向に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、1-3細胞幅、1-20細胞高。

- ・タニウツギ属 (*Weigela*) スイカズラ科 第45図4

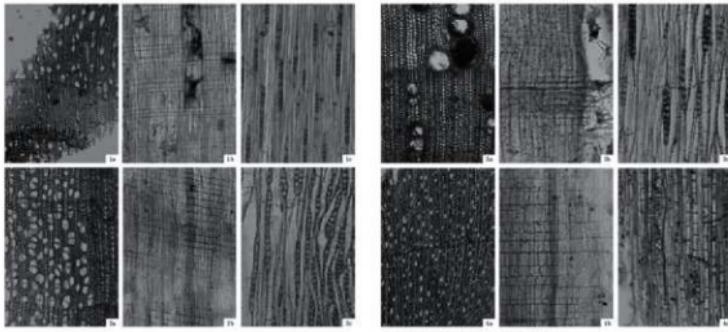
散孔材で、道管は単独が多く、時に2-3個が複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-2細胞幅、1-20細胞高で、上下に連続する。

#### 4) 考 察

出土木材（タニウツギ属）より1世紀後半～3世紀初頭頃の年代が想定されるXII層（試料番号6）は、木本花粉の出現率が高く、後述するVI b, V c層（試料番号3.2）と比較して、際立って多産する分類群が認められないという特徴を示す。木本花粉では、針葉樹のスギ属、落葉広葉樹のヤナギ属、サワグルミ属、クルミ属、ハンノキ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属等が比較的多く認められる。冷温帶性落葉広葉樹林の主要構成要素であるブナ属は、後背および周辺の山地に分布する森林植生に由来すると考えられる。また、ヤナギ属、サワグルミ属、クルミ属、ハンノキ属、コナラ亜属のほか、ニレ属-ケヤキ属やエノキ属、ムクノキ属、トチノキ属等には二次林、溪谷林および河畔林を形成する種が含まれる。これらは、魚野川や遺跡周辺を流れる河川沿い等に生育していたと考えられる。スギ属は、北陸地方の日本海岸に面した

試料番号	グリッド	層位	造構/地点	取上番号	形状等	種類 (分類群)
10	12Q11-12	XII	基本層序C	-	芯持丸木 (径約 1.2cm)	タニウツギ属
11	11Q21	VII		-	破片 (樹皮残る)	ハンノキ属ハンノキ亜属
13	13P14	VII	SX2537	-	丸木 (8cm × 4.5cm)	トネリコ属<根材> (8.3 × 1.1)
14	10Q8	VI b	A2023	W52	芯持丸木 (1.3 × 1.1)	ヤナギ属

第16表 木製品の樹種同定結果（2013年度）



1. ヤナギ属 (10Q8 A2023 XII層 032214)  
2. ハンノキ属ハンノキ亜属 (11Q21 墓場 自然木 (1))

第45図 木材の顕微鏡写真（2013年度）

地域に分布する天然林（沢スギ）や発掘調査成果等（例えば、魚津市埋没林、糸魚川市姫御前遺跡など）で明らかとされている埋没林の立地等から、扇状地扇端の湧水付近や谷筋等に生育していた可能性がある。なお、出土木材には落葉低木のタニウツギ属（試料番号 10）が認められた。タニウツギ属は、花粉には認められていないものの、林縁等の明るく開けた場所に生育したと考えられる。

7世紀末頃から9世紀中頃および9世紀末頃から10世紀後半頃までの年代が想定されたVI b 層（試料番号 3）、V c 層（試料番号 2）は、木本花粉のブナ属、草本花粉のイネ科とカヤツリグサ科の多産によって特徴付けられた。また、花粉群集では、XII 層と比較して、とくに VI b 層において草本類の出現率が高率となる。

木本花粉では、ブナ属を除き XII 層において比較的多く産出した分類群に大きな変化は認められないため、遺跡周辺に草地等が分布する開けた空間が増加し、XII 層段階よりも周辺山地の森林植生をより反映するようになった可能性がある。また、VI b 層の出土木材は落葉低木～高木のヤナギ属であった。ヤナギ属は、属としては生育範囲が広いが、遺跡の立地等から上述した河畔林要素に由来する可能性が高い。

なお、余川中道遺跡では、これまでにも古墳時代中期の包含層および構構検出面（IX 層、X 層および相当層）等を対象に花粉分析が実施されている。木本花粉では、検出される分類群は今回とほぼ同様の組成であるが、とくにハンノキ属の産出が顕著である。また、IX 层と X 層との間ではハンノキ属の出現率が半減する一方、草本花粉ではイネ科やヨモギ属の出現率が高率となるという変化が認められている〔バリノ・サー・ヴェイ株式会社 2005〕。このような状況から、古墳時代中期頃には比較的近傍に林分を形成したとみられるハンノキ属が減少し、草地環境が増加した可能性がある。なお、2世紀中頃から4世紀後半および7世紀中頃という年代観が得られているⅣ層からはハンノキ亜属やトネリコ属（根材）が出土している。年代観に差があるものの、上述した花粉分析結果等も考慮すると、至近に分布したハンノキ属（ハンノキなど）-トネリコ属（ヤチダモなど）からなる湿地林が認められた可能性もある。

一方、草本花粉は、上述したように、VI b 層と V c 層（試料番号 2,3）の花粉群集において出現率が高くなるという傾向を示した。その傾向がとくに顕著な VI b 層（試料番号 3）では、多産するイネ科花粉中に栽培種のイネ属が認められた。同様に、植物珪酸体においても含量が低いものの、イネ属の葉部に由来する珪酸体が検出された。

水田跡の検証や稻作の可能性の検討については、既存の研究事例があり、〔中村 1980b〕によれば、現在の水田における調査事例から、イネ属（花粉）の割合が 30% 以上を示す場合、少なくともその付近で現在に近い集約度の稻作が行われていたとみなせるとされている。また、植物珪酸体では、イネ属の機動細胞珪酸体が 5,000 個 / g 以上の密度（含量）の場合、稻作が行われていた可能性が高いとされている〔杉山 2000〕。

VI b 層（試料番号 3）のイネ属の産状についてみると、花粉は約 36% と上記の基準を上回る一方、機動細胞珪酸体含量は 800 個 / g と基準に満たない。植物珪酸体については採取地点や層位によりばらつきが認められることがあるため検討の余地が残るもの、以上の産状から少なくとも近傍において稻作が行われていたことが推定される。なお、VI b 層では水湿地生草本に由来する分類群が多く確認されているほか、中生草本を含むカヤツリグサ科やツリフネソウ属、アカバナ属-ミズユキノシタ属等も確認されている。また、植物珪酸体では、VI c 層（試料番号 4）と VI b 層との間でイネ属の検出およびヨシ属の含量の減少という層位的変化が認められる。これらの状況は、水田雜草として生育した分類群や稻作以前のイネ科植生を示している可能性があり、今後の評価が期待される。

この他に産出した草本類のうち、イネ科やカヤツリグサ科、サンエタデ道ーウナギツカミ節、ヨモギ属、キクア科等は、いわゆる明るく開けた場所を好む人里植物を含む分類群である。これらは、調査地周辺に分布した草地等に由来すると考えられる。また、イネ科植物については、植物珪酸体に認められたタケア科、ススキ属等は周囲の比較的乾燥した領域に、ヨシ属は湿润な場所に生育したと考えられる。

#### 引用文献（第IV章2）

- 林 昭三 1991 「日本産木材顕微鏡写真集」 京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫 1995 「日本産広葉樹材の解剖学的記載I. 木材研究・資料」31 京都大学木質科学研究所 81-181p.
- 伊東隆夫 1996 「日本産広葉樹材の解剖学的記載II. 木材研究・資料」32 京都大学木質科学研究所 66-176p.
- 伊東隆夫 1997 「日本産広葉樹材の解剖学的記載III. 木材研究・資料」33 京都大学木質科学研究所 83-201p.
- 伊東隆夫 1998 「日本産広葉樹材の解剖学的記載IV. 木材研究・資料」34 京都大学木質科学研究所 30-166p.
- 伊東隆夫 1999 「日本産広葉樹材の解剖学的記載V. 木材研究・資料」35 京都大学木質科学研究所 47-216p.
- 近藤輝三 2010 「プラント・オーバル図譜」. 北海道大学出版会 387p.
- 中村 純 1980a 「日本産花粉の標識 I II (翻訳)」『大阪市立自然史博物館収蔵目録』第12.13集 91p.
- 中村 純 1980b 「花粉分析による種作史の研究」『自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究 一総括報告書ー』文部省科研費特定研究「古文化財」総括班 187-204p.
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2005 「自然科学分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第139集 余川中道遺跡I』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 32-41p.
- 島地 謙・伊東隆夫 1982 「図説木材組織」 地球社 176p.
- 島倉巳三郎 1973 「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学博物館収蔵目録』第5集 60p.
- 杉山真二 2000 「植物珪酸体(プラント・オーバル)」,『考古学と自然科学3 考古学と植物学』辻 誠一郎(編著)同成社 189-213p.
- Wheeeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東 隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeeler E.A., Bass P. and Gasson P.E., 1989] JAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

### 3 2014年度

#### A 樹種同定

パリノ・サーヴェイ株式会社 高橋 敦

##### 1) 試 料

試料は、VI b層より出土した木製品4点(492~495)である。これらの試料は、いずれも木製品より採取された切片の状態にある。

##### 2) 分析方法

採取された切片を確認した後、木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接縫断面)の3断面を拾い上げ、ガム・クロラール(泡水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入し、プレバートとする。プレバートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本と比較して種類(分

類群) を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、[島地・伊東 1982] や [Richterほか 2006] を参考にする。

### 3) 結 果

同定結果を第 17 表に示す。木製品は全て針葉樹で、2 分類群(ヒノキ、イヌガヤ)に同定された。以下に、各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher)

ヒノキ科ヒノキ属 第 46 図 1

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1 分野に 1-3 個。放射組織は単列、1-15 細胞高。

・イヌガヤ (*Cephalotaxus harringtonia* (Knight) K. Koch f.)

イヌガヤ科イヌガヤ属 第 46 図 2

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか。仮道管内壁にはらせん肥厚が認められる。樹脂細胞は早材部および晩材部に散在する。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型で 1 分野に 1-2 個。放射組織は単列、1-10 細胞高。

### 4) 考 察

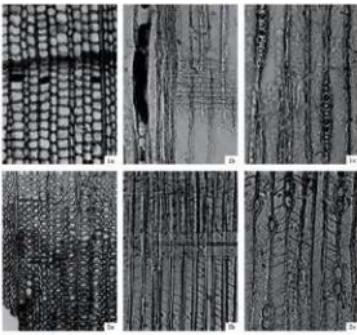
樹種同定を実施した木製品には、針葉樹のヒノキとイヌガヤが確認された。ヒノキは、山地・丘陵地の尾根筋等に生育する常緑高木であり、木材の木理は直線で割裂性・耐水性が高い。また、イヌガヤは、現在の本地域の植生から、積雪地に適応した変種のハイイヌガヤの可能性が高い。ハイイヌガヤは、河畔の林床などに生育する常緑低木で、木材は比較的重硬・緻密であり、強度や耐水性・韌性に優れる。

器種別にみると、曲物底板かとされる資料(493～495)はいずれもヒノキに同定された。形状や木取りの詳細は不明であるが、ヒノキの耐水性や加工性などの材質による選択利用が推定される。一方、弓(492)はイヌガヤであった。弓の用途などを踏まえると、強度や韌性に優れた木材を利用したと考えられる。

なお、新潟県下における曲物底板や弓などの調査例 [伊東・山田 2012]についてみると、木製品の出土層位(VI b 層)に相当する年代(古墳時代中期)の事例は少ない。そこで、古墳時代から平安時代初頭までの事例を参考とすると、曲物底板は地域にかかわらずスギの利用が多く、ヒノキは高畠遺跡(上越市)、曾根遺跡(旧豊浦町)、鬼倉遺跡(加茂市)などで僅かに確認できる程度である。一方、弓は下削遺跡(上越市)、野中土手付遺跡(旧加治川村)、屋敷遺跡・藏ノ坪遺跡(旧中条町)、桃川遺跡群石川遺跡(旧神林村)等の 7

報告番号	標本番号	層位	器種	種類
493	615	VI b	曲物底板か	ヒノキ
494	616	VI b	曲物底板か	ヒノキ
495	617	VI b	曲物底板か	ヒノキ
492	618	VI b	弓	イヌガヤ

第 17 表 木製品の樹種同定結果(2014 年度)



第 46 図 木製品の顕微鏡写真(2014 年度)

L. ヒノキ(曲物底板か)(左)  
L. イヌガヤ(弓)(右)  
a: 木口 b: 頭目, c: 頂目

1a 1b 1c  
2a 2b 2c

100 μm  
100 μm  
100 μm

点の調査例があり、野中土手付遺跡の1点を除く全てにイヌガヤが確認されている。

#### 引用文献（第IV章3）

- 伊東隆夫・山田昌久（編） 2012 『木の考古学 出土木製品用材データベース』 海青社 449p.
- 島地 謙・伊東隆夫 1982 『図説 木材組織』 地球社 176p.
- Rich terH.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (編),2006.針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴  
スト,伊東隆夫・藤井哲之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修),海青社,70p.  
[Rich terH.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.,2004.IAWA List of Microscopic Features  
for Softwood Identification].

## B 放射性炭素年代測定

株式会社加速器分析研究所

### 1) 測定対象試料

余川中道遺跡は、新潟県南魚沼市余川字江端に所在し、平子川や近尾川によって形成された扇状地に立地する。測定対象試料は、土器に付着した漆3点と炭化物7点の合計10点である（第18表）。土器付着漆No.1は土器の底部内面に付着し、漆器に漆液を入れたものと考えられる。同No.2とNo.10は、体部下半外面に帯状に付着し、土器を補修するために塗布されたものと推定されている。土器付着炭化物No.3～9は、いずれも体部上半から口縁部の外側に付着し、燃料によるススと考えられる。これらの試料を採取した土器は古墳時代中期に位置付けられている。

### 2) 測定の意義

漆、炭化物が付着した土器と、それらが出土した遺構の絶対年代を推定する。

### 3) 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、混入物を取り除く。
- (2) 酸・アルカリ・酸（AAA : Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常  $1\text{mol/l}$  (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と第18表に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 ( $\text{CO}_2$ ) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

### 4) 測定方法

加速器をベースとした  $^{14}\text{C}$ -AMS 専用装置（NEC 社製）を使用し、 $^{14}\text{C}$  の計数、 $^{13}\text{C}$  濃度 ( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )、 $^{14}\text{C}$

濃度 ( $^{14}\text{C} / ^{12}\text{C}$ ) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシウウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

## 5) 算出方法

(1)  $\delta ^{13}\text{C}$  は、試料炭素の  $^{13}\text{C}$  濃度 ( $^{13}\text{C} / ^{12}\text{C}$ ) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (%) で表した値である (第 1 表)。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

(2)  $^{14}\text{C}$  年代 (Libby Age : y BP) は、過去の大気中  $^{14}\text{C}$  濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0y BP) として過る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。 $^{14}\text{C}$  年代は  $\delta ^{13}\text{C}$  によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第 18 表に、補正していない値を参考値として第 19 表に示した。 $^{14}\text{C}$  年代と誤差は、下 1 術を丸めて 10 年単位で表示される。また、 $^{14}\text{C}$  年代の誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) は、試料の  $^{14}\text{C}$  年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2% であることを意味する。

(3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の  $^{14}\text{C}$  濃度の割合である。pMC が小さい ( $^{14}\text{C}$  が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 ( $^{14}\text{C}$  の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も  $\delta ^{13}\text{C}$  によって補正する必要があるため、補正した値を第 18 表に、補正していない値を参考値として第 19 表に示した。

(4) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の  $^{14}\text{C}$  濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の  $^{14}\text{C}$  濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、 $^{14}\text{C}$  年代に対応する較正曲線上の曆年代範囲であり、1 標準偏差 ( $1\sigma = 68.2\%$ ) あるいは 2 標準偏差 ( $2\sigma = 95.4\%$ ) で表示される。グラフの縦軸が  $^{14}\text{C}$  年代、横軸が历年較正年代を表す。历年較正プログラムに入力される値は、 $\delta ^{13}\text{C}$  補正を行い、下 1 術を丸めない  $^{14}\text{C}$  年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal13 データベース (Reimer et al. 2013) を用い、OxCal v4.2 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。历年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として第 19 表に示した。历年較正年代は、 $^{14}\text{C}$  年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」) という単位で表される。

## 6) 測定結果

測定結果を第 18・19 表、第 47・48 図に示す。

試料 10 点の  $^{14}\text{C}$  年代は、 $1850 \pm 20\text{y BP}$  (No.8) から  $1660 \pm 20\text{y BP}$  (No.5) の間にあり、誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) の範囲で一致するものも含まれる。历年較正年代 ( $1\sigma$ ) は、最も古い No.8 が  $131 \sim 214\text{cal AD}$  の範囲、最も新しい No.5 が  $356 \sim 418\text{cal AD}$  の間に 2 つの範囲で示され、10 点全体として弥生時代後期から古墳時代中期頃に相当する年代値となっている [佐原 2005]。試料を採取した土器が古墳時代中期とされるのに対し、No.1, 3 ~ 7, 9, 10 はそれに相当する、もしくは若干古い年代を示した。一方、No.2 と No.8 は推定より明らかに古い値である。

これらの年代値を評価する上で、以下の点を考慮する必要がある。

まず、試料 No.2 ~ 4, 6, 8 が含まれる 1 ~ 3 世紀頃の历年較正に関しては、北半球で広く用いられ

る較正曲線 IntCal に対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘がある〔尾崎 2009、坂本 2010〕。その日本版較正曲線を用いてこれらの試料の測定結果を曆年較正した場合、ここで報告する較正年代値よりも新しくなる可能性がある。

次に今回測定された土器付着炭化物 No.3 ~ 9 については、燃料によるスズと考えられている。このため、燃料に古い木や樹齢の多い木の内側部分が用いられた場合には、燃料が燃やされた年代よりも古い年代値を示すこと（古木効果）が考えられる点に注意を要する。さらに、炭化物に食物由来の炭素が含まれている場合、それが海産物であれば海洋リザーバー効果によって実際より古いため値となる可能性もある。ただし、今回の試料の  $\delta^{13}\text{C}$  は、そのような傾向を示していない〔赤澤ほか 1993〕。なお、漆については、古木効果や海洋リザーバー効果を考慮する必要はないと考えられる。

また、試料の状態について確認すると、土器付着漆 No.1、10 は薄い膜状、No.2 は粉状を呈していた。炭素含有率は、膜状の No.1 が 68%、No.10 が 66%、粉状の No.2 が 47%で、粉状の試料の方がやや低い。No.2 に混入物等は観察されず、炭素含有率も特段低い値ではないが、この試料が他の試料に比べて古いため値を示していることと合わせて、若干注意する必要がある。土器付着炭化物 No.3 ~ 9 はいずれも粉状で、No.3 ~ 7、9 の炭素含有率は 39% (No.7) から 56% (No.3, 9) となっている。No.4 と No.7 には土器の胎土と見られるものが少量混入しており、試料調製の段階で可能な限り避けたが、炭素含有率は No.4 が 46%、No.7 が 39% となり、炭化物としては若干低めの値である。No.8 にも胎土と見られるものが混じり、炭素含有率は 10% という低い値を示した。特にこの No.8 については、測定された炭素

測定番号	試料名	報告番号	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C} (\text{‰})$	$\delta^{13}\text{C}$ 棟正あり	
						(AMS)	Libby Age (y BP)	$p \text{MC} (\%)$
IAAA-141013	No. 1	441	SD2100	土器内付着漆	AaA	-29.19 ± 0.65	1,670 ± 20	81.19 ± 0.24
IAAA-141014	No. 2	189	SD3603	土器外付着漆	AaA	-26.40 ± 0.56	1,820 ± 20	79.68 ± 0.24
IAAA-141015	No. 3	318	SD3650	土器外付着炭化物	AaA	-24.88 ± 0.65	1,740 ± 20	80.49 ± 0.25
IAAA-141016	No. 4	321	SD3650	土器外付着炭化物	AaA	-25.57 ± 0.40	1,730 ± 20	80.65 ± 0.23
IAAA-141017	No. 5	324	SD3650	土器外付着炭化物	AaA	-27.68 ± 0.50	1,660 ± 20	81.35 ± 0.24
IAAA-141018	No. 6	319	SD3650	土器外付着炭化物	AaA	-24.59 ± 0.51	1,740 ± 20	80.5 ± 0.24
IAAA-141019	No. 7	156	SD3602	土器外付着炭化物	AaA	-24.72 ± 0.57	1,680 ± 20	81.13 ± 0.25
IAAA-141020	No. 8	475	SN2536	土器外付着炭化物	AaA	-25.37 ± 0.51	1,850 ± 20	79.47 ± 0.23
IAAA-141021	No. 9	476	SD2200	土器外付着炭化物	AaA	-24.09 ± 0.58	1,690 ± 20	81.02 ± 0.24
IAAA-141022	No. 10	190	SD3603	土器外付着漆	Aaa	-26.54 ± 0.62	1,680 ± 20	81.18 ± 0.25

第 18 表 余川中道遺跡の放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$  棟正値)

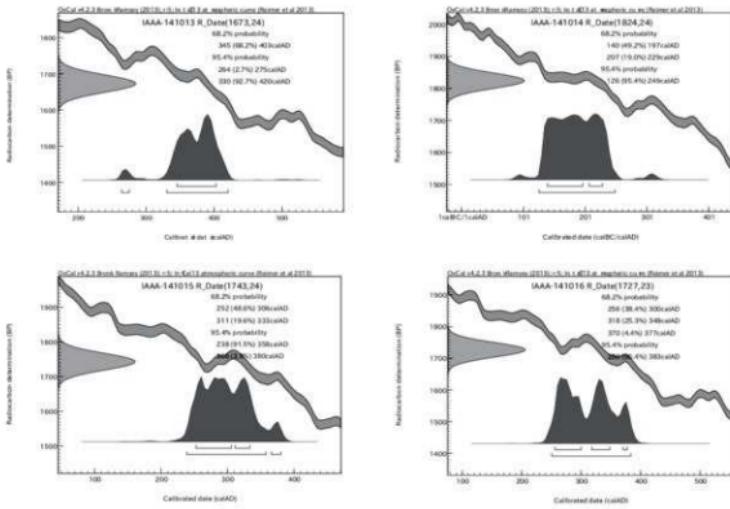
測定番号	試料名	報告番号	$\delta^{13}\text{C}$ 棟正なし	曆年較正用 (y BP)	1 $\sigma$ 年代範囲	2 $\sigma$ 年代範囲	
			Age (y BP)			264calAD - 275calAD (2.7%)	330calAD - 420calAD (92.7%)
IAAA-141013	No.1	441	1,740 ± 20	80.49 ± 0.22	1,673 ± 24	345calAD - 403calAD (68.2%)	264calAD - 275calAD (2.7%)
IAAA-141014	No.2	189	1,850 ± 20	79.44 ± 0.22	1,824 ± 24	146calAD - 197calAD (49.2%)	126calAD - 249calAD (95.4%)
IAAA-141015	No.3	318	1,740 ± 20	80.51 ± 0.22	1,743 ± 24	207calAD - 229calAD (15.0%)	207calAD - 306calAD (48.6%)
IAAA-141016	No.4	321	1,740 ± 20	80.55 ± 0.22	1,727 ± 23	311calAD - 333calAD (15.6%)	311calAD - 300calAD (38.4%)
IAAA-141017	No.5	324	1,700 ± 20	80.9 ± 0.22	1,658 ± 23	318calAD - 348calAD (25.3%)	250calAD - 383calAD (95.4%)
IAAA-141018	No.6	319	1,740 ± 20	80.57 ± 0.23	1,742 ± 24	311calAD - 334calAD (20.1%)	252calAD - 306calAD (48.1%)
IAAA-141019	No.7	156	1,670 ± 20	81.18 ± 0.22	1,679 ± 24	345calAD - 397calAD (68.2%)	239calAD - 357calAD (91.2%)
IAAA-141020	No.8	475	1,850 ± 20	79.41 ± 0.22	1,845 ± 23	131calAD - 214calAD (68.2%)	366calAD - 380calAD (3.9%)
IAAA-141021	No.9	476	1,680 ± 20	81.17 ± 0.21	1,690 ± 23	339calAD - 391calAD (68.2%)	262calAD - 297calAD (9.4%)
IAAA-141022	No.10	190	1,700 ± 20	80.92 ± 0.22	1,675 ± 24	345calAD - 400calAD (68.2%)	255calAD - 283calAD (9.8%)

第 19 表 余川中道遺跡の放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$  棟正値、曆年較正用  $^{14}\text{C}$  年代)

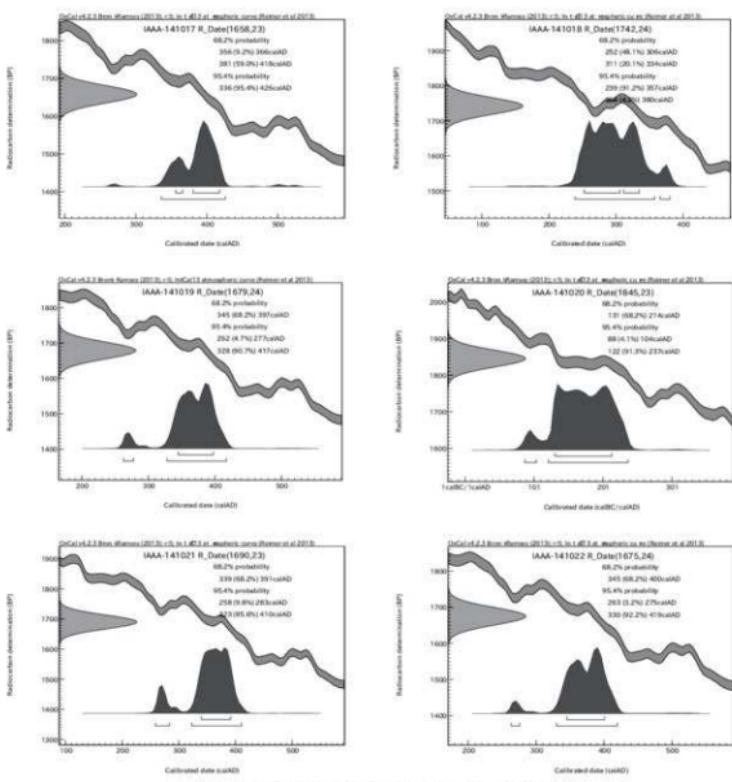
の由来に注意を要する。

#### 引用文献（第IV章 3B）

- 赤澤威・米田穂・吉田邦夫 1993 「北村繩文人骨の同位体食性分析』『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 11 一明科町内— 北村遺跡 本文編（（財）長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 14）』長野県教育委員会・（財）長野県埋蔵文化財センター, 445-468
- Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360
- 尾寄大真 2009 「日本産樹木年輪試料の炭素 14 年代からみた弥生時代の実年代」『弥生時代の考古学 1 弥生文化の輪郭』設楽博巳・藤尾慎一郎・松木武彦編 同成社, 225-235
- Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887
- 佐原 誠 2005 「日本考古学・日本歴史学の時代区分』『日本の考古学 上 ドイツ展記念概説』ウェルナー・シュタインハウス監修 奈良文化財研究所編集 学生社, 14-19
- 坂本 稔 2010 「較正曲線と日本産樹木・弥生から古墳へー」『第 5 回年代測定と日本文化研究シンポジウム予稿集』（株）加速器分析研究所, 85-90
- Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of  $^{14}\text{C}$  data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363



第 47 図 余川中道遺跡の曆年較正年代グラフ（2014 年度）（1）



第48図 余川中道遺跡の歴年較正年代グラフ（2014年度）（2）

## 第V章 余川中道遺跡II まとめ

### 1 古墳時代の土器について

#### A 古墳時代中期の土器編年

2009年度調査で出土した古墳時代中期の土器は、県内でも有数の出土量を誇る。これらの土器は、編年における標式資料となるばかりではなく、器種組成の分析や使用痕の観察、土器祭祀を考察する上でも重要である。また、2013年度調査においては土器の出土量は少ないものの、2009年度調査よりも明らかに古い時期のものが含まれており、古墳時代中期以前の様相を知る上でも貴重である。ここでは遺跡の時期を検討する目的で、土器編年について述べる。当遺跡では、層位的に出土した土器から、大きく4つの画期がある。土器編年については、古墳時代前期は【坂井・川村 1993、滝沢 2005・2011b】、古墳時代前期から後期は【川村 2000、田嶋 1986・1996】、古墳時代中期は【滝沢 2014】、須恵器は【田辺 1981】を参考にした。各時期の併行関係については、【春日 2006、滝沢 2011b・2014、田嶋 1996】より作成した(第20表)。また、各時期の指標となる土器群は第49・50図に提示した。

#### 余川中道I期

D1・D3区のVII層水田から出土したSX2536の甕(475)を指標とする。VII層水田は当遺跡で最も古い時期に位置付けられる。475は水田区画2574の上面で一個体が潰れた状態で出土し、これに共伴する土器はない。この土器は完形に近い状態に復元することができた。475は、使用痕から炊飯調理に使用されたことが想定される(第V章1B参照)。475の発見は、水田に関するマツリの可能性もある。475の器形や調整から前期8~9期に比定でき、様相4~5に位置付けられるであろう(第20表)。また、475に付着したススの放射性炭素年代測定では、2世紀前半~3世紀前半ころの年代値が得られている。

#### 余川中道II期

E区のVII層下位から出土した土器群(SX3654)を指標とする。余川中道III期の遺構の地山となるVII層から出土したSX3654は、高杯A I I類(351・352・354~356)・高杯A III類(353)・高杯II類(357)・壺G(358~362)で構成される。高杯の脚部I類を見ると、356のように脚部が低く、脚上部に膨らみ

西群	時代	余川中道	斎瀬山	橘子山	古墳群	古墳群	【滝沢 2011b】	【滝沢 2005】	【坂井・川村 1993】	【川村 2000】	【滝沢編年】	様式・期	須恵器
300	古墳時代	前期	I	27号	65号	10号	様相1	5期	II・1	1段階	5群	第1様式	I期
							様相2	6期	II・2	2段階	6群		II期
							様相3	7期	II・3	3段階	7群		III期
							様相4	8期	III	4段階	8群	第2様式	I 1期
							様相5	9期	IV	5段階	9群		I 2期
							様相6	10期		6段階	10群		II期
400	古墳時代	中期	II	27号	65号	10号	様相7		7段階	11群	第3様式	TK73	
							様相8		8段階	12群		TK216	
							様相9		9段階	13群		TK208	
									10段階	14群	第4様式	TK23	
									11段階	15群		TK47	
500	古墳時代	後期	III	27号	65号	10号			12段階	14群	II期	MT15	
									13段階	15群		TK10	
									14段階	16群	II 2期	MT85	
									15段階			TK43	
									16段階				

第20表 弥生時代後期から古墳時代の編年と実年代

を持つものもあるが、大半は脚上部には膨らみではなく、まっすぐに伸びる。特に353・354は、ほかの脚部I類よりも脚部が高い。裾部の屈曲も強く、脚上部と裾部の調整も比較的丁寧である。様相8に比定されるが、余川中道Ⅲ期よりも層位的に確実に古い資料であることから、余川中道Ⅱ期は様相8古段階とした。

#### 余川中道Ⅲ期

SD3650の土器集中（図版66・67）、SD3603の土器集中③（図版55・56）、SD2100の土器集中（図版77）の3地点の土器群を指標とする。前述した余川中道Ⅱ期よりも上位から出土しており、明らかに時期差がある。

SD3650の土器集中は、器種に偏りが少なく、各器種が揃う。高杯から見ていくと、主体を占めるのは高杯A1 I類である。Ⅱ期と比べると、裾部に向かって脚上部が開き気味となり、裾の屈曲が弱くなるもの（216・217・220など）が認められる。また、脚上部と裾部の接合部に輪積み痕が明瞭に残るもの（214・218・221など）もあり、調整がⅡ期よりも粗雑な印象を受ける。高杯A1 I類のほか、高杯A2 II・A2類（226・227・235・236）、C II類（229）、D II類（238）、F II・F類（246～248・251）がある。高杯の種類が増えることも当期の特徴と言える。注目すべきは、杯C1類が定量認められることである。杯C1類の出土は、時期を検討する上で重要な指標となろう。小型壺は壺G類が減り、I類（301）・H類（310・311）が出現する。大型壺はD1類（291）・E1類（296）・E2類（295）がある。壺は煮炊きに使用されたものが多く、特小型から大型まで揃う。これらの状況から、SD3650の土器集中は様相8新段階～9に比定される（第20表）。

次に、SD3603の土器集中③を見ていく。SD3603には土器集中が3か所あるが、ここでは第17図に示した土器集中③の土器群を提示した。高杯の脚部が少ないこともあり、Ⅱ期と比較することは難しい。高杯の杯部を見ると、Ⅱ期には認められない身が深めのもの（164・170）がある。また、高杯E類（172）も新たに出現する。この土器群の特徴として、杯C1類が非常に少ないと挙げられる。このことは、SD3650の土器集中よりも時期的に古い可能性を示す。なお、土器集中①（図版49）・土器集中②（図版54）においても、杯C1類の出土は非常に少ない。また、特大壺（189・190）のほか、大型壺のD3類・D4類もある。SD3603の土器集中③は、様相8新段階に比定される。

SD2100の土器集中は、器種が高杯に偏るもの、出土状況から一括りが高い土器群と判断した。高杯A1 I類（428）、A1類（430・431・433）、A2類（434）がある。高杯A1類は口径20cm前後の大型のものである。出土数が極めて少ない、高杯B類（435）が認められた。脚部I類（437）は裾部の屈曲が弱く、脚上部と裾部の接合が丁寧でないことは、SD3650の土器集中と類似する。これらは、様相8新段階に比定される。

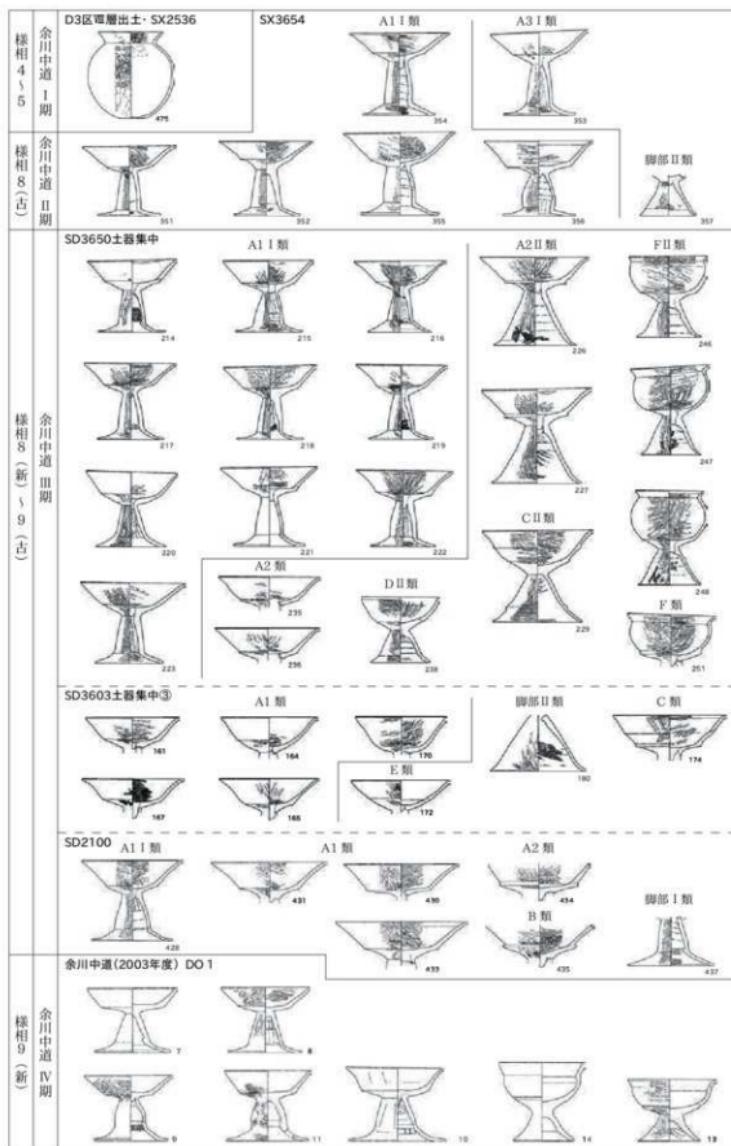
以上の3地点の土器群を見る限り、Ⅲ期はⅡ期（様相8古段階）よりも、新しい要素が認められる。よって、Ⅲ期は様相8新段階～9に位置付けられる。ただし、土器群によっては、器種組成の差が認められたことからも、Ⅲ期を細分できる可能性を残す結果となった。

なお、D3区VIc層のSD2200から出土した壺（476・477）がある。胴の張りが強い壺（476）は、SD3603出土の壺（207）と類似することから、様相8新段階に比定できる可能性がある。

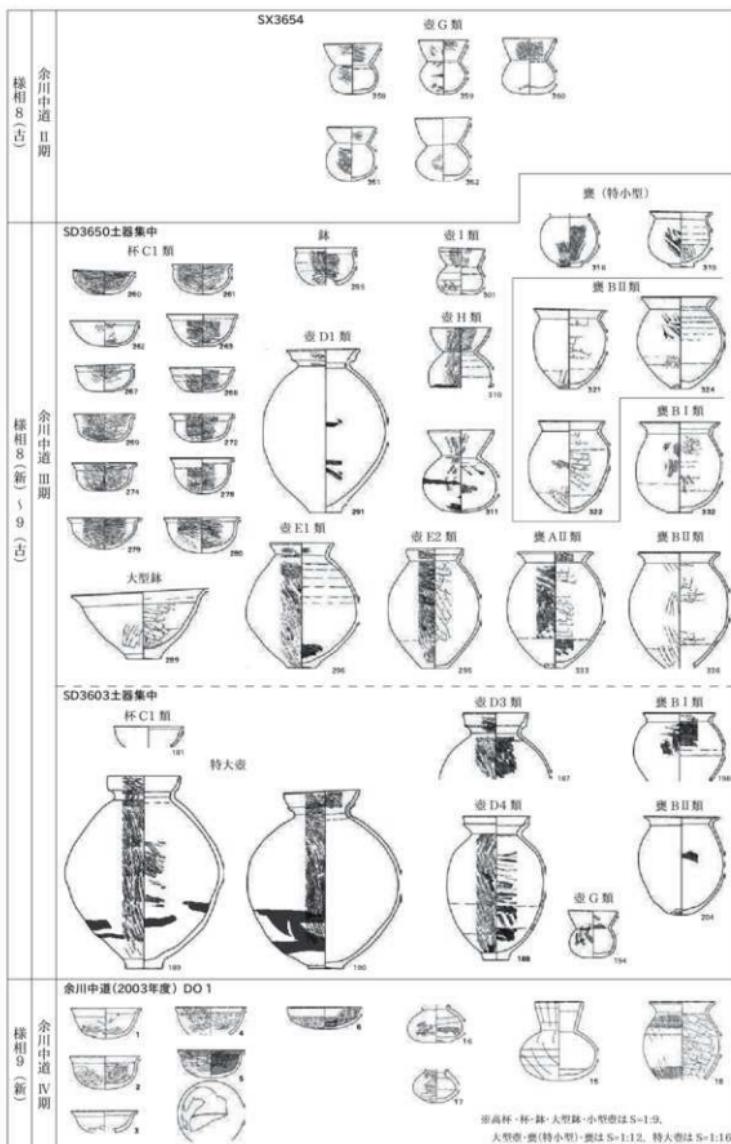
#### 余川中道Ⅳ期

SD3650の土器集中には、様相9に下るもののが認められた。ここでは、明らかに様相9に位置付けられる土器群を確認することで、SD3650の土器集中との時期差を明らかにする。様相9は、「椀の出現・

1 古墳時代の土器について



第49図 古墳時代中期の土器編年(1)



第50図 古墳時代中期の土器編年(2)

盛行に伴う小型壺の減少、手づくね土器の急増を指標とし、「この他の変化として高杯B類・小型壺J類の出現とはできなくとも顕在化など、全体の組成が変化する様相」と考えられている〔滝沢2014〕。ここで比較する資料として、2003年度調査で検出したD01を挙げる。2003年度調査では、土器集中遺構が12か所検出されており、D01・D03が最も古い時期とされている〔飯坂2005〕。滝沢氏はD01を様相9に位置付けている〔滝沢2014〕。D01の土器群を見ると、III期と比べ、高杯脚部I類の短脚化が明らかで、裾部もかなり広がる。また、高杯F類にも変化が見られ、脚部の短脚化、杯部の浅身化、口縁端部の屈曲が弱くなり、さらにその部分が長くなる。杯C1類はIII期と類似するが、黒色土器・須恵器模倣杯の出現は、III期には認められない状況である。D01を概観する限り、III期よりも新しい特徴が多く認められる。よって、2009年度調査ではIV期に比定できる土器群は確認できない。様相9は一定の幅があると理解し、D01を様相9新段階とした場合、SD3650の土器集中は、様相9古段階としたほうが土器の時期差を明確に表現できると考える。当遺跡ではD01・D03の事例から、ミニチュア土器や石製模造品を作り祭祀はIV期（様相9新段階）から始まると言えよう。III期（様相8新段階～様相9古段階）の土器群に石製模造品が含まれない点も、IV期の前段階に位置付けられる理由のひとつとなる。石製模造品の出現に限らず、黒色土器や須恵器模倣杯の出現、須恵器の共伴事例の増加などを考えると様相9古段階と新段階には大きな画期が設けられる可能性がある。

これまでの調査結果も踏まえ、余川中道遺跡のI期～IV期までの変遷を提示した。当遺跡は、2014年度調査も行われ、層位的に遺物が出土しており、特にIV期以降に位置付けられる古墳時代中期後半～後期の土器群が充実している。よって、当遺跡のIV期以降の時期区分は、2014年度調査の結果を待ちたい。当遺跡の土器編年は、越後を含めた北陸地方のみならず、信濃や上野といった隣接地域との編年を考えていく上でも重要な位置付けとなろう。

## B 使用痕観察による土器の使用法について

近年、縄文時代から古代における土器の使用痕研究が着実な成果を挙げている〔長友編2007、小林編2011〕。新潟県においても、古代の土器の使用痕を分析した〔坂井1988〕はじめり、縄文土器の報告〔滝沢2011a、小林・滝沢・古澤2012〕、弥生時代から古墳時代前期の土器の報告〔滝沢2008〕などがある。余川中道遺跡の古墳時代中期の土器は、復元率が高いこと、使用痕（スス・コゲ）の残りが良好なこと、さらに二次被熱したものが少ないとから、使用痕の観察を行う条件が整っている。ここでは土器に残る使用痕を観察し、土器の使用方法を推定する。使用痕（スス・コゲ）の観察方法や分析方法は、〔北野2011、小林2014、外山1992、洞口ほか2010〕を参考にした。

### 【分析の視点】

はじめに土器の器形分析により作り分けを明らかにし、次に甕の使用痕パターンを図化し、その使い方を解釈する。使用痕実測図は、外面2面、内面2面の計4面を作図した。今回の作図では、焼成時の痕跡（黒斑）は考慮していないため、使用痕が明瞭な部分を正面（A面）に配置した。

器形の分析には、甕の用途と関わりの深い、「容量」・「頸部の括れ度・胴の張り（括れ度=頸部径／体部最大径×100）」・「深さ（相対的な深さ=器高／体部最大径×100）」の三属性を取り上げる。使用痕は、外面に残る「スス」・「スス酸化消失」・「吹きこぼれ」・「底部の被熱状況」、内面に残る「コゲ」である。これまでの使用痕研究の成果を参考に、観察した使用痕の状況から、直置きかカマド掛けか、鍋物・汁物料理か炊飯調理かについて解釈する。スス・コゲについては、〔小林2001〕の説明を用い、「ススとは燃料の

薪から出た炭素が燃料に含まれる樹脂を接着剤として器壁に付着したものなのに対し、コゲは食材に含まれる有機成分が強い加熱を受けて炭化し、内壁に吸着・付着したもの」とする。また、吹きこぼれ痕の種類には、「①水が流れた部分にススが付かず白く残った「ススなし部としての白色吹きこぼれ痕」、②吹きこぼれた汁に含まれる有機物が炭化して黒い筋となった「コゲとしての黒色吹きこぼれ痕」、③黒色吹きこぼれ痕と形成過程は同じだが、水気がより多いため輪郭のみが炭化した「黒縁吹きこぼれ痕」（脇の中央部は表面張力により水分が集まるため炭化しない）の3つ」がある。また、「スス酸化消失」は炎が当たつた為に土器表面のススが消え、赤化した状況のことである。

#### 【形と容量】

第51図は、括れ度と相対的深さによる作り分けを示した図である。甕と比較するために、大型鉢・深鉢・大型壺・特大壺のデータも併記した。甕は括れ度59.2～82.2に対し、大型壺は括れ度41.7～57で、括れ度58を境に作り分けが認められた。特大壺は括れ度37前後と、大型壺より括れ度が強い特徴がある。甕を見ると、括れ度60前半と70後半にまとまりが認められる。また、甕は相対的深さ100～120におさまるものが多く、報告では相対的深さ105以下のものを球胴形（甕1類）として捉えることとした。深鉢(156)は括れ度96.8で括れが非常に弱く、また相対的深さ82.7と甕よりも身が浅めであることから、甕とは区別ができる。大型鉢(289)は括れがなく、相対的深さ50前後と浅い器形であることがわかる。

第52図は、甕の容量分布図である。容量を計測した26点を対象とした。2目以下を特小型、2～3目を小型、4～7目を中型、8目前後を大型とした。8目を超え、9目前後の甕(338)もあった。中型に着目すると、4目前半と5目間には断絶が認められることから、中型を細分できる可能性がある。第53図は、括れ度と容量による作り分けを示したものである。甕を見ると、容量5目前後を境に容量が小さくなるほど括れ度が弱くなる傾向がある。内容物をかき回すことを考えれば、括れが弱いほうがその作業は行い易いと考えられる。また、5目以上になると、括れ度60前後にまとまって分布する。第54図は、相対的深さと容量による作り分けを示したものである。5目半ばを境にして、それより容量が小さいものは相対的深さが浅くなり、容量が大きいと相対的深さが深い傾向が認められる。言い換えれば、容量が小さいほど体部が球胴形に近く、容量が大きいと体部が長胴形と言える。

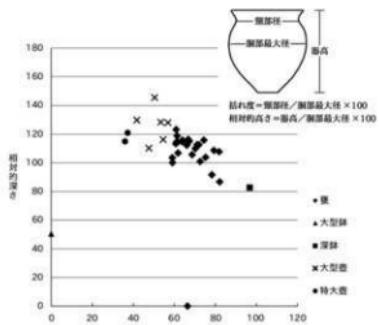
#### 【各土器の使用痕】

容量が計測できる甕26点のほかに、深鉢(156)や大型鉢(289)も観察対象とした。これらのうち、容量別に使用痕が明瞭なものを実測図に提示した(第55・56図)。ここで記載した以外の使用痕については、土器の各説や観察表を参照されたい。

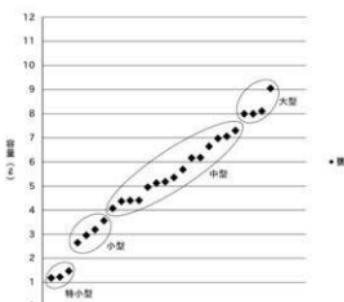
はじめに、深鉢(156)と大型鉢(289)について述べる。156は、全体の1/2が残っており、A面のみを観察した。口縁から体部上半には濃いススがバンド状に付着し、濃いススの下位が体部最大径に位置する。濃いススの直下には、部分的に薄いススが付着する。ススが残っていない部分は、スス酸化消失によるものと考えられるが、スス酸化消失とともにうな赤化や器壁の荒れは非常に弱い。また、内面にはコゲがない。289は使用痕実測図を提示していないが、ススが付着するものの(図版199)、コゲは認められない。ただし、黒斑とは異なる、にぶい黄褐色を呈する円形の薄いヨゴレが2か所認められた。

甕は、容量の小さなものから見ていく。特小型甕の例として、318・319を提示した。318は口縁部が欠損している。口縁部を打ち欠いた可能性も考えられるが、断面にススが付着しないことから、被熱後に破損した可能性が高い。容量は約1.22目である。外面にはバンド状に濃いススが付着し、その直下にはスス酸化消失が認められる。内面には喫水線上のコゲのほかに、底面近くに喫水線下のコゲもある。喫

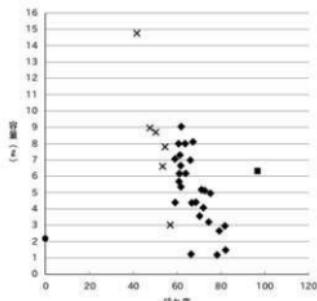
# I 古墳時代の土器について



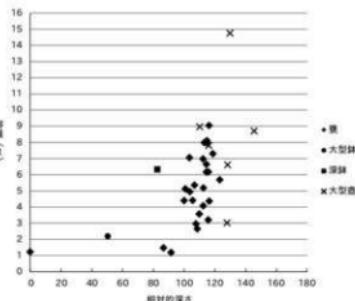
第51図 括れ度と相対的深さによる作り分け



第52図 猥の容量分布図

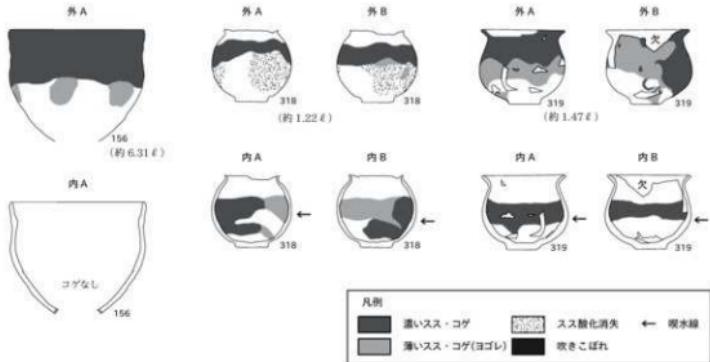


第53図 括れ度と容量による作り分け

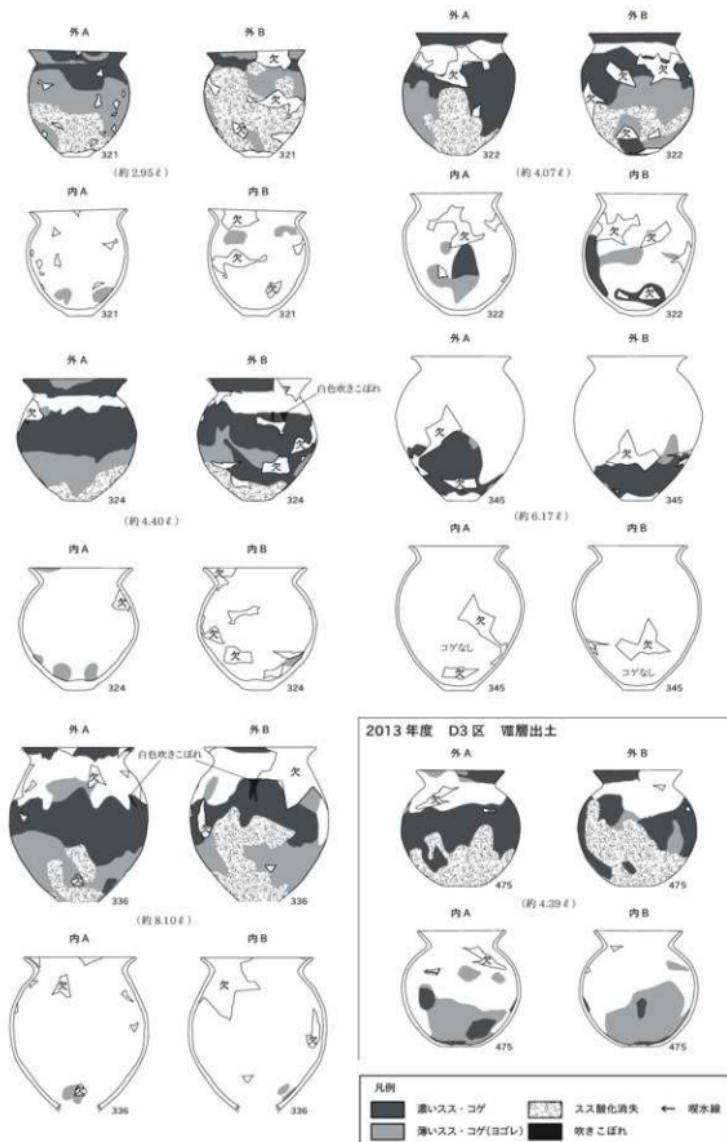


第54図 相対的深さと容量による作り分け

2009年度



第55図 古墳時代中期の土器の使用痕実測図（1） (S = 1 / 9)



第56図 古墳時代中期の土器の使用痕実測図（2） (S = 1 / 9)

水線下コゲは片側に寄ることから、内容物が残った状態で傾き、その部分が焦げたことが想定される。底部外面には被熱による赤化が認められる。319は容量約1.47㎖である。外面にはバンド状のススが付着し、内面には喫水線上のコゲが認められる。体部下半のスス酸化消失は弱い。底部外面は、被熱により赤化する。

小型甕の例として、321を提示した。321は容量約2.95㎖である。A面をみると、口縁部から頭部に濃いススが、体部上半に薄いススが付着する。体部下半はスス酸化消失し、その部分の器面は荒れる。それと対応するように、内面には喫水線下のバッチ状コゲが認められる。B面の体部上半にもスス酸化消失があり、それと対応するバッチ状コゲが認められる。A面と比較して、B面には高い位置にスス酸化消失・コゲがある。この痕跡はB面を傾け、側面を加熱したことが想定される。底部外面には被熱した痕跡はない。

中型甕の例として、322・324・345を提示した。322は容量約4.07㎖である。口縁部と体部上面には濃いススが付着するが、頭部にはススはない。A面の体部中位から下半にかけて楕円形のスス酸化消失が認められ、それと対応するコゲがある。そのコゲの範囲はやや大きく、中位のほうが濃い。B面にもスス酸化消失があるが、A面よりも低い位置にある。それと対応するバッチ状コゲもA面よりも低い位置にある。底部外面は被熱するが、赤化の状態は体部下半よりも弱い。324は容量約4.40㎖である。ススの付着状況は322と類似し、口縁部と体部上半に付着し、頭部にはススがない。外B面に白色吹きこぼれの痕が残り、その部分にはススが付着しない。A面・B面ともにスス酸化消失の位置が低く、それと対応するように、底部内面にバッチ状のコゲが認められる。底部外面も被熱する。345は容量約6.17㎖である。ススの上端ラインがほかの甕より、明らかに低い。スス上端のラインの凹凸が著しく、A面・B面でスス上端の高さが異なる。弱火による加熱が想定される。底部外面には被熱の痕跡なく、ススも付着しない。内面にはコゲもない。内外面ともに器面の摩耗が弱いことから、使用回数が少ないと考えられる。

大型甕の例として、336を提示した。底部がわずかに欠損しているが、336は容量約8.10㎖と見られる。口縁部と体部中位に濃いスス、体部下半に薄いススが付着する。口縁部のススに着目すると、336は中型甕(322・324)よりも、ススが付着する幅が狭い。頭部から体部上半にススが付着しない。中型甕よりも体部が張っていることで、頭部にまで炎が届きにくかったと考えられる。両面に白色吹きこぼれ痕が認められる。外A面には、体部下半にスス酸化消失が認められ、それと対応するバッチ状の薄いコゲがある。外B面をみると、外A面よりも高い位置までスス酸化消失が認められるが、それと対応するコゲはなく、底面近くに薄いコゲがある。スス酸化消失により器面の荒れが弱く、内面の器壁の状態も比較的きれいなことから、使用回数が少ないと考えられる。

これまで見てきた土器は、余川中道Ⅰ期(様相8新段階～様相9古段階)に比定される。これらよりも古い時期の余川中道Ⅰ期に比定される甕(475)についても観察を行った。外面を見ると、口縁部と体部中位に濃いススが付着するが、頭部から体部上位にはススはない。外A面は体部下半がスス酸化消失し、それと対応するようにコゲが付着する。コゲの範囲が大きく、底面にまで広がる。そして、部分的に濃いコゲもある。外B面は、外A面よりも高い位置までスス酸化消失が認められる。内A面同様に、コゲの範囲が広い。475のコゲには、炭化穀粒痕が残る部分もある。炭化穀粒痕を観察すると、細長い粒が認められた。粒形から米が想定される。さらに、穀粒状に器壁がはがれた痕跡も認められた(図版140)。

#### 【観察結果から推定される調理方法】

容量と使用痕から、特小型甕と小型～大型の甕には使い分けが想定される。特小型甕には、喫水線上のコゲが認められた。この痕跡は、鍋物・汁物調理で生じたものと推定した。318には、底部内面にコゲが付着することから、内容物を火にかけ続けた調理の痕跡であろう。319の喫水線上のコゲから、調

理後に火から離したものと見られる。なお、小型甕(395)にも喫水線上のコゲが付くものもあった。小型甕のなかにも、鍋物・汁物調理に使用したものが含まれる可能性がある。3箇以上の大甕については、スス酸化消去に対応する喫水線下のコゲ、側面加熱に蒸らしに対応するスス酸化とコゲが認められた。さらに、白色吹きこぼれ痕が残るものもある(324・336)。これらの甕は、炊飯調理に使用したことが想定される。特に321・322に認められる高い位置のコゲは、側面加熱蒸らしの痕跡の典型的な例と言えよう。民族調査により、米の品種と炊飯方法を考察した小林正史氏によれば、「側面加熱蒸らしを伴う湯取り法」は、粘り気がやや弱い、東南アジアのような品種(熱帯ジャボニカ)の特性を引き出す炊飯方法であるという[小林2014]。炊飯調理には、蓋を使用することが想定される。しかし、当遺跡からは土器の蓋は出土していない。当時、木の蓋が存在したと考えられるが、そのようなものも出土していない。ただし、SD3603・SD3650からは、被熱した高杯の杯部が出土した。高杯の杯部に残る被熱痕跡から、炊飯調理に使用されたことを導くことは難しいが、それに類するものが含まれる可能性は否定できない。

使用回数について言及することは難しいが、大型甕(336)を観察する限り使用回数が少ないことが想定される。また、煮炊きの痕跡がないものもあり、特小型甕の316、大型甕の334・337を挙げられる。当遺跡では、小型甕・中型甕より、特小型甕・大型甕のほうが、使用回数が少ない傾向にある。

底部外面の被熱痕や底面のコゲの有無は、直置きか浮き置きかを判断する基準のひとつとなる。今回の観察では、直置き(321・345)と浮き置き(318・322・324・475)が想定される。319・336は直置きと見られるが断定できなかった。345の底部外面のススの付着状況から、底部は数cmほど灰に埋めていた可能性がある。土器の使用状況から直置き、浮き置きの両方が認められるが、いずれにしてもカマドではなく、炉で調理していた。新潟県内でのカマドの出現は5世紀中ごろと示唆されており[春日1996]、6世紀前半にはカマドが定着すると見られる。また、南魚沼市に隣接する群馬県では、カマドは5世紀中葉に出現し[洞口2010]、5世紀後半には広がる[神谷2005]。観察した土器は、475を除いて、様相8新段階～様相9古段階(5世紀前半)に比定されており、これらがカマド導入以前の土器群であることが使用痕観察からも言える。

今回の観察では、内容物について言及することができなかった。コゲや吹きこぼれの様子から、粥や雑炊状ではなく、炊飯と推定した。炭化穀粒痕から米と考えられるが、内容物がすべて米かという点については判断することは難しく、粟や稗といった穀物も想定する必要があろう。

第55・56図に提示したもののうち、特小型甕(318・319)・小型甕(321)・中型甕(322・324)・大型甕(336)は、SD3650の土器集中から出土したものである(第18図)。また、煮炊きの痕跡なしとした大型甕(334)も、ここから出土した。これらの土器は、出土状況から祭祀に使用された可能性が高い。今後、堅穴建物出土の土器と比較することで、SD3650の土器集中出土土器との使用の差がより明確になるものと考えられる。また、5～6世紀は食器・調理の変革期と考えられていることから[宇野1999]、当該期と前後する時期の土器の使用痕を観察することで、調理の変化を追うことが可能となろう。

## 2. 余川中道遺跡と飯綱山古墳群・蟻子山古墳群

余川中道遺跡は、近尾川・平手川によって形成された扇状地扇端部に立地する。これまでに4回の発掘調査が行われ、古墳時代に関する多くの情報がもたらされた。それらを総合すると、丘陵先端部に墓域、扇状地上に集落、扇状地扇端部より低い地域に水田が築かれたと考えられる(第68図)。このうち、集落

部分が現在の余川集落の地下に埋没している可能性が高く、状況はよく把握できていない。しかし、集落に近い標高の高い調査区では、竪穴建物や掘立柱建物の柱穴が検出されており、そのことを類推できる。このように、一地域において、墓域・集落・生産域を一体的に把握できることに、当遺跡を含む余川地域の重要性を指摘できる。また、この地域には、飯綱山での古墳出現以前から人々の営みを確認することができる。

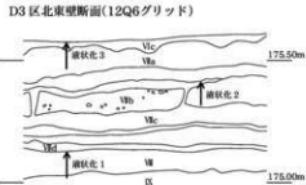
当遺跡から出土した最も古い遺物は、弥生時代後期～終末期の箱清水系の土器である。土石流堆積物からの出土であり、上流に弥生時代の集落が存在する可能性が高い。飯綱山古墳群の中に所在する飯綱山I・II遺跡においては、弥生時代の土器【石川1997、石井2001】やアメリカ式石燈【石原1996】が出土している。古墳時代に先駆けて、弥生時代から近隣の開発が始まっていたことを示すものである。

本格的な集落が展開され始めたと推測されるのは、古墳時代前期（VII層面）からである。この時期の集落そのものは検出していないが、極小区域水田を検出した。水田を検出したということは、それを構築・管理した集団が近隣に存在したことを意味する。規格的な水田が築かれたということは、相応の土木技術を有し、かつそれを統括する権力者が存在した可能性があろう。飯綱山古墳群において最も古い古墳の出現は、中期初頭とされており、それに先行する集団の存在がうかがえる。前期の水田とした根拠は、田面から採取した種子の放射性炭素年代が3世紀という年代値が得られていることにある。また、VII層面から出土した土器付着物の年代値や土器の形態、上下の層序から採取した炭化物の年代値を考慮しても、前期に位置付けられることは確実と見られる。

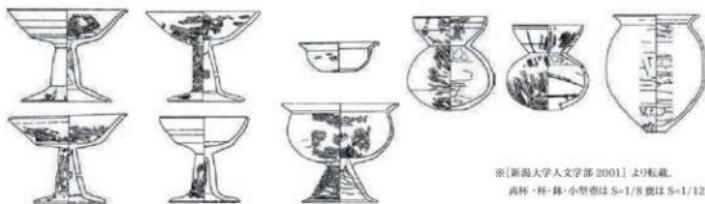
しかし、この水田面からは、イネの植物珪酸体はほとんど出土していない。水田面を切る地震災害（液状化）が発生したのちに、大規模な土石流災害が発生している。ヒトの足跡が土石流堆積物で埋没していたことから、水田構築後、間もない時期に地震災害・土石流災害に見舞われている可能性が高い。地震の規模は、液状化現象の様子を見る限り震度6以上と見られ、遺跡の西側を走る六日町盆地西縁断層帯の活動による可能性が高い。つまり、地震災害によって山体が崩壊して土砂ダムができ、それが一定期間経過することで圧力を耐えられなくなり、土石流として下流に下った可能性も考えられる。その後も、古墳時代中期までの間に、3度の地震が発生している（第57図）。六日町西縁断層帯の活動履歴は知られておらず、古墳時代に活動期であったことが明らかとなつたことは重要である。今後の防災・減災対策に資する資料となりえよう。また、地震災害と土石流災害とでは、連動している可能性がある。

中期前半～中頃は、本報告の調査範囲において最も遺構・遺物が濃密な時期である。E区・D2区において土器を使用した祭祀が盛んに行われた。出土した膨大な数の土器は、特定の範囲からまとめて出土しており、復元率は極めて高い。時期は短期間に収まり、かつ混在する資料が見られないことから、土器編年の指標となり得る。また、放射性炭素年代測定では、4世紀後半ころの年代値が得られており、従前の実年代より古めといえる。D1・D3区においては、VIc層がこの段階に相当するが、この層準は上下と比べて土壤化が進んでいる。すなわち、洪水等による急速な堆積物ではなく、地表であった期間が長かったことを示している。洪水災害にたびたび見舞われた当遺跡においては、安定した時期であったのであろうか。

なお、これら土器群は、飯綱山古墳群で古い段階に位置づけられる65号墳出土土器（第58図、第20表）と



第57図 液状化現象の層位関係 (S=1:20)



第58図 飯綱山 65号墳の出土土器

※[新潟大学人文学部 2001] より転載。  
高杯・杯・鉢・小型壺はS=1/8 塗はS=1/12

併行すると見てよい。古墳群の構築が始まったころに、本報告資料による祭祀が行われたといえる。また、石製模造品による祭祀は認められず、勾玉が1点出土したのみである。2003年度調査においては、多数の石製模造品が、本報告資料より新相の土器に伴うことが明らかになっており、祭祀の変遷を考える上で重要な成果といえる。

### 3. 古代の水田

D1・D3区で検出したVI b層から検出した水田は、古墳時代の水田として速報してきた。しかし、その根拠が十分でなく、2013年度調査で年代に疑問を抱かざるを得ない遺物が出土した。そこで、放射性炭素年代測定を行ったところ、7世紀末～9世紀中ごろという結果が得られた。上下の層位の年代値との間に不自然な状況もない。また、2014年度調査においては、VI b層水田を覆うVI a層及び水田土壤から明らかに古代に下る須恵器が出土した。これらのことから、VI b層上面で検出した水田は、古代の水田と評価した。また、水田のベースとなったVI b層は、草本質泥炭である。古墳時代中期の遺物包含層VI c層が堆積した後、湿地のような環境となり、長い時間をかけて形成された泥炭と考えられる。このような環境変化により、D1・D3区は古墳時代中期以降、しばらくの間、利用されなくなったと考えられよう。

### 4. 中世集落の展開

E・G・H区においては、集落の中心部を検出し、掘立柱建物の柱穴が密集していた。出土した陶磁器から推定される集落の存続期間は15世紀を中心とする短期間である。当地は、上田庄に属し、上田長尾氏が治めていた。その配下の集落のひとつと考えられるが、鍛冶関連の遺構を検出し、鍛冶津、鍛造剝片、羽口が多数出土した。鍛冶は、室内手工業的な生産ではなく、専業に近い集団の存在をうかがえる。南魚沼地域の中世においては、集落遺跡の調査がほとんど行われておらず、実態はほとんど明らかにされていない。2014年度調査では、陶磁器の優品が出土するなど、一般的な村落とは異なる様子も認められる。これらの成果も併せて総括することで、当地域の集落の一端を垣間見ることができよう。

## 第VI章 金屋遺跡 III

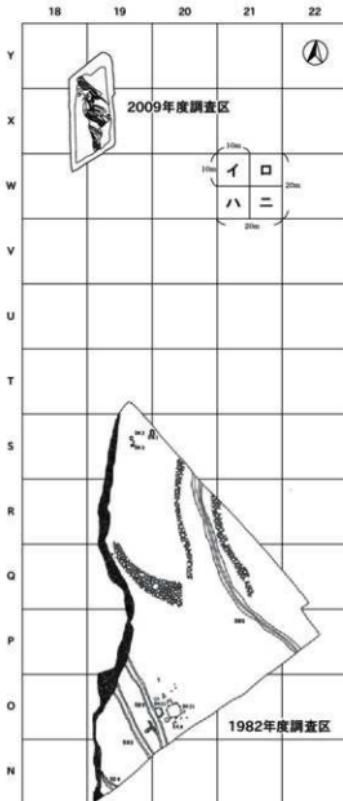
### 1 調査の概要

#### A グリッドと調査区の設定

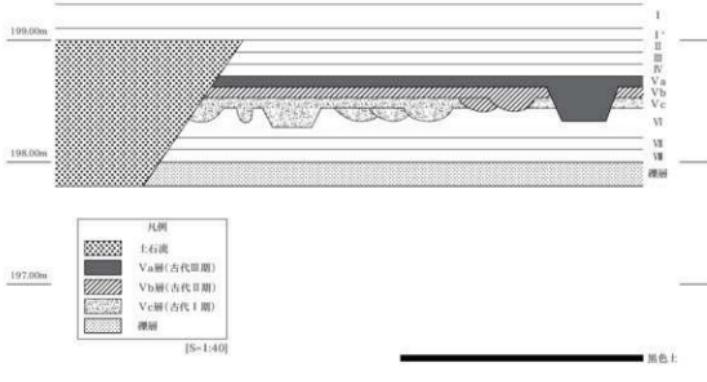
2009年度調査区は、1982年度A地区の北側に位置する（第59図）。グリッドは1982年度調査に倣い設定することで、相互の位置関係を把握できるようにした。1982年度調査では、グリッドは国家座標に沿って20mの方眼を組み込み、これを大グリッドとした【北村1985】。大グリッドの呼称は西から東へアラビア数字で18・19・20…、南から北へアルファベットの大文字でL・M・N…とした記号を組み合わせ、18 L・18 M…、19 L・19 M…のように表示した。ただし、2009年度調査では大グリッドを10m四方としたため、20mグリッドを4分割することで、10m四方のグリッドを設定した。10m四方のグリッドにはそれぞれイ・ロ・ハ・二を付した。これにより、大グリッドは18 Xイ・18 Xロ…、19 Xイ・19 Xロ…のように表示した。さらに大グリッド内を25分割し、北西隅を1、北東隅を5、南西隅を21、南東隅を25となるように番号を付し、大グリッド番号と組み合わせて「19 Xイ 21」等と表示した。なお、調査範囲のほぼ中央に位置する19 Xハ1の北西杭の座標は、X = 120340.397、Y = 33198.413である。

#### B 基本層序

基本層序はI層からVI層まで大別した。いずれの土質も、洪水に由来するシルト・砂質シルトからなる。この堆積物は、遺跡の北側を流れる庄之又川によって運搬された土砂が由来するものとみられる。包含層としたV層は土質や遺物の混入量から、さらに3層に細分した（V a層、V b層、V c層）。また、V a層、V b層、V c層の直下で遺構が掘り込まれていることから、遺構検出面は3面ある（第60図）。各層で検出した遺構からは同時期の遺物が出土したことから、短期間に遺構が作りかえられていることがうかがえる。



第59図 金屋遺跡のグリッド設定図 (S = 1:1,500)



第60図 金屋遺跡の基本層序模式図

I層 黄灰色シルト (2.5Y4/ 1) 水田耕作土。褐鉄鉱が多く沈着する。一部、黄色土の盛土を残す。層厚は5~24cmで、調査区全域に堆積する。

I'層 暗灰黄色シルト (2.5Y5/ 2) I層より砂質が強い。I層よりもしまりが弱い。直径2~3cmから拳大の礫を含む。褐鉄鉱が多く沈着する。層厚は10~30cmほどである。層の下面がやや乱れ、II層の一部を壊している。

II層 オリーブ褐色土 (2.5Y4/ 3) 粘性が強く、上下層よりもしまりが強い。微細な炭化物を多く含む。層厚は6~20cmである。I'層及び土石流で壊されているため、II層が認められない範囲もある。

III層 黒褐色シルト (2.5Y3/ 2) II層同様にしまりが強い。微細な炭化物を多く含む。古代の遺物がわずかに出土した。層厚は6~14cmである。

IV層 オリーブ褐色シルト (2.5Y4/ 6) 自然堆積層。上位はシルト質、下位は粗砂である。遺物は出土しなかった。

Va層 オリーブ褐色砂質シルト (2.5Y4/ 3) 古代の遺物包含層。遺物は極めて少ない。Vb層よりもしまりが強い。非常に細かい炭化物を少量含む。層厚は4~10cmである。

Vb層 黒褐色砂質シルト (2.5Y3/ 2) 古代の遺物包含層。上下層よりも色調が暗い。Va層よりも粘性が強い。炭化物を多く含む。Vc層よりも遺物は少ない。層厚は4~12cmである。

Vc層 暗オリーブ砂質シルト (2.5Y3/ 3) 古代の遺物包含層。Vb層よりも砂質が強い。直径5mmほどの炭化物を多く含む。層厚は4~14cmである。遺物が最も多く出土した。遺物の時期は9世紀後半から10世紀前半と考えられる。

VI層 オリーブ褐色砂質シルト (2.5Y4/ 6) 上面が遺構検出面。礫はほとんど含まれない。層厚は18~24cmである。遺物は出土しなかった。

VII層以下については部分的に深掘りを行い、遺構及び遺物の有無を確認した(図版216)。その結果、遺構や遺物はなかった。土石流堆植物(砂礫層)が現地表下約3m以上続くが、砂礫層の間には黒色土の堆

積が認められた。黒色土が堆積した理由として、離水した安定期があったと考えられる。この黒色土に混入する炭化物（試料 No. 1・試料 No. 2）について、放射性炭素年代測定を行った。その結果、試料 No. 1 の較正年代が 80 ~ 220 年、試料 No. 2 の較正年代が 70 ~ 220 年と、ともに弥生時代後期から古墳時代前期という年代値が得られた（第 VI 章 2 を参照）。

### C 調査の概要

水田耕作土（I 層）を掘削すると、II 層が露出した。II 層上面で土石流の範囲を検出した。調査区の北東部分や南東部分、さらには南西部分の大半が土石流によって遺跡が壊されていることが分かった（図版 211）。その後、II 層から IV 層を掘削し、遺物包含層である V a 層を検出した。V a 層からは 9 世紀後半の土師器片が出土したことから、V a 層を古代の遺物包含層と認識し、調査を行った。V a 層以下には、V b 層・V c 層と包含層が連続して堆積する。前節で触れたとおり、V a 層・V b 層・V c 層を層位的に調査した。ただし、断面では遺構の掘り込み面を確認できても、遺構覆土と遺構検出面の色調が似ることから、結果的に平面の色調が大きく異なる VI 層上面で検出したものが多い。遺構は畑作溝が大半で、わずかに土坑やビットを検出した。なお、本調査では、遺構番号は新たに I 番から付している。

## 2 遺構

### A 概要

古代の遺物包含層は V a 層・V b 層・V c 層で、各層に対応する遺構を検出した。遺構の掘り込み面や遺構の重複関係から、V c 層の遺構を古代 I 期、V b 層の遺構を古代 II 期、V a 層の遺構を古代 III 期に大別した（第 61 図）。古代 I 期の遺構は、VI 層上面から掘り込まれる遺構で溝 9 条のほかに土坑 1 基、ピット 6 基、性格不明遺構 1 基を検出した。古代 II 期の遺構は、V c 層上面から掘り込まれる遺構で溝 14 条を検出した。古代 III 期の遺構は、V b 層から掘り込まれる遺構で溝 2 条のみを検出した。これらの遺構は調査区の中央部分で検出され、そのほかの部分は土石流により大きく壊されていた。次項では、時期ごとに遺構の特徴を報告する。特に溝は遺構の重複関係や主軸方向、出土遺物に重点を置いて記載する。また、各時期の溝の主軸方向については、第 62 図で示した。なお、遺構の位置や規模、出土遺物等については遺構観察表を参照されたい。

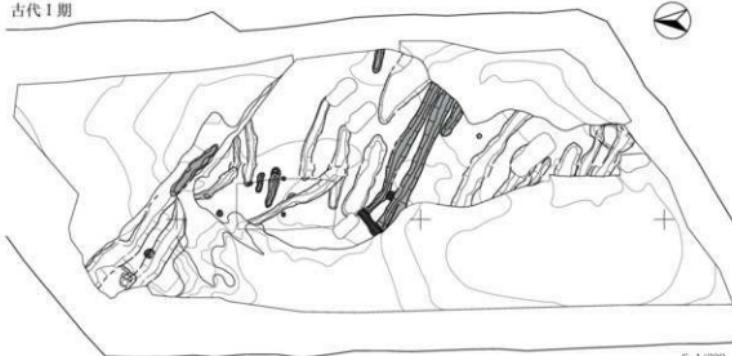
### B 古代 I 期の遺構

#### 1) 溝（図版 128 ~ 131・213・214）

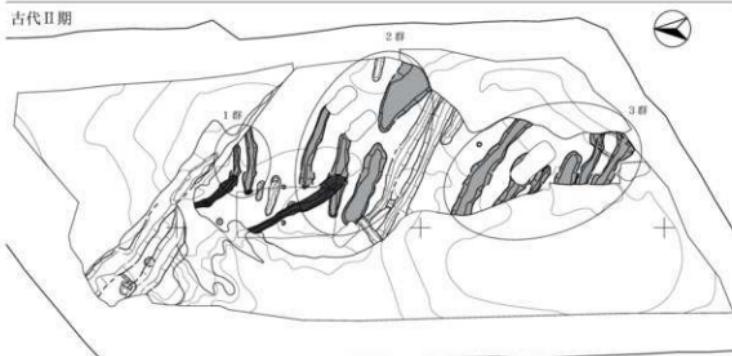
VI 層上面から掘り込まれる溝は 9 条（SD1・SD7・SD9・SD12・SD13・SD14・SD15・SD23・SD31）を検出した。まず、遺構の重複関係について述べる。SD9・SD13・SD14・SD15 には重複関係が認められ、SD15 は SD13・SD14 より古く、また SD13・SD14 は SD9 より古い。これらの新旧関係を整理すると、古い順に SD15 → SD13・SD14 → SD9 となる。このような関係をふまえると、古代 I 期とした遺構は少なくとも 3 時期に細分することが可能と言える。

次に溝の主軸方向をみると、北東 - 南西方向と、南東 - 北西方向に大きく分かれる。北東 - 南西方向を主軸とする SD9・SD15 は、ほかの遺構に壊されており、また検出した長さも短い。溝は幅が 20 ~ 50 cm で、幅が狭いものが大半である。SD13・SD14 のように長さが 6 m を超えるものがある一方で、

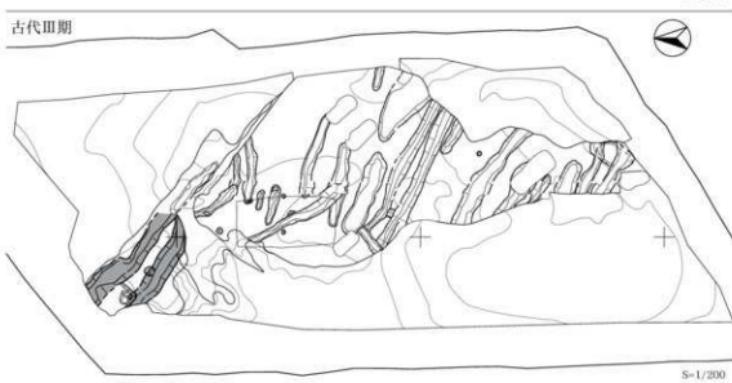
古代Ⅰ期



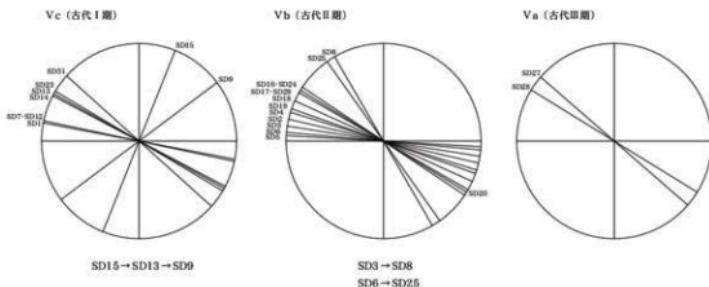
古代Ⅱ期



古代Ⅲ期



第61図 遺構変遷図



第62図 各時期における溝の主軸方向

SD1・SD7・SD12・SD23・SD31は長さが3m以下と短い溝である。溝の深さは4～20cmと、比較的浅い。SD13・SD14・SD23は幅がほぼ同じで、かつ平行に並ぶことからも畑作溝と推定される。ほかの溝についても、畑作溝の一部と考えられる。

出土遺物は各溝から土師器の細片がわずかに出土した。そのうち図化したものは、SD7の土師器の無台椀(1)、SD13の土師器の無台椀(2)である。遺物は9世紀後半の所産と考えられる。

## 2) 土坑(図版129・131・215)

SK30は19Xハ17・22グリッドに位置する。VI層上面から掘り込まれ、また古代II期としたSD18・SD19より古いくことから、SK30は古代I期の遺構と判断した。SDS18・SD19に壊されているから、不明確な部分が多いが、平面形態は椭円形を呈するとみられる。深さは23cmで、断面形は弧状である。遺物は出土しなかった。

## 3) ビット(図版128・129・131・215・216)

VI層上面でビット6基(P10・P11・P21・P26・P30・P33)を検出した。これらのビットは、直径が18～40cm、深さが6～15cmと比較的規模が小さい。断面観察の結果、いずれのビットからも柱根や柱痕部を確認することはできなかった。これらのビットは点在し、かつ柱筋が認められないことをふまえると、柱穴と評価することは難しいと言える。

## 4) 性格不明遺構(図版128・131・215)

SX34は18Yニ19・20・24グリッドに位置する。SX34はSD28・SD29と土石流によって壊されていることから不明確な部分が多い。平面形態は、方形もしくは長方形とみられる。規模は長軸が135cm、短軸が95cmである。断面形は台形状を呈し、深さは36cmである。覆土は水平に堆積し、1層は暗灰黄色シルト、2層は黒褐色シルトに細分した。遺構底面は平坦である。1層から土師器の小甕(11)・長甕(12・13)、黒色土器(14)のほかに、土師器片35点が出土した。2層からは土師器片が8点出土した。これらの遺物は9世紀後半の所産と考えられる。

## C 古代II期の遺構

### 1) 溝（図版 128～131・213・214）

古代II期とした溝は14条（SD2・SD3・SD4・SD5・SD6・SD8・SD16・SD17・SD18・SD19・SD20・SD24・SD25・SD29）検出した。遺構の重複関係を見ると、SD8はSD3より新しく、またSD25はSD6より新しい関係が認められる。またSD8とSD25は主軸方向が似ることから、両者は同時期の溝である可能性が考えられる。そのほかの溝は、SD8・SD25よりもさらに主軸が西へ傾く傾向がある。このような関係から、古代II期の遺構は少なくとも2時期に細分することが可能と言える。

古代II期の溝は古代I期の溝と比較して、幅広となる傾向が認められる。その幅は26～128cmであった。調査区東側から検出されたSD29にいたっては最大幅162cmである。深さは5～22cmと、古代I期の溝同様に浅い。また溝の位置に着目すると、北からSD5・SD6（1群）、SD2・SD3・SD4・SD29（2群）、SD16・SD17・SD18・SD19・SD20・SD24（3群）と、群をなすようにみえる。これらの溝は土石流や擾乱により検出した部分が短いが、おおむね平行して並ぶことからも畑作溝の可能性が高いと考えられる。

SD18の覆土については、栽培作物を考察する目的で花粉分析を行った。SD18の覆土1層の上位と下位から分析試料を採取した（図版129）。分析の結果、1層（下）からは草本花粉のタンボボ亜科・シダ植物单条溝胞子・シダ植物三条溝胞子を、1層（上）からは樹木花粉のマツ属複維管束亜属・草本花粉のアブラナ科・キク亜科・シダ植物单条溝胞子をわずかに検出した。いずれの覆土も花粉密度は極めて低かった。花粉密度が極めて低い状況は、花粉などの有機遺体が分解されるような乾燥ないし乾湿を繰り返す堆積環境であったか、土壤の堆積環境が早く、花粉などの微化石が堆積しなかつたことが想定される。当遺跡は洪水堆積の影響で、文化層が幾層にも形成されている状況がうかがえることからも、花粉分析の結果は、洪水等の影響で土壤の堆積環境が早かったことを支持するものと言える。

出土遺物については、土師器の細片がほとんどで、SD19から出土した土師器椀（3）を図化した。この土師器椀は覆土の上位から出土した（図版131・214）。これらの遺物は9世紀後半の所産と考えられる。

## D 古代III期の遺構

### 1) 溝（図版 128・131・215）

古代III期とした溝は、2条（SD27・SD28）ある。これらは調査区の北側に位置し、ほぼ平行して並んでいる。両溝は断面形が台形状で、しっかりと掘削されている。古代I期及びII期の畑作溝よりも深度が深く、SD27が深さ44cm、SD28が深さ39cmである。いずれも検出した長さが3～4mと短いことから性格付けをすることは難しいが、畑作溝とは規模が異なることから、水路や区画溝の可能性が考えられる。遺構の底面標高は、SD27・SD28とともに北西から南東方向に向かってわずかに傾斜している。覆土はともにレンズ状に堆積し、SD27は2層に、SD28は3層に細分した。堆積状況から、洪水堆積によって埋没したと考えられる。

出土遺物について、SD27から土師器の無台椀（4）・小甕（5）・長甕（6・7）、黒色土器の無台椀（8・9）・片口鉢（10）のほか、土師器片31点、黒色土器片2点が出土した。遺物の大半が、遺構の底面近くから出土した。SD27の出土遺物は、9世紀後半の所産と考えらえる。SD28からは土師器片が13点出土したもの、細片のため図化しなかった。

### 3 遺 物

#### A 概 要

当遺跡からは、古代の遺物がコンテナ3箱（箱の内寸：54cm×34cm×10cm）出土した。土器には土師器・黒色土器・須恵器がある。土器の大半は土師器で、次に多いのは黒色土器、須恵器は1点のみであった。土器以外には鉄斧2点がある。なお、試掘・確認調査の出土遺物には、土師器の無台椀・小甕・鉢・金属製品・羽口がある〔田中2004〕。

土師器には無台椀・小甕・長甕がある。無台椀には、回転糸切り技法によって切り離され、その後調整が加えられないもの（無調整無台椀）のほかに、切り離し後にロクロケズリで整えられるもの、ミガキが加えられるものもある。黒色土器には無台椀・片口鉢などがある。土器の年代については、9世紀後半から末頃と考えられる。古代の土器の年代観については〔春日1999〕を、土師器の煮炊具については〔春日2007〕を参考にした。

#### B 古代の土器

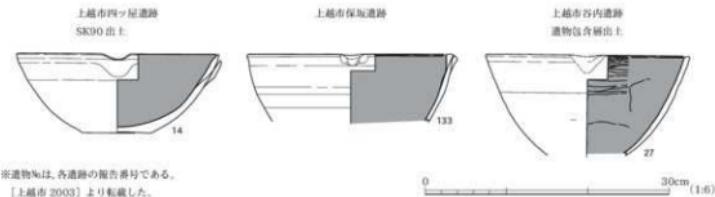
##### 1) 遺構出土遺物

**SD7**（図版132・217-1）1は土師器の無台椀である。見込みには、放射状に広がる丁寧なミガキが施される。底部外面には切り離し後、ミガキが加えられる。

**SD13**（図版132・217-2）2は土師器の無台椀である。口縁部が欠損し、口径は不明だが少なくとも15cmを超えるものとみられる。底部外面には切り離し後、ミガキが加えられる。内外面ともに摩耗し、ロクロ目は明瞭ではない。

**SD19**（図版132・217-3）3は土師器の無台椀である。歪みが大きいため、口縁が傾いている。底部外面には、回転糸切り痕が残る。内面は摩耗している。

**SD27**（図版132・217-4～10）4～7は土師器である。4は無台椀である。切り離し後、ロクロケズリが加えられる。そのため底部の厚みが非常に薄くなっている。内外面の摩耗が著しい。5は小甕である。外面にはススが付着し、内面には薄いコゲが認められる。6・7は長甕である。6は頸部の屈曲がやや弱く、口縁部がわずかに内湾する。7の体部下半は叩き成形で、外面には平行線文のタタキが残る。内面の当て具痕はナデで消されている。8～10は黒色土器である。8・9は無台椀で、いずれも口縁部外面の一部まで黒色化している。8の底部にはロクロケズリが加えられる。10は片口鉢である。法量は口径21.6cm、底径9.8cm、器高12.8cmを測る。底部外面及び体部下半には、ロクロケズリが加えられる。口縁端部及び口縁部外面も黒色化している。内面は摩耗している。新潟県内のにおける片口鉢の出土例は少なく、上越市保坂遺跡・四ツ屋遺跡・谷内遺跡から出土している〔上越市2003〕（第63図）。これらの口径は21cm前後である。器高は四ツ屋遺跡の片口鉢が9cmで、谷内遺跡のほうが10.5cmを超えるとみられ、当遺跡出土の10は他よりもやや深めと言える。当遺跡の黒色土器の片口鉢も加えると、古代越後の魚沼郡から頸城郡に出土する傾向があると言える。片口鉢の年代については、四ツ屋遺跡のSK90出土遺物は9世紀後半から末頃と考えられている〔春日2003b〕。報告した土器（4～10）は遺構の底面近くの覆土2層から出土したものである。土師器が主体で黒色土器が伴うこと状況や土師器無台椀の特徴から、これらは9世紀後半頃の所産と考えられる。片口鉢（10）もこの年代観で矛盾しないと言えよう。



※遺物番号は、各遺跡の報告番号である。  
〔上越市 2003〕より転載した。

第63図 新潟県内の黒色土器片口鉢の類例

**SX34**（図版 132・217 - 11 ~ 14） 11 ~ 13 は土師器で、11 は小甕、12・13 は長甕である。11 の口縁部はやや内湾する。12 の口縁端部は面をもつ。13 の口縁端部がわずかにつまみ出され、やや内側に入る。14 は黒色土器である。14 はロクロ形成形で、内面には横方向の、外面には縱方向の丁寧なミガキが施されている。拓本で示したが、接合部の断面には回転糸切り痕が残っている。器種は断定できないが、瓶類の頸部の可能性が考えられる。

## 2) 包含層出土遺物（図版 132・217 - 15 ~ 21）

報告遺物（15 ~ 21）は、Vc 層から出土したものである。15 ~ 17 は土師器で、15・16 が無台椀、17 が長甕である。15・16 の底部外面には、回転糸切り痕が残る。16 の内面は摩耗し、ロクロ目がほとんど残っていない。17 は寸胴形の甕と考えられる。口径は 23.6cm である。同形態のものが金屋遺跡 1982 年度調査からも出土している〔山本ほか 1985〕。18 ~ 20 は黒色土器の無台椀である。18・19 の外面にはミガキが加えられている可能性がある。21 は須恵器の甕である。体部の破片と考えられる。外面には平行線文のタタキ後に、カキメが巡る。内面には同心円文の当て具痕が残り、一部がナデで消されている。

## 3) 金属製品（図版 132・217 - 22）

試掘トレンチ 192T から出土した金属製品を報告する。22 は全面が鋲で覆われているため、塊状を呈している。X 線写真で撮影したところ、幅が 1cm、長さが 3.5cm、厚みが 2 ~ 3mm の板状遺物を確認した。断面の形状から、刀子と考えられる。

## 第VII章 金屋遺跡III 自然科学分析

### 1 花 粉 分 析

株式会社 古環境研究所

#### A は じ め に

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復元に応用されており、遺跡調査においては構構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。ここでは、金屋遺跡における植生ならびに堆積環境を検討する目的で花粉分析を行った。

#### B 試 料

分析試料は、南区南北ベルト西壁 A-A' より採取された V a 層、V b 層、V b' 層、SD18 の 1 層（上）、1 層（下）、V c 層、VI 層の 7 点、下層確認トレンチより採取された試料①から試料⑧の 8 点の計 15 点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す（第 64・65 図）。

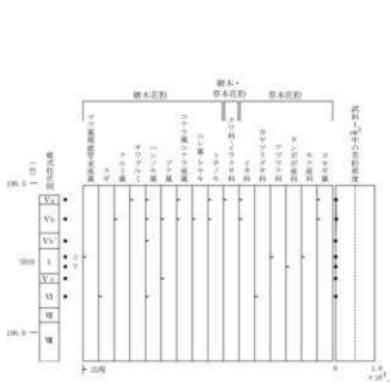
#### C 方 法

花粉の分離抽出は、[中村 1967] の方法をもとに、以下の手順で行った。

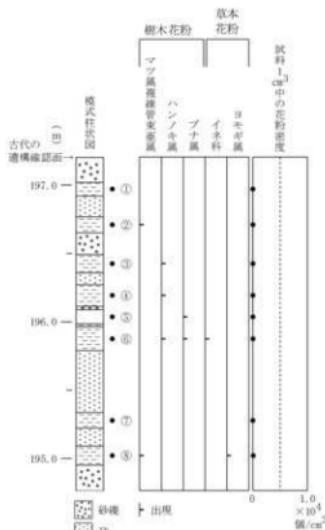
- 1) 試料から 1 cm<sup>3</sup> を採量
- 2) 0.5% リン酸三ナトリウム (12 水) 溶液を加え 15 分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.5mm の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 4) 25% フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置
- 5) 水洗処理の後、冰酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸 9 : 濃硫酸 1 のエルドマン氏液を加え 1 分間湯煎）を施す
- 6) 再び冰酢酸を加えて水洗処理
- 7) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって 300 ~ 1000 倍で行った。花粉の同定は、[島倉 1973] および [中村 1980] をアトラスとして、所有の現生標本との対比を行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示す。イネ属については、[中村 1974・1977] を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。また、この処理を施すとクスノキ科の花粉は検出されない。

第21表 金屋遺跡の花粉分析結果



第 64 図 金屋遺跡の南区南北ベルト西壁 A-A' における花粉



第65図 金屋遺跡の下層確認トレンチにおける

## D 結 果

## 1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉9、樹木・草本花粉1、草本花粉6、シダ植物胞子2形態の計18である。これらの学名と和名および粒数を第21表に示し、花粉が出現した試料は、周辺の植生を復元するために花粉ダイアグラムを作成し第64・65図に示した。主要な分類群は顕微鏡写真(第66図)に示した。また、寄生虫卵についても観察したが検出されなかつた。以下に出現した分類群を記載する。

## 〔樹木花粉〕

マツ属複維管束亞属、スギ、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、ブナ属、コナラ属コナラ亞属、ニレ属一ケヤキ、トチノキ

## 〔樹木・草本花粉〕

クワ科—イラクサ科

## 〔草本花粉〕

イネ科、カヤツリグサ科、アブラナ科、タンボボ亞科、キク亞科、ヨモギ属

## 〔シダ植物胞子〕

单条溝胞子、三条溝胞子

## 2) 花粉群集の特徴

南区南北ベルト西壁A-A' (第64図) いずれの試料も花粉密度が極めて低くほとんど検出されないが、VI層では樹木花粉のハンノキ属、スギ、草本花粉のカヤツリグサ科、シダ植物单条溝胞子がわずかに出現する。Vc層では樹木花粉のブナ属、シダ植物单条溝胞子、シダ植物三条溝胞子がわずかに出現する。SD18の1層(下)では草本花粉のタンボボ亞科、シダ植物单条溝胞子、シダ植物三条溝胞子がわずかに出現する。SD18の1層(上)では樹木花粉のマツ属複維管束亞属、草本花粉のアブラナ科、キク亞科、シダ植物单条溝胞子がわずかに出現する。Vb'層では樹木花粉のハンノキ属、シダ植物单条溝胞子がわずかに出現する。Vb層では樹木花粉のハンノキ属、ブナ属、クルミ属、コナラ属コナラ亞属、ニレ属一ケヤキ、トチノキ、草本花粉のイネ科、ヨモギ属、シダ植物单条溝胞子、シダ植物三条溝胞子がわずかに出現する。Va層では樹木花粉のハンノキ属、サワグルミ、コナラ属コナラ亞属、トチノキ、草本花粉のイネ科、ヨモギ属、シダ植物单条溝胞子、シダ植物三条溝胞子がわずかに出現する。

下層確認トレレンチ (第65図) いずれの試料も花粉密度が極めて低く、ほとんど検出されないが、試料⑧では草本花粉のヨモギ属、樹木花粉のマツ属複維管束亞属、シダ植物单条溝胞子がわずかに出現し、試料⑦ではシダ植物单条溝胞子がわずかに出現する。試料⑥では樹木花粉のハンノキ属、ブナ属、草本花粉のイネ科がわずかに出現する。試料⑤では樹木花粉のブナ属、シダ植物单条溝胞子がわずかに出現する。試料④、試料③では樹木花粉のハンノキ属がわずかに出現する。試料②では樹木花粉のマツ属複維管束亞属がわずかに出現する。試料①では花粉は検出されない。

## E 花粉分析から推定される植生と環境

南区南北ベルト西壁A-A' (第64図) いずれの時期も花粉密度が極めて低く、花粉などの有機質遺体が分解されるような乾燥ないし乾湿を繰り返す堆積環境であったか、堆積時間が速く花粉などの微化石が

堆積しなかったことなどが考えられる。わずかにハンノキ属、コナラ属コナラ亜属などの落葉広葉樹の花粉が出現し、これらの樹木が堆積地周辺に生育していたとみなされる。

**下層確認トレンチ（第65図）** いずれの時期も花粉密度が極めて低く、花粉などの有機質遺体が分解されるような乾燥ないし乾湿を繰り返す堆積環境であったか、堆積時間が速く堆積しなかったことなどが考えられる。わずかにハンノキ属、ブナ属などの落葉広葉樹の花粉が出現し、これらの樹木が堆積地周辺に生育していたとみなされる。

## F ま と め

南区南北ベルト西壁 A-A' (VI層、Vc層、SD18の1層(下)、1層(上)、Vb'層、Vb層、Va層、古代：9から10世紀)、下層確認トレンチ(試料⑧から試料①)では、いずれの時期も花粉密度は極めて低く、花粉などの有機質遺体が分解されるような乾燥ないし乾湿を繰り返す堆積環境であったが、堆積時間が速く花粉などの微化石が堆積しなかったことなどが考えられた。南区南北ベルト西壁 A-A' では、わずかな検出はあるがハンノキ属、コナラ属コナラ亜属などの落葉広葉樹が周辺地域に生育していたとみなされた。下層確認トレンチではハンノキ属、ブナ属などの落葉広葉樹が周辺地域に生育していたと考えられた。

## 2 放射性炭素年代測定

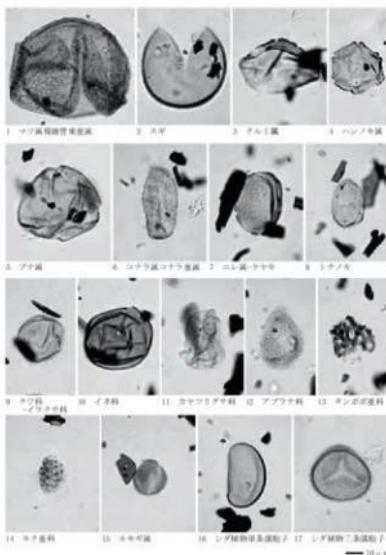
### A は じ め に

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素(<sup>14</sup>C)の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壤、土器付着炭化物などが測定対象となり、約6万年前までの年代測定が可能である。

ここでは、金屋遺跡における土層の堆積年代に関する資料を得る目的で、土壤および土壤中の微粒炭化物を対象に加速器質量分析法による放射性炭素年代測定を行った。

### B 試 料 と 方 法

測定試料の情報、調製データは第22表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計(バレオ・ラボ、コンパクトAMS: NEC製1.5SDH)を用いて測定した。得られた<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、<sup>14</sup>C年代、歴年代を算出した。



第66図 金屋遺跡の花粉の顕微鏡写真

— 100μm —

## 2 放射性炭素年代測定

試料名	種類	前処理・調整	測定法
No. 1	土 壤	超音波洗浄	AMS
No. 2	炭化物	超音波洗浄、融-アルカリ-融處理	AMS

\* AMS (Accelerator Mass Spectrometry) は加速器質量分析法

第 22 表 金屋遺跡の放射性炭素年代測定試料一覧

## C 測 定 結 果

第 23 表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ( $\delta^{13}\text{C}$ )、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した  ${}^{14}\text{C}$  年代、 ${}^{14}\text{C}$  年代を暦年代に較正した年代範囲を、第 67 図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

${}^{14}\text{C}$  年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ${}^{14}\text{C}$  年代 (y BP) の算出には、 ${}^{14}\text{C}$  の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した  ${}^{14}\text{C}$  年代誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の  ${}^{14}\text{C}$  年代がその  ${}^{14}\text{C}$  年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示すものである。なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正とは、大気中の  ${}^{14}\text{C}$  濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された  ${}^{14}\text{C}$  年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の  ${}^{14}\text{C}$  濃度の変動、及び半減期の違い ( ${}^{14}\text{C}$  の半減期  $5730 \pm 40$  年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

${}^{14}\text{C}$  年代の暦年較正には OxCal3.1 (較正曲線データ : IntCal09) を使用した。なお、 $1\sigma$  暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された  ${}^{14}\text{C}$  年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に  $2\sigma$  暦年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は  ${}^{14}\text{C}$  年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

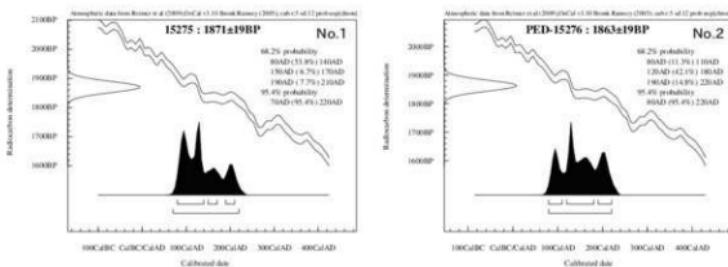
試料名	測定 (% (PDB))	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (年 BP)	${}^{14}\text{C}$ 年代 (年 BP)	暦年代 (西暦)	
					$1\sigma$ (68.2%確率)	$2\sigma$ (95.4%確率)
No. 1	15275	$-14.87 \pm 0.11$	$1871 \pm 19$	$1870 \pm 20$	AD80-140 (93.8%)	
					AD150-170 (6.7%)	AD70-220 (95.4%)
					AD190-210 (7.7%)	
No. 2	15276	$-14.52 \pm 0.14$	$1863 \pm 19$	$1865 \pm 20$	AD80-110 (11.3%)	
					AD120-180 (42.1%)	AD80-220 (95.4%)
AD190-220 (14.8%)						

BP : Before Ph. yies (Present), AD : 紀元後

第 23 表 金屋遺跡の放射性炭素年代測定結果

## D 所 見

加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定の結果、No. 1 は、 $1870 \pm 20$  年 BP (2  $\sigma$  の暦年代で AD70 ~ 220 年)、No. 2 は  $1865 \pm 20$  年 BP (2  $\sigma$  の暦年代で AD80 ~ 220 年) の年代値が得られた。



第67図 金屋遺跡の曆年較正年代グラフ

## 引用文献（第VII章1・2）

- 金原正明 1993 「花粉分析法による古環境復原」『新版 古代の日本 第10巻古代資料研究の方法』角川書店 p.28-262.
- 島倉巳三郎 1973 「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学博物館収蔵目録』第5集 60p.
- 中村 純 1967 「花粉分析」 古今書院 p.2-102.
- 中村 純 1974 「イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa* L.)を中心として」『第四紀研究』13 p.87-193.
- 中村 純 1977 「稲作とイネ花粉」『考古学と自然科学』第10号 p.2-30.
- 中村 純 1980 「日本産花粉の標識」『大阪自然史博物館収蔵目録』第13集 91p.
- 中村俊夫 2000 「放射性炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の14C年代』 p.320.
- Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphic  $^{14}\text{C}$  Oxidized Program, Radiocarbon, 37(2), p.425-430.
- Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program Oxidized, Radiocarbon, 43 (2A), 355-363.
- Paula J Reimer et al., (2004) IntCal04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP. Radiocarbon, 46, p. D29-1058.
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmyer, C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111-1150.

## 第VIII章 金屋遺跡III まとめ

金屋遺跡は1982・1983年度、2004・2005年度、2009年度に調査が行われ、縄文時代から古代の遺構・遺物が見つかった。各調査区の位置は第68図、各地区の主な遺構・遺物は第24表に示した。これまでの調査成果を踏まえると〔山本1985、桑原2006、實川2006、山崎2006〕、当遺跡には4つの画期（I～IV期）が認められる。ここでは2009年度調査（調査区⑨）の成果も踏まえ、当遺跡の変遷について述べる。

当遺跡では縄文時代早期～晩期の土器が出土しているが、集落は見つかっていない。本格的に集落が営まれるのは、金屋I期とした弥生時代中期後半からである。調査区①では、掘立柱建物2棟（05SB100・05SB102）が検出された。建物は調査区の南西側で多数検出されたことから、当該期の集落は南西側に広がることが想定される。05SB100の柱穴（05P51）から弥生時代中期後半の栗林式系の壺・壺が認められ、また、調査区①からは弥生時代後期の土器もわずかに出土した。当該期の遺構は、蟻子山の崩落土で埋没すると見られ、次に遺構が築かれるのは古墳時代前期後半である。

金屋II期は、古墳時代前期後半～末ころである。調査区①～③から遺構を検出した。遺跡の南西側で見つかる傾向があり、特に丘陵部斜面で遺構が築かれている。調査区①から竪穴建物2軒（05SI31・05SI38）や掘立柱建物1棟（05SB28）などが検出された。05SI31からは壺と器台が出土し、新潟シンボジウム編年8～9期に位置付けられている。やや時期が下るが、調査区⑦から古墳時代前期末の竪穴建物2軒（S112・S113）が検出された。S112の出土遺物については、品田高志氏は漆町編年10群に並行するとし〔品田1992〕、春日真実氏は古墳3～5期（漆町編年9～11群）に比定するとしている〔春日1998〕。

金屋III期は、古墳時代中期～後期である。調査区⑦から中期の土器が出土するが、集落の主体を形成する遺構は見つかっていない。また、地区④から6世紀初頭に比定される須恵器杯蓋1点が出土した。金屋IV期は、蟻子山古墳群の築造時期と重なる時期である。しかし、当該期の遺構・遺物は少なく、近接する余川中道遺跡で遺構・遺物が多数見つかっている状況とは異なる。

金屋IV期は、平安時代である。当遺跡で最も遺構・遺物が多い時期である。調査区②・③のほかに、これまで遺構が希薄であった調査区⑦～⑩で遺構が検出された。調査区⑦からは9世紀中ころから後半の竪穴建物（S12・S15・S16）が、調査区⑨からは9世紀後半から末ころの烟作溝が見つかっている。ここからやや離れた、調査区③では9世紀前半の竪穴建物2軒（04SI39・04SI40）、調査区②では10世紀前葉の掘立柱建物（04SB1）が検出された。金屋IV期は9世紀前半から11世紀代と時期幅が認められるものの、主体となる時期は9世紀代と考えられる。古代の集落は古墳時代後期以降、開発が停滞していた庄ノ又川流域に9世紀前半に進出した集落である。集落の主体は調査区⑦にあり、集落の縁辺に位置する調査区⑨は生産跡（烟作溝）として利用された。調査区⑨は洪水の影響を幾度も受けているものの、そのたびに烟作溝が作り変えられていることが調査で明らかとなった。当遺跡は近尾川まで約500m、庄ノ又川まで約900mで、それぞれ約1.5kmを下ると魚野川に合流することができる。古代においては山野に近く、河川を利用できる場所に、集落が築かれたと考えられる。金屋IV期以降は、いずれの地区からも中世の遺構はなく、遺物も少ない。近接する余川中道遺跡では13～15世紀代の遺構が多く検出されていること踏まえると、中世には丘陵部を離れ、魚野川寄りの比較的平坦な土地に集落が築かれると考えられる。



第68図 金屋遺跡の位置と調査区

時代	調査年度	2005	2004	2004	1983	1982	1982	1982	2009	面積
時期不明	調査区	①丘陵側調査区	②丘陵側調査区	③本町側調査区	※C地区 (西側)	※C地区 (東側)	④C地区	⑤B地区	⑥A地区	⑦
中世						SD1条				
古代 (平安時代)	9C～ 11C		10C前葉。 SB1棟, SB1棟	9C前葉。 SI2条, SD1条, P7条			9C中葉～11C。 SI10条,SK25条, SD4棟,SD8条, ビット多数	SD1～1軒	9C後半～ 煙作溝	IV'
古墳 時代	後期				東部部の墓 (6C初期)1点					III
中世	後半	SI2軒,SB1棟, SK2条,SK-P29条	SD1条,P2 条,SK3条				前中期～中期。 SI2軒,SK3条			II
弥生 時代	中期 後半	SB2棟,SK-P38基								I
縄文 時代	早期～ 晚期	縄文時代地割の土 盛戸,石器	縄文時代前 後半の土 盛戸,石器	縄文土器わずか。 遺構なし。	SK1基 縄文時代早中期 の陶文土器(約100点), 石器(約80点)					
備考							SD4条,SK4条, 石器2点,地上 集中16か所			

第24表 金屋遺跡の変遷と面積

## 引用・参考文献

- 相田泰臣 2004 「越後における古墳時代後期を中心とした土器の様相 - 頸域・魚沼地域の土師器を中心として -」『新潟考古』第 15 号 新潟県考古学会
- 穴沢吉太郎 1977 『大和町史』上巻 新潟県大和町
- 安立 聰 2001 『塩沢町文化財報告書 第 19 号 来清東遺跡』新潟県塩沢町教育委員会
- 安立 聰 2002 『塩沢町文化財報告書 第 20 号 来清西遺跡』新潟県塩沢町教育委員会
- 荒川隆史 2004 「第IV章 道構」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 133 集 齐田遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 飯坂盛泰 2005 「第VII章まとめ 1 土器集中道構」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 139 集 余川中道遺跡 I』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 飯坂盛泰ほか 2005 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 139 集 余川中道遺跡 I』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 飯坂盛泰ほか 2006a 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 155 集 金屋遺跡 II』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 飯坂盛泰ほか 2006b 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 156 集 北沖東遺跡・長表東遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 池田 亨 1992 『大和町文化財発掘調査報告書 第 5 号 御館遺跡』新潟県大和町教育委員会
- 石井久美子 2001 「飯綱山の弥生時代」『新潟大学考古学研究室調査研究報告』3 新潟大学人文学部
- 石川日出志 1997 「六日町飯綱山遺跡採集土器片と北陸中・北部の東林土器」『越佐補遺些』第 2 号 越佐補遺些の会
- 石原正敏 1996 「アメリカ式石籬再考」「考古学と遺跡の保護」甘粕健先生追憶記念論集刊行会
- 植木昭吾 1997 「越後の地名 その由来を探る 中越編」
- 上田秀夫 1982 「14 ~ 16 世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』第 2 号 日本貿易陶磁研究会
- 宇野隆夫 1982 「井戸戸『史林』第 65 卷第 5 号 史学研究会
- 宇野隆夫 1999 「古墳時代中・後期における食器・調理法の革新 - 律令制的食器様式の革新」『日本考古学』第 7 号 日本考古学協会
- 梅川勝史 2004 「第三章中央集権化する魚沼の民 第二節魚沼への王道」『堀之内町史』通史編上巻 新潟県堀之内町
- 尾崎高宏・坂上法子 2001 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 101 集 大久保遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 笠原賛治 1966 『ふるさと六日町の歴史』新潟県六日町
- 春日真実 1996 「越後における 5 世紀から 8 世紀の堅穴建物の変遷」『新潟考古学講話会会報』第 16 号 新潟県考古学講話会
- 春日真実 1998 「北陸東北部の土器様相」『第 3 回東北・関東前方後円墳研究会大会「シンポジウム」前開古墳から中期古墳へ 発表要旨資料』東北・関東前方後円墳研究会
- 春日真実 1999 「第 4 章 古代 第 2 節 土器編年と地域性」『新潟県の考古学』新潟県考古学会
- 春日真実 2003a 「越後出土の円筒形土製品・板状土製品について」『富山大学考古学研究室論集 振興気球 - 秋山進午先生古希記念 - 』秋山進午先生古希記念論集刊行会
- 春日真実 2003b 「17 四ヶ屋遺跡」『上越市史』資料編 2 考古 上越市史編さん委員会編集 新潟県上越市
- 春日真実 2005 「越後ににおける奈良・平安時代土器編年の対応関係について - 「今池編年」・「下ノ西編年」・「山三賀編年」の検討を中心に - 」『新潟考古』第 16 号 新潟県考古学会
- 春日真実 2006 「第二編 歴史考古古代篇 第 3 章 古代越後の集団と地域」『日本海域歴史体系』第二巻(古代篇 II) 清文堂
- 春日真実 2007 「越後ににおける古代の煮炊具について」『新潟考古』第 18 号 新潟県考古学会

- 春日真実 2012 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 228 集 山岸遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学 1999 「第V章 上層の遺構 1. 遺構」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 93 集 和泉A遺跡(本文・観察表編)』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 金子拓男<sup>なこ</sup> 1977 『伊乎乃郡の古墳』『新潟県文化財調査年報 15 南魚沼』 新潟県教育委員会
- 金子拓男<sup>なこ</sup>・佐藤雅<sup>ひさ</sup> 1987 『塩沢町文化財報告書 第6輯 梨ノ木平遺跡』 新潟県塩沢町教育委員会
- 神谷佳明 2005 「第4章 炉からカマドへ 農民たちの生活」『群馬県の遺跡5 古墳時代II【集落】』 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団編 毛野新聞社
- 川村浩司 2000 「上越市の古墳時代の土器様相 - 関川右岸下流を中心に - 」『上越市史研究』第5号 上越市史専門委員会編集 新潟県上越市
- 北野博司 2011 「群馬県長羽田倉遺跡の土鍋のススとコゲ - 古墳時代後期を中心に - 」『土器使用痕研究』 小林正史(北陸学院大学)
- 北村 亮 1985 「第IV章 調査の概要 1. 調査区の設定」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 37 金屋遺跡』 新潟県教育委員会
- 金 幸隆 2001 「六日町盆地北西縁の活断層」『第四紀研究』第 40 卷第 2 号 日本第四紀学会
- 桑原 孝 1966 『三国の歴史 - 越後の表玄関 - 』 野島出版
- 桑原 健 2006 「第VI章まとめ 遺構の時期的変遷」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 155 集 金屋遺跡II』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小林 進 1977 「中越地方の自然と生活」『新潟の自然』第 3 集 新潟の自然刊行委員会編
- 小林正史 2001 「煮炊き用土器のコゲとススからみた弥生時代の米の調理方法 - 中在家南遺跡を中心として - 」『北陸学院短期大学紀要』第 33 号 北陸学院短期大学
- 小林正史 2014 「古墳時代後期から古代の米蒸し調理における東・西日本間の違い」『新潟考古』第 25 号 新潟県考古学会
- 小林正史編 2011 「土器使用痕研究 - スス、コゲからみた縄文・弥生土器・土師器による調理方法の復元 - 」 小林正史(北陸学院大学)
- 小林正史・滝沢規朗・古澤愛史 2012 「スス、コゲからみた縄文深鍋のオキ火利用」『新潟考古』第 23 号 新潟県考古学会
- 齊藤英敏 2001 「小区画水田・極小区画水田の構造-群馬の水田跡から見た古代東アジア-」『研究紀要』19 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 坂井秀弥 1988 「古代のごはんは蒸した『飯』であった。古代の米調理復元メモ。」『新潟考古学講話会会報』第 2 号 新潟考古学講話会
- 坂井秀弥 1989 「第V章出土遺物 2 古墳時代 A 土器」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 53 集 山三賀Ⅱ遺跡』 新潟県教育委員会・建設省新潟国道工事事務所
- 坂井秀弥・川村浩司 1993 「古墳出現前夜における越後の土器様相 - 越後・会津・能登 - 」『磐越地方における古墳時代形成過程の研究』「磐越地方における古墳時代形成過程の研究」研究者グループ編集
- 汐見一夫 2001 「VI 流通と消費 2 石製品の流通」『図解 日本の中世遺跡』 東京大学出版会
- 實川順一 2006 「2 出土土器について A 縄文土器」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 155 集 金屋遺跡II』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 品田高志 1992 「越後における古墳時代II」『柏崎市立博物館館報』NO. 6 新潟県柏崎市立博物館
- 森原祐一 2011 「五世紀における石製祭具と沖ノ島の石材」『宗像・沖ノ島と関連遺産群』研究報告Ⅰ』「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議(福岡県・宗像市・福津市)編集
- 上 越 市 2003 『上越市史』資料編2 考古 上越市史編さん委員会編 新潟県上越市
- 鈴木郁夫 1978 「地形分類図」『新潟県中越地域土地分類基本調査 十日町』 新潟県農地部農地整備課

- 滝沢規朗 2005 「越後・佐渡における弥生時代後期～古墳時代前期の「く」字甕について」『三面川流域の考古学』第4号 奥三面を考える会
- 滝沢規朗 2008 「古墳時代前期における甕の使用痕跡についての覚書 - 新潟県北部の旧紫雲寺湯周辺の反貫目道跡・西川内南遺跡を中心に - 」『三面川流域の考古学』第6号 奥三面を考える会
- 滝沢規朗 2011a 「第VII章まとめ Ⅰ 出土遺物について A 上・下面の遺物 1) 土器について c 使用痕跡について」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第224集 長削遺跡(本文編)』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 滝沢規朗 2011b 「阿賀北における古墳時代前期の土器について(上) - 器種分類と基準資料の提示 - 」『三面川流域の考古学』第9号 奥三面を考える会
- 滝沢規朗 2014 「新潟県における古墳時代中期の土器について(上) - 器種分類と基準資料の提示 - 」『三面川流域の考古学』第12号 奥三面を考える会
- 田中一穂 2004 「II 発掘調査受託事業の概要 2. 調査道路の概要 八箇崎道路試掘調査」『年報』平成15年度 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 田中耕作 2006 「簡易な土器容量測定方法の紹介」『新潟考古学談話会会報』第31号 新潟考古学談話会
- 田畠昭三 1981 「須恵器大成」角川書店
- 大日本帝國陸地測量部 1931 「5万分の1」地形図高田2号十日町
- 田嶋明人 1986 「IV 考察 - 漆町遺跡出土土器の編年的考察 - 」『漆町遺跡I』石川県立埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 1996 「北陸地方の古墳時代の土器」『日本土器辞典』雄山閣
- 田村浩司 2002 「第五章律令体制と住民の生活 第三節郷里と農民」『塩尻町史』通史編上巻 新潟県塩尻町
- 茅原一也 1977 「新潟県南魚沼地域の地形および地質」『新潟県文化財調査年報第15 南魚沼』新潟県教育委員会
- 外山政子 1992 「かかカマドか - もう一つのカマド構造について - 」『研究紀要』10 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 永井久美男 2002 『新版 中世の出土鉄の分類図版』古志書院
- 長友朋子編 2007 「土器研究の新視点 - 繩文から弥生時代を中心とした土器生産・焼成と食・調理 - 』考古学リーダー9 大手前大学史学研究所所編著
- 中村孝三郎・金子拓男ほか 1975 「六日町埋蔵文化財調査報告書2 長表遺跡」新潟県六日町教育委員会
- 新潟県 1983 『新潟県史』資料編1 原始・古代・考古編
- 新潟県 1999 『新潟県降積雪及び気温観測30年報』
- 新潟県教育委員会 1953 『新潟県文化財報告書第1(考古編)千種』
- 新潟県農地部農地整備課 1978 『新潟県中越地域土地分類基本調査十日町』
- 新潟大学人文学部 2001 『新潟大学考古学研究室調査研究報告』3
- 野上健二郎 1990 「第一編 余川と自然環境」『余川誌』新潟県六日町大字余川区
- 橋本博文ほか 1998 「新潟県南魚沼郡六日町飯綱山10号墳発掘調査報告(1996年度)5飯綱山古墳1996年度の調査のまとめと今後の課題」『新潟大学考古学研究室調査研究報告1』新潟大学人文学部
- 橋本博文ほか 2001 「新潟県南魚沼郡六日町飯綱山27・65号墳発掘調査報告(1996~99年度)4考察」『新潟大学考古学研究室調査研究報告3』新潟大学人文学部
- 藤澤良祐 2008 『中世瀬戸焼の研究』古志書院
- 藤巻正信ほか 2008 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第190集 堅木遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 北陸中世考古学研究会 2001 『第14回北陸中世考古学研究会資料集 中世北陸の井戸』
- 細矢菊治 1972 『南魚沼の歴史』
- 洞口正史・外山政子・大木紳一郎・有山哲世 2010 「土器の使用痕跡(スス・コゲ)観察と調理方法の復元へのアプローチ」『研究紀要28』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

- 水澤幸一 2004 「15世紀前葉から中葉の貿易陶磁器の様相」『貿易陶磁研究』第24号 日本貿易陶磁研究会
- 水澤幸一 2005 「越後の中世土器」『新潟考古』第16号 新潟考古学会
- 水澤幸一 2007 「越後の中世漆器・椀・皿を中心にして」『新潟考古』第18号 新潟考古学会
- 水澤幸一 2009 「第4章 井戸の構築技術の流入 - 北陸を中心に - 」『日本海流通の考古学 - 中世武士団の消費生活 - 』古志書院
- 宮本長二郎 2002 「古代末から中世の住居建築」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第16号 秋田県埋蔵文化財センター
- 森田 勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会
- 山崎忠良 2006 「2 出土土器について B 弥生時代から古墳時代の土器」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第155集 金屋遺跡II』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 山本 鞘 1985 「第VII章まとめ」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第37集 金屋遺跡』新潟県教育委員会
- 山本 鞘(さか) 1985 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第37集 金屋遺跡』新潟県教育委員会
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館
- 米沢 康 1980 「大宝二年の越中国四郡分割をめぐって」『信濃』第32巻 第6号 信濃史学会

## 観察表

余川中道遺跡Ⅱ 中世 堀立柱建物観察表(1)

※[ ]は検出数。

SH1

調査番号	5-6	写真回数	149-151	柱行	4間幅 (5.8m)	奥間	2間 (2.6m)	床面積	15.1m	主方位	N-12°-E
P2446	12X25	堀内門	U字状	18	29	176.49	-	176.49	-	東南	
P2448	13X5	堀内門	U字状	29	25	176.46	P2348 - P2466	0.95	< P2449(SH16)		
P2551	13X5	堀内門	U字状	24	20	176.53	P2351 - P2348	0.74			
P2680	12Y22	堀内門	U字状	59	45	176.03	P3080 - P3097	1.49	< P3065(SH12)		
P2684	12Y21	内門	U字状	14	12	176.32	P3084 - P3088	0.36			
P2688	13Y1	内門	U字状	23	21	176.19	P3084 - P3088	1.17	< P3087(SH11)		
P2407	13X5	木敷廊	U字状	37	29	176.44	P3088 - P3097	1.74			
P2294	13X5	内門	脚の状	66	55	176.30	P2407 - P2394	1.21	< P2410-P2412		
P2288	13X4-9	堀内門	V字状	50	46	175.98	P2394 - P2398	1.36	< SK3392,P2290(NR5)		
P2378	13X9-10	堀内門	脚の状	56	42	176.24	P2388 - P3378	1.57	< P3448		
P3345c	13X15	堀内門	脚の状	72	55	176.27	P3378 - P3345c	1.22	> P3445b = P3441(SH7)		
P3340	13X10-15	内門	脚の状	33	30	176.39	P2345 - P3440c	1.19	> P3445b = P3441(SH5-SH11)		
P2126	13Y6	内門	V字状	34	32	176.18	P3440 - P3126	1.20			
P3111	13Y2	内門	U字状	24	22	176.24	-	-			
P3125	13Y2	堀内門	V字状	17	13	176.30	P3111 - P3125	0.35			
P3097	13Y2	堀内門	平門状	19	19	176.46	P3125 - P3097	1.20			

SH2

調査番号	5-6	写真回数	149	柱行	4間幅 (5.8m)	奥間	3間 (2.8m)	床面積	10.5m 以上	主方位	N-14°-E
前穴 番号	グリッド	平面形	断面形	長径 (m)	短径 (m)	厚さ (m)	底面高 (m)	柱の間隔 (m)	距離 (m)	垂直	
P2396	12X24	堀内門	U字状	35	28	43	176.23	-	-	< P2271-P3465(SH8)	
P2329	12X25	内門	U字状	19	19	9	176.76	P2396 - P2329	0.77		
P2312	12X16	内門	U字状	20	18	10	176.78	P2329 - P2312	0.80	> P2291	
P2284	12X25	内門	脚の状	15	12	176.42	P2312 - P2284	0.76			
P2557	12Y16-21	内門	手形狀	81	30	21	176.67	P2304 - P2557	1.16		西南 (1)
P2381	12Y16	内門	U字状	18	16	23	176.17	P3027 - P2381	1.23	> SK3061	
P2415	12X19-24	内門	U字状	17	14	19	176.65	P3036 - P3415	0.91	> P3452	
P2395	12X24	木敷廊	U字状	28	27	67	176.16	P3396 - P3395	0.77		
P3449	12X19	堀内門	V字状	20	14	56	176.27	P2315 - P3449	0.76		斜傾 (113)
P2215	12X19	木敷廊	脚の状	40	38	54	176.27	P2336 - P2315	1.05		
P2236	12X19-24	内門	台形狀	24	23	19	176.65	P2327 - P2236	0.63		
P2237	12X24	内門	U字状	17	16	12	176.74	P2329 - P2237	0.79		
P3419	12Y16	内門	U字状	21	21	25	176.69	P3419 - P3327	1.33		
P3427	12X18	内門	手形狀	25	24	12	176.72	P3419 - P3472	0.61		
P3417	12Y16	内門	U字状	12	10	57	175.98	P3281 - P3417	0.85	> SK3061	
P3053	12Y16	内門	脚の状	16	14	8	176.51	P3417 - P3053	0.61		

SH3

調査番号	5-7	写真回数	147-152	柱行	3間幅 (4.2m)	奥間	3間 (3.5m)	床面積	18.6m	主方位	N-12°-E
前穴 番号	グリッド	平面形	断面形	長径 (m)	短径 (m)	厚さ (m)	底面高 (m)	柱の間隔 (m)	距離 (m)	垂直	
P2207	12Y17	内門	U字状	14	13	15	176.48	-	-	> SK3193	
P2137	12Y17	内門	U字状	16	15	23	176.37	P2307 - P2137	1.73	> P2136	
P2070	12Y22	堀内門	手形狀	33	23	11	176.47	P1937 - P2070	1.20	< P2071(SH3)	
P2295	12Y22,13Y3	内門	U字状	53	46	54	176.01	P2070 - P2295	1.34	> P2118-P3287	
P2485	12Y23	内門	U字状	30	29	25	176.20	P2395 - P2485	1.16		
P2475	12Y24	堀内門	張板	40	35	18	175.94	P2485 - P2475	1.57	> SK3199	
P2481	12Y19	堀内門	脚の状	32	29	37	175.85	-	-	> P2472	
P2205	12Y17	内門	手形狀	12	11	10	176.50	-	-	> SK3193	
P2059	12Y17	堀内門	U字状	29	15	13	176.48	P2205 - P2059	1.43		
P2067	12Y22	内門	U字状	16	16	30	176.28	P2059 - P2067	0.76		
P2077	12Y22	内門	U字状	24	23	36	176.23	P2067 - P2077	1.07		
P2120	13Y3	内門	U字状	19	17	12	176.42	P2077 - P2120	1.25		
P2197	13Y3	堀内門	U字状	18	13	13	176.42	P1930 - P2197	0.61		
P2210	12Y23,13Y3	手形狀	脚の状	66	49	84	175.60	P2197 - P2210	1.11		

SH5

調査番号	9-10	写真回数	149-150	柱行	3間幅 (4.9m)	奥間	2間 (4.9m)	床面積	29.4m	主方位	N-26°-E
前穴 番号	グリッド	平面形	断面形	長径 (m)	短径 (m)	厚さ (m)	底面高 (m)	柱の間隔 (m)	距離 (m)	垂直	
P2066	12Y22	内門	U字状	37	37	38	176.19	P3105 - P3066	2.24		
P2240	12X25	堀内門	U字状	24	23	29	176.55	-	-	< P2409	
P2262	13X4	木敷廊	脚の状	66	55	48	176.36	P2240 - P2262	1.80	> P2252-SK3446	
P2290	13X9	内門	脚の状	47	46	42	176.40	P2262 - P2290	2.47	> SK3292,P2286(SH1)-P3289	
P2344	13X14	内門	手形狀	69	66	95	175.87	P2290 - P2344	2.32	> P3356	斜傾 (110)
P2439	13X15,13Y11	堀内門	脚の状	52	40	47	176.41	P2344 - P2439	2.21	> P3440(SH1-SH9)	
P2145	13Y6	堀内門	手形狀	18	14	24	176.34	P3439 - P2145	1.85		
P2160	13Y7	内門	U字状	24	21	40	176.09	P3145 - P2160	2.12		
P2105	13Y2	内門	U字状	31	27	47	176.06	P3160 - P2105	2.56		

## 観察表

余川中道遺跡Ⅱ 中世 据立柱建物観察表(2)

※[ ]は補出値。

S205

図面番号	9-10	写真 写真 脚形 脚形	140-151	軒行	2間 (2.8m)	奥間	2間 (3.1m)	床面積	11.9af	主方位	N-34° E
前穴 番号	グリッド	平面形 断面形	高さ (cm)	幅 (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	底面高 (cm)	軒高 (cm)	距離 (m)	東偏西傾	備考
P3247	13X5	船内形 台形狀	[38]	37	63	174.19	P3249 - P3247	1.20	> P3455(SB1) - P3473		
P3457	13X4	円形 船内形	22	21	11	176.74	P3249 - P3457	1.73	< P3458		
P3390	13X3	不整形 船内形	33	31	71	176.13	P3457 - P3390	1.48			
P3256	13X8	円形 船内形	24	23	19	176.64	P3390 - P3256	1.14			
P3253	13X8	船内形 船内形	58	46	12	176.70	P3258 - P3253	1.22			
P3341	13X12-14	船内形 船内形	53	44	49	176.34	P3353 - P3341	1.37	> SK3350		
P3244	13X14-15	円形 台形狀	69	66	63	175.87	P3341 - P3244	1.55	< P3356		
P3274	13X16	船内形 船内形	28	30	36	176.63	P3344 - P3274	1.40			
P3291a	13X10	船内形 船内形	83	55	44	175.82	P3374 - P3291	1.61	< P3263(SB12)		
P3267	13X5-10	U字形 船内形	37	28	26	176.56	P3391 - P3267	1.09			

S207

図面番号	9-11	写真 写真 脚形	143-148	軒行	2間 (4m)	奥間	2間 (2.6m)	床面積	12.8af	主方位	N-44° E
前穴 番号	グリッド	平面形 断面形	高さ (cm)	幅 (cm)	幅 (cm)	底面高 (cm)	軒高 (cm)	距離 (m)	東偏西傾	備考	
P3330	13X14	船内形 U字狀	36	29	57	176.26	P3249 - P3330	1.98			
P3261	13X14-15	船内形 U字狀	46	29	54	176.29	P3330 - P3261	1.67	> P3263(SB12)		
P3260	13X15	不整形 U字狀	25	23	39	176.63	P3261 - P3264	1.41	< P3265		
P3441	13X10	円形 U字狀	23	22	16	176.71	P3304 - P3441	1.82	< P3442 P3446(SB10)		
P3404	13X5	不整形 V字狀	32	21	31	176.55	P3441 - P3404	2.23			
P3294	13X5	円形 船内形	66	55	54	176.30	P3404 - P3294	1.32	> P3410-P3412		
P3285	13X9	船内形 U字狀	30	24	22	176.62	P3294 - P3285	1.91			
P3249	13X9	円形 U字狀	25	21	26	176.56	P3285 - P3249	1.98	> SK3350		

S208

図面番号	9-11	写真 写真 脚形	140-149	軒行	4間 (4.7m)	奥間	4間 (4.3m)	床面積	24.9af	主方位	N-24° E
前穴 番号	グリッド	平面形 断面形	高さ (cm)	幅 (cm)	幅 (cm)	底面高 (cm)	軒高 (cm)	距離 (m)	東偏西傾	備考	
P3115	13X2	船内形 台形狀	30	23	24	176.20	P3265 - P3115	0.73	< P3116		
P3272b	13X2	船内形 U字狀	45	40	52	176.08	P3115 - P3272a	1.64	> P3272b-P3272c		
P3269	12X17	船内形 U字狀	30	15	13	176.46	P3272a - P3269	1.07			
P3128	12X17	円形 U字狀	25	24	58	176.01	P3269 - P3128	0.83	> SK3193		
P3130	12X17	船内形 U字狀	26	19	43	176.19	P3128 - P3130	0.96	> SK3193		
P3252	12X16	船内形 脚内形	48	37	67	175.91	P3130 - P3252	0.83	< SB13		
P2231	12X20	船内形 V字狀	29	24	21	176.61	P3252 - P2231	1.60	> SK3050		
P3416	12X20	船内形 U字狀	26	20	29	176.49	P2231 - P3416	1.61			
P3399	12X19	船内形 脚内形	29	23	24	176.59	P3416 - P3399	1.71			
P3395	12X24	不整形 U字狀	28	27	67	176.16	P3399 - P3395	1.11			
P3468	12X24	船内形 U字狀	20	15	34	176.51	P3395 - P3468	0.93	> P3396(SB2)		
P3274	13X4	円形 脚内形	60	55	118	175.67	P3468 - P3274	0.79	> SD3209,P3277-P3279		
P3413a	13X4-9-10	円形 U字狀	36	35	45	176.36	P3278 - P3413a	1.50	> SK3292 P3413b		
P3408	13X5	円形 脚内形	14	14	21	176.63	P3413a - P3408	1.62			
P3265	13X2	円形 脚内形	19	17	26	176.26	-	-			

S209

図面番号	13-14	写真 写真 脚形	151	軒行	4間 (4.7m)	奥間	4間 (3.4m)	床面積	15.9af	主方位	N-20° E
前穴 番号	グリッド	平面形 断面形	高さ (cm)	幅 (cm)	幅 (cm)	底面高 (cm)	軒高 (cm)	距離 (m)	東偏西傾	備考	
P3472	13X5	円形 U字狀	17	16	17	176.71	P3501 - P3472	0.53			
P2459	13X4	船内形 U字狀	30	26	53	176.32	P3472 - P2459	1.60	< P3458		
P3239	13X3	円形 脚内形	23	21	34	176.41	P3459 - P3239	1.79	> SK3329		
P3264	13X8	不整形 脚内形	44	33	48	176.35	P3239 - P3264	0.93	< P3357		
P3255	13X8	船内形 脚内形	58	46	12	176.70	P3264 - P3255	1.14			
P3331	13X14	円形 脚内形	27	27	49	176.34	P3255 - P3331	1.85			
SK3333	13X14-19	船内形 脚内形	63	55	30	176.66	P3331 - SK3336	0.81			
P3265	13X15	船内形 脚内形	32	34	50	176.32	SK3336 - P3265	1.37	> P3261(SB7)		
P3438	13X15	円形 U字狀	40	36	49	176.29	P3265 - P3438	1.92	> SD3262		
P3440	13X10-15	円形 脚内形	33	30	49	176.39	P3438 - P3440	0.84	> P3441(SB7)-P3472 P3429(SB7)-SB1111		
P3274	13X15	円形 U字狀	27	26	33	176.48	P3440 - P3274	1.69	> SK3275,P3273-P3273-SB10)-P3463		
P3501	13X5	円形 U字狀	21	19	19	176.66	P3274 - P3501	0.97			

S210

図面番号	13-14	写真 写真 脚形	147-151	軒行	4間 (4.5m)	奥間	2間 (2.6m)	床面積	11.7af	主方位	N-21° E
前穴 番号	グリッド	平面形 断面形	高さ (cm)	幅 (cm)	幅 (cm)	底面高 (cm)	軒高 (cm)	距離 (m)	東偏西傾	備考	
P3433	12X25	船内形 脚内形	54	47	68	176.20	P3521 - P3433	1.70			
P3246	12X25	船内形 脚内形	36	27	14	176.71	P3433 - P3246	0.91	> SD3209		
P3262	12X4	不整形 台形狀	66	55	48	176.26	-	-	< P3252-SX3445		
P3389	13X3	船内形 U字狀	31	30	61	176.23	P3262 - P3389	1.46			
P3259	13X8	船内形 U字狀	28	19	31	176.52	P3389 - P3259	1.21			
P3275	13X9	船内形 U字狀	23	19	30	176.52	P3259 - P3275	1.36			
P3291	13X9	不整形 U字狀	52	47	97	175.85	P3275 - P3291	1.38			
P3243	13X10	円形 U字狀	23	21	36	176.46	P3291 - P3243	1.28	< P3274(SB9)		
P3440	13X5-10	円形 U字狀	15	13	25	176.61	P3274 - P3440	0.97			
P3098	13X1	船内形 U字狀	36	29	32	176.14	P3440 - P3098	0.98			
P3221	13X1	船内形 U字狀	20	14	14	176.60	P3098 - P3221	1.09	> SK3102		

## 観察表

余川中道遺跡Ⅱ 中世 堀立柱建物觀察表（3）

※[ ]は検出数。

N311

国際番号	9-12	写真 回数	147-148 149-150	横行	4.6m	奥間	3.6m	床面積	16.6m <sup>2</sup>	主軸方位	N-25°-E
前穴 番号	グリッド	平面形	断面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	底面標高 (m)	柱穴開口 位置 (m)	距離 (m)	複数用語	備考
P3154	13Y7	円形	U字状	53	45	50	175.99	P3146 - P3154	1.62	< P3155	
P2108	13Y2	梢円形	円形	40	25	14	176.35	P3154 - P3160	1.86	> P3160	
P3083	13Y2	円形	階段状	27	26	38	176.19	P3108 - P3083	1.54	> P3083	柱根(97) 柱根木製品(28)
P3087	13Y1	梢円形	U字状	34	25	50	176.04	P3083 - P3087	1.61	> P3086(SH1)	漆塗(4)
P4462	13X5	梢円形	U字状	34	22	26	176.59	P3087 - P4462	1.75	> P2429(SH1-SH6)	青磁碗(4)
P2125	13X4-5	梢円形	輪状	43	39	36	176.60	P3462 - P2125	1.19		柱板
P3377b	13X10	円形	輪状	57	53	56	176.27	P3253 - P3377b	1.76	> P3251b < P3377b	
P3345b	13X10	梢円形	階段状	72	55	58	176.27	P3377b - P3345b	1.83	< P3345a-P3356	
P3439	13X10- 13Y1	梢円形	輪状	52	40	47	176.41	P3345 - P3439	1.26	> P3440(SH1-SH9)	
P2146	13Y6	不規則	低弧	26	24	10	176.39	P3439 - P2146	1.81		

N312

国際番号	13-15	写真 回数	146-147 148-149	横行	2間 (4.5m)	奥間	2間 (3.6m)	床面積	16.3m <sup>2</sup>	主軸方位	N-23°-E
前穴 番号	グリッド	平面形	断面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	底面標高 (m)	柱穴開口 位置 (m)	距離 (m)	複数用語	備考
P3065	12Y21	円形	U字状	49	44	43	176.14	P3066 - P3065	1.51	> P3060(SH1)	
P3464	12X25	円形	階段状	31	29	24	176.53	P3065 - P3464	2.32	> SD2209(P3465)	
P2208	13X4-5	梢円形	輪状	39	31	64	176.23	P3464 - P2208	1.81		柱板(89)
P2294	13X5	円形	階段状	66	55	54	176.20	P2208 - P2294	1.71	< P3410-P3412	
P2263	13X10	梢円形	輪状	61	50	72	176.15	P2294 - P2263	1.94	> P3391a(SH6)	青磁盤(1)
P2129	12Y6	円形	V字状	34	32	27	176.16	P2263 - P2129	1.69		
P2110	13Y7	梢円形	U字状	40	31	34	176.14	P2129 - P2110	2.80	> SX3100	
P3094	13Y2	円形	U字状	19	17	21	176.33	P2110 - P3096	1.99		

N313

国際番号	13-15	写真 回数	146-149 148-149	横行	4間 (9.0m)	奥間	2間 (3.0m)	床面積	15.0m <sup>2</sup>	主軸方位	N-25°-E
前穴 番号	グリッド	平面形	断面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	底面標高 (m)	柱穴開口 位置 (m)	距離 (m)	複数用語	備考
P3419	12Y16	円形	U字状	21	21	25	176.69	P3052 - P3419	1.61		
P5527	12X16-22	円形	円形	31	30	21	176.57	P3419 - P5527	1.37		
P2264	12Y21	円形	U字状	27	19	19	176.24	P2267 - P2264	1.38		
P3061	13Y1	円形	円形	38	33	27	176.35				
P2105	13Y2	円形	U字状	31	27	47	176.06	P2061 - P2105	1.08		
P2197	13Y3	梢円形	U字状	18	13	13	176.42	P2105 - P2197	1.71		
P3075	12Y23	梢円形	台形状	59	52	72	175.87	P2197 - P3075	1.23		
P3071	12Y22	不規則	輪状	44	34	12	176.47	P3075 - P3071	0.92	> P3070(SH3)	
P2139	12Y17	梢円形	輪状	25	19	4	176.48	P3071 - P2139	1.02		
P1833	12Y12	円形	U字状	34	32	44	176.00	P2139 - P1833	1.92		
P2052	12Y16	梢円形	輪状	48	37	67	175.91	P1833 - P2052	1.87	> S88	

N314

国際番号	12-18	写真 回数	146-150	横行	4間 (9.0m)	奥間	1間(L) (2.5m以上)	床面積	18.1m <sup>2</sup>	主軸方位	N-19°-E
前穴 番号	グリッド	平面形	断面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	底面標高 (m)	柱穴開口 位置 (m)	距離 (m)	複数用語	備考
P3363	14W20.14X16	円形	U字状	42	40	60	175.94		-	-	柱板(111)
P5320	14X11.12	梢円形	U字状	58	36	55	175.98	P2363 - P5320	2.10	> P2316-P3319 < P3317	柱板(107)
P2240	14X13	不規則	台形状	55	20	16	176.29	P2320 - P2240	2.37		
P3043	14X18	円形	U字状	23	21	15	176.28	P2240 - P3043	2.37		

N315

国際番号	23-24	写真 回数	155-158	横行	3間 (4.3m)	奥間	3間 (4.3m)	床面積	18.1m <sup>2</sup>	主軸方位	N-25°-E
前穴 番号	グリッド	平面形	断面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	底面標高 (m)	柱穴開口 位置 (m)	距離 (m)	複数用語	備考
SK-4076	TAD19	梢円形	U字状	46	39	40	177.26		-	> SK4074(SH19)-P4076(SH16) < P4077	
P4046	TAD18	梢円形	U字状	28	25	40	177.26		-	> P4047	
P4056	TAD22	梢円形	台形状	44	36	26	177.39	P4046 - P4056	1.55	< SK4059	
P4040	TAD22	梢円形	台形状	51	33	12	177.54	P4056 - P4040	1.28	> P4117(SH21)	
SK-4025	TAD2-3	不規則	輪状	76	60	16	177.51	P4040 - SK4025	2.10		
SK-4027	TAD8	梢円形	台形状	70	45	45	177.20	SK4027	0.87		
P4021	TAD3-8	円形	U字状	21	19	23	177.42	SK4027 - P4021	1.53		
SK-4015c	TAD4	梢円形	U字状	39	31	29	177.25	P4021 - SK4015c	1.79	> SK4015a(SH21)-SK4015b-SK4015d	
P4012	TAD5	円形	台形状	32	32	45	177.25	SK4015c - P4012	1.16		
P4192	TAD6	梢円形	輪状	57	27	11	177.59	P4012 - P4192	1.03	< P4123-P4191 > P4171	
P4041	TAD23	不規則	階段状	64	57	62	177.05	P4040 - P4041	1.38		
P4069	TAD24	円形	U字状	28	25	40	177.26	P4041 - P4069	1.84	< SK4070e	
P4053b	TAD3	梢円形	U字状	21	16	27	177.33	SK4026 - P4053b	1.55		
P4170	TAD4	梢円形	台形状	39	26	15	177.04	P4023b - P4170	1.56	< SK4017	

## 観察表

余川中道遺跡Ⅱ 中世 振立柱建物観察表(4)

※[ ]は補足記。

SN16

測量番号	27-28	写真 回数	155	約行	2段以上 (5.1m以上)	奥間	2間 (3.8m)	床面積	21.4af 以上	主軸方位	N-40° E
柱穴 番号	グリッド	平面形	断面形	柱径 (cm)	柱厚 (cm)	柱高 (cm)	底面高 (cm)	柱穴深さ (cm)	距離 (m)	複数開口	備考
P4078	TAD119	円形	U字状	32	32	62	177.05	-	-	> P4091 < SK4079b(SB15)	
P4050	TAD118	円形	張状	42	40	8	177.59	P4078 - P4060	1.94		
P4115	TAD117	楕円形	U字状	73	60	27	177.14	P4050 - P4115	1.56	> SK4060	
P4053	TAD222	楕円形	台形状	56	37	54	177.13	P4115 - P4053	1.82		
P4038	RAD2	楕円形	張状	50	45	12	177.52	P4053 - P4038	1.86	> P4039(SB12)	
P4024	RAD3	楕円形	張状	88	44	20	177.48	P4038 - P4024	1.64		
P4124	RAD4	楕円形	U字状	43	35	36	177.35	P4024 - P4124	1.89		鉢底(50)

SH17

測量番号	27-28	写真 回数	155	約行	2段以上 (5.1m以上)	奥間	2間 (4.9m)	床面積	14.2af 以上	主軸方位	N-40° E
柱穴 番号	グリッド	平面形	断面形	柱径 (cm)	柱厚 (cm)	柱高 (cm)	底面高 (cm)	柱穴深さ (cm)	距離 (m)	複数開口	備考
SK4142	TAD14	木筋形	U字状	[36]	42	66	177.06	-	-	> P4143 < SK4091b	
P4137	TAD13	楕円形	張状	37	32	40	177.31	SK4142 - P4137	2.03	< SK4091b	
P4052	TAD16	木筋形	張状	64	47	61	177.07	P4137 - P4052	2.37		
P4033	TAD23	円形	U字状	29	26	27	177.41	P4052 - P4033	2.53		
SK4055	TAD24	楕円形	張状	79	69	108	176.60	P4033 - SK4055	2.04	> P4193 < P4066	青緑縞(14)
P4024	TAD24	楕円形	張状	79	69	108	176.60	P4033 - SK4055	2.04	> P4193 < P4066	青緑縞(14)

SH18

測量番号	23-24	写真 回数	155	約行	1段以上 (2.6m以上)	奥間	1間 (2.6m)	床面積	6.0af 以上	主軸方位	N-27° E
柱穴 番号	グリッド	平面形	断面形	柱径 (cm)	柱厚 (cm)	柱高 (cm)	底面高 (cm)	柱穴深さ (cm)	距離 (m)	複数開口	備考
P4134	TAD14	木筋形	U字状	42	42	66	177.06	-	-	> P4143 < SK4091b	
P4137	TAD13	楕円形	張状	37	32	40	177.31	SK4142 - P4137	2.03	< SK4091b	
P4052	TAD16	木筋形	張状	64	47	61	177.07	P4137 - P4052	2.37		
P4033	TAD23	円形	U字状	29	26	27	177.41	P4052 - P4033	2.53		
SK4055	TAD24	楕円形	張状	79	69	108	176.60	P4033 - SK4055	2.04	> P4193 < P4066	青緑縞(14)
P4024	TAD24	楕円形	張状	79	69	108	176.60	P4033 - SK4055	2.04	> P4193 < P4066	青緑縞(14)

SH19

測量番号	23-25	写真 回数	155	約行	2段以上 (5.1m)	奥間	1間 (4.3m)	床面積	21.9af 以上	主軸方位	N-22° E
柱穴 番号	グリッド	平面形	断面形	柱径 (cm)	柱厚 (cm)	柱高 (cm)	底面高 (cm)	柱穴深さ (cm)	距離 (m)	複数開口	備考
P4167	TAD25	楕円形	V字状	[20]	16	8	177.46	P4129 - P4167	2.21		
SK4074	TAD19	楕円形	台形状	76	42	14	177.52	P4176 - SK4074	2.41	< SK4072-SK4076(SB15)	
P4173	TAD14	楕円形	張状	39	34	14	177.52	SK4074 - P4173	2.70	< SK4091a	
P4061	TAD15	木筋形	張状	60	40	20	177.42	P4173 - P4061	2.39	> SK4060	
P4054	TAD22	円形	U字状	31	29	29	177.38	P4054 - P4025	2.72		
P4025	RAD3	楕円形	U字状	23	20	25	177.41	P4054 - P4025	2.72		
P4129	RAD4	楕円形	台形状	29	27	18	177.53	P4025 - P4129	2.08		

SH20

測量番号	27-28	写真 回数	155	約行	3段以上 (5.2m以上)	奥間	2間 (4.8m)	床面積	21.9af 以上	主軸方位	N-28° W
柱穴 番号	グリッド	平面形	断面形	柱径 (cm)	柱厚 (cm)	柱高 (cm)	底面高 (cm)	柱穴深さ (cm)	距離 (m)	複数開口	備考
P4088	TAD09-14	円形	張状	30	27	7	177.69	-	-		
P4175	TAD14	楕円形	脚半形	39	28	35	177.24	P4088 - P4175	1.53	< SK4091a	
P4052	TAD18	木筋形	張状	64	47	61	177.07	P4175 - P4052	1.50		
P4041	TAD23	木筋形	張状	64	57	62	177.06	P4052 - P4041	2.40		
P4101	RAD24	楕円形	U字状	32	37	39	177.29	P4041 - P4101	1.78		
P4014	RAD5	円形	U字状	19	17	19	177.52	P4101 - P4014	1.77	青緑縞(6)	

SH21

測量番号	30-31	写真 回数	155	約行	4段以上 (7.2m以上)	奥間	2間 (4.8m)	床面積	35.3af 以上	主軸方位	N-16° W
柱穴 番号	グリッド	平面形	断面形	柱径 (cm)	柱厚 (cm)	柱高 (cm)	底面高 (cm)	柱穴深さ (cm)	距離 (m)	複数開口	備考
SK4135	TAD09	楕円形	脚半形	50	43	48	177.23	-	-		
P4138	TAD12	楕円形	U字状	55	34	21	177.50	SK4135 - P4138	2.54	< SK4091b	
P4157	TAD16	楕円形	脚半形	24	18	13	177.51	P4138 - P4157	1.39	< SK4091b	
P4057	TAD22-23	円形	U字状	24	23	25	177.41	P4157 - P4057	1.96		
P4117	TAD02	楕円形	脚半形	68	68	33	177.31	P4057 - P4117	1.53	< P4040(SB15)	
P4024	RAD3	楕円形	張状	88	44	20	177.48	P4117 - P4024	2.26		
SK4015a	RAD4-9	楕円形	張状	82	54	29	177.20	P4024-SK4015a	2.46	< SK4015b-SK4015c(SB15)-SK4015d < SK4010	
P4166	TAD19	楕円形	U字状	16	[7]	13	177.38	P4138 - P4166	2.41	< SK4091b	
P4075	TAD19	楕円形	U字状	27	21	38	177.27	P4166 - P4075	1.45		
SK4070a	TAD24	楕円形	V字状	53	43	33	177.36	P4075 - P4014	2.07	> SK4070b-SK4070d	
P4014	RAD5	円形	U字状	18	17	19	177.52	P4014	1.65		

## 観察表

余川中道遺跡Ⅱ 中世 堀立柱建物觀察表(5)

※[ ]は候选项。

SH22

測量番号	27-29	写真 回数	157	約行	4面 (約1m)	裏面	2面 (約1m)	床面積	43.7d	主方位	N 25° W
前沢 番号	グリッド	平面形	断面形	高さ (cm)	幅員 (cm)	奥さ (cm)	高さ (cm)	柱穴開口 寸法	距離 (cm)	裏面開口	備考
P4164	7AD4	円形	断板	22	[12]	19	177.51	-	-	-	-
P4146	7AD9-14	楕円形	U字状	62	42	37	177.08	P4184 - P4146	>SK4592-P4145 <SP4136	-	-
P4156	7AD18	楕円形	U字状	21	20	22	177.45	P4146 - P4156	2.63	>SD4083	-
P4043	7AD23	楕円形	U字状	46	39	58	177.08	P4156 - P4043	1.98	-	-
P4039	TS2022-23L 8AD2-3	不整形	板状	64	47	19	177.50	SD4043 - P4039	2.08	<P4038(SH36)	-
P4110	8AD4	円形	台形狀	19	17	15	177.54	P4039 - P4110	2.37	-	-
P4011	8AD5	楕円形	台形狀	34	27	20	177.49	P4110 - P4011	2.07	-	-

SH25

測量番号	35-36	写真 回数	161	約行	3面以上 (約1.5m)	裏面	4面 (約1.3m)	床面積	13.9 d (約1)	主方位	N 5° E
前沢 番号	グリッド	平面形	断面形	高さ (cm)	幅員 (cm)	奥さ (cm)	高さ (cm)	柱穴開口 寸法	距離 (cm)	裏面開口	備考
P4580	10AD7	円形	U字状	37	37	26	177.07	-	-	-	-
P4096	10AD7	楕円形	U字状	37	30	16	177.12	P4580 - P4096	1.60	>SK4583	-
P4589	10AD12-13	楕円形	U字状	41	34	25	177.06	P4096 - P4589	1.38	-	-
P4591	10AD13-18	不整形	板状	47	32	12	177.24	P4589 - P4591	1.38	-	-
P4687a	10AD13	楕円形	板状	50	47	17	177.22	P4591 - P4687a	1.26	>P4686a(SH31) <SK4563a-P4687a-P4688a(SH30)	-
P4670	10AD14	楕円形	台形狀	25	21	11	177.35	P4687a - P4670	1.63	-	-
P4658	10AD10	円形	台形狀	26	22	9	177.38	P4670 - P4658	1.32	-	-
P4535	10AD10	楕円形	板状	40	[24]	15	177.37	P4658 - P4535	1.08	>P4534	-
P4520	10AD5	楕円形	台形狀	49	41	36	177.15	P4535 - P4520	1.51	>P4519a(SH31)	-
P4524	9AD24-10AD4	不整形	V字状	56	44	33	177.15	P4520 - P4524	1.48	<P4525(SH28)	-
P4797	9AD24	楕円形	台形狀	40	[24]	17	177.36	P4524 - P4797	1.29	-	-

SH26

測量番号	35-36	写真 回数	161-162	約行	4面 (約1m)	裏面	3面 (約1.1m)	床面積	30.3d	主方位	N 2° E
前沢 番号	グリッド	平面形	断面形	高さ (cm)	幅員 (cm)	幅員 (cm)	奥さ (cm)	高さ (cm)	柱穴開口 寸法	距離 (cm)	裏面開口
P4798	9AD24	楕円形	板状	34	26	14	177.40	-	-	-	-
P4695b	10AD3	楕円形	U字状	37	34	40	177.06	P4798 - P4695b	1.70	>P4695a(SH30)	-
P4579	10AD3	楕円形	U字状	33	30	12	177.26	P4695b - P4579	1.91	-	-
P4581	10AD7	楕円形	U字状	35	29	18	177.16	P4579 - P4581	1.27	-	-
P4584	10AD7-8	楕円形	板状	41	33	12	177.21	P4581 - P4584	1.05	-	-
P4656	10AD13	円形	板状	29	26	10	177.24	P4584 - P4656	1.41	-	-
P4686a	10AD13-14	楕円形	板状	50	46	17	177.22	P4656 - P4686a	1.62	>P4686a(SH31)	<P4686b
P4561	10AD14	楕円形	U字状	37	26	21	177.25	P4686a - P4561	1.38	<P4560(SH28)	-
P4683	10AD10	木棒形	U字状	55	33	23	177.16	-	-	-	>P4535(SH25)
P4510	10AE1	楕円形	U字状	44	37	45	177.09	P4510 - P4510	1.46	-	-
P4602	10AE1	円形	板状	24	[10]	6	177.49	P4510 - P4602	1.23	-	-
P4504	9AE21	木棒形	U字状	[43]	46	33	177.22	P4602 - P4504	1.45	-	-

SH27

測量番号	3B-39	写真 回数	161	約行	1面以上 (約1.1m)	裏面	2面 (約1.4m)	床面積	13.2d	主方位	N 2° E
前沢 番号	グリッド	平面形	断面形	高さ (cm)	幅員 (cm)	幅員 (cm)	奥さ (cm)	高さ (cm)	柱穴開口 寸法	距離 (cm)	裏面開口
P4673	9AD25-9AE21 10AD5-10AE1	楕円形	U字状	36	33	9	177.22	-	-	-	<P4672(SH28)
P4524	10AD5-10AD4	不整形	板状	56	44	20	177.15	P4672 - P4524	2.74	<P4525(SH28)	-
P4531	10AD1	円形	平行状	30	28	19	177.22	P4524 - P4531	2.29	-	-
P4502	10AD14	楕円形	V字状	40	37	52	176.97	P4531 - P4502	2.20	-	-
P4538b	10AE6-11	楕円形	U字状	34	30	36	177.13	P4502 - P4538b	2.84	>P4538a	-

SH28

測量番号	3B-39	写真 回数	-	約行	4面 (約0.6m)	裏面	3面 (約1.6m)	床面積	30.4d	主方位	N 33° E
前沢 番号	グリッド	平面形	断面形	高さ (cm)	幅員 (cm)	幅員 (cm)	奥さ (cm)	高さ (cm)	柱穴開口 寸法	距離 (cm)	裏面開口
P4503	9AE21	円形	板状	31	28	16	177.40	P4603 - P4503	1.83	-	-
P4672	9AE25-9AE21	円形	板状	30	29	4	177.23	P4503 - P4672	1.14	>P4672(SH27)	-
P4514	9AE25	円形	U字状	28	26	22	177.16	P4672 - P4514	1.62	-	-
P4525	9AE24-10AD24	円形	板状	41	38	16	177.28	P4514 - P4525	1.39	>P4624(SH25-5827)	-
P4560	10AD3	円形	板状	26	17	37	177.03	P4525 - P4560	2.35	>SK4565	-
P4575	10AD3	円形	U字状	30	28	29	177.11	P4560 - P4575	1.60	-	-
P4565	10AD6	円形	平行状	37	35	15	177.22	P4575 - P4565	1.45	-	-
P4588	10AD13	楕円形	板状	36	26	38	176.96	P4565 - P4588	1.52	-	-
P4560	10AD14	円形	台形狀	31	30	28	177.19	P4588 - P4560	2.28	>P4561(SH26)	-
P4549	10AD15	円形	U字状	36	35	40	177.11	P4560 - P4549	1.37	>P4550	-
P4699	10AE11	楕円形	板状	36	26	36	177.13	P4549 - P4699	1.72	-	-
P4805	10AE6-11	楕円形	U字状	61	[19]	26	177.35	P4699 - P4805	1.22	-	-
P4804	10AE6	楕円形	V字状	58	[14]	21	177.41	P4805 - P4804	1.45	-	-
P4803	10AE1	楕円形	板状	59	[17]	18	177.44	P4804 - P4803	1.01	-	-

## 観察表

余川中道遺跡Ⅱ 中世 振立柱建物観察表(6)

SI229

測量番号	35-36	写真 回数	-	航行	2面 (6.2m)	奥間	1面以上 (1.8m以上)	床面積	11.2nf	主軸方位	N 19° E
前沢 番号	グリッド	平面形	断面形	高様 (cm)	幅様 (cm)	深様 (cm)	高さ (cm)	柱穴高 (cm)	柱穴開口 (m)	垂直関係	備考
P4512	10AD05	円形	U字状	27	27	21	177.26	P4513 - P4526	1.56		
P4520	10AD14	円形	U字状	27	27	21	177.26	P4513 - P4526	1.56		
P4531	10AD19	円形	U字状	30	29	15	177.32	P4526 - P4531	2.47		
P4549	10AD15	円形	U字状	36	35	49	177.11	P4531 - P4549	2.13 > P4450		
P4544	10AD15	円形	U字状	35	27	31	177.17	P4549 - P4544	1.51		
P4541	10AE11	円形	U字状	28	26	25	177.26	P4544 - P4541	1.69		

SI30

測量 番号	35-37	写真 回数	162	航行	2面 (6.2m)	奥間	2面 (6.2m)	床面積	29.3nf	主軸方位	N 13° E
前沢 番号	グリッド	平面形	断面形	高様 (cm)	幅様 (cm)	深様 (cm)	高さ (cm)	柱穴高 (cm)	柱穴開口 (m)	垂直関係	備考
P4600	BA324	円形	U字状	21	[10]	15	177.34	-			
P4605a	10AD3-4	円形	平面形	42	30	36	177.07	P4605a	2.08 < P4605b(SI26)		
P4678	10AD2-3	梢円形	平面形	50	40	6	177.30	P4605a - P4678	2.26		
P4685	10AD8	梢円形	平面形	38	34	14	177.25	P4678 - P4685	2.09		
P4688	10AD13	梢円形	平面形	28	15	11	177.26	P4685 - P4688	1.87 > P4687(SI25)	< P4688a	
P4694	10AD19	円形	U字状	29	25	19	177.21	P4688 - P4694	1.75		
SK4547	10AD15	円形	U字状	52	20	177.21	P4654 - SK4547	2.35 < P4548			
P4699	10AD17	梢円形	U字状	39	26	25	177.13	SK4547 - P4699	1.66		
P4603	10AE21	円形	弧形	31	28	16	177.40	-			

SI31

測量 番号	38-39	写真 回数	-	航行	2面以上 (6.7m以上)	奥間	2面 (6.7m以上)	床面積	24.5nf	主軸方位	N 37° E
前沢 番号	グリッド	平面形	断面形	高様 (cm)	幅様 (cm)	深様 (cm)	高さ (cm)	柱穴高 (cm)	柱穴開口 (m)	垂直関係	備考
SK5050	10AE1	梢円形	台形狀	34	28	29	177.14	-			
P4518a	10AD5	不規形	梢円形	66	63	55	176.97	SK4506a P4519a	2.46 < P4519b < P4518-P4520(SI25)		
P4527	10AD4	円形	U字状	31	31	22	177.26	P4519a - P4527	1.55		
SK4569	10AD8	梢円形	梢円形	64	49	44	177.01	P4527 - SK4569	1.60 > P4568		
P4602	10AD8	梢円形	弧形	49	39	7	177.36	SK4569 - P4602	2.32 < SK4568		
P4689b	10AD13	梢円形	弧形	[20]	36	11	177.27	P4602 - P4686b	1.95 < P4686a(SI26) > P4687a(SI25)		
P4559	10AD14	円形	U字状	28	27	18	177.26	P4686b - P4559	1.25		
SK4547	10AD15	円形	V字状	52	52	30	177.21	P4559 - SK4547	1.81 < P4548		
P4540	10AE11	梢円形	平面形	28	27	27	177.22	SK4547 - P4540	2.22		鉄扉(74)

SI32

測量 番号	44-45	写真 回数	-	航行	2面以上 (6.7m以上)	奥間	2面 (6.7m以上)	床面積	5.8nf	主軸方位	N 5° E
前沢 番号	グリッド	平面形	断面形	高様 (cm)	幅様 (cm)	深様 (cm)	高さ (cm)	柱穴高 (cm)	柱穴開口 (m)	垂直関係	備考
P4747	11AD22	円形	U字状	28	27	25	176.57	-			
P4708	11AD22	円形	U字状	45	38	27	176.75	P4747 - P4708	1.37		
P4774	11AD2-3	円形	U字状	23	22	15	176.68	P4708 - P4774	1.12		
P4721	11AD3	梢円形	台形狀	69	60	22	176.71	P4774 - P4721	1.11 > P4720-P4722		
P4763	11AD7	円形	U字状	35	30	10	176.54	P4721 - P4763	1.66 > SX4723		

余川中道遺跡Ⅱ 中世 柱穴観察表

測量 番号	地図	グリッド	平面形	断面形	柱径 (cm)	柱厚 (cm)	柱径 (cm)	柱厚 (cm)	出土物	垂直関係	備考
P 3046	E	114X19	円形	台形狀	31	26	27	176.57	丸柱		
P 3054	E	112Y17	円形	U字状	20	19	52	柱頭(55)	-	> SK3193	
P 3081	E	112Y22	円形	U字状	30	26	56	柱頭(96)	-	> P3118-P3402	
P 3191	E	113Y21	-	-	-	-	-	-	丸柱(118)		打ち込みの柱、 打ち込みの柱、
P 3192	E	113Y21	-	-	-	-	-	-	丸柱(119-120)		
P 3195	E	112X15-20	円形	U字状	36	32	27	176.54	漆塗り	-	P3196
P 3211	E	113X5	円形	U字状	8	6	8	柱頭(2)	-		
P 3259	E	113X3	円形	U字状	30	28	65	柱頭(100)	-		
P 3287	E	112Y23-13Y3	円形	U字状	40	36	36	柱頭(103)	-	> P2295	
P 3303	E	114X12	円形	U字状	26	25	44	柱頭(105)	-		
P 3316	E	114X11	梢円形	U字状	70	48	40	柱頭(104)	-	< P3317-P3320	
P 3321	E	114X16	円形	U字状	40	38	48	柱頭(108)	-		
P 3343	E	114X10-15	梢円形	V字状	80	38	36	柱頭(109)	-		
P 3422	E	112X24	梢円形	U字状	34	16	62	柱頭(112)	-	> P3271	
P 3450	E	113N4	円形	U字状	33	30	24	丸柱	-		
P 3479	E	112Y18-23	梢円形	弧形	60	56	55	柱頭(114)	-	> SX3003-SG3199	
P 3498	E	112N22-23	円形	U字状	18	17	28	柱頭(115)	-	> SX3445	
P 3510	E	112Y18	円形	-	20	28	-	柱頭(116)	-	> SX3003-SG3199-P3480	
P 4081	G	7AD19	梢円形	弧形	50	28	9	金銅製品(48-49)	-	< SD4083-P4083	
P 4121	G	8AD8	円形	U字状	25	24	23	-	-	< P4122	
P 4139	G	7AD4	円形	円形	41	38	18	白瓶(7)	-		
P 4153	G	8AD13	梢円形	平面形	46	39	7	石瓶(93)	-	< SD4112	
P 4516a	H	9AD15-10AD5	梢円形	U字状	46	34	40	楕円(8)	-	> P4516 b	
P 4776	H	11AC15-11AD11	円形	U字状	31	30	65	柱頭(117)	-		

## 観察表

余川中道遺跡Ⅱ 中世 土坑觀察表

※「」は検出品

遺物 種類	遺物 番号	地點	グリッド	平面図	断面図	長径 (cm)	短径 (cm)	厚さ (cm)	出土遺物	収集体	備考
SK_3020	E	14W9-10-15. 14W6-11	横円形	弧状	333	227	47	板瓦木製品(123-124). 陶器(125)	> SK3022		
SK_3021	E	14W-5-9-10	円形	弧状	65	63	21				
SK_3022	E	14W15	円形	-	56	32	6	加工円盤(47)	< SK3020		
SK_3026	E	14W15	不規則	弧状	74	7	11				
SK_3060	E	12X9-25. 12Y16-21	直方形	弧状	231	175	29		< P3204(SH2)-P3221(SH8)-P3431-P3432 -SF3446		
SK_3061	E	12Y16-17-21	横円形	台形狀	202	109	48		< P3055-P2129-P2131-P1132-P3147-P3280 -P2281(SH2)-P3417(SH2)		
SK_3090	E	12Y21	横円形	弧状	[42]	84	13				
SK_3102	E	13X25-12Y21. 13X5-13Y1	直方形	弧状	781	186	33	上脚質土壁(13). 瓦石(SH8)	> SK3059 < P3274(SH8)-P3467-P521(SH10) < SK3050-P2129-P2132(SH9)-P3130(SH8) -P3205(SH2)-P2296-P2297(SH3)		
SK_3193	E	12Y17	直方形	台形狀	302	77	12		< P3091		
SK_3200	E	13Y1-6	直方形	弧状	[10]	[60]	12		< P3091		
SK_3233	E	13X15-20. 13Y1-16	直方形	弧状	[100]	[106]	15	瓦質(53)	> SK3434 < SK3362-P3438(SH9)-P3504(SH7)-P3505 -P3508		
SK_3275	E	13X10	不規則	弧状	78	58	16		< P3274(SH8)-P3296-P3297		
SK_3292	E	13X9-10	横円形	弧状	87	55	25		< P3289-P3290(SH5)-P3413a(SH8)		
SK_3311	E	14X8-9-13-14	横円形	弧状	115	101	16				
SK_3329	E	13X3-8	円形	弧状	119	114	21		< P3339(SH9)-P3360		
SK_3356	E	13X8-9-13-14	横円形	弧状	107	122	10		< P3341(SH9)-P3349(SH7)-SK3362		
SK_3516	E	13X25. 13X3	円形	弧状	103	101	14				
SK_4015e	G	8AD4	不規則	平形状	[106]	[76]	9		> SK-01(SH8S21) < SK-01(SH8S21)-SK4016		
SK_4015d	G	8AD4	円形	輪形状	[40]	[40]	31		> SK-01(SH8S21) < SK-01(SH8S21)-SK4016		
SK_4016	G	8AD4	不規則	弧状	72	46	12		> SK4015b-SK4015c(SH15)-SK4015d-SK4017		
SK_4017	G	8AD4	円形	-	24	[10]	-		> P4170 < SK4016		
SK_4070b	G	TA023-24	横円形	磨擦狀	60	48	44		> SK-0707M < SK-0707m(SH21)		
SK_4070c	G	TA024	横円形	磨擦狀	52	34	34		> SK-0707A(P4069(SH15))		
SK_4070d	G	TA024	横円形	台形狀	89	[26]	15		< SK-0707a(SH21)-SK4070c-SK4070c		
SK_4071	G	TA024-25	横円形	台形狀	98	88	28		< P4057-4058		
SK_4073	G	TA019-20	円形	U字狀	53	53	35	白磁(15). 青磁(16)	> SK-074(SH19)		
SK_4082	G	TA08-9	横円形	弧狀	[75]	[25]	8		< SP4136.P4146(SH22)-P4185		
SK_4097	G	TA02-T	円形	V字狀	58	50	51	鐵滓(69 ~ 72)			
SK_4100	G	8AD21-2Z. 8AD1-2	不規則	台形狀	[1-40]	[130]	50		> SK4107		
SK_4108a	G	8AD22	不規則	台形狀	83	38	23		> SK4108b		
SK_4108b	G	8AD22	不規則	平形状	[32]	[14]	14		< SK4108a,P4165		
SK_4132	G	8AD14	横円形	磨擦狀	71	51	38		> SP4113		
SK_4152	G	8AD13	横円形	台形狀	51	[28]	10		< SK4112,SD4112		
SK_4161	G	8AD13	横円形	台形狀	102	53	19		> SK4152 < SD4112-SD4160		
SK_4162	G	TAD7-8-12-13	直方形	弧狀	151	89	11				
SK_4169	G	8AD12-13	-	台形狀	[58]	[20]	15				
SK_4180	G	8AD12	-	V字狀	105	32	28				
SK_4506a	H	10AE3	円形	-	33	20	-		> SK4505b < SK4505d		
SK_4509b	H	10AE3	円形	U字狀	42	40	38		< SK4509a		
SK_4509c	H	10AE3	円形	-	38	34	-				
SK_4528	H	10AD3-4	不規則	磨擦狀	99	57	18		< P4782-P4783-P4784		
SK_4533a	H	10AD13-14	横円形	弧狀	105	47	7		> SK4534b < SK4533c(P4677a(SH22))-P4688b-P4690		
SK_4563b	H	10AD14	円形	弧狀	29	19	11		> SK4533b		
SK_4565	H	10AD10	円形	弧狀	64	69	6		> SD4570 < P4665(SH28)		
SK_4576	H	10AD22-3	不規則	磨擦狀	94	63	25				
SK_4583	H	10AD7	弧狀	74	60	9		< P4696(SH25)			
SK_4590	H	10AD13	円形	台形狀	59	52	12				
SK_4646	H	10AD28. 10AE21	不規則	弧狀	120	94	23	鐵滓(78)			
SK_4651a	H	11AD02	(横円形)	弧狀	[94]	[28]	13		< SK4654b,SK4651b		
SK_4651b	H	11AD02	円形	U字狀	25	24	29		> SK4651a		
SK_4694a	H	10AD8-9-13-14	不規則	弧狀	[94]	50	11		> P4695(SH23) < SK-053a(SH4994b)		
SK_4694b	H	10AD8-9	円形	弧狀	44	34	8		> SK4654b		
SK_4669	H	10AD9-14	不規則	弧狀	118	62	9		< P4785		
SK_4671	H	10AD18-19-23-24	横円形	台形狀	251	124	54	陶測(18)-鐵滓(75-77)			
SK_4717	H	11AD02-22	直方形	弧狀	113	53	12		< P4797		
SK_4727	H	11AD12-13	横円形	弧狀	74	40	16		> P4653-P4742 < SK4652b,P4741		

## 観察表

余川中道遺跡Ⅱ 中世 溝観察表

古墳 名前	遺跡 番号	地区	ブリッド	平面形	断面形	覆土	主導方向	長さ (m)	幅 (m)	深さ (m)	出土遺物	参考文献	備考
SD 3004	E	12-13Y	-	不整形	直形	シングル	-	[8.00]	-	-	> SD3199		
SD 3010	E	10Y,11Y-Z	直線	直形	レンズ形	N-64°-W	[6.49]	50 ~ 58	36	上縁置土層 (19)	> SX3011		
SD 3199	E	12Y1B	直線	直形	レンズ形	N-69°-W	[5.50]	150	35	< SX3003-SX3408-SX3409-SH0004, -P3447-P3448-P3449-P3450-P3451 -P3475-P3486-P3487-P3491-P3493 -P3510-P3529			
SD 3209	E	12X-Y,13X	緩やかな 曲線	弧状	半圓	-	[5.30]	12 ~ 20	6	< SK3112,P3190-P3246(SH1)-P3247 -P3248-P3249-P3250-P3251-P3252 -P3456-P3464(SB12)-P3447-P3507	SBIの南落ち層 の可能性あり。		
SD 3254	E	12X	直線	弧状	半圓	N-65°-W	[1.82]	26 ~ 37	5	> P3511			
SD 3255	E	12X	直線	弧状	半圓	N-65°-W	[1.98]	31 ~ 96	6	< SX3445,P3393-P3414-P3522-P3523 -P3530			
SD 3257	E	13X-Y,14X	直線	弧状	レンズ形	N-16°-E	[6.34]	60 ~ 136	22	底(121)	> SD3433,P3296	杭3540m使う。	
SD 3362	E	13X	L字状	弧状	半圓	-	[5.50]	13 ~ 21	5	< SK3203-SK3350 -P3248-P3276-P3370-P3372-P3379 -P3384-P3436(SB9)-P3505 -P3506	SBIの南落ち層 の可能性あり。		
SD 3434	E	13X	直線	弧状	レンズ形	N-48°-W	[1.70]	17 ~ 26	7	> SK3203,P3257,P3435-P3502-P3503			
SD 4059	G	7AD	L字状	弧状	半圓	N-26°-W	0.38	27	6	> SD4059 -SK4111a,P4059(SH1)			
SD 4083	G	7AD	直線	弧状	半圓	N-47°-E	[0.88]	[64]	12	上縁置土層 (20)	> SD4059 -SK4111a,P4059(SH1) -P4119-P4120		
SD 4112	G	8AD	直線	段段状	水平	N-65°-W	[0.98]	[123]	42	> SD4112 -SK4113,SK4152-SK4161,P4029 -P4031-P4119-P4120			
SD 4114	G	8AD	直線	段段状	プロック状	N-53°-E	[3.90]	79	39	> SF4113			
SD 4160	G	8AD	直線	台形状	半圓	N-66°-E	0.86	60	28	> SD4112,SK4161			
SD 4570	H	10AD3	直線	弧状	半圓	N-36°-W	[0.98]	29 ~ 23	0	< SK4565			
SD 4992	H	10AD18-19	直線	半円形	斜板	N-37°-E	1.96	42 ~ 68	18				
SD 4613	H	11AD16-17,11-12 -17-18,17-19	直線	弧状	半圓	N-82°-W	[6.80]	107 ~ 116	11	> P4613-P4616-P4707-P4720-P4745 -P4769-P4761-P4768-P4775			
SD 4636	H	11AD12-13 -17-18	直線	弧状	半圓	N-44°-W	2.02	60	7	> SX4652b -P4637-P4703-P4751			
SD 4641	H	11AD13-18,25, 12AD13-6	直線	弧状	レンズ形	N-49°-W	[6.82]	52 ~ 90	18	< P4731-P4701-P4732-P4762			

余川中道遺跡Ⅱ 中世 性格不明遺構観察表

古墳 名前	遺跡 番号	埋込	グリッド	平面形	断面形	長さ (m)	幅 (m)	深さ (m)	出土遺物	参考文献	備考
SK 3003	E	12Y12 ~ 14-17 ~ 19	不整形	弧状	[415]	[200]	38	厚さ 約21-22cm 未製品(126), 石柱(128)	< SK3112,SK3119 -SX3448-SX3480,P3183(SB13)-P3420 -P3475-P3486-P3510-P3529		
SK 3011	E	10Y29-25.5,6Z -11-12-16-17-21-22	不整形	弧状	592	[344]	28		< SD3010, P3009		
SK 3100	E	12Y1 ~ 2-6-7	不整形	弧状	194	163	10		< P3008-P3009-P3110(SB12)		
SK 3256	E	13X29	不整形	-	89	50	30				
SK 3445	E	12X29-24, 13X3-4	不整形	弧状	97	92	12		> SD255 -P3447-P3448-P3492-P3496-P3597 -P3498-P3499		
SK 3488	E	12Y18	相内形	弧状	83	79	43		> SD3119,SK3003		
SK 3490	E	12Y18	相内形	弧状	83	64	19	未製品(129)	> SD3119,SK3003 -P3259		
SK 4060	G	6-7AD	-	台形状	-	[1800]	42		> SD4059-SD4063 -P4115(SH1)-P4116-P4117-P4118 -P4119-P4120-P4121-SK4109-SK4110 -SK4110e-SK4108e,SK3110		
SK 4107	H	6AD16 ~ 18-21-22	不整形	台脚形	[265]	[120]	28		< P4103-SK4100		
SK 4603a	H	10AD16-17-21-22, 11AD1	不整形	台脚形	367	282	21	石柱 (24), 石鏡 (26), 骨鏡 (22)	< SK4603e,P4740		
SK 4603b	H	10AD16-17-22	不整形	台脚形	182	117	13		< SK4603e		
SK 4603c	H	10AD21-22, 11AD1-2	不整形	台脚形	161	156	44	馬銅 (27), 骨鏡 (28)	< SK4603e		
SK 4603d	H	10AD22	不整形	台脚形	58	52	10		< SK4603a-SK4603b-SK4603c		
SK 4603e	H	10AD16-17-21-22	-	円筒形	[65]	28 ~ 47	16		> SK4603a-SK4603b-SK4603c		
SK 4648	H	11AD02 ~ 4-8-9-14	不整形	段段状	468	[297]	18		> SK4651a,SK4653a = P4649		
SK 4652	H	11AC10-15-20, 11AD1-16-17-18	-	-	-	-	-			自然の段差。	
SK 4653a	H	11AD15-16-19-20- 22-24-25-27-28-29- T2AD1-5	-	台形状	[748]	[196]	10		< P4648-P4705a-P48117		
SK 4653b	H	11AD01 ~ 14-17 ~ 19 -25 ~ 26 ~ 27 ~ 28 ~ 29 ~ 30 -12AD1 ~ 5	-	台形状	[846]	400	10		< SK4727,P4628-P4705a		
SK 4723	H	12AD2-3-7-8	不整形	弧状	[225]	92 ~ 143	18	馬銅 (29-30), 骨鏡 (91)	> P4735-P4737-P4738-P4763(SB42) -P4724-P4764 = P4738		

## 観察表

## 余川中道遺跡Ⅱ 古代 水田 観察表

遺跡 番号	遺跡 番号	地図	グリッド	断面形	主傾斜方向	傾斜度 (度)	F傾斜 (cm)	上端幅 (cm)	底S (cm)	出土遺物	備考
3012	E	13V2-7-12-17-18	D	N48°W	7.80	64 ~ 137	-	40 ~ 119	5		
3013	E	13V23	D	N41°W	1.73	69 ~ 114	-	36 ~ 80	1		
3014	E	13V8-9	E	N5°E	0.44	-	27	19	1		
3015	E	13V1-19-24	D	N41°W	8.40	42 ~ 82	-	30 ~ 56	9	上層部(133)	
3016	E	13V25	E	N15°E	0.42	-	37	-	26	1	
3017	E	13W1	D	N36°E	5.62	48 ~ 63	-	30 ~ 39	3		水口とか。
3018	E	13V15-20	D	N41°W	9.80	54 ~ 90	-	41 ~ 56	6		SN3019(中世以降)より古い。
3023	E	13W3	D	N19°W	4.74	53 ~ 75	-	22 ~ 30	5		
3024	E	13W14	D	N46°E	5.98	41 ~ 83	-	23 ~ 48	3		
3027	E	12W24	D	N53°E	3.00	50 ~ 63	-	30 ~ 40	3		
3028	E	12W18	D	N89°W	3.82	44 ~ 58	-	27 ~ 29	4		
3238	E	13W19-24	D	N9°W	5.95	47 ~ 71	-	27 ~ 44	8		

## 余川中道遺跡Ⅱ 古墳時代 土坑観察表

遺跡 番号	遺跡 番号	地図	グリッド	断面形	主傾斜方向	傾斜度 (度)	F傾斜 (cm)	底S (cm)	出土遺物	垂れ縁	備考
SK-2104	D2	12U21-22	相引	弧状	129	84	8			>SK2105	
SK-3605	E	12V5-12W11	不整形	弧状	166	198	17				
SK-3608	E	12V20-25	相引	弧状	114	68	8		上層部(140 ~ 149)	>SK3596-SD3614	
SK-3621	E	13V9-10,13W6	不整形	平凹形	103	79	25			<SK3620	
SK-3623	E	12W11-16	相引	弧状	99	70	14			<SK3606	

## 余川中道遺跡Ⅱ 古墳時代 溝観察表

遺跡 番号	遺跡 番号	地図	グリッド	断面形	主傾斜方向	傾斜度 (度)	F傾斜 (cm)	底S (cm)	主傾斜方向	出土遺物	備考
SD-2100	D2	13T-4L-14B-T'	直線	弧状	[19.05]	124 ~ 270	25	N7°E	上層部(427 ~ 444)	>SD2103-SD2124-SD2159-P2124	
SD-2101	D2	13T-U	直線	弧状	6.1	51 ~ 109	14	N9°E	上層部(445)	>SD2100-SD2123-P2153-P2169-P2172	<SD2123-P2113-P2138-P2151
SD-2103	D2	13U	直線	弧状	[4.95]	30 ~ 66	11	N87°W		>SD2109	
SD-2109	D2	13U	直線	弧状	[5.96]	64 ~ 123	9	N10°W		>SD2126-P2114-P2127	<SD2163-SK2102
SD-2124	D2	13-14T	直線	弧状	[5.32]	243 ~ 276	10	N1°W		<SD2100-P2167	
SD-2129	D2	13U	直線	弧状	[1.18]	44 ~ 59	5	N43°E		<SD2109-P2127	小溝。
SD-2131	D2	13T-U	直線	弧状	1.66	44 ~ 58	6	N33°E		>SD2137	
SD-2132	D2	13T-U	直線	弧状	1.27	41 ~ 61	6	N29°E		<SD2161	小溝。
SD-2159	D2	13U	直線	弧状	[2.32]	36 ~ 57	7	N52°W		>SD2160-SD2161	
SD-2160	D2	13U	直線	弧状	[0.61]	51	3	N80°W		<SD2159-SD2161-SD2165	
SD-2161	D2	13T-U	直線	弧状	0.17	28 ~ 37	6	N41°E		>SD2160-SD2163	<SD2165-SK2108
SD-2162	D2	13T-U	直線	弧状	[2.01]	34 ~ 40	4	N13°W		<SD2161-SD2163-P2156	
SD-2163	D2	13T	直線	弧状	1.16	31 ~ 43	6	N75°W		>SD2160	
SD-2164	D2	13T	直線	弧状	[1.68]	57 ~ 85	8	N76°W		<P2156	
SD-2165	D2	13U	直線	弧状	[1.21]	33 ~ 42	5	N6°W		>SD2160-SD2161	
SD-2025	D1	12B-Q	航行	U字形	[3.16]	74 ~ 140	24	N36°E			V1 b 動の道跡。
SD-2026	D3	10-11Q	航行	舟形	[4.56]	40 ~ 114	22	N59°W			V1 c 動の道跡。
SD-2200	D3	10Q	直溝	V字形	[4.03]	55 ~ 84	18	N1°W	上層部(476 ~ 477)		V1 c 動の道跡。
SD-2201	D3	10Q	直溝	U字形	[2.18]	105 ~ 114	29	N36°E			V1 c 動の道跡。
SD-3602	E	12-13V	直溝	弧状	[7.00]	142 ~ 209	43	N4°E	上層部(154 ~ 156)	>SD3603	
SD-3603	E	12-13V-W	航行	舟形	[28.00]	107 ~ 400	32 ~ 60	-	上層部(157 ~ 208)	<SD3602	<SD3650
SD-3604	E	12V-W	直溝	舟形	[6.00]	47 ~ 150	37	N43°E			
SD-3605	E	12-13V	航行	舟形	5.70	64 ~ 103	22	-	上層部(209 ~ 212)	>SK3623	<SK3608
SD-3614	E	12-13V-W	直溝	弧状	11.90	34 ~ 114	12	-	上層部(213)	<SK3608-P3607-P3626-P3627	
SD-3650	E	12X-Y, 12W-X-Y, 14W-X	航行	舟形	[30.00]	300 ~ 470	48 ~ 95	-	上層部(214 ~ 338)	<SD3603	

## 観察表

余川中道遺跡Ⅱ 古墳時代 性格不明遺構観察表

遺構 種類	遺構 番号	地区	グリッド	平面形	断面形	高さ (cm)	幅員 (cm)	奥行き (cm)	出土遺物	垂面図様	備考
SK	2102	D2	13U21～23, 14U1～3	楕円形	楕状	206	245	8	> SD2109, SD2133		
SK	2105	D2	13U19～21～22～ 24, 13U22～24	楕円形	楕状	[367]	311	21	> P2140-P2141-P2142-P2143-P2144	前面に凹凸有り。	
SK	2123	D2	13U1/2-2						上断面(450～458) > SD2103	上断面小造標	
SK	2125	D2	13T5						上断面(459)	上断面小造標	
SK	2126	D2	13U6						上断面	上断面小造標	
SK	2139	D2	13T10						上断面	上断面小造標	
SK	2171	D2	13U23～24, 14U3～4	楕円形か	楕状	176	[53]	5		前面に凹凸有り。	
SK	2536	D3	11U2～7						上断面(475)	上断面小造標	
SK	3609	E	12W14～18-19						上断面(339～341)	上断面小造標	
SK	3610	E	12W15～16						上断面(342)	上断面小造標	
SK	3611	E	14V2						上断面(343)	上断面小造標	
SK	3613	E	14W15	楕円形	楕状	64	86	5	上断面(544)		
SK	3628	E	13V18～23	楕円形	楕状	125	47	7			
SK	3629	E	13V24～4V4						上断面(345)	上断面小造標	
SK	3651	E	13X10～15						上断面(346～347)	上断面小造標	
SK	3652	E	13X19						上断面(348)	上断面小造標	
SK	3653	E	13X19						上断面(349～350)	上断面小造標	
SK	3654	E	14X30～10-15						上断面(351～362)	上断面(351～362)	V面(351)、E区で最も古 V1面。
SK	3655	E	13X13						上断面(363～365)	上断面小造標	
SK	3656	E	13X19～20						上断面(366)	上断面小造標	
SK	3657	E	13X10～11						上断面(367)	上断面小造標	
SK	3658	E	14X7～9-12						上断面(368～373)	上断面小造標	
SK	3659	E	14X1～6						上断面(374)	上断面小造標	
SK	3660	E	13X24						上断面(375～376)	上断面小造標	
SK	3661	E	13W5-10, 13R1						上断面(377～390)	上断面小造標	
SK	3662	E	13W9-14-15-19-20						上断面(391～396)	上断面小造標	
SK	3664	E	14X13-18-19						上断面(397～398)	上断面小造標	
SK	3665	E	12W15～20						上断面(422)	上断面小造標	
SK	3666	E	13Y17～22						上断面(429～400)	上断面小造標	
SK	3667	E	13Y21						上断面(401)	上断面小造標	
SK	3668	E	13X7						上断面(402)	上断面小造標	

余川中道遺跡Ⅱ 古墳時代 ピット観察表(1)

遺構 種類	遺構 番号	地区	グリッド	平面形	断面形	高さ (cm)	幅員 (cm)	奥行き (cm)	出土遺物	垂面図様	備考
P	2106	D2	12U21～22, 13U1～2	楕円形	楕状	84	56	5			
P	2107	D2	13U1	円形	円状	30	27	12			
P	2108	D2	13U1	円形	楕状	32	26	11			> SD2103
P	2110	D2	13U3	円形	楕状	25	21	6			
P	2111	D2	13W9-13	円形	楕状	51	46	8			> SD2100
P	2112	D2	13U12	円形	楕状	20	19	3			
P	2113	D2	13U12	円形	V字状	46	46	46			> SD2100
P	2114	D2	13U12	円形	円柱状	21	29	18			< SD2109
P	2115	D2	13U21	円形	U字状	27	24	39			
P	2116	D2	13U23	楕円形	U字状	28	21	25			
P	2117	D2	13U34	円形	楕状	53	34	7			
P	2118	D2	12T23-13-24	円形	楕状	33	32	11			
P	2119	D2	13T3	円形	楕状	40	36	7			
P	2120	D2	13T21	円形	楕状	20	17	6			
P	2121	D2	13T21	円形	U字状	34	29	45			
P	2122	D2	12T23.13T21	円形	円柱状	29	22	31			
P	2127	D2	13U17	楕円形	楕状	54	52	5			> SD2129 < SD2109
P	2128	D2	13U17	円形	円柱状	31	28	19			
P	2130	D2	12T19-20-24-25	楕円形	楕状	60	48	8			< SD2100
P	2133	D2	13U23.14U3	楕円形	円柱状	42	20	25			< SK2102
P	2134	D2	14U1	円形	円柱状	24	23	12			
P	2135	D2	13T25	楕円形	U字状	30	26	15			
P	2136	D2	13T25	円形	U字状	35	31	24			
P	2137	D2	13T20	円形	U字状	22	18	31			< SD2133
P	2138	D2	13U12-17	円形	楕状	24	20	5			> SD2103
P	2140	D2	12U8-23	木板状	楕状	34	27	3			< P2141, SK2105
P	2141	D2	12U18-23	円形	台形状	46	44	30			> P2140 < SK2105
P	2142	D2	12U18	円形	U字状	23	20	27			< SK2105
P	2143	D2	12U22	楕円形	U字状	34	25	26			< SK2105
P	2144	D2	13U3	円形	U字状	35	32	38			< SK2105
P	2145	D2	13U3	楕円形	U字状	40	31	29			< SD2100
P	2146	D2	13U3-4	楕円形	U字状	33	27	49			< SD2100
P	2147	D2	13U3	円形	円柱状	19	18	13			
P	2148	D2	13U3	円形	楕状	16	15	2			
P	2149	D2	13U3	円形	楕状	17	16	4			> SD2100
P	2150	D2	13U6-9	円形	U字状	36	33	60			柱根あり。
P	2151	D2	13U11-16	円形	楕状	36	31	30	E断面(447)		> SD2101
P	2152	D2	13U16	円形	楕状	33	28	12	E断面(448)		< SD2101
P	2153	D2	13U1	円形	楕状	31	29	10			
P	2154	D2	13T5, 13U1	円形	U字状	40	40	23			
P	2155	D2	13T5-13-10	円形	楕状	48	46	8			
P	2156	D2	13T10	楕円形	楕状	62	48	19			> SD2102, SD2103

## 観察表

余川中道遺跡Ⅱ 古墳時代 ピット観察表(2)

遺構番号	地図	グリッド	平面形	断面形	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	出土遺物	垂覆関係	参考
P 2157	D2	13T10,13U6	楕円形	扇形状	77	62	30			
P 2158	D2	13U10-6	楕円形	扇形状	71	59	15		> SD2165	
P 2167	D2	14T4	円形	扇形状	28	24	4		> SD2124	
P 2168	D2	14T4-5	楕円形	扇形状	43	35	11			
P 2169	D2	13U12	円形	扇形状	23	21	12		< SD2101	
P 2170	D2	13U18	円形	U字形	30	29	41	E標器(449)		
P 2172	D2	13T30,13U16	円形	扇形状	23	21	12		< SD2101	
P 2173	D2	14U2	円形	U字形	25	23	18			
P 2174	D2	13T9	円形	扇形状	29	26	12			
P 2175	D2	13T14	楕円形	U字形	37	30	24			
P 2176	D2	13T8	円形	扇形状	28	27	21			
P 2183	D2	12U18-19	円形	扇形状	56	31	43		> SD2105	
P 2202	D3	10Q2	不規則	扇形状	50	35	19		VI-c 墓の表層、 VI-a 墓の底層	
P 2203	D3	10Q2	不規則	扇形状	36	20	21		VI-c 墓の表層、 調査区壁面にて検出、 調査区壁面にて検出	
P 2204	D3	10Q	不明	U字形	[11]	-	40		VI-c 墓の表層、 調査区壁面にて検出	
P 2205	D3	16Q	不明	U字形	[14]	-	17			
P 3600	E	12Z3	楕円形	U字形	37	26	33			
P 3601	E	12Z3	楕円形	U字形	45	39	42			
P 3607	E	12Z25	楕円形	U字形	42	28	33		> SD3614	
P 3612	E	14W9	円形	U字形	21	16	29			
P 3615	E	12W11	楕円形	U字形	36	26	39			
P 3616	E	13W11	楕円形	U字形	33	30	37			
P 3617	E	12W12	楕円形	扇形状	47	45	18			
P 3618	E	12W19	楕円形	V字形	24	23	23			
P 3619	E	12W16	楕円形	扇形状	35	31	7			
P 3620	E	12Z9	円形	V字形	39	37	28			
P 3622	E	12V3	円形	U字形	40	35	45			
P 3624	E	12W23	楕円形	扇形状	30	22	19			
P 3625	E	12V5	楕円形	U字形	35	31	39		> SD3608	
P 3626	E	12W21	楕円形	U字形	24	20	21		> SD3614	
P 3627	E	12W21	楕円形	U字形	25	23	24		> SD3614	
P 3630	E	12Z5	円形	扇形状	21	21	14			
P 3663	E	14W10	円形	扇形状	18	16	24			

余川中道遺跡Ⅱ 古墳時代 VI b 層水田 観察表

遺構番号	地図	グリッド	断面形	土壤剖面	標高(段) (m)	標高(段) (m)	下限標高 (m)	高さ (cm)	参考	
残構2000	D1	13P	不規則	N-10-E	0.80	0.73	0.45	E 13-10		
残構2001	D1	13P-Q		N-67-E	8.38	0.53 - 0.70	0.25 - 0.45	S 20.7		
残構2002	D1	13P		C	N-68-E	1.26	0.74 - 0.88	0.30 - 0.49	S 32.13	
残構2003	D1	12Q-R, 13P-Q		A + C	N-15'-W	18.06	0.61 ~ 0.75	0.09 ~ 0.38	E 24.17	
残構2004	D1	12Q-R, 13Q		C	N-10'-W	16.19	0.26 ~ 0.69	0.08 ~ 0.37	W 20.13	
残構2005	D1	13Q-R		C	N-53-E	4.53	0.61 ~ 0.94	0.20 ~ 0.39	S 17.9	
残構2006	D1	12Q		N-82-E	8.44	0.46 ~ 0.73	0.22 ~ 0.44	S 6.3		
残構2007	D1	12Q		N-85-E	2.38	0.41 ~ 0.48	0.17 ~ 0.25	S 14.8		
残構2008	D1	13Q		C	N-82-E	3.16	0.54 ~ 0.66	0.10 ~ 0.29	S 24.17	
残構2009	D1	13P		C	N-8'-W	7.14	0.60 ~ 0.70	0.20 ~ 0.30	E 20.14	
残構2010	D1	11 ~ 13Q, 13P		B + C	N-40'-W	8.94	0.30 ~ 0.71	0.12 ~ 0.41	W 15.14	
残構2011	D1	13Q-R		C	N-4'-E	5.09	0.32 ~ 0.59	0.12 ~ 0.34	E 14.9	
残構2012	D1	13Q-R, 1-R		B	N-6'-E	5.66	0.55 ~ 0.85	0.20 ~ 0.41	E 23.13	
残構2013	D1	13H		N-49'-E	0.69	0.41 ~ 0.45	0.14 ~ 0.29	S 4.3		
残構2014	D1	12R		B	N-2'-E	2.54	0.40 ~ 0.59	0.12 ~ 0.36	W 13.9	
残構2015	D1	12-13R		N-74'-W	3.49	0.33 ~ 0.63	0.08 ~ 0.34	S 16.8		
残構2016	D1	12P-Q		D	N-38-E	3.06	0.77 ~ 1.15	0.35 ~ 0.76	15	SD2625下端で計測
残構2017	D1	11P-Q, 12P		A + B	N-13-E	2.02	0.40 ~ 0.77	0.10 ~ 0.50	E 16-11	
残構2018	D1	12P-Q		D	N-73-E	2.06	0.61 ~ 1.21	0.12 ~ 0.74	S 11.7	
残構2019	D1	10-13Q		A + B + D	N-52-E	2.06	0.41 ~ 0.99	0.25 ~ 0.50	N 21.17	
残構2020	D1	11Q		N-52'-E	2.11	0.45 ~ 0.77	0.26 ~ 0.33	W 10.5		
残構2021	D1	10Q		N-78'-E	0.89	0.68 ~ 1.11	0.46 ~ 0.61	N 18.2		
残構2022	D1	10Q		C	N-51-W	4.23	0.49 ~ 0.91	0.14 ~ 0.69	N 16.19	
残構2023	D1	10Q		A	N-47'-E	2.40	0.69 ~ 1.07	0.15 ~ 0.49	S 29.23	
残構2024	D1	9Q		N-80'-E	2.56	0.39 ~ 0.52	0.77 ~ 0.22	N 10.8	倒伏させて的確、セクション開から	
残構2053	D1	11Q		N-50'-E	1.46	0.46 ~ 0.53	0.11 ~ 0.24	N 10-1		

余川中道遺跡Ⅱ 古墳時代 VI b 層水田 区画観察表

遺構番号	地図	グリッド	平面形	面積 (a)	遺構番号	地図	グリッド	平面形	面積 (a)	遺構番号	地図	グリッド	平面形	面積 (a)
區画2028	D1	13P	不規則	34.5	區画2037	D1	12-13Q	長方形	12.6	區画2046	D3	11Q		
區画2029	D1	13P-Q	具有形	19.5	區画2038	D1	12R, 13Q-R			區画2047	D3	11Q		
區画2030	D1	13P-Q			區画2039	D1	12R, 13Q-R			區画2048	D3	10-11Q		
區画2031	D1	13P-Q	具有形	18.3	區画2040	D3	11-12Q			區画2049	D3	10-11Q		
區画2032	D1	13Q-R, 1-R			區画2041	D1	12Q-R			區画2050	D3	10Q		
區画2033	D1	13Q-R, 1-R			區画2042	D1	12R			區画2051	D3	10-11Q		
區画2034	D1	13H			區画2043	D1	12-13R			區画2052	D3	9Q		
區画2035	D1	12P-Q, 13P			區画2044	D3	11P							
區画2036	D1	12-13Q	不規則	34.5	區画2045	D3	11P-Q							

## 観察表

余川中道跡Ⅱ 古墳時代 四層水田 考観察表

遺構番号	地図	グリッド	標高(m)	高さ(m)	標高差(m)	下田幅(m)	上田幅(m)	高さ(cm)	備考	
残構番号	D1	13Q・R	A	N-0'5~W	1.46	0.29~0.39	0.09~0.17	W 6.5		
残構番号	D1	13Q	A	N-0'5~W	3.07	0.23~0.49	0.11~0.24	S 8.4	本111か所	
残構番号	D1	13Q	D	N-7'5~W	2.38	0.23~0.37	0.08~0.21	S 6.2	本111か所	
残構番号	D1	13Q	B	N-0'3~W	1.98	0.20~0.35	0.11~0.15	S 8.5	本111か所	
残構番号	D1	13Q・B	A-E	N-2'3~W	10.55	0.21~0.62	0.06~0.34	E 12	西側は井戸跡域	
残構番号	D1	13P・Q	D-E	N-2'6~W	6.26	0.28~0.56	0.12~0.34	W 12.1		
残構番号	D1	13P	E	N-5'3~W	1.74	0.29~0.37	0.16~0.18	S 9.0		
残構番号	D1	13P	D	N-7'2~W	3.03	0.32~0.41	0.18~0.24	N 5.4		
残構番号	D1	13P	D	N-3'0~W	3.00	0.26~0.46	0.15~0.24	E 5.3		
残構番号	D1	12P・Q-L	B	N-1'2~W	7.87	0.23~0.46	0.10~0.27	E 7.6	遺構番号を付したものの2514と連続する	
残構番号	D1	12	13P	N-6'2~W	0.97	0.35~0.39	0.19~0.20			
残構番号	D1	12P・Q-L	13Q	D	N-8'2~W	6.21	0.28~0.43	0.10~0.20	S 6.1	
残構番号	D1	12P・Q	A	残E [N-7'1~W]	7.79	0.22~0.46	0.06~0.25	S 6.3		
残構番号	D1	13Q	D	N-1'5~W	6.03	0.30~0.60	0.20~0.43	E 9.2	本111か所	
残構番号	D1	13Q	D	N-0'9~W	3.92	0.30~0.49	0.11~0.23	E 4.3	遺構番号を付したものの2509と連続する	
残構番号	D1	13Q	E	N-8'2~W	2.48	0.40~0.46	0.22~0.30	S 3.2	本111か所	
残構番号	D1	13Q	E	N-8'4~W	0.78	0.30~0.34	0.09~0.14	2		
残構番号	D1	13Q	E	N-8'1~W	2.62	0.35~0.45	0.14~0.22	S 5.2		
残構番号	D1	13Q	D	N-3'3~W	2.26	0.44~0.64	0.19~0.26	E 6.4		
残構番号	D1	13Q・B	D	N-3'3~W	2.26	0.44~0.64	0.19~0.26	E 6.4		
残構番号	D1	13Q	D	N-9'0~W	1.21	0.48~0.51	0.20~0.30	S 6.4		
残構番号	D1	12P・Q	A	残E [N-2'3~W]	6.75	0.31~0.54	0.09~0.28	W 10.2		
残構番号	D1	13Q	D	N-7'9~W	2.25	0.34~0.39	0.09~0.16	S 6.2		
残構番号	D1	13Q	D	N-7'4~W	0.39	4.08	不明	5	東側を土石面に切られる。遺存不点。セクション無なし。	
残構番号	D1	13Q	B	N-2'5~W	3.00	0.28~0.29	0.09~0.20	W 4.3		
残構番号	D1	10Q	A	N-2'4~W	0.40	4.08	不明	3	南東側を断崖に切られる。遺存不点。セクション無なし。	
残構番号	D1	10Q	A	N-4'0~W	1.23	0.38~0.45	0.15~0.25	1	セクション無なし。	
残構番号	D1	10Q	A	N-4'6~W	0.84	0.21~0.29	0.09~0.13	2	セクション無なし。	
残構番号	D1	11Q	D	N-1'9~W	2.72	0.31~0.51	0.09~0.23	E 4.5		
残構番号	D1	11Q	D	N-8'5~W	2.47	0.42~0.54	0.18~0.27	S 3.2		
残構番号	D1	11Q	D	N-2'7~W	0.81	0.28~0.35	0.14~0.20	2	セクション無なし。	
残構番号	D1	11Q	D	標E [N-2'3~W]	2.01	0.40~0.53	0.18~0.25	W 4.2		
残構番号	D1	10-11Q	D	N-6'9~W	2.49	0.36~0.49	0.19~0.27	6	セクション無なし。	
残構番号	D1	10-11Q	D	N-2'3~W	1.85	0.34~0.38	0.13~0.22	W 6.5		
残構番号	D1	10Q	D	N-2'6~W	1.12	0.28~0.33	0.14~0.18	E 4.2		
残構番号	D1	10Q	D	N-6'6~W	0.87	0.39~0.49	0.24~0.26	2	セクション無なし。	
残構番号	D1	10Q	E	N-8'6~W	1.10	0.23~0.27	0.10~0.12	E 3.0		

余川中道跡Ⅱ 古墳時代 四層水田 区画観察表

遺構番号	地図	グリッド	平面形	面積(m <sup>2</sup> )	遺構番号	地図	グリッド	平面形	面積(m <sup>2</sup> )	遺構番号	地図	グリッド	平面形	面積(m <sup>2</sup> )
区画2539	D1	13R			区画2553	D1	13Q			区画2567	D1	12P・Q		
区画2540	D1	13Q・R	[正方形]	5.5	区画2554	D1	13Q・R			区画2568	D1	12Q		
区画2541	D1	13Q・R			区画2555	D1	13Q・R			区画2569	D3	11P・Q, 12P・Q		
区画2542	D1	13Q			区画2556	D1	12R			区画2570	D3	11-12Q		
区画2543	D1	13Q			区画2557	D1	13P			区画2571	D3	11Q		
区画2544	D1	13Q			区画2558	D1	12P・Q, 13P	[台形]	6.3	区画2572	D3	11Q		
区画2545	D1	13P			区画2559	D1	12P・Q	台形	4.3	区画2573	D3	11Q		
区画2546	D1	13P・Q			区画2560	D1	12Q	台形	3.8	区画2574	D3	11Q		
区画2547	D1	13P			区画2561	D1	12Q	[真方形]	3.5	区画2575	D3	11Q		
区画2548	D1	13P・Q			区画2562	D1	12Q			区画2576	D3	10Q		
区画2549	D1	13Q			区画2563	D1	12P			区画2577	D3	10Q		
区画2550	D1	13P			区画2564	D1	12P・Q	[台形]	5.3	区画2578	D3	10Q		
区画2551	D1	13P・Q	長方形	4.4	区画2565	D1	12Q	台形	3.9	区画2579	D3	10Q		
区画2552	D1	12-13Q	長方形	10.1	区画2566	D1	12Q			区画2580	D3	9-10Q		

## 観察表

余用中道跡Ⅱ 中世 土器・陶器類觀察表										※泥人物: 石=石英、長=長石、骨=海綿骨針、漆=砂漠		
番号	地名	施設	分類	測量値 (cm)		地質	上層: 外面 下層: 内面	上層: 加工・調 整・整人面	制作技術 方式	使用範 囲	備考	
				幅	奥行							
1	青磁	施設未定	G級 12X25	PIS204 (SRB2)	1	8.0	8.0(7.7X8.2) 8.0(7.7X8.2)	WGT(10)8/1	(内側) 青磁體(厚相か)	土田 D - 1層*		
2	青磁	施設未定	E級 13X5	PIS211	1	14.8	8.0(7.5X6.2) 8.0(7.5X6.2)	WGT(8)8/1	(外) 青磁體(薄相)	土田 D - 1層 13世紀後半～14世紀前半		
3	青磁	施設未定	E級 13X4	PIS212	2	8.0	8.0(7.5X5.2) 8.0(7.5X5.2)	WGT(8)7/1	(外) 青磁體(薄相)	土田 D - 1層 13世紀後半～14世紀前半		
4	青磁	施設未定	G級 13X5	PIS213	-	8.0	オーバーラップ(5GVS-1) オーバーラップ(5GVS-1)	WGT(8)8/1	(内側) 青磁體(厚相)	土田 D - 1層 13世紀後半～14世紀前半		
5	瀬戸 生糸	施設未定	G級 11X17	PAD033 (SRB17)	1	11.0	8.0(10)8/2 8.0(10)8/2	瀬戸(2.5X3.0) 瀬戸(2.5X3.0)	WGT(8)8/1	(外) 青磁體	瀬戸 D - 1層 13世紀後半～14世紀前半	
6	青磁	施設未定	G級 12X17	PAD017 (SRB20)	-	8.0	オーバーラップ(5GVS-1) オーバーラップ(5GVS-1)	WGT(8)8/1	(内側) 青磁體(厚相)	古伊万里 14世紀後半～15世紀初頭		
7	白磁	施設未定	G級 7A14	PAD139	1	11.0	8.0(7.5X8.2) 8.0(7.5X8.2)	WGT(7.5X8.2) (内側) 青磁體	古伊万里 15世紀後半	古伊万里 15世紀後半		
8	陶器類	片口鉢	H級 10A105	PAD166	-	29.0	8.0(2.5X3.0) 8.0(2.5X3.0)	WGT(1)8/1	ロウ口成形	古伊万里 15世紀後半		
9	陶器類	片口鉢	H級 10A105	PAD74	1	8.0	8.0(NG)	8.0(白)(N)	ロウ口成形	古伊万里 14世紀末～15世紀前半		
10	陶器類	片口鉢	G級 RAD13	SE4113	5	8.0	8.0(NG)	8.0(白)(N)	ロウ口成形	古伊万里 14世紀末～15世紀前半		
11	陶器類	片口鉢	G級 RAD13	SE4113	-	12.2	8.0(NG)	8.0(白)(N)	ロウ口成形	古伊万里 14世紀末～15世紀前半		
12	美濃 吉野	施設未定	G級 RAD13	SE4113	5	8.0	8.0(10)8/2 8.0(10)8/2	8.0(白)(10YR8/2) 8.0(10)8/2	吉野(白)8/2 吉野(白)8/2	古伊万里 14世紀後半～15世紀初頭		
13	土師質 土器 (手づくね)	施設未定	E級 13X11	SK3102	2	13.0	8.0(10)8/2 8.0(10)8/2	WGT(10)8/2	手づくね	15世紀後半～16世紀初		
14	青磁	施設未定	G級 50025 (SRB17)	PAS005	2	6.6	8.0(7.5X7.1) 8.0(7.5X7.1)	WGT(7.5X7.1) WGT(7.5X7.1)	(内側) 抹難(厚相)	12世紀後半		
15	白磁	施設未定	G級 TA019	PAS073	1	9.0	8.0(2.5X8.1) 8.0(2.5X8.1)	WGT(2.5X8.1)	ロウ口成形	12世紀後半		
16	青磁	施設未定	G級 7A10	PAS073	1	9.0	オーバーラップ(5GVS-1) オーバーラップ(5GVS-1)	WGT(2.5X8.1) WGT(2.5X8.1)	(外) 青磁體(厚相)	土田 D - 1層 13世紀後半～14世紀前半		
17	青磁	施設未定	G級 7A10	SK4150	1	9.0	オーバーラップ(5GVS-1) オーバーラップ(5GVS-1)	WGT(2.5X8.1) WGT(2.5X8.1)	(内側) 青磁體(厚相)	土田 D - 1層 13世紀後半～14世紀初頭		
18	陶器類	片口鉢	H級 10A102	PAS671	2	25.4	8.0(1.5X7.5) 8.0(1.5X7.5)	WGT(1.5X7.5) WGT(1.5X7.5)	ロウ口成形	古伊万里 14世紀後半～15世紀後半		
19	土師質 土器 (手づくね)	施設未定	E級 2121	SD3010	1	10.0	8.0(10)8/2 8.0(10)8/2	WGT(10YR8/2) WGT(10YR8/2)	手づくね	15世紀後半～16世紀初		
20	土師質 土器 (手づくね)	施設未定	G級 7A010	SD4083	1	12.0	0.4	2.0	洗浄槽(10YR8/3) 洗浄槽(10YR8/3)	手づくね	(II) スヌ 15世紀後半	
21	瀬戸 小鉢	施設未定	E級 10A119	SK3003	1	9.0	8.0(5Y7-3) 8.0(5Y7-3)	WGT(5Y7-3)	ロウ口成形	古伊万里 15世紀後半～16世紀初		
22	瀬戸 高足盤	施設未定	E級 12Y18	SK3003	6	9.0	8.0(5Y7-3) 8.0(5Y7-3)	WGT(5Y7-3)	ロウ口成形	大須賀 15世紀後半～16世紀前半		
23	青磁	盤	G級 7A14	SK4091	2	8.0	オーバーラップ(2.5GVS-1) オーバーラップ(2.5GVS-1)	WGT(2.5X7.1) WGT(2.5X7.1)	(内) 運舟	14世紀後半		
24	白磁	白磁	H級 10A022	SK4093a	2	11.8	8.0(2.5X8.1) 8.0(2.5X8.1)	WGT(2.5X8.1)	手づくね	古伊万里 15世紀後半		
25	青磁	施設未定	H級 10A021	SK4093a	2	6.8	8.0(1.0)9/2 8.0(1.0)9/2	WGT(1.0)9/2 WGT(1.0)9/2	手づくね	12世紀後半 15世紀後半		
26	陶器類	盤	H級 10A112	SK4093a	2	8.0	8.0(NG)	8.0(白)(N)	手づくね 石・盆・骨・漆 (内) ナロ	古伊万里 14世紀後半～15世紀前半		
27	陶器類	片口鉢	H級 10A032	SK4093e	1	8.0	8.0(NG)	8.0(白)(N)	ロウ口成形 (内) 運舟一輪	古伊万里 14世紀後半～15世紀前半		
28	青磁	盤	H級 10A022	SK4093c	3	8.0	8.0(4.5)8/4 8.0(4.5)8/4	WGT(4.5)8/4 WGT(4.5)8/4	ナデ	15世紀後半		
29	陶器類	盤	H級 12A027	SK4723	2	8.0	8.0(M7) 8.0(M7)	WGT(M7) WGT(M7)	手づくね	古伊万里 15世紀後半		
30	陶器類	盤	H級 12A027 12A028	SK4723	2	8.0	8.0(M7) 8.0(M7)	WGT(M7) WGT(M7)	手づくね 石・盆・骨・漆 手づくね	古伊万里 15世紀後半		
31	青磁	酒滓桶	E級 10E16	謝洋場	N	8.0	8.0(10)7/2 8.0(10)7/2	WGT(10)7/2 WGT(10)7/2	(外) 酒滓による支撑	15世紀後半		
32	青磁	鍋連鎖	G級 7A14.1	N	8.0	8.0(1.0)7/2 8.0(1.0)7/2	WGT(1.0)7/2	WGT(1.0)7/2	(外) 鍋連鎖	土田 D - 1層 13世紀後半～14世紀前半		
33	青磁	豆皿	G級 TA019	N	8.0	8.0(2.5X7.1) 8.0(2.5X7.1)	WGT(2.5X7.1)	WGT(2.5X7.1)	(外) 豆皿	14世紀後半		
34	青磁	施設未定	H級 12A01	N	8.0	8.0(2.5X7.1) 8.0(2.5X7.1)	WGT(2.5X7.1)	WGT(2.5X7.1)	(内) 運舟	15世紀後半		
35	白磁	白磁	E級 10A122	-	8.0	9.0	8.0(5Y8-1) 8.0(5Y8-1)	WGT(5Y8-1) WGT(5Y8-1)	手づくね	古伊万里 15世紀後半		
36	白磁	碗	E級 12Y8	-	8.0	9.0	5.0	5.0(W)	WGT(5.0)	手づくね	古伊万里 16世紀後半	
37	瀬戸 天目茶碗	施設未定	G級 7A13.3	-	8.0	9.0	8.0(5Y7-3) 8.0(5Y7-3)	WGT(5Y7-3)	WGT(5Y7-3)	瀬戸 D - 1層 14世紀後半～1480年		
38	青磁	盤	E級 11A113	-	8.0	9.0	8.0(1.0)7/2 8.0(1.0)7/2	WGT(1.0)7/2	WGT(1.0)7/2	大須賀 15世紀後半		
39	土師質 土器 (手づくね)	施設未定	E級 13X20	-	8.0	10.0	8.0(10)8/2 8.0(10)8/2	WGT(10)8/2	WGT(10)8/2	必須器 15世紀後半～16世紀初		
40	土師質 土器 (手づくね)	施設未定	E級 11Y15	-	8.0	10.4	4.4	2.6	洗浄槽(10YR8/3) 洗浄槽(10YR8/3)	手づくね	必須器 15世紀後半～16世紀初	
41	陶器類	片口鉢	H級 10A111	-	8.0	-	8.0(NG)	8.0(NG)	ロウ口成形 (内) 運舟一輪	古伊万里 13世紀後半		
42	陶器類	盤	E級 21Y10	-	8.0	-	8.0(NG)	8.0(NG)	ロウ口成形	古伊万里 14世紀後半		
43	陶器類	（丁）盤	H級 12A013	-	8.0	36.0	8.0(NG)	8.0(NG)	手づくね	古伊万里 14世紀後半～15世紀初頭		
44	陶器類	（丁）盤	H級 12A016	-	8.0	-	8.0(NG)	8.0(NG)	手づくね	古伊万里 14世紀後半～14世紀初頭		

## 観察表

余川中道遺跡Ⅱ 中世 転用具観察表

報告番号	種類	素材	グリッド	通過	断面	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	鉄用		工具・鉄上に調査	工具・鉄上に調査	調査結果	備考
										上段 (mm)	下段 (mm)				
45	研削具	陶器	G14 RAD113	SK4113	I	83	73	20	126.23	50 (15YR7/4)	50 (15YR7/4)	石・長石・砂	研磨成形	(内) 摩耗	
46	研削具	陶器	E14 13Y4	SD3004	N' b	66	39	12	48.12	75 (5Y5/1)	75 (5Y5/1)	石・長石・砂	研磨成形	(外) 摩耗	
47	加工工具	陶器	美濃	SK3022	I	55	-	6	25.70	50 (5Y7/3)	50 (5Y7/2)	石 (15YR7/1)	石 (15YR7/1)	石 (15YR7/1)	ロウソク形 斜面から出し身台 (内) 摩耗

余川中道遺跡Ⅱ 中世 金属製品観察表

報告番号	素材	種別	地図	グリッド	通過	断面	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	鉄用		工具・鉄上に調査	工具・鉄上に調査	調査結果	備考
											上段 (mm)	下段 (mm)				
48	鉄	船底鉄錠	G14 7AD19	P4081	I	147	18	5	15.8	-	-	-	-	-	-	
49	鉄	板	G14 7AD19	P4081	I	120	4	4	1.3	-	-	-	-	-	-	
50	鉄	範	G14 8AD4	P4124 (SB16)	2	86	40	20	62.1	-	-	-	-	-	-	
51	鉄	六角	E14 10Z1	-	N' b	25	17	6	8.1	-	-	-	-	-	-	
52	鉄	中間部錠	G14 7AD19	-	N	63	16	17	71.8	-	-	-	-	-	-	

余川中道遺跡Ⅱ 中世 錢貨観察表

報告番号	種類	種別	上段 (mm)	下段 (mm)	地図	グリッド	通過	断面	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	鉄用		工具・鉄上に調査	工具・鉄上に調査	調査結果	備考	
													上段 (mm)	下段 (mm)					
53	元・近世	蓄券	-	-	E14 13Y11	SK3203	I	-	24.0	-	6.8	-	-	1.2	1.23	元・近世 (前編 1086年)	○印留めが有り。		
54	平安時代	行商	北東	995	K16 14Y16	-	-	-	1.9	24.5	24.4	5.5	5.6	1.5	3.12	-	-	-	
55	平安時代	行商	621	1	E14 14X16	-	-	-	1	24.5	24.5	7.0	7.0	1.1	2.85	-	-	-	

余川中道遺跡Ⅱ 中世 鋼冶関連遺物観察表

報告番号	種類	種別	上段 (mm)	下段 (mm)	地図	グリッド	通過	断面	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	鉄用		工具・鉄上に調査	工具・鉄上に調査	調査結果	備考
													上段 (mm)	下段 (mm)				
56	複合刀	E14 10Z6	-	-	-	-	-	-	11.7	10.1	7.1	666.77	-	-	-	-	-	
57	複合刀	E14 9Z22	-	-	N' a	-	-	-	12.4	12.7	5.1	1.003.28	-	-	-	-	-	
58	複合刀	E14 10Z11	-	-	-	-	-	-	9.6	8.0	3.7	261.36	-	-	-	-	-	
59	複合刀	E14 9Z21	-	-	N' a	-	-	-	11.4	9.7	5.3	409.97	-	-	-	-	-	
60	複合刀	E14 10Z1	-	-	N' a	-	-	-	9.1	9.8	3.5	273.29	-	-	-	-	-	
61	複合刀	E14 10Z11	-	-	-	-	-	-	8.5	8.0	2.4	242.48	-	-	-	-	-	
62	複合刀	E14 9Z21	-	-	N' a	-	-	-	9.2	6.5	2.7	169.54	-	-	-	-	-	
63	複合刀	E14 10Z11	-	-	-	-	-	-	8.2	6.3	2.5	123.80	-	-	-	-	-	
64	複合刀	E14 10Z1	-	-	N' a	-	-	-	7.6	6.4	2.0	113.20	-	-	-	-	-	
65	複合刀	E14 10Z1	-	-	N' a	-	-	-	7.9	7.1	3.1	213.66	-	-	-	-	-	
66	複合刀	E14 10Z1	-	-	N' a	-	-	-	7.6	6.2	1.8	103.66	-	-	-	-	-	
67	複合刀	E14 9Z21	-	-	N' a	-	-	-	7.9	5.2	2.0	63.66	-	-	-	-	-	
68	複合刀	G16 8A0422	-	-	-	-	-	-	13.8	7.1	3.1	171.45	-	-	-	-	-	
69	複合刀	G16 7A07	SK4097	1	-	-	-	-	10.0	9.1	3.4	295.58	-	-	-	-	-	
70	複合刀	G16 7A07	SK4097	1	-	-	-	-	10.1	7.0	3.8	193.29	-	-	-	-	-	
71	複合刀	G16 7A07	SK4097	1	-	-	-	-	7.4	5.9	2.0	101.47	-	-	-	-	-	
72	複合刀	G16 7A07	SK4097	1	-	-	-	-	7.7	6.0	2.3	123.66	-	-	-	-	-	
73	複合刀	G16 7A02	P4163	1	-	-	-	-	7.2	4.7	2.6	72.01	-	-	-	-	-	
74	複合刀	H16 10A811	P4540	1	-	-	-	-	4.7	4.5	1.5	22.69	-	-	-	-	-	
75	複合刀	H16 10A023	SK4673	3	-	-	-	-	7.31	5.2	1.9	97.05	-	-	-	-	-	
76	複合刀	H16 7A02	P4151	1	-	-	-	-	5.5	4.8	2.3	63.13	-	-	-	-	-	
77	複合刀	H16 10A023	SK4673	3	-	-	-	-	5.7	5.5	1.9	70.22	-	-	-	-	-	
78	複合刀	H16 10A25	SK4645	2	-	-	-	-	4.5	5.2	2.5	41.25	-	-	-	-	-	
79	鉄	E14 10Z1	-	-	N' a	-	-	-	8.5	8.5	3.0	466.25	-	-	-	-	-	
80	鉄	E14 10Z11	-	-	N' b	-	-	-	8.5	9.3	3.4	533.39	-	-	-	-	-	
81	鉄	E14 10Z6	-	-	N' a	-	-	-	6.5	9.2	3.5	233.07	-	-	-	-	-	
82	鉄	E14 9Z21	-	-	N' a	-	-	-	6.8	5.7	3.5	131.01	-	-	-	-	-	
83	鉄	E14 9Z21	-	-	N' b	-	-	-	11.0	7.5	3.4	255.01	-	-	-	-	-	
84	鉄	E14 10Z1	-	-	N' a	-	-	-	4.9	7.6	3.6	116.31	-	-	-	-	-	
85	鉄	E14 9Z21	-	-	N' a	-	-	-	11.4	9.1	3.4	320.65	-	-	-	-	-	
86	複合刀	E14 10Z17	-	-	N' b	-	-	-	8.7	8.8	5.7	390.47	-	-	-	-	-	

余川中道遺跡Ⅱ 中世 石製品観察表

報告番号	分類	地図	グリッド	通過	断面	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	鉄用		工具・鉄上に調査	工具・鉄上に調査	調査結果	備考	
										A	B					
87	砥石	動植物	H16 10A05	-	N' b	90	29	6	121.0	-	-	上海・下平次	-	-	仕上研、電流走る可能性あり。	
88	砥石	凝灰岩	E14 13Y1	SK3102	I	48	40	8	16.9	-	-	側面の刃がぼろい。	-	-	-	
89	砥石	凝灰岩	E14 9Z21	-	N' b	103	75	27	233.7	-	-	表面の刃がぼろい。	-	-	-	
90	砥石	凝灰岩	E14 10Z1	SK4113	N' a	82	32	29	135.6	-	-	表面が削れ、表面面に削条痕。	-	-	-	
91	砥石	凝灰岩	H16 12A07	SK4723	I	57	26	21	49.0	-	-	砥石は5個。	-	-	-	
92	砥石	動植物	H16 10A021	SK4603	I	32	32	13	12.8	-	-	右端が削れ。	-	-	-	
93	石鉄	砂岩	G14 RAD113	IP4153	2	245	147	100	3478.0	1/4次	-	内部熱熱、付着物あり。 ジグ取付内熱熱。	-	-	-	
94	鉄	E14 13Y1	P4087 (SH11)	3	14.9	5.4	4.7	0.7	8.0	0.7	-	-	-	-	-	内熱・外熱・非熱。

観察表

余用中道遺跡Ⅱ 中世 柱根観察表

番号	種類	地区	グリッド	遺構	柱位	計測値(cm)	木取引	整理番号	細種	断面形		高さ	備考
										長さ	幅		
95	柱根	E区	12Y17	P3054	1	53.2	9.5	8.8	芯	49	コナラ属コナラ属	多角形	実底
96	柱根	E区	12Y22	P3081	1	62.6	15.0	13.3	芯丸	1	コナラ属コナラ属	多角形	半丸
97	柱根	E区	13Y2	P3109 (S811)	1	17.7	10.0	6.4	半円脚	61	カツラ属	半円脚	半丸
99	柱根	E区	13X5	P3208 (S812)	4	59.2	15.8	11.7	芯	9	ナシ科	多角形	凸状
100	柱根	E区	13X6	P3209	1	53.6	10.2	8.5	芯	2	コナラ属コナラ属	多角形	半丸
101	柱根	E区	13X10	P3202 (S812)	2	34.0	19.4	13.7	芯丸	4	ヤナギ属	多角形	凸状
102	柱根	E区	13X4	P3278 (S808)	2~3	118.0	17.0	14.8	芯	25	コナラ属コナラ属	多角形	実底
103	柱根	E区	12Y23	P3287	-	44.0	14.1	13.3	芯丸	8	コナラ属コナラ属	円形	凸状
104	柱根	E区	13X9	P3291 (S811)	1~2	93.8	23.3	24.0	芯	26	コナラ属コナラ属	多角形	実底
105	柱根	E区	14X17	P3303	-	16.7	7.0	6.2	芯	12	コナラ属コナラ属	多角形	凸状
106	柱根	E区	14X11	P3311	1~2	48.5	17.7	13.4	芯丸	3	ナシ科	円形	実底
107	柱根	E区	14X11~12	P3320	-	56.5	25.0	21.0	芯丸	14	モクレン属	多角形	凸状
108	柱根	E区	14X16	P3321	1~2	42.0	12.8	7.2	芯	7	コナラ属コナラ属	多角形	実底
109	柱根	E区	14X10	P3443	1	20.1	11.2	3.3	半円脚	13	コナラ属コナラ属	半円脚	半丸
110	柱根	E区	13X11	P3444 (S802)	-	72.3	23.2	24.5	芯	21	コナラ属コナラ属	多角形	実底
111	柱根	E区	14X16	P3503	-	65.0	22.2	22.5	芯丸	22	メヌマ	円形	半丸
112	柱根	E区	12X24	P3442	-	33.4	9.0	8.2	芯	10	カエデ属	多角形	実底
113	柱根	E区	12X9	P3479 (S822)	1	33.0	10.0	7.9	芯	6	カエデ属	多角形	実底
114	柱根	E区	12Y23	P3479	1~4	41.8	18.0	13.8	芯丸	5	コナラ属コナラ属	円形	実底
115	柱根	E区	13X4	P3498	-	24.6	6.0	2.7	芯ミカン削	11	マツサク	多角形	実底
116	柱根か	E区	12Y18	P3511	1	13.1	4.2	7.0	芯ミカン削	68	コナラ属コナラ属	円形	実底
117	柱根	H区	11AD11	P4776	1	15.5	11.5	8.0	芯ミカン削	36	スギ	多角形	実底

余用中道遺跡Ⅱ 中世 木製品観察表

番号	種類	地区	グリッド	遺構	柱位	計測値(cm)	木取引	整理番号	細種	断面形		高さ	備考
										長さ	幅		
98	柳枝木製品	E区	13Y18	P3108 (S811)	1	41.0	6.0	3.9	無材料	62	クルミ属	上・下端欠	
118	杭	E区	13Y21	P3191	-	28.0	3.3	3.5	芯丸木柄	64	ヒノキ	円形	
119	杭	E区	13Y21	P3192 (E11)	-	34.0	7.0	7.0	芯丸木柄	59	スギ	円形	
120	杭	E区	13Y21	P3193	-	25.5	5.0	5.0	芯丸木柄	63	ヒノキ	円形	
121	杭	E区	14X3	P3240 (S82575W)	-	37.6	4.8	4.0	芯丸木柄	47	サクラ属	上・下端欠	
122	杭	E区	12W19	Vc	3	63.8	6.4	6.2	芯丸木柄	65	スギ	上・下端欠	
123	板木木製品	E区	14W10	S3020	3	27.7	8.9	0.9	板	60	ネズコ	上端欠	
124	板木木製品	E区	14X6	S3020	3	18.7	3.4	1.1	板	65	ヒノキ	下端欠	
125	曲物板木	E区	14W10	S3020	3	11.6	3.8	0.4	板	70	ネズコ	一部のみ	
126	板木木製品	E区	12Y18	S3003	-	29.8	6.5	1.2	板	53	スギ	上端欠	
127	板木木製品	E区	12Y18	S3003	1	20.7	5.6	1.8	板	66	ネズコ	1/2欠	
128	板木木製品	E区	12Y19	S3003	-	17.1	4.3	0.9	板	69	ネズコ	1/2欠?	
129	柳枝木製品	E区	12Y18	S3049	2	32.0	3.2	3.2	板	51	スギ	上端欠	
130	被綿	G区	RAD13	S364113	6	34.5	4.8	4.0	芯丸木柄	31	クリ	上・下端欠	
131	被綿	G区	RAD13	S364113	6	62.0	12.9	10.7	芯丸木柄	28	クリ	上・下端欠	
132	被綿	G区	RAD13	S364113	6	55.9	8.4	6.3	芯丸木柄	27	コナラ属コナラ属	上・下端欠	

余用中道遺跡Ⅱ 古代 土器観察表

番号	分類	地区	グリッド	遺構	柱位	計測値(cm)	形状	上部・下部	外縁	内縁	上部・下部	側面	断面	使用範囲	付石物	備考	
133	土器	E区	13A14	3010	Vc	5.6	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	(内)ススキ	
134	土器	H区	12AD27	-	Nv	3	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	(外)復原:13.6cm 堆疊地盤	
135	土器	H区	11AD18	-	Nv	3	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	(内)摩拭	
136	土器	H区	11AD16	-	Nv	3	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	(外)摩拭:14.4cm	
137	土器	H区	12AD	-	Nv	3	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	(外)摩拭:15.1cm	
138	土器	H区	11AD16	-	Nv	6.0	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]		
139	土器	H区	12AD9	-	Nv	13.4	9.4	3.8	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	(高台)摩拭
140	土器	H区	11AD17	-	Nv	8.1	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]		
141	土器	H区	12AD2	-	Nv	13.8	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]		
142	土器	H区	10AD21	-	Vn	13.6	9.1	3.5	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	(外)モザイク (底内)白・青
143	土器	H区	11AD22	-	Nv	12.0	8.5	3.1	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	(底内)白・青
144	土器	H区	11AD18	-	Nv	8.4	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	(底内)白・青	
145	土器	H区	10AD11	-	Vn	7.3	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	(底内)白・青	
146	土器	H区	11AD25	-	Nv	17.6	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	(外)モザイク (底内)白・青	
147	土器	H区	11AD25	-	Nv	19.5	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	[口縁]	(外)モザイク	

余川中道遺跡Ⅱ 古墳時代 土器観察表(1)

番号	種類	形態	分類	表面	底面	直径	高さ	底径	測定値(cm)			色調	調査	付着物	備考	
									横	縦	幅					
148	土師器	高杯	A1	SK	3605	12W	11	1	17.4			■灰・黄褐色(10YR7/4) ■灰・黄褐色(10YR7/3)	土ガキ	土ガキ		
149	土師器	高杯	B2	SK	3605	12W	11	1	16.8	23.5		■灰・黄褐色(10YR7/3)	ハケメ	ハケメ	(外) 黄 (内) コサ	灰褐色、約23.5mm 底下部外観、赤化。
150	土師器	高杯	A	SK	3606	12W	25	1	17.7			■灰・黄褐色(10YR7/6) ■灰・黄褐色(7.5YR8/4)	土ガキ	土ガキ		
151	土師器	高杯	B	SK	3606	12W	25	1	17.7			■灰・黄褐色(7.5YR8/4) ■灰・黄褐色(7.5YR8/3)	ミガキ	ハテメ		褐色によりやや赤化。
152	土師器	大切替	D3	SK	3606	12W	25	1	14.1			淡褐色(7.5YR8/4) ■灰・黄褐色(10YR7/3)	ミガキ	ミガキ	(外) 青いスヌ	
153	土師器	高	B	SK	3606	12W	25	1	16.6			■灰・黄褐色(10YR7/6) ■灰・黄褐色(7.5YR8/3)	ミガキ	ミガキ	(内) やや摩耗	
154	土師器	高	B	SD	3602	12W	22	2	16.8			■灰・黄褐色(10YR6/2) ■灰・黄褐色(10YR6/1)	ハケメ	ハケメ	(外) スヌ (内) 青いコダマ	褐色。
155	土師器	高杯	I	SD	3602	12W	23	4	17.0			■灰・黄褐色(10YR7/6) ■灰・黄褐色(7.5YR8/3)	ミガキ	ミガキ		褐色のみ。
156	土師器	高杯	SD	3602	12W	22	3	17.0	24.4	20.6		■灰・黄褐色(10YR6/3) ■灰・黄褐色(7.5YR8/3)	ミガキ	ミガキ	(外) パンド状スヌ (内) コガなし	褐色に約2.3mm 赤化に使用。
157	土師器	高杯	A3	SD	3603	13W	12	2	17.4	14.1	11.8	■灰・黄褐色(10YR6/3) ■灰・黄褐色(7.5YR7/3)	ミガキ	ミガキ	(外) 黄 (内) 摩耗	黒斑の良好性。
158	土師器	高杯	A1	SD	3603	13W	9	2	19.1	15.4	13.9	■灰・黄褐色(7.5YR7/4) ■灰・黄褐色(10YR8/4)	ミガキ	ミガキ	(外) 黄 (内) 摩耗	
159	土師器	高杯	A2	SD	3603	13W	8	2	19.0	15.1	13.1	■灰・黄褐色(7.5YR7/4) ■灰・黄褐色(7.5YR5/2)	ミガキ	ミガキ	(外) 黄 (内) 摩耗	褐色。
160	土師器	高杯	A1	SD	3603	13W	9	2	17			■灰・黄褐色(7.5YR7/4) ■灰・黄褐色(7.5YR7/3)	ミガキ	ミガキ		
161	土師器	高杯	A1	SD	3603	12W	16	2	17.3			■灰・黄褐色(7.5YR7/4) ■灰・黄褐色(7.5YR7/3)	ミガキ	ミガキ	(外) 調査	
162	土師器	高杯	A1	SD	3603	12W	12	1-2	17.2			淡褐色(10YR8/3) 淡褐色(10YR8/4)	ミガキ	ミガキ		
163	土師器	高杯	A1	SD	3603	12W	2	2	17.7			■灰・黄褐色(7.5YR7/6) ■灰・黄褐色(7.5YR7/4)	ミガキ	ミガキ	褐色により赤化。	
164	土師器	高杯	A1	SD	3603	12W	25	2	17.8			■灰・黄褐色(7.5YR7/4) ■灰・黄褐色(7.5YR8/4)	ミガキ	ミガキ		
165	土師器	高杯	A1	SD	3603	12W	25	2	18.2			■灰・黄褐色(7.5YR7/4) ■灰・黄褐色(7.5YR8/4)	ミガキ	ミガキ	褐色により赤化。 (外) 摩耗	
166	土師器	高杯	A1	SD	3603	12W	13	1	18.3			■灰・黄褐色(10YR7/3) ■灰・黄褐色(10YR7/2)	ミガキ	ミガキ	褐色により赤化。 軽度に摩耗か。	褐色により一層赤化。
167	土師器	高杯	A1	SD	3603	12W	25	2	18.6			■灰・黄褐色(10YR7/4) ■灰・黄褐色(10YR7/6)	ハケメ	ハケメ		
168	土師器	高杯	A1	SD	3603	12W	8	2	18.7			■灰・黄褐色(10YR6/3) ■灰・黄褐色(10YR7/3)	ミガキ	ミガキ	褐色により赤化。 (外) 黄 (内) 摩耗	
169	土師器	高杯	A1	SD	3603	12W	16	2	20.4			■灰・黄褐色(10YR7/4) ■灰・黄褐色(10YR7/3)	ミガキ	ミガキ	(外) 黄 (内) 摩耗	(外) 調査
170	土師器	高杯	A1	SD	3603	12W	21	2	16.8			■灰・黄褐色(10YR7/4) ■灰・黄褐色(10YR7/3)	ミガキ	ミガキ		褐色。
171	土師器	高杯	E	SD	3603	13W	8	2	18.2			淡褐色(10YR6/2) ■灰・黄褐色(10YR7/3)	ミガキ	ミガキ	(外) 黄 (内) 摩耗	
172	土師器	高杯	E	SD	3603	12W	25	2	18.2			■灰・黄褐色(7.5YR6/6) ■灰・黄褐色(10YR5/3)	ミガキ	ミガキ	(外) 黄 (内) 摩耗	褐色により赤化。 (外) 摩耗
173	土師器	高杯	A2	SD	3603	13W	11	2	12.2			■灰・黄褐色(10YR6/3) ■灰・黄褐色(10YR7/3)	ミガキ	ミガキ		小堅。
174	土師器	高杯	C	SD	3603	12W	25	2	20.8			■灰・黄褐色(10YR6/3) ■灰・黄褐色(10YR6/2)	ミガキ	ミガキ		褐色により赤化。
175	土師器	高杯	C	SD	3603	13W	8	2	22.9			■灰・黄褐色(10YR7/4) ■灰・黄褐色(10YR7/3)	ミガキ	ミガキ	(外) 黄 (内) 摩耗	(外) 調査
176	土師器	高杯	III	SD	3603	12W	18	2	16.2			■灰・黄褐色(7.5YR7/6) ■灰・黄褐色(7.5YR7/4)	ミガキ	ミガキ		褐色により赤化。
177	土師器	高杯	I	SD	3603	12W	21	2	16.8			■灰・黄褐色(10YR7/4) ■灰・黄褐色(10YR7/3)	ミガキ	ミガキ		褐色により赤化。
178	土師器	高杯	I	SD	3603	12W	15	2				■灰・黄褐色(10YR6/2) ■灰・黄褐色(10YR6/1)	ミガキ	ミガキ	(外) 黄 (内) 摩耗	褐色により赤化。
179	土師器	高杯	II	SD	3603	12W	9	2				■灰・黄褐色(10YR7/4) ■灰・黄褐色(10YR7/3)	ミガキ	ミガキ	(外) 黄 (内) 摩耗	
180	土師器	高杯	II	SD	3603	12W	21	2				■灰・黄褐色(10YR7/4) ■灰・黄褐色(7.5YR7/4)	ミガキ	ミガキ	(外) 黄 (内) 摩耗	
181	土師器	杯	C1	SD	3603	12W	13	2	12.6			■灰・黄褐色(7.5YR7/6) ■灰・黄褐色(7.5YR7/4)	ミガキ	ミガキ	(外) 黄 (内) 摩耗	(外) 摩耗跡
182	土師器	杯	SD	3603	12W	3	2	18.8	7		■灰・黄褐色(7.5YR7/6) ■灰・黄褐色(7.5YR7/4)	ミガキ	ミガキ	(外) 黄 (内) 摩耗	褐色により、削下部剥離。	
183	土師器	杯	SD	3603	13W	15	2	13.4			淡褐色(10YR6/2) ■灰・黄褐色(10YR6/1)	ミガキ	ミガキ	(外) 黄 (内) 摩耗	赤化により使用。	
184	土師器	大切替	A	SD	3603	12W	24	2	15			■灰・黄褐色(10YR7/3) ■灰・黄褐色(10YR7/2)	ミガキ	ミガキ		
185	土師器	大切替	A	SD	3603	12W	18	2	16.5			■灰・黄褐色(10YR6/4) ■灰・黄褐色(10YR6/3)	ミガキ	ナゴ		褐色により赤化。
186	土師器	大切替	D2	SD	3603	12W	25	2	17.4			■灰・黄褐色(10YR7/3) ■灰・黄褐色(10YR7/2)	ミガキ	ミガキ	(外) 摩耗	
187	土師器	大切替	D3	SD	3603	12W	25	5	15.4			■灰・黄褐色(10YR7/3) ■灰・黄褐色(10YR7/2)	(1) ハケメ (2) ハテメ (3) ハテメ	(1) ミガキ (2) ミガキ (3) ミガキ	(1) ミガキ (2) ミガキ (3) ミガキ	(1) 緑斑と黒斑の間に 軽度な剥離がある。
188	土師器	大切替	D4	SD	3603	12W	25	5	16.2	35.5	5.8	■灰・黄褐色(10YR7/3) ■灰・黄褐色(10YR7/2)	(1) ミガキ (2) ハテメ (3) ハテメ	(1) ミガキ (2) ハテメ (3) ハテメ	(1) ミガキ (2) ハテメ (3) ハテメ	容積: 約 27.0L
189	土師器	特大杯	SD	3603	12W	21	2	23.3	6.2	11.5	■灰・黄褐色(10YR7/4) ■灰・黄褐色(10YR7/3)	(1) ミガキ (2) ハテメ (3) ハテメ	(1) ミガキ (2) ハテメ (3) ハテメ	(1) ミガキ (2) ハテメ (3) ハテメ	復元困難 容積: 約 60L	
190	土師器	特大杯	SD	3603	12W	21	1	Vb	23	5.8	■灰・黄褐色(10YR7/4) ■灰・黄褐色(10YR7/3)	(1) ミガキ (2) ハテメ (3) ハテメ	(1) ミガキ (2) ハテメ (3) ハテメ	(1) ミガキ (2) ハテメ (3) ハテメ	容積: 約 57 L	

## 観察表

余川中道遺跡Ⅱ 古墳時代 土器観察表(2)

番号	種類	形態	分類	種別	番号	直径	厚さ	内面	外縁	内縁	測定(cm)		色調	調査	付石物	備考		
											大	小	部位	上縁	外縁	下縁	内縁	
191	土器部	鉢	E3	SD	3603	13V	3	V2 b	11.2	11.2	10.9	10.9	10.9	10.9	10.9	10.9	(11) ハケメ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ	
192	土器部	鉢	E2	SD	3603	13W	11	2	11	11.2	10.9	10.9	10.9	10.9	10.9	10.9	(11) ハケメ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ	
193	土器部	小鉢形	G	SD	3603	13V	3	2	11.2	11.2	10.9	10.9	10.9	10.9	10.9	10.9	(11) ハケメ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ	
194	土器部	小鉢形	G	SD	3603	12X	16	2	9	8.7	8.7	8.7	8.7	8.7	8.7	8.7	(11) ハケメ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ	
195	土器部	小鉢形	G	SD	3603	13W	12	2	9.8	10.9	10.9	10.9	10.9	10.9	10.9	(11) ハケメ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ		
196	土器部	小鉢形	I	SD	3603	13V	17	2	8.2	7.8	7.8	7.8	7.8	7.8	7.8	7.8	(11) ハケメ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ	
197	土器部	(小鉢形)	K	SD	3603	13W	4	2	11.2	11.2	10.9	10.9	10.9	10.9	10.9	10.9	(11) ハケメ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ	
198	土器部	鉢	H	SD	3603	12W	25	2	17.6	17.6	17.6	17.6	17.6	17.6	17.6	17.6	(11) ハケメ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ	
199	土器部	鉢	B	SD	3603	13V	8	1	14.6	14.6	14.6	14.6	14.6	14.6	14.6	14.6	(11) ハケメ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ	
200	土器部	鉢	B	SD	3603	13V	8	1	16.9	16.9	16.9	16.9	16.9	16.9	16.9	16.9	(11) ハケメ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ	
201	土器部	鉢	B	SD	3603	13V	8	1	17	17	17	17	17	17	17	17	(11) ハケメ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ	
202	土器部	鉢	B	SD	3603	12W	29	2	17.4	17.4	17.4	17.4	17.4	17.4	17.4	17.4	(11) ハケメ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ	
203	土器部	鉢	B	SD	3603	13V	8	1	17.2	17.2	17.2	17.2	17.2	17.2	17.2	17.2	(11) ハケメ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ	
204	土器部	(鉢)	B	SD	3603	13W	25	2	18.3	24.2	24.2	24.2	24.2	24.2	24.2	24.2	(11) ハケメ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ	
205	土器部	鉢	B	SD	3603	13V	8	1	16.7	16.7	16.7	16.7	16.7	16.7	16.7	16.7	(11) ハケメ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ	
206	土器部	鉢	B	SD	3603	13V	8	1	18.3	26.5	26.5	26.5	26.5	26.5	26.5	26.5	(11) ハケメ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ	
207	土器部	鉢	B	SD	3603	13V	7	3	18.1	18.1	18.1	18.1	18.1	18.1	18.1	18.1	(11) ハケメ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ	
208	土器部	鉢	B	SD	3603	13W	13	2	20.5	20.5	20.5	20.5	20.5	20.5	20.5	20.5	(11) ハケメ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ	
209	土器部	(小鉢形)	K	SD	3605	12W	16	1	5.7	5.7	5.7	5.7	5.7	5.7	5.7	5.7	(11) ハケメ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ	
210	土器部	高杯	A1	SD	3606	12W	16	1	17.2	17.2	17.2	17.2	17.2	17.2	17.2	17.2	(11) ハケメ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ	
211	土器部	高杯	A2	SD	3606	12W	21	1	17.2	17.2	17.2	17.2	17.2	17.2	17.2	17.2	(11) ハケメ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ	
212	土器部	高杯	B	SD	3606	12W	21	1	19.2	19.2	19.2	19.2	19.2	19.2	19.2	19.2	(11) ハケメ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ	
213	土器部	高杯	A1	SD	3614	13V	8	1	20	12.9	12.9	12.9	12.9	12.9	12.9	12.9	12.9	(11) ハケメ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ
214	土器部	高杯	A1	SD	3650	13X	14	2	16.4	13.6	13.6	13.6	13.6	13.6	13.6	13.6	(11) ハケメ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ	
215	土器部	高杯	A1	SD	3650	12X	10	1	17.1	13.6	13.6	13.6	13.6	13.6	13.6	13.6	(11) ハケメ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ	
216	土器部	高杯	A1	SD	3650	13X	9	2	16.9	13.6	13.6	13.6	13.6	13.6	13.6	13.6	(11) ハケメ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ	
217	土器部	高杯	A1	SD	3650	13X	14	2	16.9	14.5	14.5	14.5	14.5	14.5	14.5	14.5	(11) ハケメ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ	
218	土器部	高杯	A1	SD	3650	13X	14	2	16.9	13.6	13.6	13.6	13.6	13.6	13.6	13.6	(11) ハケメ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ	
219	土器部	高杯	A1	SD	3650	13X	14	2	16.7	13.8	13.8	13.8	13.8	13.8	13.8	13.8	(11) ハケメ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ	
220	土器部	高杯	A1	SD	3650	13X	15	2	16.7	13.9	13.9	13.9	13.9	13.9	13.9	13.9	(11) ハケメ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ	
221	土器部	高杯	A1	SD	3650	13X	15	2	17.7	14.6	14.6	14.6	14.6	14.6	14.6	14.6	(11) ハケメ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ	
222	土器部	高杯	A1	SD	3650	13X	14	2	17.8	14.2	14.2	14.2	14.2	14.2	14.2	14.2	(11) ハケメ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ	
223	土器部	高杯	A1	SD	3650	13X	10	2	19.1	19.1	19.1	19.1	19.1	19.1	19.1	19.1	(11) ハケメ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ	
224	土器部	高杯	A1	SD	3650	12W	8	2	18.1	13.3	13.3	13.3	13.3	13.3	13.3	13.3	(11) ハケメ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ	
225	土器部	高杯	I	SD	3650	13W	19	3	11.2	11.2	11.2	11.2	11.2	11.2	11.2	11.2	(11) ハケメ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ	
226	土器部	高杯	A2	SD	3650	13X	14	2	19.8	16.4	16.4	16.4	16.4	16.4	16.4	16.4	(11) ハケメ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ	
227	土器部	高杯	A2	SD	3650	13X	14	2	19.9	17.5	16.1	16.1	16.1	16.1	16.1	16.1	(11) ハケメ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ	
228	土器部	高杯	A2	SD	3650	13X	14	2	22.3	17.5	17.5	17.5	17.5	17.5	17.5	17.5	(11) ハケメ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ	
229	土器部	高杯	C	SD	3650	13X	10	2	20.3	17	16.1	16.1	16.1	16.1	16.1	16.1	(11) ハケメ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ	
230	土器部	高杯	A1	SD	3650	13V	1	2	14.9	14.9	14.9	14.9	14.9	14.9	14.9	14.9	(11) ハケメ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ →ミガキ	

余川中道遺跡Ⅱ 古墳時代 土器観察表(3)

番号	種類	基盤	縦様	分類	種類	番号	大	小	部位	目録	基盤	縦様	測定値(cm)		色調	調査	付石物	備考
													上段	下段	外面	内面		
231	土器部	高杯	A1	SD	3650	13X	5	10	3	16.4			灰褐色(10YR6/2)	灰褐色(10YR6/2)	ミガキ	ミガキ	(外)スヌ	
232	土器部	高杯	A1	SD	3650	13X	5	12	17.1				灰褐色(10YR6/2)	灰褐色(10YR6/2)	ミガキ	ミガキ	(外) 中や細	
233	土器部	高杯	A1	SD	3650	13X	5	12	17.3				灰褐色(10YR6/2)	灰褐色(10YR6/2)	ハケメ	ミガキ	(外) 深いスヌ	褐色により、やや赤化。
234	土器部	高杯	A1	SD	3650	13X	5	12	19.2				灰褐色(10YR6/2)	灰褐色(10YR6/2)	ミガキ	ミガキ	(外) 深いスヌ	褐色による赤化。
235	土器部	高杯	A2	SD	3650	13X	5	12	18.5				灰褐色(10YR6/2)	灰褐色(10YR6/2)	ミガキ	ミガキ	(外) 深いスヌ	
236	土器部	高杯	A2	SD	3650	13X	5	12	19.2				灰褐色(7.5YR6/4)	灰褐色(7.5YR6/4)	ミガキ	ミガキ	(外) 薄	深に成る。
237	土器部	高杯	A1	SD	3650	13X	10	12	20.1				灰褐色(10YR6/2)	灰褐色(10YR6/2)	ミガキ	ミガキ	(外)スヌ	二次成るによる赤化。
238	土器部	高杯	D II	SD	3650	13X	5	12	14	10.7			灰褐色(10YR6/4)	灰褐色(10YR6/4)	ミガキ	ミガキ	(外)スヌ	褐色が濃くなる。
239	土器部	高杯	E	SD	3650	13W	19	23	5	17.2			灰褐色(10YR6/4)	灰褐色(10YR6/4)	ミガキ	ミガキ	(外) 深ナメ	
240	土器部	高杯	II	SD	3650	13X	5	2					灰褐色(7.5YR6/4)	灰褐色(7.5YR6/4)	ミガキ	ミガキ	褐色のみ	褐色のみで、
241	土器部	高杯	II	SD	3650	13X	5	2					灰褐色(10YR6/2)	灰褐色(10YR6/2)	ミガキ	ミガキ	褐色のみ	褐色のみで、
242	土器部	高杯	II	SD	3650	13X	10	2					灰褐色(7.5YR6/4)	灰褐色(7.5YR6/4)	ミガキ	ミガキ	褐色のみ	褐色のみで、
243	土器部	高杯	II	SD	3650	13X	18	3					灰褐色(10YR6/2)	灰褐色(10YR6/2)	ミガキ	ミガキ	褐色のみ	褐色のみで、
244	土器部	高杯	II	SD	3650	13X	10	1					灰褐色(7.5YR6/4)	灰褐色(7.5YR6/4)	ミガキ	ミガキ	褐色のみ	褐色のみで、
245	土器部	高杯	II	SD	3650	13X	14	2					灰褐色(7.5YR6/4)	灰褐色(7.5YR6/4)	ミガキ	ミガキ	褐色のみ	褐色のみで、
246	土器部	高杯	F II	SD	3650	13X	12	20	14.2	15.2	11.7		灰褐色(7.5YR6/4)	灰褐色(7.5YR6/4)	ミガキ	ミガキ	(外)スヌ	褐色のみで、
247	土器部	高杯	F II	SD	3650	13X	14	2	14.1	16.2	10.8		灰褐色(10YR6/2)	灰褐色(10YR6/2)	ミガキ	ミガキ	(外)スヌ	褐色のみは一部らせん状に成る。
248	土器部	高杯	F II	SD	3650	13X	9	2	12.2	17.2	11.4		灰褐色(10YR6/2)	灰褐色(10YR6/2)	ミガキ	ミガキ	褐色のみ	褐色のみで、
249	土器部	高杯	F	SD	3650	13X	4	20	15	14.5			灰褐色(10YR6/2)	灰褐色(10YR6/2)	ミガキ	ミガキ	(外)スヌ	褐色により化粧成る。
250	土器部	高杯	F	SD	3650	13X	4	2	12.9				灰褐色(10YR6/2)	灰褐色(10YR6/2)	ミガキ	ミガキ	(外)スヌ	褐色により化粧成る。
251	土器部	高杯	F	SD	3650	13X	4	2	16.1				灰褐色(10YR6/2)	灰褐色(10YR6/2)	ミガキ	ミガキ	(外)スヌ	褐色により化粧成る。
252	土器部	高杯	A	SD	3650	12Y	17	2	8.7				灰褐色(10YR6/2)	灰褐色(10YR6/2)	ミガキ	ミガキ	小断面	
253	土器部 (高杯)	A	SD	3650	13X	17	1	11.2	5.7	3.8			灰褐色(7.5YR6/4)	灰褐色(7.5YR6/4)	ミガキ	ミガキ	(外)スヌ	褐色により化粧成る。
254	土器部	杯	B	SD	3650	13W	23	3	14.1	5.6			灰褐色(7.5YR6/4)	灰褐色(7.5YR6/4)	ミガキ	ミガキ		褐色により、やや赤化。
255	土器部 (高杯)	B	SD	3650	13X	25	3	14.2	6.3	3.8			灰褐色(10YR6/2)	灰褐色(10YR6/2)	ミガキ	ミガキ		褐色により化粧成る。
256	土器部	杯	SD	3650	13X	14	2	15.4					灰褐色(10YR6/2)	灰褐色(10YR6/2)	ミガキ	ミガキ	(外)スヌ	褐色により化粧成る。
257	土器部	杯	C1	SD	3650	13X	13	1	9.9	5.3			灰褐色(10YR6/2)	灰褐色(10YR6/2)	ミガキ	ミガキ	他の杯 C1 加り、身が細く。	
258	土器部	杯	C1	SD	3650	13X	22	3	11.0	7			灰褐色(10YR6/2)	灰褐色(10YR6/2)	ミガキ	ミガキ		他の杯 C1 加り、身が細く。
259	土器部	杯	C1	SD	3650	13W	19	3	12				灰褐色(10YR6/2)	灰褐色(10YR6/2)	ミガキ	ミガキ		黒闇の残存良好。
260	土器部	杯	C1	SD	3650	13X	10	2	11.5	4.4			灰褐色(10YR6/2)	灰褐色(10YR6/2)	ミガキ	ミガキ	他の杯 C1 加り、外壁剥離。	
261	土器部	杯	C1	SD	3650	13X	10	2	11	5.6			灰褐色(10YR6/2)	灰褐色(10YR6/2)	ミガキ	ミガキ		
262	土器部	杯	C1	SD	3650	13X	5	2	12.7	4.8			灰褐色(7.5YR6/4)	灰褐色(7.5YR6/4)	ミガキ	ミガキ	(外)スヌ	褐色により化粧成る。
263	土器部	杯	C1	SD	3650	13X	5	2	13.1	5.9			灰褐色(10YR6/2)	灰褐色(10YR6/2)	ミガキ	ミガキ	黒闇の残存良好。	
264	土器部	杯	C1	SD	3650	13Y	1	2	12.5	5.4			灰褐色(10YR6/2)	灰褐色(10YR6/2)	ミガキ	ミガキ	黒闇の残存良好。	
265	土器部	杯	C1	SD	3650	13X	18	4	12.7				灰褐色(10YR6/2)	灰褐色(10YR6/2)	ミガキ	ミガキ		
266	土器部	杯	C1	SD	3650	13W	20	3	12.5	6			灰褐色(7.5YR6/4)	灰褐色(7.5YR6/4)	ミガキ	ミガキ		
267	土器部	杯	C1	SD	3650	13X	14	2	10.9	5.5			灰褐色(10YR6/2)	灰褐色(10YR6/2)	ミガキ	ミガキ		
268	土器部	杯	C1	SD	3650	13X	15	2	11.8	4.7			灰褐色(10YR6/2)	灰褐色(10YR6/2)	ミガキ	ミガキ	(外) 深いスヌ	褐色により化粧成る。
269	土器部	杯	C1	SD	3650	13X	14	2	11.2	5.2			灰褐色(10YR6/2)	灰褐色(10YR6/2)	ミガキ	ミガキ	(外)スヌ	褐色により化粧成る。
270	土器部	杯	C1	SD	3650	13W	19	3	11.3				灰褐色(10YR6/2)	灰褐色(10YR6/2)	ミガキ	ミガキ	(外)スヌ	黒闇の残存良好。
271	土器部	杯	C1	SD	3650	13W	22	3	11.8	5.1			灰褐色(10YR6/2)	灰褐色(10YR6/2)	ミガキ	ミガキ	(外)スヌ	黒闇の残存良好。
272	土器部	杯	C1	SD	3650	13X	9	2	11.8	5.2			灰褐色(10YR6/2)	灰褐色(10YR6/2)	ミガキ	ミガキ	(外)スヌ	黒闇の残存良好。
273	土器部	杯	C1	SD	3650	13W	19	3	11.9	4.7			灰褐色(10YR6/2)	灰褐色(10YR6/2)	ミガキ	ミガキ	(外)スヌ	黒闇の残存良好。
274	土器部	杯	C1	SD	3650	13X	14	2	11.9	5.2			灰褐色(10YR6/2)	灰褐色(10YR6/2)	ミガキ	ミガキ	(外)スヌ	黒闇の残存良好。
275	土器部	杯	C1	SD	3650	13X	18	3	12.2	6			灰褐色(10YR6/2)	灰褐色(10YR6/2)	ミガキ	ミガキ	(外)スヌ	黒闇の残存良好。
276	土器部	杯	C1	SD	3650	13X	9	2	12.0	5.8			灰褐色(10YR6/2)	灰褐色(10YR6/2)	ミガキ	ミガキ	(外)スヌ	黒闇の残存良好。
277	土器部	杯	C1	SD	3650	13X	21	3	13.1	6.1			灰褐色(7.5YR6/3)	灰褐色(7.5YR6/3)	ミガキ	ミガキ	(外)スヌ	黒闇により化粧成る。

## 観察表

余川中道遺跡Ⅱ 古墳時代 土器観察表(4)

番号	経緯	断面	グリッド	測量	測量範囲(cm)	色調	調査	付石物	備考					
経緯	番号	大	小	部位	上段・外側	下段・内側	外側	内側						
276	土器部	杯	C1	SD	3650	13X	5	2	11.6	6.7	にこい・直槽(10YR6/4) にこい・直槽(10YR6/3)	ミガキ モガキ		
279	土器部	杯	C1	SD	3650	13X	5	2	13.6	5.8	にこい・直槽(10YR6/3) にこい・直槽(10YR6/2)	ミガキ モガキ	黒色土器を基盤か。	
280	土器部	杯	C1	SD	3650	13X	9	2	13.8	6.6	にこい・直槽(10YR6/3) にこい・直槽(10YR6/2)	ハセメ モガキ	褐色により赤化。	
281	土器部	杯	C1	SD	3650	13W	18	3	15.6	-	にこい・直槽(10YR7/3) にこい・直槽(7.5YR7/4)	ミガキ	ミキ	
282	土器部	杯	SD	3650	13W	18	3	11.2	-	にこい・直槽(10YR6/3) にこい・直槽(10YR7/2)	ケズリ			
283	土器部 (手洗)	杯	SD	3650	13X	13	3	10.4	7	1.1	にこい・直槽(10YR7/2) にこい・直槽(10YR7/3)	モガキ		
284	土器部	鉢	SD	3650	13W	22	3	10.9	-	-	にこい・直槽(5YR6/4) 直底輪(7.5YR5.2)	モガキ (外)スヌ	褐色により赤化。	
285	土器部	鉢	SD	3650	13X	10	2-3	11.4	7	-	直底輪(10YR5/2) にこい・直槽(10YR6/3)	モガキ (外)スヌ (内)コヅ	褐色により赤化。	
286	土器部	鉢	SD	3650	14W	7	4	13.8	8.4	1.5	にこい・直槽(10YR6/3) にこい・直槽(10YR6/2) (底)モガキ	ハセメ モガキ ケズリ	表面が非常に薄い。	
287	土器部	鉢	SD	3650	13W	22	3	14	9.2	-	にこい・直槽(10YR7/4) にこい・直槽(10YR7/3)	ハセメ モガキ	容量、約0.90ℓ 表面により赤化。	
288	土器部	鉢	SD	3650	13W	19	3	14.2	-	-	にこい・直槽(10YR5/2) にこい・直槽(10YR7/3)	モガキ ケズリ	褐色により赤化。	
289	土器部	大鉢	SD	3650	13X	15	2	24.8	12.5	6	直底輪(10YR5/2) にこい・直槽(10YR7/3)	モガキ ケズリ	容量、約2.18ℓ (底)モガキ	
290	土器部	大鉢	A	SD	3650	13X	5	3	18.1	-	にこい・直槽(10YR6/3) にこい・直槽(10YR6/2)	ハセメ モガキ	褐色により赤化。	
291	土器部	大鉢	D1	SD	3650	13X	15	2	17	40.1	7.8	直底輪(10YR5/2) にこい・直槽(10YR7/3)	モガキ モガキ (内)モガキ (底)アマメ	容量、約1.47ℓ 外側の内側が赤化。
292	土器部	大鉢	D2	SD	3650	12Y	21	3	14.4	-	脛(5YR7/6) 脣(5YR7/6)	(1)ミガキ モガキ 直底輪(10YR7/6)	(1)ミガキ (外)スヌ	
293	土器部	大鉢	D3	SD	3650	14W	6	2	14.8	-	にこい・直槽(10YR7/4) にこい・直槽(10YR7/3)	(1)ミガキ モガキ	(1)ミガキ (外)スヌ	
294	土器部	大鉢	D4	SD	3650	13X	5	2	15.2	-	直底輪(10YR5/2) 直底輪(10YR5/2)	(1)ミガキ モガキ	(1)ミガキ (外)スヌ	
295	土器部	大鉢	E2	SD	3650	13X	14	2	13.3	29.5	6.6	直底輪(10YR5/2) 直底輪(10YR5/2)	(1)ミガキ (体)モガキ (底)ケズリ	容量、約6.60ℓ 破片、約0.90ℓ
296	土器部	大鉢	E3	SD	3650	13X	14	2	14.7	30.5	6.3	にこい・直槽(10YR7/3) 脣(5YR5/2)	(1)ミガキ モガキ (体)モガキ (底)ケズリ	黒帯の内腹良好、 容積、約3.00ℓ
297	土器部	大鉢	E3	SD	3650	13X	10	21	15.6	28.9	6.1	にこい・直槽(5YR7/4) (底)モガキ	(1)ミガキ モガキ (体)モガキ (底)モガキ	容量、約2.80ℓ (底)モガキが入る。
298	土器部	小鉢	G	SD	3650	13X	21	3	8.2	6.7	脣(2.5YR7/2) (底)2.5YR7/2	(1)ハセメ モガキ	(1)ハセメ (外)モガキ	
299	土器部	小鉢	G	SD	3650	13X	21	3	7.5	8.1	1.8	にこい・直槽(10YR6/3) にこい・直槽(10YR6/2)	(1)ハセメ モガキ (底)モガキ	(1)ハセメ モガキ (外)モガキ
300	土器部	小鉢	G	SD	3650	13X	22	3	7.2	7.1	-	にこい・直槽(10YR6/3) にこい・直槽(10YR6/2)	(1)モガキ (底)モガキ	(1)モガキ (外)モガキ
301	土器部	小鉢	I	SD	3650	13X	9	2	8.2	8.6	1.8	直底輪(10YR6/2) 直底輪(10YR6/2)	(1)ハセメ モガキ (底)モガキ	(1)ハセメ (外)モガキ
302	土器部	小鉢	G	SD	3650	13X	5	3	9.8	9.2	-	にこい・直槽(10YR6/3) にこい・直槽(10YR6/2)	(1)ヨコナギ モガキ	(1)ヨコナギ モガキ
303	土器部 (手洗)	小鉢	K	SD	3650	13X	17	1	10	10.9	4.2	にこい・直槽(10YR6/3) にこい・直槽(10YR6/2)	(1)ヨコナギ モガキ	(1)ヨコナギ モガキ
304	土器部	小鉢	I	SD	3650	13X	21	3	6.8	7.4	-	にこい・直槽(10YR6/3) にこい・直槽(10YR6/2)	(1)ヨコナギ モガキ	(1)ヨコナギ (外)モガキ
305	土器部	小鉢	I	SD	3650	14W	2	2	6.8	8.8	1.8	にこい・直槽(10YR6/3) にこい・直槽(10YR6/2)	(1)ヨコナギ モガキ (底)モガキ	(1)ヨコナギ (外)モガキ
306	土器部	小鉢	G	SD	3650	13W	19	3	-	-	にこい・直槽(7.5YR7/4) 輪(10YR6/2)	ハセメ	ナゲ	
307	土器部	小鉢	G	SD	3650	12Y	16	2	-	-	直底輪(10YR6/2)	モガキ	ナゲ	
308	土器部	小鉢	SD	3650	12Y	16	2	-	-	-	直底輪(10YR6/2)	(1)ヨコナギ モガキ	(1)ヨコナギ モガキ	
309	土器部	小鉢	SD	3650	14W	7	4	-	-	-	にこい・直槽(10YR6/4) にこい・直槽(10YR6/3)	モガキ	黒帯が有り。	
310	土器部	小鉢	H	SD	3650	13X	9	2	10.9	-	にこい・直槽(7.5YR7/4) (底)モガキ	ハセメ モガキ	(外)ナゲ	
311	土器部	小鉢	H	SD	3650	13X	14	2	11.9	15.2	2.2	にこい・直槽(10YR7/3) にこい・直槽(10YR6/3)	(1)ミガキ モガキ (底)モガキ	(1)ミガキ (外)ナゲ
312	土器部	小鉢	J	SD	3650	13W	19	3	10.2	-	にこい・直槽(7.5YR7/4) (底)モガキ	(1)ミガキ モガキ	黒帯により赤化。	
313	土器部	小鉢	SD	3650	13W	19	3	-	-	輪(10YR5/1)	(1)ミガキ	二重輪。		
314	土器部 (手洗)	小鉢	SD	3650	13X	10	2	-	-	にこい・直槽(10YR6/3) (底)モガキ	(1)ヨコナギ モガキ	黒帯により赤化。		
315	土器部	瓶	SD	3650	12Y	21	2	11	-	-	にこい・直槽(10YR6/2)	(1)ヨコナギ モガキ	褐色により赤化。	
316	土器部 (手洗)	瓶	SD	3650	13X	21	3	13.8	13.1	3.7	にこい・直槽(10YR6/4) にこい・直槽(10YR6/3)	(1)ヨコナギ モガキ	小孔あり。 使用歴なし。	
317	土器部	瓶	SD	3650	13X	9	2	14	-	-	直底輪(10YR5/2) 直底輪(10YR6/2)	(1)ハセメ (底)モガキ	(外)ナゲ	
318	土器部 (手洗)	瓶	I	SD	3650	13X	14	2	-	5.6	にこい・直槽(10YR6/3) にこい・直槽(10YR6/2)	(1)ヨコナギ (底)モガキ	外・パンツ状スヌ 内・壁水綿上 のゴム	
319	土器部 (手洗)	B I	SD	3650	13X	9	2	15	13.6	5.7	直底輪(10YR5/2) 直底輪(10YR6/2)	(1)ヨコナギ (底)モガキ	容量、約1.47ℓ 外・パンツ状スヌ 内・壁水綿上 のゴム	
320	土器部 (手洗)	B II	SD	3650	13X	15	2	14.6	21.3	3.4	にこい・直槽(10YR6/3) にこい・直槽(10YR7/2)	(1)ヨコナギ (底)モガキ	容量、約2.19ℓ 小孔。	

## 観察表

余川中道遺跡Ⅱ 古墳時代 土器観察表(5)

番号	種類	形態	分類	直徑	グリッド	測定	測定(cm)	色調		調査	付着物	備考		
								大	小	部位	上部	外面		
321	土師器	(無)	B II	SD	3650	13X	15	2	17.2	19.2	3.8	に古い土器 (10YR6/3) に古い土器 (10YR7/3)	[1]コナド [1]タヌキ [1]スズ [内]コヅ	容量: 約2.95L, 地盤により変化。
322	土師器	(無)	B II	SD	3650	13X	9	2	16	22.5	2.8	に古い土器 (10YR6/3) に古い土器 (10YR7/3)	[1]コナド [1]タヌキ [1]スズ [内]コヅ	容量: 約4.07L, 中型。
323	土師器	圓	B II	SD	3650	13W	19	3	16			底面陶 (10YR8/2) (1.5YR7/3)	[1]コナド [1]タヌキ [1]スズ [内]コヅ	容量: 約4.07L, 中型。
324	土師器	(無)	B II	SD	3650	13X	14	2	18.1	22.6	3.2	に古い土器 (10YR6/3) に古い土器 (10YR7/3)	[1]コナド [1]タヌキ [1]スズ [内]コヅ	容量: 約4.40L, 地盤下、スス變化。
325	土師器	圓	B II	SD	3650	13X	14	2	16.9			底面陶 (10YR6/3) (1.5YR7/3)	[1]コナド [1]タヌキ [1]スズ [内]コヅ	地盤下、スス變化。
326	土師器	圓	B II	SD	3650	13X	9	3	16			底面陶 (10YR6/3) (1.5YR7/3)	[1]コナド [1]タヌキ [1]スズ [内]バッヂ秋谷	地盤下、スス變化。
327	土師器	(無)	B II	SD	3650	13X	9	3	16.6	27.1	4	に古い土器 (10YR6/3) に古い土器 (10YR7/3)	[1]コナド [1]タヌキ [1]スズ [内]バッヂ秋谷	容量: 約5.68L
328	土師器	(無)	B II	SD	3650	13X	14	2	16.9	26.8	4.2	に古い土器 (10YR6/3) に古い土器 (10YR7/3)	[1]コナド [1]タヌキ [1]スズ [内]バッヂ秋谷	容量: 約6.16L, 地盤下、スス變化。
329	土師器	圓	B II	SD	3650	13X	5	3	17.5			に古い土器 (10YR6/3) に古い土器 (10YR7/3)	[1]コナド [1]タヌキ [1]スズ [内]バッヂ秋谷	容量: 約6.16L, 地盤下、スス變化。
330	土師器	圓	B II	SD	3650	13X	10	2	17.8			に古い土器 (10YR6/3) に古い土器 (10YR7/3)	[1]コナド [1]タヌキ [1]スズ [内]バッヂ秋谷	容量: 約6.16L, 地盤下、スス變化。
331	土師器	圓	B II	SD	3650	13X	14	3	18			に古い土器 (10YR6/3) に古い土器 (10YR7/3)	[1]コナド [1]タヌキ [1]スズ [内]バッヂ秋谷	容量: 約6.16L, 地盤下、スス變化。
332	土師器	(無)	B I	SD	3650	13X	10	2	17.5	22.2	5.9	に古い土器 (10YR6/3) に古い土器 (10YR7/3)	[1]コナド [1]タヌキ [1]スズ [内]バッヂ秋谷	容量: 約4.95L, 中型。
333	土師器	(無)	A II	SD	3650	13X	10	2	18.1	28.6	4.3	に古い土器 (10YR6/3) に古い土器 (10YR7/3)	[1]コナド [1]タヌキ [1]スズ [内]バッヂ秋谷	容量: 約7.29L, 中型。
334	土師器	圓	B II	SD	3650	13X	14	2	17.9	28.3		底面陶 (10YR6/2) (10YR7/2)	[1]タヌキ [1]スズ [内]バッヂ秋谷	容量: 約7.99L, 地盤用か。
335	土師器	圓	B II	SD	3650	12X	25	3	19.4			に古い土器 (10YR6/3) (10YR7/3)	[1]タヌキ [1]スズ [内]バッヂ秋谷	容量: 約7.99L, 地盤用か。
336	土師器	圓	B II	SD	3650	13X	14	2	18.7			に古い土器 (10YR6/3) に古い土器 (10YR7/3)	[1]タヌキ [1]スズ [内]バッヂ秋谷	容量: 約8.10L, 地盤用か。
337	土師器	(無)	B II	SD	3650	13X	14	2	18.4	28.8	3.9	に古い土器 (10YR6/3) に古い土器 (10YR7/3)	[1]コナド [1]タヌキ [1]スズ [内]バッヂ秋谷	容量: 約7.99L, 地盤用か。
338	土師器	(無)	B II	SD	3650	13X	14	2	17.9	30.2	5.9	に古い土器 (10YR6/3) に古い土器 (10YR7/3)	[1]コナド [1]タヌキ [1]スズ [内]バッヂ秋谷	容量: 約9.04L, 地盤用か。
339	土師器	大切型	D II	SN	3609	12W	18	Vb	15			に古い土器 (10YR6/3) に古い土器 (10YR7/3)	[1]タヌキ [1]スズ [内]バッヂ秋谷	容量: 約9.04L, 地盤用か。
340	土師器	圓	B II	SN	3609	12W	19	Vb	16.1			に古い土器 (10YR6/3) に古い土器 (10YR7/3)	[1]タヌキ [1]スズ [内]バッヂ秋谷	容量: 約9.04L, 地盤用か。
341	土師器	圓	B II	SN	3609	12W	18	Vb	18.2			に古い土器 (10YR6/3) に古い土器 (10YR7/3)	[1]タヌキ [1]スズ [内]バッヂ秋谷	容量: 約9.04L, 地盤用か。
342	土師器	圓	B II	SN	3610	14V	4	Vb	19.5			に古い土器 (10YR6/3) に古い土器 (10YR7/3)	[1]タヌキ [1]スズ [内]バッヂ秋谷	容量: 約9.04L, 地盤用か。
343	土師器	圓	B II	SN	3611	14V	3	Vb	17.6			に古い土器 (10YR6/3) に古い土器 (10YR7/3)	[1]タヌキ [1]スズ [内]バッヂ秋谷	容量: 約9.04L, 地盤用か。
344	土師器	小切型	G II	SN	3613	14W	15	Vb	8.7	14		に古い土器 (10YR6/3) に古い土器 (10YR7/3)	[1]タヌキ [1]スズ [内]バッヂ秋谷	容量: 約9.04L, 地盤用か。
345	土師器	(無)	B II	SN	3629	14V	4	1	16.9	26.4	5.1	に古い土器 (10YR6/3) に古い土器 (10YR7/3)	[1]タヌキ [1]スズ [内]バッヂ秋谷	容量: 約6.17L, 中型。
346	土師器	大切型	SN	3651	13X	15	Va			6.2		に古い土器 (10YR6/3) に古い土器 (10YR7/3)	[1]タヌキ [1]スズ [内]バッヂ秋谷	摩耗跡。
347	土師器	大切型	SN	3651	13X	15	Va			10.5		に古い土器 (10YR6/3) に古い土器 (10YR7/3)	[1]タヌキ [1]スズ [内]バッヂ秋谷	摩耗跡。
348	土師器	圓	B II	SD	3660	13X	19	Vb	17.9			に古い土器 (10YR6/3) に古い土器 (10YR7/3)	[1]タヌキ [1]スズ [内]バッヂ秋谷	地盤下、スス變化。
349	土師器	圓	B II	SD	3663	13X	19	Vb	18.4			に古い土器 (10YR6/3) に古い土器 (10YR7/3)	[1]タヌキ [1]スズ [内]バッヂ秋谷	地盤下、スス變化。 地盤熱熱。
350	土師器	高杯	I SN	3653	13X	19	Vb		11			に古い土器 (10YR6/3) に古い土器 (10YR7/3)	[1]ミガキ [1]ナデ	地盤下、 地盤熱熱。
351	土師器	高杯	A1 SN	3654	14X	9	Vd	17	12.9	10		に古い土器 (10YR6/3) に古い土器 (10YR7/3)	[1]タヌキ [1]スズ [内]バッヂ秋谷	地盤下、 地盤熱熱。
352	土師器	高杯	A1 SN	3654	14X	9	Vd	17.8	16.8	13.3		に古い土器 (10YR6/3) に古い土器 (10YR7/3)	[1]タヌキ [1]スズ [内]バッヂ秋谷	地盤下、 地盤熱熱。
353	土師器	高杯	A1 SN	3654	14X	9	Vd	18.4	15.1	12.4		に古い土器 (10YR6/3) (1.5YR7/6)	[1]タヌキ [1]スズ [内]バッヂ秋谷	地盤下、 地盤熱熱。
354	土師器	高杯	A1 SN	3654	14X	9	Vd	17.5	15.2	12.9		に古い土器 (10YR6/3) に古い土器 (10YR7/3)	[1]タヌキ [1]スズ [内]バッヂ秋谷	地盤下、 地盤熱熱。
355	土師器	高杯	A1 SN	3654	14X	9	Vd	20.3	15.3	12.9		に古い土器 (10YR6/3) に古い土器 (10YR7/3)	[1]タヌキ [1]スズ [内]バッヂ秋谷	地盤下、 地盤熱熱。
356	土師器	高杯	A1 SN	3654	14X	10	Vd	19.9	13.3	11.1		底面陶 (10YR6/3) (1.5YR7/6)	[1]タヌキ [1]スズ [内]バッヂ秋谷	地盤下、 地盤熱熱。
357	土師器	高杯	B SN	3654	14X	9	Vd	17	12.9	10		に古い土器 (10YR6/3) に古い土器 (10YR7/3)	[1]ミガキ [1]ナデ	地盤下、 地盤熱熱。
358	土師器	小切型	G SN	3654	14X	10	Vd	17.0	10.5	9.3		底面陶 (10YR6/3) (1.5YR7/6)	[1]タヌキ [1]スズ [内]バッヂ秋谷	地盤下、 地盤熱熱。
359	土師器	小切型	G SN	3654	14X	10	Vd	9	10			に古い土器 (10YR6/3) に古い土器 (10YR7/3)	[1]タヌキ [1]スズ [内]バッヂ秋谷	2倍より幅広実測。

## 観察表

余川中道遺跡Ⅱ 古墳時代 土器観察表(6)

番号	種類	形態	分類	表面	グリッド	測定	測定値(cm)	色調		調査	付石物	備考		
								大	小	部位	上段	下段		
360	土器部	小切妻	G	SN	3654	14X	9	薄	9.5	10.4	にぶい・赤褐色(10YR7/3) にぶい・赤褐色(10YR7/3)	ハゲメ (体)ナゲ	(11) ハゲメ (体)ナゲ	
361	土器部	小切妻	G	SN	3654	14X	10	薄	8.9	10	薄黄(2SYR7/3) 薄黄(2SYR7/3)	ハゲメ (体)ナゲ	(11) ハゲメ (体)ナゲ	
362	土器部	小切妻	G	SN	3654	14X	9	薄	10.2	11.6	薄白(5YR7/6) 薄白(5YR7/6)	ハゲメ (体)ナゲ	(11) コナデ (体)ナゲ	
363	土器部	高杯	A2	SN	3655	13X	13	Vlb	18.8		にぶい・赤褐色(10YR7/4) にぶい・赤褐色(10YR7/4)	ミガキ	ミガキ	
364	土器部	杯	C1	SN	3655	13X	13	Vlb	11.0	6	白(5W7/6) 白(5W7/6)	ミガキ	ミガキ	
365	土器部	有孔鉢	NN	SN	3655	13X	13	Vlb	18.4	10.2	にぶい・赤褐色(10YR7/3) にぶい・赤褐色(10YR7/3)	白(5W7/6) 白(5W7/6)	(11) ハゲメ (体)ナゲ	
366	土器部	盤(平底)	II	SD	3656	13X	10	Z			にぶい・赤褐色(10YR7/3) にぶい・赤褐色(10YR7/3)	ミガキ (体)ナゲ	(外)スヌ (内)コナデ	
367	土器部	盤(平底)	B II	SD	3657	13X	11	Vlb	16	23.5	6	にぶい・赤褐色(10YR7/3) にぶい・赤褐色(10YR7/3)	ミガキ (体)ナゲ	(外)スヌ (内)コナデ
368	土器部	高杯	I	SN	3658	14X	13	Vlb			にぶい・赤褐色(10YR7/3) にぶい・赤褐色(10YR7/3)	ミガキ	ミガキ	
369	土器部	高杯	II	SN	3658	14X	13	Vlb			にぶい・赤褐色(10YR7/3) にぶい・赤褐色(10YR7/3)	ミガキ	ミガキ	
370	土器部	杯	C1	SN	3658	14X	13	Vlb	12.4		にぶい・赤褐色(10YR7/3) にぶい・赤褐色(10YR7/3)	ミガキ (体)ナゲ	(11) ハゲメ (体)ナゲ	
371	土器部	盤	SK	SN	3658	14X	13	Vlb	11.4	11	にぶい・赤褐色(10YR7/3) にぶい・赤褐色(10YR7/3)	ミガキ (体)ナゲ	(11) ハゲメ (体)ナゲ	
372	土器部	小切妻	G	SN	3658	14X	8	Vlb	8.5	9.4	にぶい・赤褐色(10YR7/3) にぶい・赤褐色(10YR7/3)	ミガキ (体)ナゲ	(11) ハゲメ (体)ナゲ	
373	土器部	盤(平底)	-	SK	3658	14X	8	Vlb	7	11.5	6.5	にぶい・赤褐色(10YR7/3) にぶい・赤褐色(10YR7/3)	ハケメ	(外)スヌ (内)コナデ
374	土器部	大切妻	D3	SK	3659	14X	6	Vlb			にぶい・赤褐色(10YR7/4) にぶい・赤褐色(10YR7/4)	ミガキ (体)ナゲ	(11) ハゲメ (体)ナゲ	
375	土器部	高杯	A1	SK	3660	13X	24	Vlb			にぶい・赤褐色(10YR7/4) にぶい・赤褐色(10YR7/4)	ミガキ	ミガキ	
376	土器部	高杯	I	SK	3660	13X	24	Vlb			にぶい・赤褐色(10YR7/3) にぶい・赤褐色(10YR7/3)	ミガキ	ミガキ	
377	土器部	高杯	E	SK	3661	13X	1	Vlb	15.6		にぶい・赤褐色(10YR7/4) にぶい・赤褐色(10YR7/4)	ミガキ	ミガキ	
378	土器部	高杯	A1	SK	3661	13W	10	Vlb	17		にぶい・赤褐色(10YR7/6) にぶい・赤褐色(10YR7/6)	ハケメ ミガキ	ミガキ	
379	土器部	高杯	A1	SK	3661	13W	10	Vlb			にぶい・赤褐色(10YR7/3) にぶい・赤褐色(10YR7/3)	ミガキ	ミガキ	
380	土器部	高杯	III	SK	3661	13W	5	Vlb		15.4	にぶい・赤褐色(10YR7/6) にぶい・赤褐色(10YR7/6)	ミガキ	ミガキ	
381	土器部	高杯	I	SK	3661	13X	1	Vlb			にぶい・赤褐色(10YR7/8) にぶい・赤褐色(10YR7/8)	ミガキ	ミガキ	
382	土器部	高杯	I	SK	3661	13X	1	Vlb			にぶい・赤褐色(10YR7/4) にぶい・赤褐色(10YR7/4)	ミガキ	ミガキ	
383	土器部	高杯	I	SK	3661	13X	2	Vlb			にぶい・赤褐色(10YR7/3) にぶい・赤褐色(10YR7/3)	ミガキ	ミガキ	
384	土器部	杯	SK	3661	13X	2	Vlb	8.9	4.7	4.8	にぶい・赤褐色(10YR7/4) にぶい・赤褐色(10YR7/4)	ミガキ 樹脂状斑 (体)ナゲ	(外)摩耗	
385	土器部	盤(平底)	SK	3661	13W	5	Vlb	11	8	2.3	にぶい・赤褐色(10YR7/4) にぶい・赤褐色(10YR7/4)	ミガキ (体)ナゲ	(11) ハゲメ (体)ナゲ	
386	土器部	盤(平底)	SK	3661	13W	5	Vlb			3.7	にぶい・赤褐色(10YR7/6) にぶい・赤褐色(10YR7/6)	ミガキ ハケメ	(外)スヌ (内)コナデ	
387	土器部	小切妻	G	SK	3661	13W	5	Vlb			にぶい・赤褐色(10YR7/4) にぶい・赤褐色(10YR7/4)	ミガキ	ナゲ	
388	土器部	盤	H II	SK	3661	13X	1	Vlb	15.4		にぶい・赤褐色(7SYR6/3) にぶい・赤褐色(7SYR6/3)	(11) ハゲメ (体)ナゲ	(外)スヌ (内)コナデ	
389	土器部	盤	B	SK	3661	13X	1	Vlb	16.8		にぶい・赤褐色(10YR7/3) にぶい・赤褐色(10YR7/3)	コナデ	(外)スヌ	
390	土器部	盤	B	SK	3661	13W	5	Vlb	17		にぶい・赤褐色(10YR7/3) にぶい・赤褐色(10YR7/3)	コナデ ハケメ	(外)スヌ	
391	土器部	高杯	A1	SK	3662	13W	14	Vlb	19.7	13.8	後縁部(10YR8/4) 後縁部(10YR8/4)	(1) ハゲメ (2) ハゲメ (3) ハゲメ (4) ハゲメ	(1) ハゲメ (2) ハゲメ (3) ハゲメ (4) ハゲメ	
392	土器部	高杯	I	SK	3662	13W	15	Vlb		13.4	にぶい・赤褐色(10YR7/3) にぶい・赤褐色(10YR7/3)	ミガキ	樹脂状斑	
393	土器部	大切妻	A	SK	3662	13W	15	Vlb	17.8		にぶい・赤褐色(10YR7/3) にぶい・赤褐色(10YR7/3)	ミガキ ミガキ	ミガキ	
394	土器部	盤	B	SK	3662	13W	15	Vlb	16.8		にぶい・赤褐色(10YR7/2) にぶい・赤褐色(10YR7/2)	ミガキ (体)ナゲ	(外)スヌ	
395	土器部	盤(平底)	H III	SK	3662	13W	15	Vlb	16.2	18.9	2.6	にぶい・赤褐色(10YR7/3) にぶい・赤褐色(10YR7/3)	ミガキ (体)ナゲ	(外)スヌ (内)コナデ
396	土器部	盤(平底)	H II	SK	3662	13W	9	Vlb	17.3	26.3	6.2	にぶい・赤褐色(10YR6/3) にぶい・赤褐色(7SYR6/3)	ミガキ (体)ナゲ	(外)スヌ 7.05€
397	土器部	杯	C1	SK	3664	14X	18	Vlb	11.2		にぶい・赤褐色(10YR7/2) にぶい・赤褐色(10YR7/2)	ミガキ	ミガキ	
398	土器部	小切妻	H	SK	3664	14X	18	Vlb	10.6		にぶい・赤褐色(10YR7/3) にぶい・赤褐色(10YR7/3)	ミガキ	(外)スヌ	
399	土器部	高杯	I	SK	3666	13Y	17	5		11.0	後縁部(7SYR6/4) 後縁部(7SYR6/4)	ミガキ	樹脂状斑	
400	土器部	杯	C1	SK	3666	13Y	22	2	13.5	5	にぶい・赤褐色(10YR7/3) にぶい・赤褐色(10YR7/3)	(1) ハゲメ (2) ハゲメ	(外)スヌ	
401	土器部	大切妻	NN	SK	3667	13Y	21	4		8.2	後縁部(7SYR6/4) 後縁部(7SYR6/4)	ミガキ	ミガキ	
402	土器部	大切妻	NN	SK	3668	13X	7	Vlb		9.2	後縁部(10YR8/3) 後縁部(10YR7/2)	ミガキ E 抗ナゲ	(外)摩耗	
403	土器部	高杯	A1	-	-	-	-	Vlb	15.6		にぶい・赤褐色(10YR7/3) にぶい・赤褐色(10YR7/3)	ミガキ	ミガキ	
404	土器部	高杯	A1	-	-	13X	25	Vlb	17.1		にぶい・赤褐色(10YR7/4) にぶい・赤褐色(10YR7/4)	ミガキ	ミガキ	

## 観察表

余川中道遺跡Ⅱ 古墳時代 土器観察表(7)

番号	柱形	縦形	横形	分類	標題	グリッド	測量番号	大	小	神位	日付	地名	測量		付岩物	備考		
													上段	下段	前面	背面		
405	土彌形	高杯	A1	-	-	-	-	Vla	a	17.2			（柱・高）直（10YR6/3） （柱・高）直（10YR6/3）	ミガキ	ミガキ			
406	土彌形	高杯	A1	-	-	13Y	13	Vb	b	20.7			（柱・高）直（10YR6/4） （柱・高）直（10YR6/4）	ミガキ	ミガキ			
407	土彌形	高杯	A3	-	-	12W	13	Vb	b	20			（柱・高）直（10YR7/3） （柱・高）直（10YR7/3）	ミガキ	ミガキ			
408	土彌形	高杯	A2	-	-	13Y	3	Vb	b	18.4			（柱・脚）ハ （柱・脚）ハ （柱・脚）ハ	ミガキ ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ ミガキ	（外）薄いスス （内）薄いスス	傾斜により変化。 (内) 脱色	
409	土彌形	高杯	I	P	3363	14X	16	Vb		14.3			（柱・高）直（10YR7/3） （柱・高）直（10YR7/3）	ミガキ	ミガキ		P2363は少帶の遺物。	
410	土彌形	高杯	I	-	-	13W	10	Vb	b	12.6			（柱・高）直（10YR6/4） （柱・高）直（10YR6/4）	ミガキ	ミガキ	ミガキ ミガキ	傾斜により変化。 (内) 脱色	
411	土彌形	高杯	II	-	-	14X	14	Vb	b	11.2			（柱・脚）ハ （柱・脚）ハ （柱・脚）ハ	ミガキ ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ ミガキ	傾斜により変化。 (内) 脱色	
412	土彌形	大聖徳	A	-	-	13W	7	Vla	a	17			（柱・脚）直（7.5YR6/4） （柱・脚）直（7.5YR6/4）	ミガキ	ミガキ			
413	土彌形	大聖徳	D2	-	-	12W	20	Vb	b	18.5			（柱・脚）直（10YR7/3） （柱・脚）直（10YR7/3）	ミガキ	ミガキ			
414	土彌形	大聖徳	D3	-	-	12W	20	Vb	b	17.6			（柱・脚）直（10YR7/2） （柱・脚）直（10YR7/2）	ミガキ	ミガキ			
415	土彌形	特大聖徳	SD	3604	12W	16	Vb	b	21.9			（柱・脚）直（7.5YR8/4） （柱・脚）直（7.5YR8/4）	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	薄い 不明	傾斜により変化。 (内) 脱色		
416	土彌形	大聖徳	E2	-	-	12X	17	Vb	b	11.7	22.9	4.7	（柱・脚）直（7.5YR7/4） （柱・脚）直（7.5YR7/4）	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	重量：約3.01kg 傾斜により前部変化。	
417	土彌形	小聖徳	H	-	-	14W	14	Vb	中	12.9			（柱・脚）直（10YR7/3） （柱・脚）直（10YR7/3）	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	重量：約1.38kg	
418	土彌形	脚	B1	-	-	13V	25	Vb	b	18.5	22.5	6.1	（柱・脚）直（10YR6/2） （柱・脚）直（10YR6/2）	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	2号より後文変形。 容量：約1.12L	
419	土彌形	脚	B	-	-	13V	25	Vb	b	12.6			（柱・脚）直（10YR6/2） （柱・脚）直（10YR6/2）	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ		
420	土彌形	脚	B	-	-	12X	16	Vb	b	14.6			（柱・脚）直（7.5YR7/4） （柱・脚）直（7.5YR7/4）	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	（外）薄紙	
421	土彌形	脚	B	-	-	12X	24	Vb	b	18			（柱・脚）直（7.5YR8/4） （柱・脚）直（7.5YR8/4）	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	側面加熱痕なし。	
422	土彌形	脚	B	-	-	12W	20	Vb	b	18.3			（柱・脚）直（10YR7/2） （柱・脚）直（10YR7/2）	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	側面加熱痕なし。	
423	土彌形	脚	B	-	-	13V	9	Vb	b	19.6			（柱・脚）直（7.5YR7/4） （柱・脚）直（7.5YR7/4）	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	（外）薄いスス	
424	土彌形	チニ	丁	-	-	13V	4	Vb	b	3.2			（柱・脚）直（10YR7/4） （柱・脚）直（10YR7/4）	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	濃厚。	
425	土彌形	チニ	アラ	-	-	12V	19	Vb	中	4.5	2.6	1.8	（柱・脚）直（10YR6/2） （柱・脚）直（10YR6/2）	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ		
427	土彌形	西杯	A3	SD	2100	13T	0	1	1	16.6	15.3	11.7	（柱・脚）直（10YR7/3） （柱・脚）直（10YR7/3）	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	（外）スス	
428	土彌形	西杯	A1	SD	2100	13T	15	0	Vb	b	16.1	14.6	14.7	（柱・脚）直（10YR7/3） （柱・脚）直（10YR7/3）	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	傾斜により変化。
429	土彌形	西杯	A1	SD	2100	13T	24	1	18				（柱・脚）直（10YR6/3） （柱・脚）直（10YR6/3）	ハケメ	ミガキ			
430	土彌形	西杯	A1	SD	2100	13U	11	0						（柱・脚）直（7.5YR7/6） （柱・脚）直（7.5YR7/6）	ハケメ ミガキ	ミガキ		傾斜により変化。
					13U	2												
431	土彌形	西杯	A1	SD	2100	13T	27	1	Vb	b	21.1			（柱・脚）直（10YR7/3） （柱・脚）直（10YR7/3）	ハケメ ミガキ	ミガキ	ミガキ	（外）スス
432	土彌形	西杯	A1	SD	2100	13U	11	0	Vb	b	19.6			（柱・脚）直（10YR6/2） （柱・脚）直（10YR6/2）	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	ミガキ	（内）剥落。
433	土彌形	西杯	A1	SD	2100	13U	11	1	Vb	b	25.9			（柱・脚）直（10YR7/4） （柱・脚）直（10YR7/4）	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	
434	土彌形	西杯	A2	SD	2100	13T	15	1	Vb	b				（柱・脚）直（10YR7/3） （柱・脚）直（10YR7/3）	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	傾斜により変化。
435	土彌形	西杯	B	SD	2100	13T	17	19	Vb	b				（柱・脚）直（7.5YR6/2） （柱・脚）直（7.5YR6/2）	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	（外）薄いスス。 (内) 脱色
436	土彌形	西杯	I	SD	2100	13T	15	0	Vb	b	12			（柱・脚）直（10YR7/3） （柱・脚）直（10YR7/3）	ミガキ ミガキ	ミガキ	ミガキ	
437	土彌形	西杯	I	SD	2100	13T	11	1	Vb	b	15.6			（柱・脚）直（10YR6/4） （柱・脚）直（10YR6/4）	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	むせん秋巻き上げ。
438	土彌形	脚	B	SD	2100	14T	1	1	Vb	b	10.1	5.1	2.7	（柱・脚）直（10YR7/3） （柱・脚）直（10YR7/3）	ミガキ ミガキ	ミガキ	ミガキ	（外）スス。 (内) 剥落
439	土彌形	脚	C1	SD	2100	13T	15	0	Vb	b	11.6	4.5		（柱・脚）直（7.5YR7/0） （柱・脚）直（7.5YR7/0）	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	傾斜により変化。 (内) 剥落
440	土彌形	脚	SD	2100	13T	19	0	Vb	b	12.3			（柱・脚）直（10YR6/2） （柱・脚）直（10YR6/2）	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	傾斜により変化。 (内) 剥落	
441	土彌形	脚	SD	2100	13T	20	1	Vb	b				（柱・脚）直（10YR6/2） （柱・脚）直（10YR6/2）	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	傾斜物のため 手用	
442	土彌形	小聖徳	H	SD	2100	13T	22	0	Vb	b	12			（柱・脚）直（10YR6/4） （柱・脚）直（10YR6/4）	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	（外）スス。
443	土彌形	小聖徳	G	SD	2100	13U	11	1	Vb	b				（柱・脚）直（10YR7/4） （柱・脚）直（10YR7/4）	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	

## 観察表

余川中道遺跡Ⅱ 古墳時代 土器観察表(8)

番号	組別	断面	分類	経年	番号	グリッド	位置	北緯度 (m)	東経度 (m)	高さ	底径	測量			付石物	備考	
												上段 外周 段下 内面	外周	内面			
444	土器部	無	B SD	2100	13U	11	1	20.8				に-51-1-直筒 (10YR6/3) に-51-1-直筒 (10YR4/3)	ハガメ	ハガメ	(外) 海いスヌ		
445	土器部 (平底)	B II	SD	2101	13U	16	Vlb	17	21.1			に-51-1-直筒 (10YR6/3) に-51-1-直筒 (10YR6/3)	ハガメ	ハガメ	(外) スヌ (内) バチ秋コヅ 小乳	直径約3.56cm	
446	土器部	大型器	A SD	2124	14T	3	0	17.6				に-51-1-直筒 (7.5YR7/3) に-51-1-直筒 (10YR6/3)	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	(外) 海いスヌ (内) 海いスヌ		
447	土器部	高杯	B P	2151	13U	16	1			19.1		に-51-1-直筒 (10YR7/4) に-51-1-直筒 (10YR7/4)	ミガキ	ミガキ	(外) 海いスヌ (内) 海いスヌ		
448	土器部	直	B P	2152	13U	16	1	13.1				に-51-1-直筒 (10YR7/2) に-51-1-直筒 (10YR7/2)	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	(外) スヌ (内) バチ秋コヅ		
449	土器部	高杯	A3 P	2170	13U	18	1	18.4				に-51-1-直筒 (7.5YR7/4) に-51-1-直筒 (7.5YR7/4)	ハガメ	ミガキ	(外) スヌ (内) 海いスヌ	(内) 脱落	
450	土器部	高杯	A1 SX	2123	13U	16	Vlb	17.6				に-51-1-直筒 (10YR6/3) に-51-1-直筒 (10YR6/3)	ミガキ	ミガキ	(外) スヌ (内) 海いスヌ	(内) 脱落	
451	土器部	高杯	A1 SX	2123	13U	11	Vlb	18.8				に-51-1-直筒 (10YR6/3) に-51-1-直筒 (10YR6/3)	ミガキ	ミガキ	(外) スヌ (内) 海いスヌ		
452	土器部	高杯	B SX	2123	13U	16	Vlb			21.2		に-51-1-直筒 (10YR6/3) に-51-1-直筒 (10YR7/3)	ミガキ	ミガキ	(外) スヌ (内) コナデ		
453	土器部	小型器	G SX	2123	13U	16	Vlb	9.7	10.8			に-51-1-直筒 (7.5YR7/4) に-51-1-直筒 (7.5YR7/4)	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	(外) スヌ (内) ナダ		
454	土器部	小型器	G SX	2123	13U	16	Vlb					に-51-1-直筒 (10YR6/3) に-51-1-直筒 (10YR6/3)	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	(外) スヌ (内) コナデ		
455	土器部	小型器	G SX	2123	13U	16	Vlb					に-51-1-直筒 (7.5YR6/4) に-51-1-直筒 (7.5YR6/4)	ハガメ ミガキ	ミガキ ミガキ	(外) スヌ (内) 海いスヌ		輪轍により変化
456	土器部	小型器	G SX	2123	13U	16	Vlb					に-51-1-直筒 (10YR6/3) に-51-1-直筒 (10YR6/3)	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	(外) スヌ (内) コナデ		
457	土器部	直	B SX	2123	13U	16	Vlb	15.6				に-51-1-直筒 (10YR6/2) に-51-1-直筒 (10YR6/2)	ミガキ	ミガキ	(外) スヌ		
458	土器部	直	B SX	2123	13U	16	Vlb	18.8				直筒陶 (10YR4/2) 直筒陶 (10YR4/2)	ハガメ ミガキ	ミガキ ミガキ	(外) スヌ (内) ナダ		
459	土器部	直	B SX	2125	13T	5	Vlb	16				に-51-1-直筒 (10YR6/2) に-51-1-直筒 (10YR6/2)	ミガキ	ミガキ	(外) スヌ		
460	土器部	高杯	B II	-	14T	-	Vlb			8.8		に-51-1-直筒 (10YR7/4) に-51-1-直筒 (10YR7/3)	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	(外) 厚耳		
461	土器部	高杯	A1	-	13U	17	Vlb	18.8				に-51-1-直筒 (10YR7/4) に-51-1-直筒 (10YR7/4)	ミガキ	ミガキ	(外) スヌ		
462	土器部	高杯	I	-	13U	3	Vlb			11.1		に-51-1-直筒 (10YR6/3) に-51-1-直筒 (10YR6/3)	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	ナダ		
463	土器部	小型器	G	-	13T	12	Vlb					に-51-1-直筒 (10YR6/3) に-51-1-直筒 (10YR6/3)	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	ナダ		
464	土器部	小型器 (平底)	K	-	13T	22	Vlb			3.6		に-51-1-直筒 (10YR6/3) に-51-1-直筒 (10YR6/3)	ハガメ ミガキ	ミガキ ミガキ	ナダ		
465	土器部	直	B	-	13T	25	Vlb	18.2				に-51-1-直筒 (10YR6/2) に-51-1-直筒 (10YR6/2)	ミガキ	ミガキ	(外) スヌ		
466	土器部	杯	C1	-	13U	8	Vlb	11.3				に-51-1-直筒 (10YR6/2) に-51-1-直筒 (10YR6/2)	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	(外) スヌ		
467	直底器	直	-	-	12U	16	Vlb	10.7				横U (2.5YR/2) 横U (2.5YR/2)	ロクロマ陶 ロクロマ陶	ロクロマ陶 ロクロマ陶			
468	直底器	杯	-	-	13S	25	1.5	15.1				横U (2.5YR/2) 横U (2.5YR/2)	ミガキ	ミガキ	(外) 厚耳		
469	土器部	人形器	A	-	-	13S	9	1.6	20.8			に-51-1-直筒 (10YR7/4) に-51-1-直筒 (10YR7/4)	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	(外) 厚耳		
470	直底器	直	-	-	13S	7	7.6	20.4				直筒陶 (10YR4/1) 直筒陶 (10YR4/2)	ヨコマツ ヨコマツ	ヨコマツ ヨコマツ	(外) スヌ (内) コヅ		
475	土器部	直	B I	SX	2536	11Q	7.5	7.5	15.5	21.3	6.2	直筒陶 (10YR6/3) 直筒陶 (10YR6/3)	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	(外) スヌ (内) コヅ	直径約4.29cm 中型、底部、土器化。	
476	土器部	直	B II	SD	2200	10Q	18	K1				に-51-1-直筒 (10YR6/2) に-51-1-直筒 (10YR6/2)	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	(外) スヌ (内) コヅ		
477	土器部	直	-	SD	2200	10Q	21	10Q	22	-	15.4	に-51-1-直筒 (7.5YR6/3) 直筒陶 (10YR6/2)	西高円低 (11) ヨコマツ	(11) ヨコマツ	(外) スヌ (内) コヅ		
478	土器部	高杯	A1	-	-	12Q	13	Vlb				に-51-1-直筒 (10YR6/2) に-51-1-直筒 (10YR6/2)	ケズリ ミガキ	ミガキ ミガキ	(外) スヌ		
479	土器部	直	-	-	-	13Q	19	Vlb	9.1			に-51-1-直筒 (10YR6/2) に-51-1-直筒 (10YR6/2)	ヨコマツ ヨコマツ	ヨコマツ ヨコマツ	(外) スヌ		
480	土器部	高杯	I	-	-	12Q	13	Vlb				に-51-1-直筒 (10YR6/2) に-51-1-直筒 (10YR6/2)	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	ナダ		
481	直底器	直	-	-	-	13P	18	Vlb	12.2			横U (2.5YR/2) 横U (2.5YR/2)	ミガキ	ミガキ	(外) 厚耳		
482	直底器	高杯	A1 SD	2201	10Q	8	Vlb	15.2				横U (2.5YR/2) 横U (2.5YR/2)	ハガメ ミガキ	ハガメ ミガキ	(外) 厚耳		
483	土器部	直	B	-	-	10Q	17	K1	17.5			に-51-1-直筒 (7.5YR6/4) に-51-1-直筒 (7.5YR6/4)	ハガメ ハガメ	ハガメ ハガメ	ナダ		輪轍により変化。
484	土器部	高杯	I	-	-	12B	23	Vlb				に-51-1-直筒 (10YR6/3) に-51-1-直筒 (10YR6/3)	ミガキ ミガキ	ミガキ ミガキ	輪轍入り。	豊瓦上。	
485	土器部	小型器	G	-	-	12P	19	Vlb	8.6			に-51-1-直筒 (10YR6/2) に-51-1-直筒 (10YR6/2)	ヨコマツ ヨコマツ	ヨコマツ ヨコマツ	(外) スヌ (内) コヅ		
486	土器部	有台盤	-	-	-	13Q	5	Vlc			7.3	に-51-1-直筒 (10YR6/3) に-51-1-直筒 (10YR6/3)	ヨコマツ ヨコマツ	ヨコマツ ヨコマツ	(外) スヌ (内) コヅ	古代の土器。	
487	直底器	高杯	-	-	-	13B	18	7.6				横U (2.5YR/2) 横U (2.5YR/2)	ヨコマツ ヨコマツ	ヨコマツ ヨコマツ	(外) 厚耳		
488	直底器	有台盤	-	-	-	13B	8	7.6			8.8	横U (2.5YR/2) 横U (2.5YR/2)	ヨコマツ ヨコマツ	ヨコマツ ヨコマツ	(外) 厚耳		
489	直底器	直	-	-	-	13B	24	7.6	23.2			横U (2.5YR/2) 横U (2.5YR/2)	ヨコマツ ヨコマツ	ヨコマツ ヨコマツ	(外) 厚耳		
490	直底器	直	-	-	-	11Q	11	Vd	21.8			横U (2.5YR/2) 横U (2.5YR/2)	ヨコマツ ヨコマツ	ヨコマツ ヨコマツ	(外) 厚耳		
491	土器部	円筒形 器皿	-	-	-	11Q	17	Vd				に-51-1-直筒 (10YR6/3) に-51-1-直筒 (10YR7/3)	ミガキ	ミガキ	最大厚14.0mm 輪轍により変化。		

## 観察表

余川中道遺跡Ⅱ 古墳時代 木製品観察表

報告番号	種別	標本番号	分類	木取り	遺物	グリッフ		被覆	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	材質	参考
						大	小						
492	-5	618	イヌガヤ	芯持	-	12B 13B	22 2	Vt b	374	22	1.6		
493	曲物丸板	615	ヒノキ	桙口	-	12Q	24	Vt b	98	23	6		
494	曲物丸板	616	ヒノキ	桙口	-	13Q	2	Vt b	90	49	5		
495	曲物丸板	617	ヒノキ	桙口	-	13Q	11	Vt b	98	59	5		

余川中道遺跡Ⅱ 古墳時代 石製品観察表

報告番号	種別	分類	石材	遺物		グリッフ	被覆	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	材質	参考
				種別	番号								
426	礫石	褐色	SD	3602	12V	23	Z	156	68	65	1199.5		
471	勾玉	褐色複合質	-	-	13T	5	Vt b	37	20	11	11.35		
472	扇石	花崗岩	SD	2100	13T	15	1	95	86	54	614.5	扇石遺跡から出土。	
473	扇石	砂岩	SD	2100	13U	11	1	129	73	51	816.5	扇石遺跡から出土。	
474	扇石	砂岩	SD	2100	13U	8	1	150	82	59	815.3		
496	白玉	滑石	-	-	10Q	17	K1	5	4.5	2.5	0.12		

# 観察表

## 金屋遺跡Ⅲ 溝観察表

遺跡名	グリッド	検出層位	平面形	断面形	長さ (m)	幅 (cm)	厚さ (cm)	主な方向	出土遺物	査定用途	備考
SD 1	190X 7 24	VbM上部	直線	台形状	[1.04]	30	6	N-79°-W			
SD 2	190X f 16-17-21-22	VcM上部	直線	台形状	3.6	75 ~ 91	9 ~ 14	N-77°-W	土脚部 7 点	> SD9	
SD 3	190X 7 16-17	VcM上部	直線	弧状	3.44	34 ~ 86	5 ~ 13	N-81°-W	土脚部 1 点	< SD8	
SD 4	190X f 11-12-13-17	VcM上部	直線	弧状	[3.44]	43 ~ 55	7 ~ 9	N-73°-W	土脚部 3 点		
SD 5	190X f 6-7-8	VcM上部	直線	弧状	[2.80]	42 ~ 80	6 ~ 8	N-87°-W	土脚部 3 点		
SD 6	190X 7 7	VcM上部	直線	弧状	[1.48]	46	6	N-85°-W	土脚部 3 点、黒色土層 1 点	< SD25	
SD 7	190X f 6-7-11-12	VbM上部	直線	弧状	1.68	30	5	N-78°-W	土脚部 (1)、土脚部 2 点		
SD 8	190X 7 10	VcM上部	直線	弧状	[4.48]	29 ~ 51	4 ~ 13	N-30°-W	土脚部 4 点	> SD3	
SD 9	190X 20-25,190X f 16	VbM上部	直線	弧状	[1.28]	33 ~ 82	6 ~ 8	N-53°-E	土脚部 3 点、黒色土層 1 点	< SD9 > SD13-14	
SD 12	190X 7 6	VbM上部	直線	弧状	0.83	20 ~ 24	9	N-78°-W			
SD 13	190X f 16-21-22-23, 190X 7 2	VbM上部	直線	U字状	[6.00]	45 ~ 47	14 ~ 16	N-61°-W	土脚部 (2)、土脚部 6 点	< SD9 > SD13-14	
SD 14	190X 25,190X f 21-22, 190X 7 2	VbM上部	直線	U字状	[6.32]	37 ~ 50	10 ~ 20	N-62°-W	土脚部 5 点	< SD9 > SD15	
SD 15	190X f 21	VbM上部	直線	弧状	[0.24]	36	4	N-22°-E		< SD13-14	
SD 16	190X f 2-6-7-8-12-13	VcM上部	直線	台形状	[4.95]	42 ~ 128	6 ~ 13	N-56°-W			
SD 17	190X f 6-7-11-12	VcM上部	直線	弧状	[2.20]	49 ~ 70	6	N-60°-W	土脚部 1 点		
SD 18	190X f 11-12-16-17	VcM上部	直線	弧状	[1.52]	76	10	N-66°-W	土脚部 1 点		
SD 19	190X 16-17	VcM上部	直線	台形状	[2.40]	55 ~ 65	16 ~ 22	N-71°-W	土脚部 (3)		
SD 20	190X f 16-17-22	VbM上部	直線	台形状	[2.40]	68	20	N-59°-W		> SK30	
SD 23	190X 7-2-3	VbM上部	直線	台形状	[1.52]	40	6	N-59°-W	土脚部 1 点	> SK30	
SD 24	190X f 11-12	VcM上部	直線	弧状	[1.38]	26 ~ 42	13	N-56°-W	土脚部 1 点		
SD 25	190X f 1-2-6-7	VcM上部	直線	弧状	[2.08]	28	6	N-35°-W	土脚部 1 点	> SD6	
SD 27	190X f 19-20-29	VbM上部	直線	台形状	[4.95]	111	44	N-48°-W	土脚部 (4-7)、黒色土層 (4-6)、土脚部 31 点、黒色土層 2 点	> SD10-SD34	
SD 28	190X f 24-25,190X 10-11, 190X f 21,190X 4	VbM上部	直線	台形状	[4.00]	74	30	N-58°-W	土脚部 13 点	> SK34-PS3	
SD 29	190X f 3-4	VcM上部	直線	弧状	[3.04]	162	24	N-60°-W	土脚部 7 点		
SD 31	190X f 21-22,190X f 1-2-3	VbM上部	直線	弧状	[2.81]	39 ~ 49	9	N-48°-W			

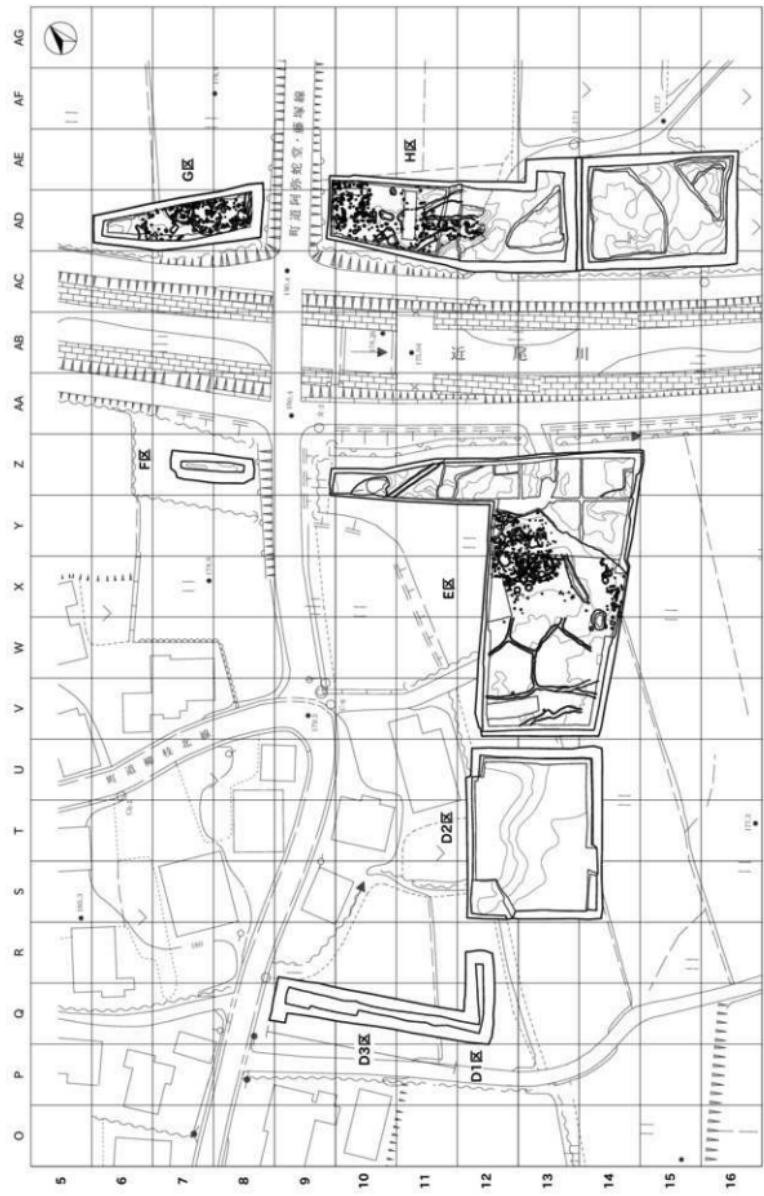
## 金屋遺跡Ⅲ ピット観察表

遺跡名	グリッド	平面形	断面形	長さ (m)	幅 (cm)	厚さ (cm)	出土遺物	査定用途	備考
P 10	190X f 11	円形	円形	18	16	7			
P 11	190X f 6	円形	円形	20	19	15			< SD9
P 21	190X f 7-2	円形	円形	20	19	11			
P 26	190X f 1	円形	円形	28	27	12			
P 30	190X f 13	円形	弧状	18	16	8			
P 33	190X f 25	円形	弧状	40	37	6			< SD32

## 金屋遺跡Ⅲ 古代 土器観察表

査定番号	種類	グリッド	遺跡	剖面	計測値 (cm)	外観	上部 (内) / 下部 (内) / 内面	底面	底面人物	底面・調整	付着物	備考		
1	土脚部	無陶	190X f 6	SD7	1	-	-	5.6	臼・棒・直角・L字	ロクロナフ				
2	土脚部	無陶	190X f 3-5 190X f 21	SD13	1	-	7.0	浅底盤 (7.0V87.3) 浅底盤 (7.0V88.4)	臼・直・棒	ロクロナフ (底内)ミラゼ		(内・外)摩耗		
3	土脚部	無陶	190X f 17	SD19	2	12.5	4.5	浅底盤 (7.0V88.4) 浅底盤 (7.0V88.5)	臼・直・棒	ロクロナフ (内)		(内)摩耗		
4	土脚部	無陶	190X f 25	SD27	2	12.8	4.1	浅底盤 (7.0V87.4)	臼・直・棒	ロクロナフ (内)		(外・内)摩耗		
5	土脚部	小甕	190Y f 20	SD27	2	-	-	6.2	浅底盤 (7.0V88.3) 内・外・底 (7.0V87.3)	臼・直・棒	ロクロナフ (内) 底内・ケツカフ	(外)スヌ (内)スヌ		
6	土脚部	長甕	190Y f 20	SD27	2	17.8	-	12.0	浅底盤 (7.0V87.4) 浅底盤 (7.0V88.4)	臼・直	ロクロナフ	底内・成形 (内・外)モザイク	底内・成形 (外)スヌ (内)モザイク	
7	土脚部	長甕	19Y-25 20-25	SD27	2	21.6	-	12.0	浅底盤 (7.0V87.4) 浅底盤 (7.0V88.4)	臼・直	ロクロナフ	底内・成形 (内・外)モザイク	底内・成形 (外)スヌ 底内・人頭骨	
8	黑色土層	無陶	19Y-25 20-25	SD27	2	13.8	-	12.0	内・外・底 (7.0V87.4) 底 (7.0V88.4)	臼・直・棒	ロクロナフ (内)モザイク		底内・外 一張黒地化	
9	黑色土層	無陶	19Y-20	SD27	2	13.8	-	12.0	内・外・底 (7.0V87.4) 底 (7.0V88.4)	臼・直	ロクロナフ		底内・外 一張黒地化 一張黒地化	
10	黒色土層	石片	19Y-19	SD27	2	21.6	12.8	9.8	底 (7.0V87.4) 底 (7.0V88.4)	臼・直・棒	ロクロナフ (内)モザイク		底内・成形 底内・モザイク	
11	土脚部	小甕	19Y-19	SD24	1	13.2	-	12.0	底 (7.0V87.4) 底 (7.0V88.4)	石	ロクロナフ		底内・成形 12.1cm	
12	土脚部	長甕	19Y-20	SD24	1	21.4	-	12.0	底 (7.0V87.4) 底 (7.0V88.4)	石・直	ロクロナフ		底内・成形 19.0cm	
13	土脚部	長甕	19Y-19	SD24	1	19.0	-	12.0	底 (7.0V88.4)	臼・直	ロクロナフ		底内・成形 17.5cm	
14	黒色土層	石片	19Y-20	SD24	1	-	-	12.0	底 (7.0V88.4) 底 (7.0V89.4)	石	ロクロナフ (内)モザイク		底内・成形 底内・モザイク	
15	土脚部	無陶	190X f 6-7	-	Vc	-	-	5.0	底 (7.0V87.6) 底 (7.0V88.6)	石	ロクロナフ			
16	土脚部	無陶	19Y-25	-	Vc	-	-	4.8	底 (7.0V87.4) 底 (7.0V88.4)	石・直	ロクロナフ (内)モザイク			
17	土脚部	長甕	19X f 20	-	Vc	23.6	-	-	内・外・底 (7.0V86.4) 内・外・底 (7.0V87.4)	臼・直・棒	ロクロナフ			
18	黒色土層	無陶	19X f 1	-	Vc	13.0	-	-	底 (7.0V86.6) 底 (7.0V87.1)	石	ロクロナフ (内)モザイク			
19	黒色土層	無陶	19X f 12	-	Vc	12.8	-	-	内・外・底 (7.0V86.4) 底 (7.0V86.6)	臼・直・棒	ロクロナフ (内)モザイク			
20	黒色土層	無陶	19X f 12	-	Vc	-	-	5.6	底 (7.0V86.6) 底 (7.0V86.6)	臼・直・棒	ロクロナフ (内)モザイク			
21	底面	甕	19X f 17	-	Vc	-	-	-	内 (5.5V4/1) 内 (5.5V6/1)	臼・直・棒	ロクロナフ		底内・成形 (外)自然緑	

図 版



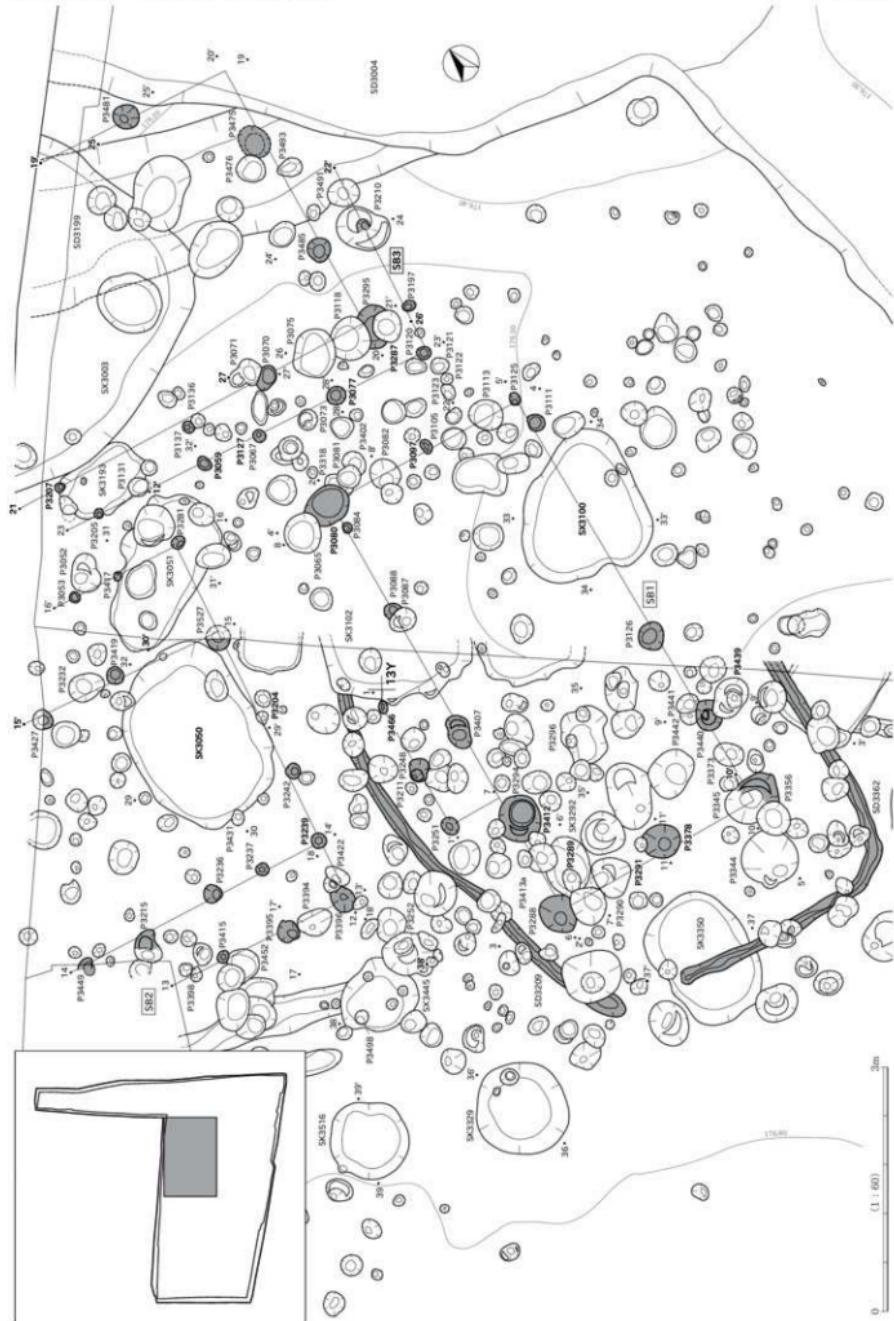




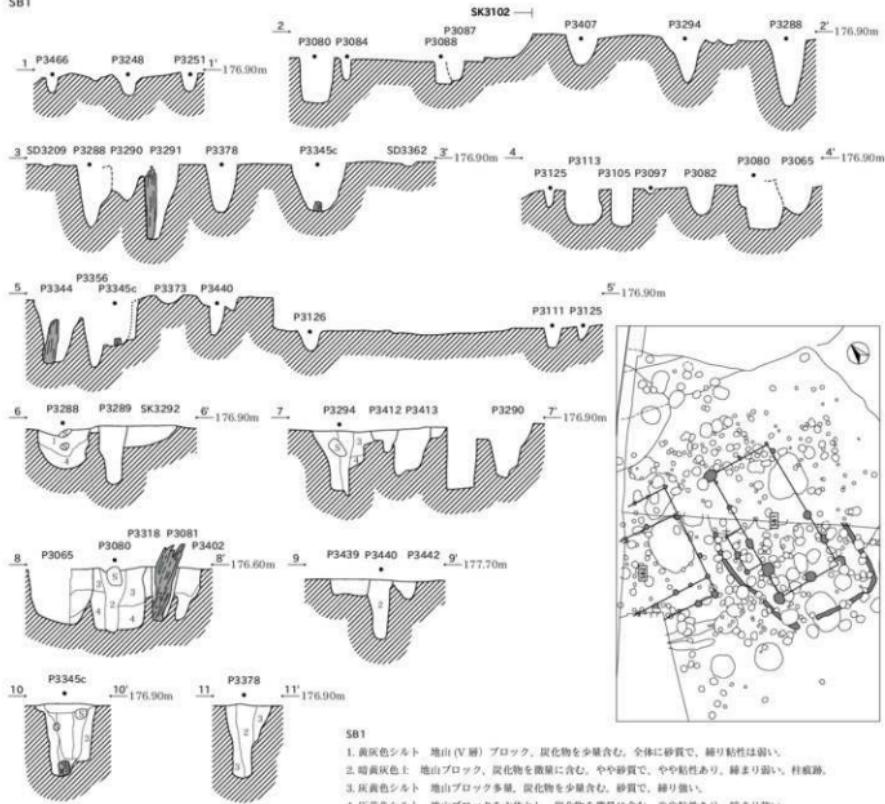


余川中道遺跡Ⅱ E区(上層) 遺構分割図(3)

図版5



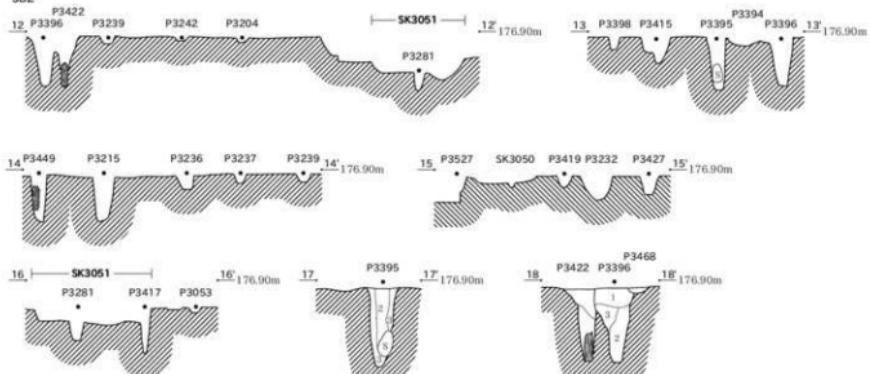
SB1



SB1

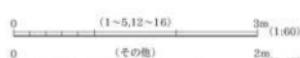
1. 黄灰色シルト 地山(V層) ブロック。炭化物を少量含む。全体に砂質で、練り粘性は弱い。
2. 暗黃灰色土 地山ブロック、炭化物を微量に含む。やや砂質で、やや粘性あり。練り弱い。柱痕路。
3. 灰黃色シルト 地山ブロック多量、炭化物を少量含む。砂質で、練り強い。
4. 灰黃色シルト 地山ブロックを主体とし、炭化物を微量に含む。やや粘性あり。練り強い。

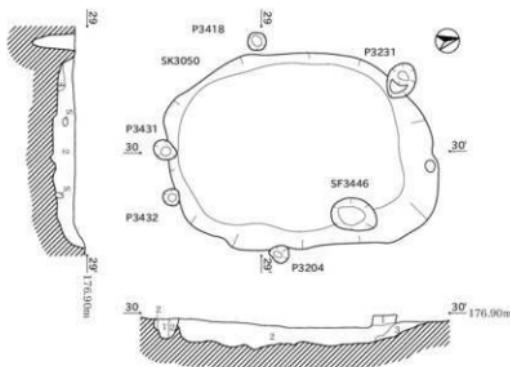
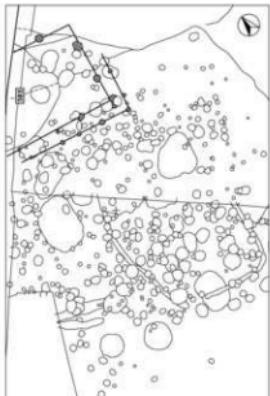
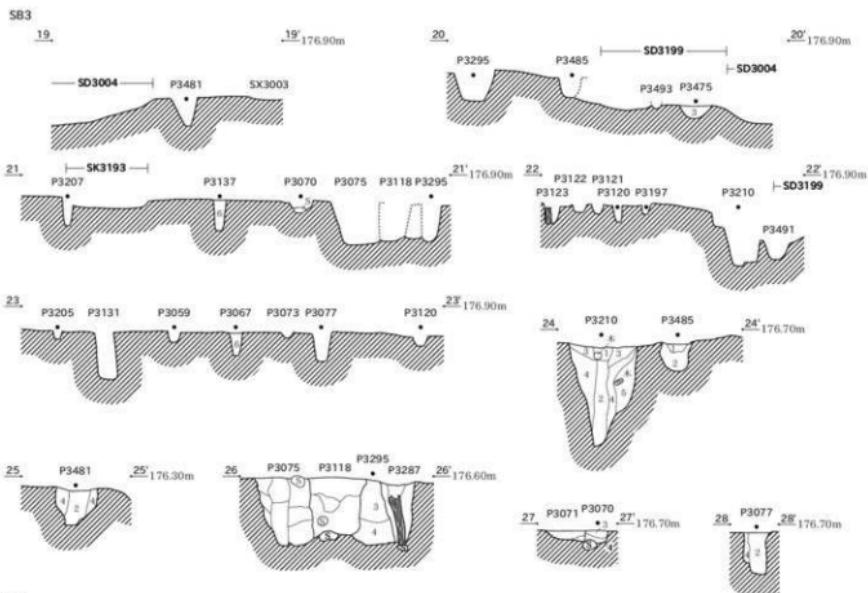
SB2



SB2

1. にじいろ黄色土 地山(V層) ブロックを主体とし、砂質な黒褐色土、炭化物を少量含む。練り強く。やや粘性あり。
2. 暗黃色土 地山ブロック、炭化物を微量に含む。やや砂質で練り粘性とも弱い。柱痕路。
3. 灰黃色シルト 地山ブロック多量、炭化物を少量含む。やや粘性あり。練り強い。



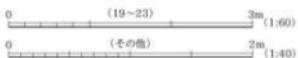


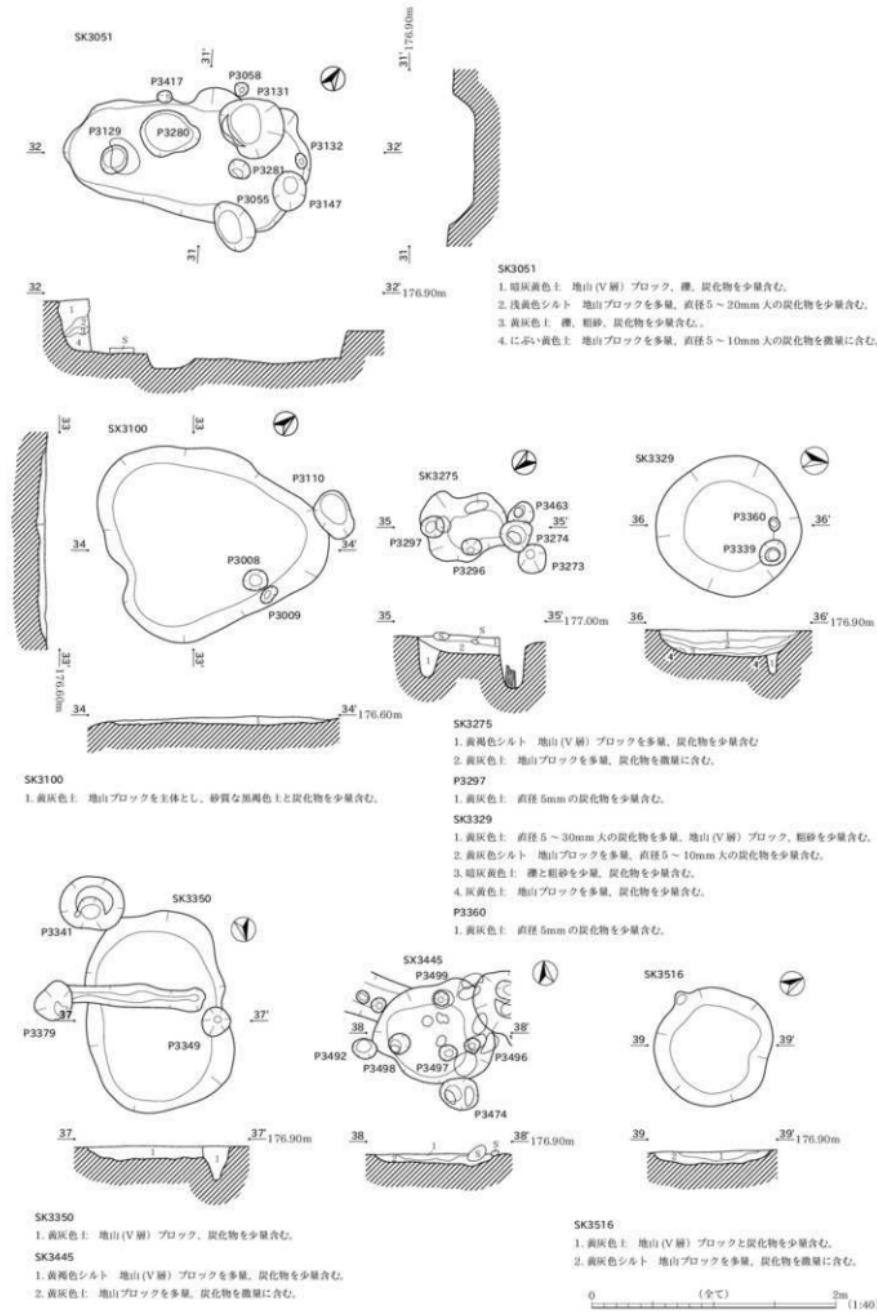
SB3050

1. 黄灰色土 地山(V層) ブロック。炭化物を少量含む。
2. 黄灰色シルト 地山ブロックを多量。炭化物を少量含む。全体に砂質である。
3. 暗黄色土 地山ブロックを少量含む。
4. 黄灰色シルト 地山ブロックを多量。炭化物を微量に含む。

P3431

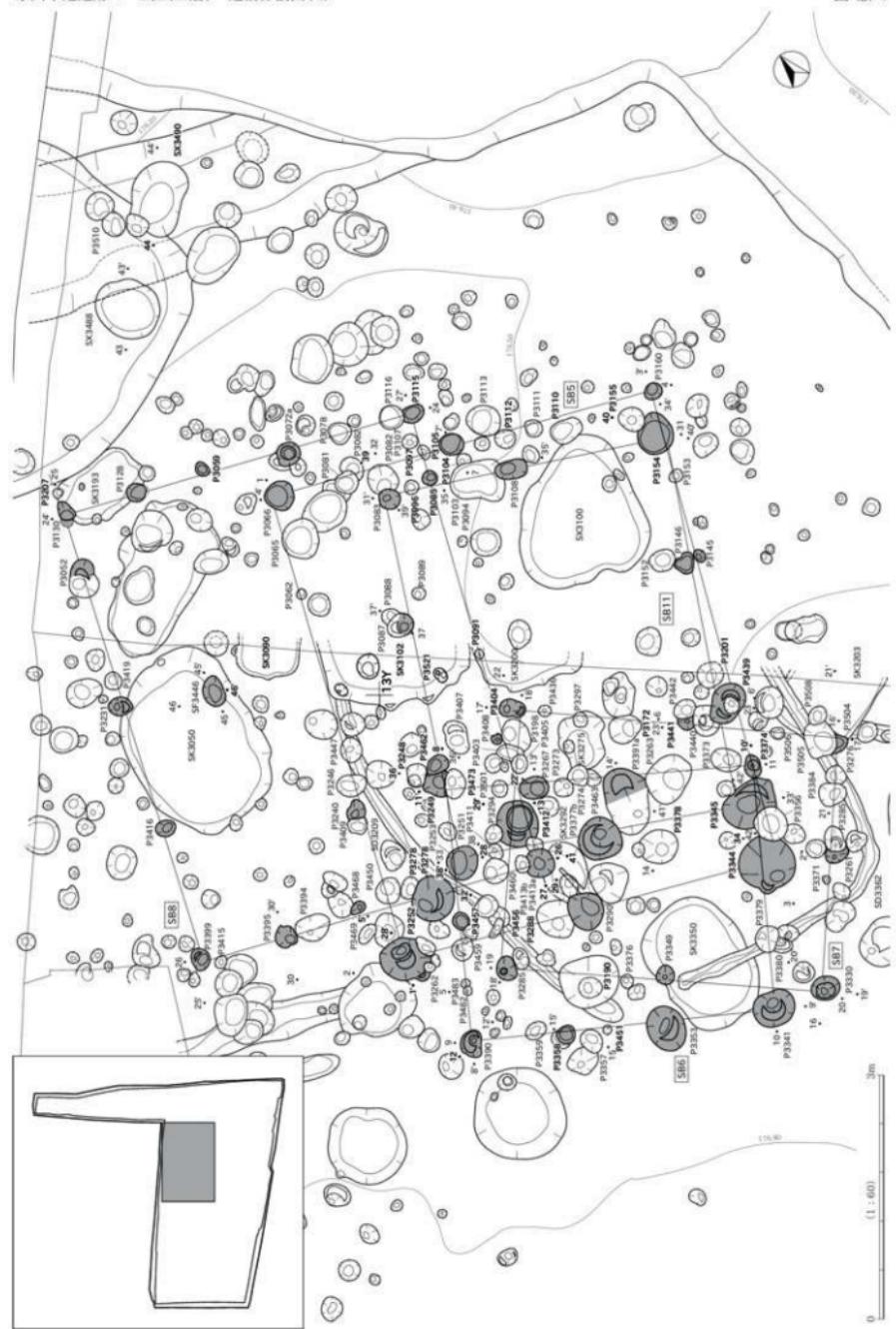
1. 暗オリーブ色土 土 繊りやや強い、粘性やや弱い。直径5~10mmの炭化物少量。
2. 淡黄色土 ブロック・直徑2~5mmの炭化物少量。
3. 黄褐色土 土 繊り・粘性強い。直徑5~20mmの淡黄色土ブロック多量。直徑2~5mmの炭化物少量。



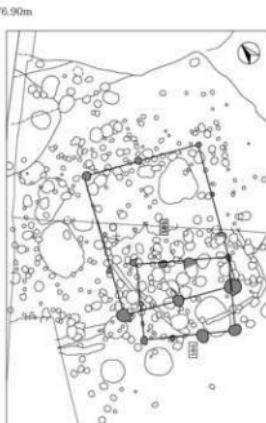
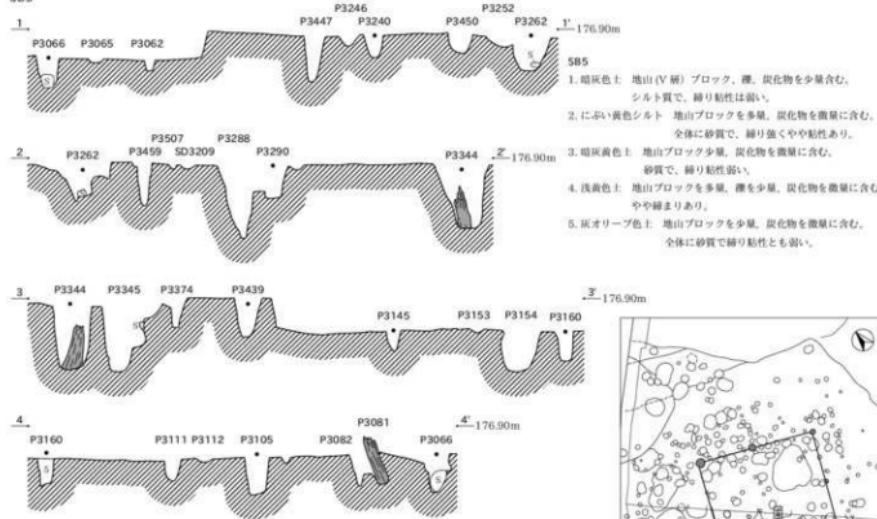


### 余川中道遺跡II E区(上層) 遺構分割図(4)

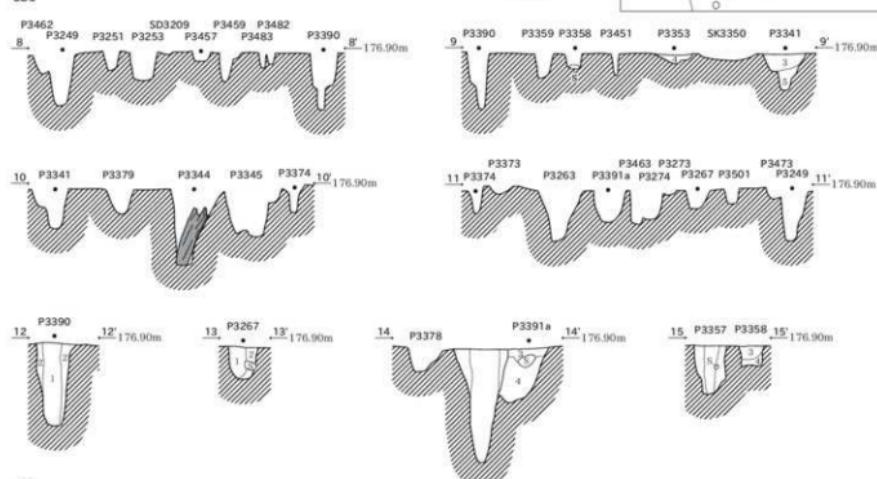
版 9



SB5



SB6

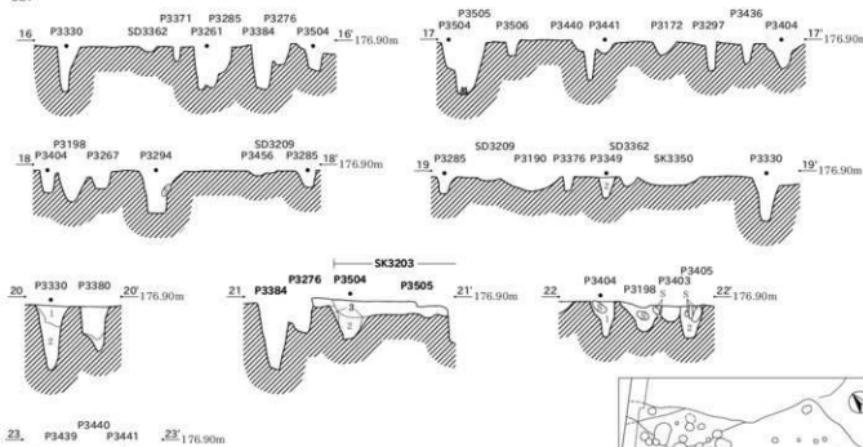


SB6

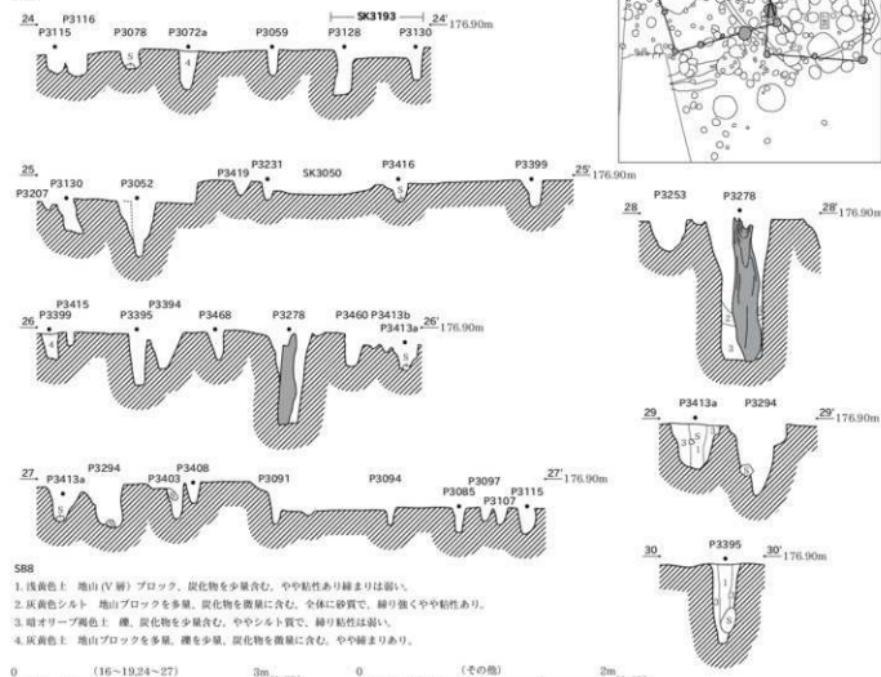
1. 暗灰色土 地山(V層) ブロック、炭化物を少量含む。やや粘性あり練まりは弱い。
2. 暗黄色シルト 地山ブロックを多量、炭化物を微量に含む。全体に砂質で、練り強くやや粘性あり。
3. 暗オリーブ褐色土 地山ブロックを少量、炭化物を微量に含む。砂質で、練り粘性弱い。
4. 暗黄色シルト 地山ブロックを多量、礫を少量、炭化物を微量に含む。やや練まりあり。
5. 暗黄色土 細粒と粗粒を少量、炭化物を微量に含む。シルト質で、練り粘性は弱い。

## 余川中道遺跡II E区(上層) 遺構個別図(5)

SB7



SB8



(16'~19.24'~27')

3m

(1:60)

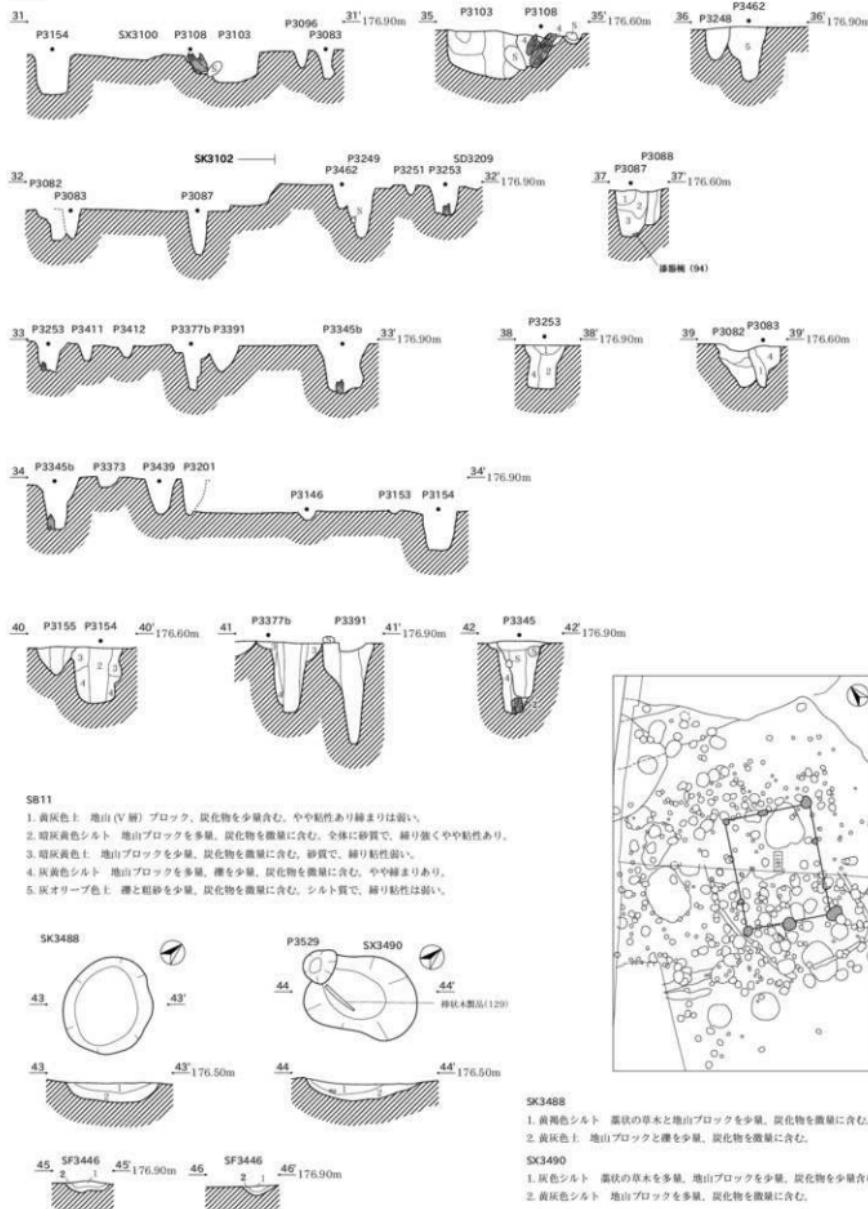
0

(その他)

2m

(1:40)

SB11



SK3488

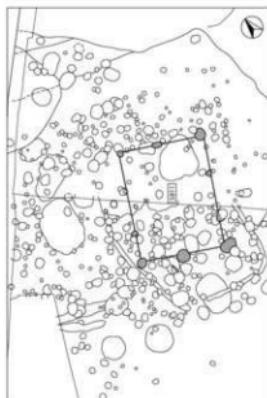
1. 黄灰色土 地山(V層) ブロック、炭化物を少量含む。やや粘性あり縫まりは弱い。
2. 緩灰黄色シルト 地山ブロックを多量。炭化物を微量に含む。全体に砂質で、縫り強くやや粘性あり。

SX3490

1. 灰色シルト 茎状の草木と地山ブロックを少量。炭化物を微量含む。
2. 黄灰色シルト 地山ブロックと礫を少量。炭化物を微量に含む。

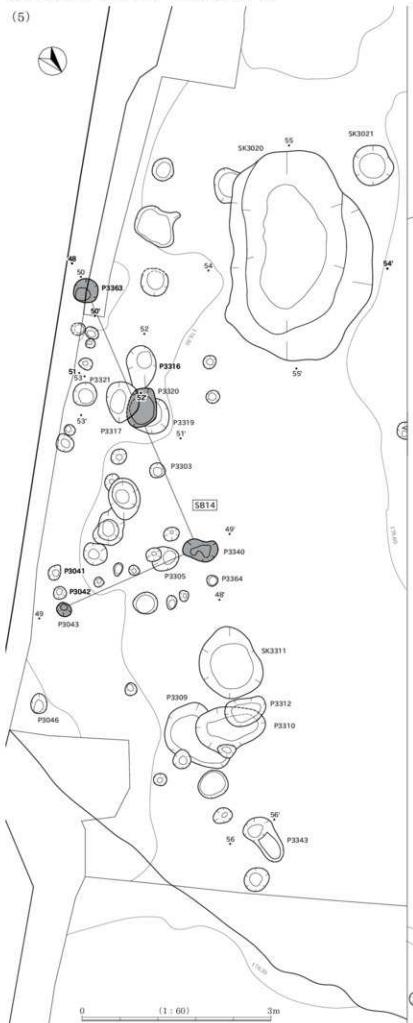
SF3446

1. 暗赤灰色土 地山(V層) ブロック、地土ブロックを少量。炭化物を微量に含む。粘性ないが縫まりは弱い。
2. 暗赤灰色土 地底の焼成化した部分で上部は融成して赤橙色である。全体に砂質でよく縫まり強い。

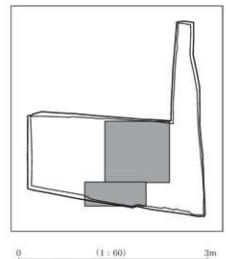


余川中道跡 II E区(上層) 遺構分割図(5)-(6)

(5)

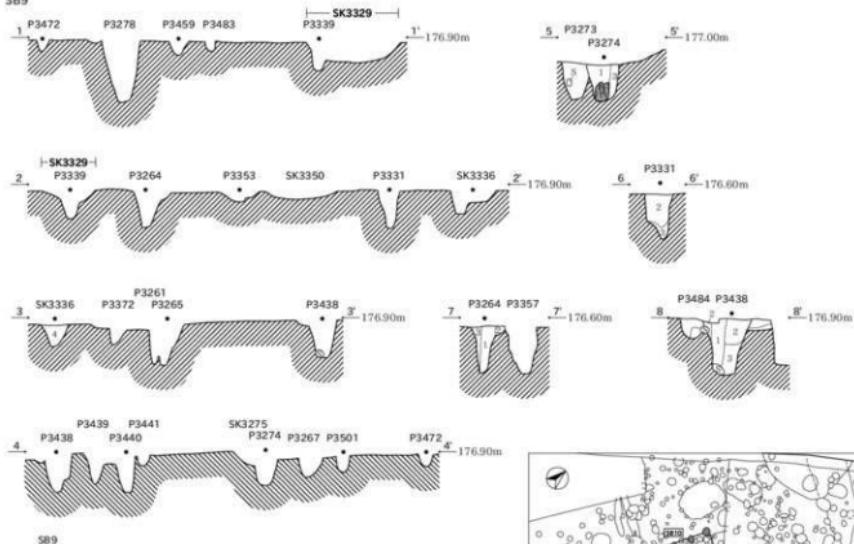


(6)

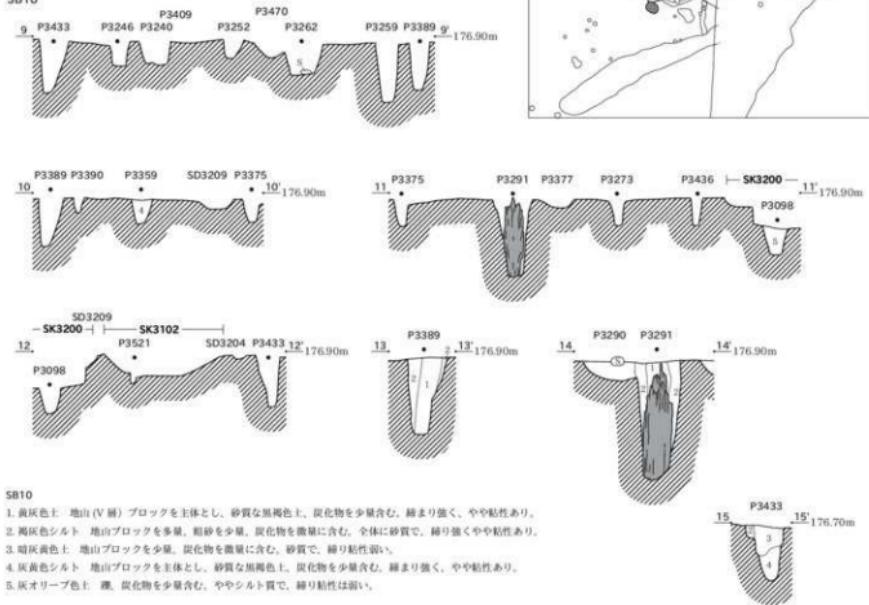


## 余川中道遺跡II E区(上層) 遺構個別図(7)

SB9



SB10



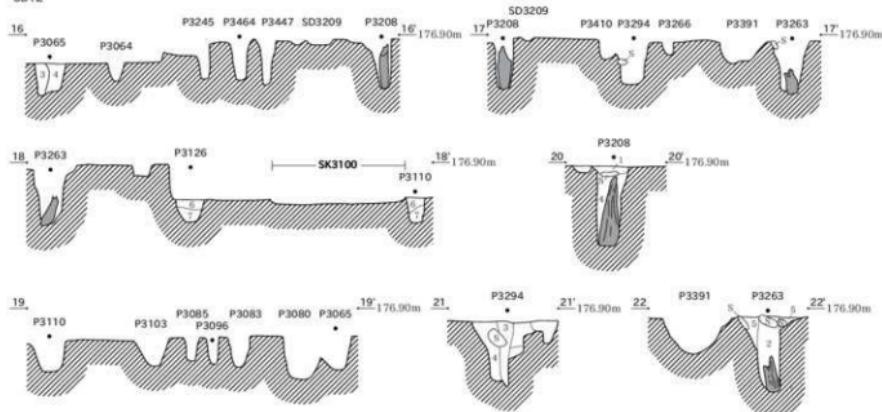
0 (1~4.9~12) 3m (1:60)

0 (その他の) 2m (1:40)

図版 15

余川中道遺跡II E区(上層) 遺構個別図(8)

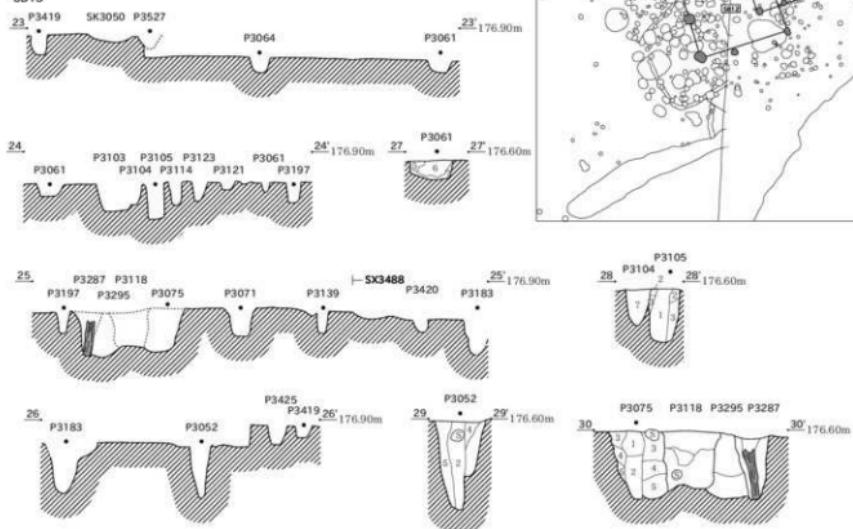
## SB12



## SB12

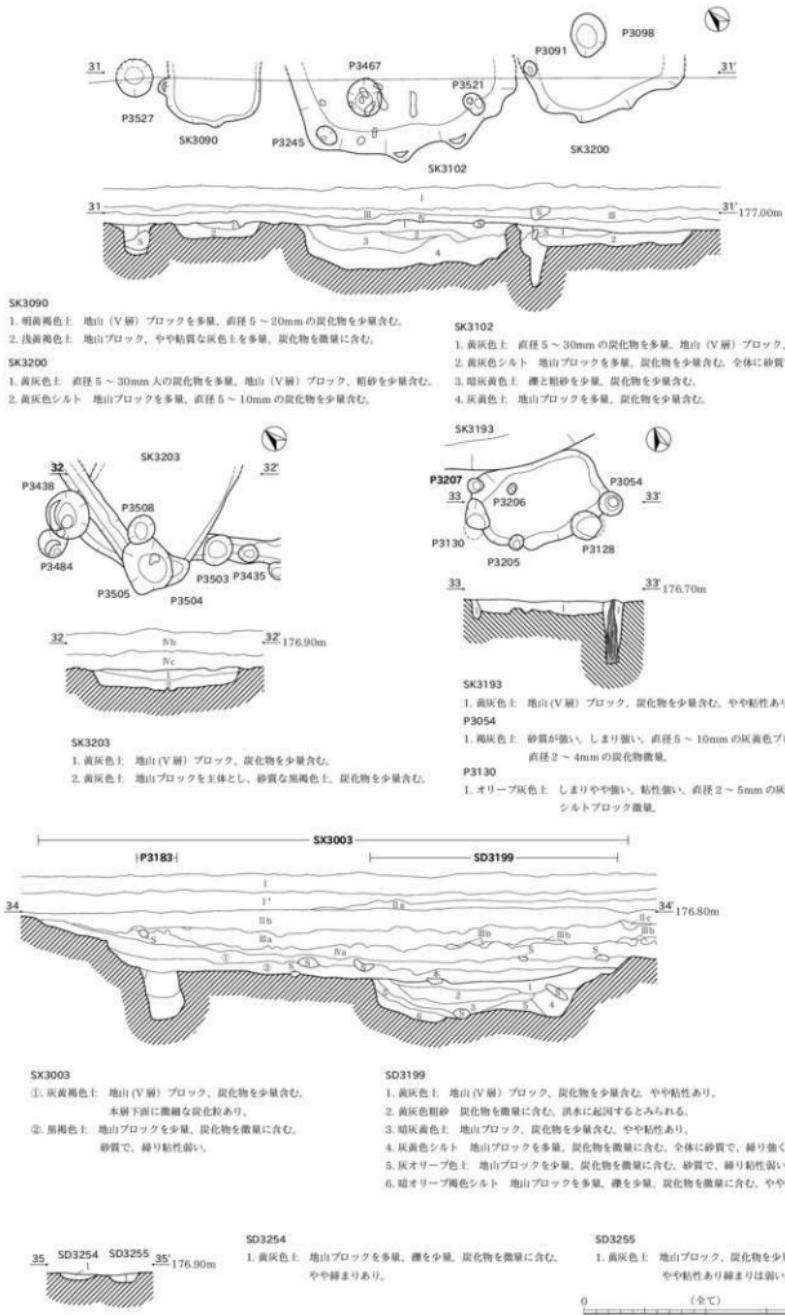
1. 淡黄色土 地山(V層) ブロック、炭化物を少量含む。やや粘性あり縫まりは弱い。
2. 黄灰色シルト 地山ブロックを多量、炭化物を微量に含む。全体に砂質で、縫り強くやや粘性あり。
3. 黄褐色シルト 地山ブロック、炭化物を少量含む。やや粘性あり縫まりは弱い。
4. 黄褐色シルト 地山ブロックを多量、炭化物を微量に含む。全体に砂質で、縫り強くやや粘性あり。
5. 灰オーブル色シルト 地山ブロックを少量、炭化物を微量に含む。砂質で、縫り粘性弱い。
6. 灰オーブル色シルト 地山ブロックを多量、縫を少量、炭化物を微量に含む。やや縫まりあり。
7. にせい黄色土 煙、炭化物を少量含む。ややシルト質で、縫り粘性は弱い。

## SB13



## SB13

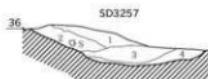
1. 黄灰色土 地山(V層) ブロックを主体とし、砂質の黒褐色土、炭化物を少量含む。縫まり強く、やや粘性あり。
2. 暗灰褐色シルト 地山ブロックを多量、炭化物を微量に含む。全体に砂質で、縫り強くやや粘性あり。
3. 暗灰褐色土 地山ブロック、炭化物を少量含む。やや粘性あり縫まりは弱い。
4. 黄褐色シルト 地山ブロックを多量、炭化物を微量に含む。全体に砂質で、縫り強くやや粘性あり。
5. 灰オーブル色土 地山ブロックを少量、炭化物を微量に含む。砂質で、縫り粘性弱い。
6. にせい黄色土 地山ブロックを少量、炭化物を微量に含む。砂質で、縫り粘性弱い。
7. 灰褐色シルト 地山ブロックを多量、縫を少量、炭化物を微量に含む。やや縫まりあり。



0 (全て) 2m (1:40)

図版 17

余川中道遺跡 II E区(上層) 遺構個別図(10)

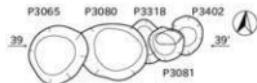


## SD3257

1. 黄灰色土 地山ブロック、礫と炭化物を少量含む。やや粘性あり。
2. 黄灰褐色シルト 地山ブロックを多量、粗砂と礫を少量、炭化物を微量に含む。やや締まりあり。
3. 灰褐色土 全体に砂質で繊りややあり、粘性なし。粗砂と拳太の円礫を少量含む。
4. 灰オーブル色土 地山ブロック、拳~人頭大の礫と炭化物を少量含む。やや粘性あり。

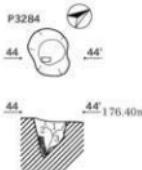
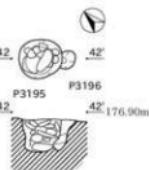
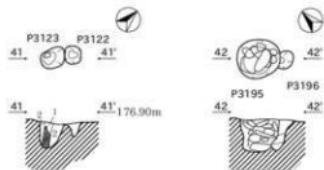
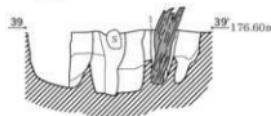
## SD3434

1. ふくらみ黄色土 地山ブロック、礫と炭化物を少量含む。やや粘性あり締まりは弱い。
2. 黄褐色シルト 地山ブロックを多量、粗砂と拳太の礫を少量、炭化物を微量に含む。やや締まりあり。



## P3081

1. 灰黄褐色シルト 地山(V層) ブロックを多量、炭化物を微量に含む。全体に砂質で、繊り強くやや粘性あり。



## P323

1. 黄灰褐色土 地山(V層) ブロック、炭化物を少量含む。やや粘性あり締まりは弱い。
2. 黄灰褐色シルト 地山ブロックを多量、炭化物を微量に含む。全体に砂質で、繊り強くやや粘性あり。

## P3259

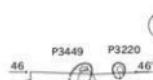
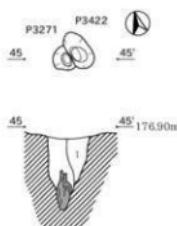
1. 灰灰褐色土 地山(V層) ブロックを少量含み、木質の腐植でやや空隙化。
2. 黄灰褐色シルト 地山ブロックを多量、根固めの礫を含む。繊り強い。

## P3195

1. 灰黄褐色シルト 地山(V層) ブロックを多量、炭化物を微量に含む。全体に砂質で繊り強い。直徑5cm~人頭大の礫を多量に含む。

## P3284

1. 黄灰褐色シルト 地山(V層) ブロック、炭化物を少量含む。やや粘性あり締まりは弱い。
2. 黄褐色土 地山ブロックを多量、炭化物を微量に含む。全体に砂質で、繊り強くやや粘性あり。
3. 灰色シルト 地山ブロックを少量、炭化物を微量に含む。砂質で、繊り粘性弱い。



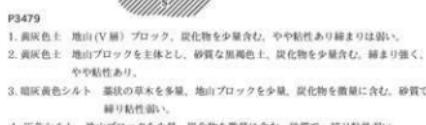
## P3422

1. 黄灰色シルト 地山ブロック、粗鉄鉢を多量、炭化物を少量含む。全体に砂質で、繊り強くやや粘性あり。



## P3449

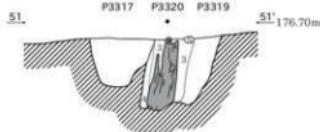
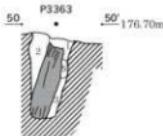
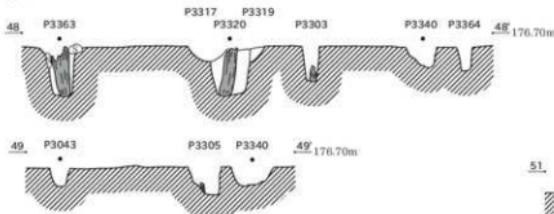
1. 黒褐色土 地山ブロック、粗砂を多量、炭化物を少量含む。全体に砂質で、繊り粘性ややあり。
2. 灰オーブル色シルト 地山ブロックを多量、炭化物を微量に含む。全体に砂質で、繊り強くやや粘性あり。



1. 黑褐色土 地山ブロック、粗砂を多量、炭化物を少量含む。全体に砂質で、繊り粘性ややあり。
2. 灰オーブル色シルト 地山ブロックを多量、炭化物を微量に含む。全体に砂質で、繊り強くやや粘性あり。
3. 灰灰褐色シルト 茎状の草木を多量、地山ブロックを少量、炭化物を微量に含む。砂質で、繊り粘性弱い。
4. 灰色シルト 地山ブロックを少量、炭化物を微量に含む。砂質で、繊り粘性弱い。

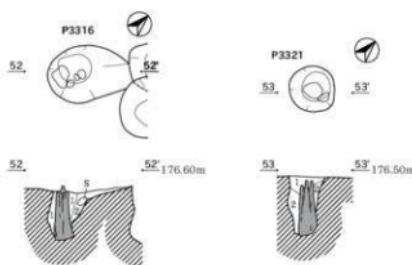
## 余川中道遺跡II E区(上層) 遺構個別図(11)

SB14



SB14

1. 黄灰色土 地山(V解) ブロック、炭化物を少量含む。やや粘性あり縫まりは弱い。
2. 黄灰色シルト 地山ブロックを多量、炭化物を微量に含む。全体に砂質で、縫り強くやや粘性あり。
3. 唾灰黄色土 地山ブロックを少量、炭化物を微量に含む。砂質で、縫り粘性弱い。
4. 黄灰色土 地山ブロックを多量、礫を少量、炭化物を微量に含む。やや縫まりあり。

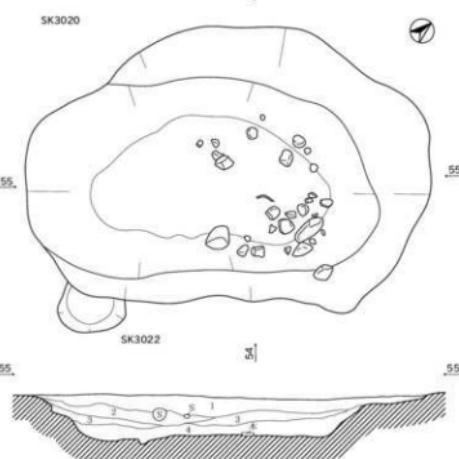


P3316

1. 黄灰色シルト 地山(V解) ブロック、炭化物を少量含む。やや粘性あり縫まりは弱い。
2. 黄灰色シルト 地山ブロックを主体とし。砂質な黒褐色土、炭化物を少量含む。縫まり強く。やや粘性あり。

P3321

1. 黄灰色シルト 地山(V解) ブロック、炭化物を少量含む。やや粘性あり縫まりは弱い。
2. 黄色シルト 地山ブロックを多量。炭化物を微量に含む。全体に砂質で、縫り強くやや粘性あり。



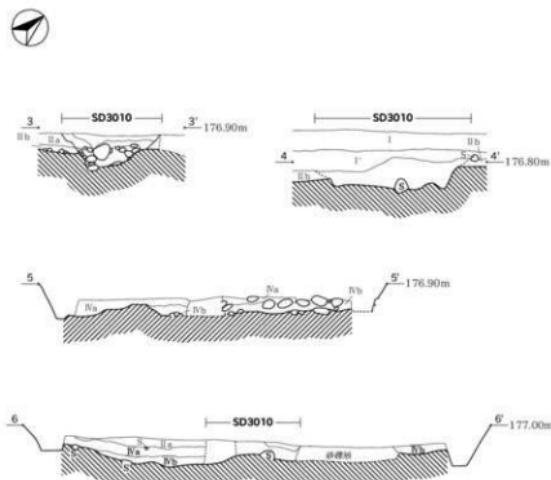
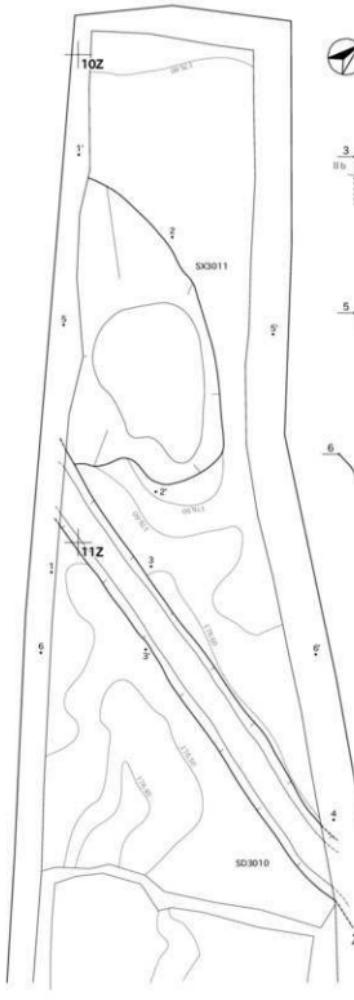
P3343

1. 黄灰色シルト 地山ブロックを多量、炭化物を微量に含む。全体に砂質で、縫り強くやや粘性あり。

SK3020

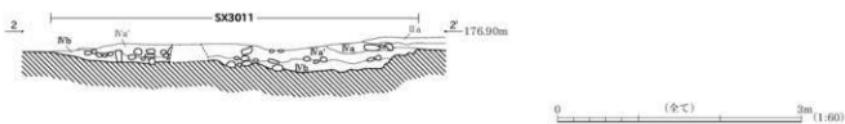
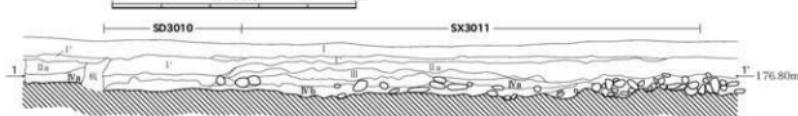
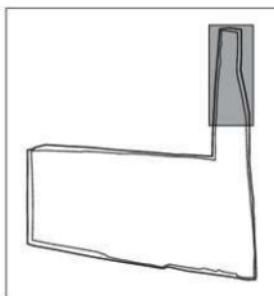
1. 黄灰色土 地山ブロックを主体とし。砂質な黒褐色土炭化物を少量含む。
2. 黄灰色シルト 地山ブロックを多量。炭化物を微量に含む。全体に砂質である。
3. 唾灰黄色土 矽、炭化物を少量含む。
4. 黄色土 地山ブロックを多量、炭化物を微量に含む。全体に砂質である。

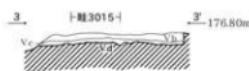
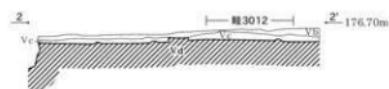
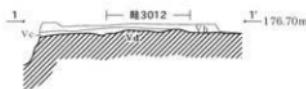
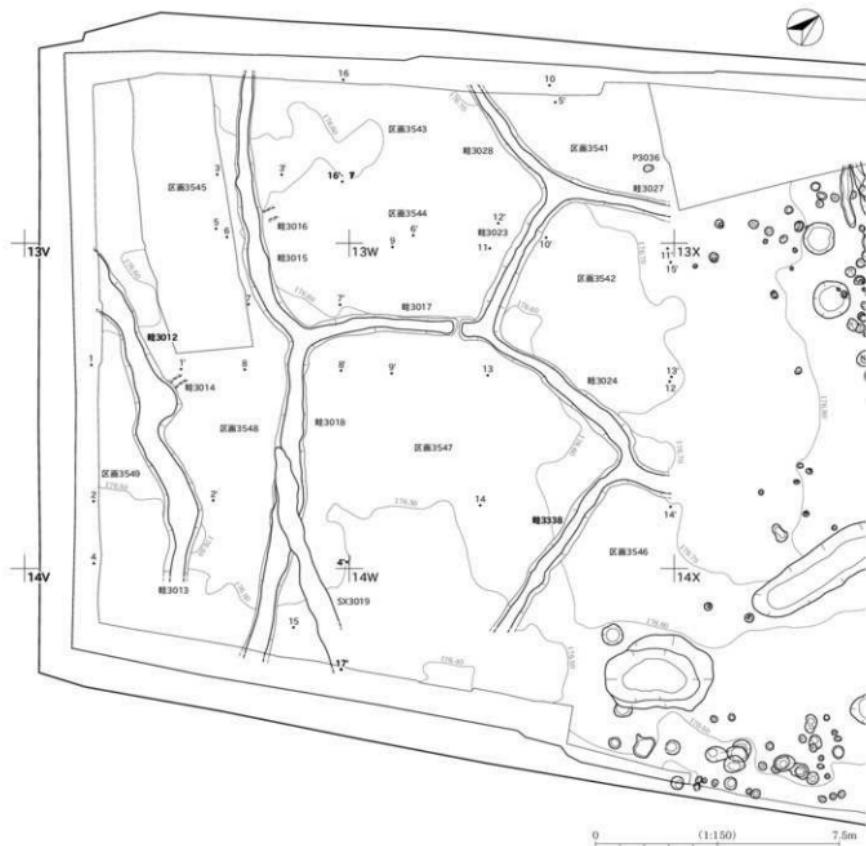




## 中世の農地場

- I 棕褐色土上 水田耕作土。直径 5cm 大以上の礫を含む。
- I' 灰色シルト 砂質が強い。褐鐵鉄を多量に含む。
- IIa 灰色土 シルト質で、上面 2 ~ 3cm は粗砂層である。洪水などを起因とする堆積。
- IIb にぶい黃褐色土 厚さ 1 ~ 2cm の粗砂とシルトが交互に堆積する。
- IIIa 黃褐色土 シルト質で、褐鐵鉄を多量に含む。炭化物と鉄器が出土した。
- IVb 褐褐色土 シルト質で、IVa 層よりも疊まり無く軟質である。直径 5 ~ 15cm 大の礫を含む。





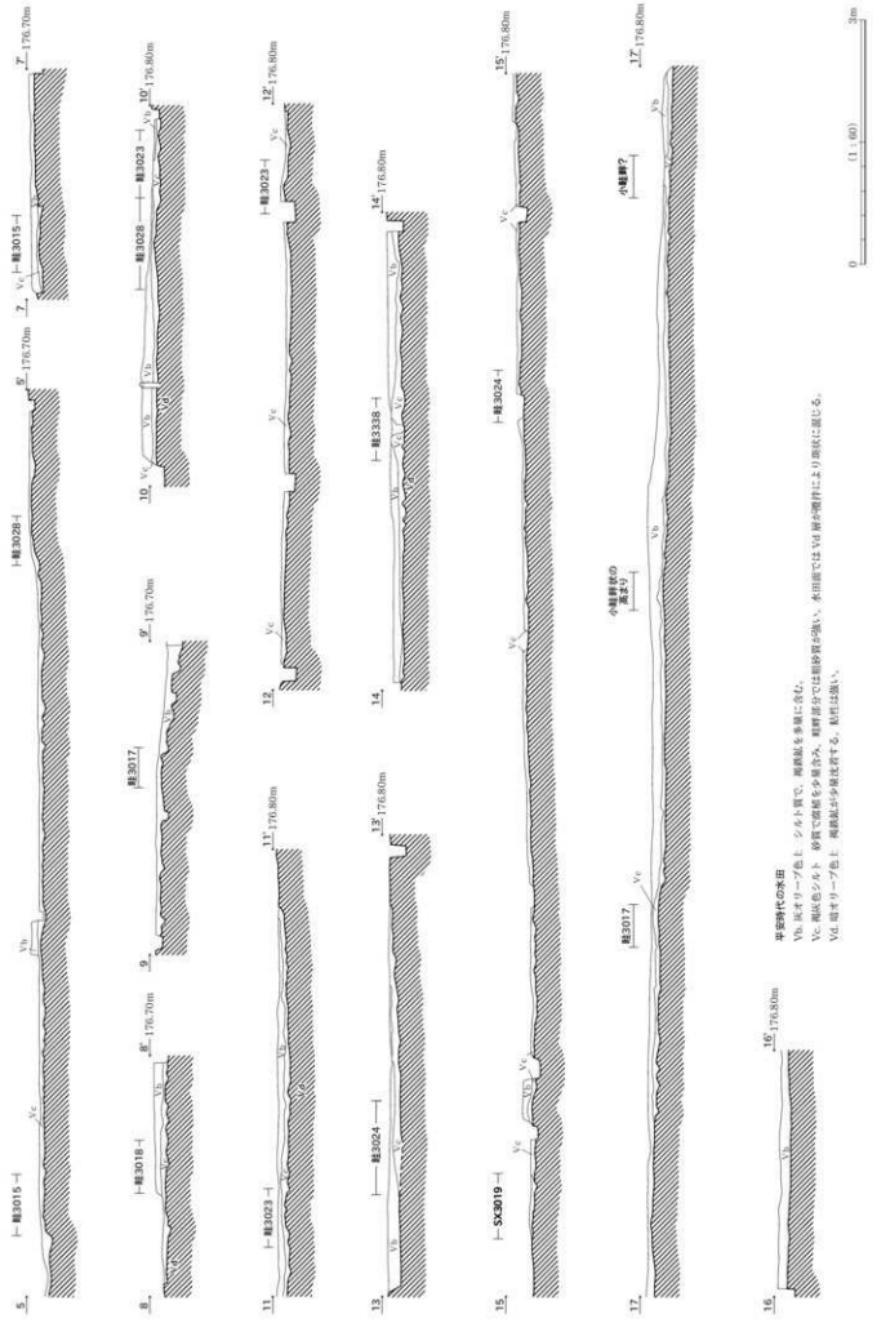
## 平安時代の水田

Vb: 暗オリーブ色土 シルト質で、褐鉄鉢を多量に含む。

Vc: 褐灰色シルト 砂質で礫相を少量含み、粗粒部分では粗砂質が強い。水面面では Vd 層が犠持により斑状に混じる。

Vd: 暗オリーブ色土 褐鉄鉢が少量沈着する。粘性は強い。

0 (全て) 3m (1:60)



AC

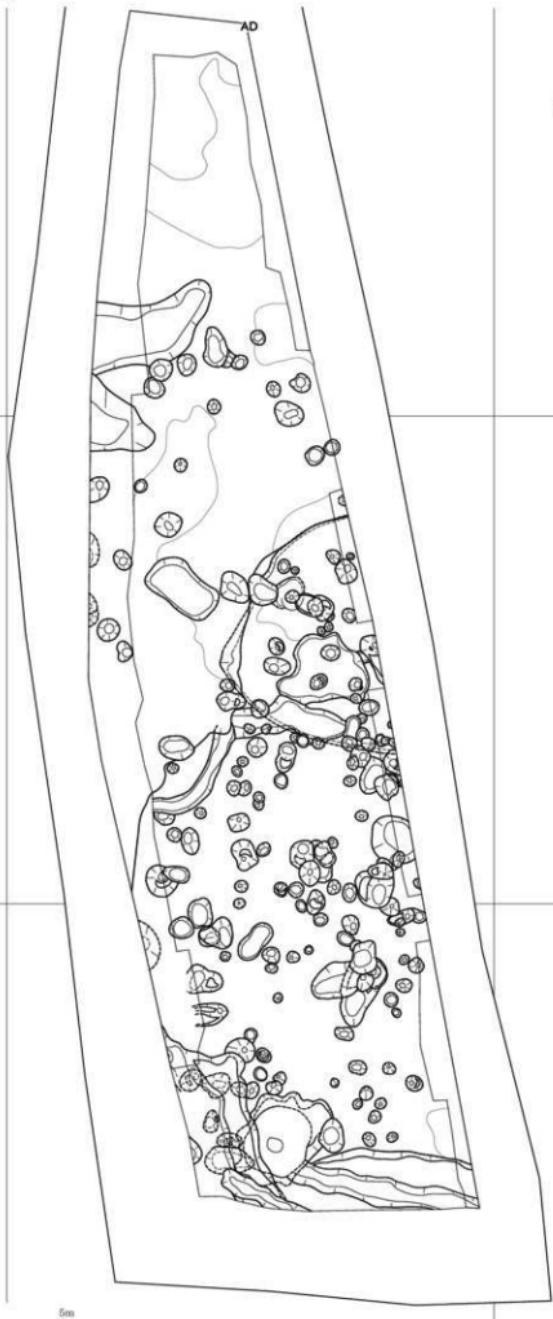
AD

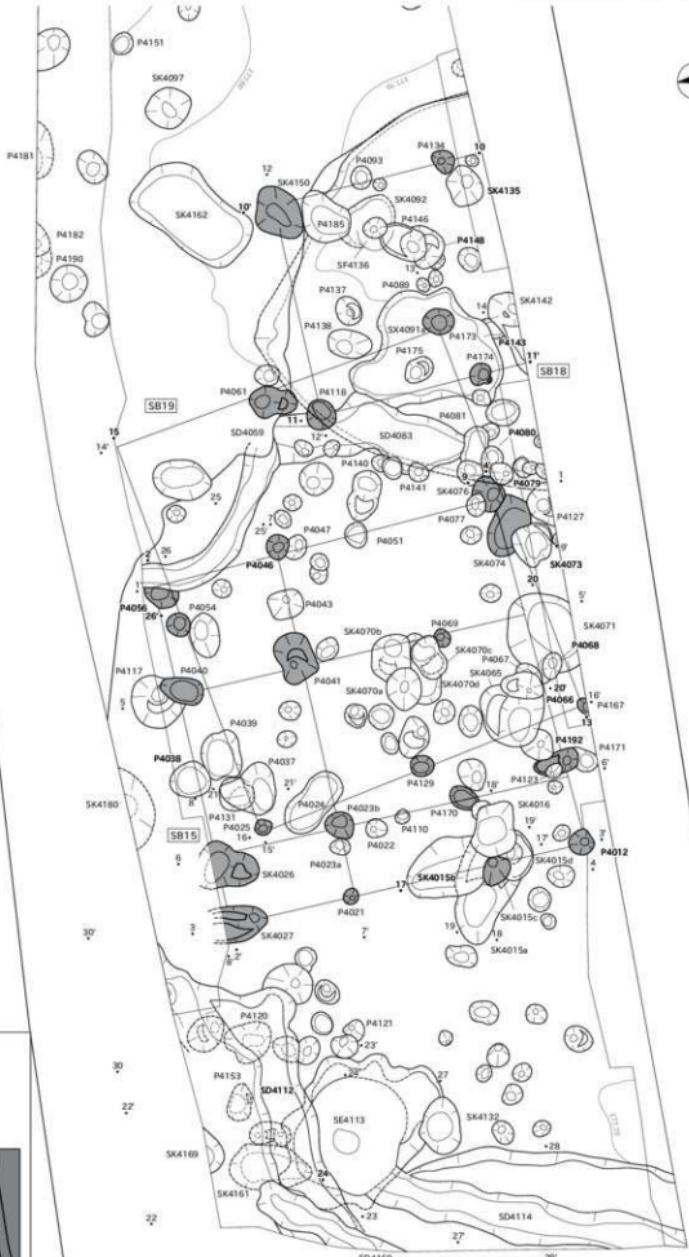
AE

6

7

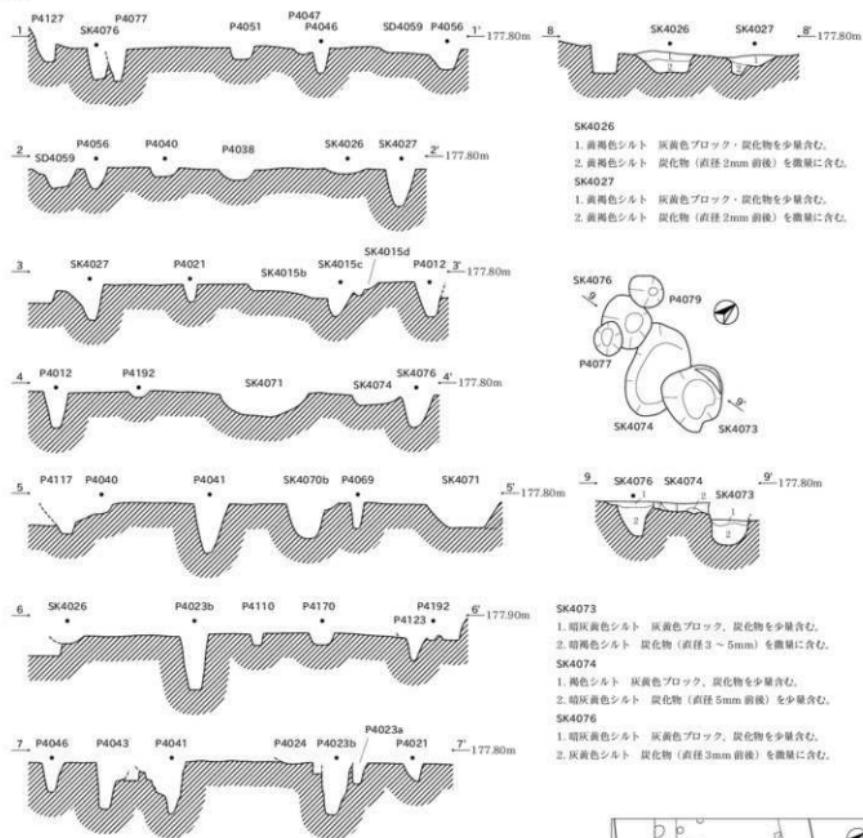
8





## 余川中道跡 II G区 遺構個別図(1)

SB15



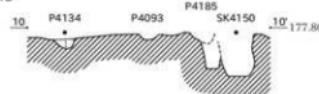
SK4026

1. 前褐色シルト 灰黄色ブロック、炭化物を少量含む。
2. 黄褐色シルト 炭化物（直径2mm前後）を微量に含む。

SK4027

1. 前褐色シルト 灰黄色ブロック、炭化物を少量含む。
2. 黄褐色シルト 炭化物（直径2mm前後）を微量に含む。

SB18



P4134

1. 前褐色シルト 灰黄色ブロック、炭化物、雜を少量含む。

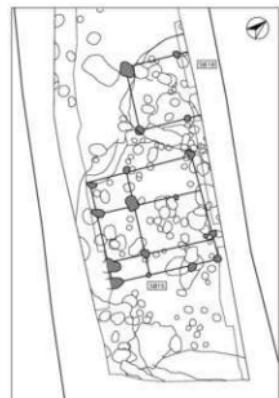
11 P4118

SD4083 P4174 11' - 177.80m



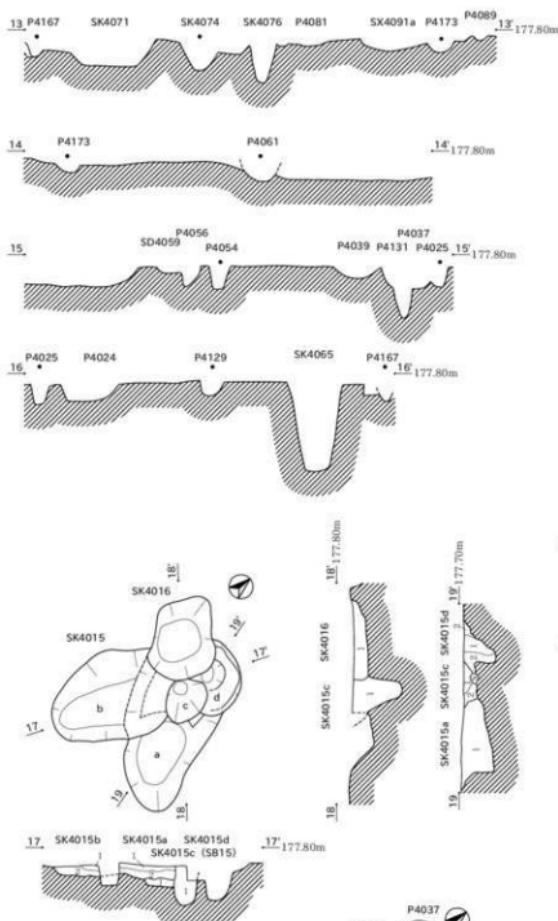
12 SK4150

P4118 12' - 177.80m



0 (その他) 3m (1:60)  
0 (8-9) 2m (1:40)

SB19



SK4015a

1. 黄褐色シルト 灰黄色ブロック、炭化物を少量含む。

SK4015b

1. 黄褐色シルト 灰黄色ブロック、炭化物を微量に含む。

2. 黄褐色シルト 炭化物を微量に含む、粘性がやや弱い。

SK4015c (SB15)

1. 黄褐色シルト 灰黄色ブロック、炭化物を少量含む。

2. 黄褐色シルト 炭化物 (直径 3 ~ 20mm) を微量に含む。

SK4015d

1. 黄褐色シルト 灰黄色ブロック、炭化物を微量含む。

2. 黄褐色シルト 炭化物 (直径 3 ~ 20mm) を微量に含む。

SK4015e

1. 黄褐色シルト 灰黄色ブロック、炭化物を微量含む。

2. 黄褐色シルト 炭化物 (直径 3 ~ 20mm) を微量に含む。

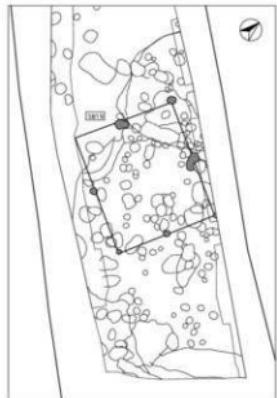
P4037-P4131

1. 鮎床黄色シルト 灰黄色ブロック、炭化物、漂を少量含む。

2. 鮎床オーラー褐色シルト 灰黄色・地山 (V層) ブロック、炭化物、漂を少量含む。

3. 鮎床黄色シルト 灰黄色ブロック、炭化物、漂を微量含む。

4. オリーブ褐色シルト 漂、炭化物を微量含む。



SK4071

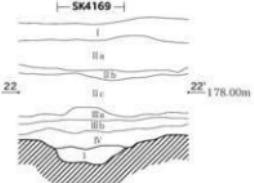
- 暗灰褐色シルト 地山 (V層) - 灰黄色ブロックを少暈含む。
- 灰黄色シルト 炭化物 (直径 5 ~ 8mm) を微量に含む。
- 褐色シルト 炭化物 (直径 5 ~ 8mm) を微量に含む。

P4068

- 暗灰褐色シルト 灰黄色ブロックを少暈含む。
- 暗灰褐色シルト 灰黄色ブロック、炭化物を微量に含む。

SK4169

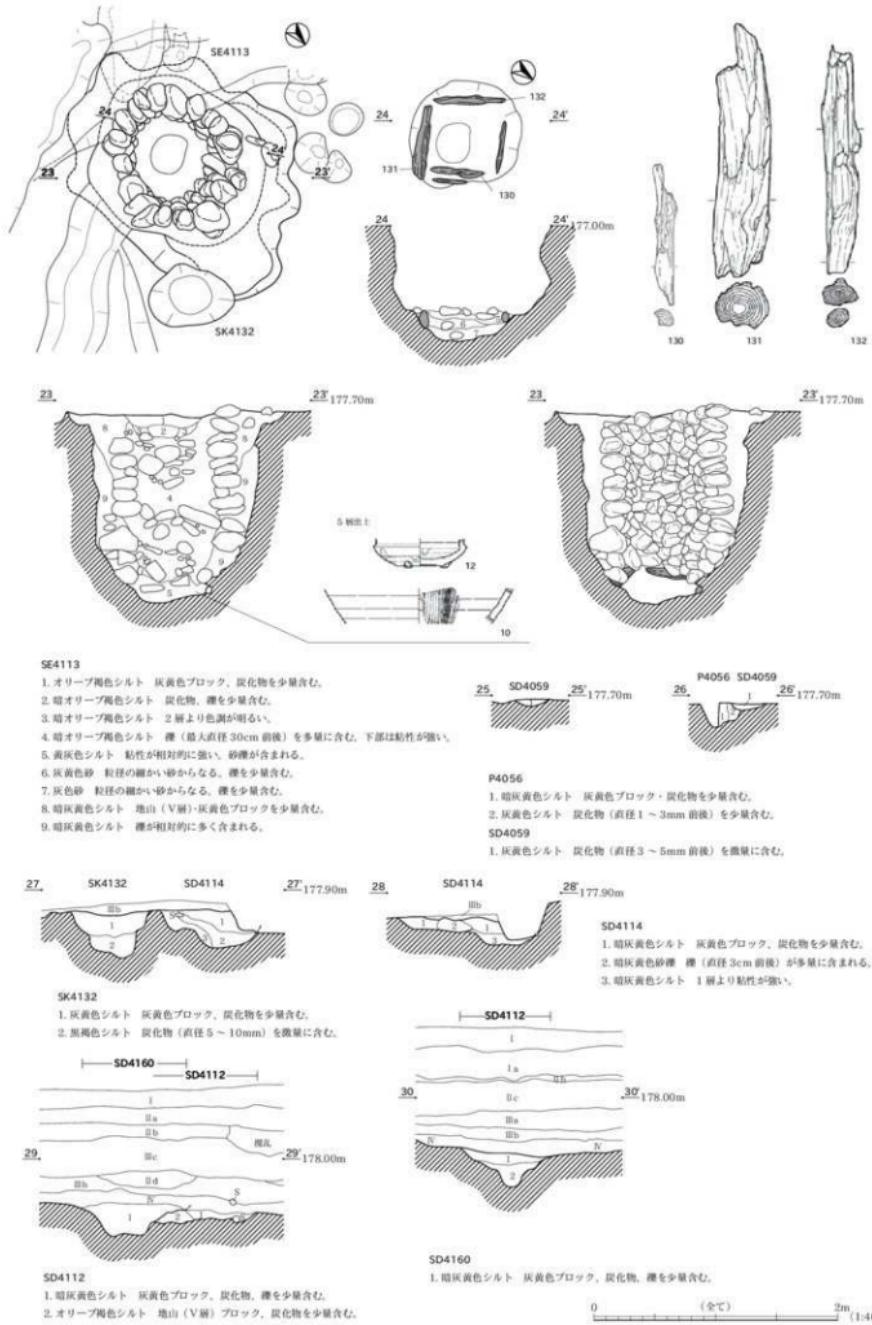
- 暗灰褐色シルト 灰黄色ブロック、炭化物、漂を少量含む。

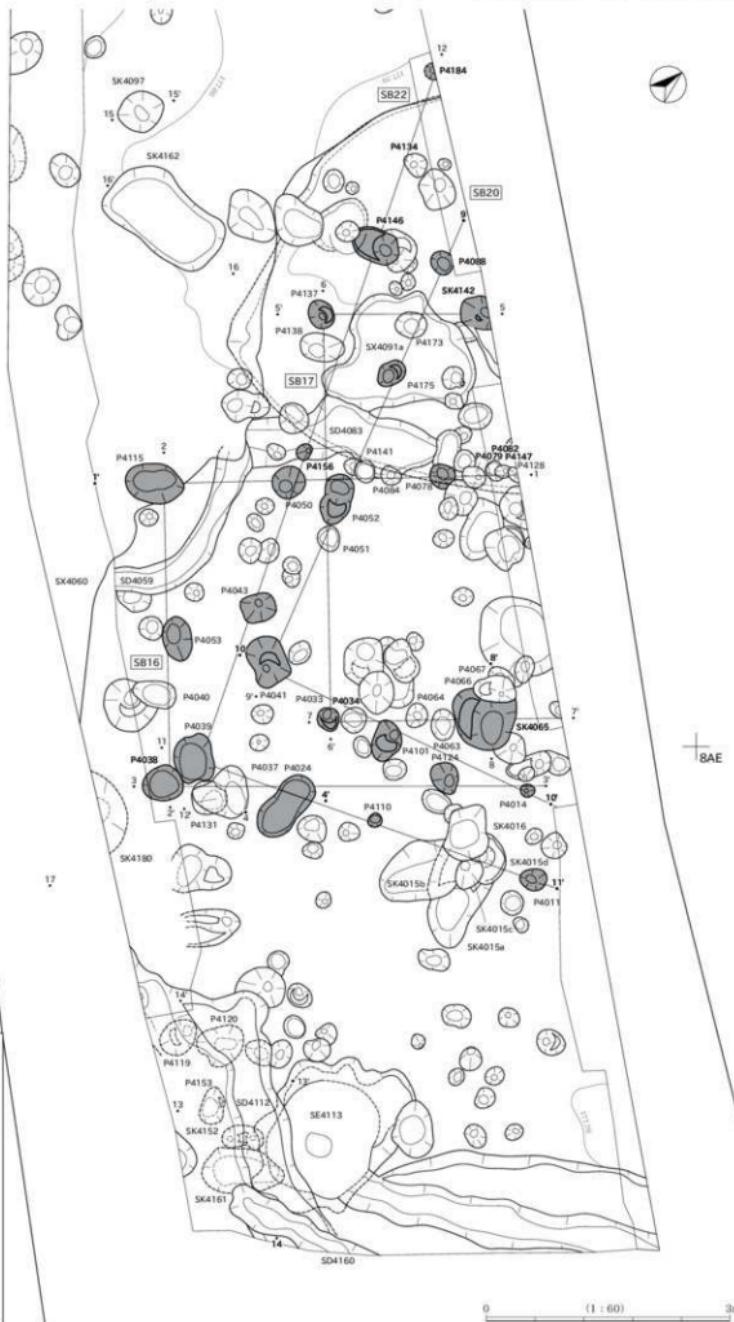


SK4169

- 暗灰褐色シルト 灰黄色ブロック、炭化物、漂を少量含む。

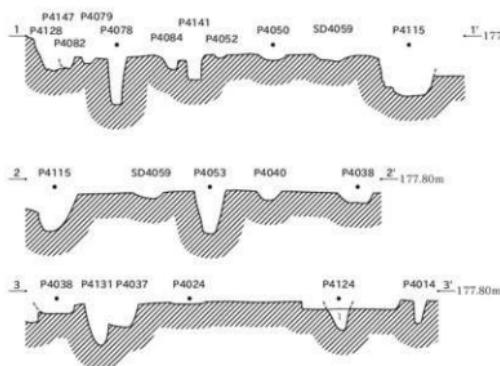






## 余川中道遺跡II G区 遺構個別図(4)

SB16



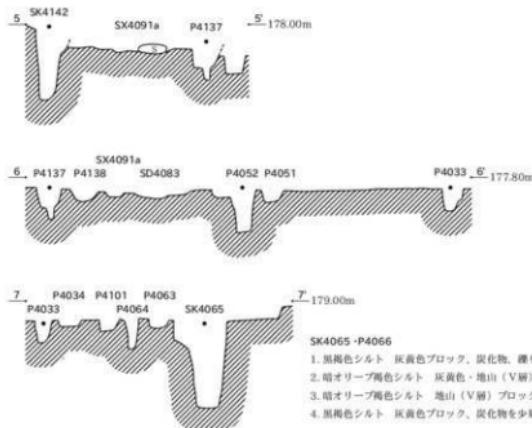
P4124

1. 灰黄色シルト 灰黄色ブロック、炭化物を少量含む。

P4024

1. 細灰黄色シルト 灰黄色ブロック、炭化物を少量含む。

SB17

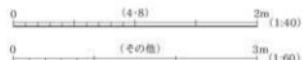
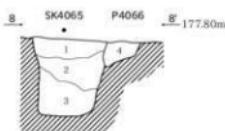
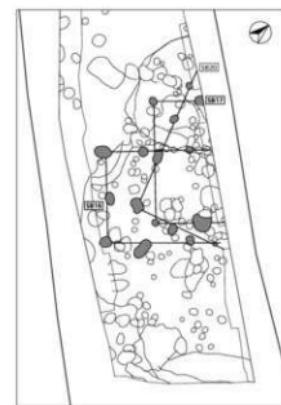


SB20

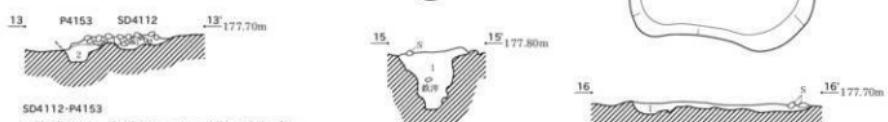
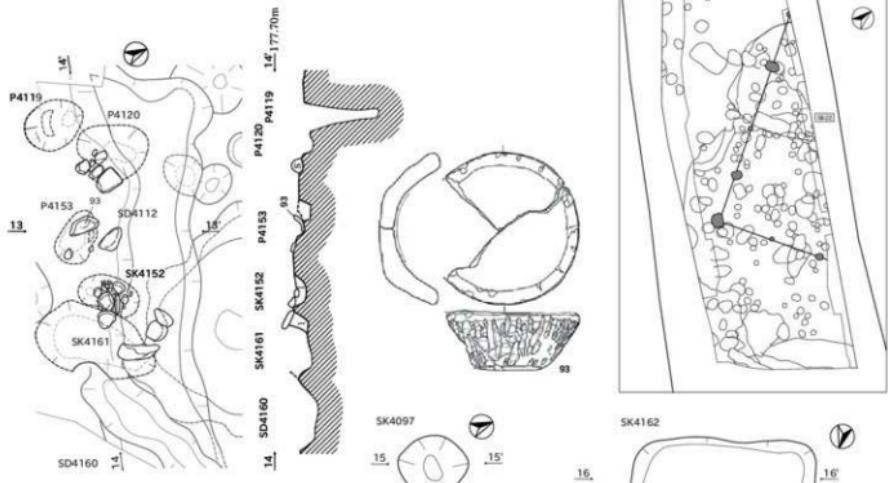
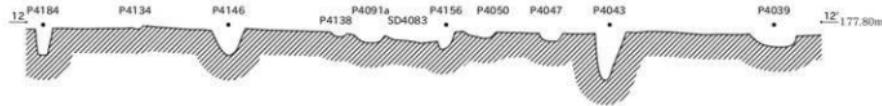


P4175

1. 黄灰色シルト 炭化物（直徑3mm前後）を微量に含む。
2. 略灰黄色シルト 淤（直徑5cm前後）を少量含む。



SB22



SK4112-P4153

1. 暗灰黄色シルト 粘土 (直径 6 ~ 10cm 前後) を多量に含む。
2. 暗灰黄色シルト 炭化物, 粘土を少量含む。

SK4152

1. 暗灰黄色シルト 灰黄色ブロック, 炭化物を微量に含む。

SK4161

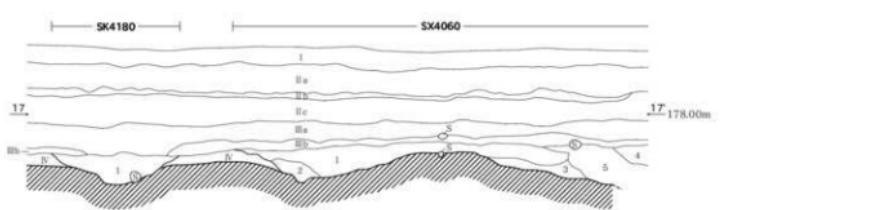
1. 暗灰黄色シルト 灰黄色ブロックを少量含む。

SK4097

1. 黒褐色シルト 炭化物 (直径 10mm 前後), 粘土を少量含む。

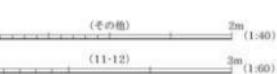
SK4162

1. 暗灰黄色シルト 炭化物, 粘土を少量含む。



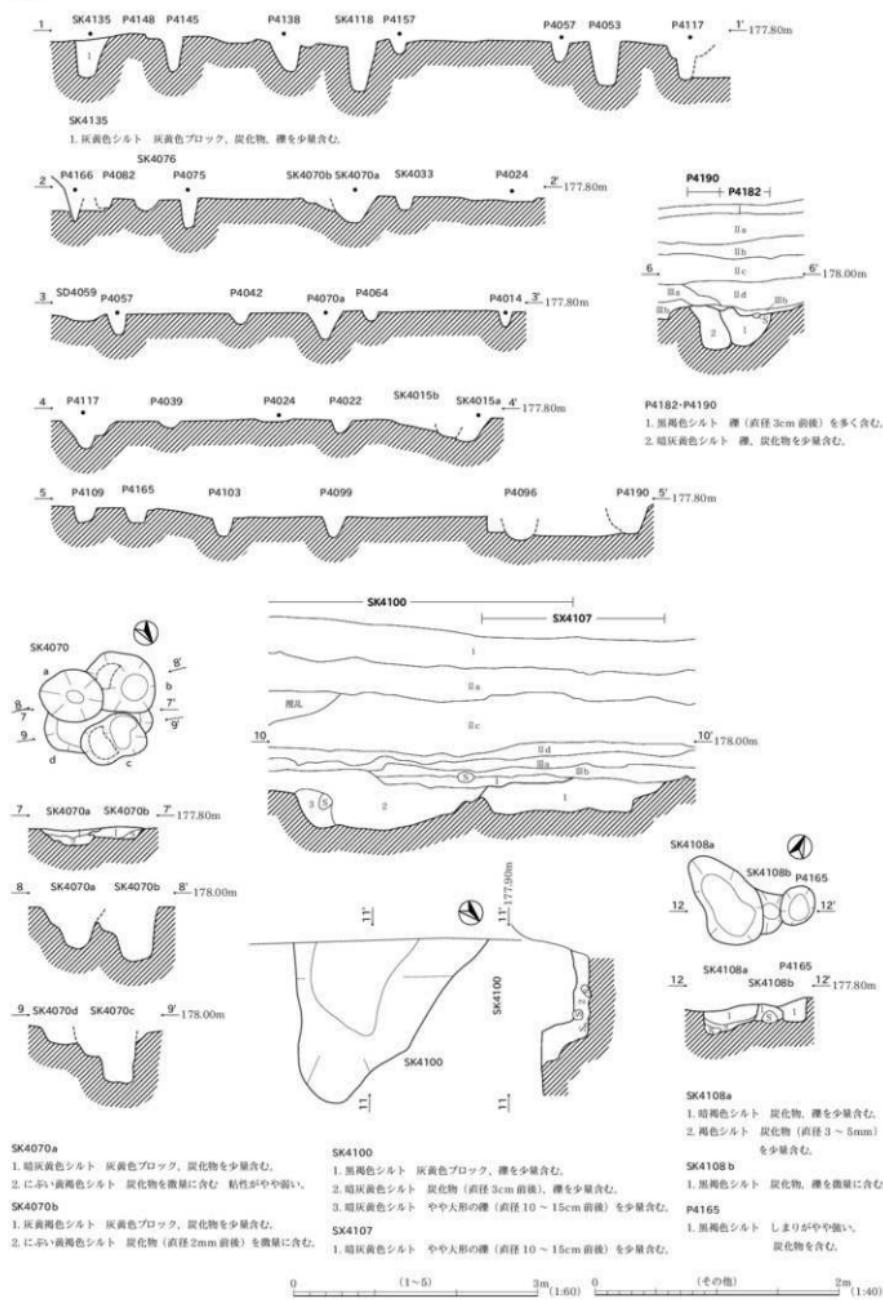
SK4180

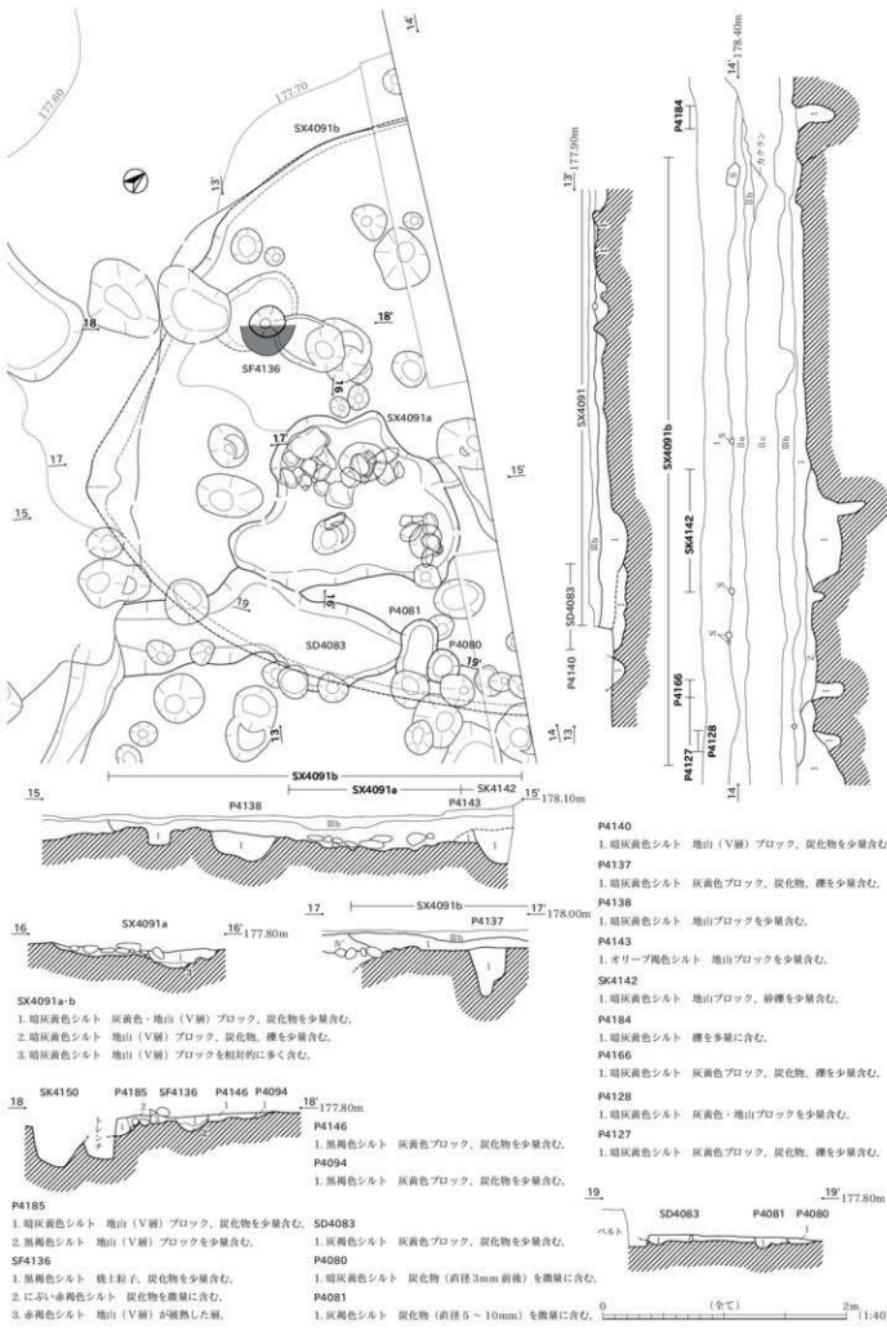
1. 暗灰黄色シルト 灰黄色ブロック, 粘土を少量含む。
2. オリーブ褐色シルト 地山 (V層) ブロック, 炭化物, 粘土を少量含む。
3. オリーブ褐色砂礫 粒径の細かい砂や砂 (直径 ~ 1cm) からなる。
4. 暗灰黄色シルト 粘土 (直径 2 ~ 5cm) を多量に含む。
5. 暗灰黄色シルト 粘土 (直径 10 ~ 15cm) を多量に含む。





SB21





AC

AD

AE



10

11

12

13

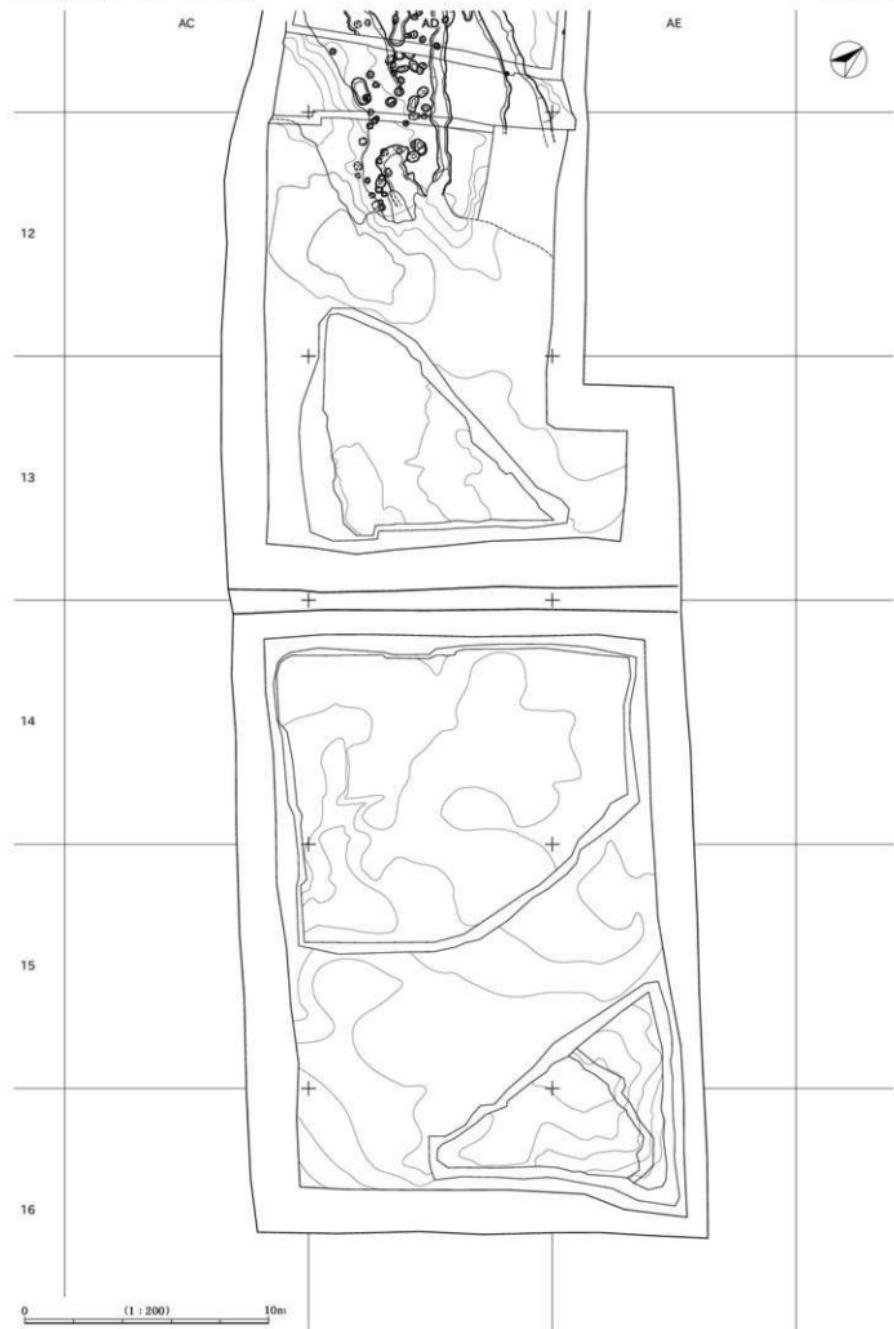
14

0

(1 : 200)

10m

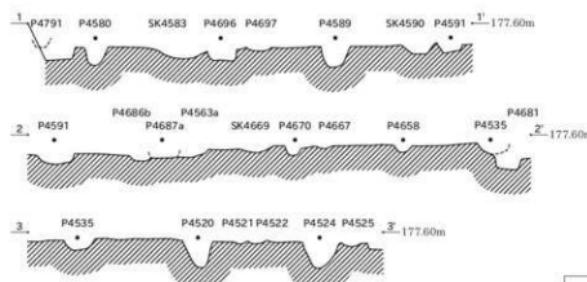




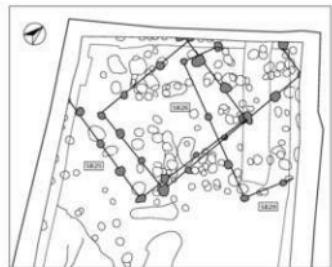
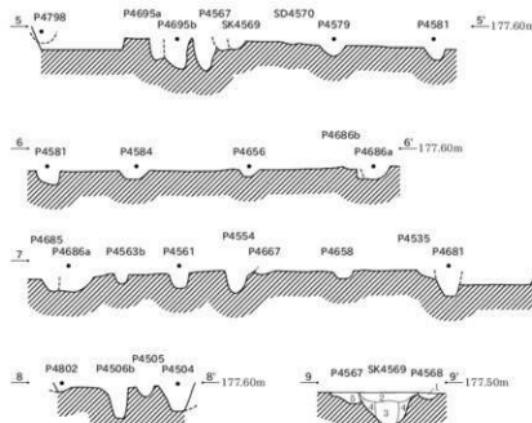


## 余川中道遺跡II H区 遺構個別図(1)

SB25



SB26



11 P4681 P4680 177.60m

SK4569-P4568-P4567

- 1 黒褐色シルト 灰黄色・地山(V層) ブロックを少暈含む。
- 2 黒褐色シルト 灰黄色・地山ブロックを含む 色調が明るい。
- 3 黑褐色シルト 灰黄色・地山(V層) ブロックを少暈含む。
- 4 黄灰色シルト 灰黄色・地山(V層) ブロックを少暈含む。

P4695

- 1 黒褐色シルト 炭化物を多く含む 地山ブロックを含む。
- 2 黄灰色シルト 地山(V層) ブロック、炭化物を含む。
- 3 黄灰色シルト 地山(V層) ブロックを少暈含む。
- 4 暗灰黄色シルト 地山(V層) ブロックを多く含む。

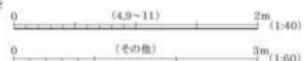
P4681

- 1 黄灰色シルト 炭化物(直径3~5mm)を少暈含む。
- 2 黄灰色シルト 4層より地山(V層) ブロックを多く含む。

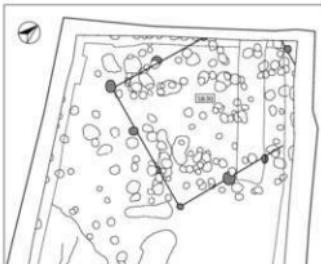
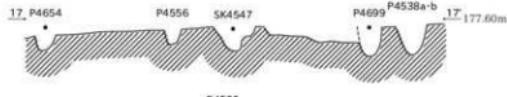
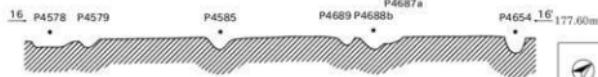
P4680

- 1 黄灰色シルト 炭化物を微量に含む。

SB29



SB30



## P4797 (SB25)

1. 細灰黄色シルト 黒褐色・地山ブロック、炭化物を少量含む。
2. 黒褐色シルト 地山(V層)ブロック、炭化物を含む。

## P4798 (SB26)

1. 細灰黄色シルト 黑褐色・地山ブロック、炭化物を含む。

## P4799

1. 細灰黄色シルト 黑褐色・地山ブロック、礫を含む。

## P4800 (SB30)

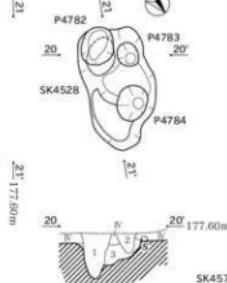
1. 細灰黄色シルト 地山(V層) ブロック。炭化物を少量含む。

## P4801

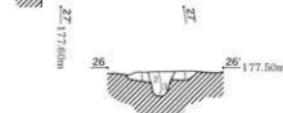
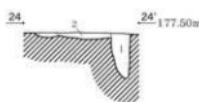
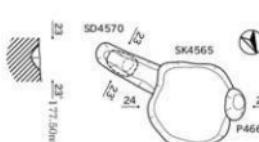
1. 細灰黄色シルト 黑褐色・地山(V層) ブロックを少量含む。

## SK4528

1. 黑褐色シルト 灰黄色・地山ブロック、炭化物を含む。
2. 黑褐色シルト 地山(V層) ブロック、炭化物を少量含む。
3. 黄褐色シルト 地山ブロックを多く含む 炭化物を含む。



- SK4576
1. 黑褐色シルト 灰黄色・地山ブロックを含む。
  2. 細灰黄色シルト 地山(V層) ブロックを多く含む。
  3. 細灰黄色シルト 2層よりシルト質 地山ブロックを含む。



## SD4570

1. 細灰黄色シルト 灰黄色・地山ブロック、炭化物を含む。

## SK4565-P4660

1. 黑褐色シルト 灰黄色・地山ブロックを少量含む。

2. 黄褐色シルト 灰黄色・地山ブロック、炭化物を含む。

## SK4583-P4785

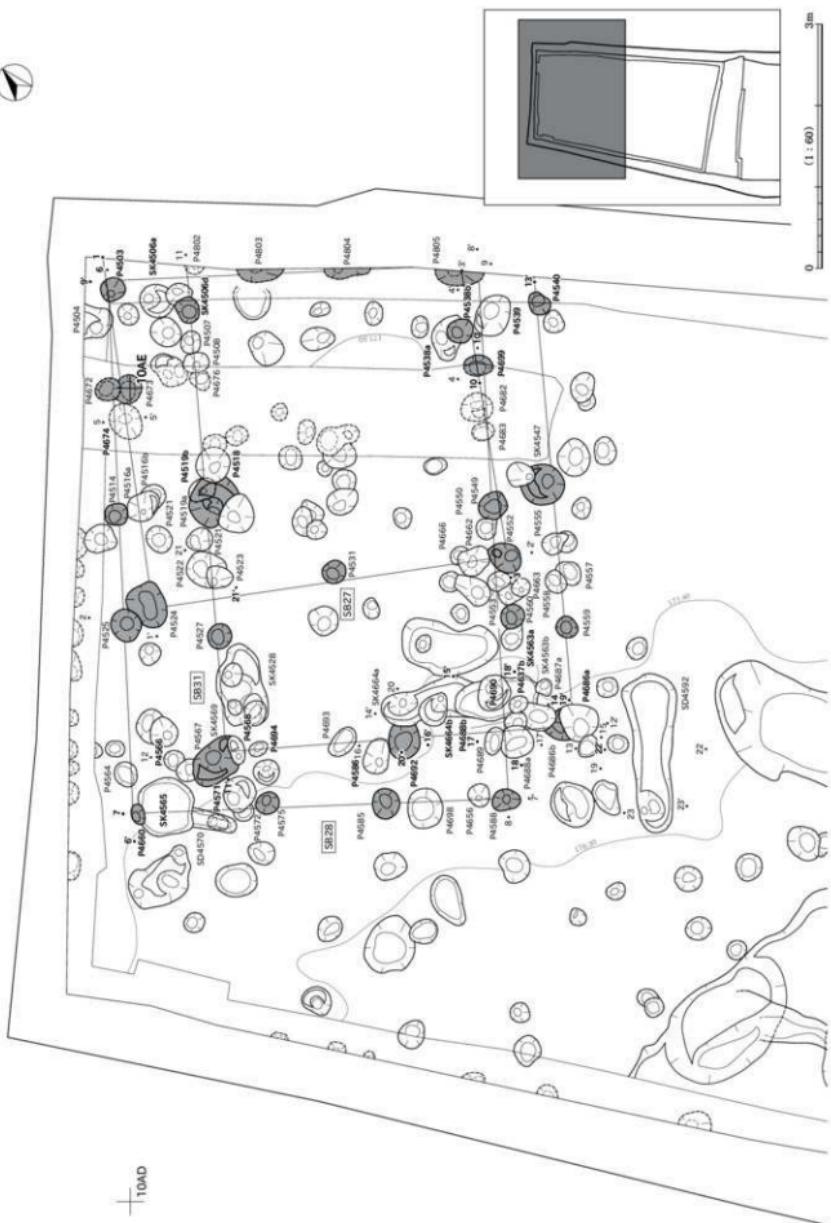
1. 黄灰色シルト 地山ブロック、炭化物を少量含む。

2. 黄灰色シルト 地山ブロック、礫を少量含む。

3. 細灰黄色シルト 炭化物(直径7mm前後)を少量含む。

余川中道遺跡II H区 遺構分割図(2)

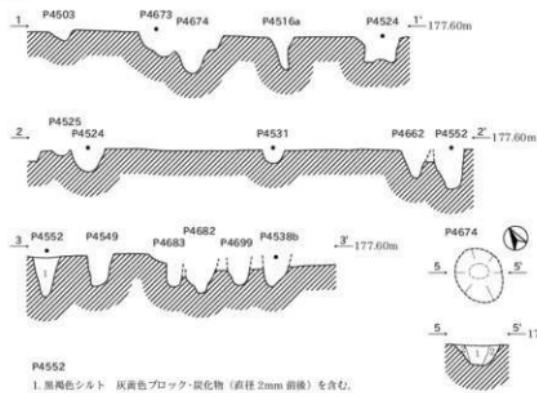
圖 版 38



## 図版 39

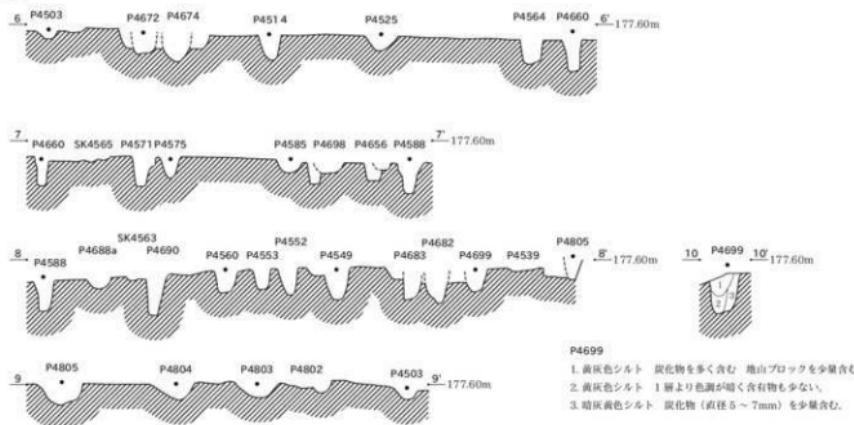
余川中道遺跡II H区 遺構個別図(3)

SB27

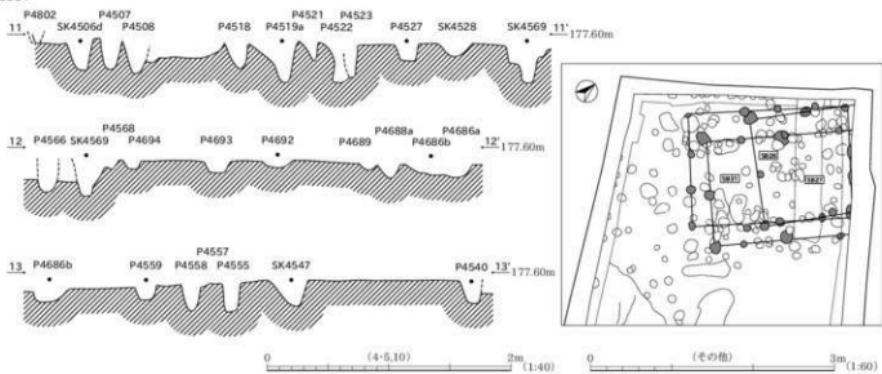


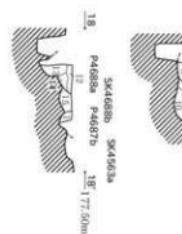
P4538b

SB28



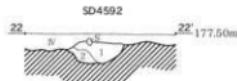
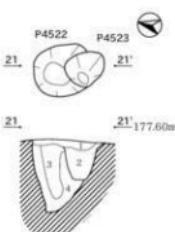
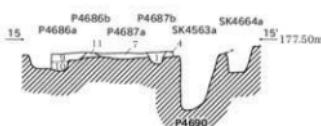
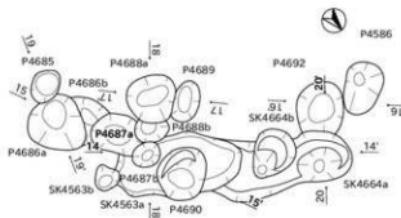
SB31





## SK4563-SK4664 開通

1. 黄灰色シルト 地山 (V層) ブロック、炭化物を少量含む。
  2. 黄灰色シルト 地山 (V層) ブロックを少量含む。
  3. 黄灰褐色シルト 地山 (V層) ブロック、炭化物を少量含む。
  4. 暗オーラー飛出シルト 炭化物 (直往 3 ~ 25mm) を少量含む。
  5. 黄灰褐色シルト 地山 (V層) ブロックを含む (4 層より多い)。
  6. 黄灰色シルト 地山 (V層) ブロックを含む (4 層より少い)。
  7. 黄灰褐色シルト 灰褐色・地山 (V層) ブロックを少量含む。
  8. 暗灰褐色シルト 地山 (V層) ブロック、炭化物を少量含む。
  9. 黄灰褐色シルト 地山 (V層) ブロック、炭化物、礫を少量含む。
  10. 暗灰褐色シルト 地山 (V層) 縦 (直往 2 ~ 3cm) を少量含む。
  11. 暗灰褐色シルト 地山 (V層) ブロックが相対的に多い。
  12. 黒褐色シルト 灰褐色・地山 (V層) ブロックを少量含む。
  13. 黑褐色シルト 地山 (V層) ブロックを含む (13 層より少い)。
  14. 暗灰褐色シルト 地山 (V層) ブロック、炭化物、礫を多く含む。
  15. 暗灰褐色シルト 地山 (V層) ブロックをやや多く含む。
  16. 暗灰褐色シルト 炭化物 (直往 7mm 前後) 縦を少量含む。
  17. 暗オーラー飛出シルト 地山 (V層) ブロック、炭化物を少量含む。
  18. 暗オーラー飛出シルト 地山 ブロック、炭化物を含む。
- 1 : P4687b 2 : P4690 3 : SK4664b 4 : SK4563a  
5~6 : SK4664a 7 : P4687a 8 : P4685 9~10 : P4686a 11 : P4686b  
12~14 : P4688 15 : P4688b 16 : P4689 17 : P4692 18 : P4586



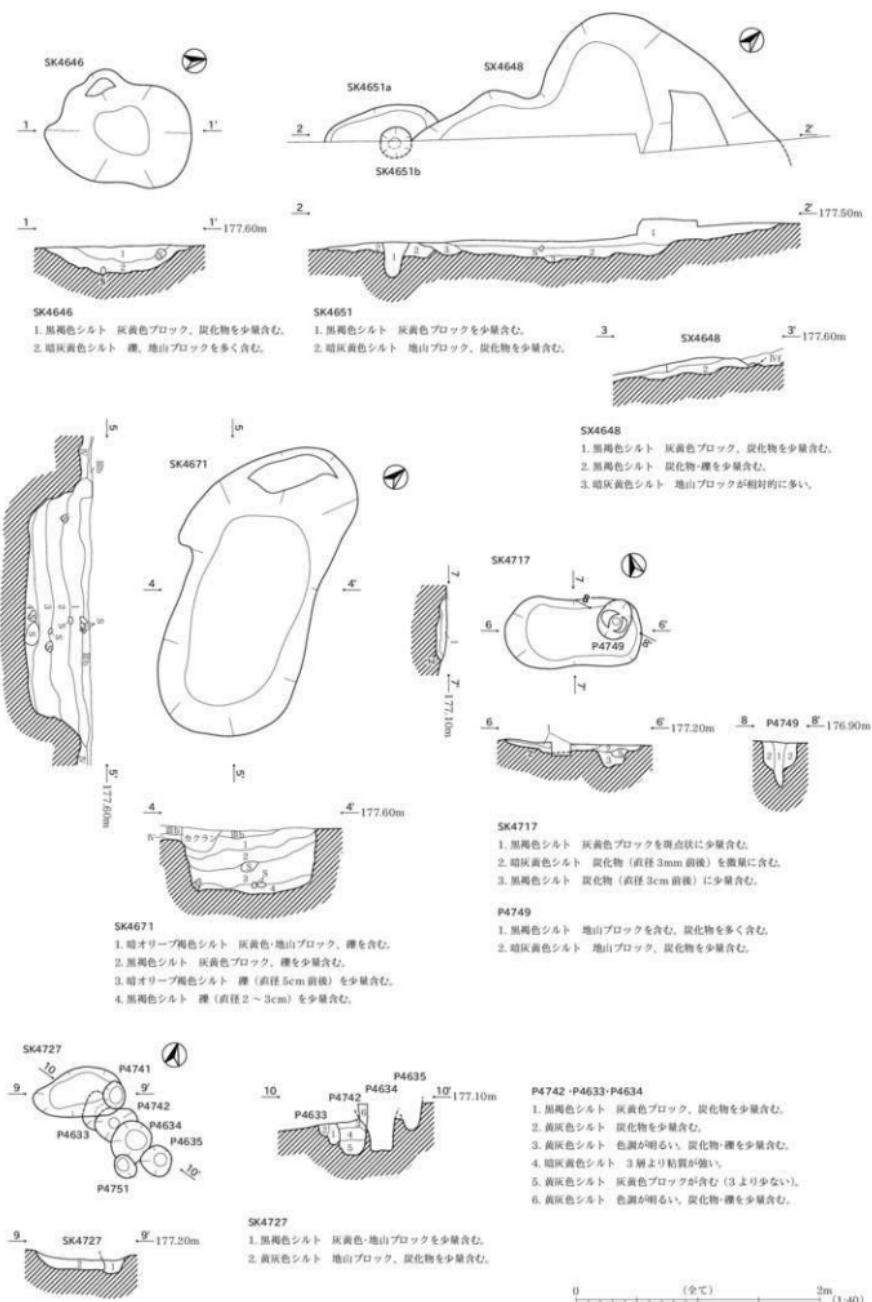
## SD4592

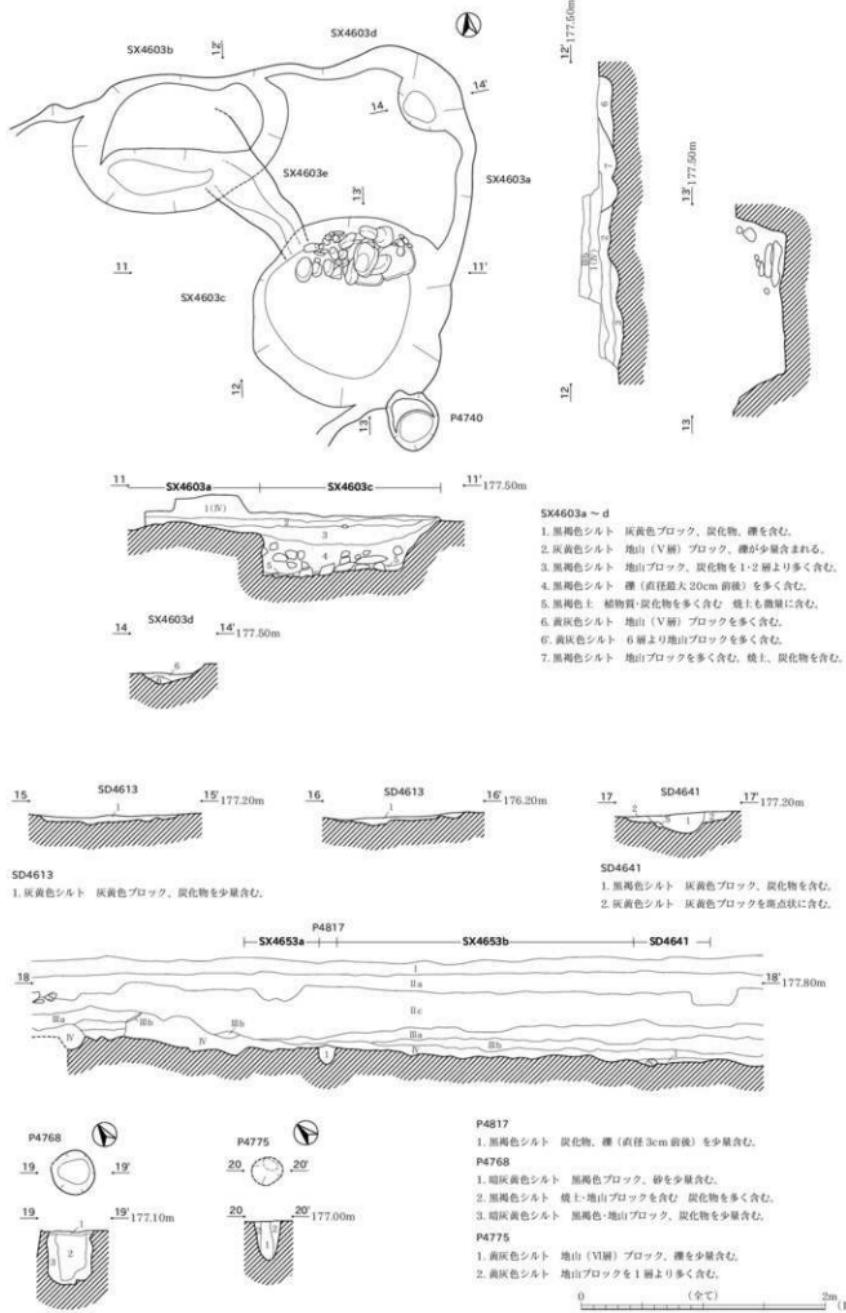
1. 黑褐色シルト 灰褐色・地山 (ブロック、炭化物を含む)  
2. 黄褐色シルト 地山 (V層) ブロック、炭化物を少量含む。

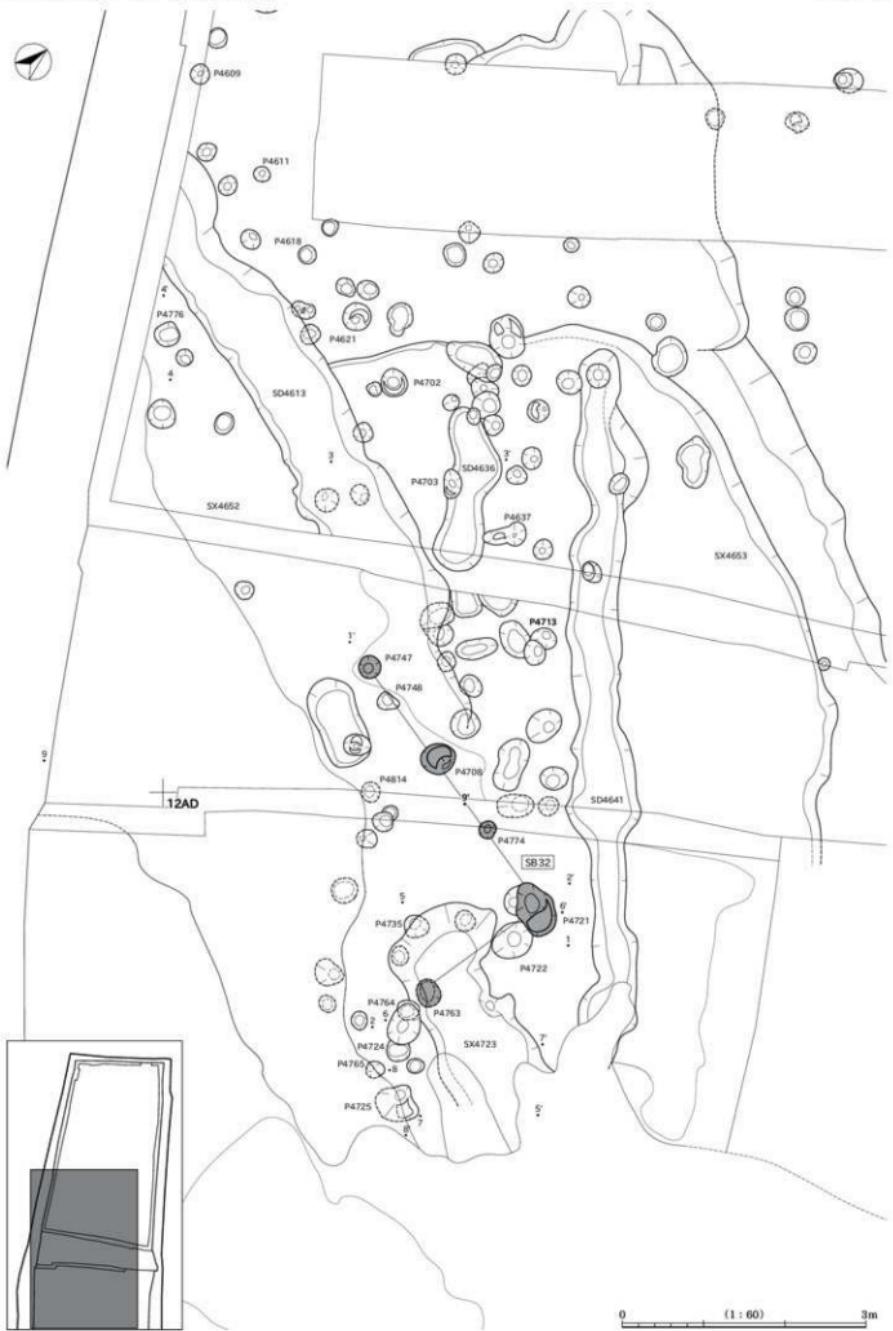
## P4522-P4523

1. 黑褐色シルト 灰褐色・地山 (V層) ブロックを少量含む。
2. 黑褐色シルト 地山 (V層) ブロック、炭化物を少量含む。
3. 黑褐色シルト 色調が暗い 地山ブロック・炭化物を含む。
4. 黄褐色シルト 地山 (V層) ブロックを少量含む。

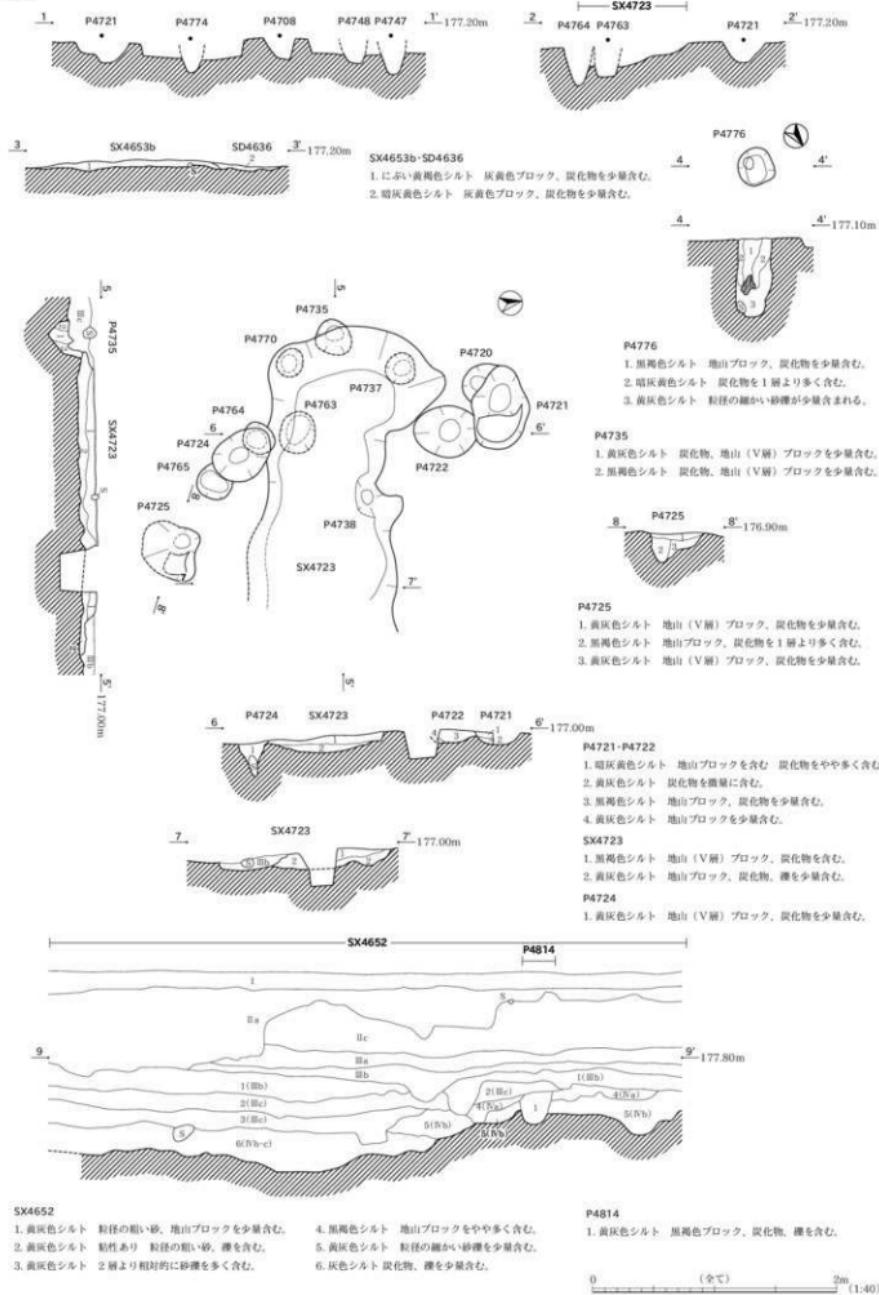


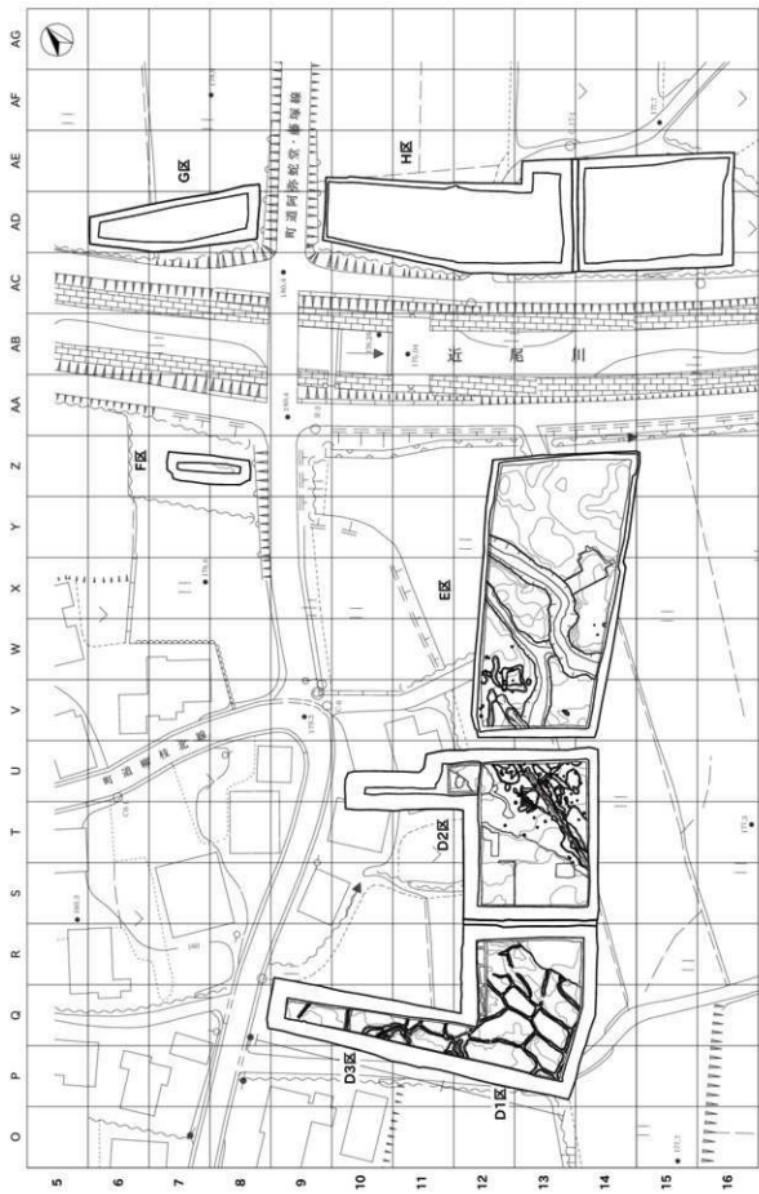




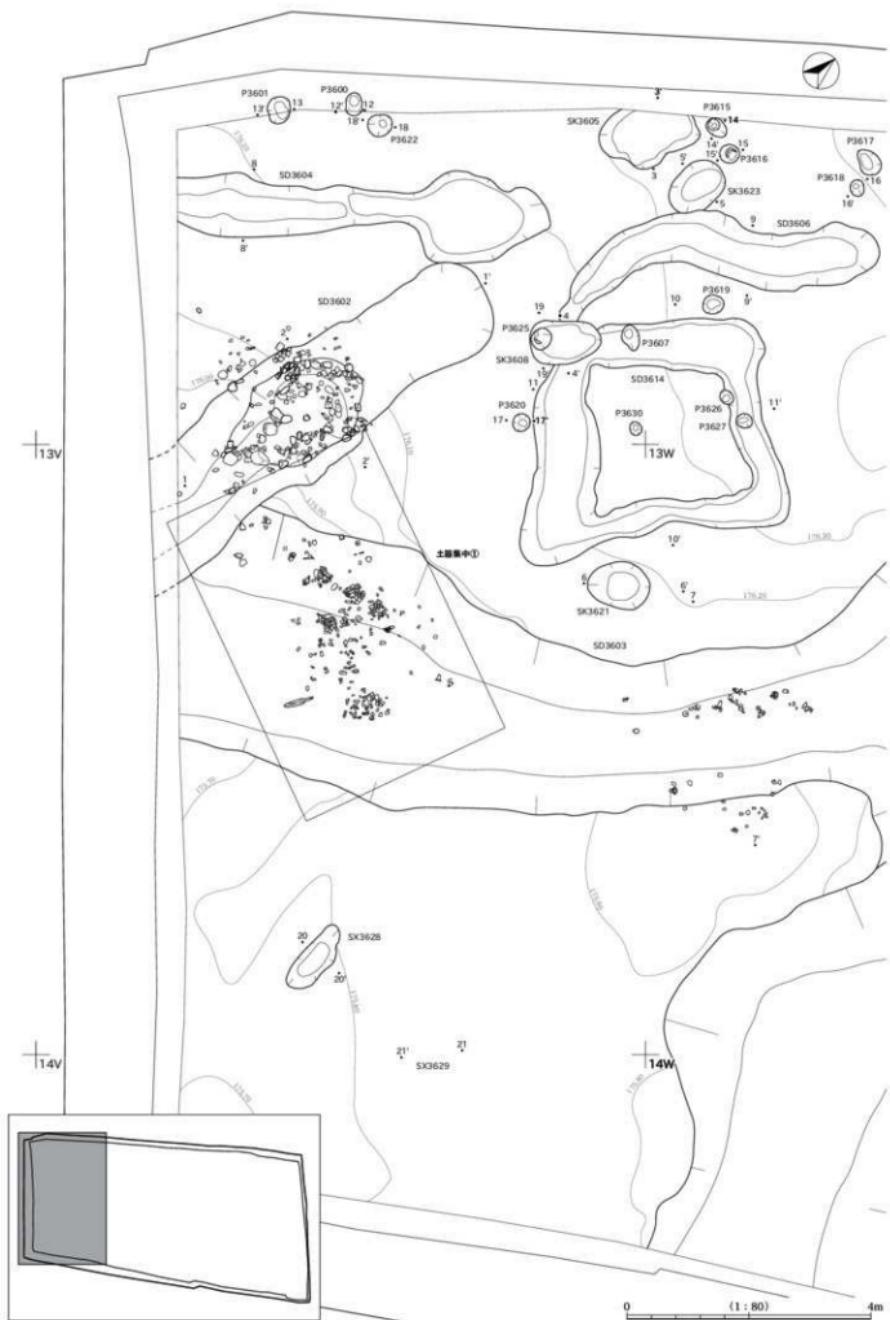


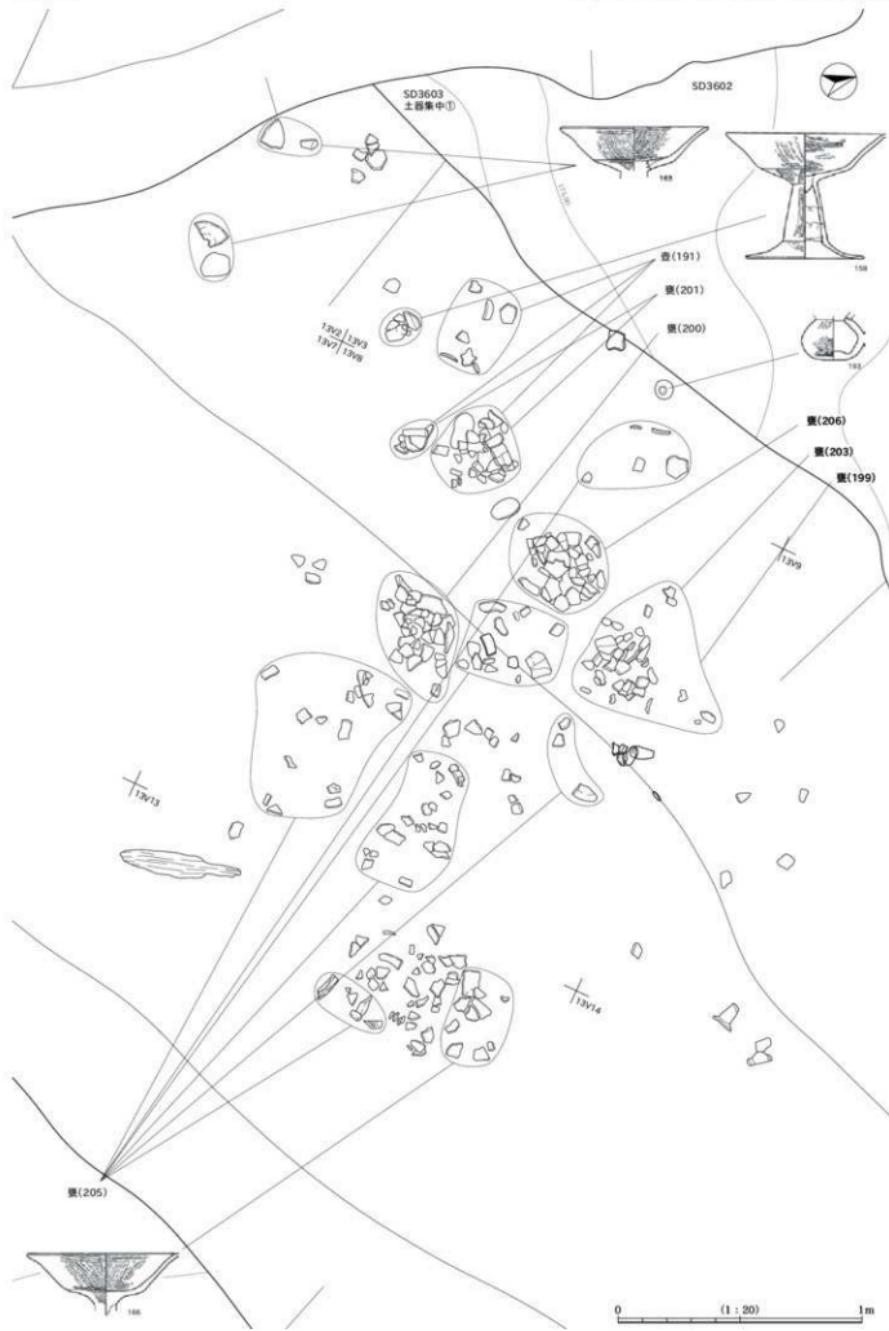
S832

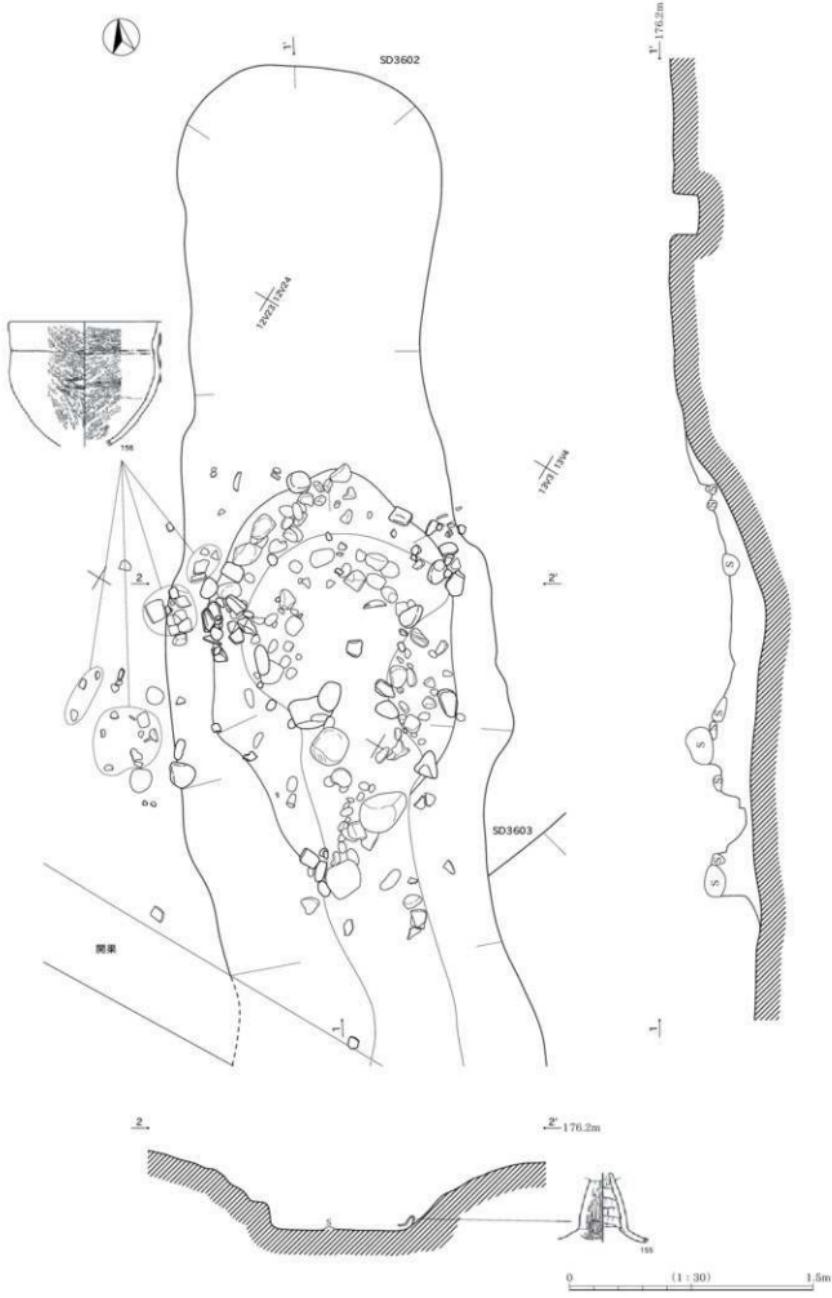


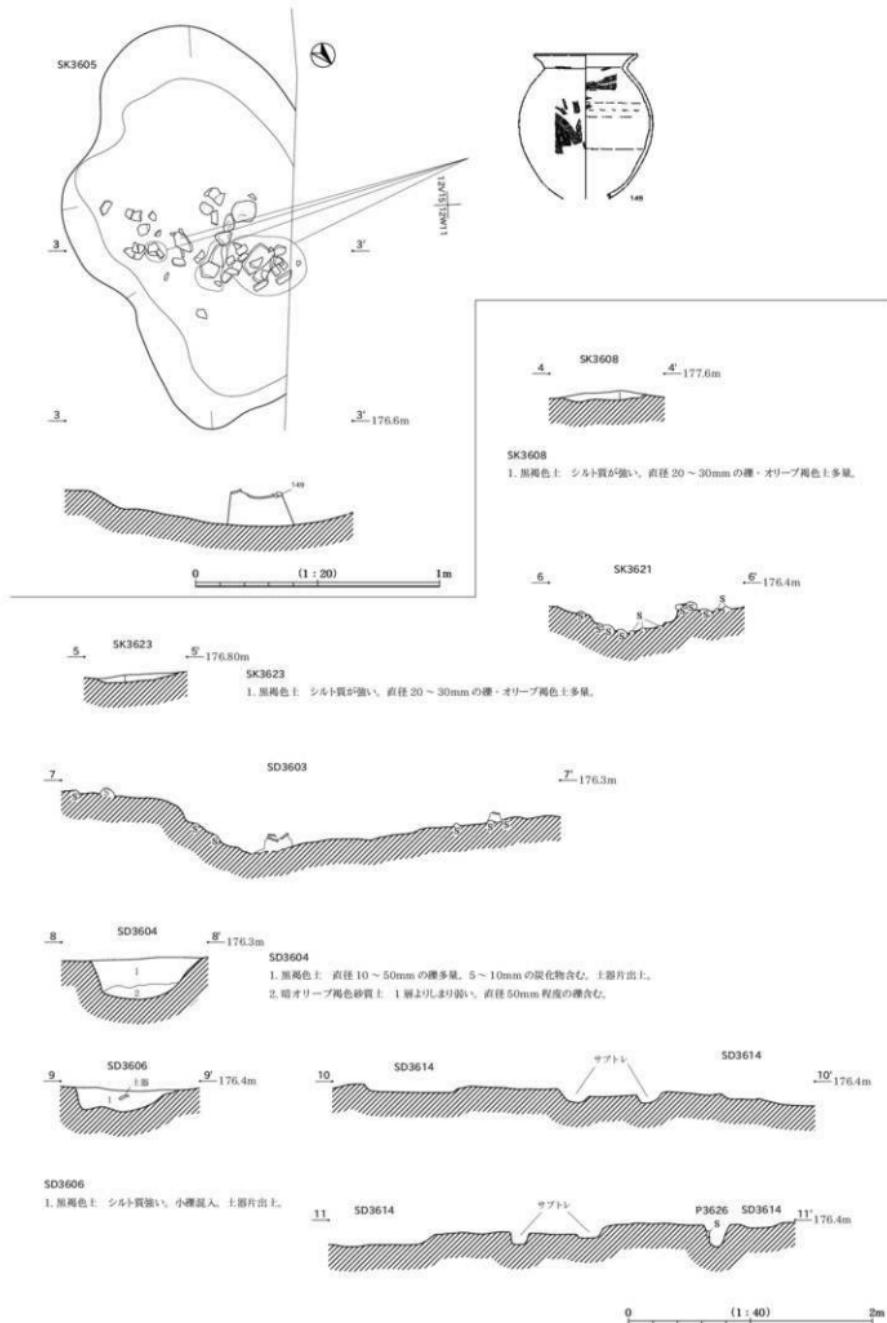




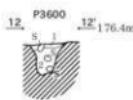






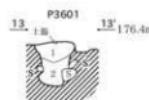


## 余川中道跡 II E区(下層) 遺構個別図(4)



P3600

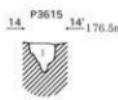
1. 黒褐色土・直徑 50mm 程度の埋合む、炭化物多量。  
2. 黄灰色砂質土・1 層よりしまり弱い、直徑 30 ~ 50mm の埋合む。



P3601

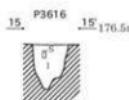
P3601

1. 黒褐色土・直徑 50mm 程度の埋合む、炭化物多量。  
2. 黄灰色砂質土・1 層よりしまり弱い、直徑 30 ~ 50mm の埋合む。



P3615

1. 黄灰色砂質土・小礫・地山上混入



P3616

1. 黄灰色砂質土・小礫・地山上混入



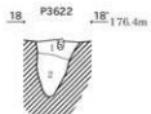
P3618

1. 黒褐色土・直徑 5mm 程度の炭化物少量。



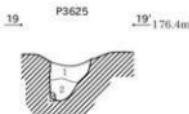
P3620

- P3620  
1. 黄灰色砂質土・小礫・地山上混入



P3622

1. 黄褐色砂質土・黄褐色砂合む、直徑 50mm 程度の埋合む。  
2. 黑褐色土・1 層よりシルト質が強い、直徑 5mm 程度の炭化物多量。



P3625

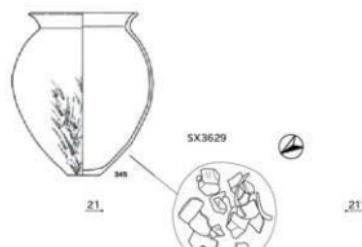
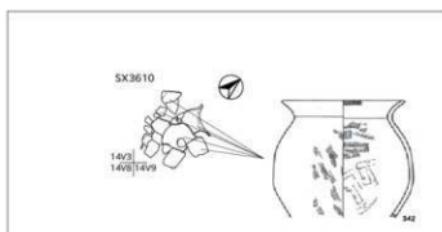
- P3625  
1. 黑褐色土・シルト質が強い、小礫混入  
2. 黄灰色砂質土・小礫・地山上混入



SX3628

1. 黄灰色土・砂質強い、しまり弱い、直徑 5mm 程度の炭化物多量。

0 (1 : 40) 2m

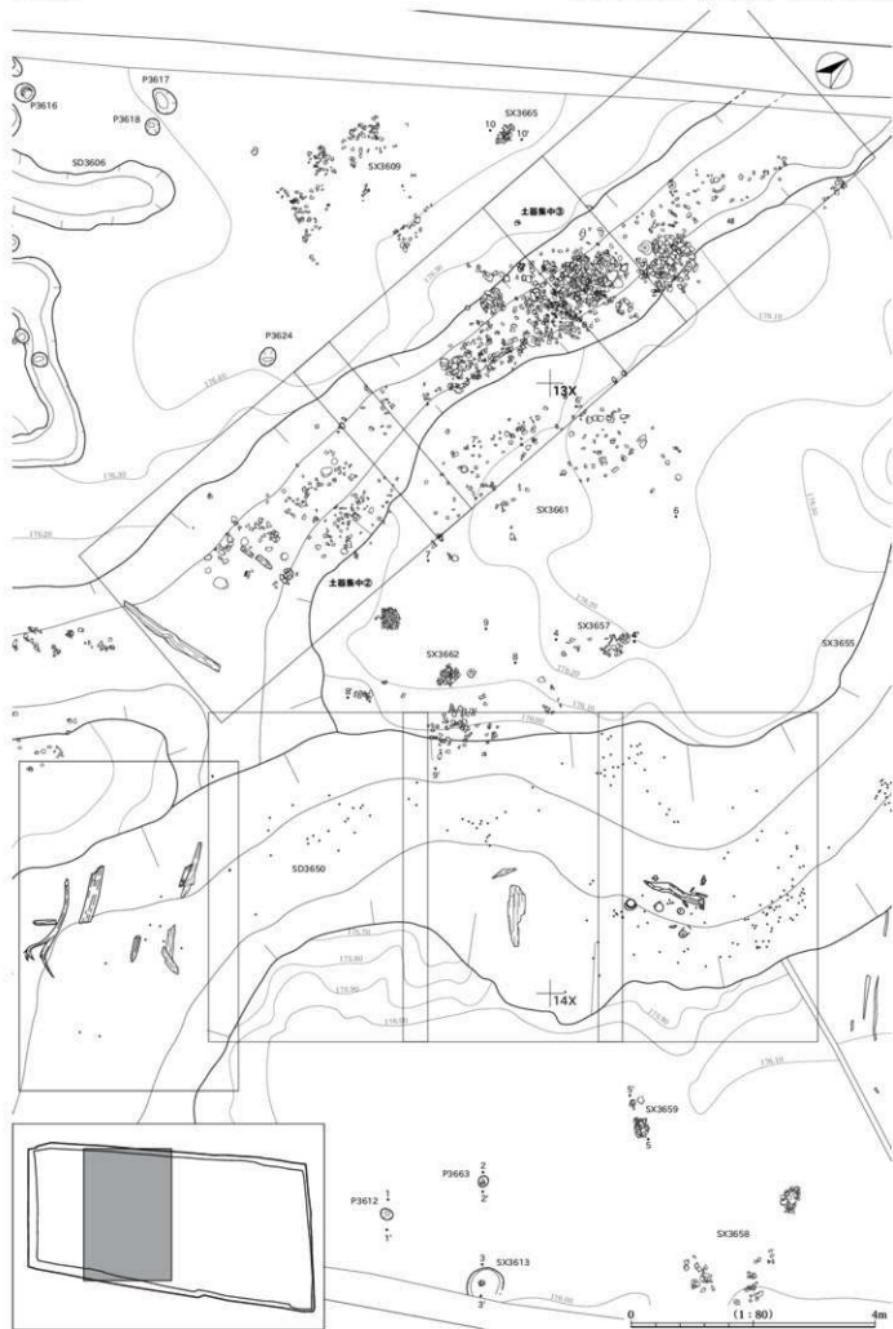


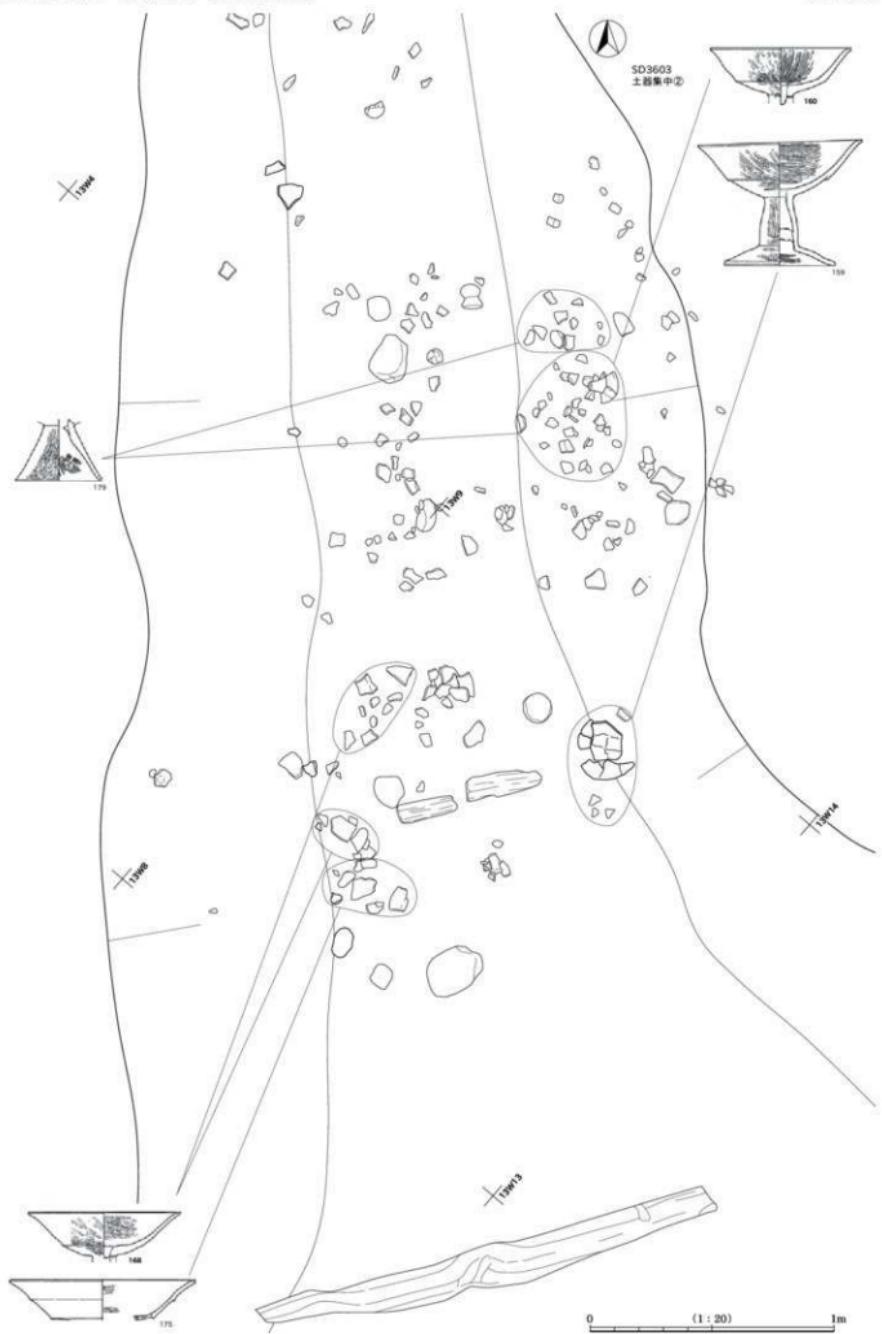
21.

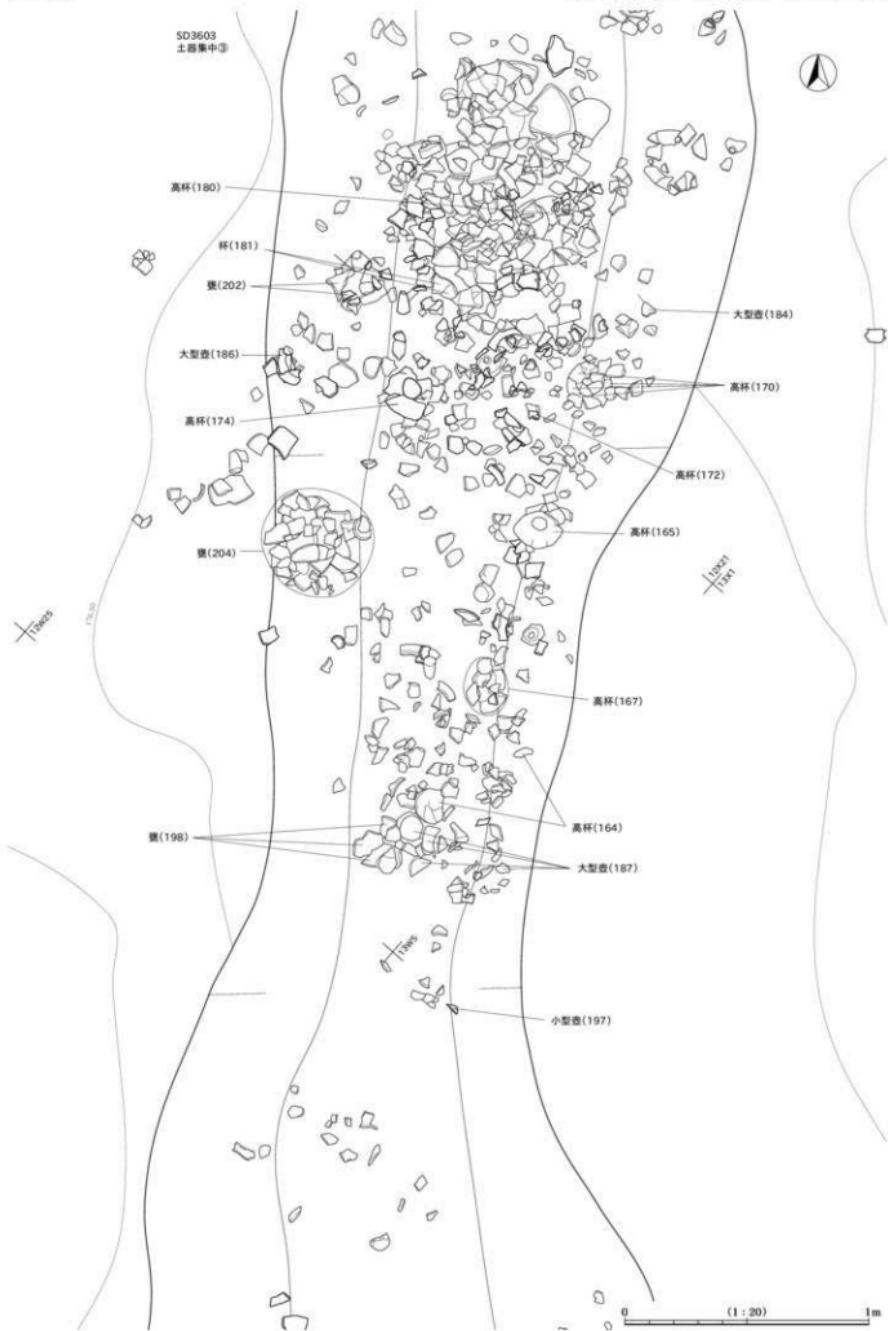
21'

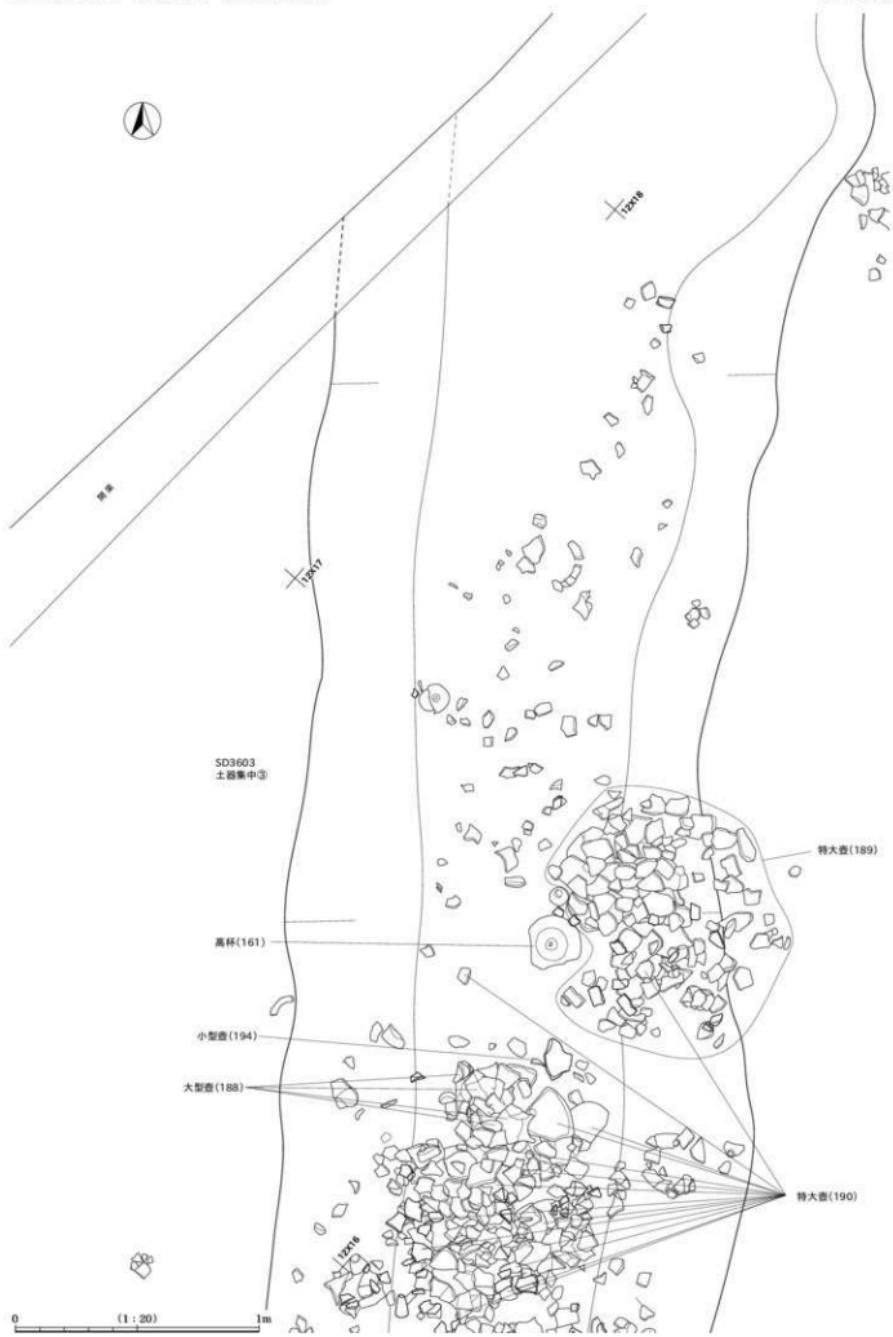


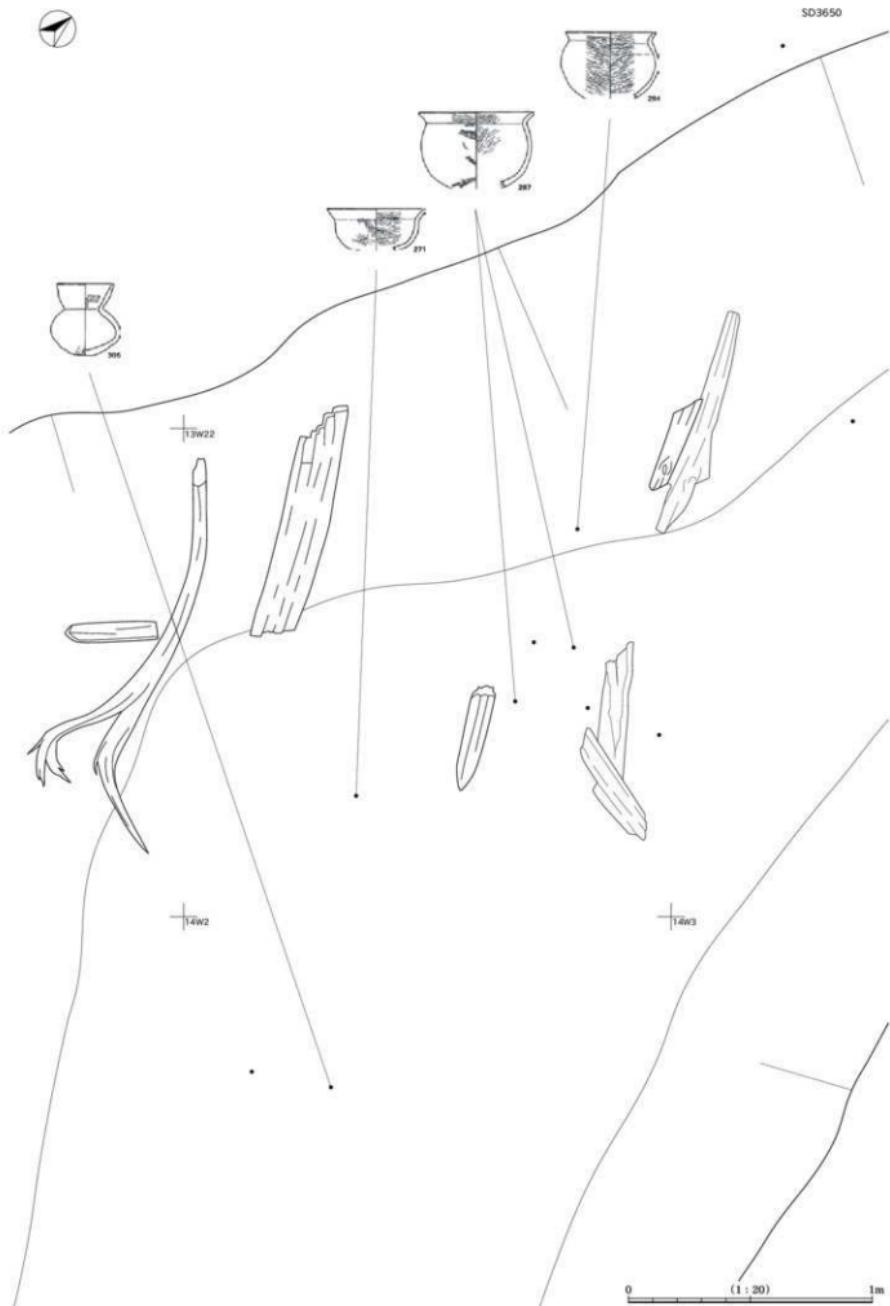
0 (1 : 20) 1m





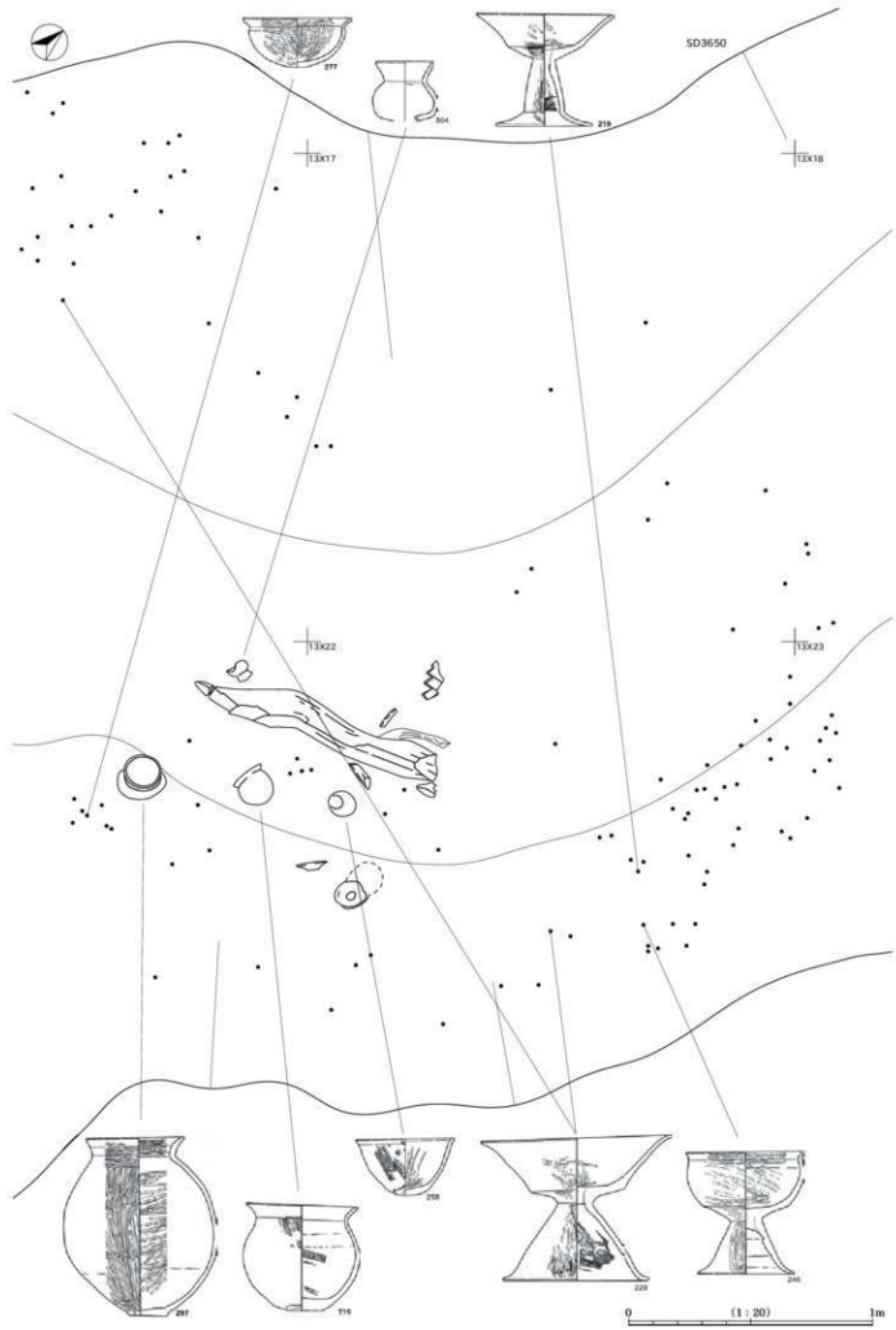


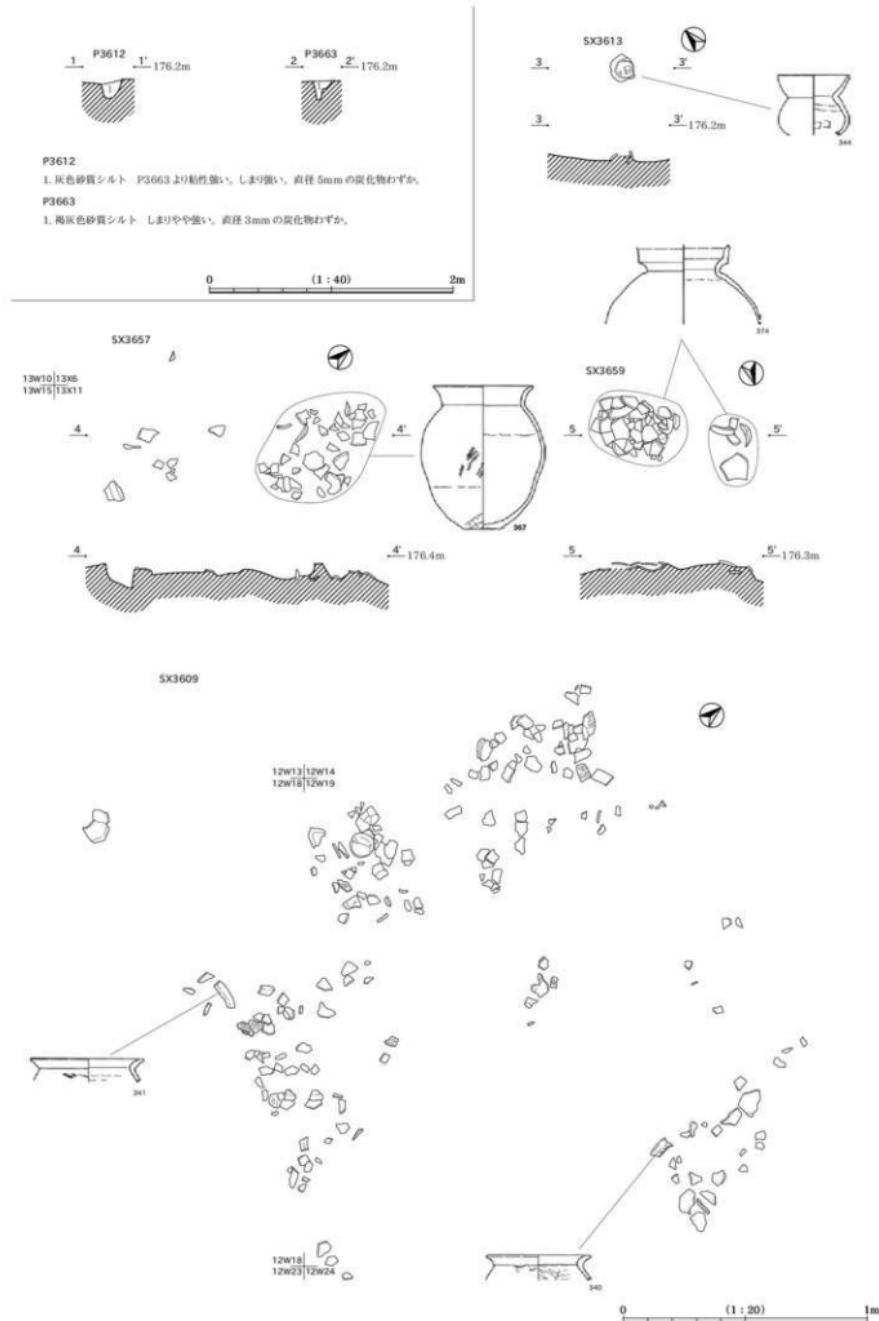


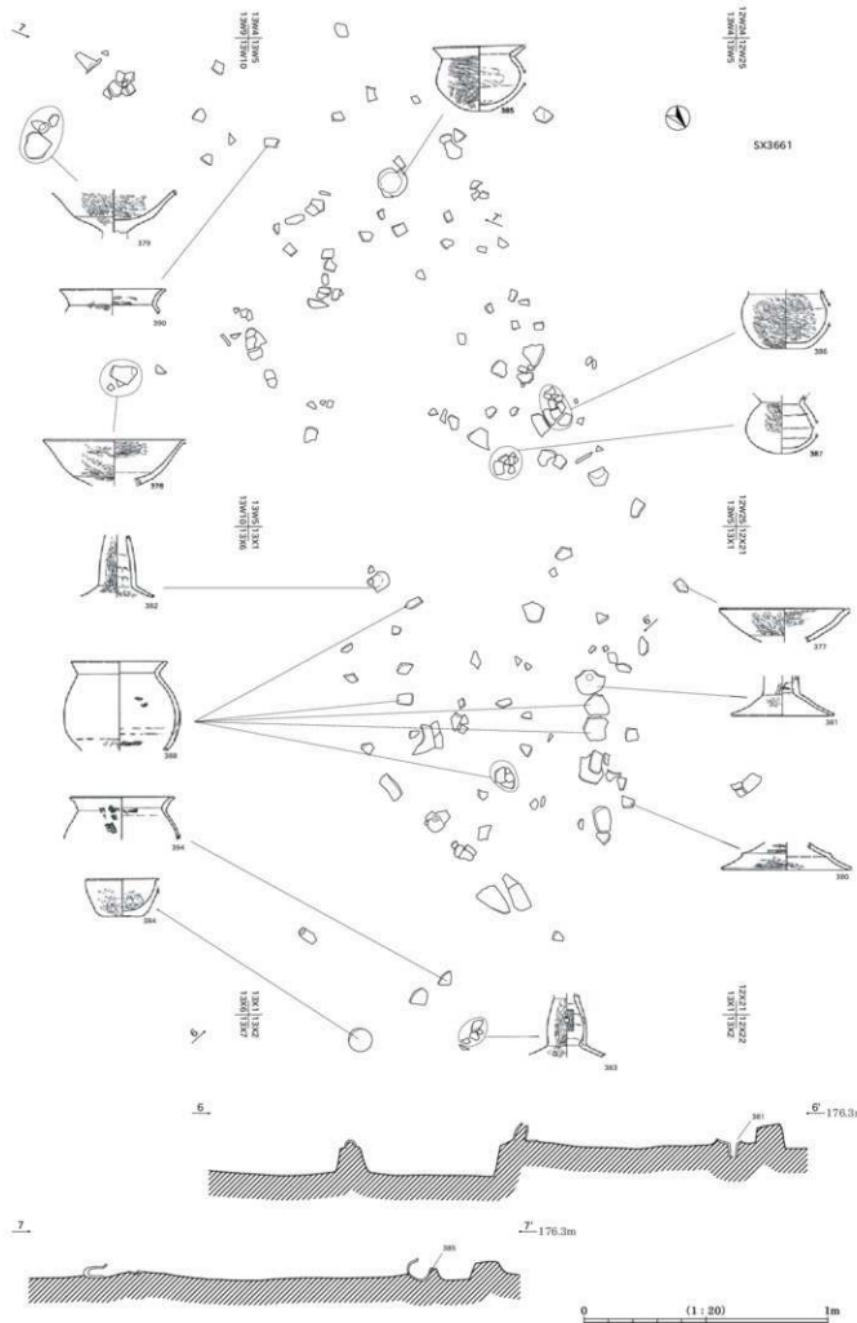


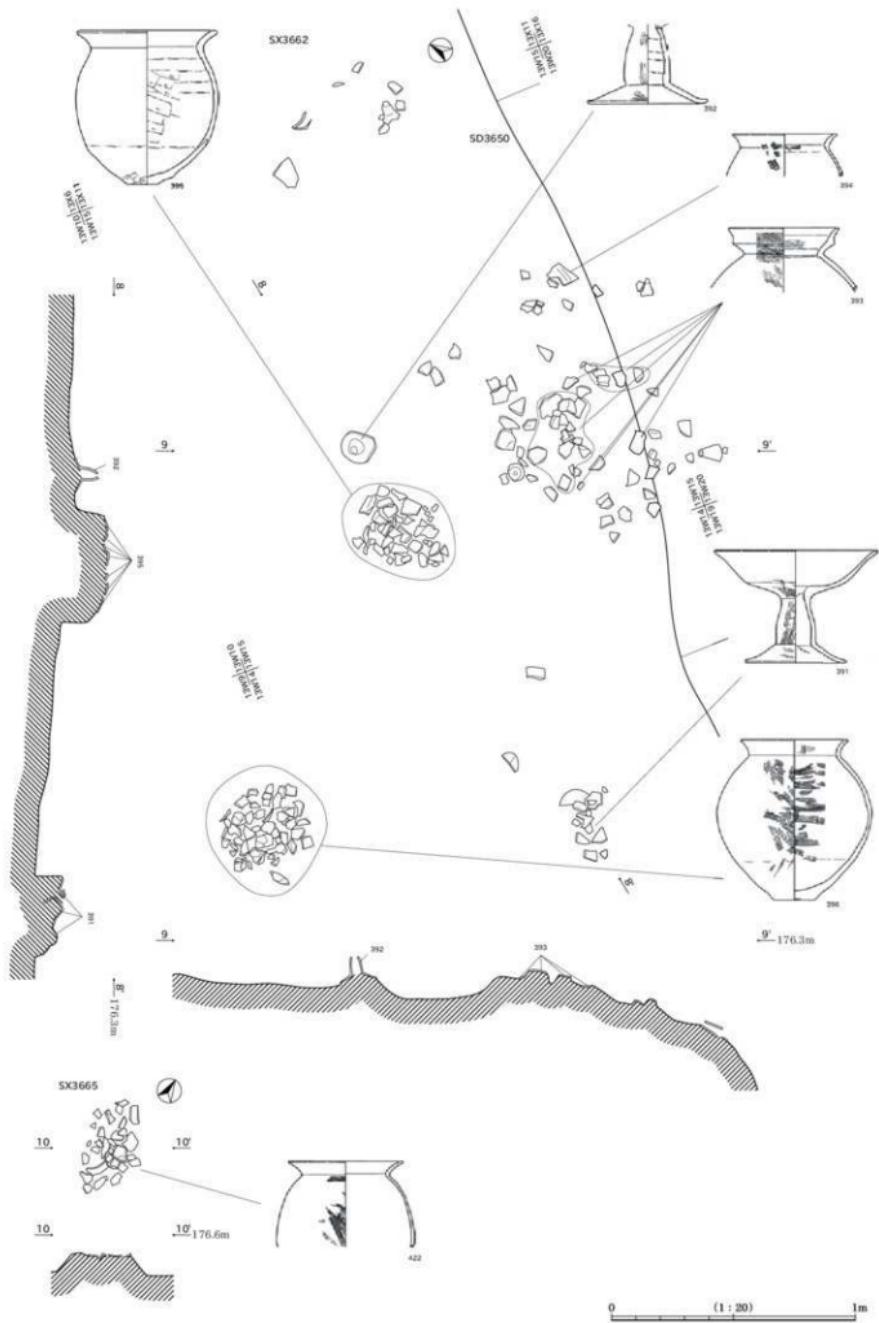


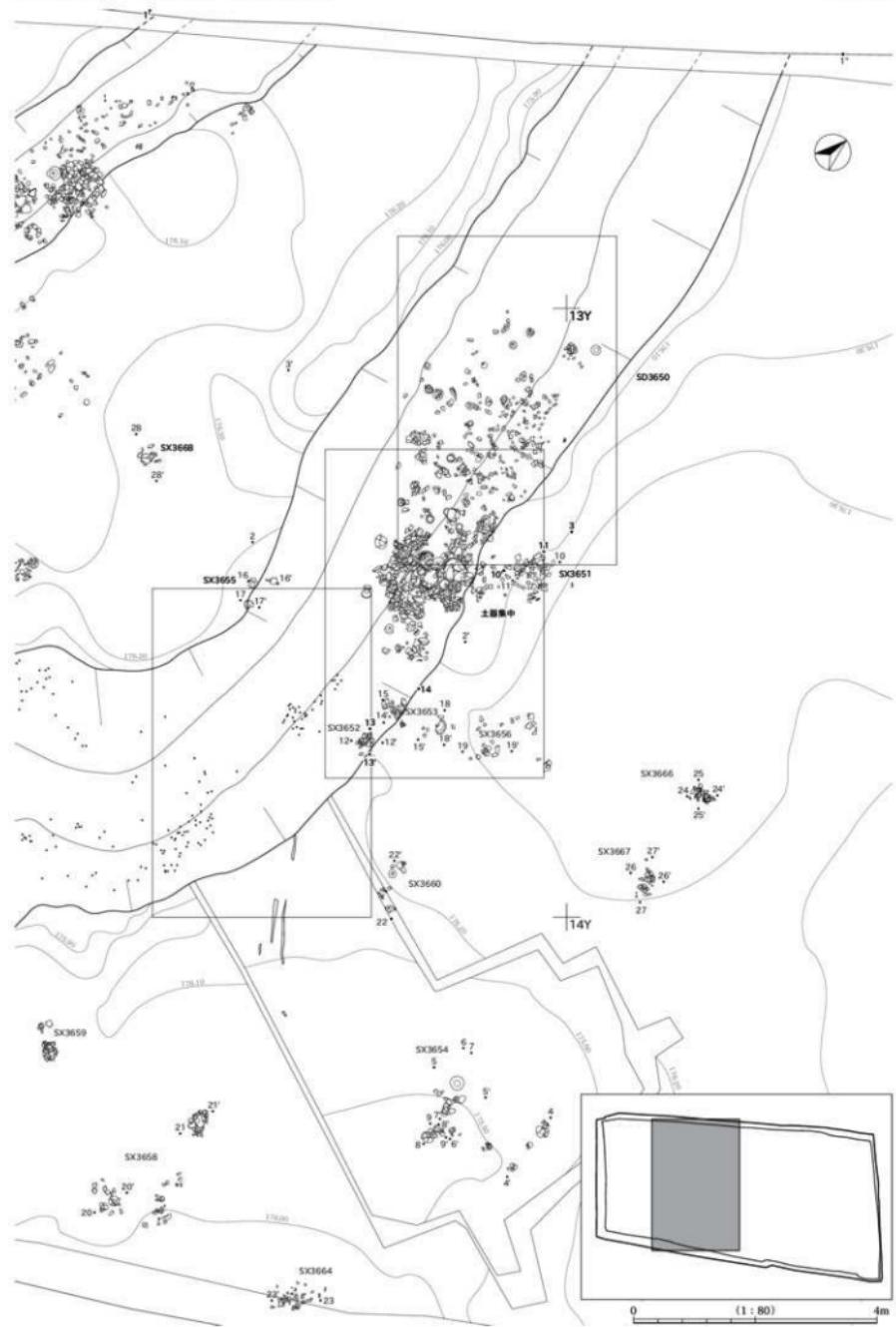


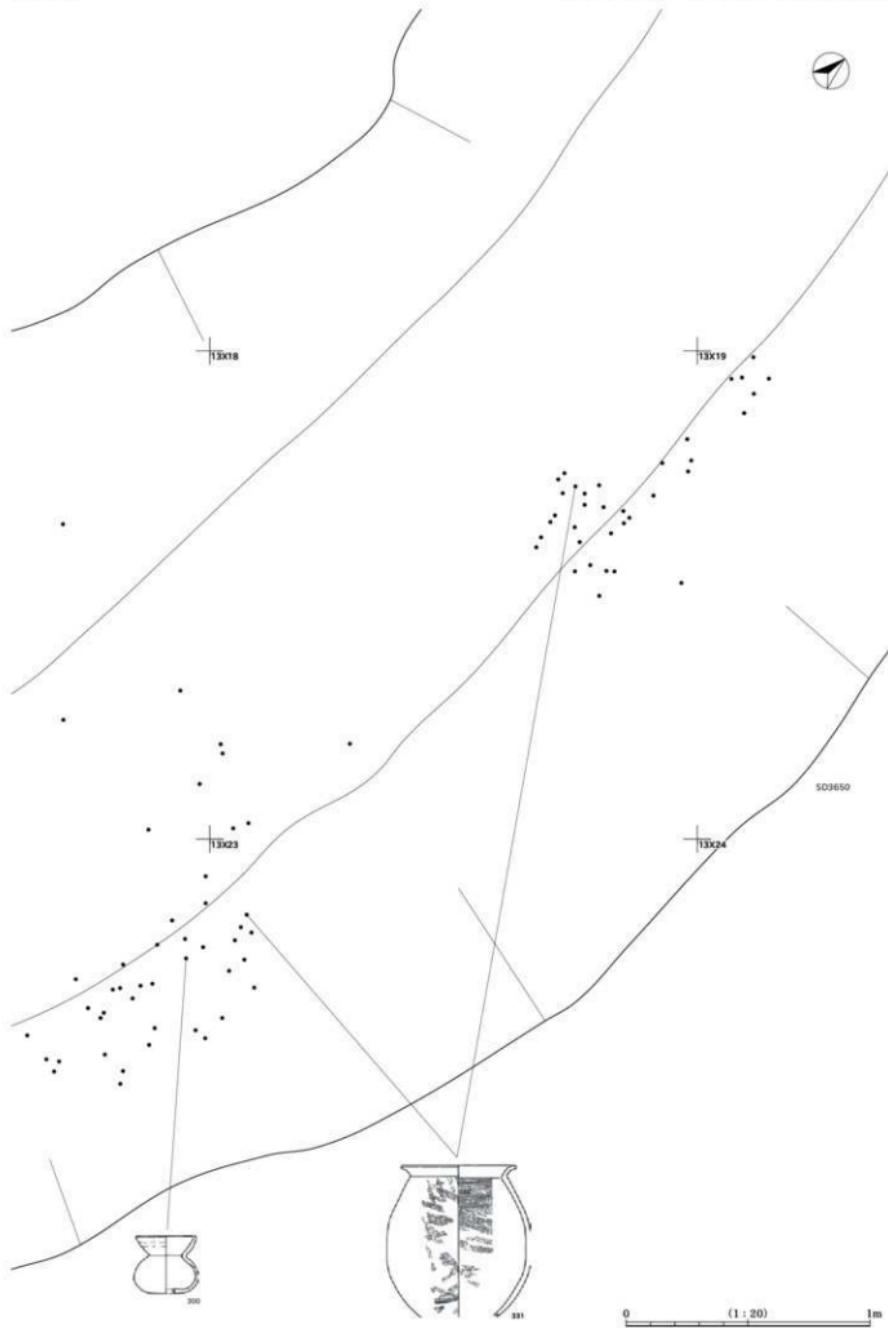


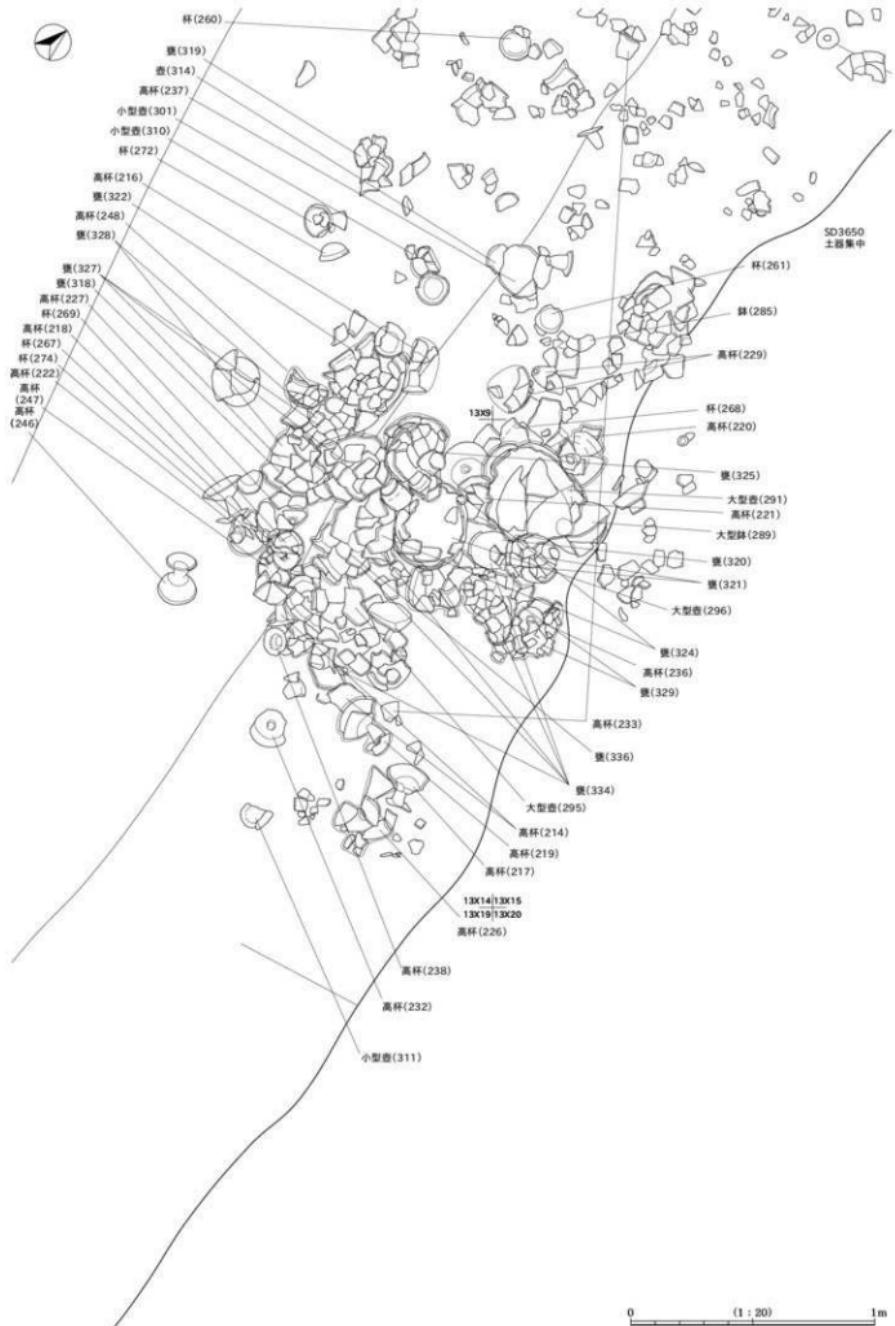


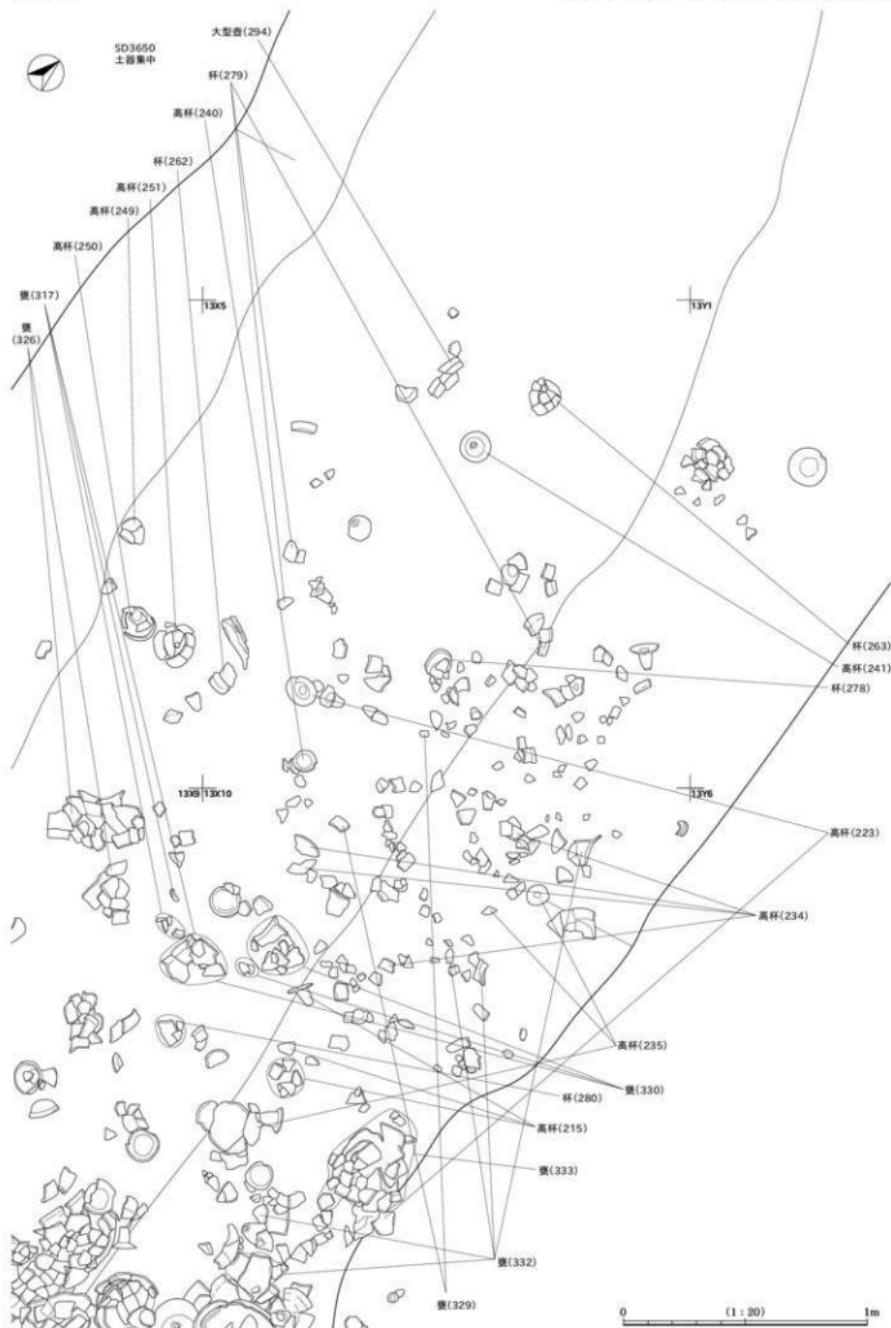


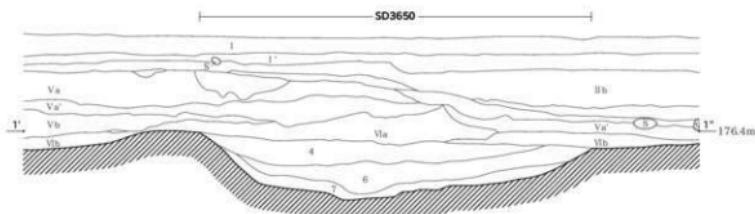
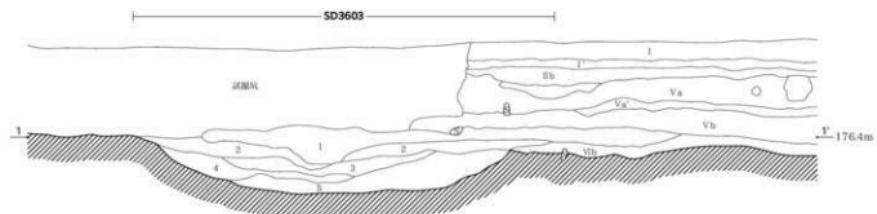








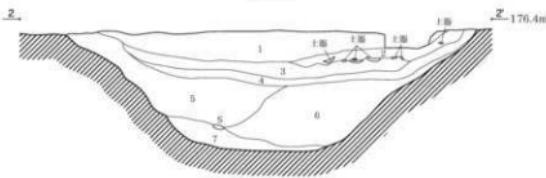




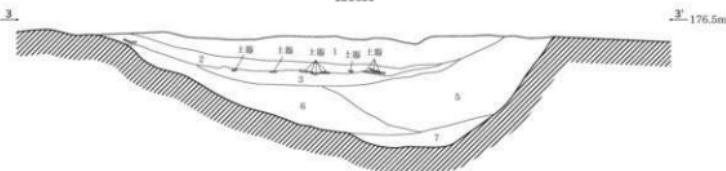
## SD3603

1. 暗灰褐色土・粘性・しまり強い、直徑 2 ~ 5mm の炭化物微量。上器片多量。
2. 黄灰色土・粘性・しまり強い。直徑 2 ~ 5mm の炭化物微量。直徑 20 ~ 50mm の円礫が混入。上器片多量。
3. 灰黃色シルト・やや砂質。粘性・しまりやや強い。粘性やや弱い。
4. 灰色土・直徑 2 ~ 8mm の炭化物少量。直徑 10 ~ 30mm の円礫が混入。上器片少量。
5. に赤い黄色シルト・粗砂を含み、全体的にやや砂質。直徑 10 ~ 30mm の円礫が少量。上器片少量。

## SD3650

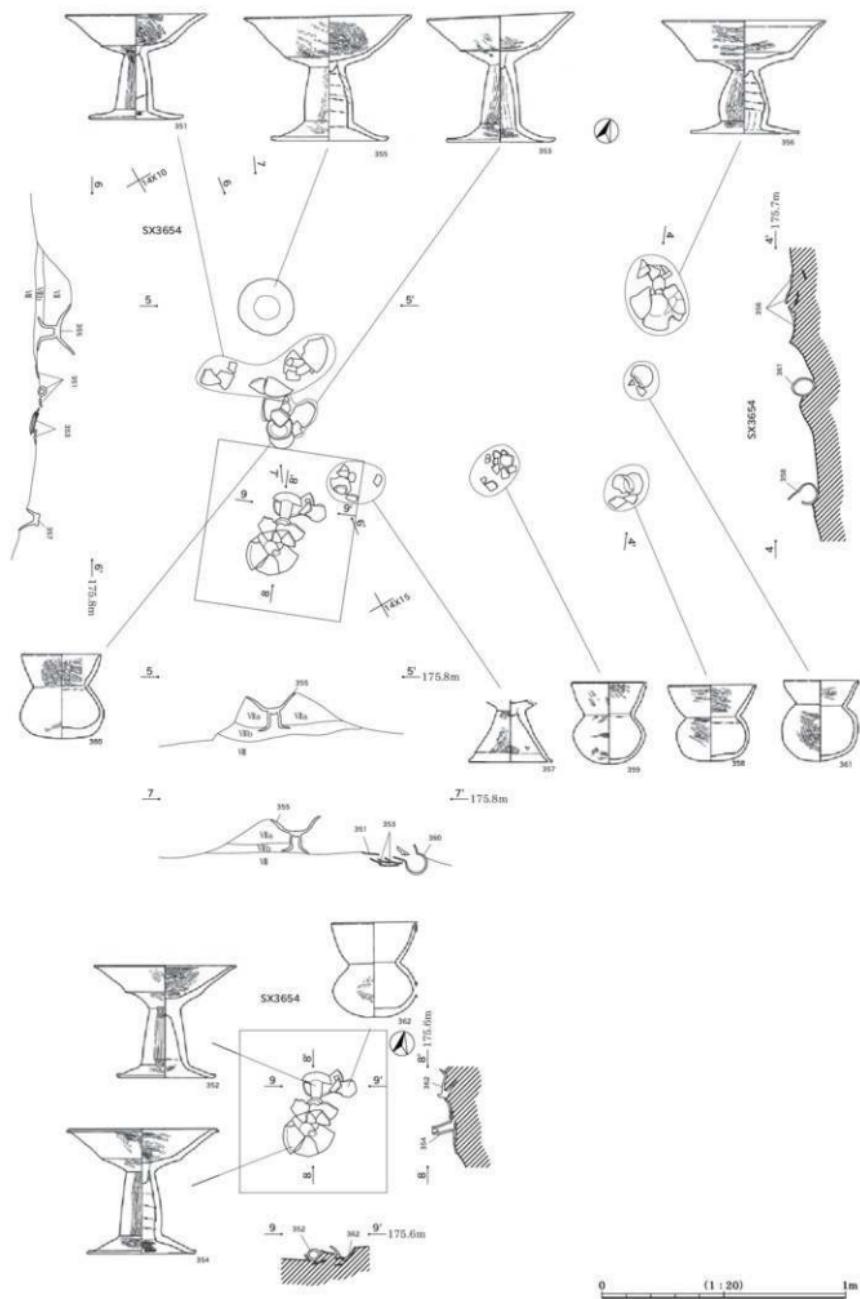


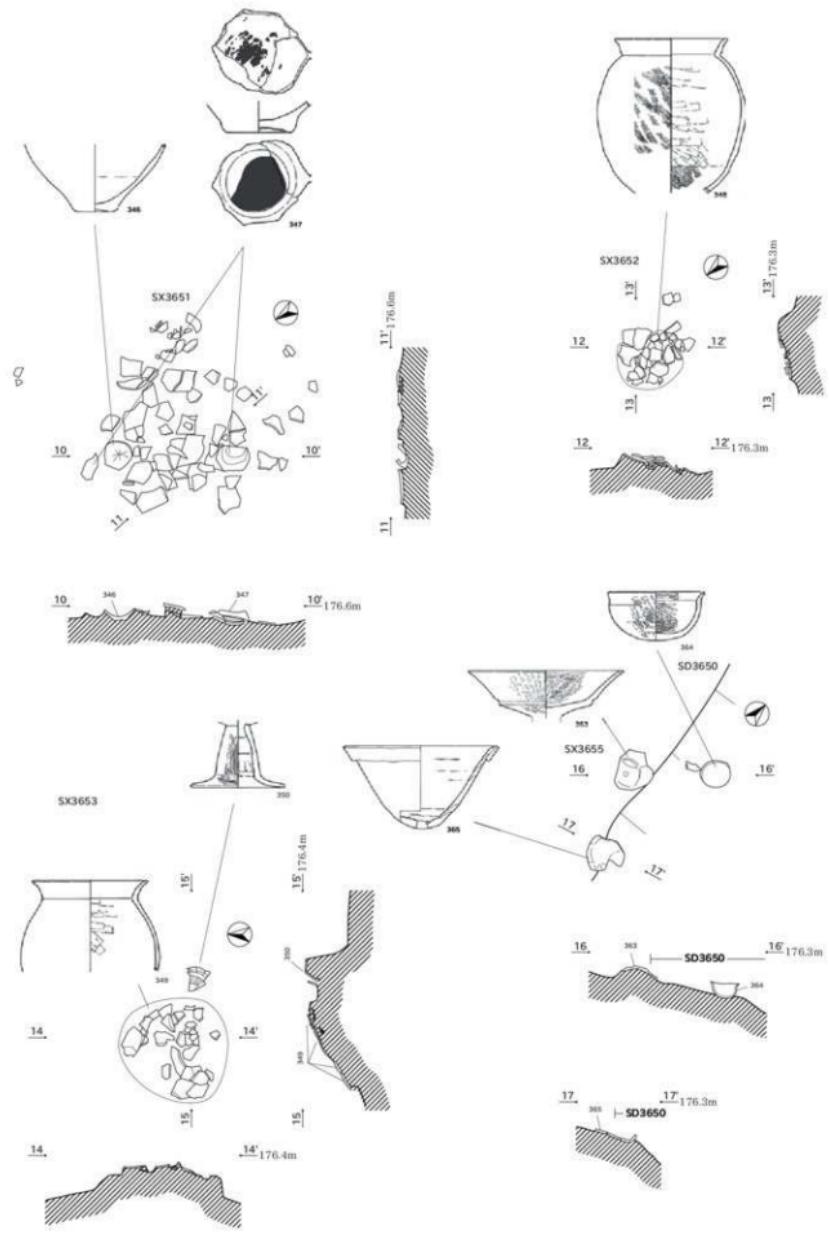
## SD3650

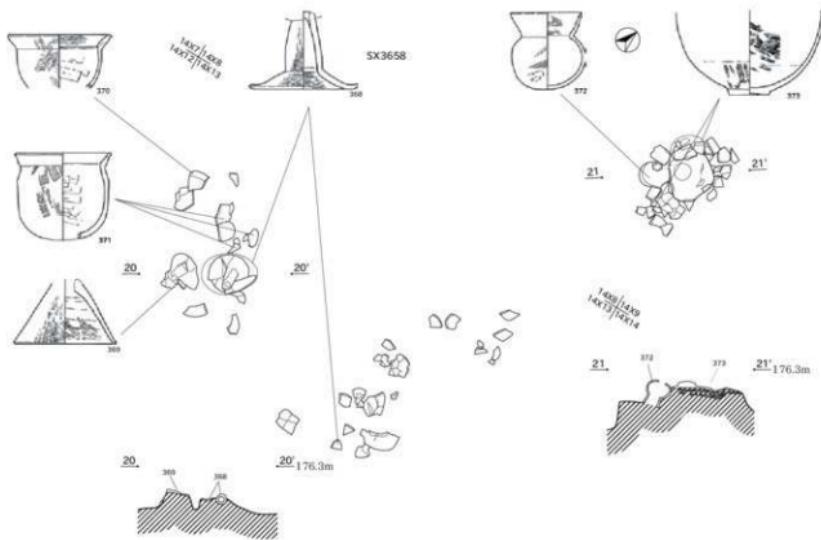
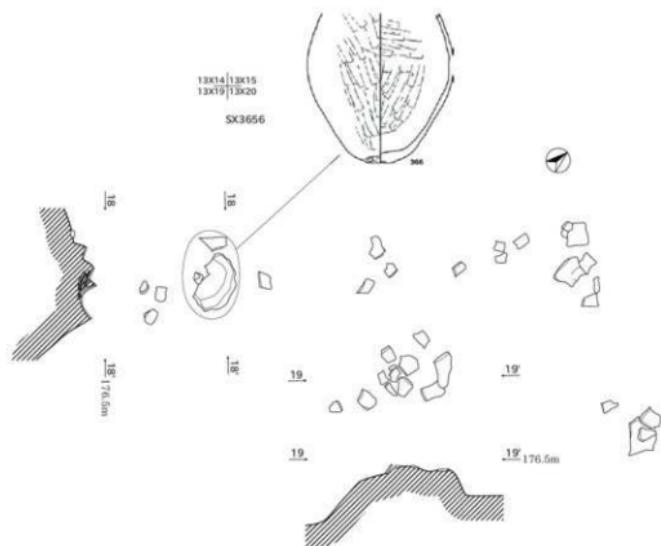


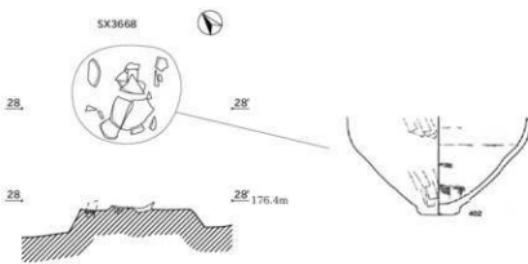
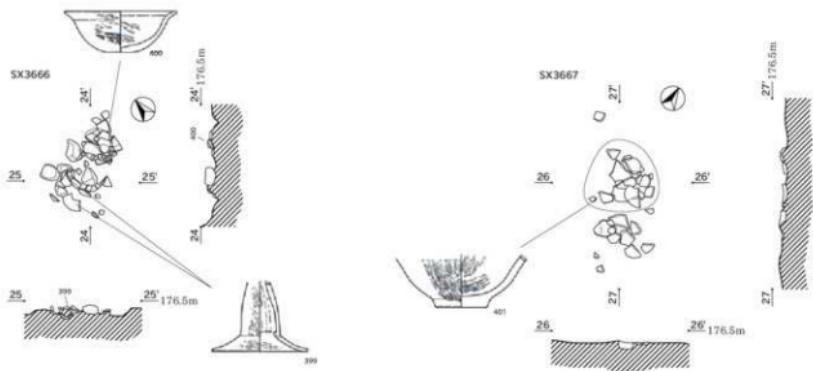
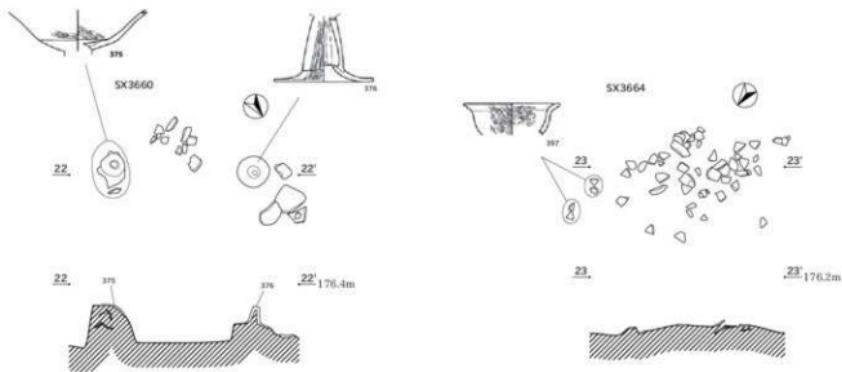
## SD3650

1. 黄灰色土・黄灰色土と細砂層が互層をなす。部分的に礫層上も堆積する。
2. 浅黄色土・浅黄色土と細砂層・礫層が互層をなす。礫層は直徑 2 ~ 3cm の礫からなる。上器片多量。
3. 浅黄色土・砂質シルトが主体である。上器片多量。
4. 灰色土・シルト質が強い。粗砂層と礫層上層が互層をなす。
5. 灰黃色シルト・粗砂を含み、全体的にやや砂質。直徑 10 ~ 30mm の円礫が少量。上器片少量。
6. に赤い黄色シルト・粘性やや強い。直徑 2 ~ 8mm の炭化物微量。
7. 黄灰色シルト・細砂を含み、全体的にやや砂質。直徑 10 ~ 30mm の円礫が少量。









S

T

U

9

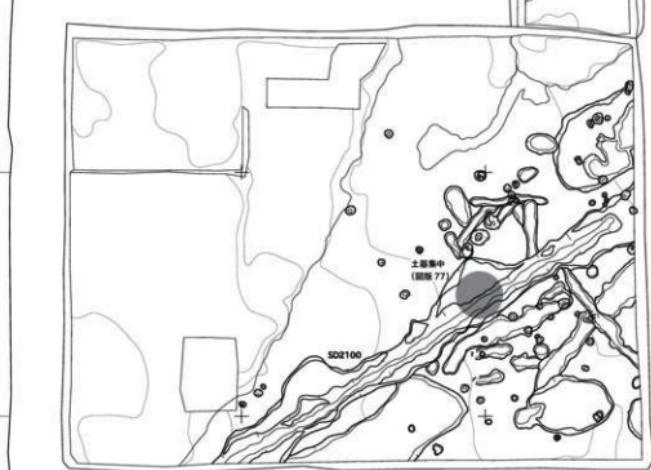
10

11

12

13

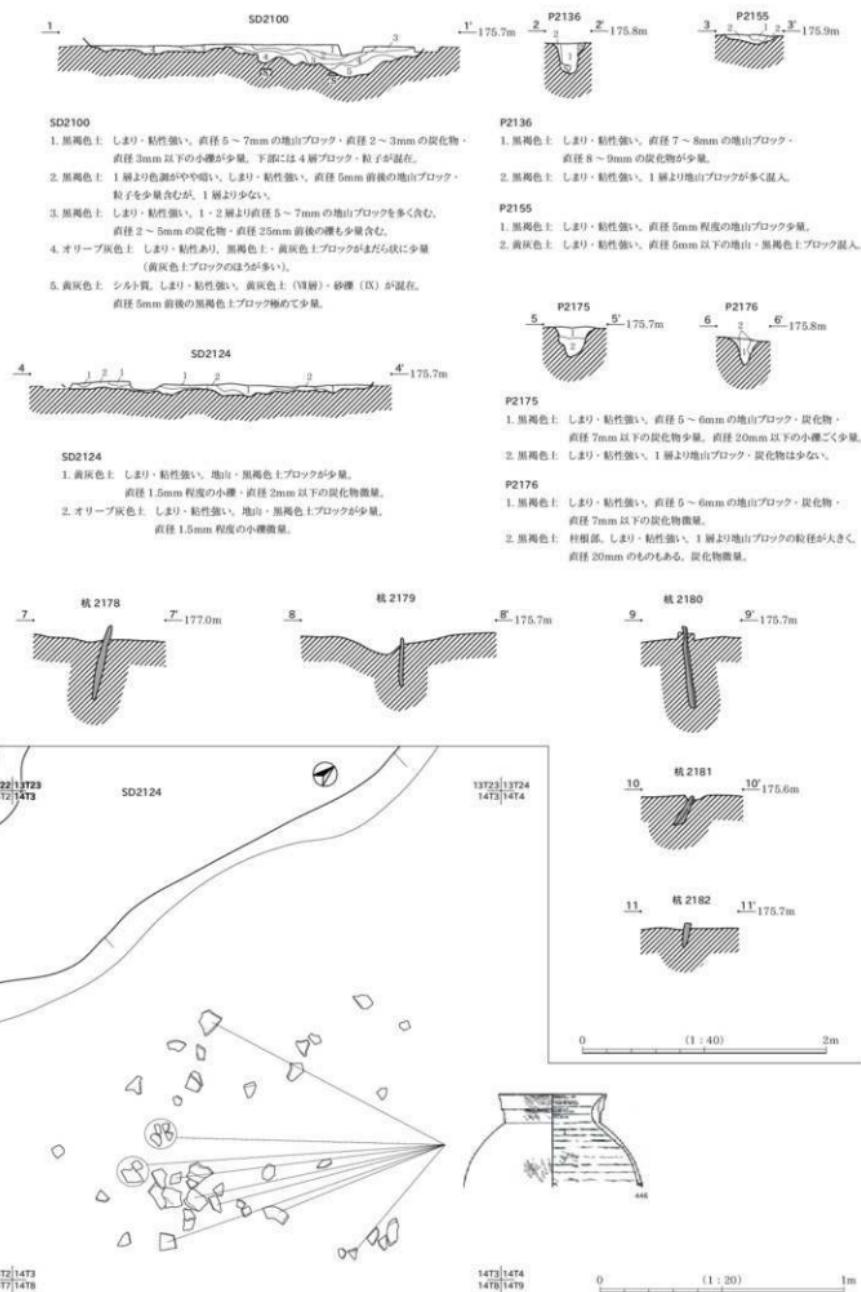
14

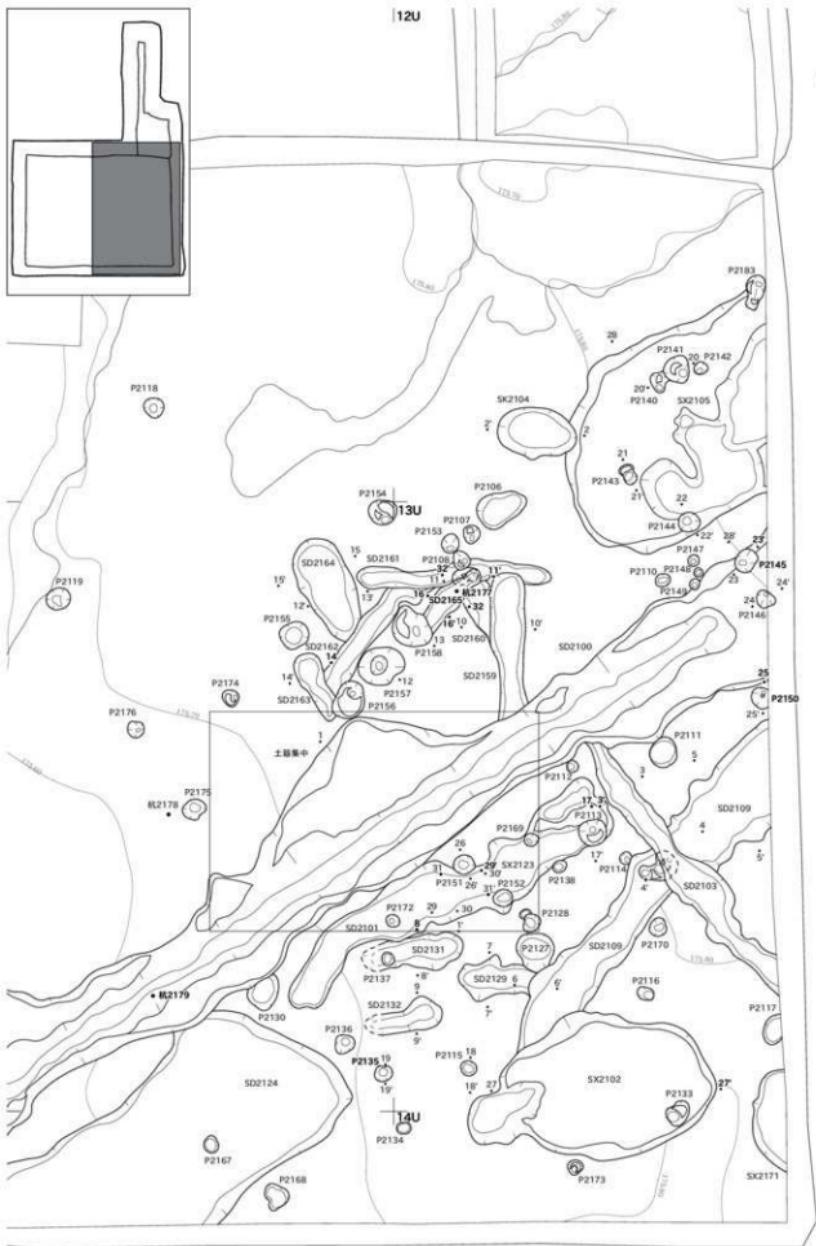


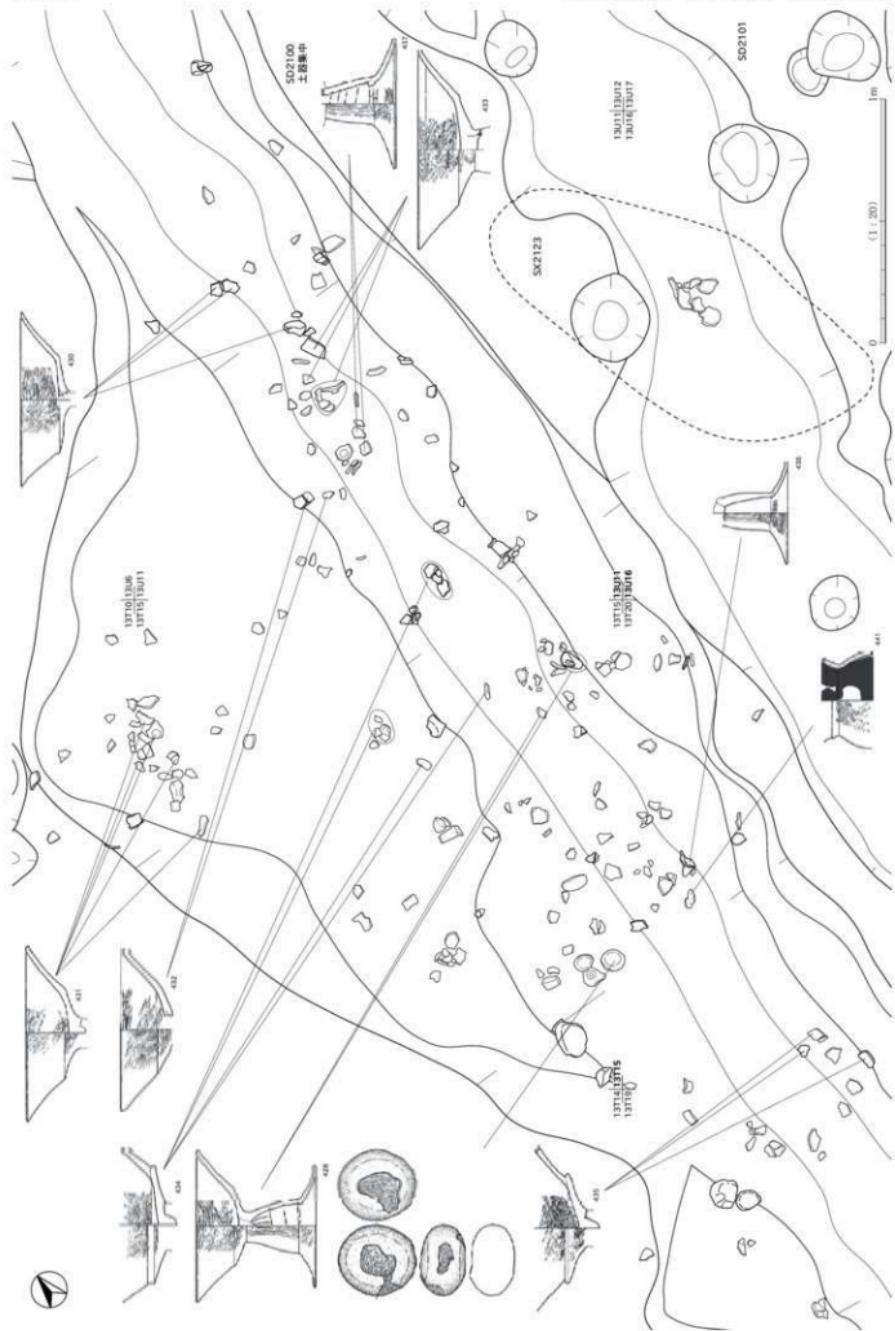
(1 : 200)

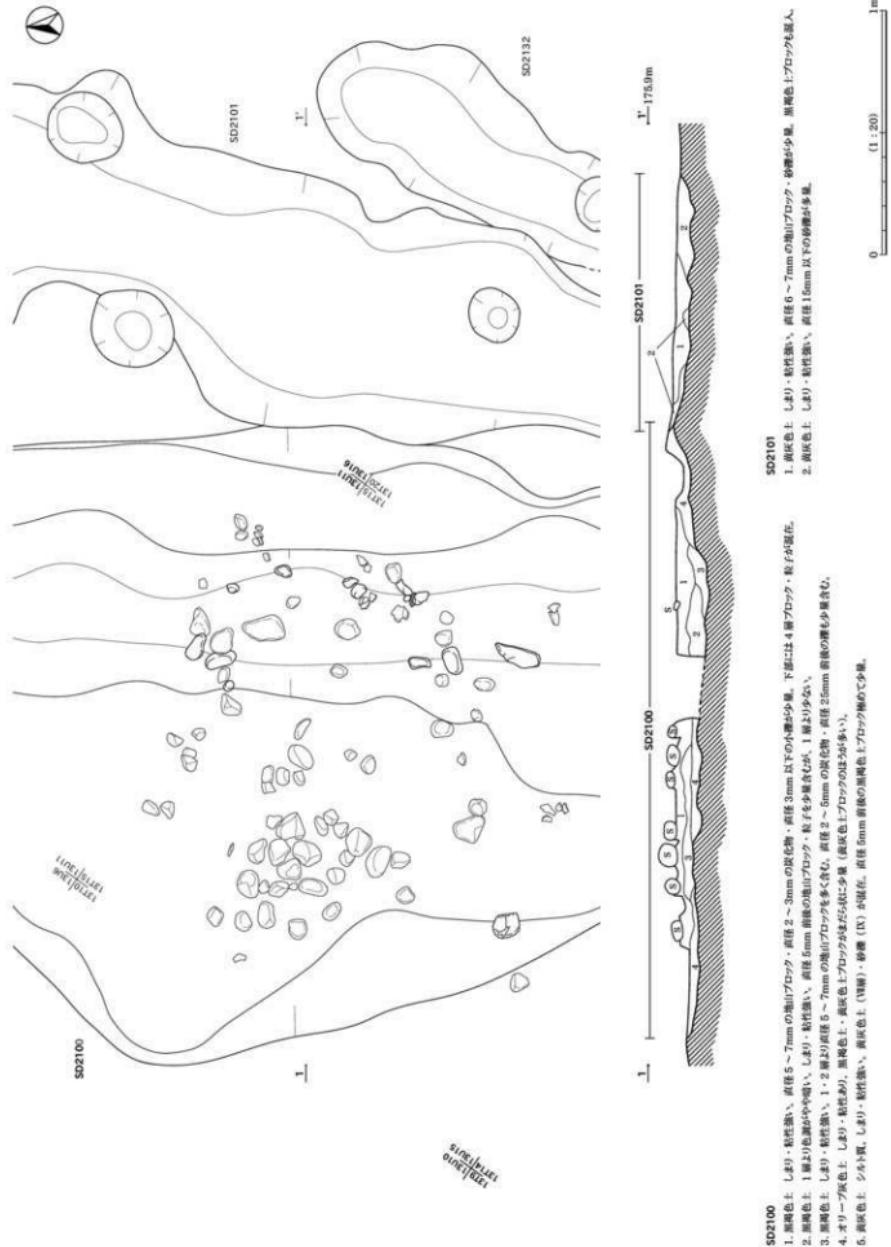
10m

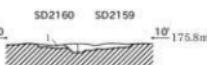
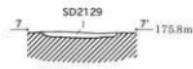
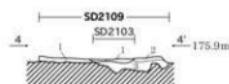












SD2131

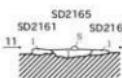
1. 黄灰色粘質土 しまり強い、直徑 2 ~ 3mm の地山粒子・繊維・小礫少量。  
直徑 2mm の炭化物微量。

SD2132

1. 黄灰色粘質土 しまり強い、直徑 2 ~ 3mm の地山粒子・繊維・小礫少量。  
直徑 2mm の炭化物微量。

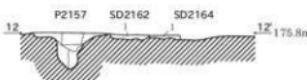
SD2159

1. 黄灰色土 しまり・粘性強い、直徑 5mm 前後の地山ブロック・黒褐色土ブロック少量。  
SD2160  
1. 黄灰色土 しまり・粘性強い、直徑 5mm 前後の地山ブロック・黒褐色土ブロック少量。  
(SD2159・1 層より黒褐色土が目立つ。)



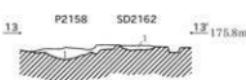
SD2165

1. 黄灰色土 しまり・粘性強い、直徑 5mm 前後の地山ブロック・黒褐色土ブロック少量。  
SD2161  
1. 黄灰色土 しまり・粘性強い、直徑 5mm 以下の地山ブロック少量。



SD2162

1. 黄灰色土 しまり・粘性強い、直徑 5mm 以下の地山ブロック。  
直徑 2mm 以下の炭化物少量。



1. 黄灰色土 しまり・粘性強い、直徑 5mm 以下の地山ブロック・黒褐色土ブロック少量。  
直徑 12mm 以下の炭化物微量。

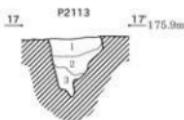


SD2163

1. 黄灰色土 しまり・粘性強い、直徑 5mm 前後の地山ブロック・黒褐色土ブロック少量。繊維ごく少量。

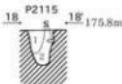
SD2164

1. 黄灰色土 しまり・粘性強い、直徑 5 ~ 7mm の地山ブロック・黒褐色土ブロック少量。繊維微量。



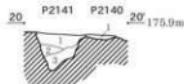
P2113

1. 黒褐色土 しまり・粘性強い、直徑 15 ~ 17mm の地山ブロック・直徑 8 ~ 9mm の炭化物混入。  
2. オリーブ灰色土 しまり・粘性強い、地山ブロック極めて多量。直徑 7mm 以下の黄灰色土ブロック少量。  
3. 黄灰色土 しまり・粘性強い、直徑 15 ~ 20mm の地山ブロック多量。直徑 5mm 前後の炭化物少量。



P2113

1. 黒褐色土 しまり・粘性強い、直徑 15mm 前後の地山ブロック少量。  
直徑 15mm 以下の小礫混入。  
2. 淡黃灰色土 しまり・粘性強い、1 層より地山ブロックが多い。  
直徑 15mm 以下の小礫混入。



P2115

1. 黒褐色土 しまり・粘性強い、直徑 15mm 前後の地山ブロック少量。  
直徑 15mm 以下の小礫混入。  
2. 淡黃灰色土 しまり・粘性強い、1 層より地山ブロックが多い。  
直徑 15mm 以下の小礫混入。

P2135

1. 黒褐色土 しまり・粘性強い、直徑 7 ~ 8mm の地山ブロック・直徑 8mm  
前後の炭化物が少量。直徑 15mm 以下の小礫混入。

P2140

1. 黄灰色土 しまり・粘性強い、直徑 5mm 前後の地山ブロック少量。

P2141

1. 黒褐色土 しまり・粘性強い、直徑 5mm 以下の地山ブロック少量。直徑 5 ~ 6mm の  
炭化物・直徑 15mm 以下の小礫微量。

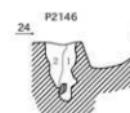
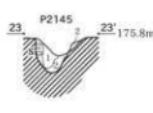
2. 黄灰色土 しまり・粘性強い、直徑 7 ~ 15mm の地山ブロック少量。  
直徑 10mm 以下の礫微量。

3. 黄灰色土 しまり・粘性強い、2 層より地山ブロックが少ない。直徑 5mm 前後の炭化物微量。

P2143

1. 黑褐色土 しまり・粘性強い、直徑 6 ~ 7mm の地山ブロック少量。直徑 2 ~ 3mm の  
炭化物微量。

2. 黑褐色土 しまり・粘性強い、直徑 5mm 前後の地山ブロック少量。直徑 5mm 以下の  
炭化物・直徑 15mm 以下の小礫微量。



P2144

1. 黄灰色土 しまり・粘性強い、直徑 6 ~ 7mm の地山ブロック少量。  
直徑 2mm 前後の炭化物微量。  
2. 黑褐色土 しまり・粘性強い、1 層より地山ブロックが多い。直徑 3 ~ 5mm の  
炭化物・直徑 15mm 前後の小礫微量。

3. 黄灰色土 しまり・粘性強い、2 層より地山ブロック・炭化物・小礫の混入が少ない。

P2146

1. 黑褐色土 しまり・粘性強い、直徑 5 ~ 6mm の地山ブロック少量。  
直徑 2mm 及びの炭化物微量。下部に柱根が残る。

2. 黑褐色土 腹部層。しまり・粘性強い、直徑 6 ~ 25mm の地山ブロック多量。  
直徑 2mm 以下の炭化物微量。

P2150

1. 黑褐色土 しまり・粘性強い、直徑 6 ~ 7mm の地山ブロック・直徑 2 ~ 3mm の  
炭化物微量。下部に柱根が残る。

2. 暗褐色土 腹部層。しまり・粘性強い、1 層より地山ブロックが多い。  
直徑 5 ~ 6mm の炭化物微量。

P2145

1. 黑褐色土 しまり・粘性強い、直徑 6 ~ 7mm の地山ブロック・  
直徑 3mm 前後の炭化物少量。

2. 黄灰色土 しまり・粘性強い、直徑 5mm 以下の地山ブロック少量。  
直徑 5mm 前後の炭化物・小礫微量。



27



P2151

1. 黄灰色土 しまり・粘性強い。粗砂混入。直徑 6mm 以下の地山ブロックと  
粒子が少量。直徑 4 ~ 7mm の炭化物微量。

2. 黑褐色土 しまり・粘性強い、直徑 5 ~ 6mm の地山ブロック・直徑 7mm 以下の  
炭化物・直徑 2mm 以下の礫が少量。

3. 黑褐色土 粘性・しまり強い、直徑 5 ~ 6mm の地山ブロック・直徑 5mm 程度の炭化物微量。

SX2102

1. 黑褐色土 しまり・粘性強い、直徑 5mm 前後の地山ブロック・直徑 3 ~ 5mm の砂礫少量。  
黄灰色土ブロックが少量。

SK2105

28



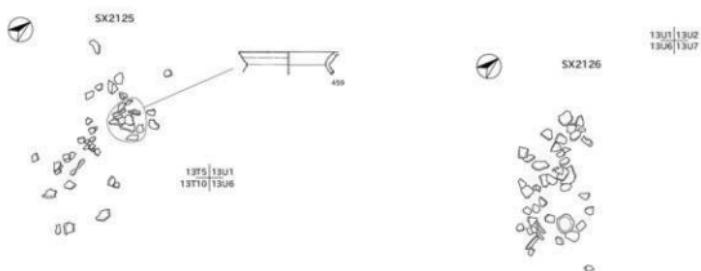
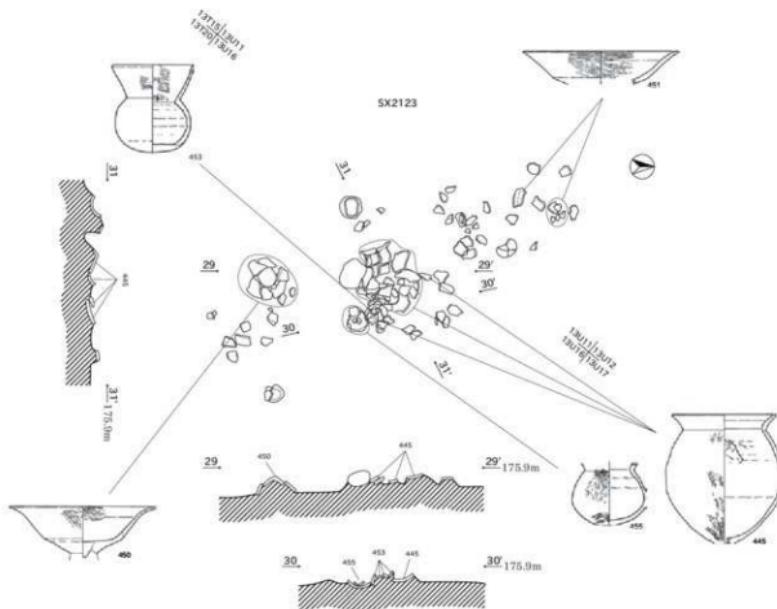
28 175.9m

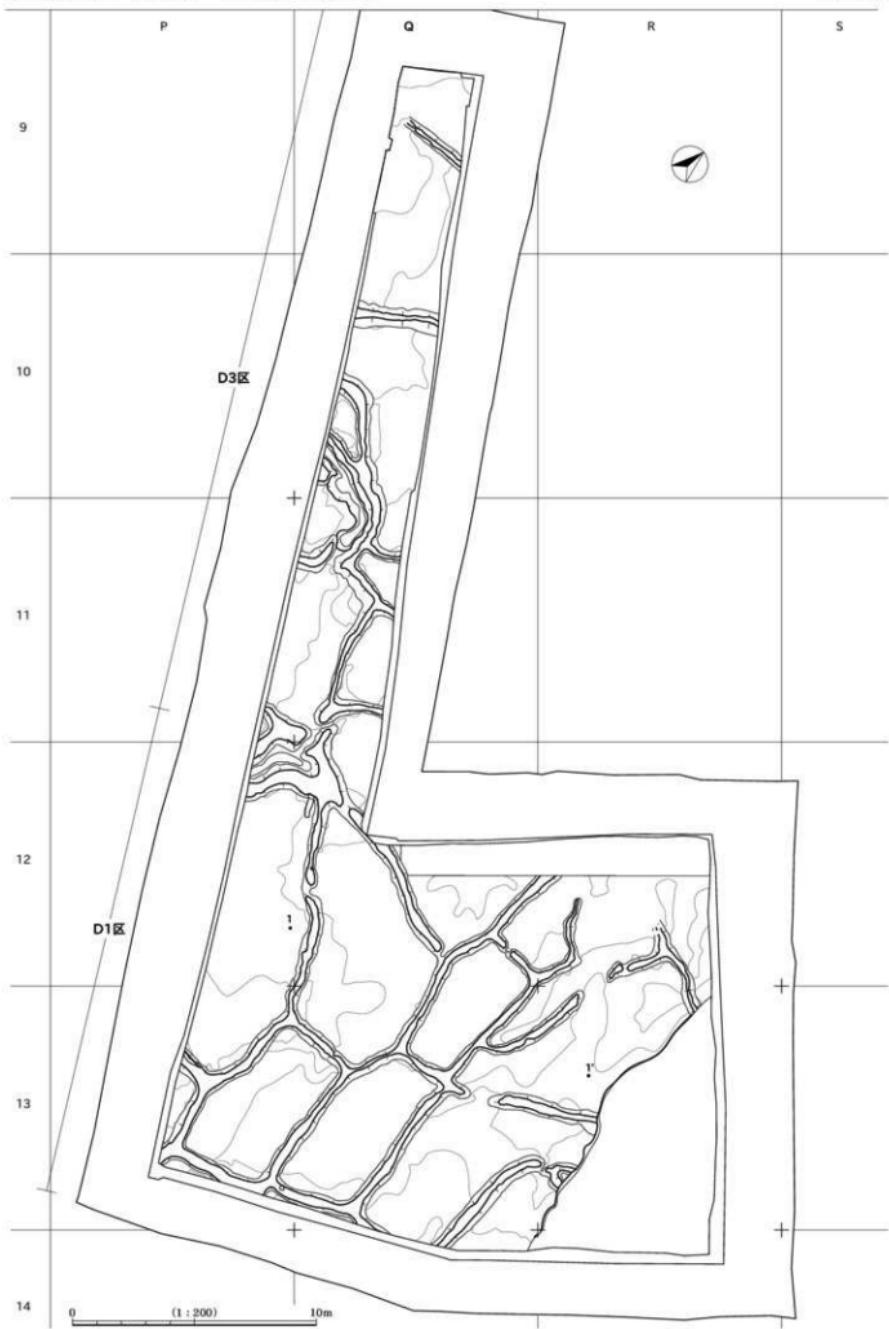
SK2105

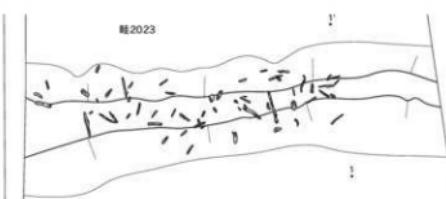
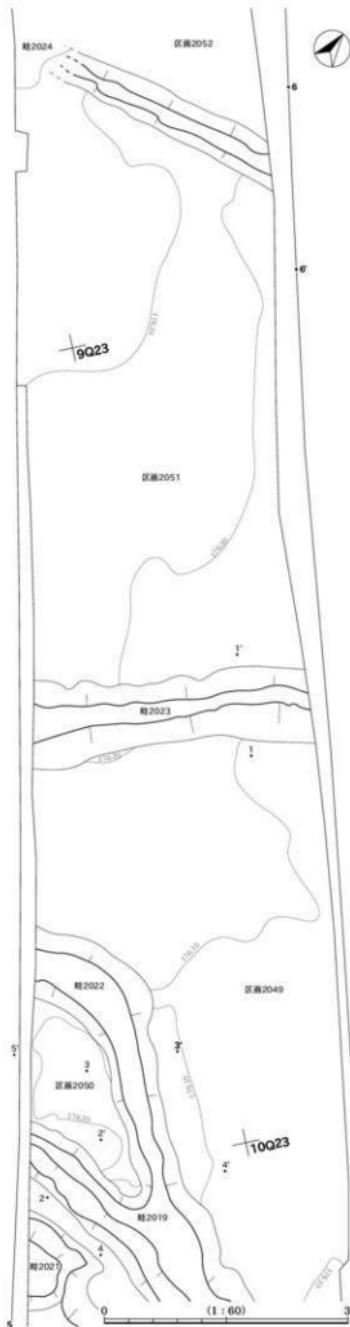
1. 黑褐色土 しまり・粘性強い、直徑 5mm の地山ブロック・直徑 1 ~ 2mm の地山粒子・直徑 2mm 前後の炭化物が少量。直徑 3mm 以下の砂礫が微量。

2. 黑褐色土 しまり・粘性強い、直徑 5 ~ 7mm の地山ブロック・直徑 2 ~ 5mm の炭化物が 1 層よりも多く混入。直徑 2 ~ 5mm の礫が微量。

3. オリーブ灰色土 しまり・粘性強い、直徑 5 ~ 7mm の黄灰色土ブロック少量。



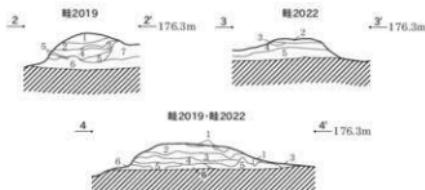




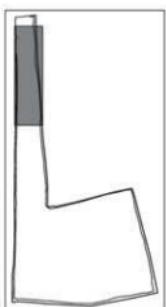
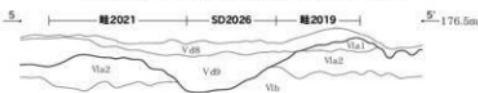
縦2023

1. 海灰色シルト 塗化物ごくまばら。
2. 黄灰砂質シルト 細砂が帯状に含む。塗化物・木本まばらに含む。
3. 黄灰色シルト 塗化物ごくまばら。
4. 黄灰砂質シルト 塗化物ごくまばら。
5. 黄灰色シルト 塗化物ごくまばら。

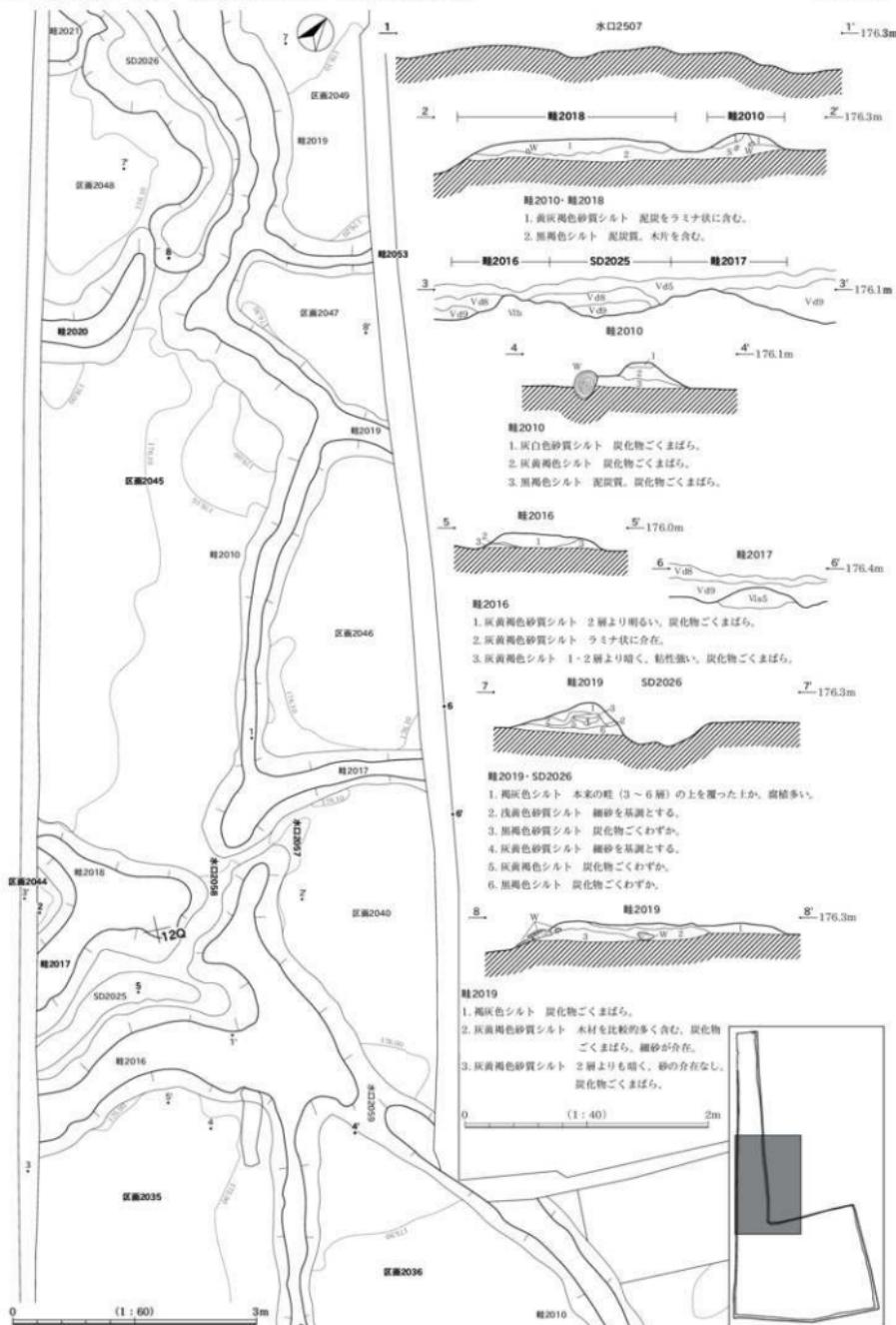
※1・3・5層が同質。交互に盛土した可能性大。



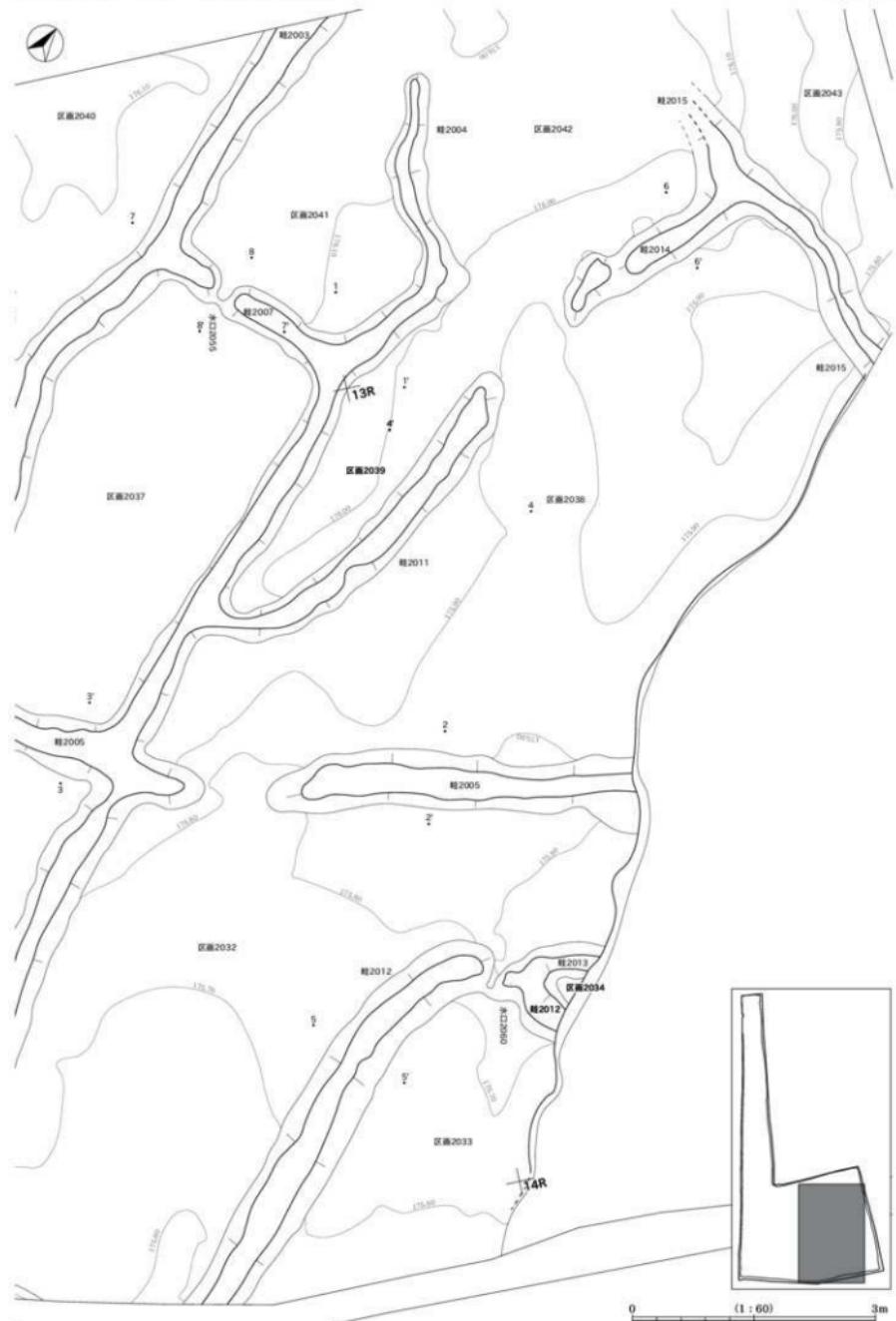
- 縦2022
1. 浅黄色細砂 踏み込み痕の凹みにたまたま洪水砂。
  2. 海灰色砂質シルト 塗化物ごくまばら。
  3. 浅黄色細砂 砂質シルト間に存在。縦2019に共通する堆植物。
  4. 海灰色砂質シルト 塗化物・木ごくまばら。
  5. 浅黄色細砂 シルトと混在。
  6. 漆灰色シルト 上位層と比べて明らかに粘性強い。塗化物ごくまばら。
  7. 海灰色砂質シルト 浅黄色細砂を部分的に含む。塗化物ごくまばら。



0 1 2m  
(1 : 40)



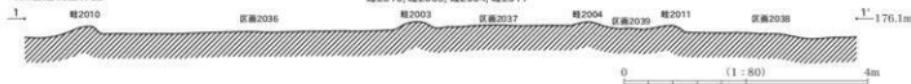




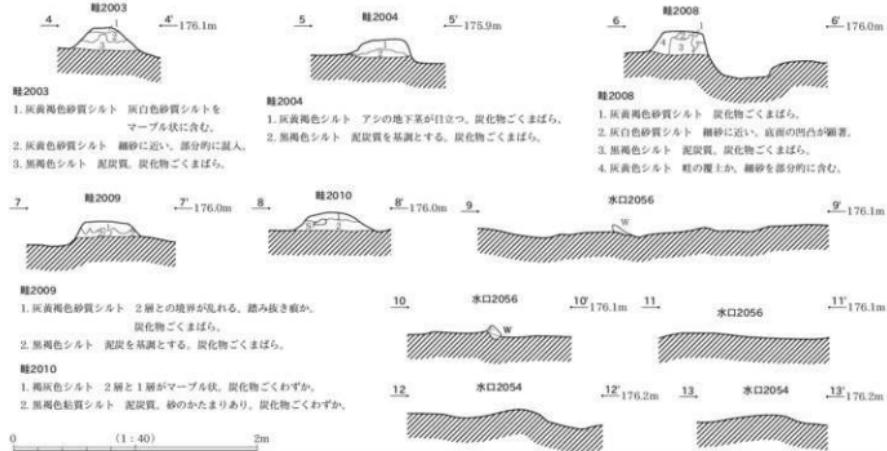
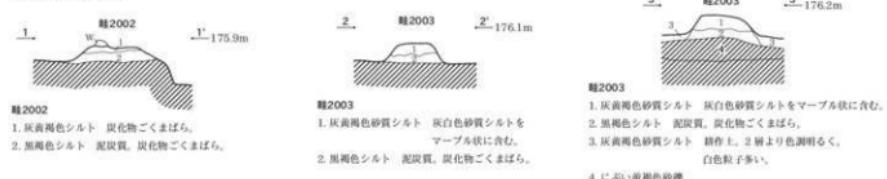
図版 87

余川中道遺跡II D1区 Vib層遺構個別図(3)

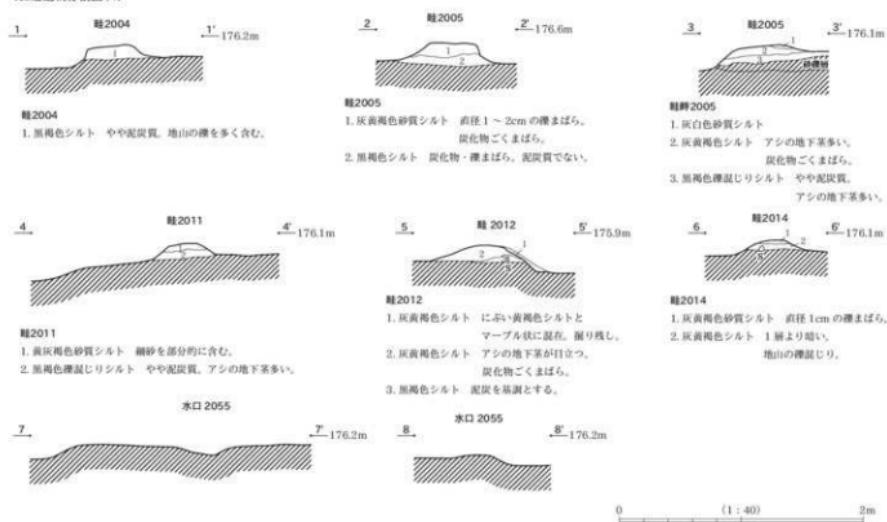
## Vib層遺構全体図

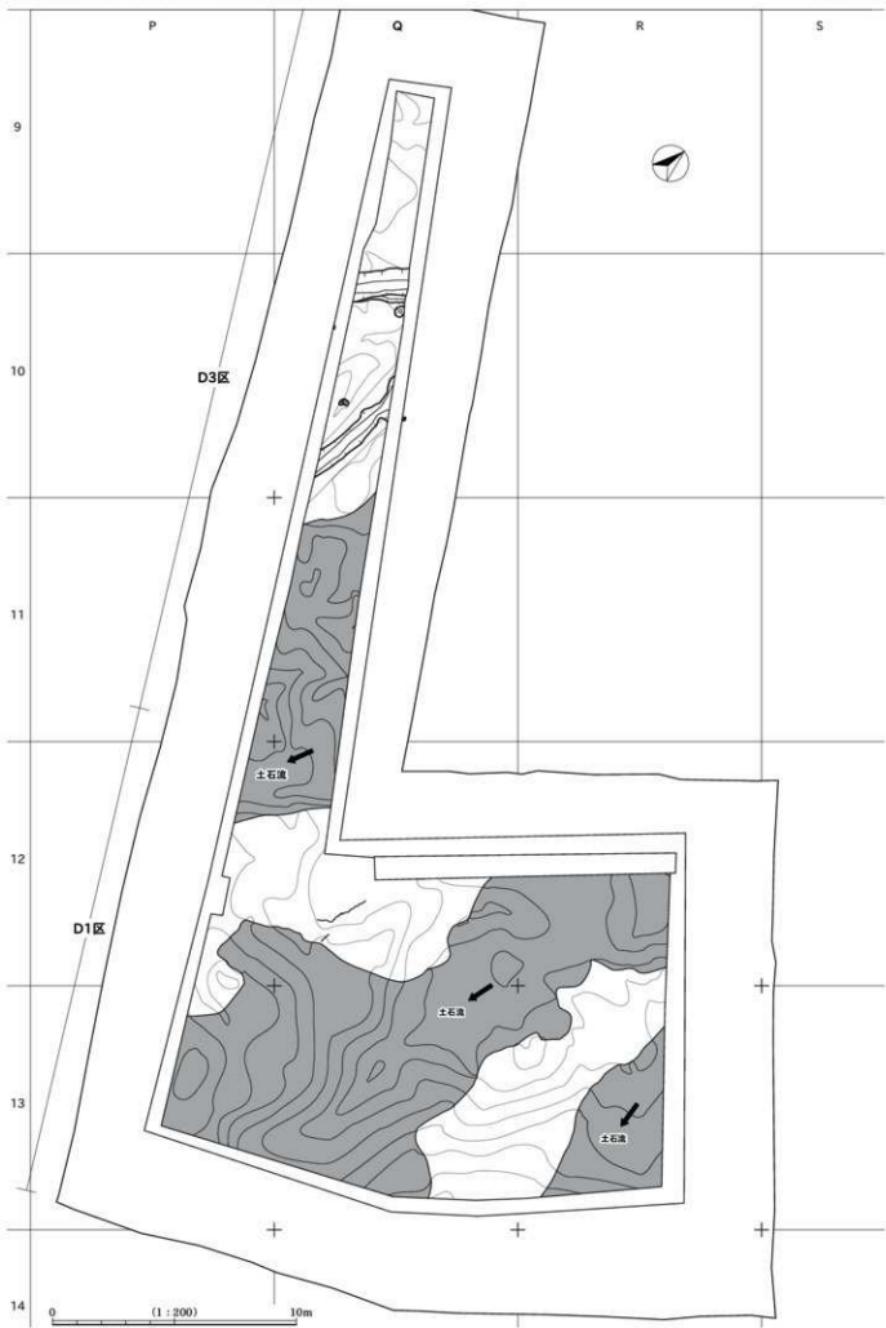


## Vib層遺構分割図(3)

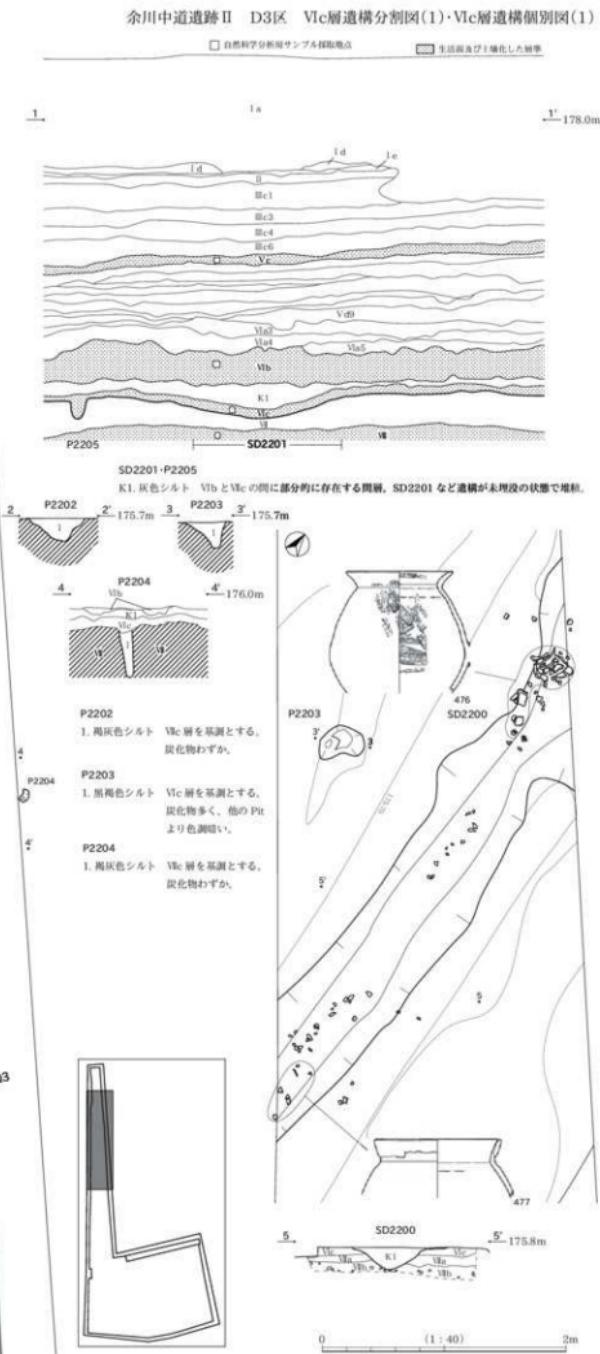
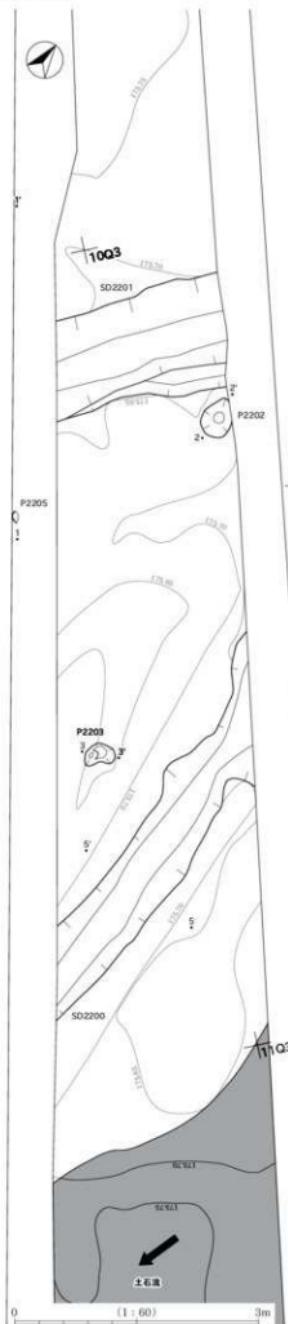


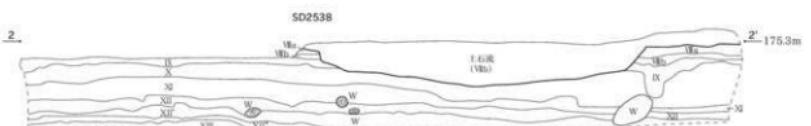
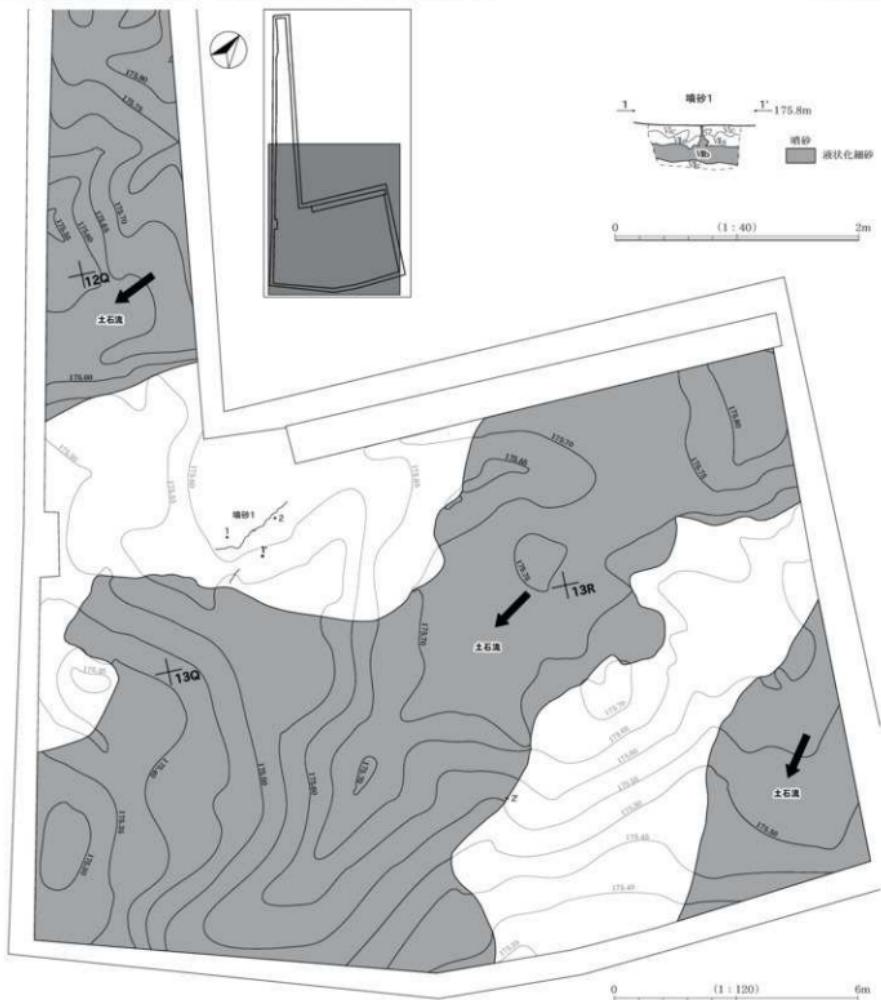
## Vib層遺構分割図(4)





余川中道遺跡II D3区 VIc層遺構分割図(1)・VIc層遺構個別図(1)



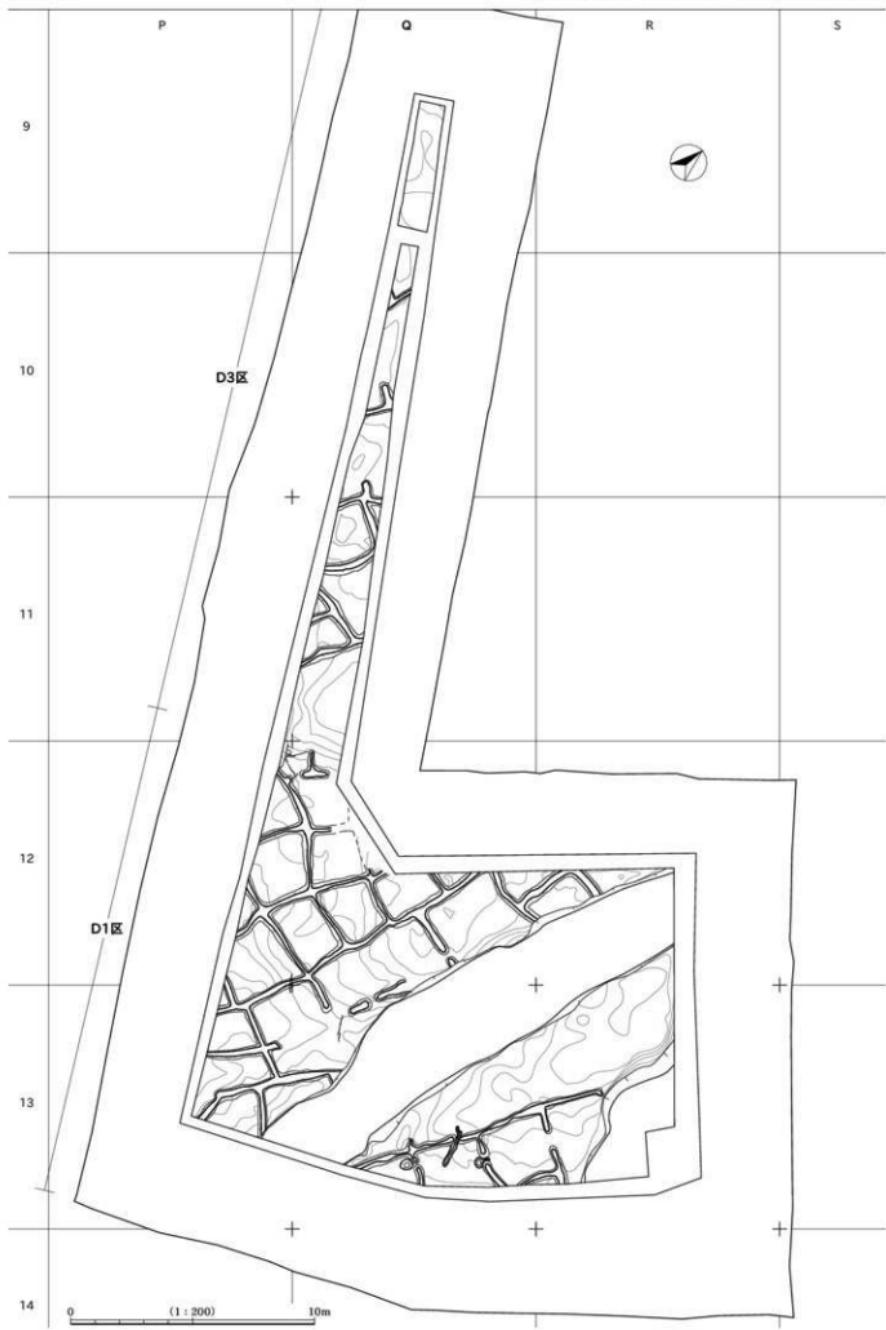


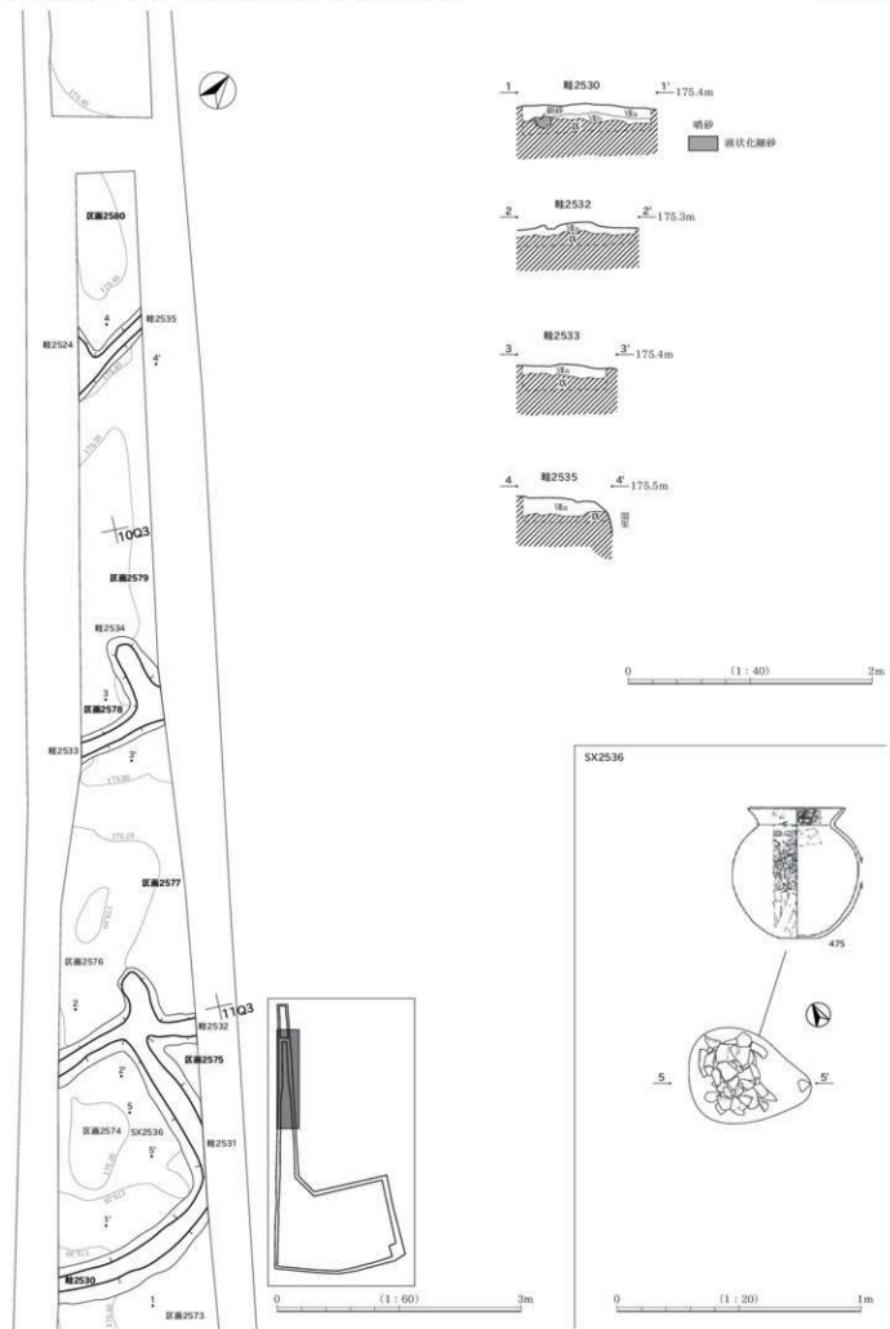
SD2538

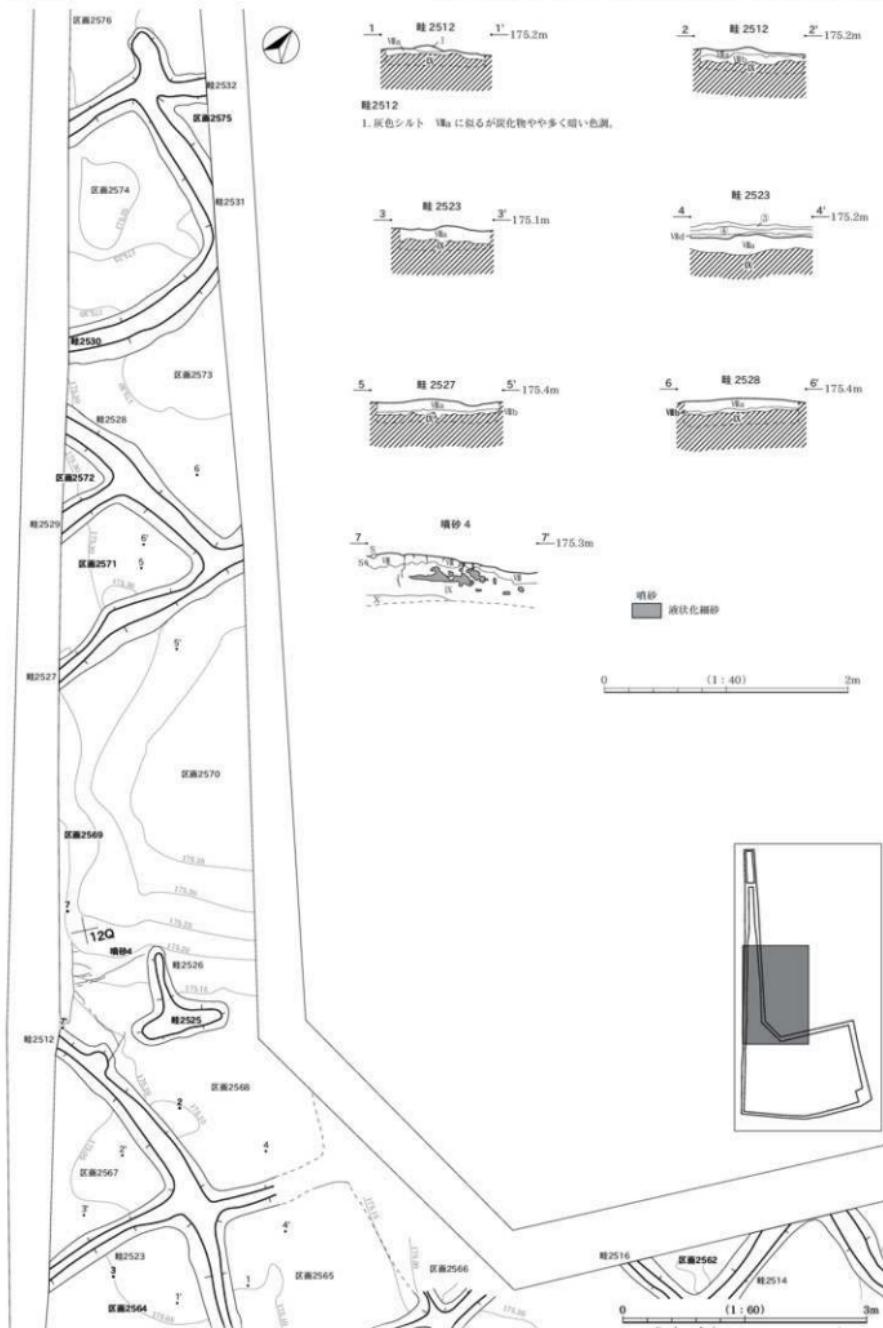
X II': 緑灰色シルト 植物遺体を多く含む黒色系のX II-X II\*に挟まれる。部分的に存在。

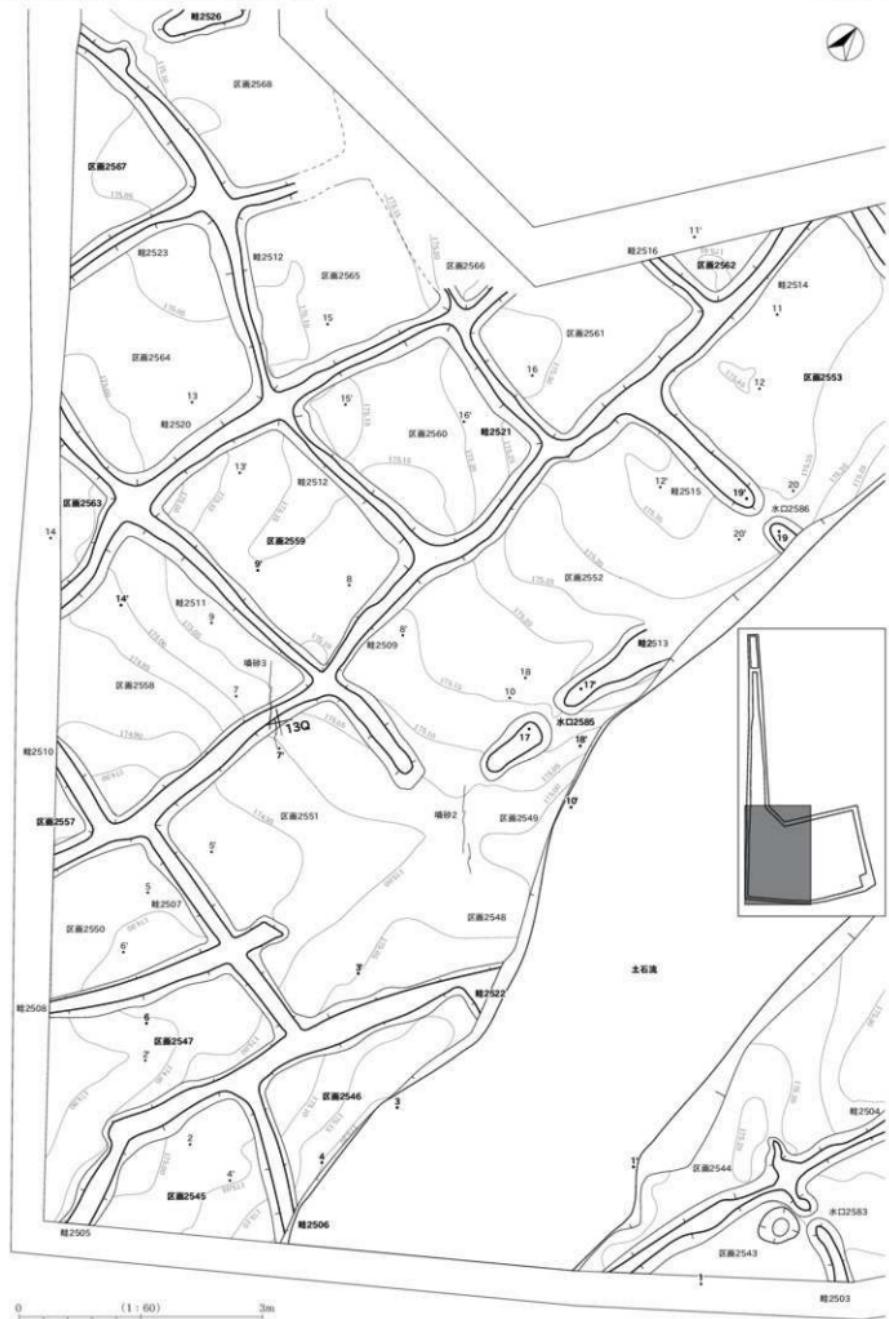
X II\* オリーブ黑色細砂 植物遺体を多く含む、X IIと一連の堆植物と考えられる。

0 (1 : 60) 3m





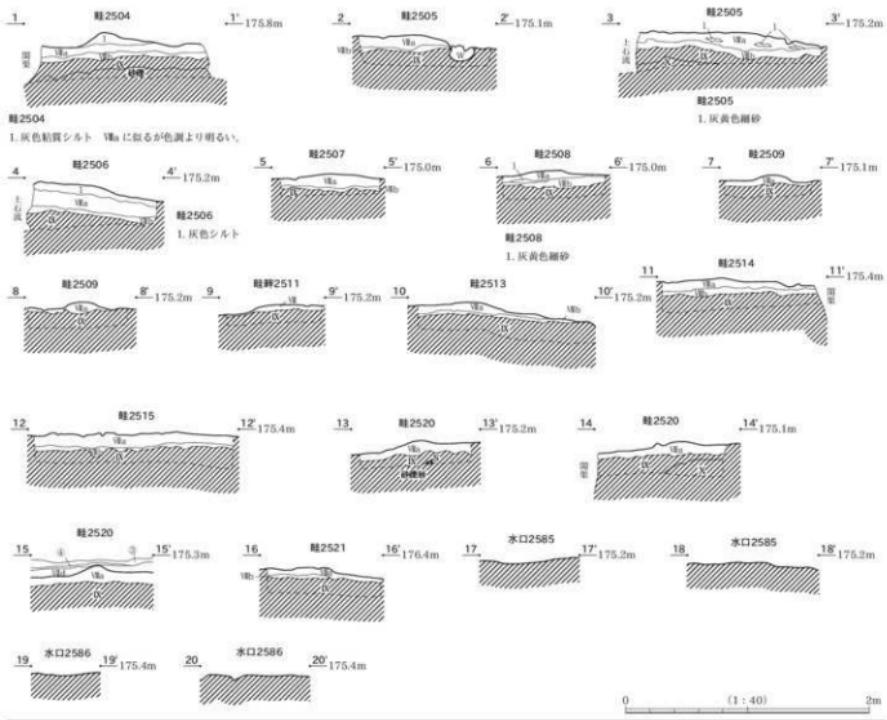




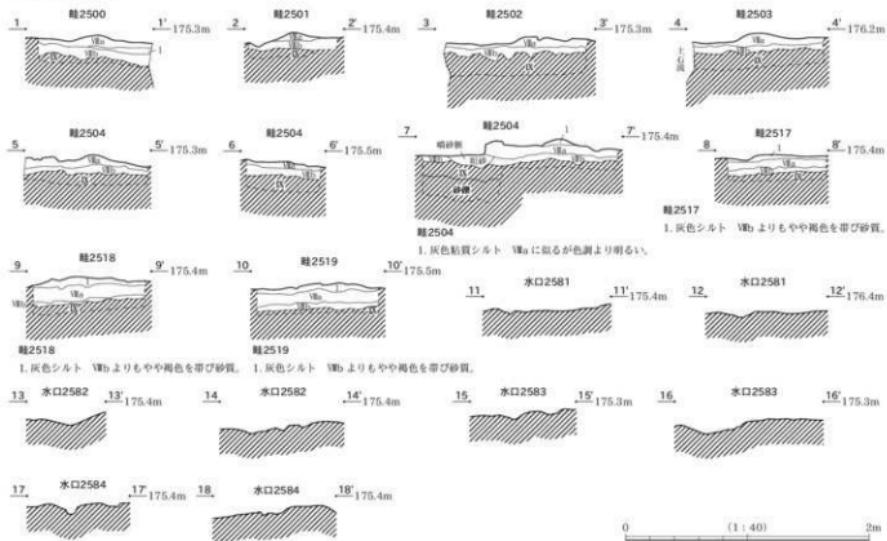


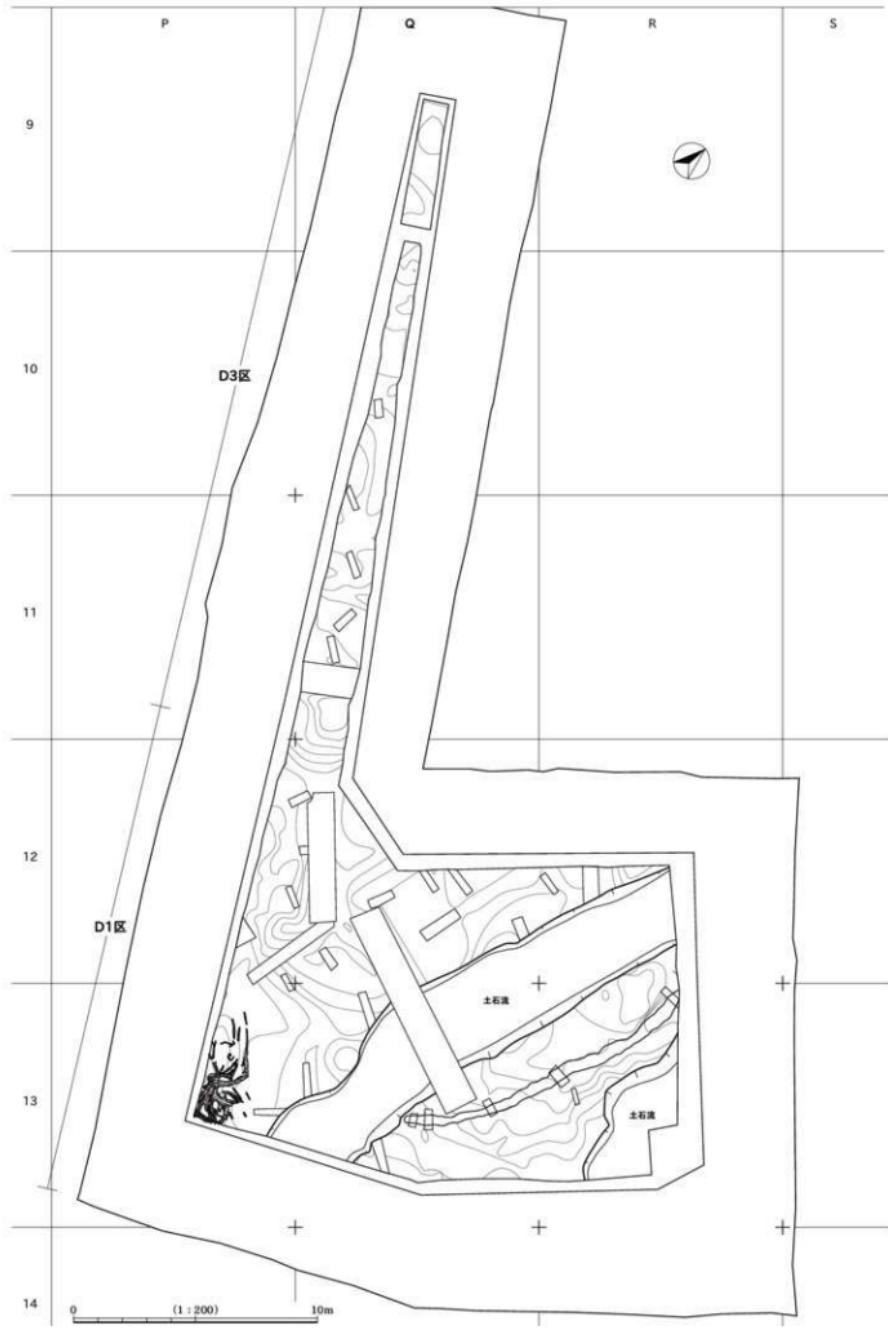
## 余川中道遺跡II D1区 VII層遺構個別図(3)

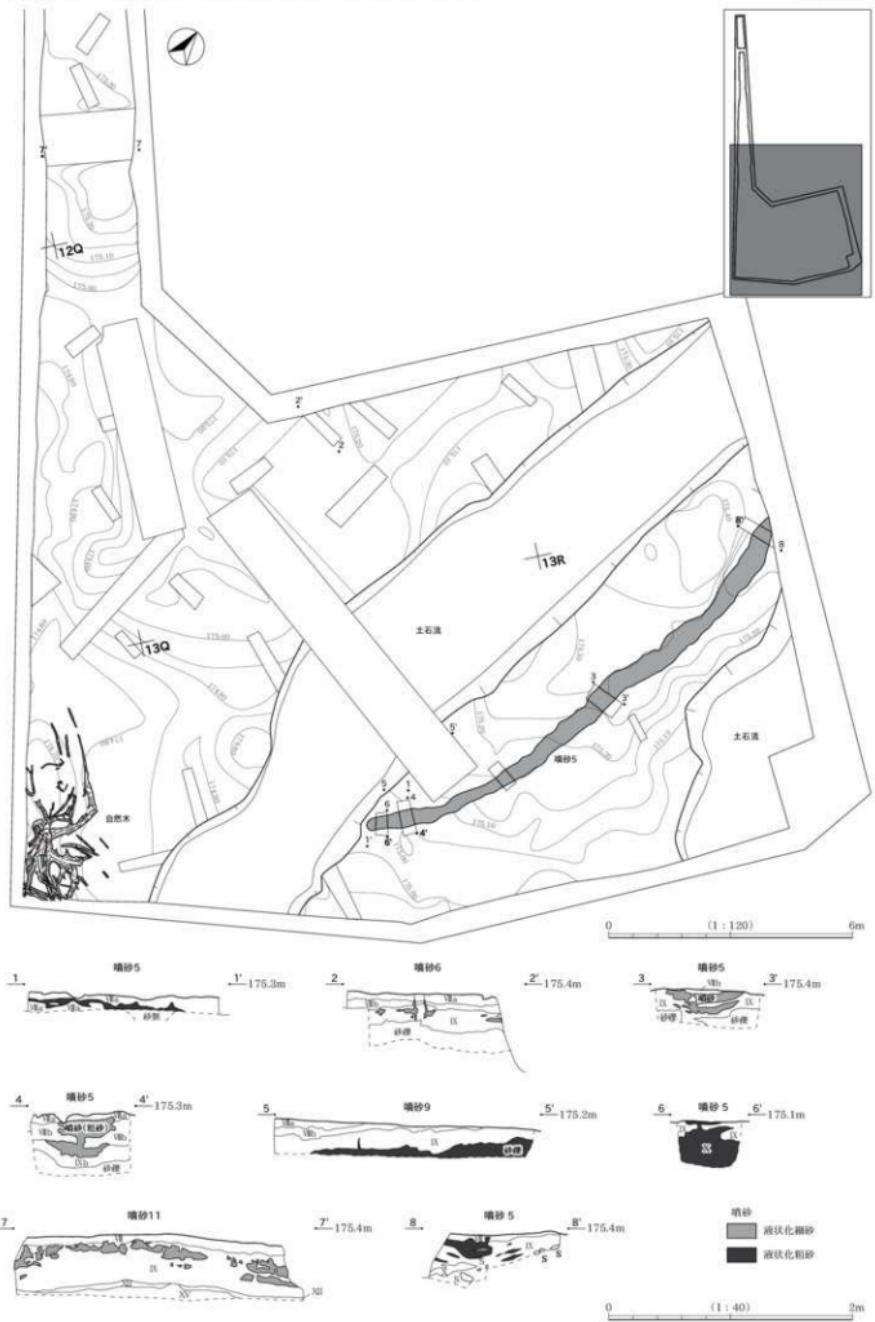
## 遺層遺構分割図(3)



## 遺層遺構分割図(4)







## 図版 99

## 余川中道遺跡 II 中世の土器・陶磁器(1)

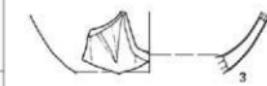
P3204 (1)



P3211 (2)



P3262 (3)



P3462 (4)



P4033 (5)



P4101 (6)



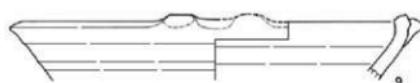
P4516a (8)



SE4113 (10~12)



P4674 (9)



SK3102 (13)



SK4073 (15~16)



11



SK4065 (14)



SK4150 (17)



15



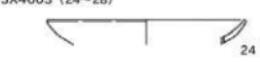
SK4671 (18)



16



SX4603 (24~28)



SD4083 (20)



20



SX4091 (23)



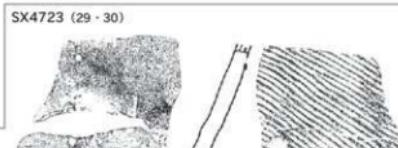
23



26



29



0 (その他) 15cm (1:3)

0 (8~11,18,27) 20cm (1:4)

## 鹿澤場(31)



31

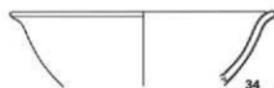
## 遺構外(32~44)



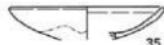
32



33



34



35



36



37



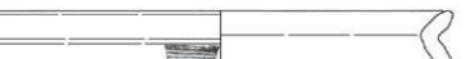
38



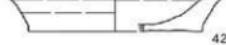
39



40



41



42



43



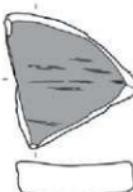
44

## 加工円盤(47)

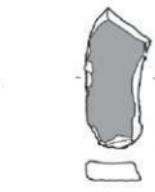


47

## 転用研削具(45~46)



45



46

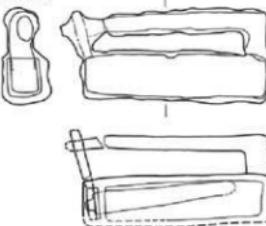
鉄製品(48~52)  
P4081(48~49)

48



49

## P4124(50)



砥面

50

## 鹿澤場(51)



51

錢貨(53~55)  
SK3203(53)

53



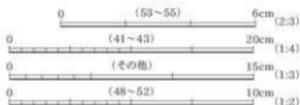
54



55

至道元寶

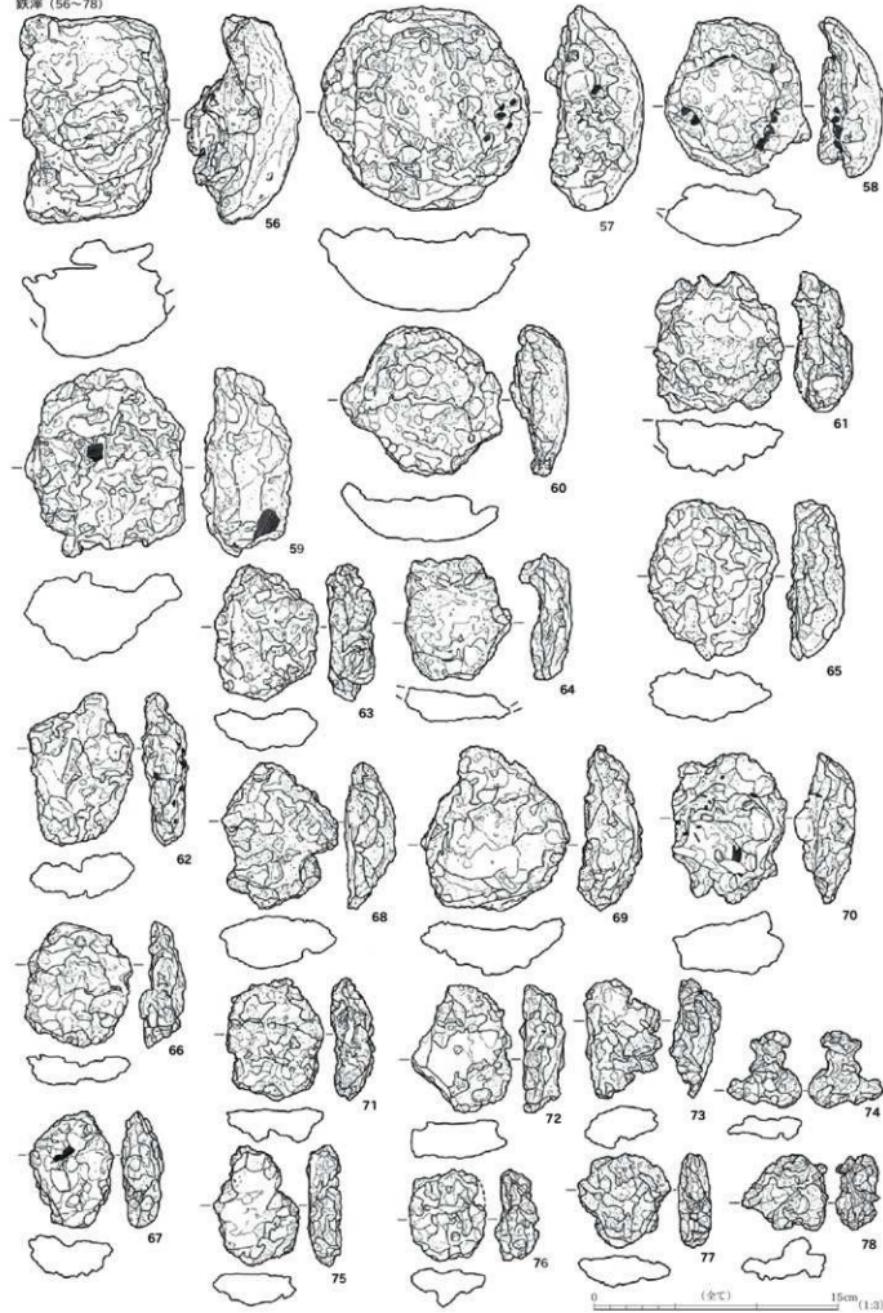
開元通寶



図版 101

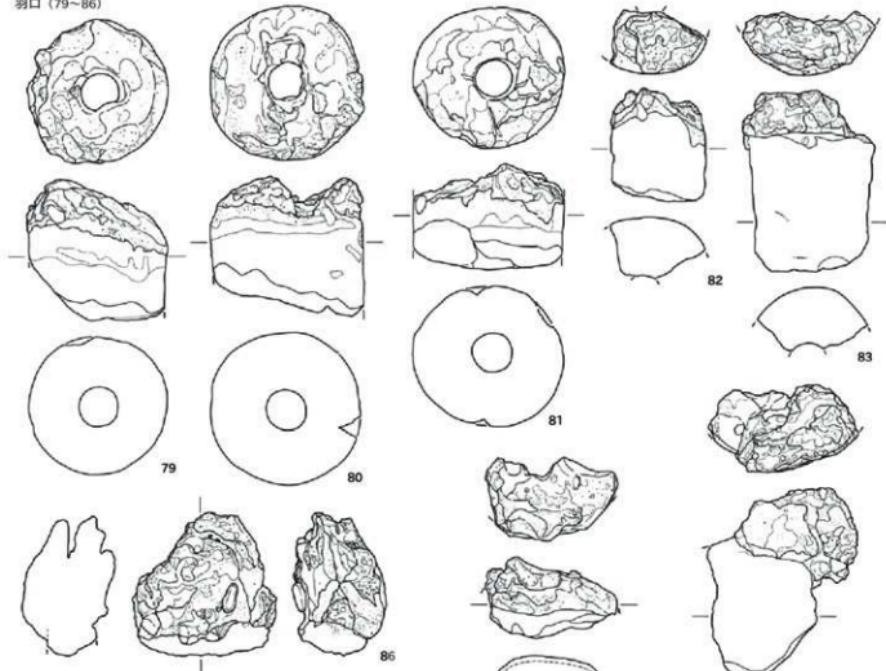
余川中道遺跡II 中世の鍛冶関連遺物(1)

鉄滓 (56~78)

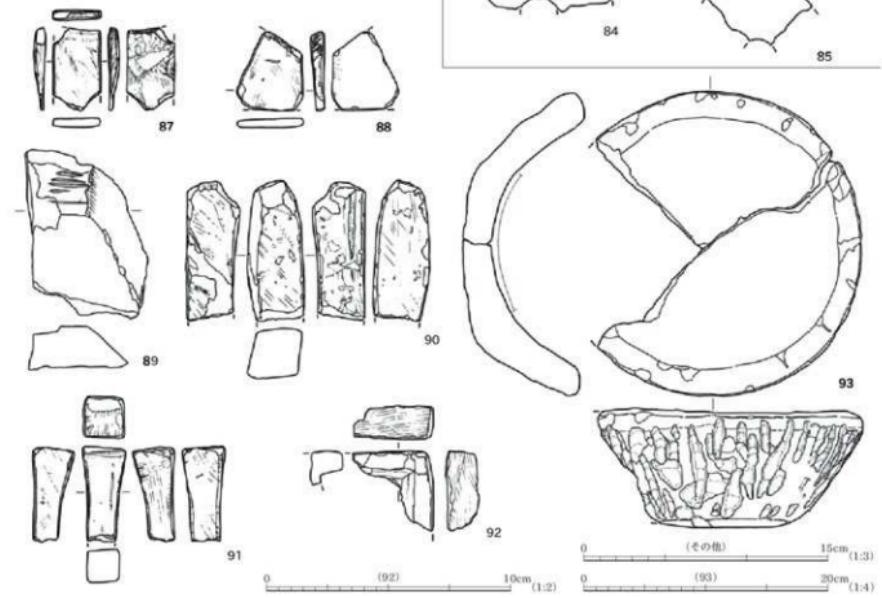


0 (全て) 15cm (1:3)

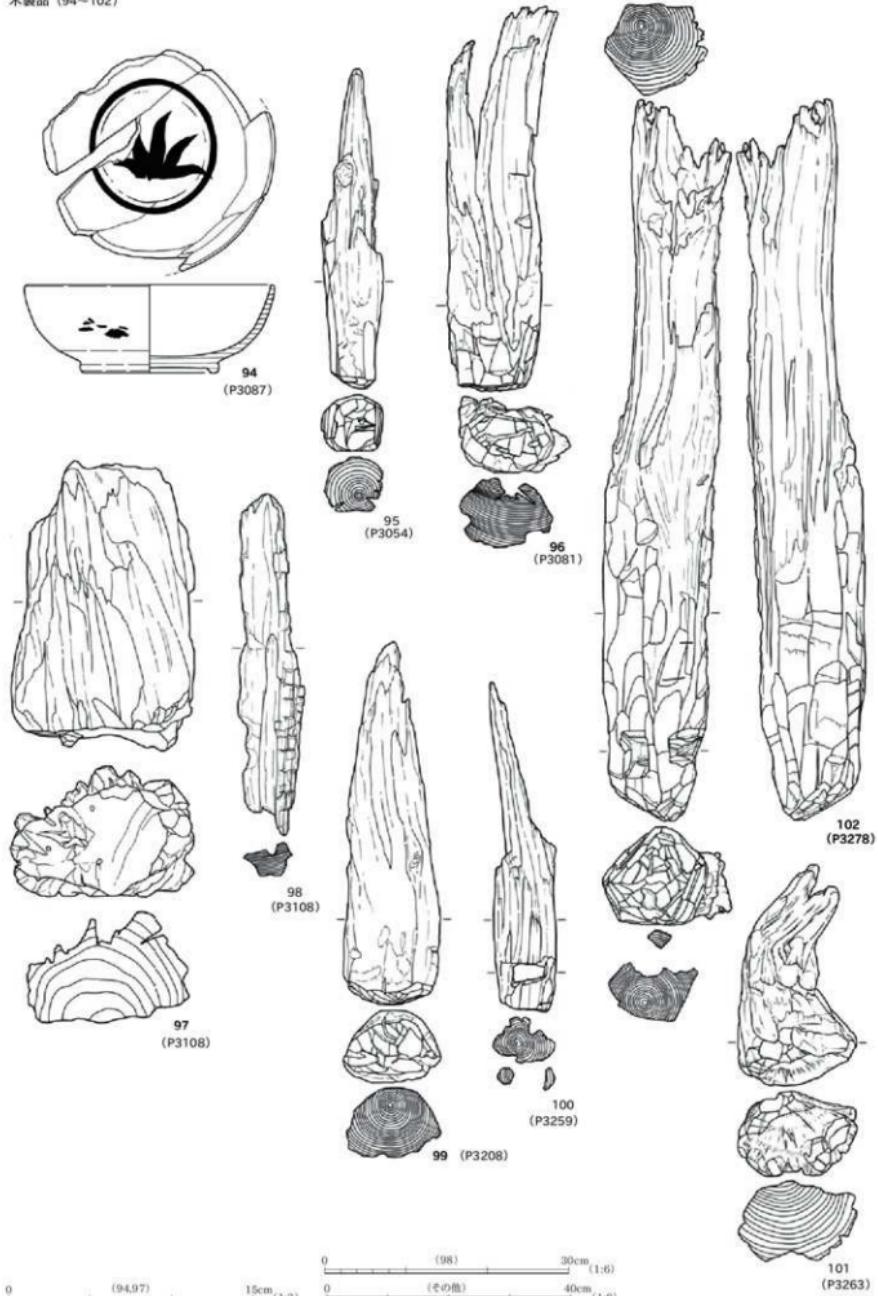
羽口 (79~86)



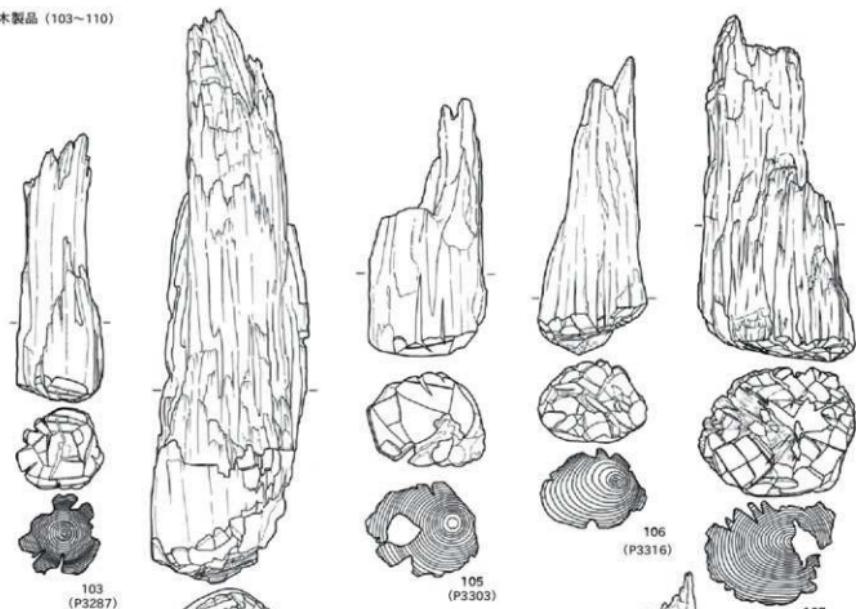
石製品 (87~93)



木製品 (94~102)



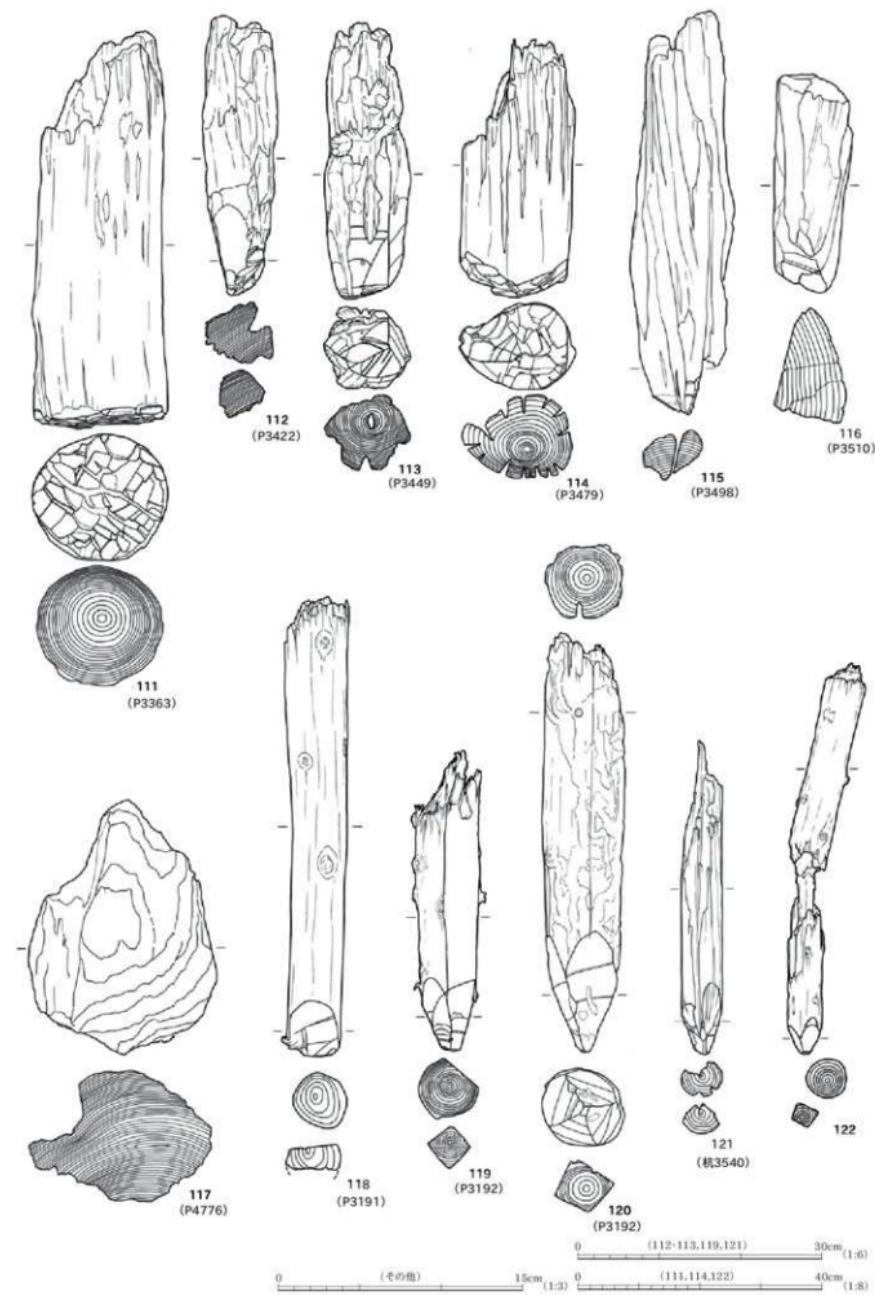
木製品 (103~110)



0 (105, 109)  
15cm (1:3)

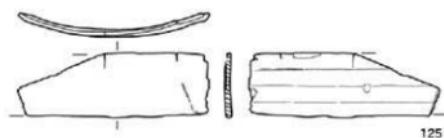
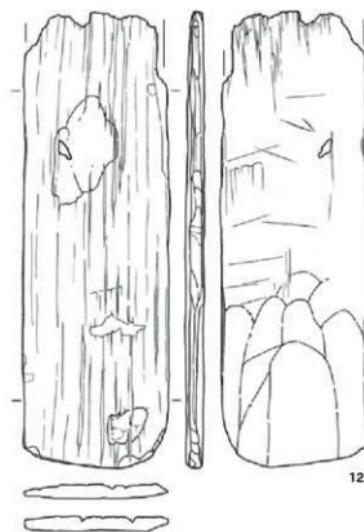
0 (その他)  
40cm (1:8)

木製品 (111~122)



木製品 (123~132)

SK3020 (123~125)

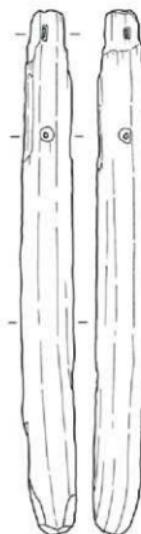


125

123

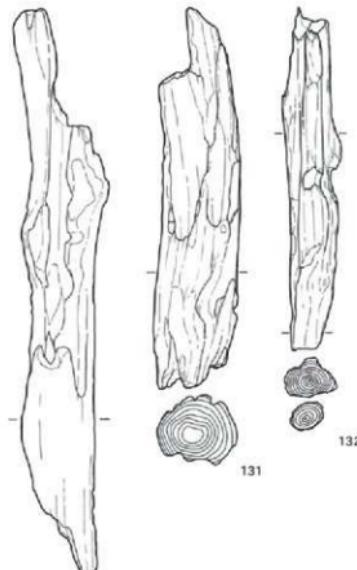
124

SX3490 (129)



129

SE4113 (130~132)



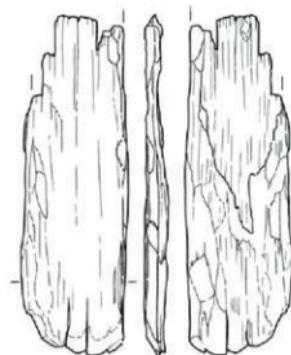
131

132



130

SX3003 (126~128)



126



127



128

0 (その他) 15cm (1:3)  
0 (131~132) 40cm (1:8)

畦3015 (133)



133

遺構外出土 (134~147)



134



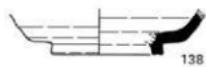
135



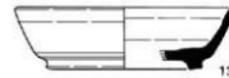
136



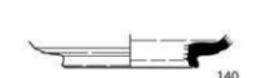
137



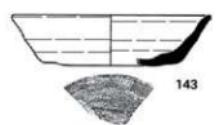
138



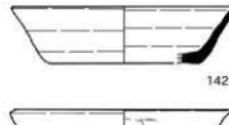
139



140



141



142



143



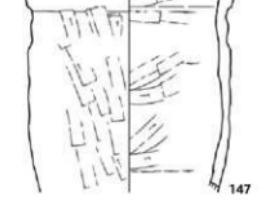
144



145



146



147

SK3605 (148・149)



148

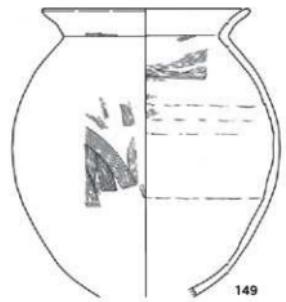
SK3608 (150~153)



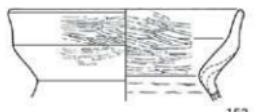
150



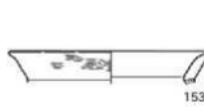
151



149

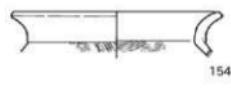


152

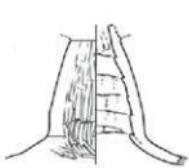


153

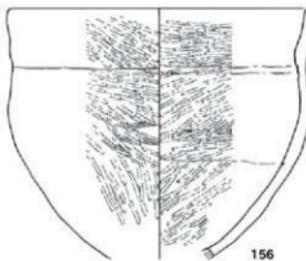
SD3602 (154~156)



154



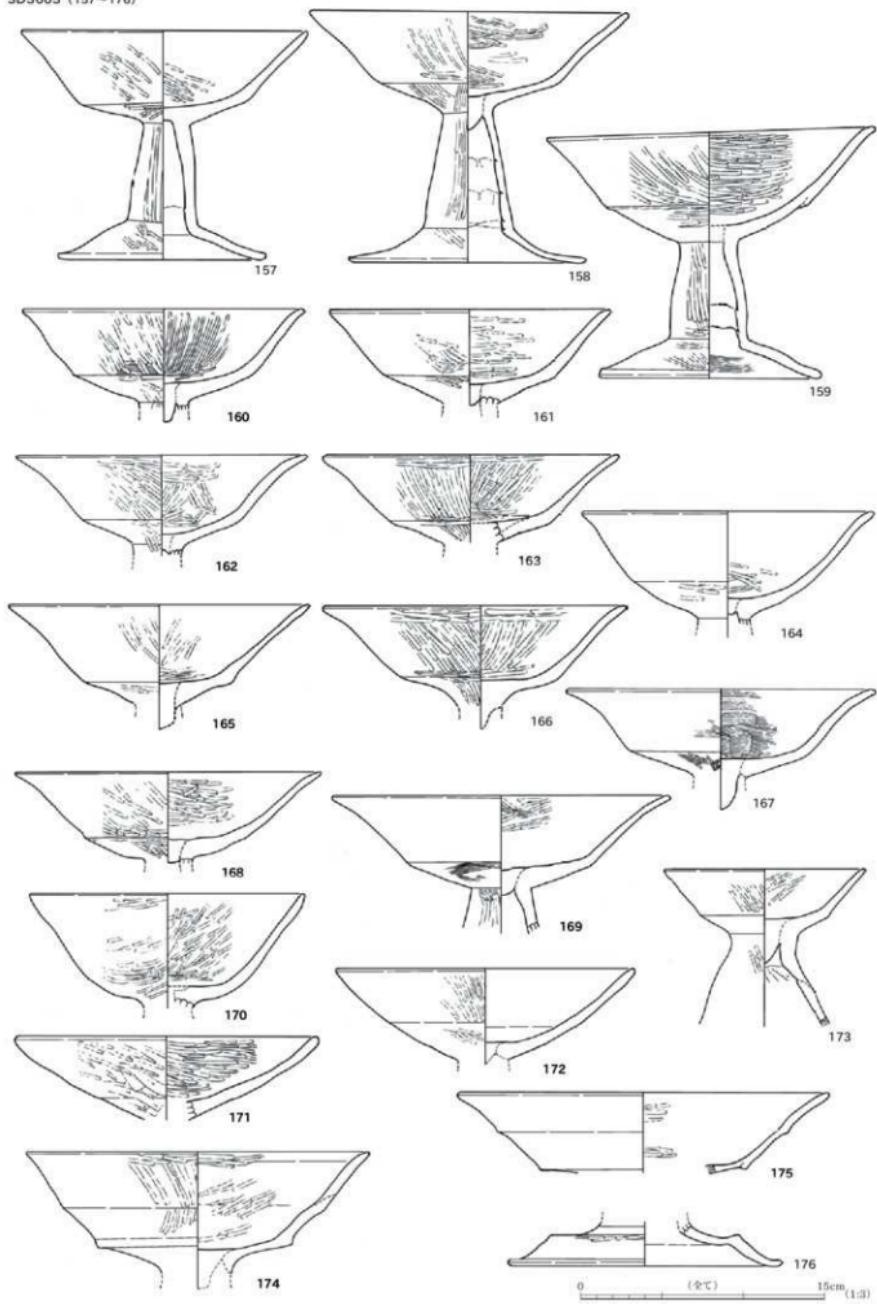
155



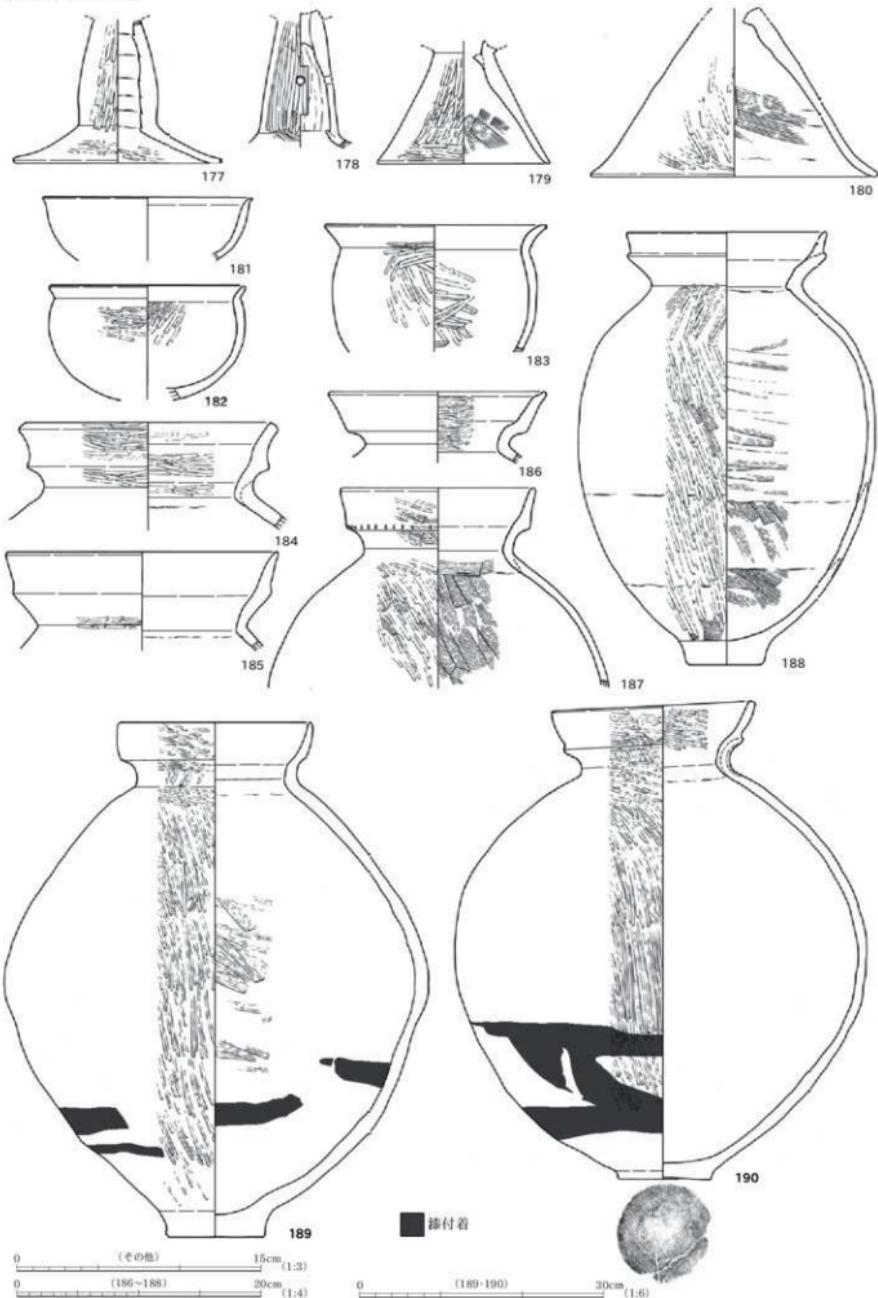
156

0 (その他) 15cm (1:3)  
 0 (146-147,149,153-154,154,156) 20cm (1:4)

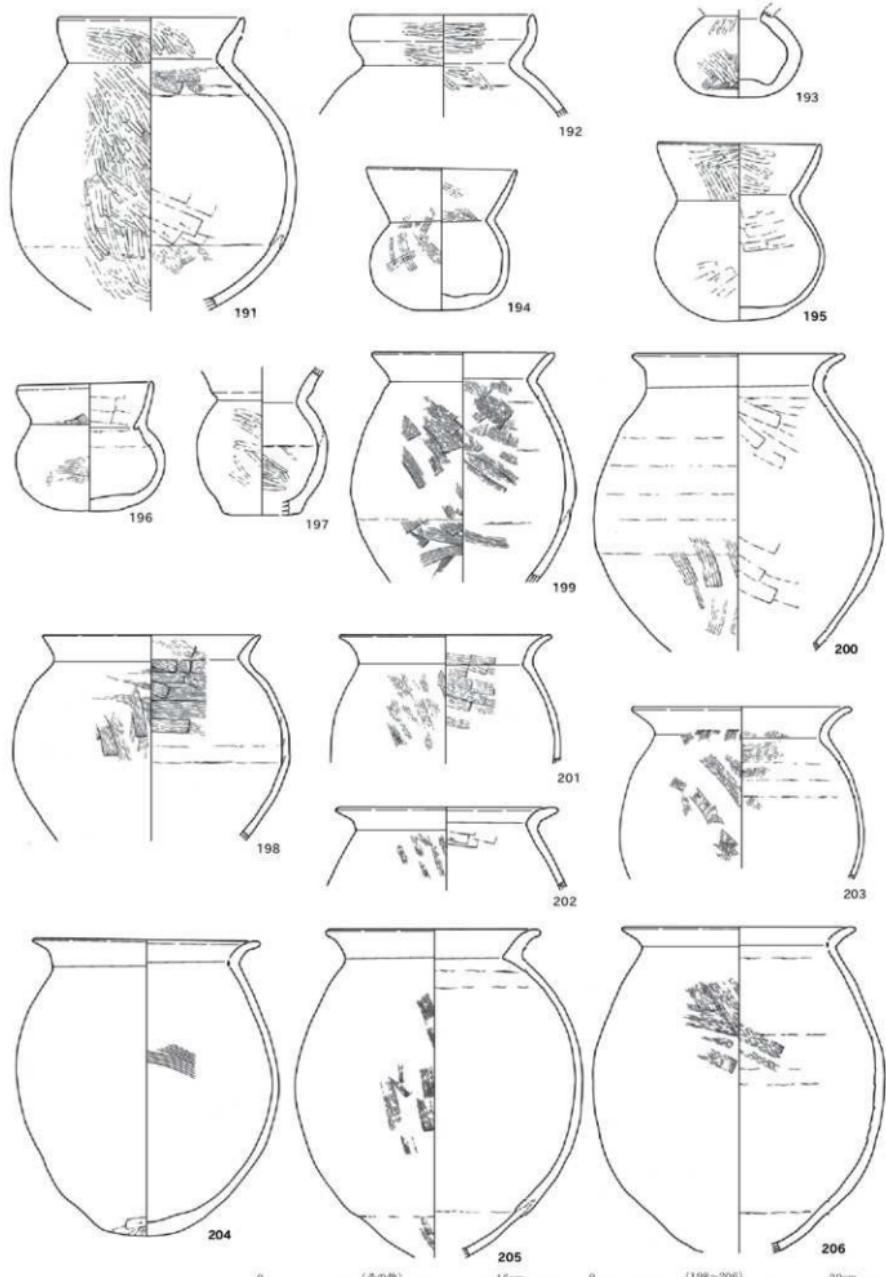
SD3603 (157~176)



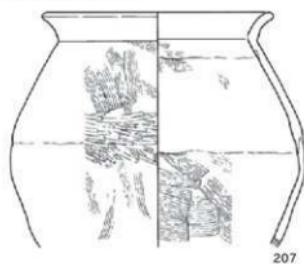
SD3603 (177~190)



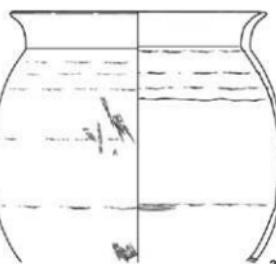
SD3603 (191~206)



SD3603 (207・208)

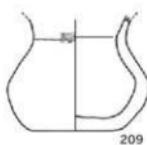


207



208

SD3606 (209~212)



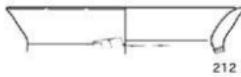
209



210

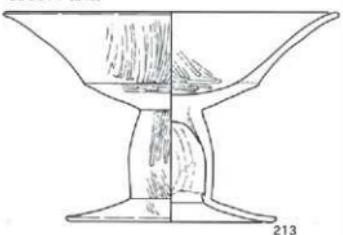


211



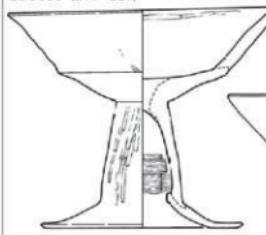
212

SD3614 (213)

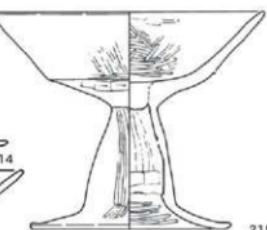


213

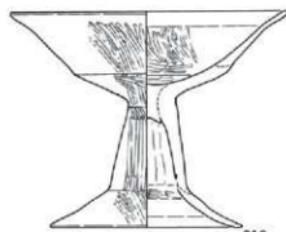
SD3650 (214~221)



214



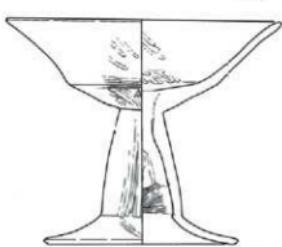
215



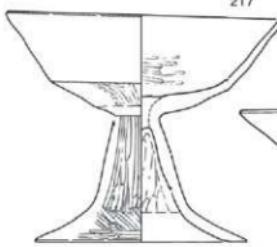
216



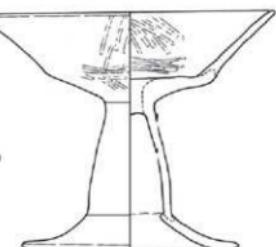
217



218



219

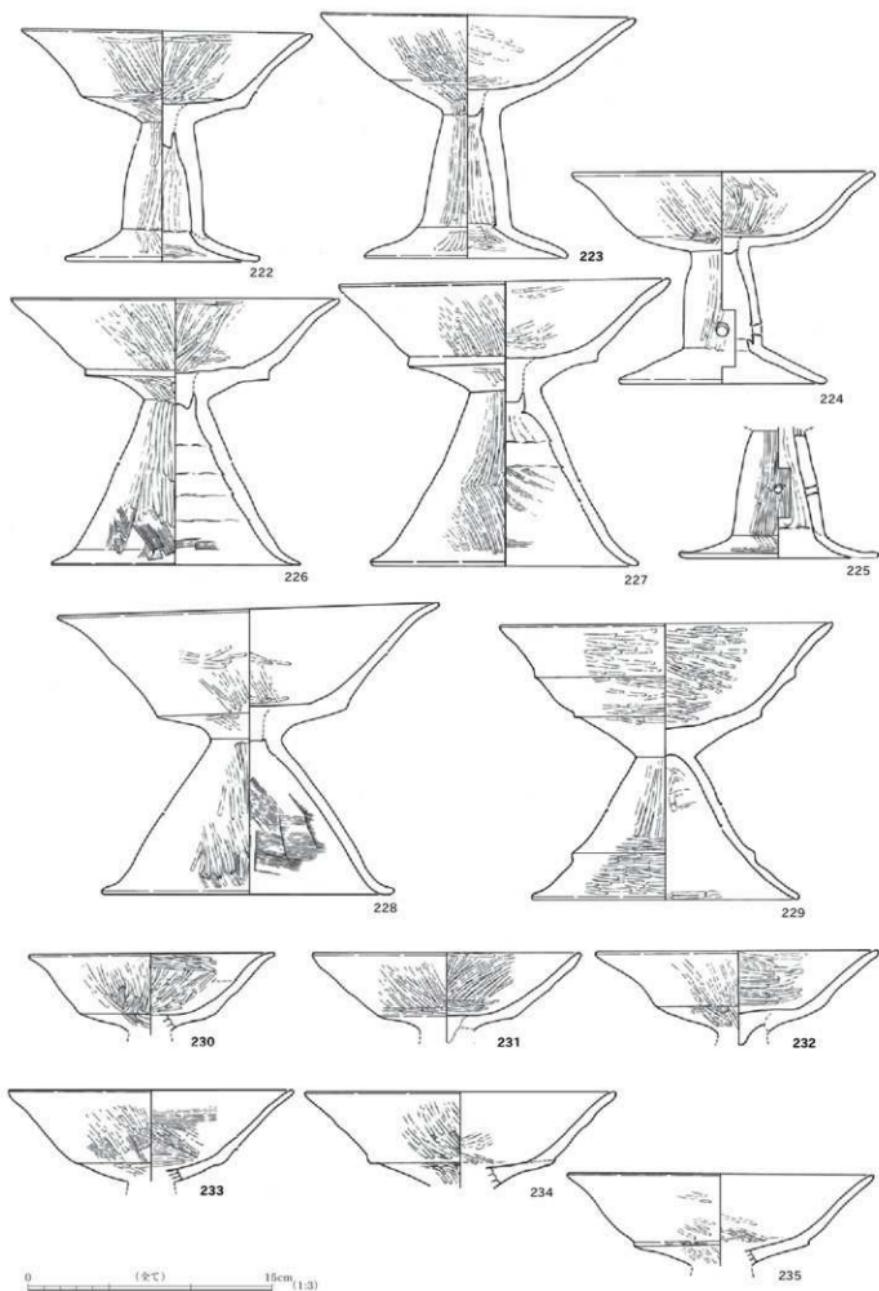


220

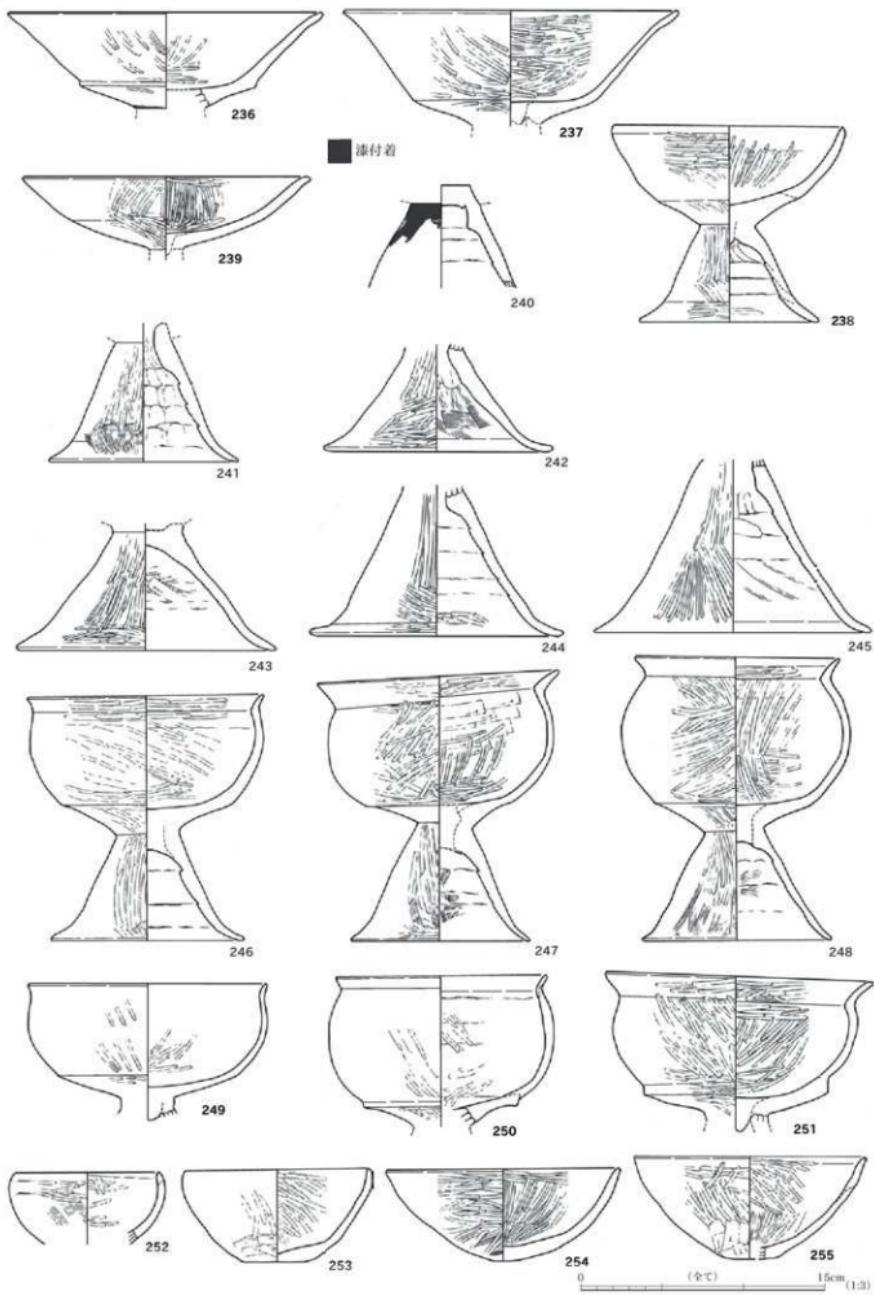
0 (その他) 15cm (1:3)  
 0 (207-208,212) 20cm (1:4)

221

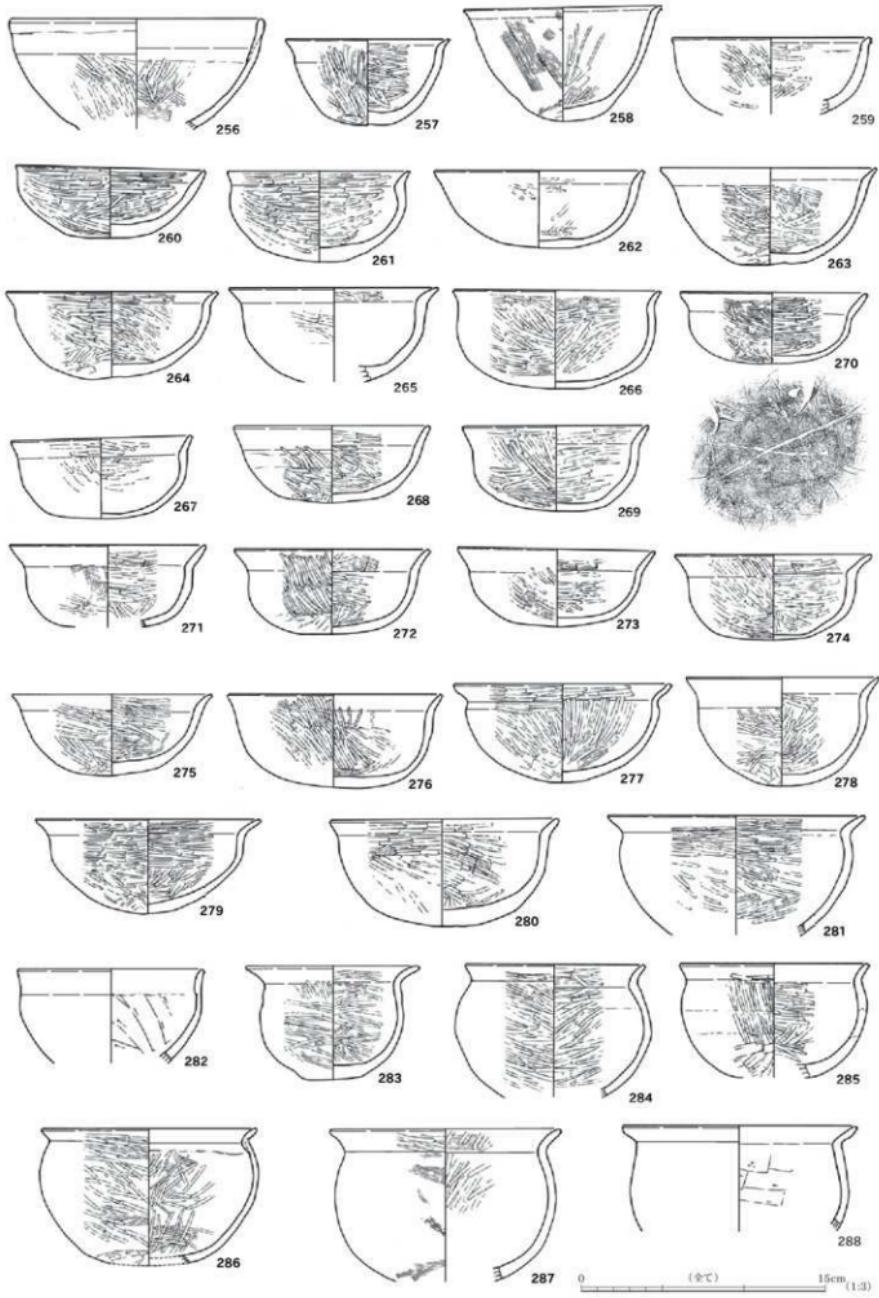
SD3650 (222~235)



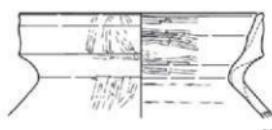
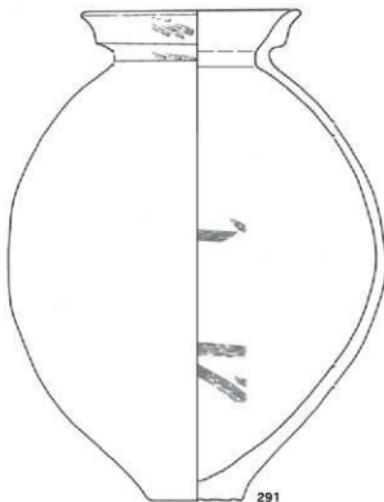
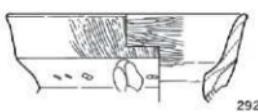
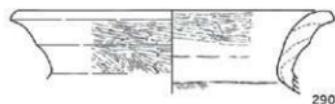
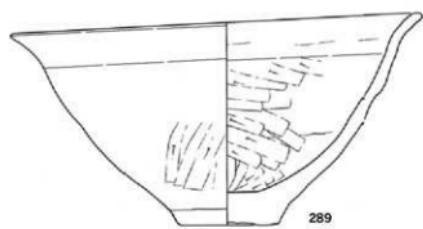
SD3650 (236~255)



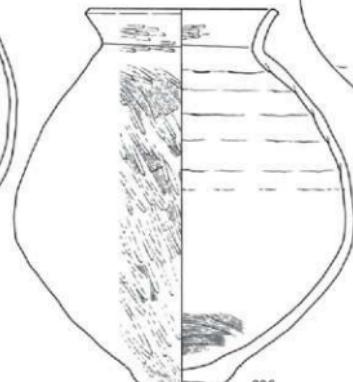
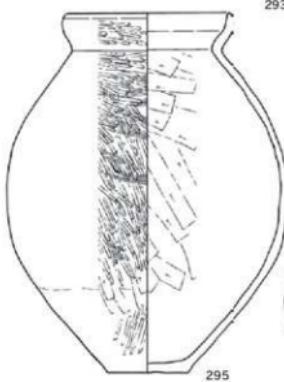
SD3650 (256~288)



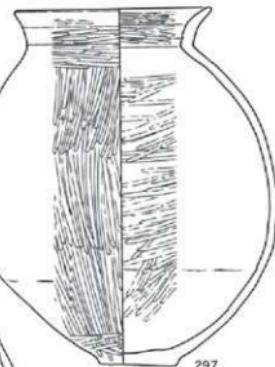
SD3650 (289~302)



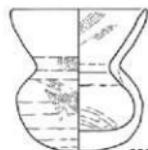
294



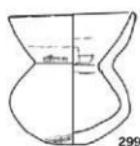
296



297



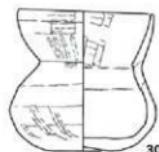
298



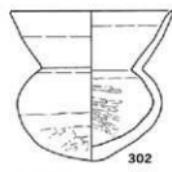
299



300



301



302

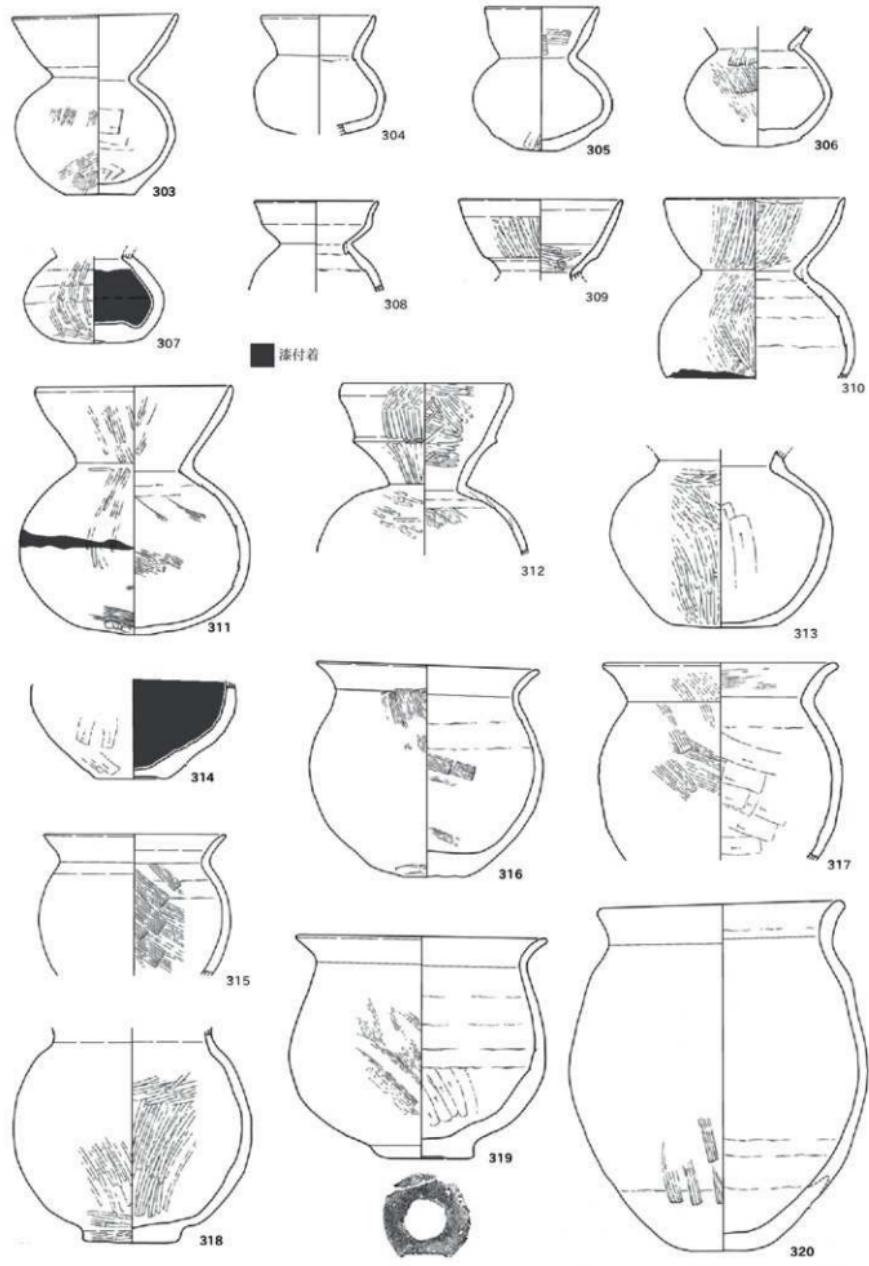
0 (291-295~297)

20cm (1:4)

0 (その他)

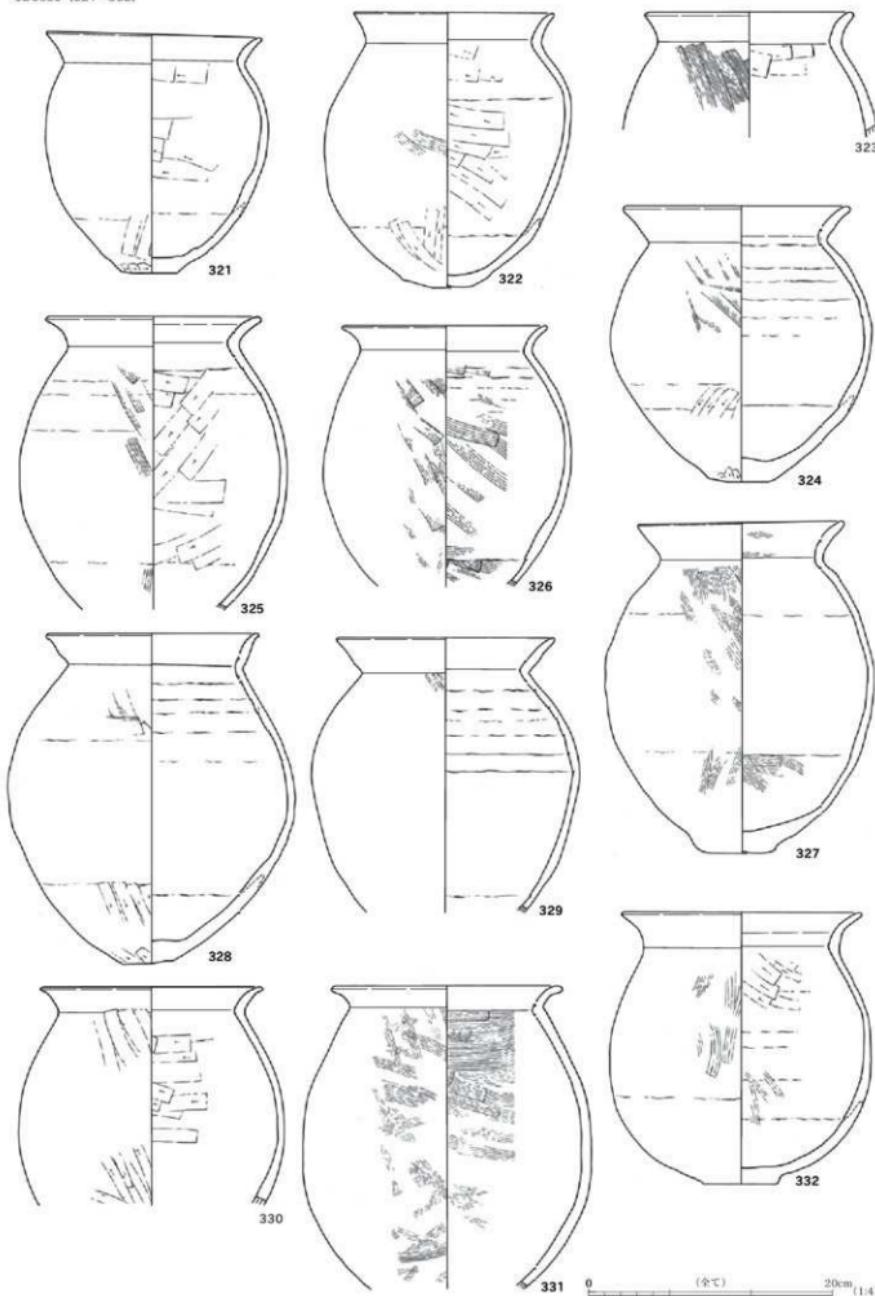
15cm (1:3)

SD3650 (303~320)

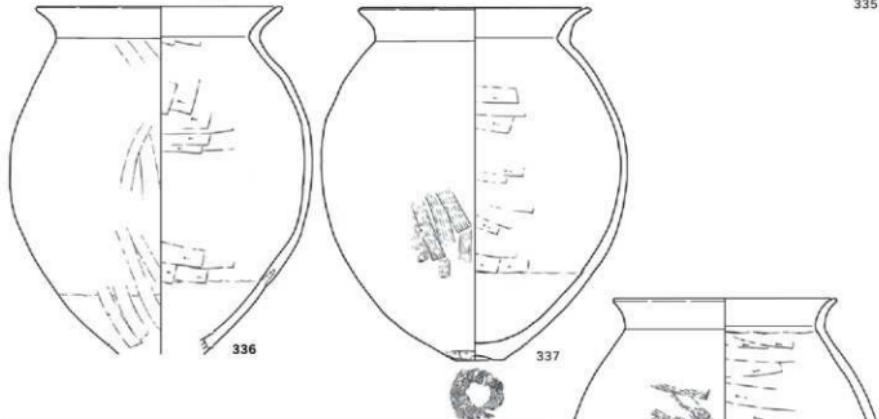
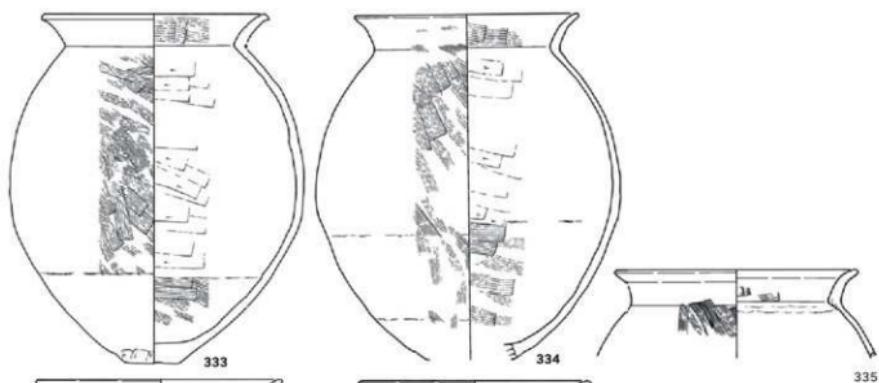


0 (全て) 15cm (1:3)

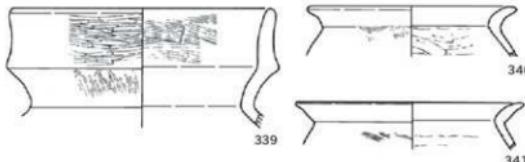
SD3650 (321~332)



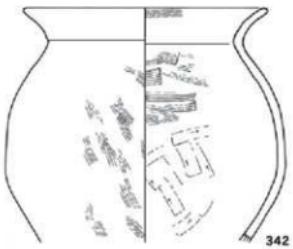
SD3650 (333~338)



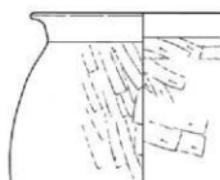
SX3609 (339~341)



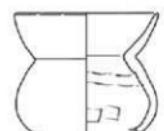
SX3610 (342)



SX3611 (343)

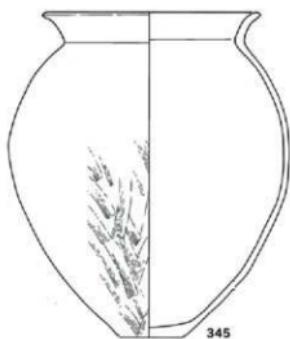


SX3613 (344)

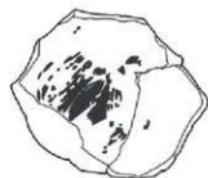
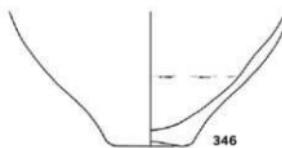


0 (339,344) 15cm (1:3)  
0 (その他) 20cm (1:4)

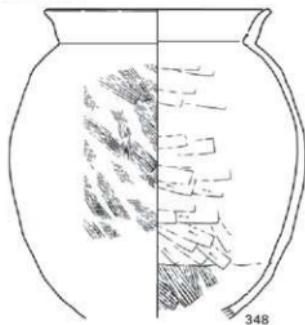
SX3629 (345)



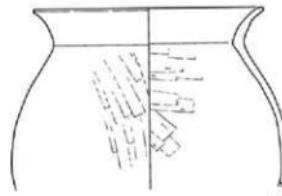
SX3651 (346・347)



SX3652 (348)

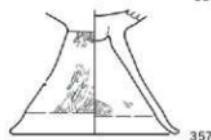
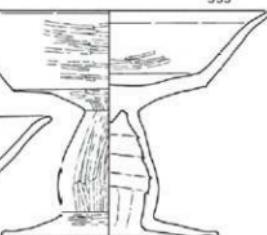
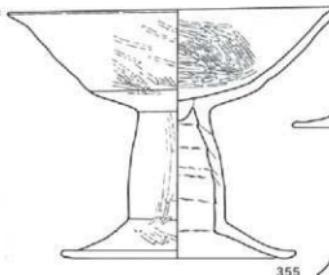
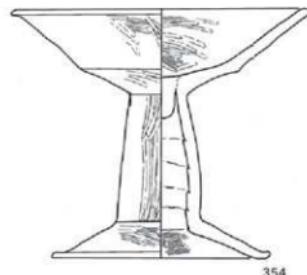
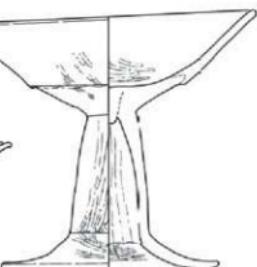
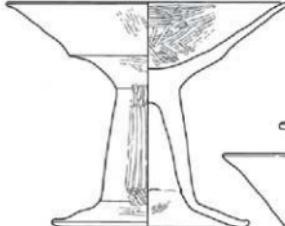
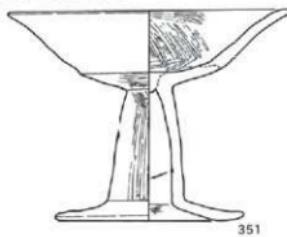


SX3653 (349・350)



■ 漆着

SX3654 (351~357)



0

(その他)

15cm (1:3)

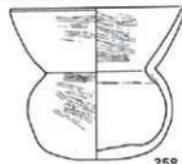
0

(345~349)

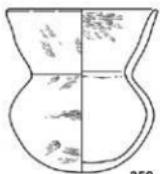
20cm

(1:4)

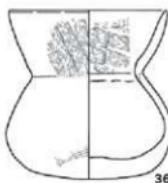
SX3654 (358~362)



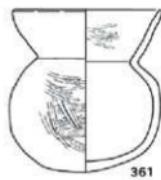
358



359

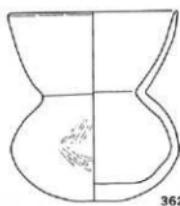


360



361

SX3655 (363~365)



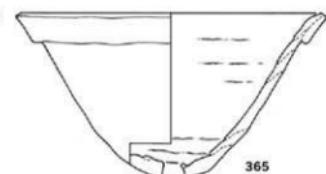
362



363

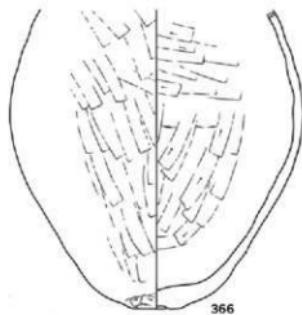


364



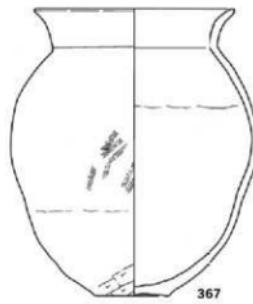
365

SX3656 (366)



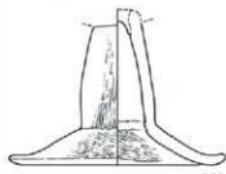
366

SX3657 (367)

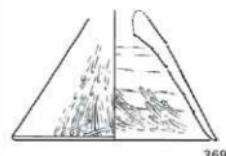


367

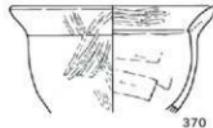
SX3658 (368~373)



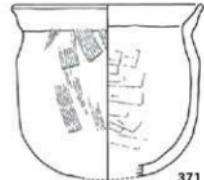
368



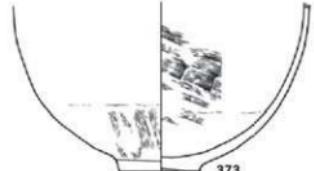
369



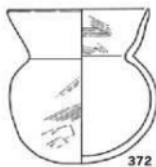
370



371

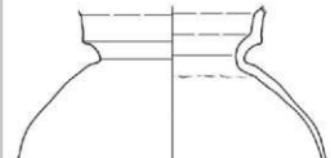


373



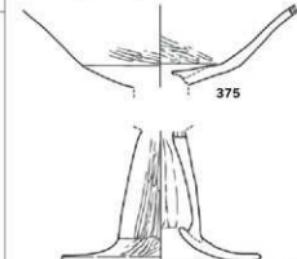
372

SX3659 (374)



374

SX3660 (375~376)

375  
376

0

(その他)

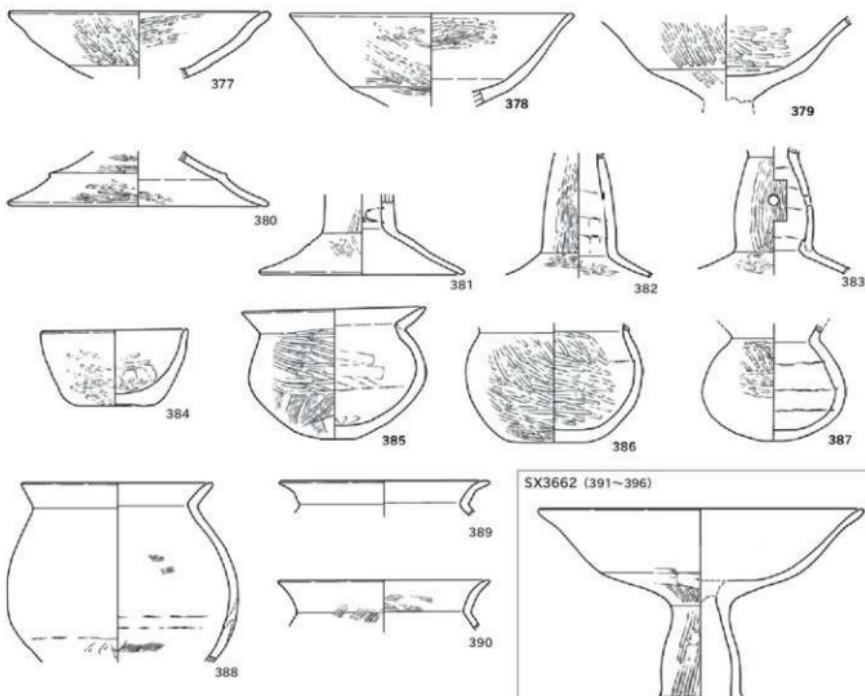
15cm (1:3)

0

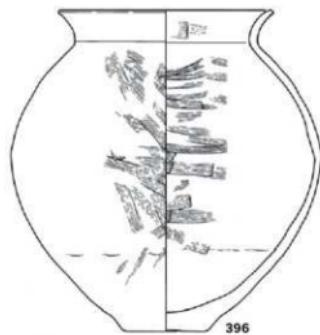
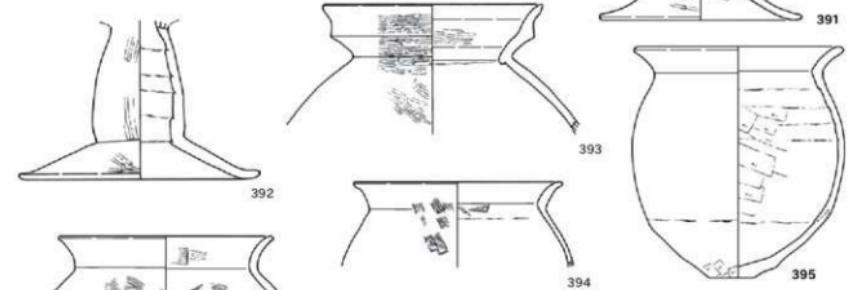
(366~367,373~374)

20cm (1:4)

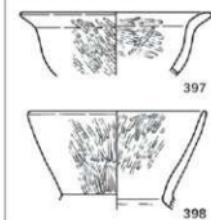
SX3661 (377~390)



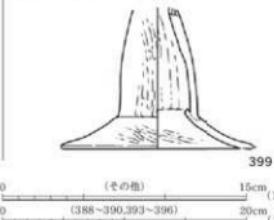
SX3662 (391~396)



SX3664 (397・398)



SX3666 (399)



0 (その他)  
15cm (1:3)  
0 (388~390, 393~396)  
20cm (1:4)

SX3666 (400)



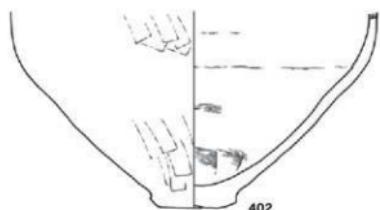
400

SX3667 (401)



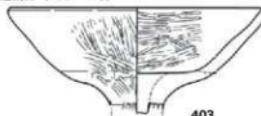
401

SX3668 (402)



402

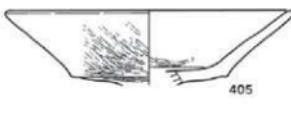
遺器外 (403~418)



403



404



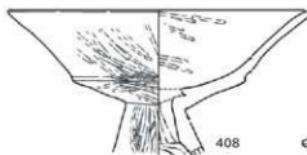
405



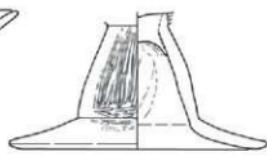
406



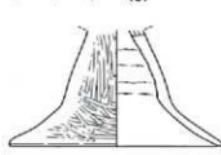
407



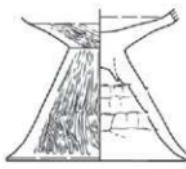
408



409



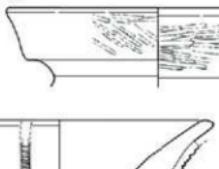
410



411



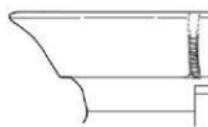
412



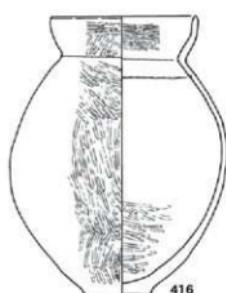
413



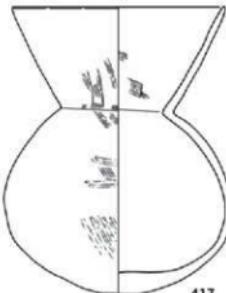
414



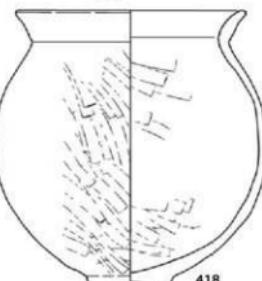
415



416



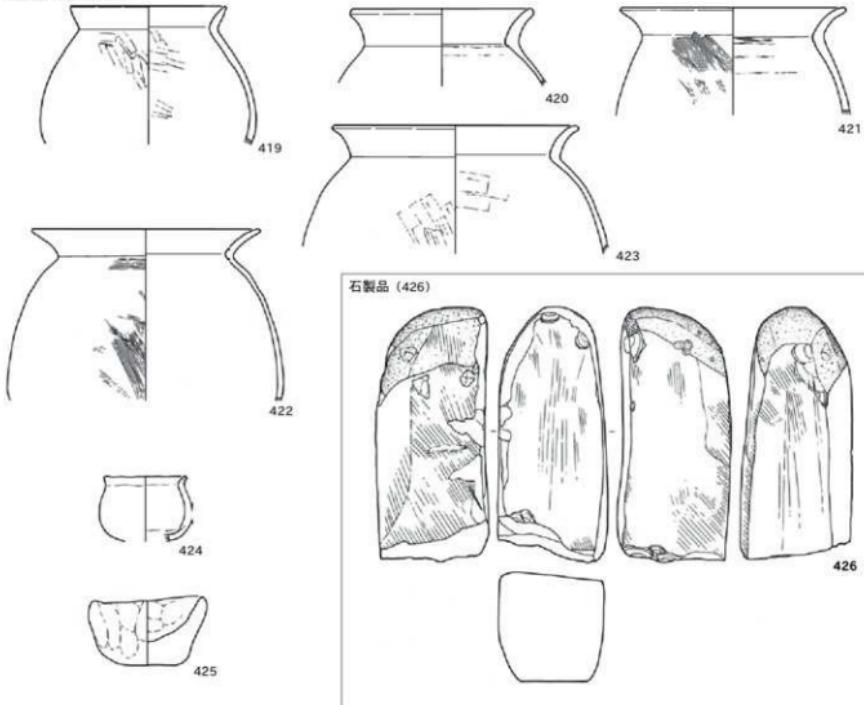
417



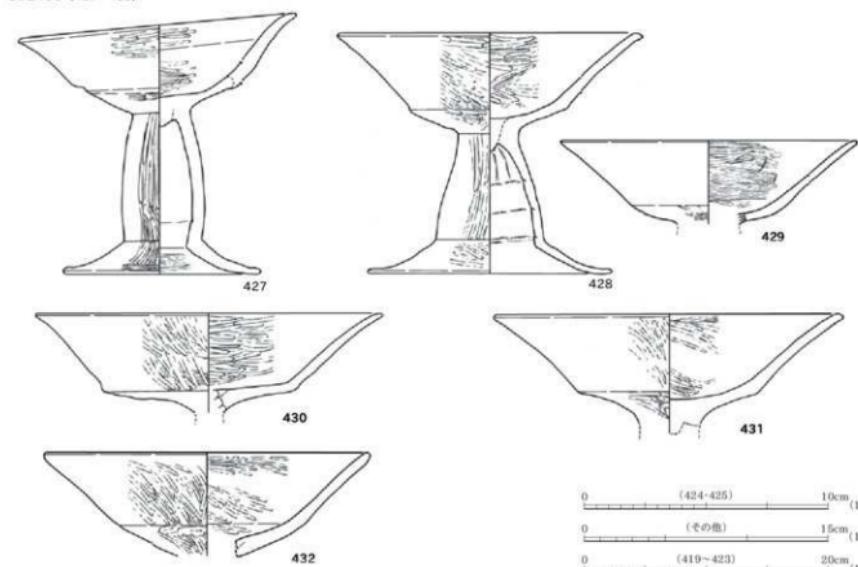
418

0 (その他) 15cm (1:3)  
0 (401・402, 416, 418) 20cm (1:4)

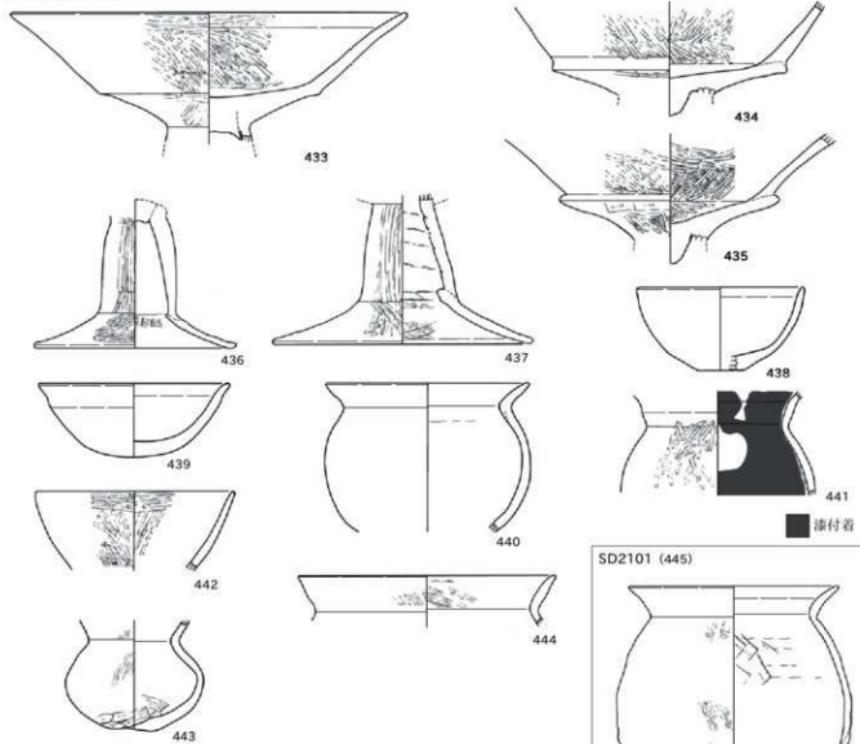
遺構外(419~425)



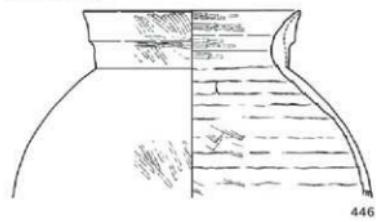
SD2100 (427~432)



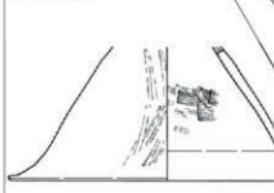
SD2100 (433~444)



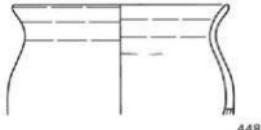
SD2124 (446)



P2151 (447)



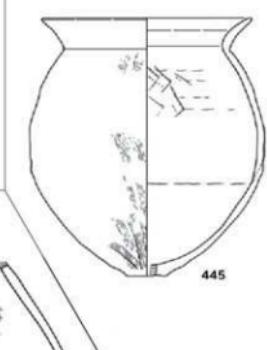
P2152 (448)



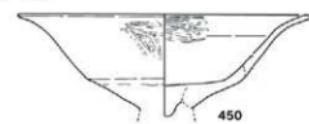
P2170 (449)



SD2101 (445)

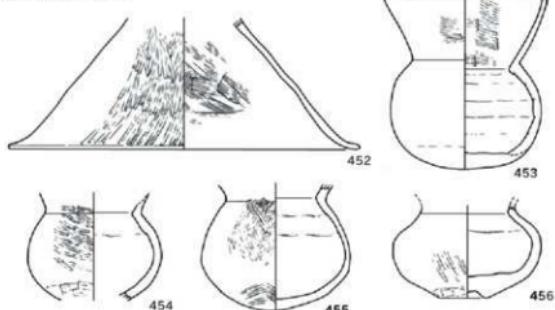


SX2123 (450~451)

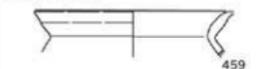


0 (その他) 15cm (1:3)  
0 (444~446) 20cm (1:4)

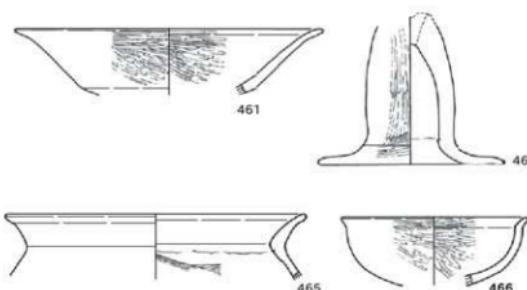
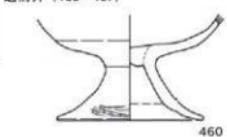
SX2123 (452~458)



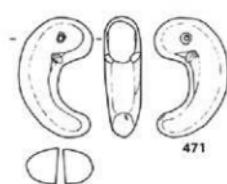
SX2125 (459)



遺構外 (460~467)



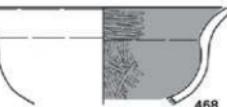
石製品 (471~474)



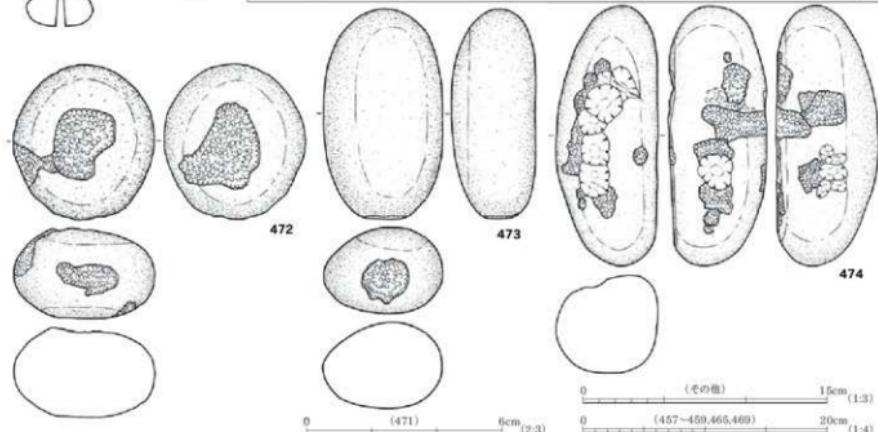
467

468

土石流 (468~470)

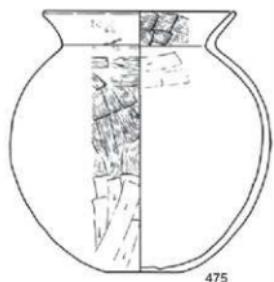


■ 黒色処理

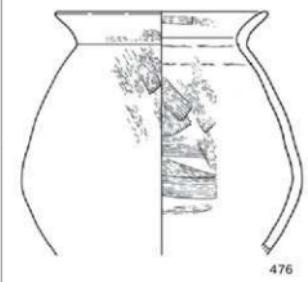


## 余川中道遺跡II 古墳時代の土器(20)・木製品・石製品・古代の土器

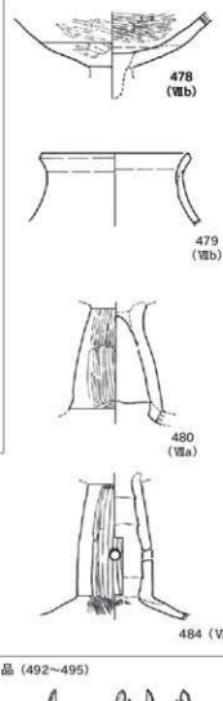
SX2536 (475)



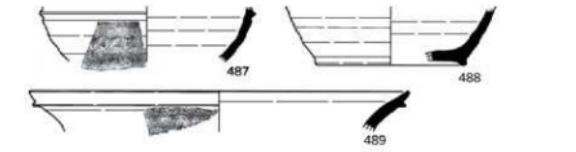
SD2200 (476・477)



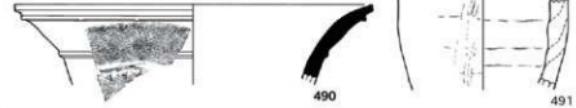
造構外 (478~486)



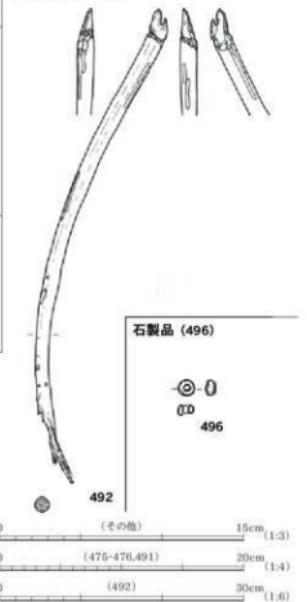
土石流 (487~489)



Vd層 (490・491)



木製品 (492~495)





18Y二

19Y八

19Y二

18X口

19X口

18X二

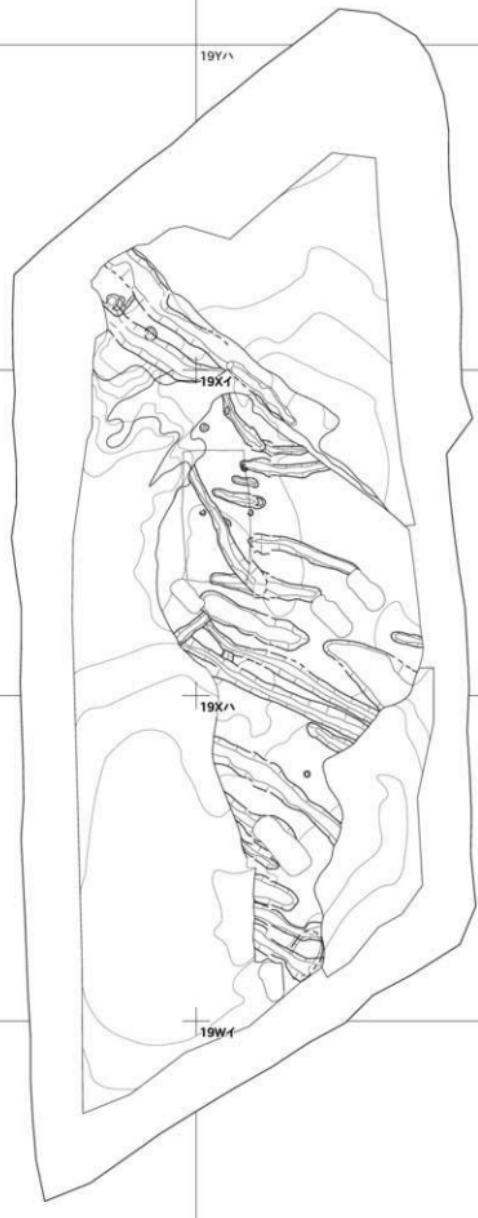
19X八

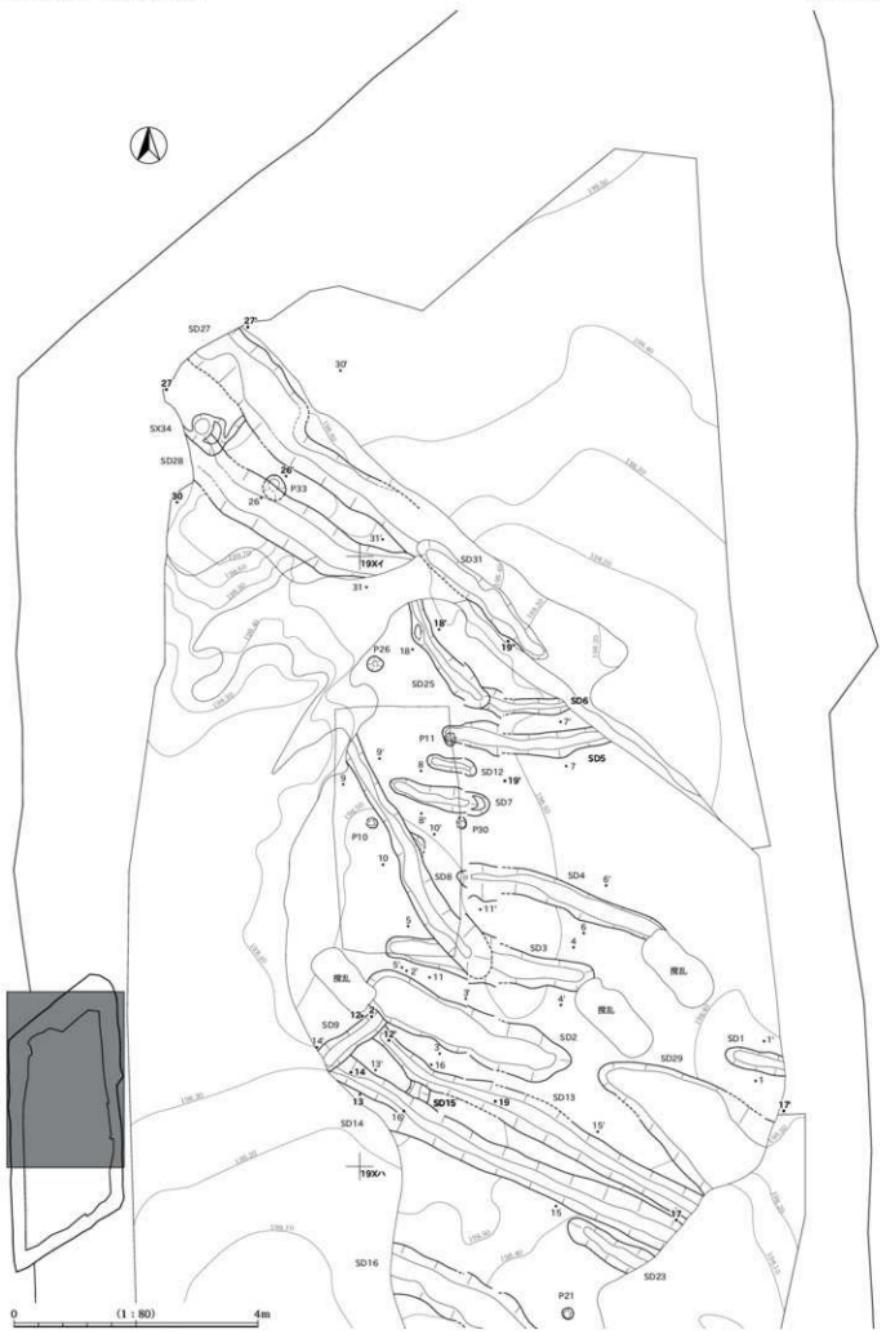
19X二

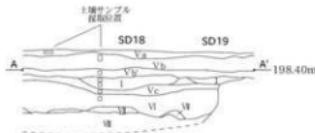
18W口

19W一

19W口

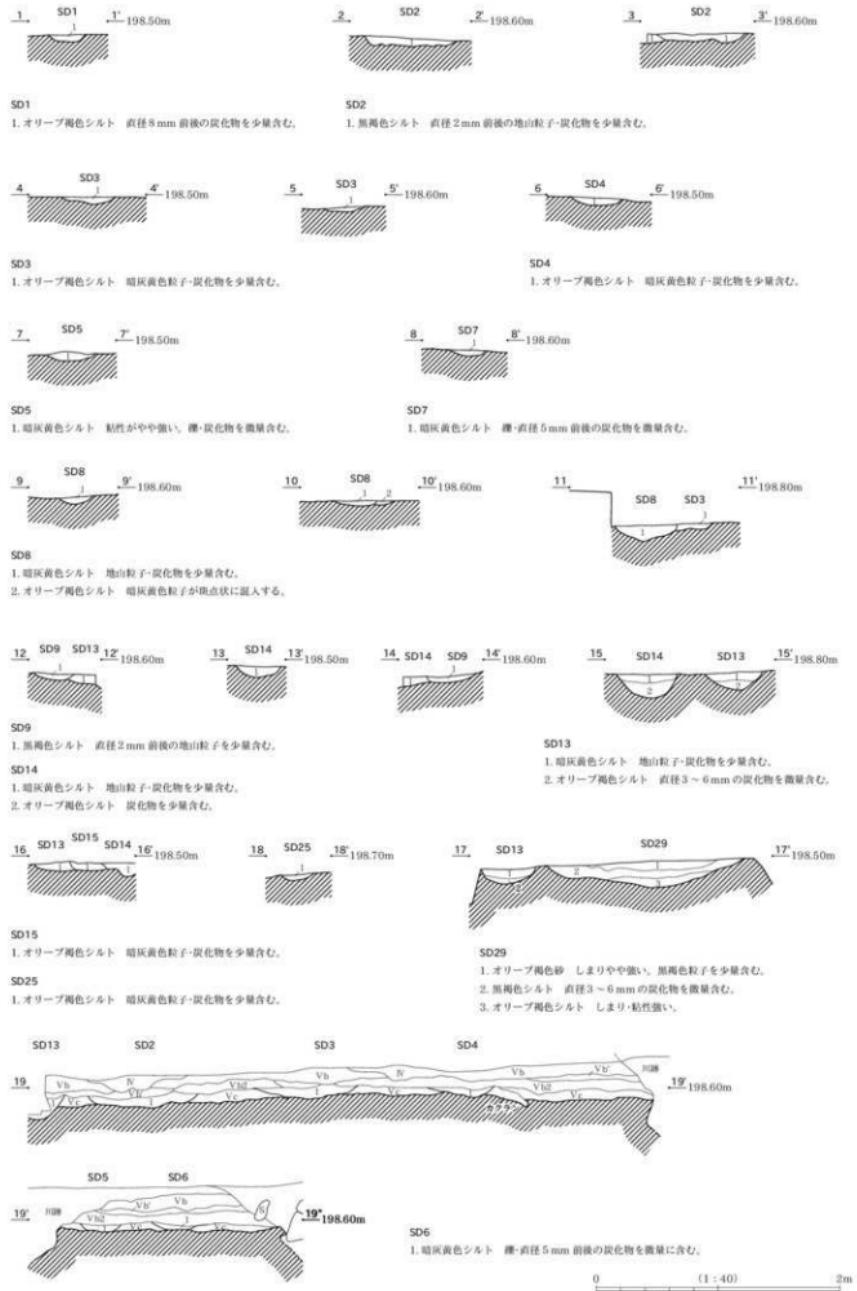


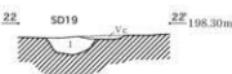




0 (1 : 80) 4m

0 (1 : 40) 2m





SD16

1. 黒褐色シルト Vb 層より色調がやや暗い。
2. オリーブ褐色シルト 直径 6 ~ 8 mm の炭化物を微量含む。



- SD23  
1. 暗オリーブ褐色シルト 直径 2 ~ 5 mm の炭化物を微量含む。



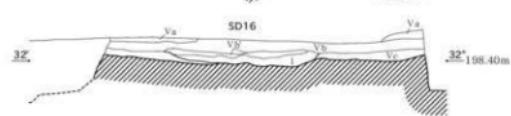
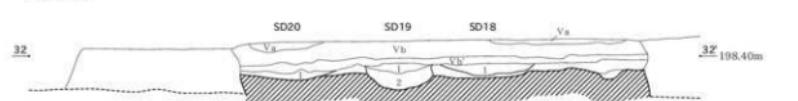
- SD20  
1. オリーブ褐色シルト 直径 6 ~ 8 mm の炭化物を微量含む。



1. オリーブ褐色シルト 直径 2 ~ 6 mm の炭化物を微量含む。

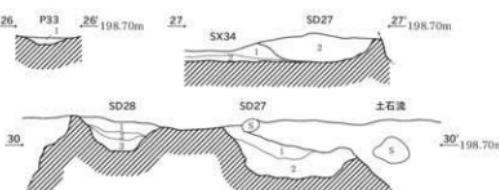
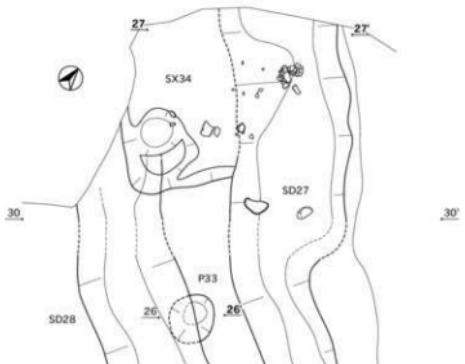
- SD27  
1. 黒褐色シルト 地山粒子・砂礫・炭化物を含む。  
2. オリーブ褐色シルト 地山粒子を多量含む。

3. 暗オリーブ褐色シルト 地山粒子・炭化物を微量含む。



SD19

1. オリーブ褐色シルト 直径 6 ~ 8 mm の炭化物を微量含む。
2. オリーブ褐色シルト 炭化物をごく微量含む。



- P33  
1. 黒褐色シルト 地山粒子・砂礫・炭化物を含む。  
2. オリーブ褐色シルト 地山粒子を多量含む。

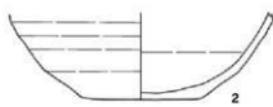
- SX34  
1. 褐紅色シルト 直径 6 mm 前後の炭化物を微量含む。  
2. 黑褐色シルト 直径 2 mm 前後の砂礫・炭化物を含む。



SD7 (1)



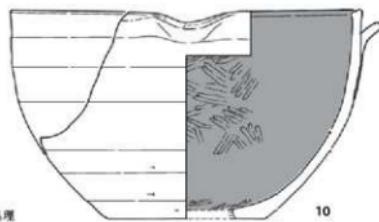
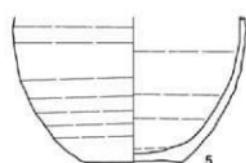
SD13 (2)



SD19 (3)

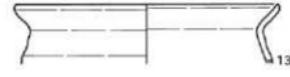
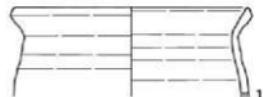
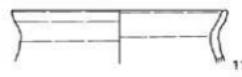


SD27 (4~10)

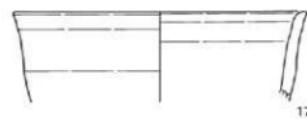


■ 黒色処理

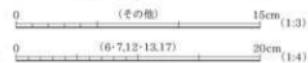
SX34 (11~14)



包含層 (15~21)



金属製品 (22)

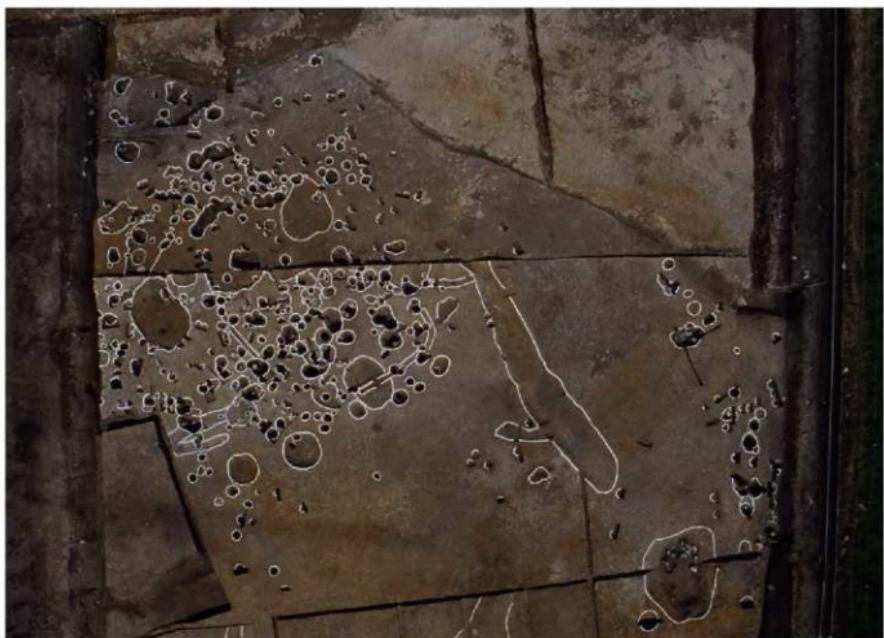




遺跡近景 D1・D3区（南東から、2013年撮影）



遺跡近景（北東から、2009年撮影）



E区(上层) 全景



G区 全景



H区 全景



E区（下層） 全景



基本層序(D1区) (南から)



D1・D3区 Vib層水田 検出状況 (南から)



D1・D3区 西層水田 続出状況（南から）



SD3603 土器集中③（西から）



SD3650 土器集中 (南から)



基本層序 (E区) (北から)



基本層序 (G区)・SK4169断面 (東から)



基本層序 (H区) (南西から)



SE4113 断面 (北東から)



SD3603・SX3661 遺物出土状況（東から）



SD3650 土器集中（西から）



SD3560 土器集中（東側）（北から）



SD3650 土器集中（東側）（南から）



SD3560 土器集中（西から）



SD3560 土器集中（中央部）（南から）



SX3658 遺物出土状況（東から）



SX3661 遺物出土状況（北から）



SD3650 土器群



SX3654 土器群



特大壺（190） 体部下半の漆付着痕



特大壺（190） 漆付着痕（拡大）



甕（475） 体部下半のコゲ（炭化穀粒痕）



甕（319） 体部中位の噴水線上のコゲ



E区 全景（北から）



E区 完掘（南から）



E区 基本層序（北から）



E区 基本層序（南から）



SK3020 断面（南から）



SK3020 完掘（南から）



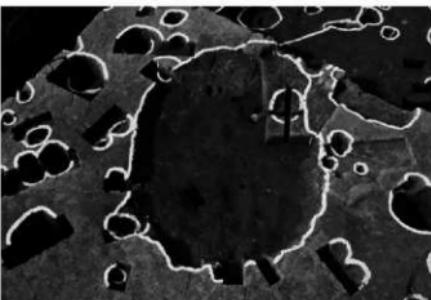
SK3021 断面（南から）



SK3021 完掘（南から）



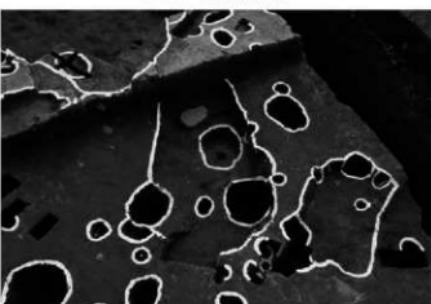
SK3050 断面(南から)



SK3050 完掘(南から)



SK3051 断面(南から)



SK3051(左)・SK3193(右) 完掘(東から)



SK3090 断面(東から)



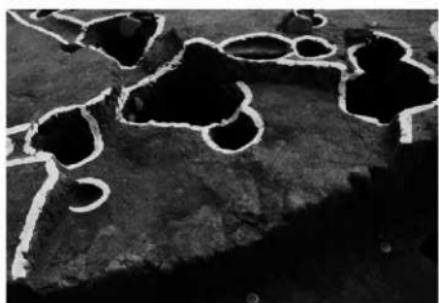
SK3090 完掘(北から)



SK3102 断面(東から)



SK3102 断面(西から)



SK3203 完掘（東から）



SK3275 断面（西から）



P3310（手前）・SK3311（右奥） 断面（北から）



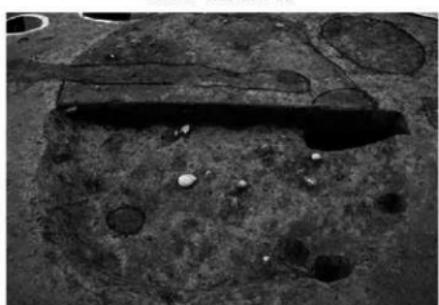
P3310（左）・SK3311（右） 完掘（西から）



SK3329 断面（東から）



SK3329 完掘（南から）



SB7-P3349（右）・SK3350（左） 断面（北から）



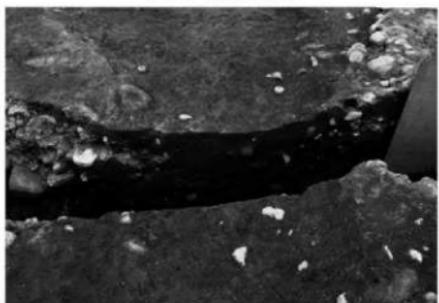
SK3350 完掘（南から）



SK3516 断面(東から)



SK3516 完掘(東から)



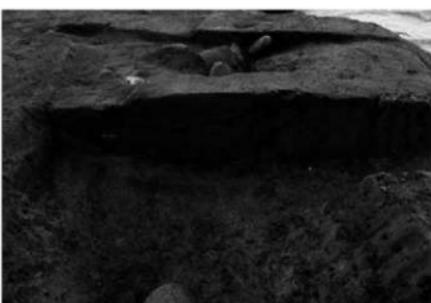
SD3004 断面(南から)



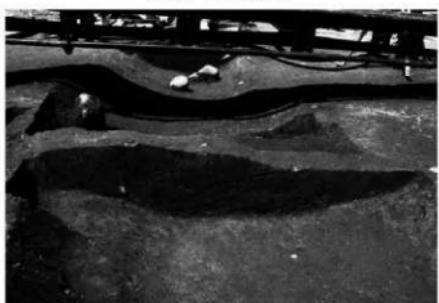
SD3004 完掘(東から)



SD3199 断面(東から)



SD3257 断面(南から)



SD3257 断面(南から)



SD3257 断面(南から)



SD3257 遺物出土状況（北から）



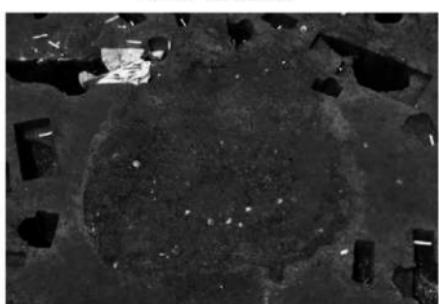
SD3257 完掘（北から）



SD3362 断面（東から）



SD3434（右）・P3502（左）断面（南東から）



SX3100 掘出状況（南から）



SX3100 断面（南から）



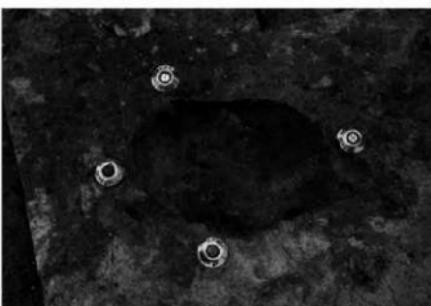
SX3445 断面（南から）



SF3446 断面（南から）



SF3446 断面（南から）



SF3446 完掘（東から）



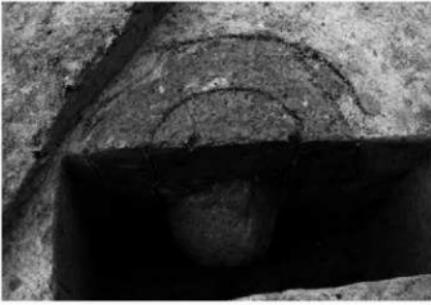
P3025 断面（南から）



P3031 断面（南から）



P3041（左）・P3042（中央）・SB14-P3043（右） 断面（東から）



P3046 断面（南から）



P3046 裸出土状況（南から）



SB12-P3065 断面（東から）



SB3-P3077 断面(東から)



P3078(左)・P3079(右) 断面(南から)



SB11-P3083(左)・P3082(右) 断面(東から)



SB11-P3087 漆器碗(94) 出土状況(東から)



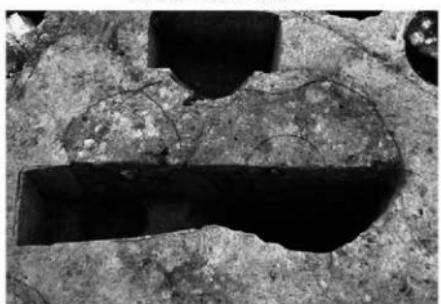
SB10-P3098 断面(東から)



SB13-P3105 断面(東から)



SB12-P3110 断面(東から)



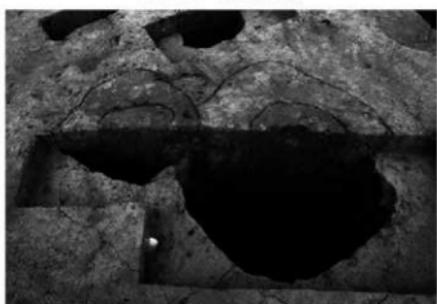
P3112(左)・P3113(右) 断面(東から)



SB8-P3128 断面（東から）



P3129 碓板出土状況（東から）



P3155（左）・SB11-P3154（右）断面（西から）



P3195（左）・P3196（右）断面（南から）



P3403（左）・P3198（中央）・SB7-P3404（右）断面（南東から）



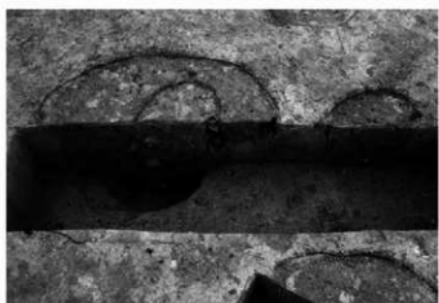
SB12-P3208 断面（北から）



SB12-P3208 断面（北から）



SB8-P3231 断面（南から）



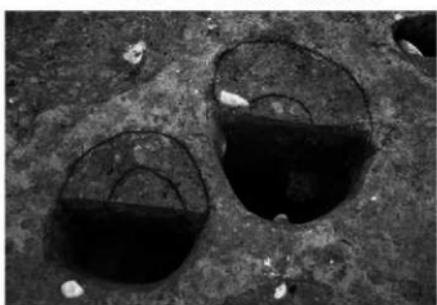
P3232（左）・SB13-P3419（右） 断面（南から）



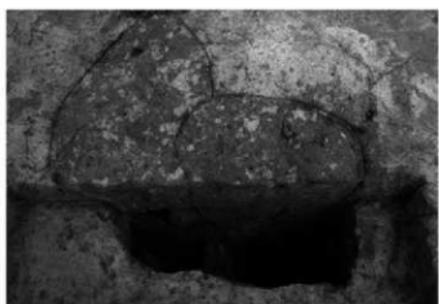
SB11-P3462（左）・SB6-P3249（右） 断面（西から）



SB8-P3278（左）・SD3209（中央）・SB11-P3253（右） 断面（南から）



P3266（左）・SB6-P3267（右） 断面（東から）



P3271（左）・SB2-P3396（右） 断面（西から）



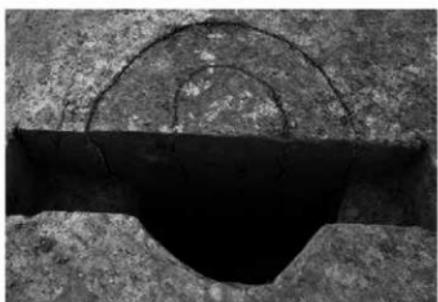
SB8-P3278 柱根検出状況（西から）



SB5-P3290（左）・P3289（右） 断面（東から）



SB12-P3294（左）・P3412（中央）・SK3292（右） 断面（西から）



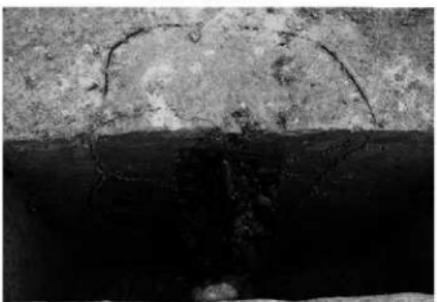
P3306 断面(東から)



P3306 完掘(東から)



P3316 断面(東から)



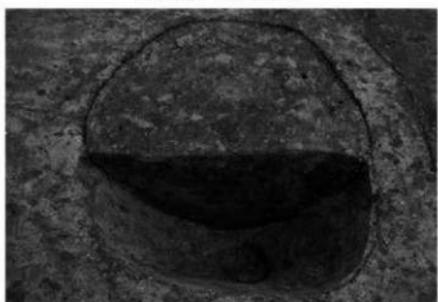
P3321 断面(西から)



SB5-P3344 完掘(東から)



P3356(左)・SB11-P3345(右) 断面(東から)



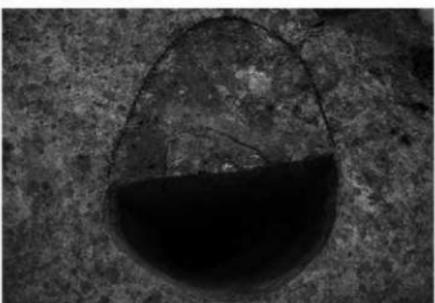
SB6-P3353 断面(南から)



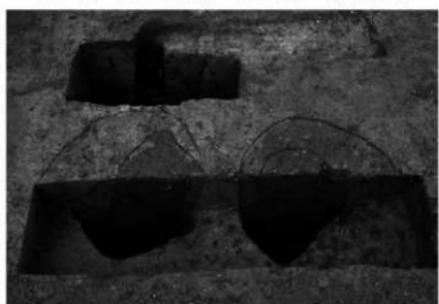
SB14-P3363 断面(北西から)



P3370（左）・SD3362（中央）・P3372（右） 断面（東から）



SB1-P3378 断面（東から）



SB10-P3389（左）・SB6-P3390（右） 断面（南から）



SB1-P3407 断面（南から）



P3484（左）・S89-P3438（右） 断面（南から）



P3450 断面（西から）



P3474 断面（東から）



P3479 断面（北東から）



SB3-P3481 断面（南から）



E区（北西部） 完掘（東から）



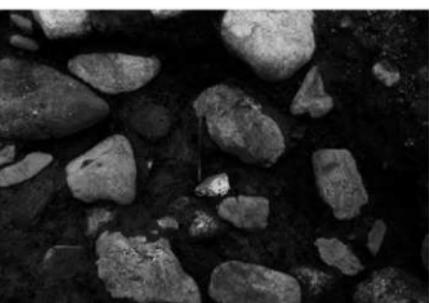
鉄滓出土状況（東から）



鉄滓出土状況（南東から）



羽口出土状況（東から）



青磁（31）出土状況（東から）



基本層序（F区）（南から）



基本層序（F区）（西から）



E区（水田） 全景



E区（水田） 全景（西から）



E区（水田） 全景（北から）



畦3015 断面（西から）



畦3017（左）・畦3023（右） 検出状況（南東から）



畦3017 検出状況（南から）



畦3017 断面（南から）



畦3023 断面（東から）



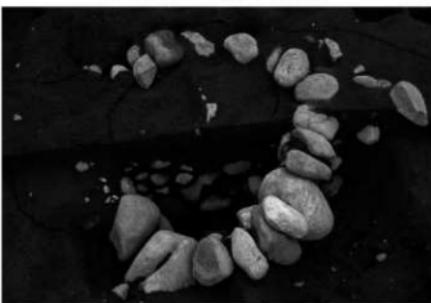
G区 全景 (北西から)



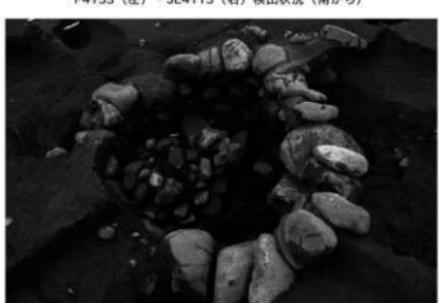
G区 完掘 (SE4113周辺) (南東から)



P4153 (左)・SE4113 (右) 残出状況 (南から)



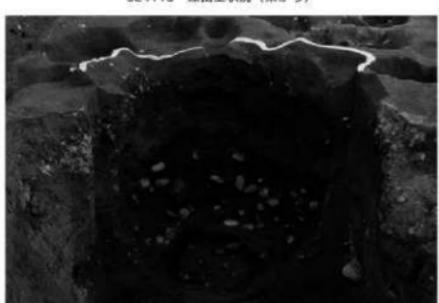
SE4113 断面 (北東から)



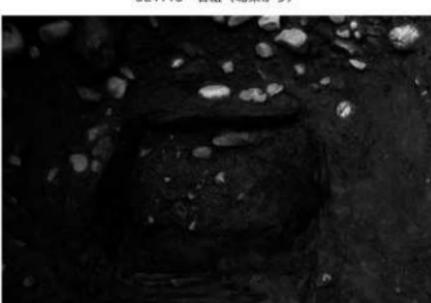
SE4113 裸出土状況 (東から)



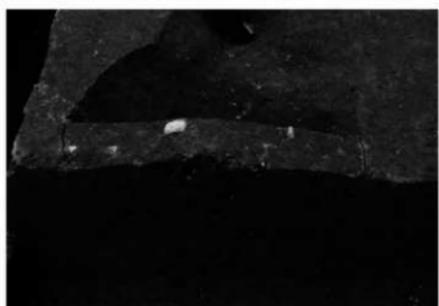
SE4113 石組 (北東から)



SE4113 完掘 (北東から)



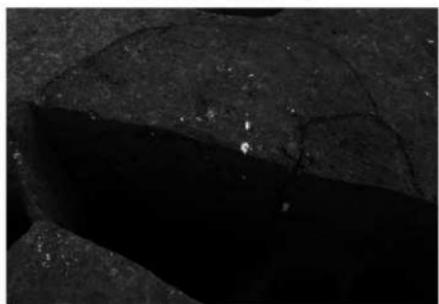
SE4113 完掘 (北東から)



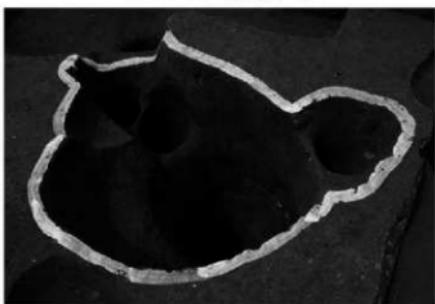
SB15-SK4026 剥離面 (西から)



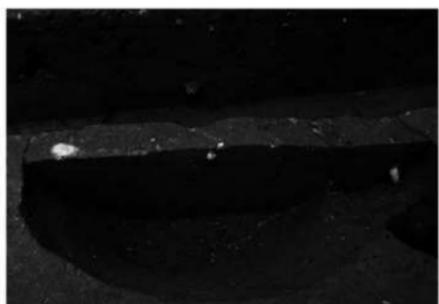
SB15-SK4027 剥離面 (西から)



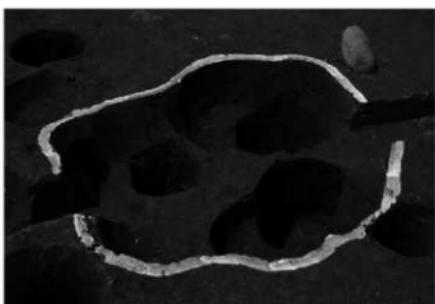
SB17-SK4065 剥離面 (北東から)



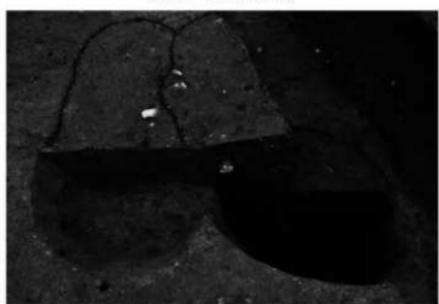
SB17-SK4065 完整 (東から)



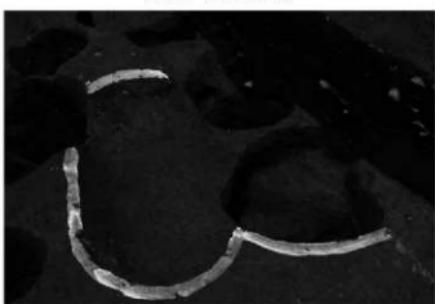
SK4071 剥離面 (西から)



SK4071 完整 (東から)



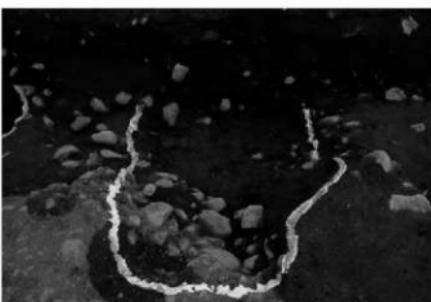
SB19-SK4074 (左)・SK4073 (右) 剥離面 (南から)



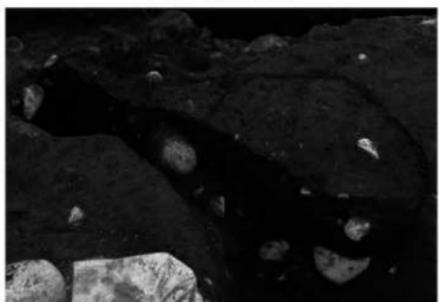
SB19-SK4074 (左)・SK4073 (右) 完整 (南から)



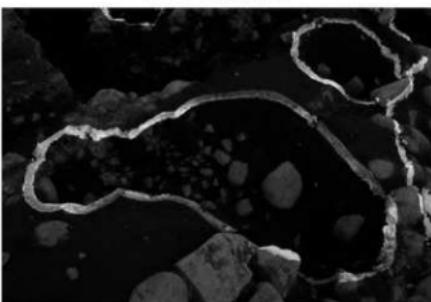
SK4097 断面（南から）



SK4100 完掘（東から）



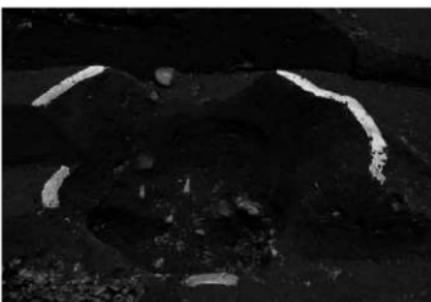
SK4108 断面（北から）



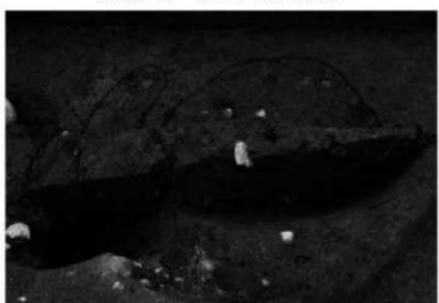
SK4108 完掘（北から）



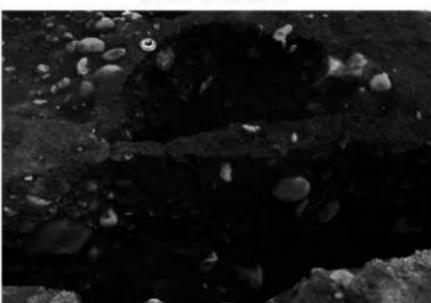
SK4132（左）・SD4114 断面（西から）



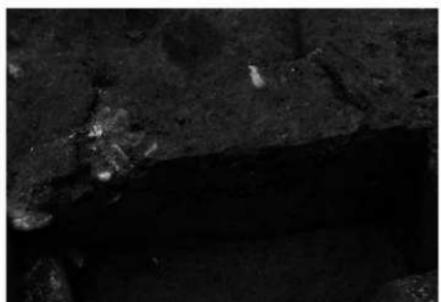
SK4132 完掘（西から）



P4134（左）・SB21-SK4135（右） 断面（南西から）



SB18-SK4150 断面（東から）



SD4059 断面（南から）



SD4059 完整（南から）



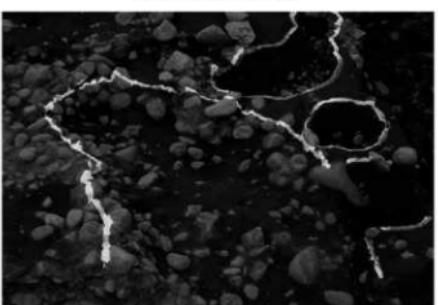
SD4112 断面（北から）



SD4112 完整（北東から）



SD4114 断面（西から）



SX4107 完整（西から）



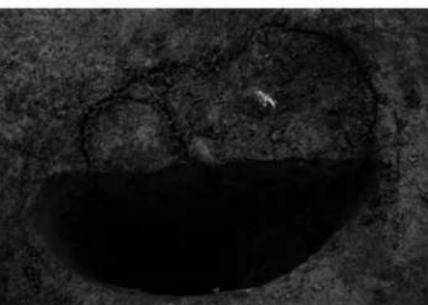
SB22-P4039（左）・SB16-P4038（右） 断面（西から）



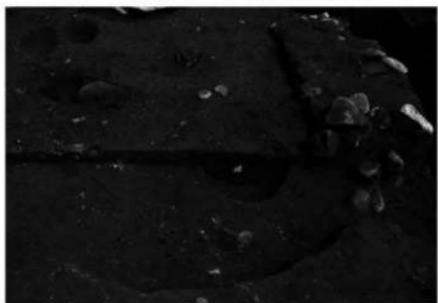
SB15-P4041 断面（南東から）



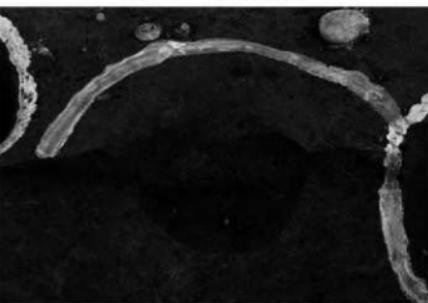
SB15-P4056 (左)・SD4059 (右) 断面 (東から)



SB20-P4175 断面 (南東から)



SF4136 断面 (北から)



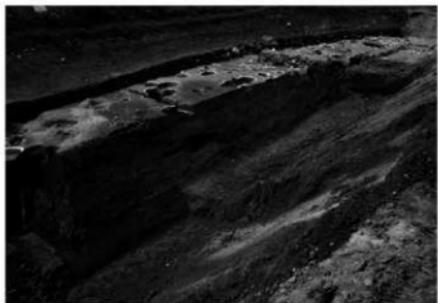
SF4136 完掘 (北から)



SX4091 断面 (南東から)



SX4091 完掘 (北東から)



下層試掘トレンチ 断面 (東から)



下層試掘トレンチ 断面 (南から)



H区 完掘（南から）



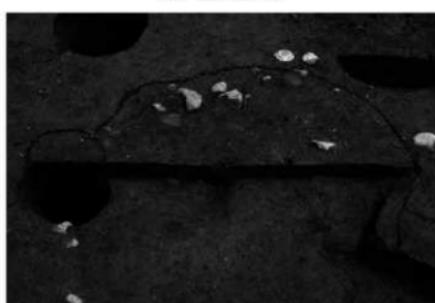
H区 完掘（西から）



H区 完掘（南から）



SK4528 断面（南西から）



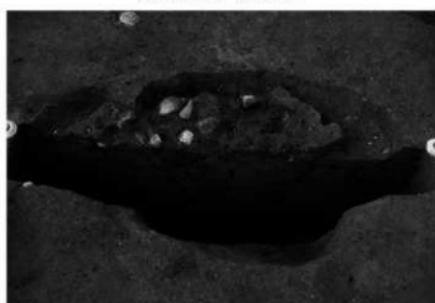
SK4565 断面（南から）



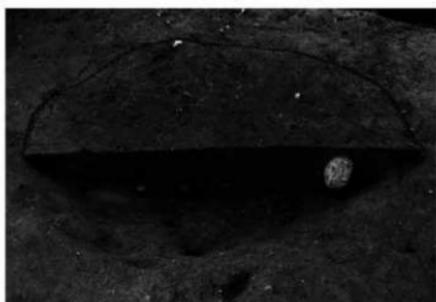
SK4576 断面（南西から）



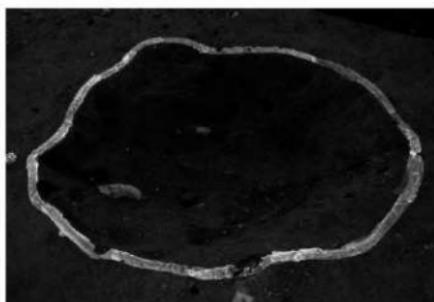
SK4576 碑出土状況（南西から）



SK4576 断面（南西から）



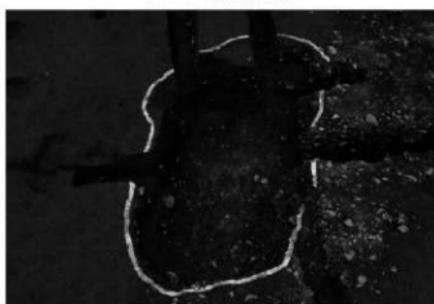
SK4646 断面（東から）



SK4646 完掘（東から）



SK4671 断面（西から）



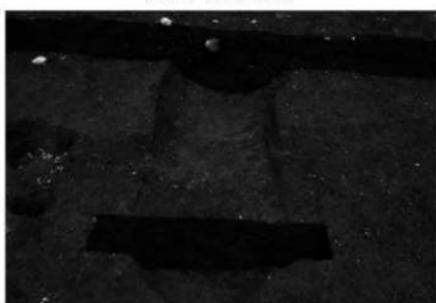
SK4671 完掘（南東から）



SK4717 断面（南から）



SK4717 完掘（南から）



SD4592 断面（西南から）



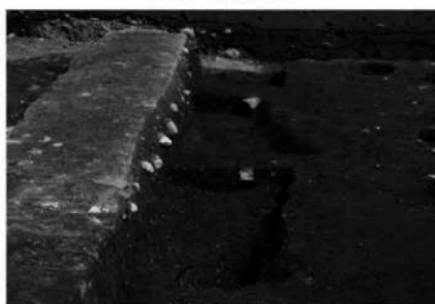
SD4592 完掘（西南から）



SD4613 断面（東から）



SD4613 完掘（西から）



SD4641 断面（北西から）



SD4641 完掘（北西から）



SB31-P4519a（左）・SB25-P4520（右） 断面（西から）



SB27-P4538b 断面（南東から）



SB31-SK4569（中央） 断面（南西から）



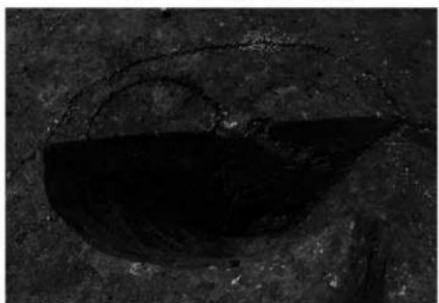
SB26-P4681（左）・P4680 断面（北東から）



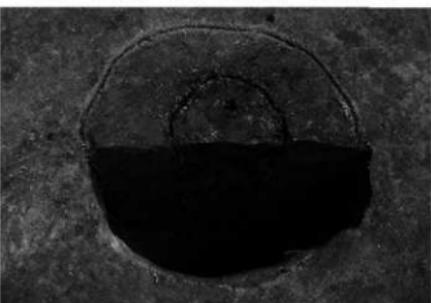
P4682（左）・P4683（右） 断面（西から）



SB30-P4695a（左）・SB26-P4695b（右） 断面（西から）



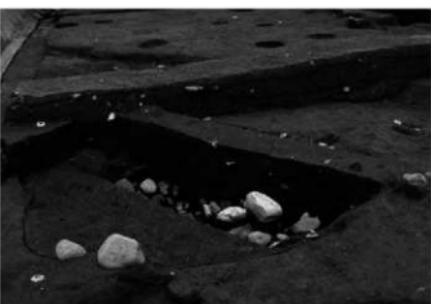
P4724 断面（東から）



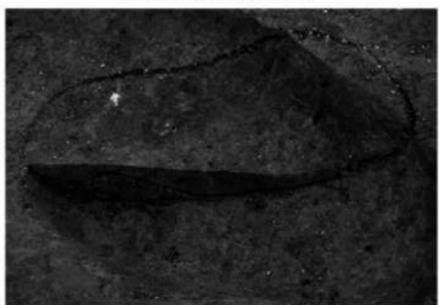
P4749 断面（南西から）



SX4603c 裸出土状況（南から）



SX4603a・SX4603c 断面（南東から）



SX4603d 断面（南から）



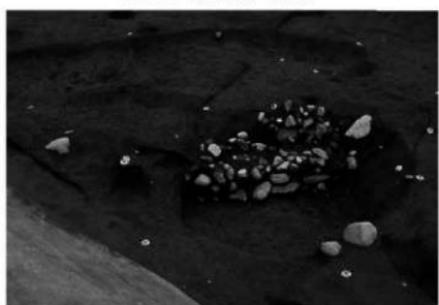
SX4603a 断面（西から）



SX4603c 石器出土状況（南から）



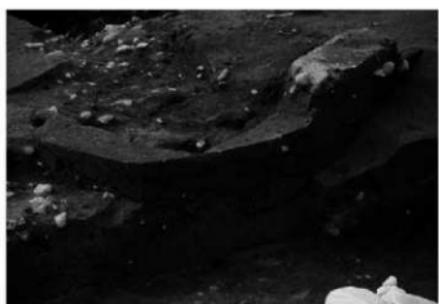
SX4603c 断面（南東から）



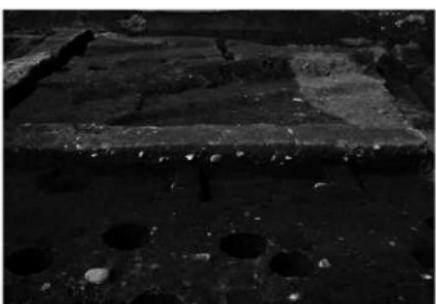
SX4603c 石器出土状況（南から）



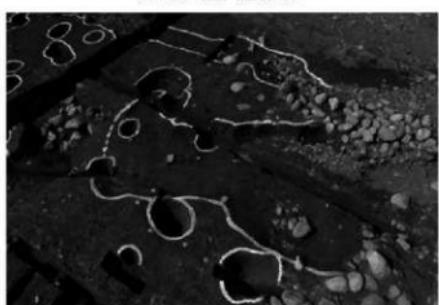
SX4603c 完整（南から）



SX4648 断面（南西から）



SX4653 断面（西から）



SX4723 完整（西から）



土師器（147）出土状況（南西から）



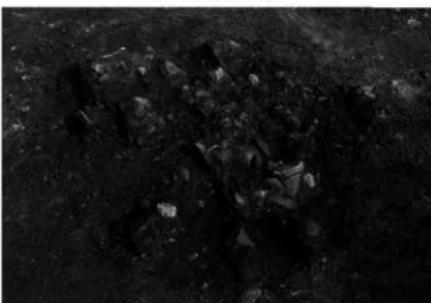
D2区・E区 完掘（西から）



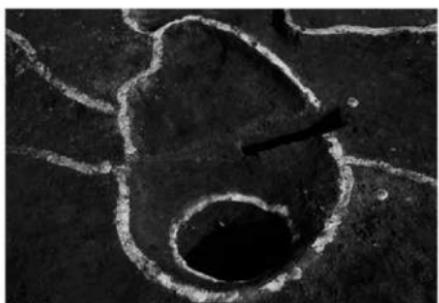
E区 完掘（北西北から）



E区 完掘（北東から）



SK3608 遺物出土状況（西から）



SK3608・P3625 完掘（南から）



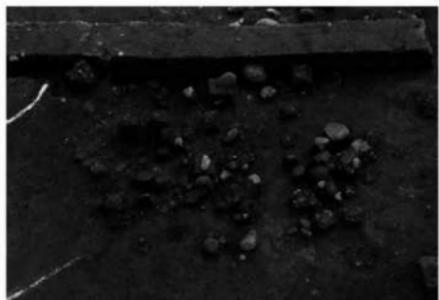
SK3621 完掘（南西から）



SK3623 断面（北から）



SD3602・SD3603 断面（北東から）



SD3602 遺物出土状況（西から）



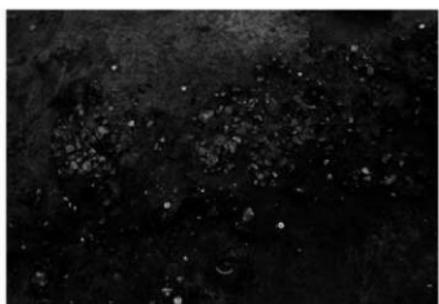
SD3602 遺物出土状況（西から）



SD3602 遺物出土状況（南から）



SD3603 断面（南から）



SD3603 土器集中③（西から）



SD3603 土器集中③（西から）



SD3603 土器集中②（西から）



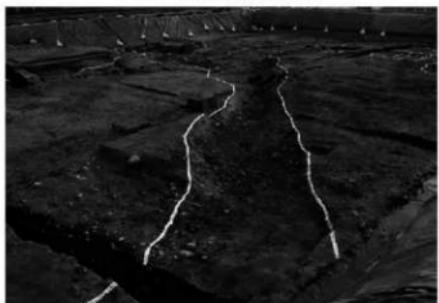
SD3603 土器集中②（北から）



SD3603 遺物出土状況（東から）



SD3603 木製品出土状況（東から）



SD3603 完掘（北から）



SD3604 断面（南西から）



道構群 検出状況（西から）



SD3606 断面（南西から）



SD3606 断面（南から）



SD3614 検出状況（北西から）



SD3614 完掘（南東から）



SD3650 遺物出土状況（南東から）



SD3650 断面（北から）



SD3650 断面（東から）



SD3650 断面（南から）



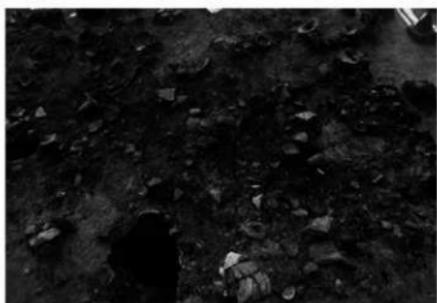
SD3650 土器集中（東から）



SD3650 土器集中（西から）



SD3650 土器集中（南から）



SD3650 土器集中 (北から)



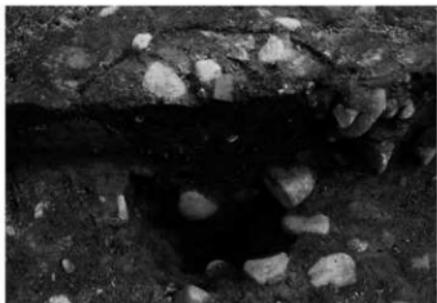
SD3650 遺物出土状況 (南から)



SD3650 遺物出土状況 (東から)



P3600 断面 (北西から)



P3601 断面 (北西から)



P3607 断面 (南西から)



P3617・P3618 断面 (西から)



P3620 断面 (東から)



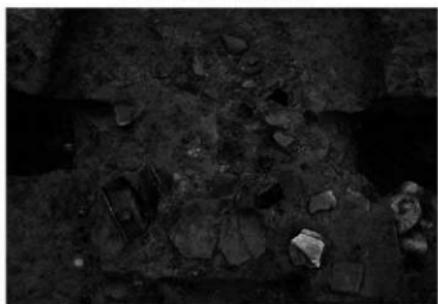
P3624 断面（南東から）



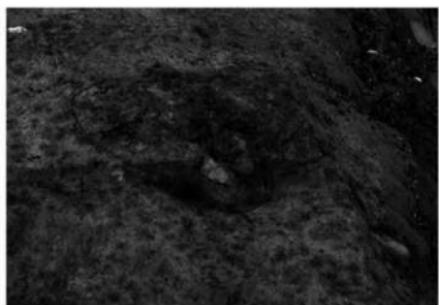
SX3609 遺物出土状況（南から）



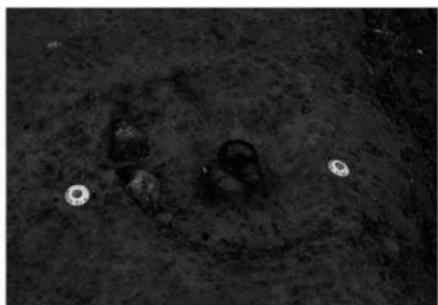
SX3610 遺物（342）出土状況（南西から）



SX3611 遺物（343）出土状況（南東から）



SX3613 断面（南西から）



SX3613 遺物（344）出土状況（南西から）



SX3651 遺物出土状況（東から）



SX3652 遺物（348）出土状況（南西から）



SX3654 遺物出土状況（南から）



SX3654 遺物出土状況（南から）



SX3655 遺物出土状況（東から）



SX3658 遺物出土状況（東から）



SX3658 遺物出土状況（南東から）



SX3659 遺物（374）出土状況（北から）



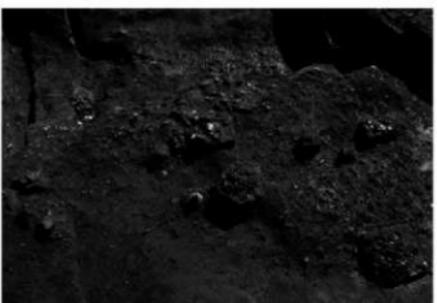
SX3660 遺物出土状況（北から）



SX3661 遺物出土状況（北から）



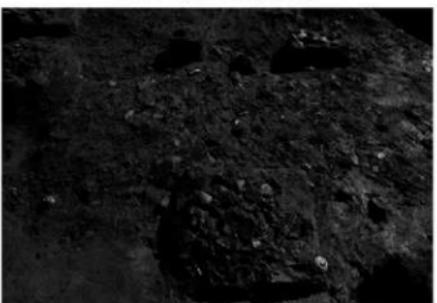
SX3661 遺物出土状況（東から）



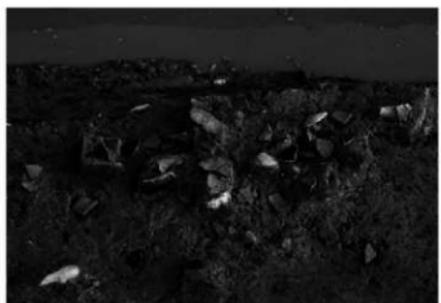
SX3662 遺物出土状況（北西から）



SX3662 遺物出土状況（北西から）



SX3662 遺物出土状況（西から）



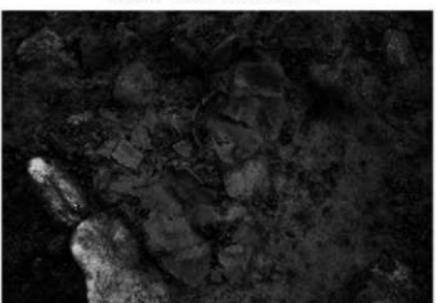
SX3664 遺物出土状況（北西から）



SX3666 遺物出土状況（北東から）



SX3667 遺物（401）出土状況（北東から）



小型壺（417）出土状況（14W14）（東から）



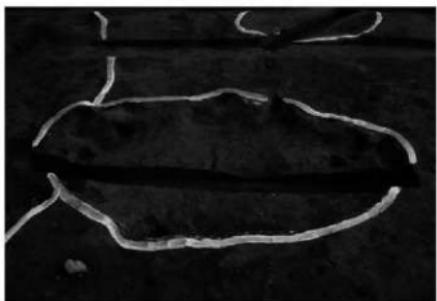
D2区 完掘（北西から）



D2区 完掘（北西から）



SK2104 断面（西から）



SK2104 完掘（北西から）



SD2100 遺物出土状況（北から）



SD2100 遺物出土状況（西から）



SD2100 遺物出土状況（南から）



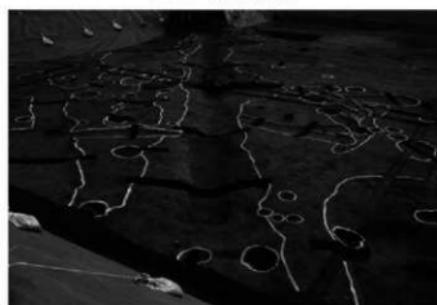
SD2100 遺物出土状況（南から）



SD2100 剖面（南から）



SD2100 剖面（南から）



SD2100 完掘（北から）



SD2101 完掘（北から）



SD2103 剖面（西から）



SD2103 完掘（東から）



SD2124 遺物出土状況（南から）



SD2124 大型壺（446）出土状況（西から）



SD2124 断面 (南から)



SD2124 完掘 (北から)



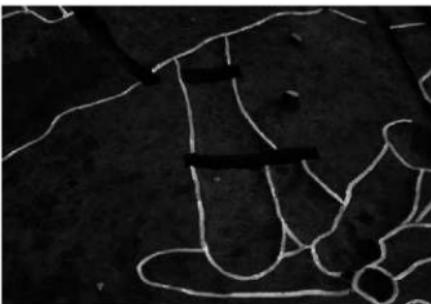
SD2131 断面 (南から)



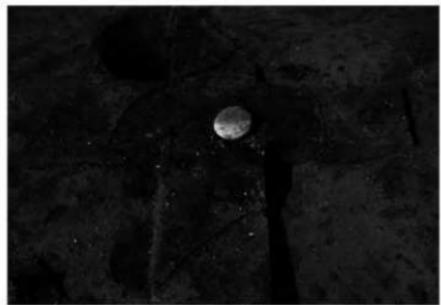
SD2132・SD2129・SD2131 完掘 (北東から)



SD2159 断面 (南東から)



SD2159・SD2160 完掘 (西から)



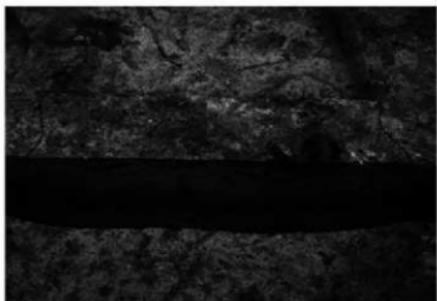
SD2161 断面 (東から)



SD2163 断面 (西から)



P2157・SD2162 断面(北から)



SD2164 断面(西から)



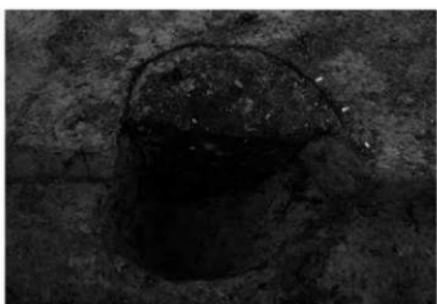
P2113 断面(南から)



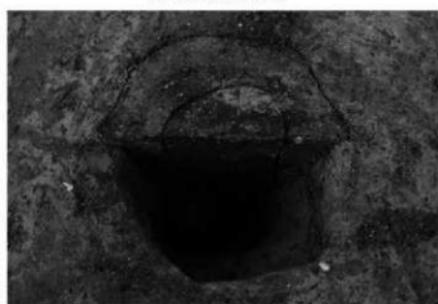
P2113 完掘(南から)



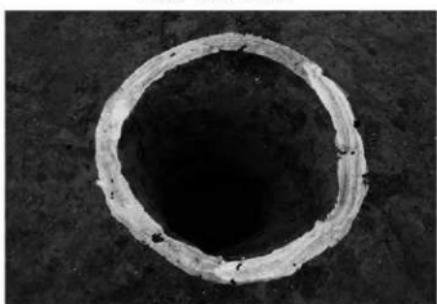
P2119 断面(南から)



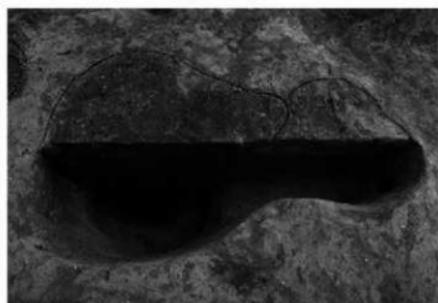
P2135 断面(南西から)



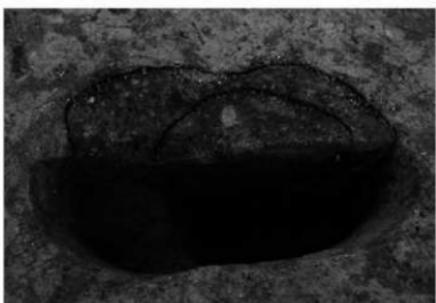
P2136 断面(南西から)



P2136 完掘(南西から)



P2141・P2140 断面（西から）



P2143 断面（南から）



P2144 断面（南から）



P2146 柱根検出状況（東から）



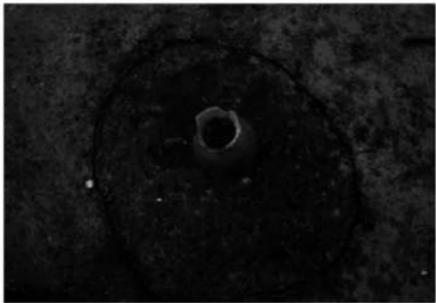
P2150 断面（南西から）



P2150 柱根検出状況（南西から）



P2150 完標（南西から）



小型壺(443)出土状況（北から）



P2151 断面(南西から)



P2151 完掘(南西から)



P2156 断面(西から)



P2175 断面(南から)



SX2102 完掘(南東から)



SX2105 遺物出土状況(北から)



SX2105 断面(東から)



SX2105 完掘(北から)



SX2123 遺物出土状況（北から）



SX2125 遺物出土状況（西から）



SX2126 遺物出土状況（東から）



SX2171 断面（西から）



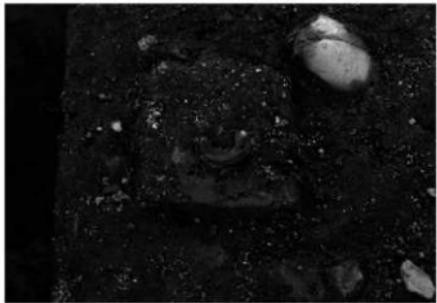
SX2171 完瓶（北東から）



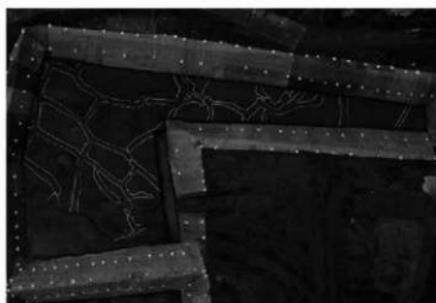
杭2178 断面（西から）



杭2180 断面（南から）



勾玉（471）出土状況（南から）



Vib層水田 全景



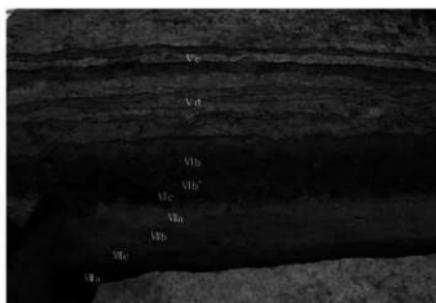
Vib層水田 畦検出状況（東から）



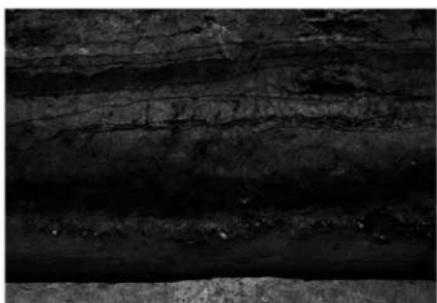
Vib層水田 畦検出状況（北東から）



Vib層水田 畦検出状況（南東から）



基本層序（北壁断面）（南東から）



基本層序（西壁断面）（南東から）



須恵器（490） 出土状況（東から）



SD2025 断面（北東から）



靴2003 断面（北から）



靴2017 断面（南西から）



靴2019・靴2021、SD2026検出状況（北東から）



靴2019 断面（東から）



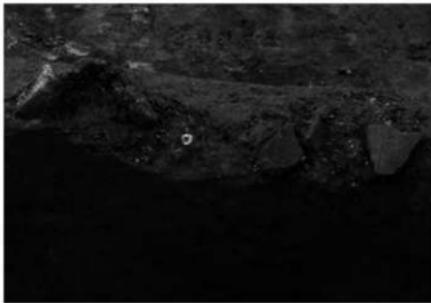
靴2023 木出土状況（北東から）



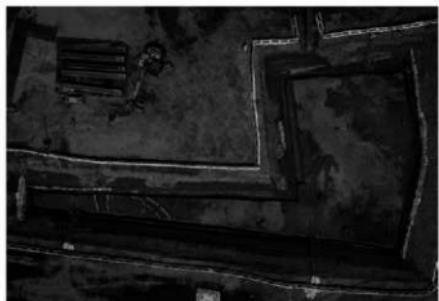
弓(492)出土状況（南西から）



木製品(493)出土状況（南から）



臼玉(496)出土状況（南西から）



VII層上面 全景



VII層上面 全景（南から）



SD2200・SD2201 完掘（西南から）



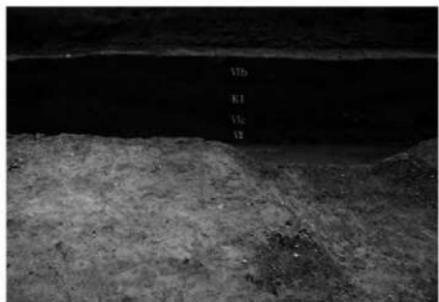
SD2200 断面（北から）



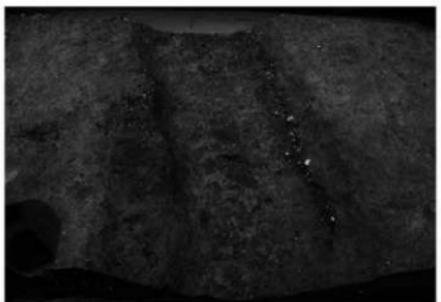
SD2200 遺物出土状況（東から）



SD2200 遺物（476）出土状況（北東から）



SD2201 断面（北東から）



SD2201 完掘（北東から）



SD2538 断面（南東から）



噴砂1 横出状況・断面（北西から）



Ⅷ層水田 全景



Ⅷ層水田



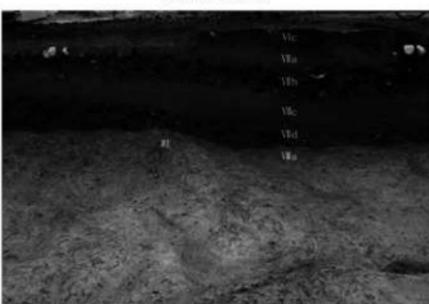
Ⅷ層水田



Ⅷ層水田（西から）



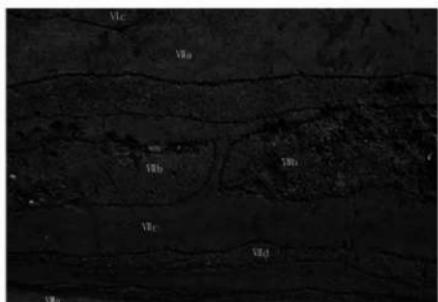
Ⅷ層水田 蛙検出状況（南から）



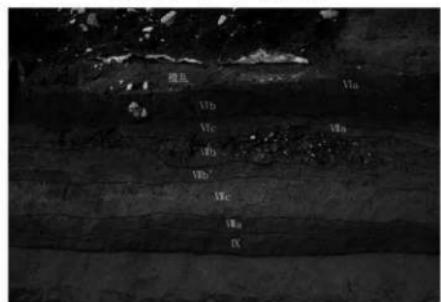
基本層序 (12Q16・17グリッド) (南東から)



基本層序 (12Q6・11) (南西から)



基本層序 (12Q6) 噴砂検出状況 (南西から)



基本層序 (12Q7・8) (南西から)



畦2501 断面 (東から)



畦2509 断面 (南から)



噴砂3 検出状況 (北西から)



噴砂4 検出状況・断面 (南西から)



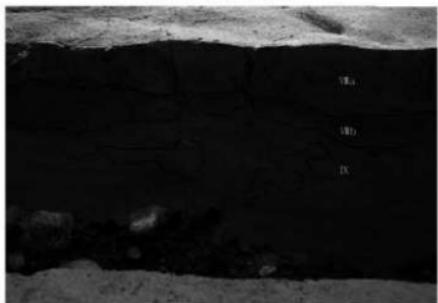
斐 (475) 出土状況 (北から)



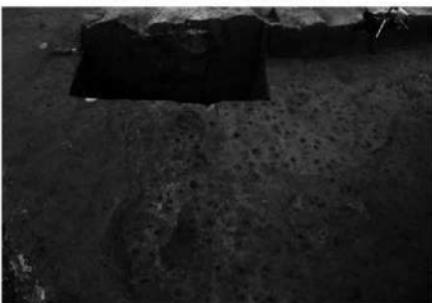
IX層上面 全景（南から）



基本層序（12Q6+11） 最下層（南西から）



噴砂6 断面（北から）



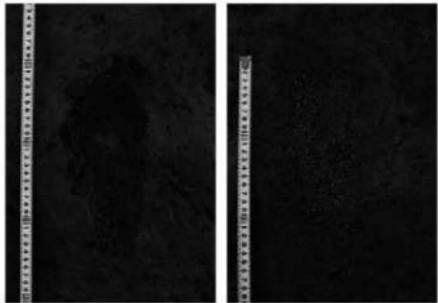
噴砂5（4-4'） 検出状況（南西から）



噴砂5（4-4'） 断面（南西から）



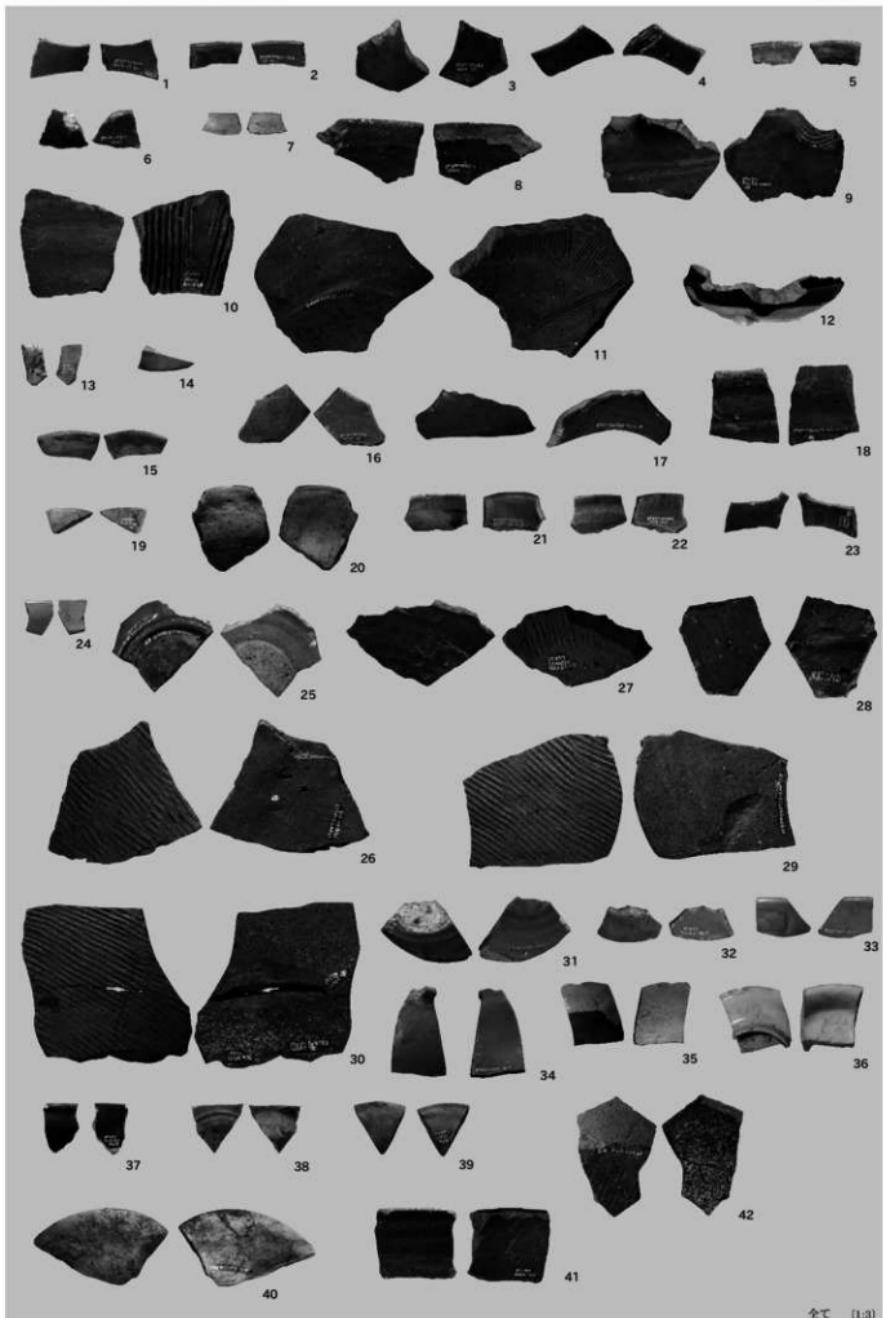
噴砂5（6-6'） 断面（南西から）

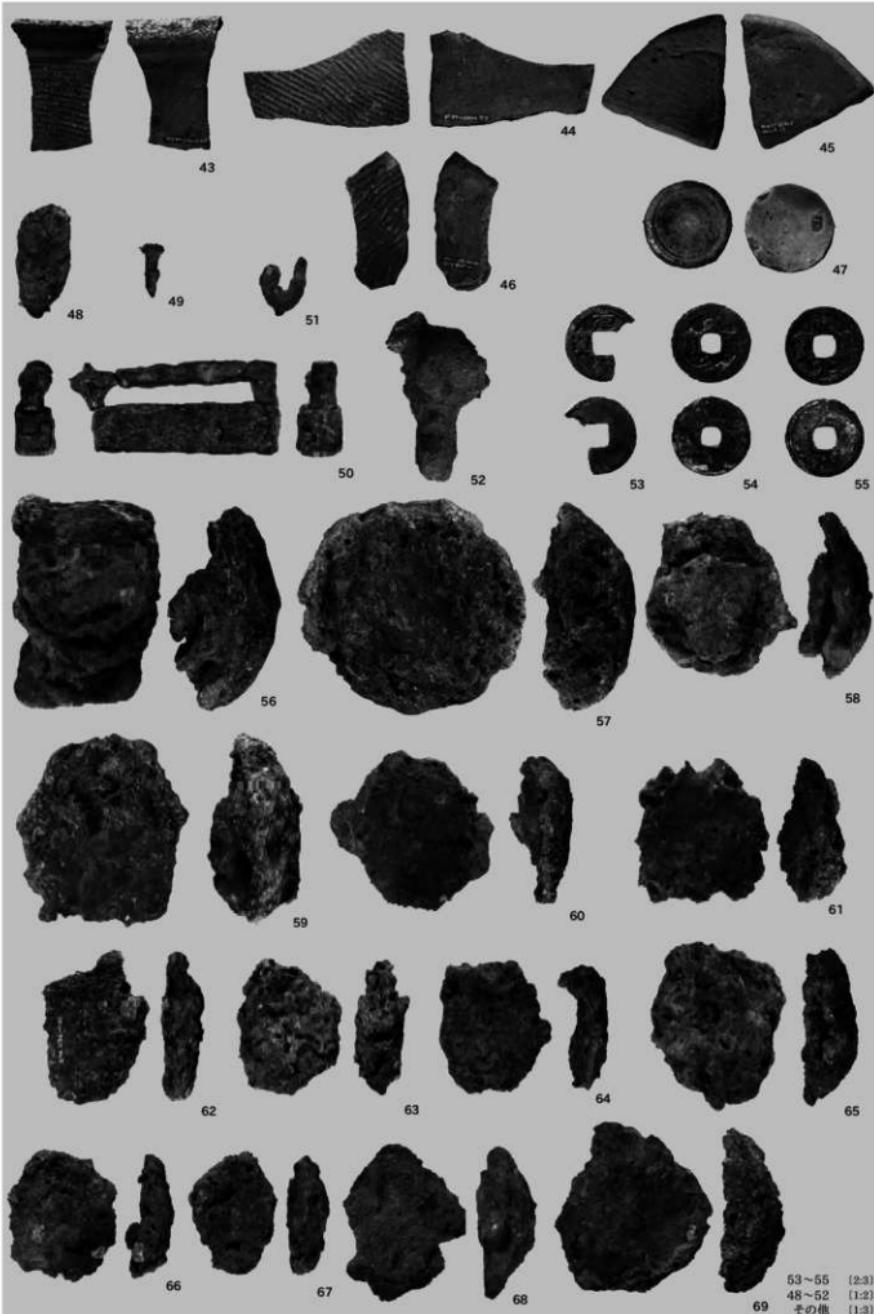


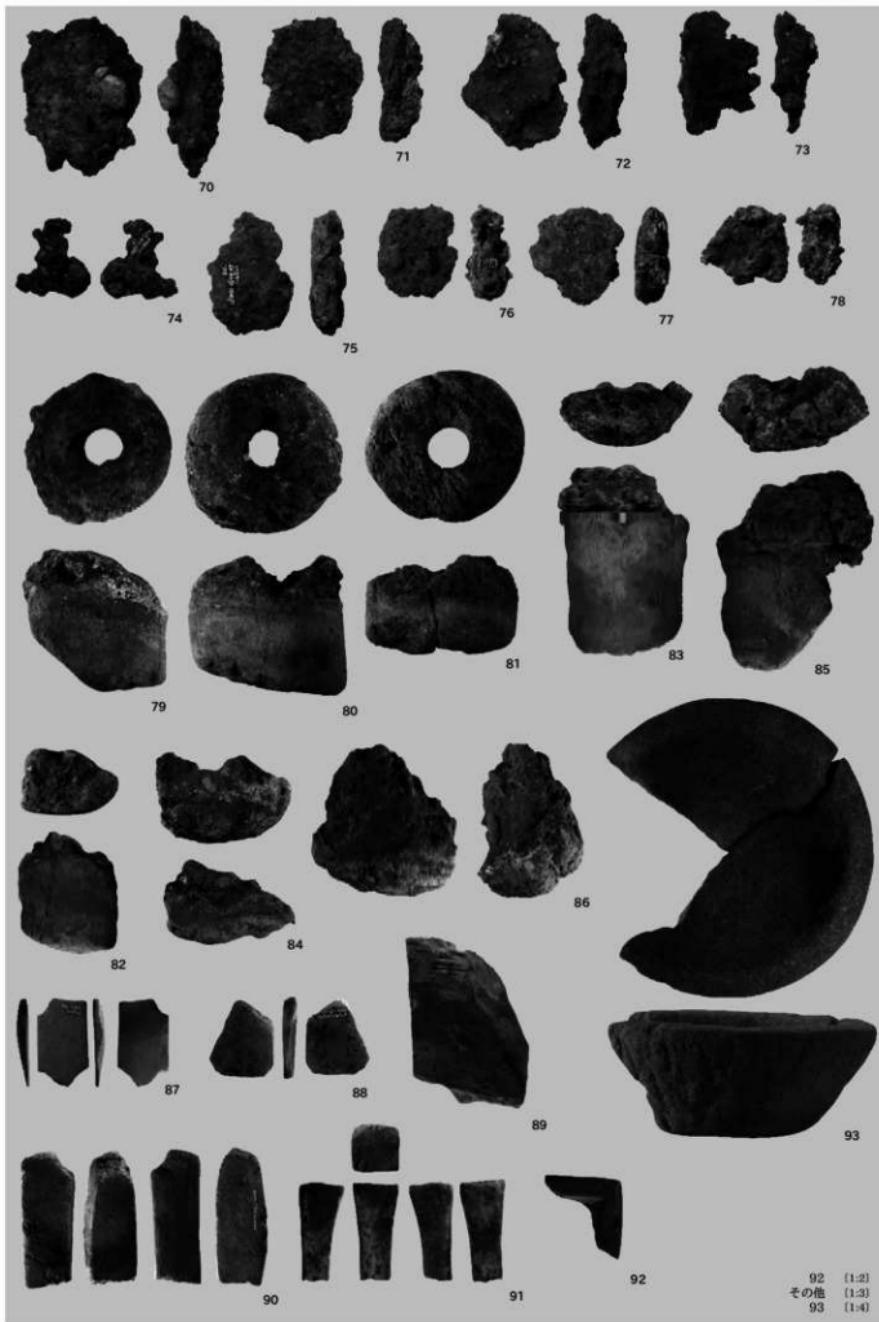
IX層水田に残る足跡



IX層 自然木検出状況（南西から）







92 その他  
 93 (1:3)  
 93 (1:4)



94



95



96



97



102



98



99



100



101

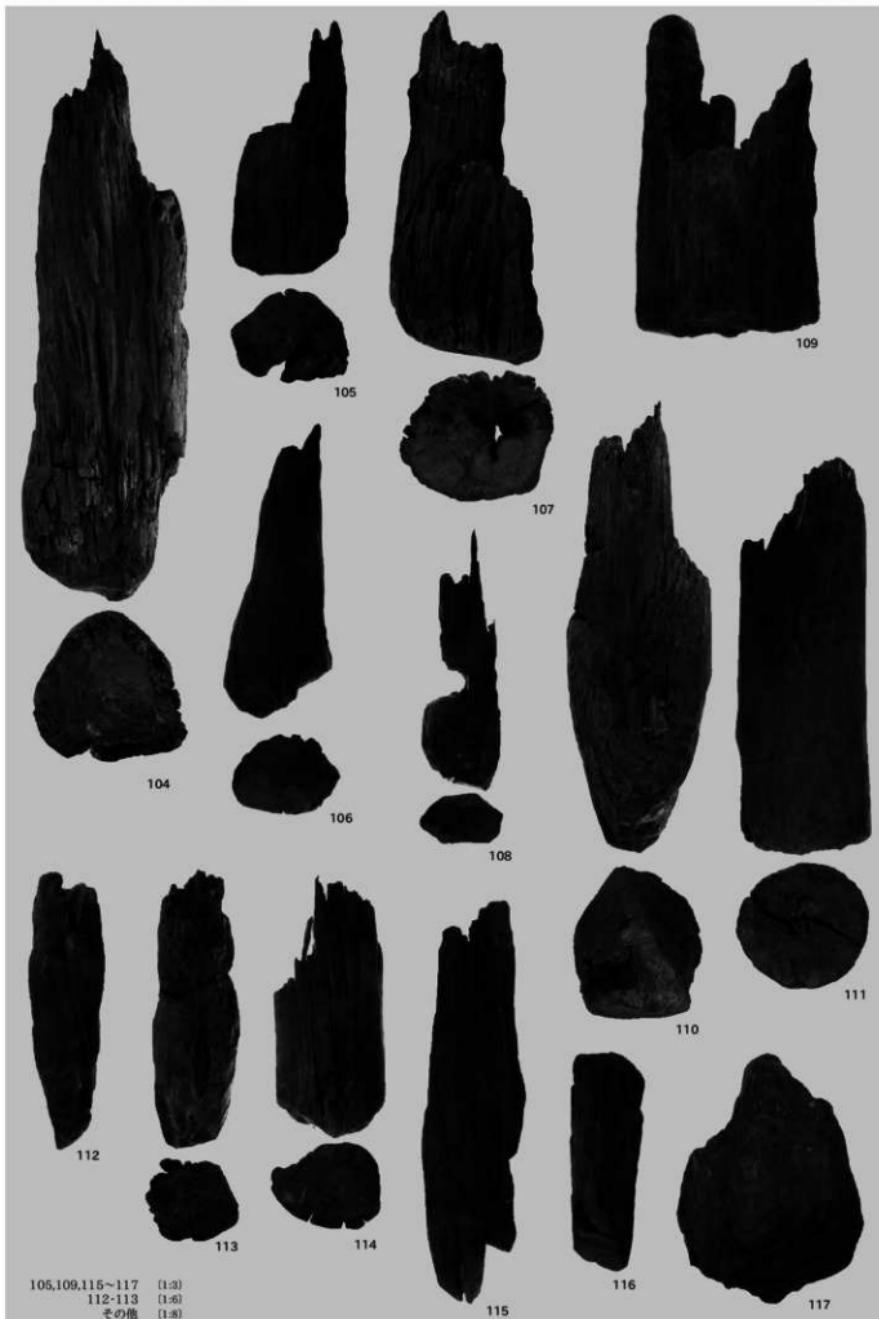


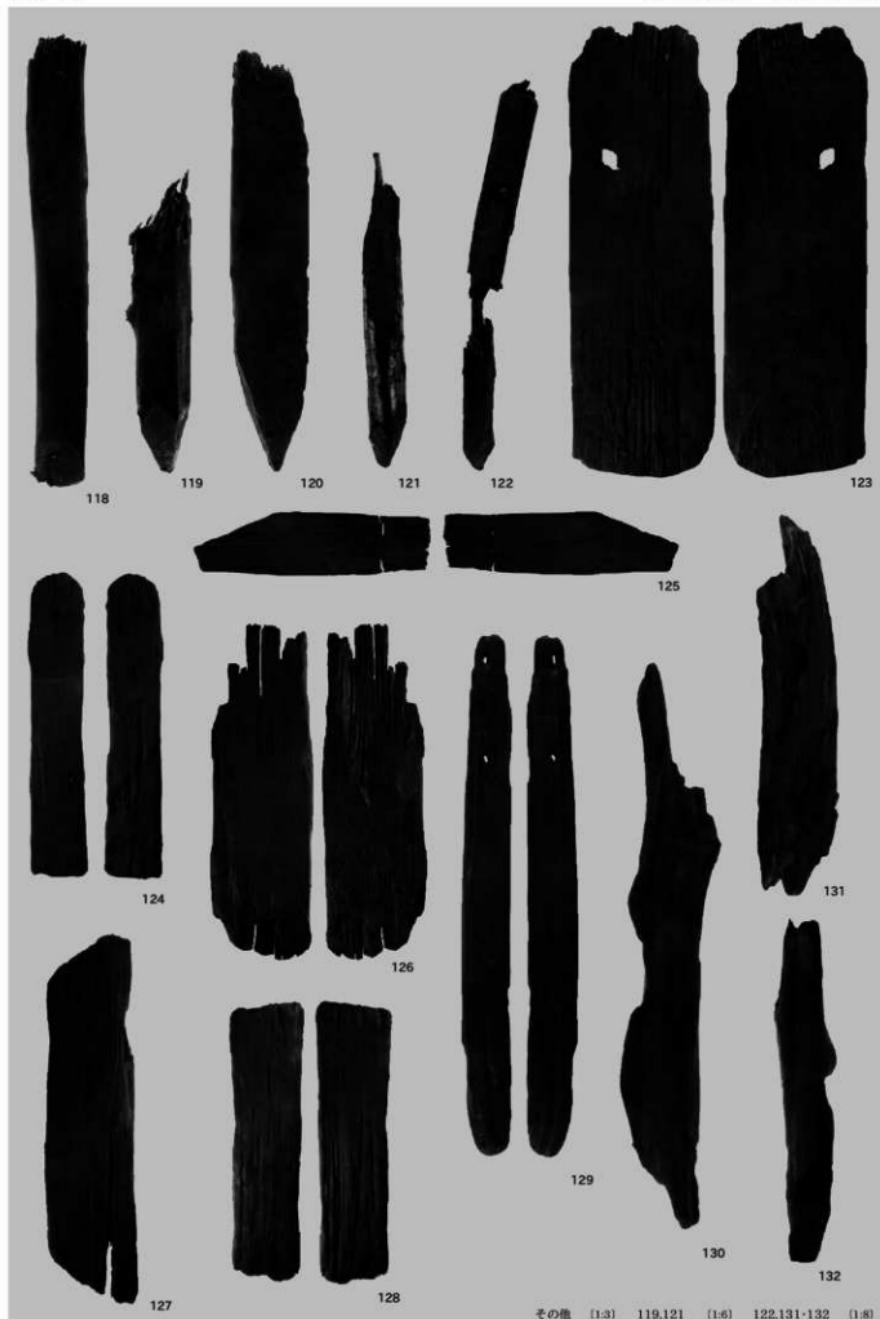
103

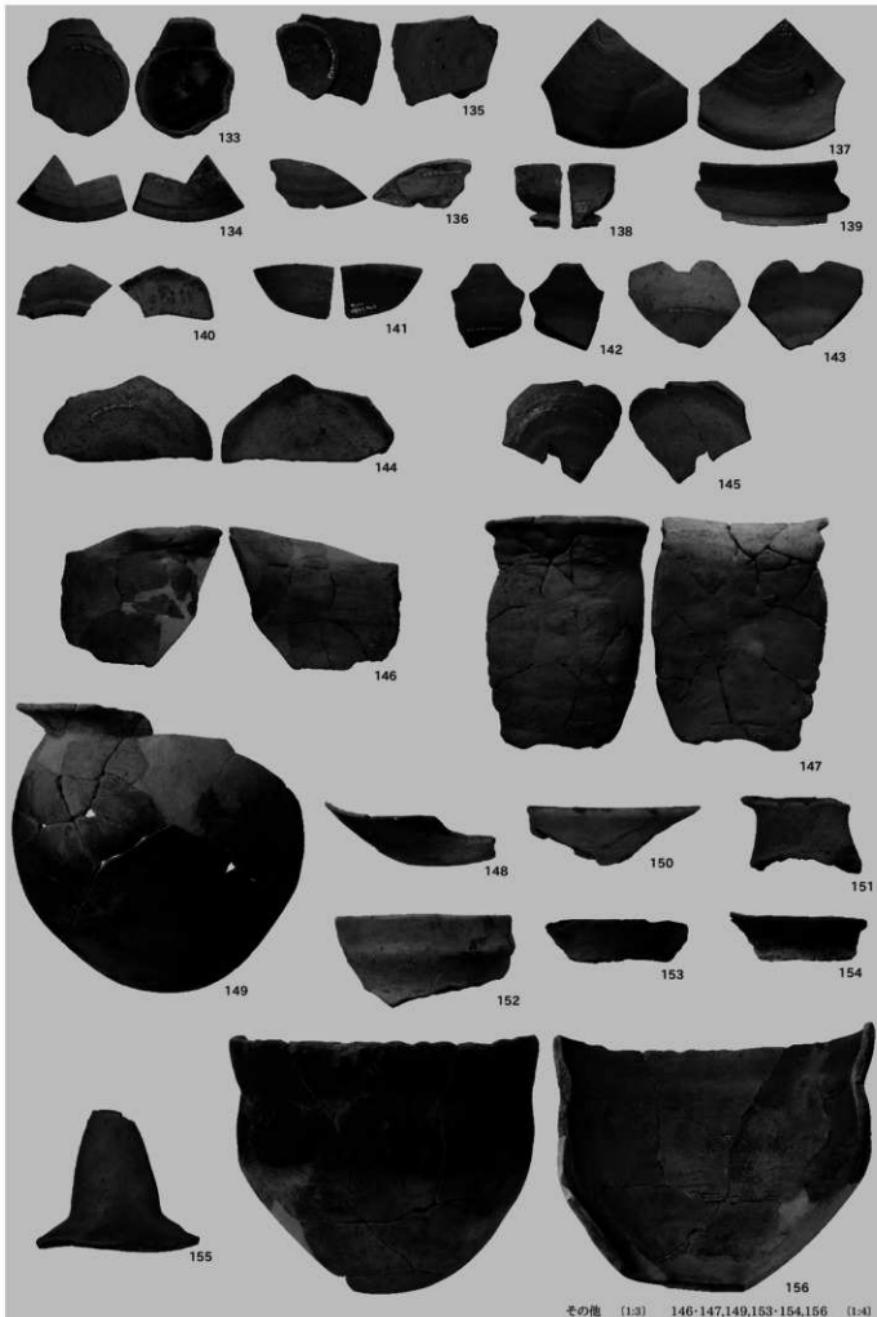
94,97 (1:3)

98 (1:6)

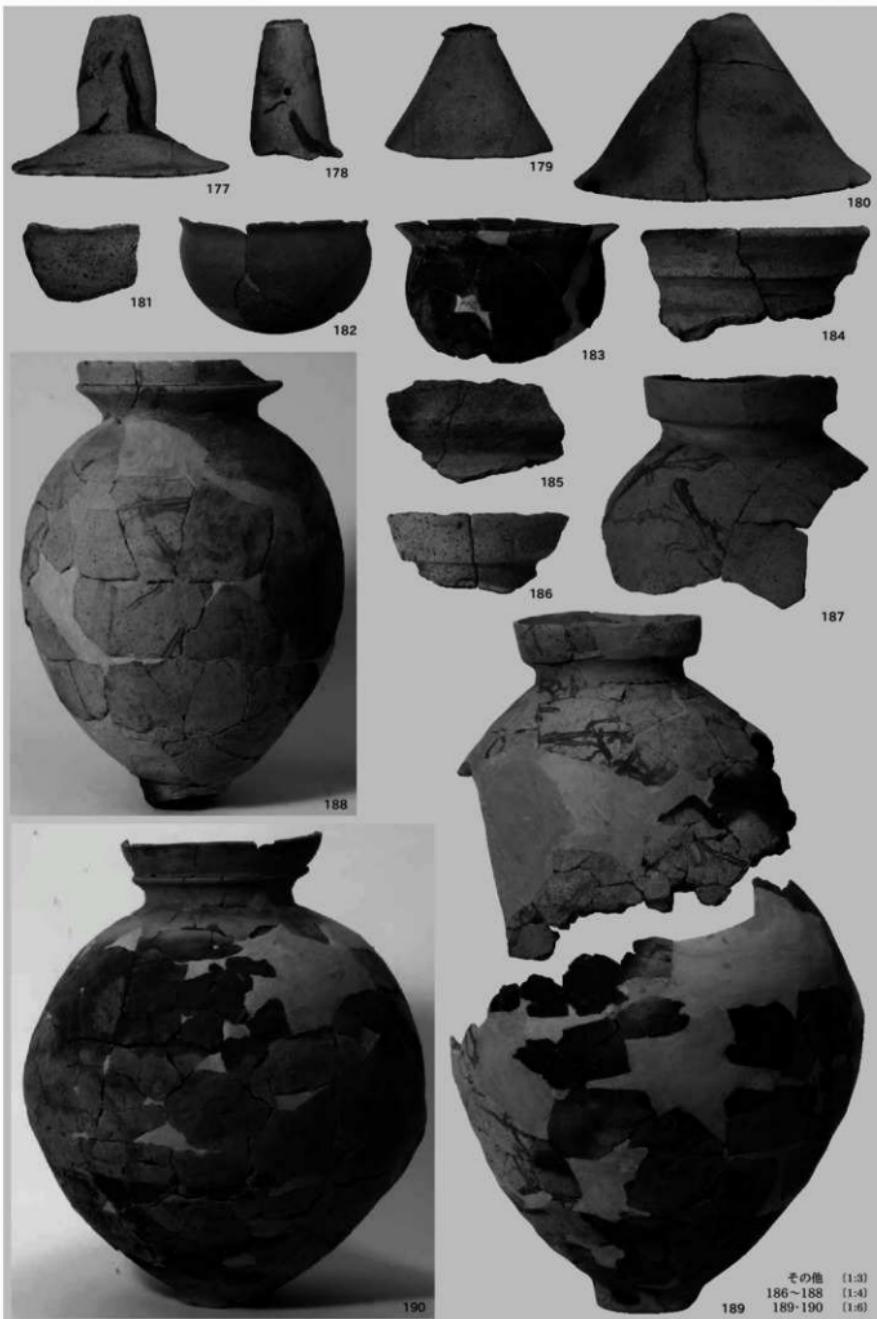
その他 (1:8)

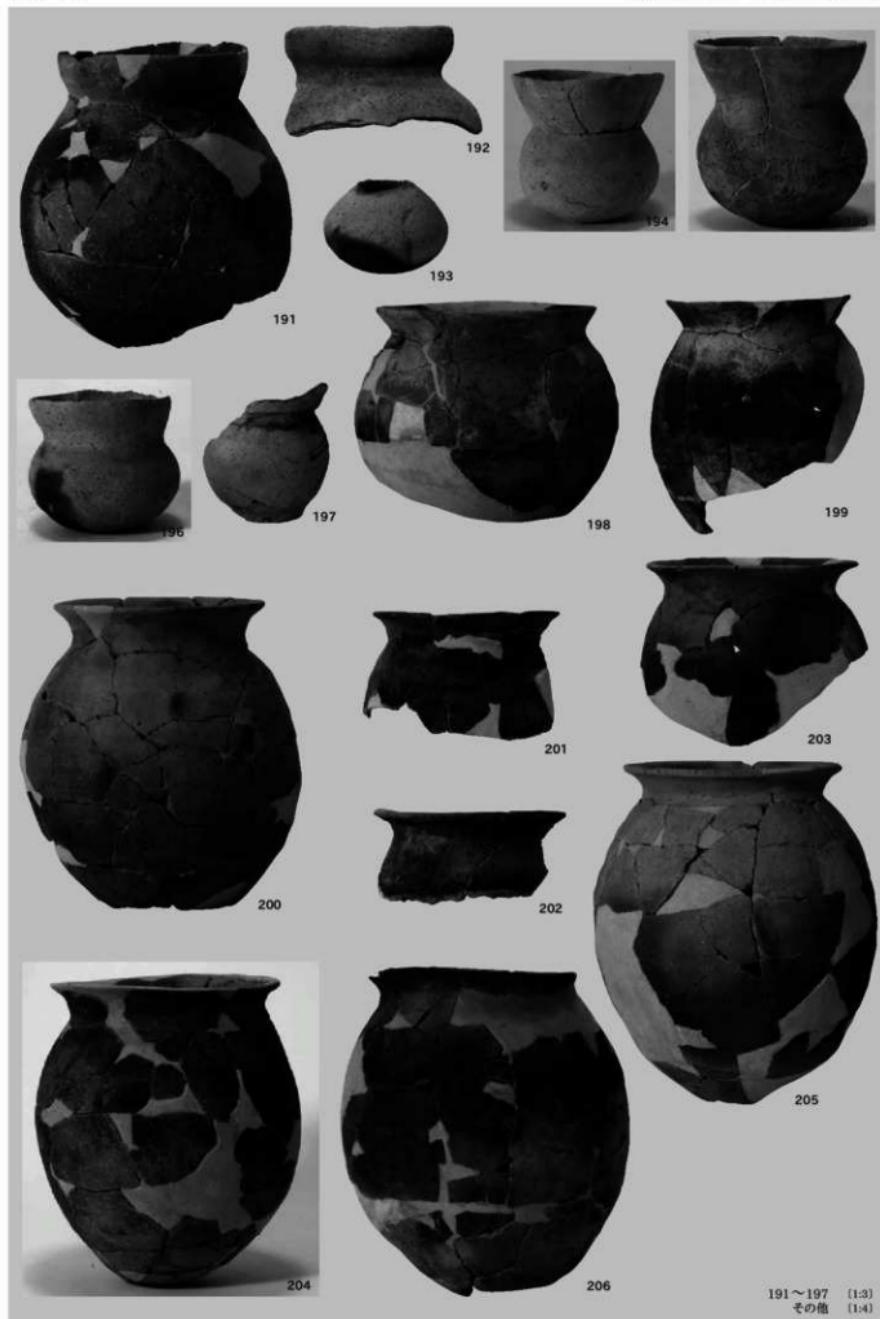


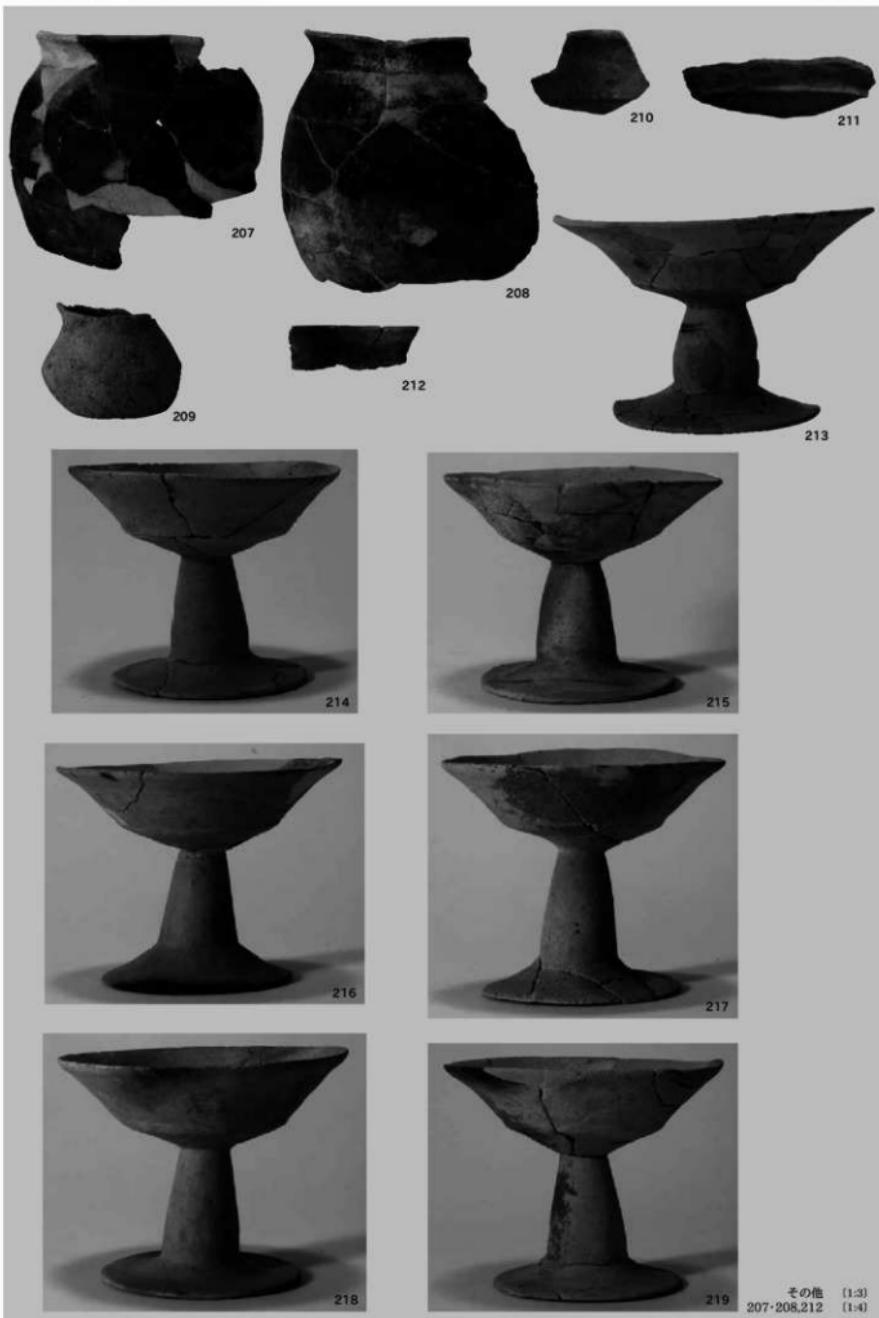








191~197 [1:3]  
その他 [1:4]



その他 [1:3]  
207・208, 212 [1:4]



220



221



222



223



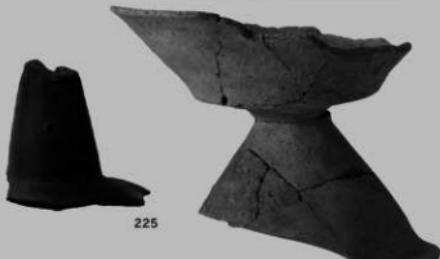
224



225

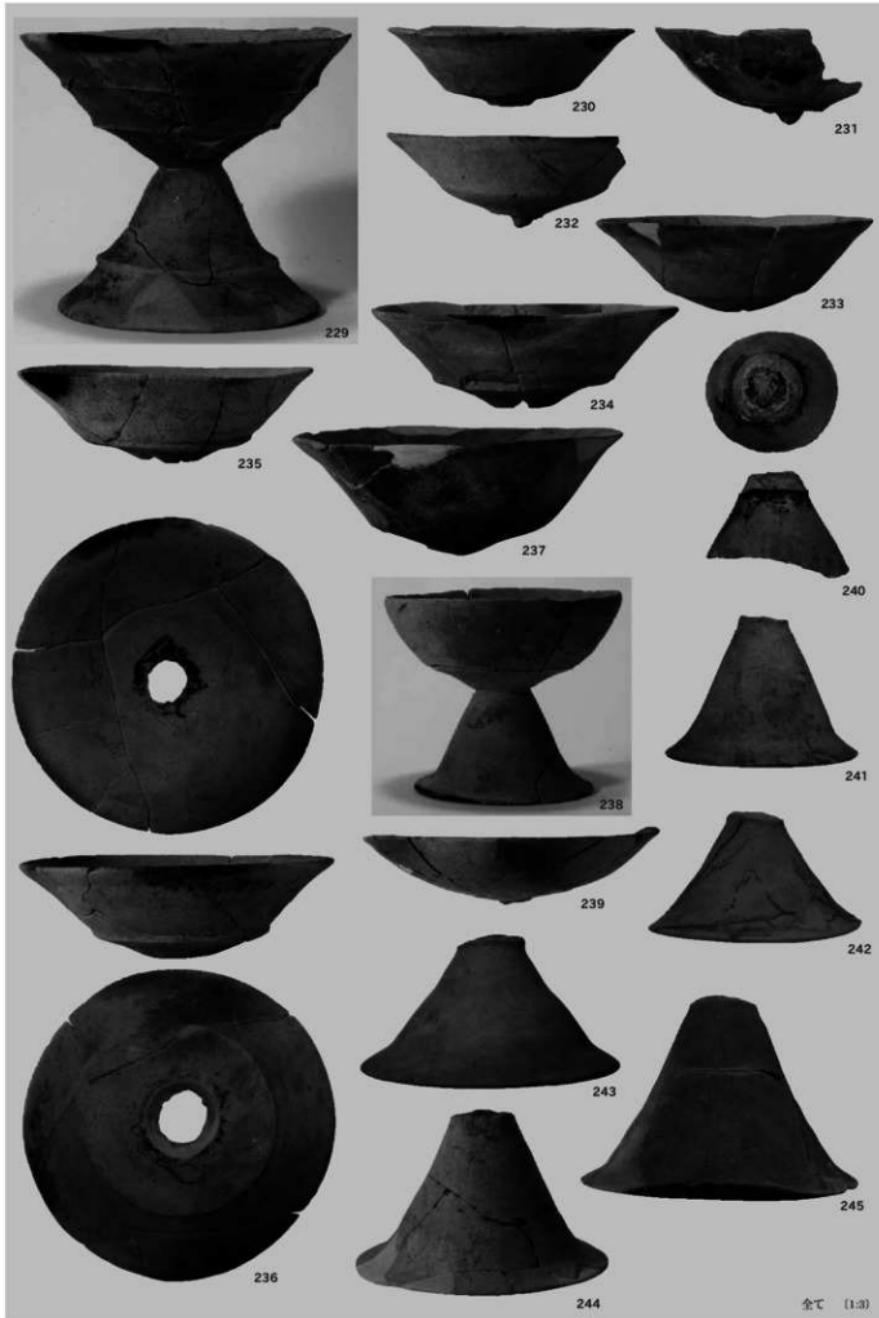


226



227

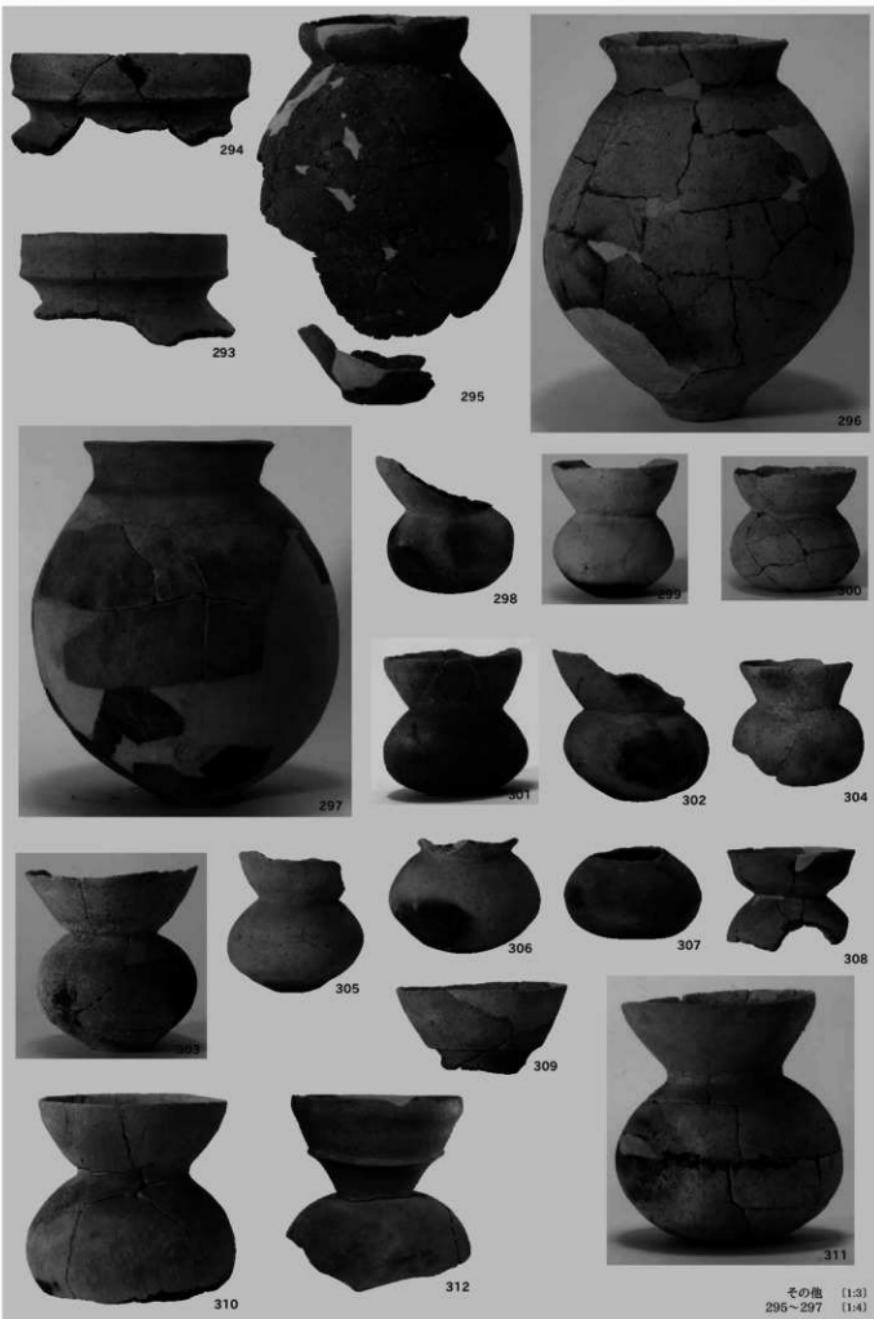
228  
全て (1:3)

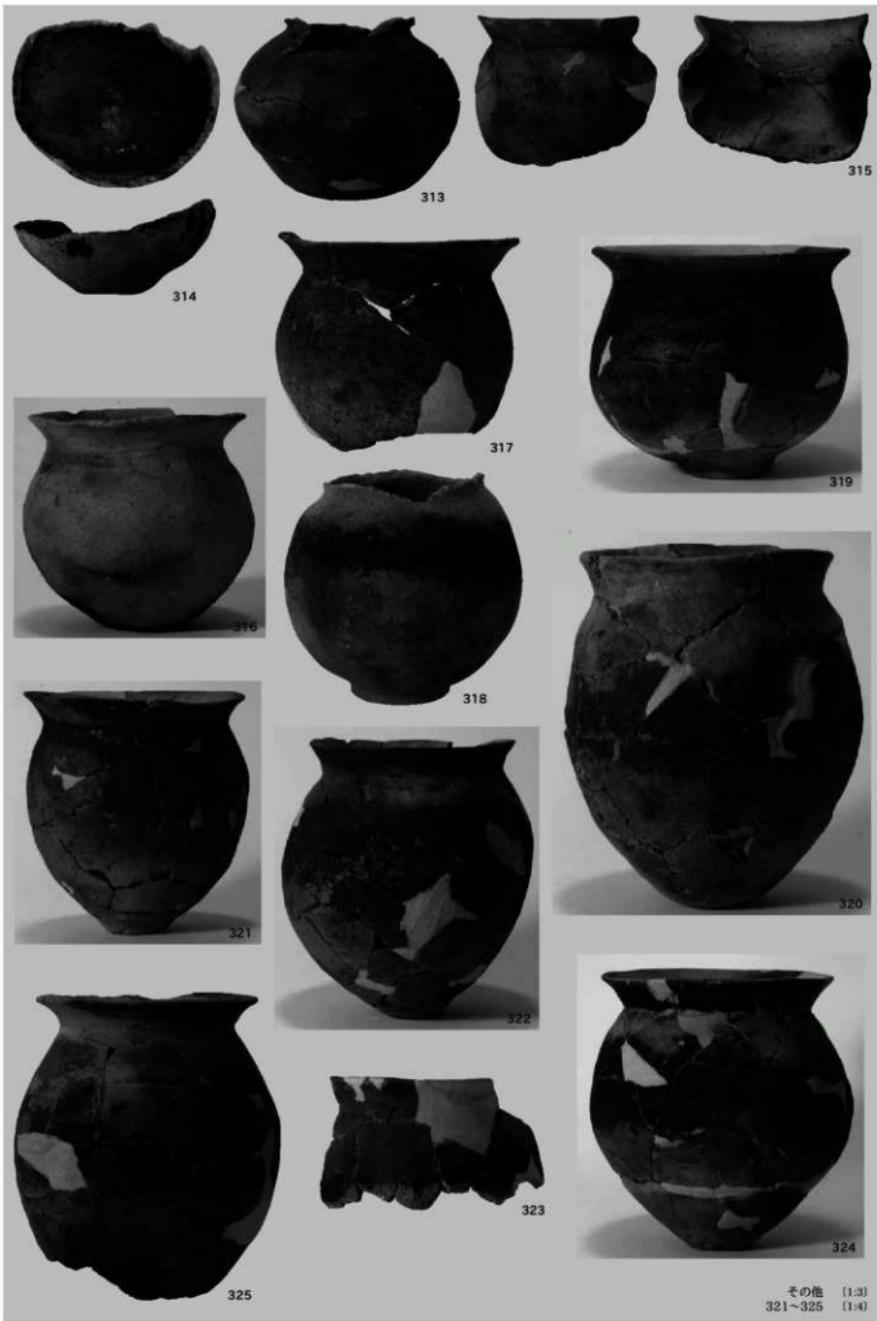




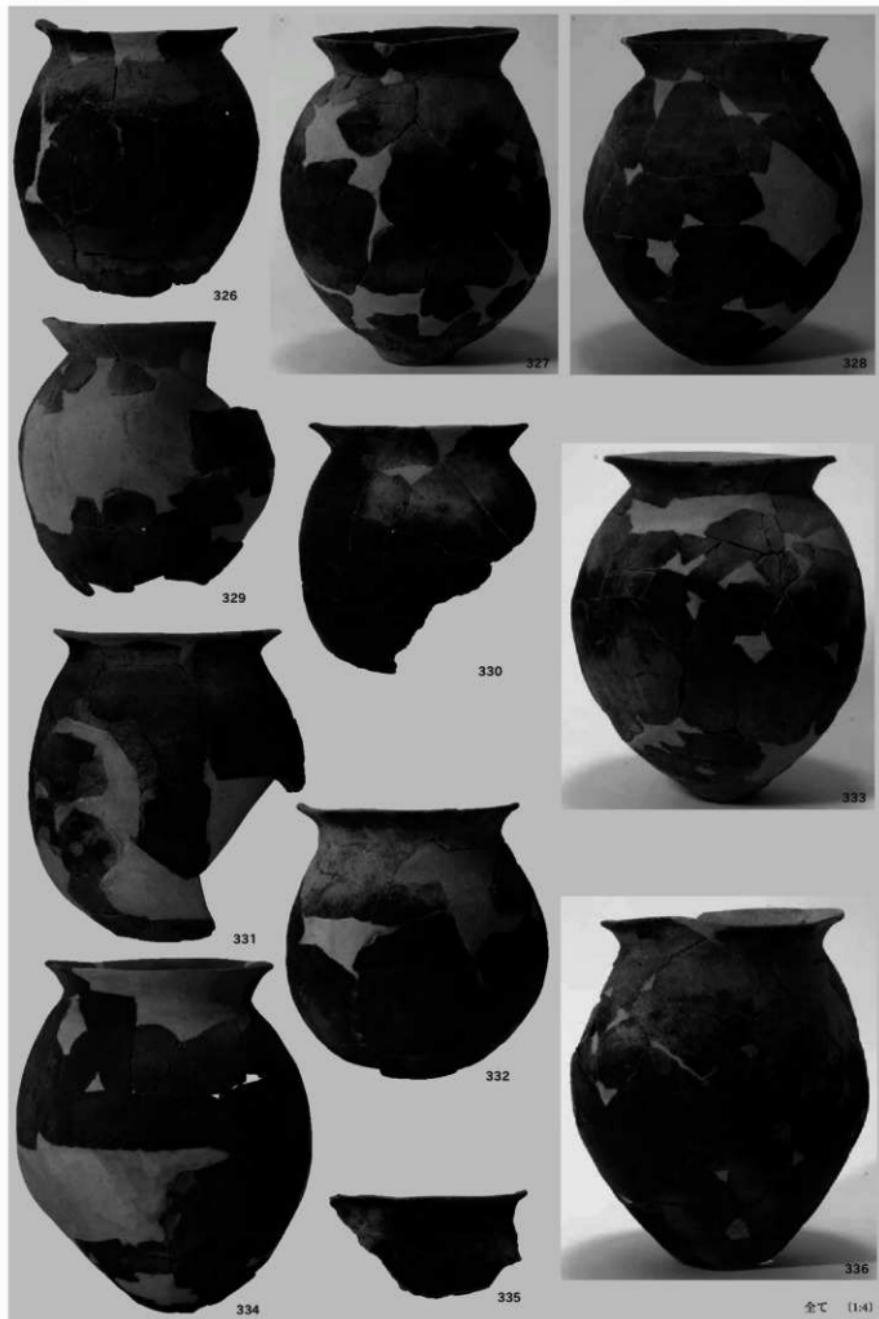
全て (1:3)

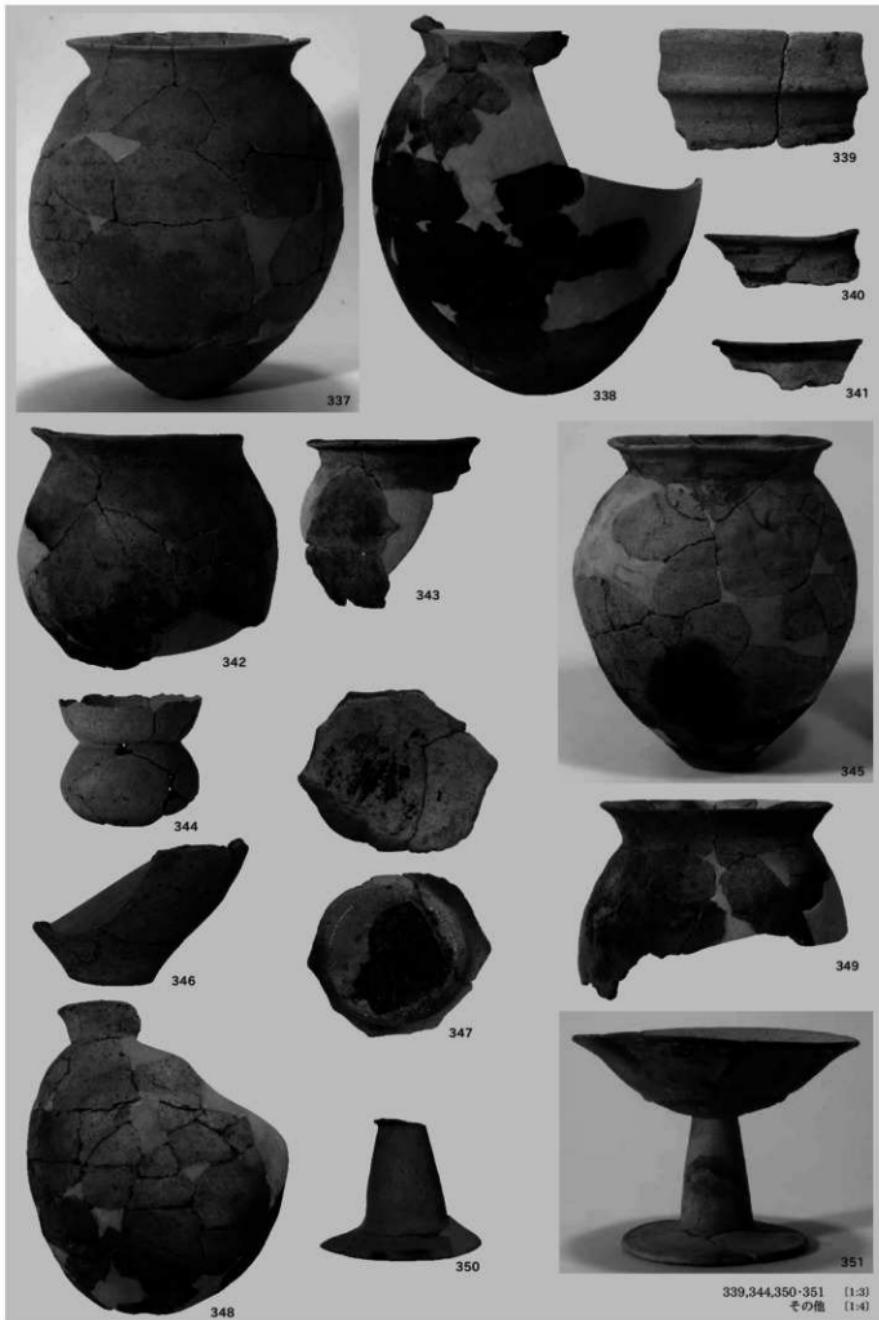


その他 [1:3]  
295~297 [1:4]



その他 [1:3]  
321~325 [1:4]





339,344,350-351 [1:3]  
その他 [1:4]



352



353



354



355



356



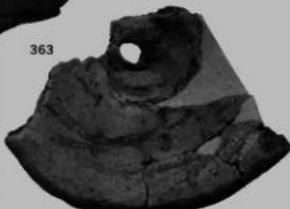
357



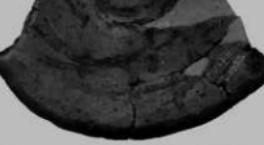
358



360



361



362



363

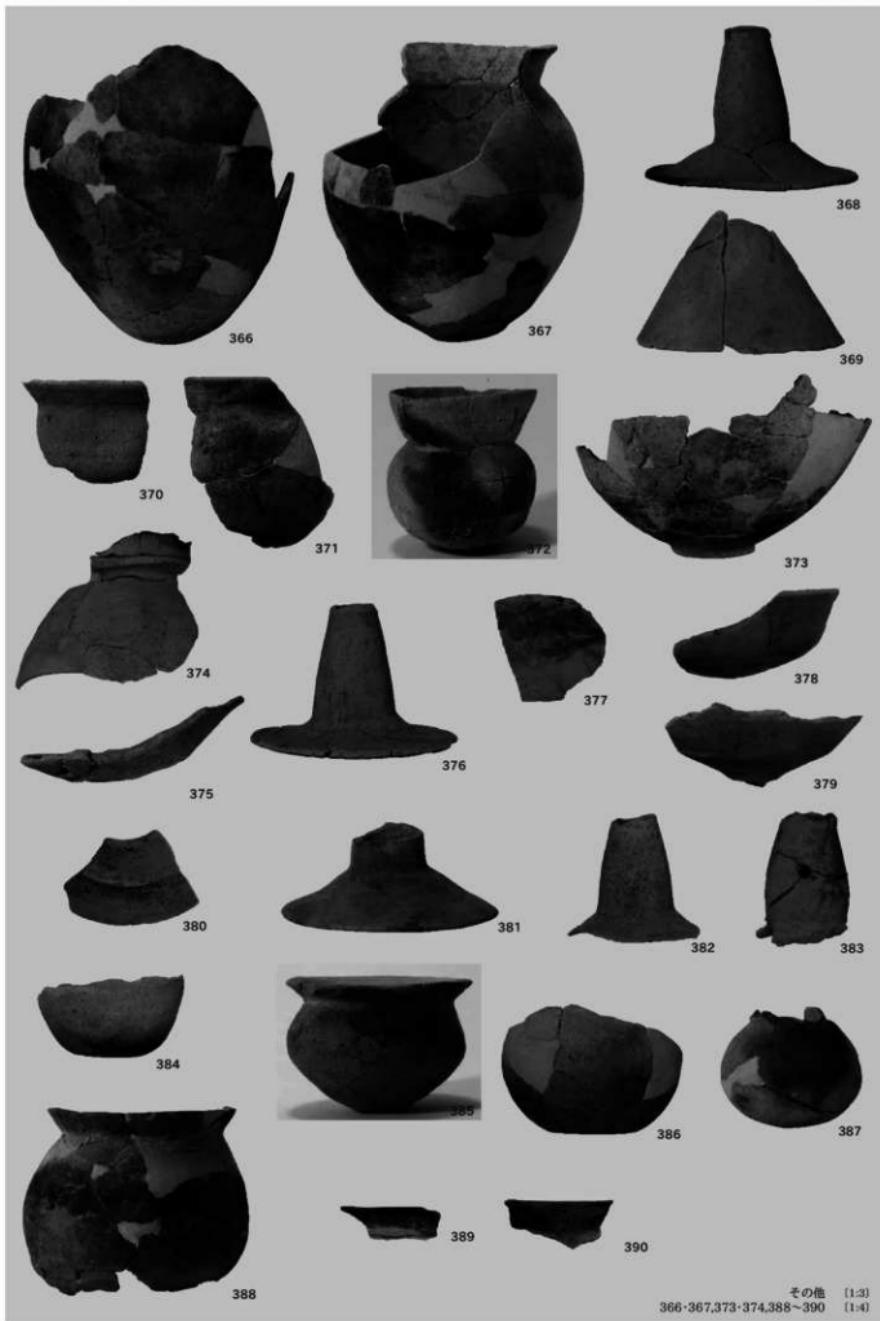


364

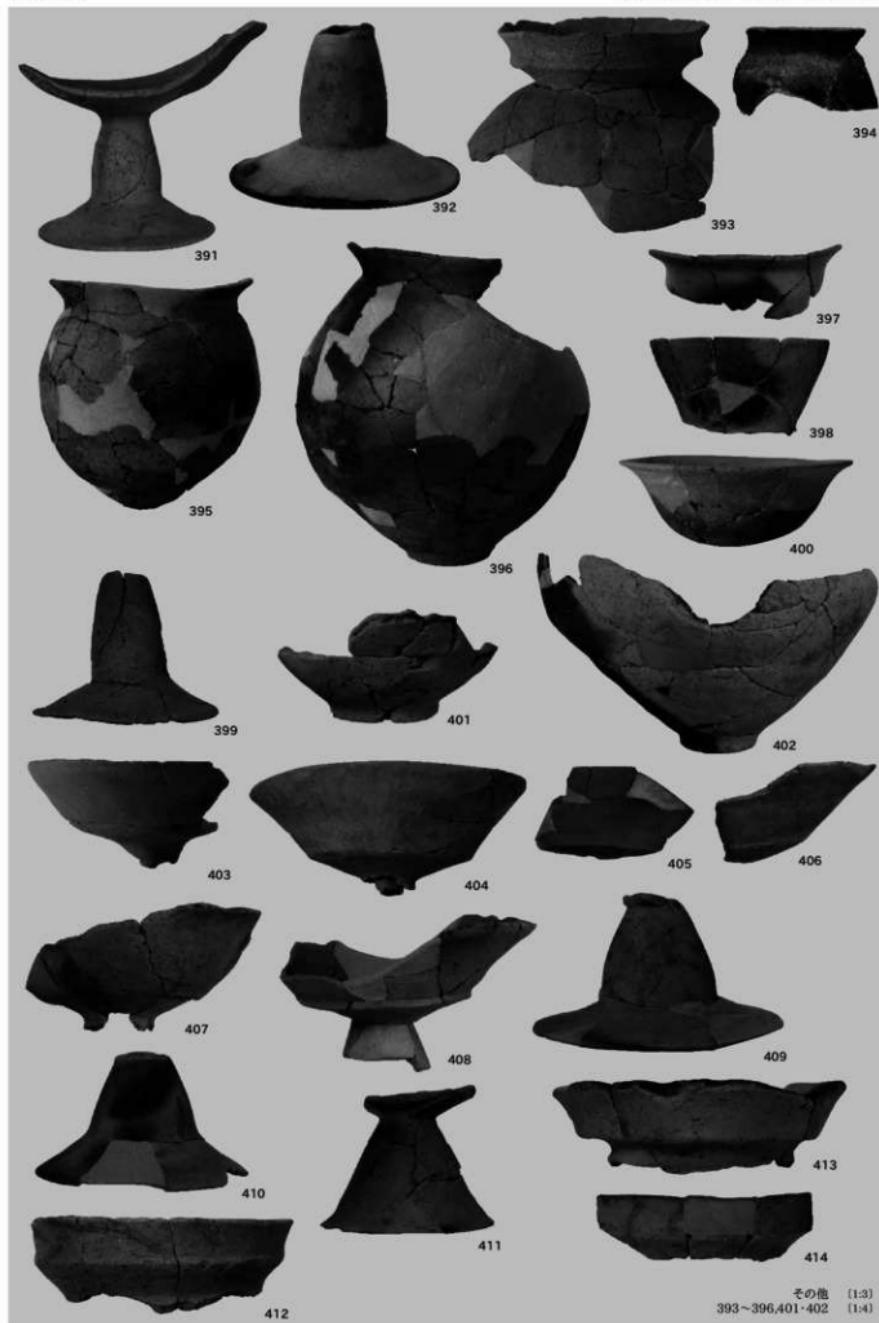


359

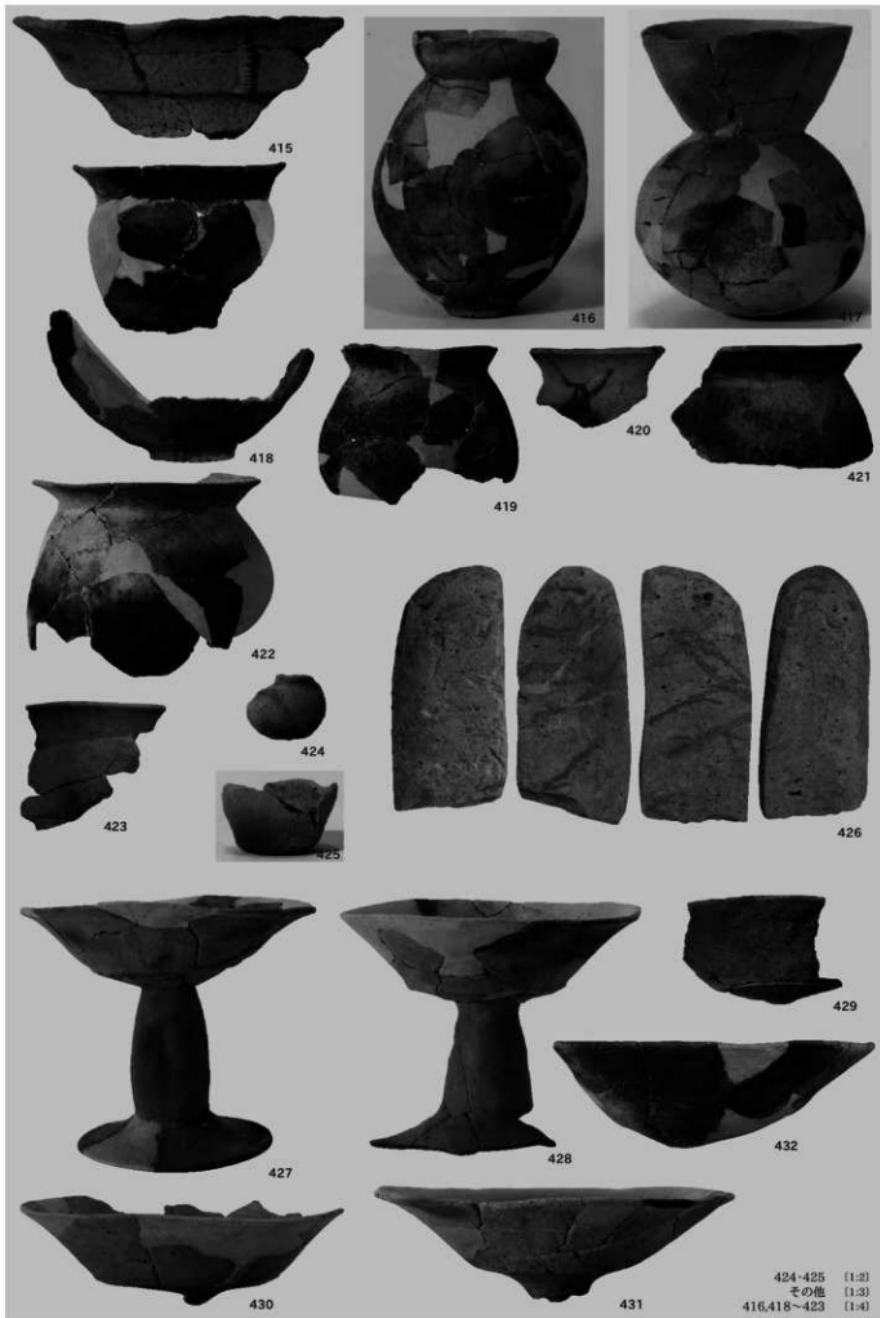
365  
全て (1:3)

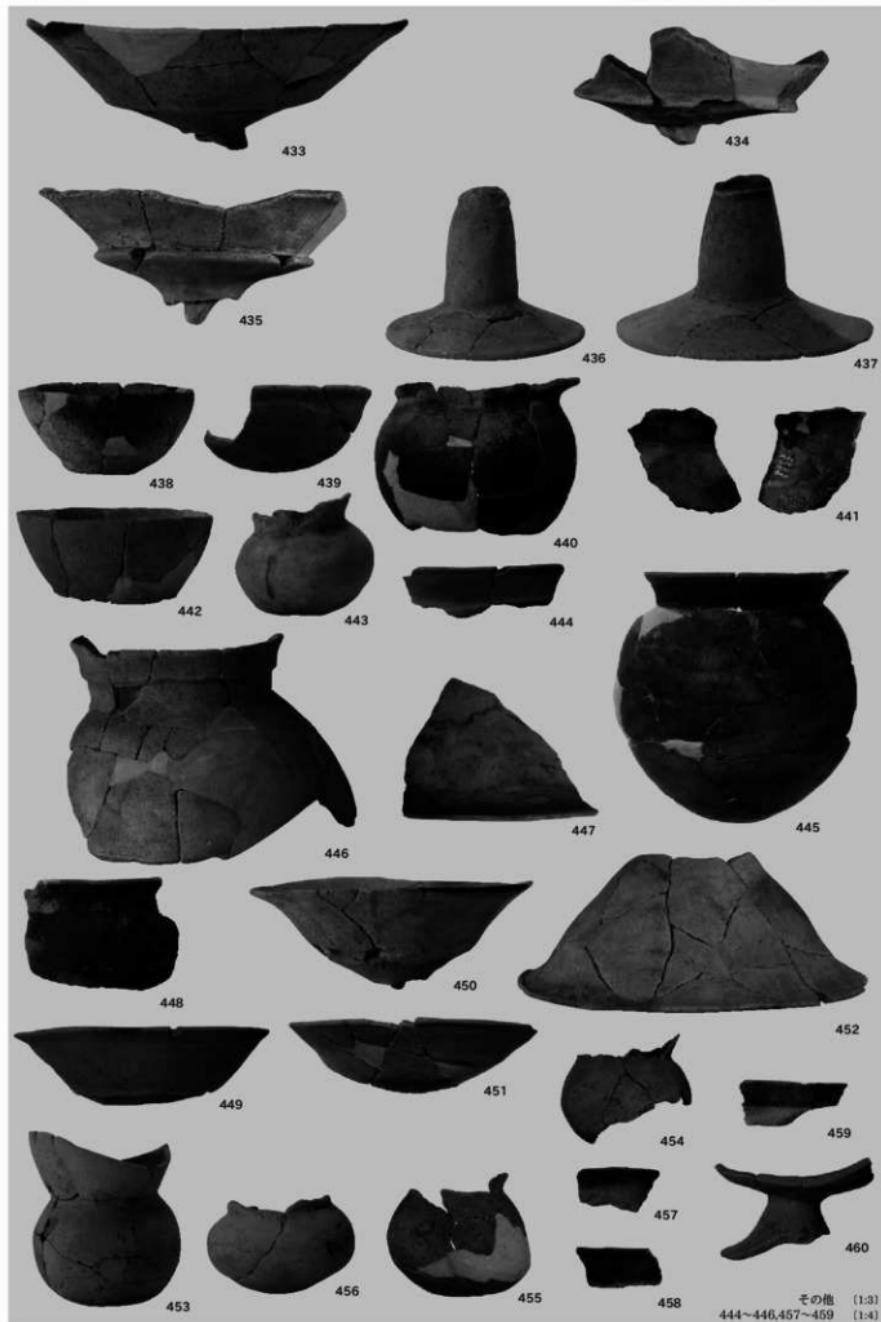


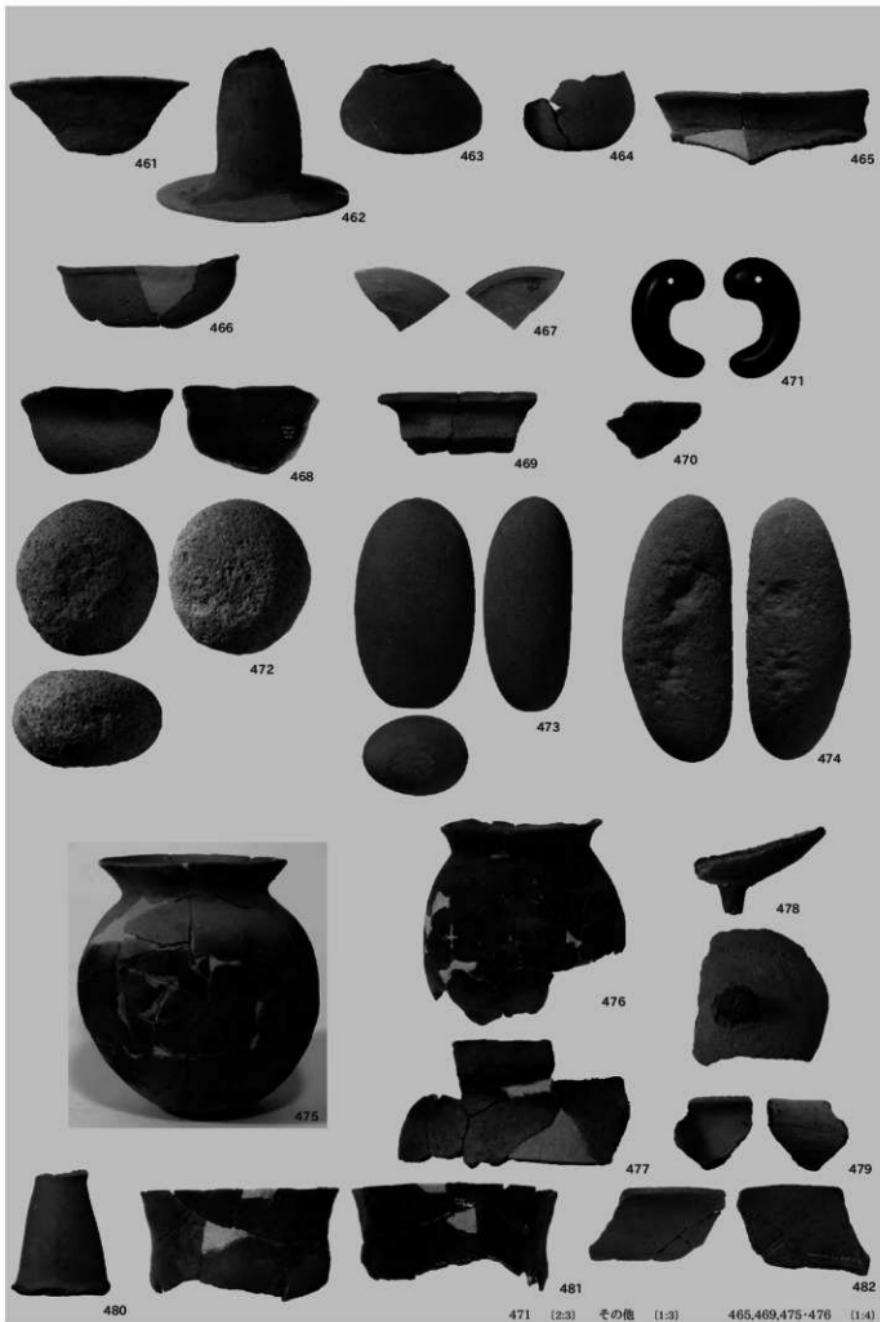
その他 [1:3]  
366-367,373-374,388-390 [1:4]

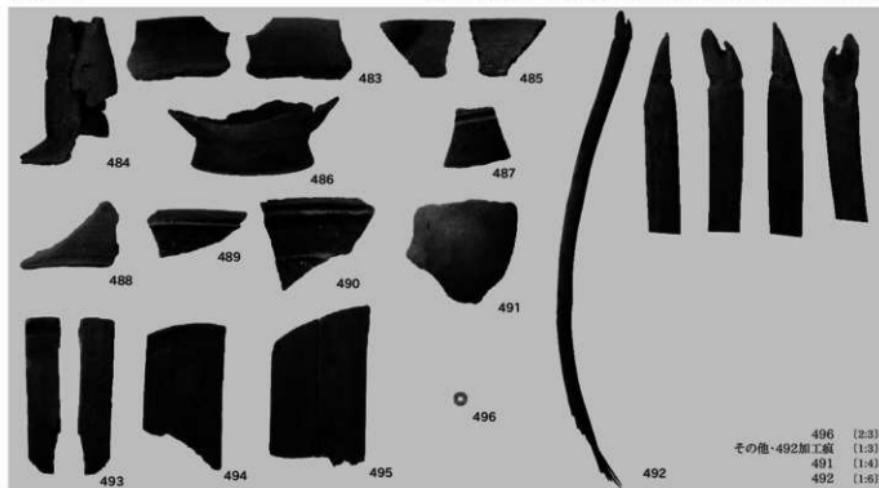


その他 [1:3]  
393~396, 401~402 [1:4]









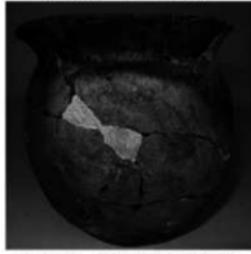
甕 (318) 体部下半のコゲ



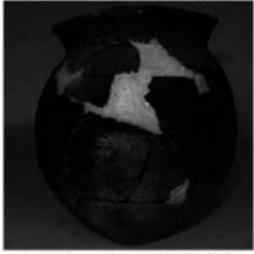
甕 (324) 体部下半の一次成形痕



甕 (324) 体部上半の吹きこぼれ痕



甕 (321) 体部上半のスス酸化消失



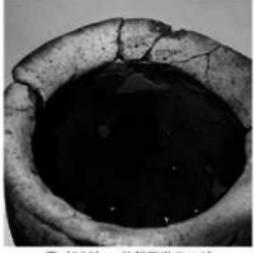
甕 (322) 体部下半のスス酸化消失



甕 (475) 体部中位のスス酸化消失



甕 (321) 体部上位のコゲ



甕 (322) 体部下半のコゲ



甕 (475) 体部中位のコゲ



全景（南から）



全景（南東から）



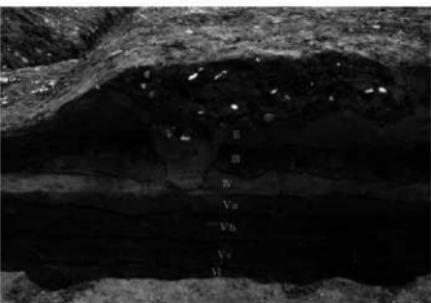
全景 (東から)



全景 (南東から)



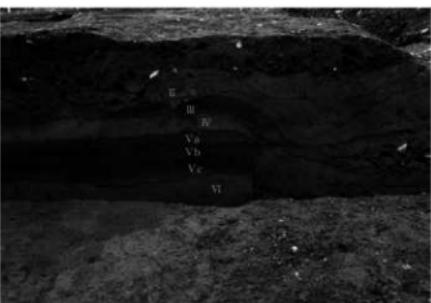
基本層序 (北東から)



基本層序 (北から)



基本層序 (南東から)



基本層序 (南から)



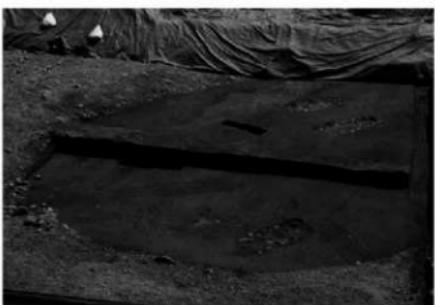
遺物出土状況 (東から)



遺物出土状況 (南から)



煙作溝 検出状況（東から）



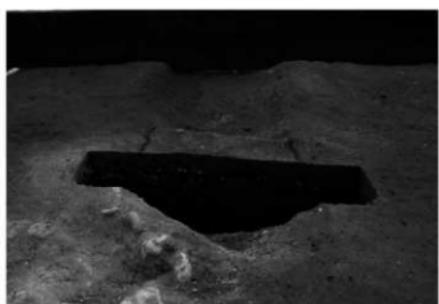
煙作溝 検出状況（西から）



煙作溝 検出状況（東から）



SD2 断面（東から）



SD3 断面（東から）



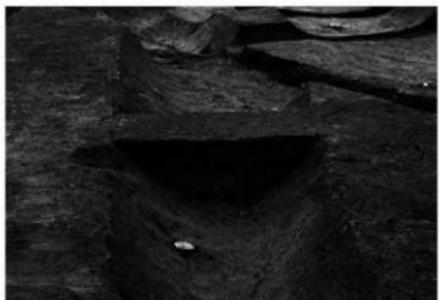
SD3・SD8・SD2 断面（西から）



SD7・SD12 断面（西から）



SD13・SD14 断面（西から）



SD13 断面（南東から）



SD16 断面（北西から）



SD16 完掘（南東から）



SD18 断面（東から）



SD19 断面・土師器楕（3）出土状況（東から）



SD24 断面（南東から）



SD25 断面（西から）



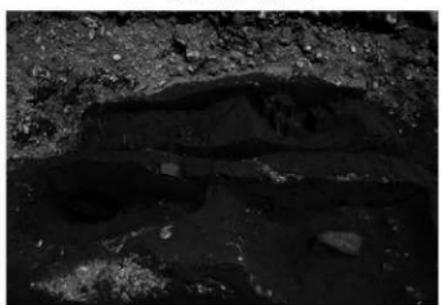
SD29 断面（南東から）



SD27 遺物出土状況（南東から）



SD27 完掘（南東から）



SX34・SD27 断面（南東から）



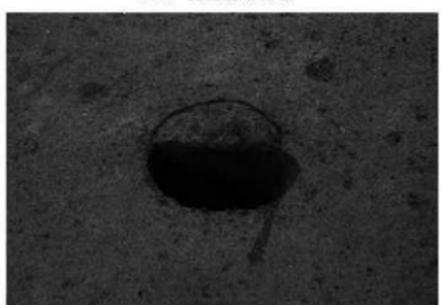
SX34・SD27 遺物出土状況（南東から）



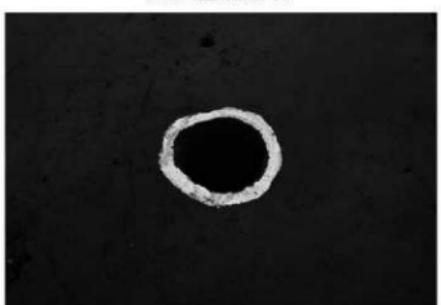
SK30 検出状況（西から）



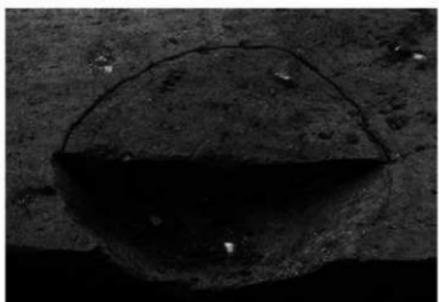
SK30 完掘（南東から）



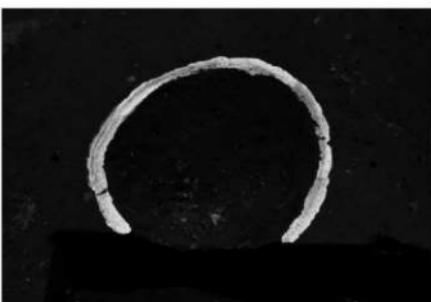
P21 断面（西から）



P21 完掘（東から）



P33 断面（北から）



P33 完掘（北から）



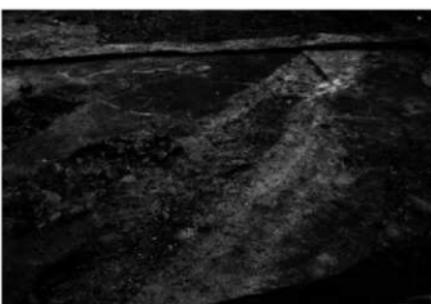
下層試掘トレンチ 摩削状況（北東から）



下層試掘トレンチ 断面（東から）



下層試掘トレンチ 断面（西から）



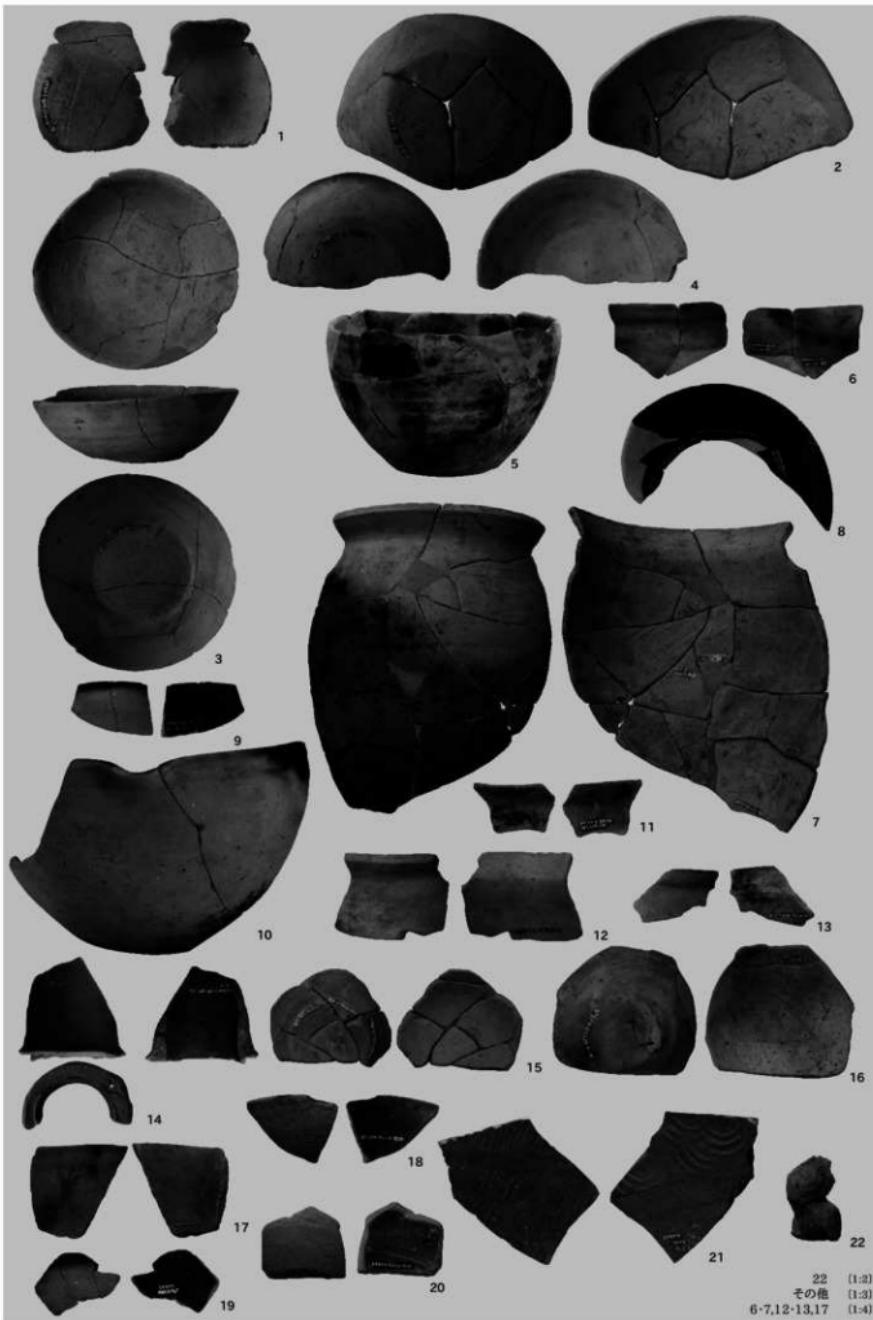
噴砂 検出状況（東から）



表土掘削 作業風景（北から）



作業風景（東から）



## 報告書抄録

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第253集

一般国道17号六日町バイパス関係発掘調査報告書Ⅲ

余川中道遺跡Ⅱ

一般国道253号八箇能関係発掘調査報告書Ⅱ

金屋遺跡Ⅲ

2015(平成27)年3月13日印刷

編集・発行

新潟県教育委員会

2015(平成27)年3月16日発行

〒950-8570 新潟市中央区新光町4番地1

電話 025(285)5511

公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1

電話 0250(25)3981

FAX 0250(25)3986

印刷・製本

株式会社 ハイングラフ

〒950-2022 新潟市西区小針1丁目11番8号

電話 025(233)0321

新潟県埋蔵文化財調査報告書第253集 余川中道遺跡Ⅱ・金屋遺跡Ⅲ 正誤表

ページ	行	誤	正
19	下から4行目	・・・得られた。	・・・得られた。粘性の強い上部(Ⅷa)と、それよりやや弱い下部(Ⅷb)とに細分した。なお、a・bが付いていないものは、Ⅷa層である。
44	下から2行目	シルトからなるVlc層	シルトからなるⅧ層
65	6行目	図版122・123・207-418~422	図版122・123・207-418~423
110	第51図凡例	相対的高さ	相対的深さ
133	8行目	毛野新聞社	上毛新聞社
133	下から5行目	越後における古墳時代Ⅱ	越後における古墳時代土器の変遷Ⅱ